

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第211集

# 西地・東地遺跡

この改訂版は、書籍配布後に校正を行なったものである。(2019.4.19)

2019

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター





遺跡遠景 南より



黒曜石 石核

縄文時代後期初頭竪穴建物跡群 東より



上：14B区 1305SI 石囲炉跡内出土土器  
下：14B区 1305SI 石囲炉跡（南より）



上：14B区 1304SI  
石囲炉跡（南西より）  
下：14B区 1304SI  
石囲炉跡内出土土器





左上：14B区 1278SK（南より）  
右上：14B区 1278SK 使用土器  
左下：14B区 1263SI  
および 1278SK（南より）



左：14B区 1201SI 炉跡（北東より）、 右：1201SI 炉跡使用 土器



14B区 0036SK (南より)



14B区 1208SK (西より)



16区 165SK 検出・遺物出土状況 (北西より)



溶結凝灰岩 石核 (西より)



16区 029SX・061SX 完掘 (南より)



14B区 0115SL 検出状況 (南東より)



鉄滓 [碗形滓] 出土状況 (南より) 天目茶碗 出土状況 (東より)



14B区 0334SL 検出状況 (南東より)

## 序

北設楽郡設楽町の所在します奥三河地域は、自然豊かなところであり、花祭りをはじめ、田峯神楽や奉納歌舞伎など、現在にわたり伝統文化が色濃く残されています。このような自然・風土が息づく地域では、過去の人々の生活の様子はどうか、とても興味関心が湧いてきます。

さてこの度、西地・東地遺跡の発掘報告書を刊行する運びとなりました。西地・東地遺跡は、『北設楽郡史』に掲載されている以前から知られている遺跡で、設楽町指定史跡の大名倉遺跡とは寒狭川を挟んで対岸に位置しています。今回の調査によって、今から四千四百年前頃の集落跡が見つかったことは、縄文時代当時の生活を実証的に解明する手がかりになるものと思われまます。特に、建物跡の床に埋められた、埋甕の残りが良かったことは印象深いです。また、戦国時代頃のヤマの暮らしが分かる資料が見つかったことも、注目されます。

設楽地域では、設楽ダム関連事業に伴い、遺跡の発掘調査が現在も行われています。本報告は、その成果を公開する第1冊目となった訳で、今後これに続けて、ほかの遺跡についても整理調査の上、報告書の刊行となる見込みです。このように一地域における悉皆調査の蓄積は、この町内のみならず、日本の考古学研究を行う上で、重要なデータとなるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査につきまして、地元住民の方々をはじめ各方面の方々にご配慮いただき、さらに関係各機関および関係者のご指導とご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

平成 31 年 3 月 31 日

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 尾崎 亨

## 例言

1. 本書は、北設楽郡設楽町に所在する西地・東地遺跡(県遺跡番号700152)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、設楽ダム関連事業の事前調査として、国土交通省中部地方整備局から愛知県教育委員会を通じて、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが、管理委託を受けて実施した。
3. 調査期間は平成26年5月から平成27年1月、および平成28年9月から12月までである。
4. 調査担当者は、平成26年度が、鈴木正貴(主任専門員)のもと川添和暁(調査研究主任、現調査研究専門員)である。平成28年度は、樋上 昇(調査研究専門員)のもと川添である。
5. 調査は、以下の体制で行なった。  
平成26年度  
調査支援：ナカシャ・クリエイティブ株式会社  
現場代理人：前田克司、調査補助員：後藤太一・廣瀬正嗣、測量士：樋田泰之・内藤教匡  
平成28年度  
調査支援：安西工業株式会社  
現場代理人：小田晋吾、調査補助員：坂口尚人、測量士：北畠誠司
6. 遺物整理、製図については次の方々のご協力を受けた。  
阿部裕恵・瀧 智美・時田典子・堀田祐美・山田有美子・山本孝枝(整理補助員)
7. 縄文土器の出土遺物図面トレース作業は、国際文化財株式会社に委託した。石器の実測・トレースおよび図面トレース作業については、株式会社アルカに委託した。古代以降の陶磁器・土器類の図面トレース作業は株式会社文化財サービスに委託した。また、出土遺物の統計的処理データ入力および編集作業の一部についてはナカシャクリエイティブ株式会社から支援を受けた。
8. 出土遺物の写真撮影については金子知久氏(スタジオ遊)に委託した。
9. 第3章第2節に掲載した走査型電子顕微鏡写真は、名古屋大学微細構造解析プラットフォームの支援を受けて実施できた。その際、名古屋大学の荒井重勇氏からは格別のご配慮を賜った。

10. 発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・国土交通省中部整備局・設楽町教育委員会・設楽町立奥三河郷土館(五十音順、敬称略)

11. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々および機関から御教示・御協力を頂いた。

石井 寛・石井峻人・鵜飼堅証・長田友也・大塚達朗・千葉 豊・富井 眞・高橋三郎・田嶋正憲・幡中光輔・原田愛之助・平野吾郎・藤澤良祐・増子康眞・綿田弘実(敬称略)

12. 本書の執筆は、主に川添和暁が担当した。但し、第4章第2節の一部は鈴木正貴、第5章第1節は森 将志(パレオ・ラボ)、第2節は小林克也(パレオ・ラボ)、第3節はバンダリ スダルシャン・佐々木由香(パレオ・ラボ)、第4節は山形秀樹・中村賢太郎(パレオ・ラボ)、第5節はパレオラボ AMS 年代測定グループ、第6節は井上 巖(株)第四紀地質研究所)、第7節は堀木真美子による。

13. 本書の編集は川添和暁が行った。

14. 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。ただし、新基準で表記してある。

15. 調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

16. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

# 目 次

巻頭図版

序・例言・目次

<b>第1章 環境と立地</b> .....	1 頁
第1節 遺跡の位置	
第2節 地理的環境	
第3節 歴史的環境	
第4節 調査の経過と経緯	
<b>第2章 調査の方法および基本層序</b> .....	7 頁
第1節 調査区設定と調査方法	
第2節 時代・時期と基本層序	
<b>第3章 縄文時代の遺構・遺物</b> .....	19 頁
第1節 縄文時代の遺構	
第2節 縄文時代の遺物（土器・土製品）	
第3節 縄文時代の遺物（石器・石製品）	
<b>第4章 古代以降の遺構と遺物</b> .....	153 頁
第1節 古代以降の遺構	
第2節 古代以降の遺物	
<b>第5章 自然科学分析</b> .....	177 頁
第1節 花粉分析	
第2節 出土炭化材の樹種同定	
第3節 植物遺体	
第4節 人骨と土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比分析	
第5節 放射性炭素年代測定	
第6節 蛍光 X 線分析による黒曜石の産地推定	
第7節 石材分類について	
<b>第6章 総括</b> .....	207 頁

写真図版

抄録

## 挿図目次

- 図 1 遺跡の位置
- 図 2 西地・東地遺跡周辺の地質的環境
- 図 3 西地・東地遺跡および周辺遺跡の位置図
- 図 4 西地・東地遺跡全体と調査区位置図
- 図 5 調査区グリッド設定図
- 図 6 西地・東地遺跡基本土層模式図
- 図 7 14B 区土層断面図 1
- 図 8 14B 区土層断面図 2
- 図 9 14B 区土層断面図 3
- 図 10 14B 区土層断面図 4
- 図 11 14B 区土層断面図 5
- 図 12 14B 区土層断面図 6
- 図 13 16 区土層断面図 1
- 図 14 16 区土層断面図 2
- 図 15 西地・東地遺跡縄文時代遺構位置図
- 図 16 14B 区 1304SI 1
- 図 17 14B 区 1304SI 2
- 図 18 14B 区 1305SI 1
- 図 19 14B 区 1305SI 2
- 図 20 14B 区 1305SI 3
- 図 21 14B 区 1306SI
- 図 22 14B 区 1201SI 1
- 図 23 14B 区 1201SI 2
- 図 24 14B 区 1263SI 1
- 図 25 14B 区 1263SI 2
- 図 26 14B 区 0036SK・1160SK・1208SK・  
1224SK
- 図 27 14B 区 0066SK・0184SK・1011SK
- 図 28 16 区 165SK・303SK
- 図 29 16 区 121SK・154SK・204SK
- 図 30 16 区 149SK・241SK・263SK・  
266SK・267SK
- 図 31 16 区 267SK・268SK・269SK・  
278SK・280SK・297SK・304SK
- 図 32 16 区 277SK・310SK
- 図 33 14B 区 1078SK
- 図 34 14B 区 1216SK・1286SK
- 図 35 14B 区 1209SX
- 図 36 14C 区 002SK・003SK・005SP
- 図 37 土器・土製品 1【14B 1304SI】
- 図 38 土器・土製品 2【14B 区 1305SI】
- 図 39 土器・土製品 3  
【14B 区 1305SI と関連遺構】
- 図 40 土器・土製品 4【14B 区 1201SI】
- 図 41 土器・土製品 5【14B 区 1201SI】
- 図 42 土器・土製品 6【14B 区 1201SI・  
1263SI の関連遺構】
- 図 43 土器・土製品 7【14B 区 1201SI・  
1263SI と関連遺構】
- 図 44 土器・土製品 8  
【14B 区 1264SK・1265SK】
- 図 45 土器・土製品 9【14B 区 0036SK】
- 図 46 土器・土製品 10【14B 区 0036SK】
- 図 47 土器・土製品 11【14B 区 1011SK・  
1023SK・1028SK・1035SK】
- 図 48 土器・土製品 12【14B 区 1069SK・  
1071SK・1075SK・1078SK・  
1089SK・1114SK・1118SK・  
1130SK・1158SK・1160SK】
- 図 49 土器・土製品 13【14B 区 1160SK・  
1165SK・1181SK・1195SK】
- 図 50 土器・土製品 14【14B 区 1208SK・  
1209SK・1213SK・1215SK・  
1216SK・1223SK・1226SK】
- 図 51 土器・土製品 15【14B 区 1224SK】
- 図 52 土器・土製品 16【14B 区 0031SK・  
0032SK・0078SK・0095SK・  
0098SK・0100SK・0107SK】
- 図 53 土器・土製品 17【14B 区 0011SK・  
0108SX・0109SK・0111SX・  
0146SK】
- 図 54 土器・土製品 18【14B 区 0168SK・  
0172SK・0174SK・0180SK・  
0184SK】
- 図 55 土器・土製品 19【14B 区 0184SK】
- 図 56 土器・土製品 20【14B 区 0194SK・  
0195SK・0196SK・0202SK・  
0235SK・0330SK・0270SK】

- 078SK・1286SK】
- 図 57 土器・土製品 21  
【16区 165SK・303SK】
- 図 58 土器・土製品 22  
【16区 121SK・154SK】
- 図 59 土器・土製品 23【16区 146SK・  
149SK・204SK・266SK】
- 図 60 土器・土製品 24【16区 211SX・  
217SK・241SK・255SK・267SK・  
268SK】
- 図 61 土器・土製品 25【16区 277SK・  
278SK・309SK・020SK・029SK】
- 図 62 土器・土製品 26【16区 各遺構内】
- 図 63 土器・土製品 27  
【14B区 1305SI・検出2】
- 図 64 土器・土製品 28【14B区 検出2】
- 図 65 土器・土製品 29【14B区 検出2】
- 図 66 土器・土製品 30【14B区 検出2】
- 図 67 土器・土製品 31【14B区 検出2】
- 図 68 土器・土製品 32【14B区 検出2】
- 図 69 土器・土製品 33【14B区 検出2】
- 図 70 土器・土製品 34【14B区 検出1】
- 図 71 土器・土製品 35【14B区 検出1】
- 図 72 土器・土製品 36【14B区 検出1】
- 図 73 土器・土製品 37【14B区 検出1】
- 図 74 土器・土製品 38【14B区 検出1】
- 図 75 土器・土製品 39【14B区 検出1】
- 図 76 土器・土製品 40【14B区 検出1】
- 図 77 土器・土製品 41【14B区 検出1】
- 図 78 土器・土製品 42【14B区 検出1】
- 図 79 土器・土製品 43【14B区 検出1】
- 図 80 土器・土製品 44【16区 検出】
- 図 81 土器・土製品 45【16区 検出】
- 図 82 土器・土製品 46【16区 検出】
- 図 83 土器・土製品 47  
【14C区 003SK・検出】
- 図 84 土器・土製品 48【14C区 検出・  
14A区 004SK・検出】
- 図 85 土器・土製品 49【14B区 263SK・  
検出1・土製品】
- 図 86 石器・石製品 1【14B区 1304SI・  
1305SI・1306SI・1201SI】
- 図 87 石器・石製品 2【14B区 1201SI・  
0036SK・1023SK・1028SK】
- 図 88 石器・石製品 3【14B区 1035SK・  
1071SK・1075SSK・1160SK・  
1180SK・1195SK・1208SK】
- 図 89 石器・石製品 4  
【14B区 1209SK・1213SK】
- 図 90 石器・石製品 5【14B区 1216SK・  
1224SK・1226SK・1231SK・  
1251SK・1265SK・1277SK】
- 図 91 石器・石製品 6【14B区 1333SK】
- 図 92 石器・石製品 7  
【16区 165SK・303SK】
- 図 93 石器・石製品 8  
【16 121SK・146SK・154SK】
- 図 94 石器・石製品 9【16区 154SK・  
204SK・263SK・267SK】
- 図 95 石器・石製品 10【16区 266SK】
- 図 96 石器・石製品 11【16区 268SK・  
269SK・278SK・297SK】
- 図 97 石器・石製品 12【16区 277SK】
- 図 98 石器・石製品 13  
【16区 309SK・310SK】
- 図 99 石器・石製品 14  
【14B区・14C区・16区 検出】
- 図 100 石器・石製品 15  
【14B区・14C区・16区 検出】
- 図 101 石器・石製品 16  
【14B区・14C区・16区 検出】
- 図 102 石器・石製品 17  
【14B区・14C区・16区 検出】
- 図 103 石器・石製品 18  
【14B区・14C区・16区 検出】
- 図 104 石器・石製品 19  
【14B・14C区・16区 検出】
- 図 105 石器・石製品 20  
【14B区・14C区・16区 検出】
- 図 106 石器・石製品 21

- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 107 石器・石製品 22
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 108 石器・石製品 23
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 109 石器・石製品 24
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 110 石器・石製品 25
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 111 石器・石製品 26
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 112 石器・石製品 27
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 113 石器・石製品 28
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 114 石器・石製品 29
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 115 石器・石製品 30
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 116 石器・石製品 31
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 117 石器・石製品 32
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 118 石器・石製品 33
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 119 石器・石製品 34
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 120 石器・石製品 35
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 121 石器・石製品 36
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 122 石器・石製品 37
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 123 石器・石製品 38
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 124 石器・石製品 39
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 125 石器・石製品 40
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 126 石器・石製品 41 【 14B区・14C区・
- 16区 検出、14B区 184SK 】
- 図 127 石器・石製品 42
- 【 14B区・14C区・16区 検出 】
- 図 128 西地・東地遺跡古代以降遺構位置図
- 図 129 14B区 0081SL・0115SL・0393SL  
と周辺遺構位置図
- 図 130 14B区 0081SL・0115SL と  
関連遺構 土層断面
- 図 131 14B区 0393SL と関連遺構 土層断面
- 図 132 14B区 0196SK・0333SL・0109SK・  
0117SK・0027SX・0195SK
- 図 133 14B区 0197SK・0372SK・0011SX
- 図 134 16区 029SX・061SX と関連遺構
- 図 135 16区 253SK・103SK・166SK  
と各ピット
- 図 136 14B区 0341SZ・0342SZ・0343SZ・  
0344SK
- 図 137 14B区 0001SX・0002SX
- 図 138 陶磁器・土器類 1
- 図 139 陶磁器・土器類 2
- 図 140 陶磁器・土器類 3
- 図 141 陶磁器・土器類 4
- 図 142 陶磁器・土器類 5
- 図 143 陶磁器・土器類 6
- 図 144 古代以降 石器 1
- 図 145 古代以降 石器 2
- 図 146 西地・東地遺跡における花粉分布図
- 図 147 西地・東地遺跡  
(No.176) から産出した花粉化石
- 図 148 西地・東地遺跡出土炭化材の  
走査型電子顕微鏡写真
- 図 149 西地・東地遺跡 14B区から  
出土した大型植物遺体
- 図 150 西地・東地遺跡 16区から  
出土した炭化種実
- 図 151 土器付着炭化物の炭素・窒素  
安定同位体比
- 図 152 土器付着炭化物の炭素安定同位体比と  
C/N比の関係
- 図 153 放射性炭素年代測定

- および暦年較正の結果 1
- 図 154 放射性炭素年代測定  
および暦年較正の結果 2
- 図 155 各元素標準図と西地・東地遺跡  
分析試料の範囲
- 図 156 西地・東地遺跡  
縄文時代遺物出土傾向図 1
- 図 157 西地・東地遺跡  
縄文時代遺物出土傾向図 2

## 表目次

- 表 1 西地・東地遺跡および周辺遺跡一覧
- 表 2 西地・東地遺跡調査工程表
- 表 3 西地・東地遺跡出土  
縄文時代石器・石製品出土点数表
- 表 4 石材別出土石器点数と重量
- 表 5 陶磁器・土器類の種別出土量一覧
- 表 6 土師器の出土量一覧
- 表 7 瀬戸・美濃窯産陶器の出土量一覧
- 表 8 分析試料一覧
- 表 9 産出した花粉孢子一覧表
- 表 10 西地・東地遺跡出土  
炭化材の樹種同定結果一覧
- 表 11 西地・東地遺跡から出土した  
大型植物遺体
- 表 12 16区から出土した炭化種実
- 表 13 イネ炭化種子の大きさ
- 表 14 結果一覧表
- 表 15 測定試料および処理
- 表 16 放射性炭素年代測定  
および暦年較正の結果
- 表 17 黒曜石試料 化学分析表

# 第1章 環境と立地

## 第1節 遺跡の位置

北設楽郡設楽町は、愛知県の北東山間部に位置する。平成17(2005)年、旧津具村と合併して、東西約22.4km・南北19.7km・総面積273.94km<sup>2</sup>におよぶ範囲となった。

設楽町は、北から時計回りに、豊田市稲武地区、長野県根羽村、豊根村、東栄町、新城市鳳来地区、新城市作手地区、豊田市下山地区、豊田市足助地区と接している。稲武地区を挟んで北側には、岐阜県恵那市上矢作町が、一方で東側には東栄町を挟んで、静岡県浜松市天竜区佐久間町が位置しており、当地はまさに美濃・信濃・遠江・三河の、旧四国が接する地域であるといえる。

西地・東地遺跡は、設楽町内のほぼ中央、大名倉西地および東地に所在する。

## 第2節 地理的環境

設楽町内には、三本の河川水系が存在している。一本目は、境川や野々瀬川など、寒狭川(豊川)に合流する豊川水系で、町域中央から南流するものである。二本目は、名倉川に合流する矢作川水系で、町域中央から北流するものである。名倉川は豊田市稲武地区を抜けて、岐阜県恵那市上矢作町で矢作川と合流する。三本目は、豊根村に抜る津具川や、東栄町の大千瀬川へと合流する神田川などの天竜川水系で、町域の北東部や南東部から東流するものである。その中でも、設楽町内には豊川源流が存在している。豊川本流は、寒狭山(945m)の北側、宇連地区北西側に位置する鷹ノ巣山(1152m)南麓が水源と考えられている。

設楽町南端である豊川と当貝津川との合流地点付近で標高約200m、一方、北東端の茶臼山高原付近で標高約1,320mを

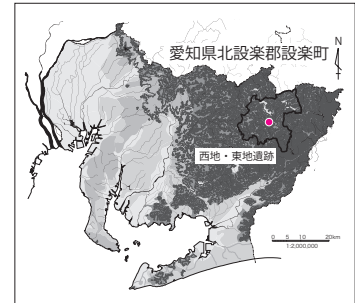
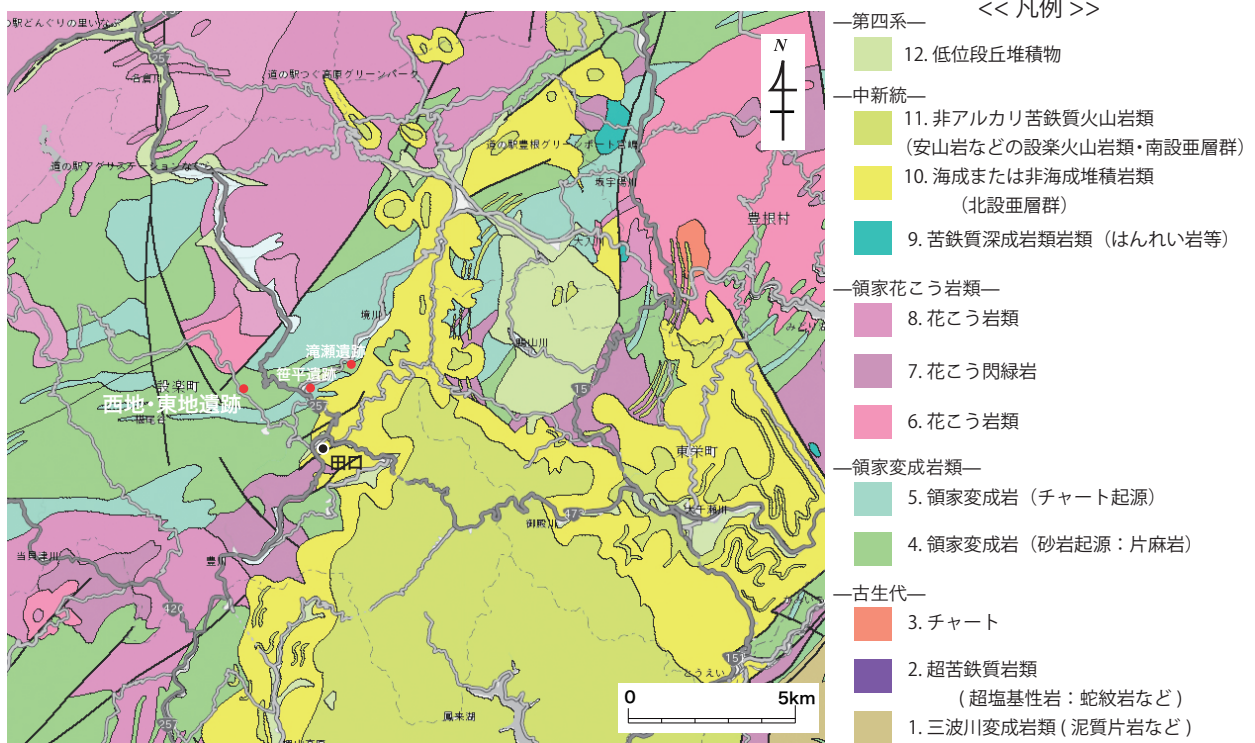


図1 遺跡の位置

測り、町域全体としては北上するに従い、標高が高くなるといえる。これら水系の境には分水嶺が存在しており、町内は起伏ある地形となっている。豊川水系と矢作川水系の境には、さいの神峠(790m)の位置する稜線がある。矢作川水系および豊川水系と天竜川水系の境には、笹暮峠など古町高山(1055m)から伸びる稜線がある。豊川水系と天竜川水系との境には、明神山(950m)から岩古谷山(799m)や鞍掛山(883m)に伸びる稜線がある。

この分水嶺を形成する地形の中でも、豊川水系からみて矢作川水系と天竜川水系とは、町域を南北に二分するような著しい比高差が認められる。平成30年現在、国道257号にある設楽大橋の標高は約400mであるのに対して、川向坂の上は標高695m、また県道10号線を北上した津具地区では標高約700mと、5~10kmで標高が300mほどと急激に上昇する地形となっている。

西地・東地遺跡は、標高約450m、寒狭川(豊川)左岸の、河岸段丘上に立地する。当地は大名倉地区の北西端に位置しており、いわば大名倉地区の北からの入口部に当たる。遺跡の立地する段丘は、北東方向から南西方向に向かって緩かに傾



本地質図は、以下のサイトからダウンロードした pdf を元に作成しています。  
 産総研地質調査総合センター、統合版地質文献データベース (<https://gbank.gsj.jp/geolis/>)、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示 2.1  
 (<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>)

図2 西地・東地遺跡周辺の地質的環境 (堀木 2017 より改変)

斜しており、ここに縄文時代以来、古代・中世・近世、そして現代まで、居住などさまざまな活動がなされてきた。大名倉地区の開けた地形の北端に当たる当地は、現在の県道 33 号線脇という位置も相まって、ヒトの活動頻度が高かったといえよう。当地は、寒狭川水面との比高差は 10m 以内であり、河川資源の利用にも便利であったといえる。

少し範囲を広げて、設楽地域の地質学的な環境について見てみよう。日本列島の関東から西南域まで縦断する大断層である中央構造線が、当地付近では天竜川から豊川沿いにかけて走っていることが知られている。この中央構造線の東側・南側は三波川変成帯、西側・北側は領家変成帯が分布し、地質構造が大きく異っている。設楽地域は領家変成帯が分布範囲であるが、それに加えて新生代第三紀の火山活動による、設楽層群が鳳来湖を

中心に同心円状に分布している。設楽層群には、設楽火山岩類を含む南設亜層群と堆積岩類由来の北設亜層群があり、設楽町内では、北設亜層群が境川東側を沿って、津具地区・豊根村へと延びている。笹平遺跡や滝瀬遺跡は、この設楽層群の外周傍の地点に位置している遺跡であり、西地・東地遺跡も設楽層群脇の、領家変成岩が分布している範囲に立地する遺跡である。

このような多様な岩帯が近接地域に存在する当地において、設楽火山岩類や南設亜層群由来の安山岩・溶結凝灰岩や、三波川変成帯由来の塩基性岩類、領家変成帯由来の花こう岩や片麻岩などが、利用可能な石材環境となっている。

### 第3節 歴史的環境

ここでは、設楽町内で知られている遺跡などについて、整理しておく（図3・表1）。

**後期旧石器時代** 設楽町津具地区に接した豊根村域には、茶白山遺跡の所在が知られている。茶白山遺跡は、昭和36・38（1961・1963）年に組織的に発掘調査された、愛知県を代表する後期旧石器時代遺跡である。ナイフ形石器・搔器や剥片石核が、まとまりのある良好な状態で出土した。

設楽ダム関連調査対象区域付近でも、後期旧石器時代の遺跡の所在が知られている。川向坂の上にある市場口遺跡（108）では、ナイフ形石器のほか、剥片・石核が20点以上とまとまって出土している。注目すべきはその使用石材であり、黒曜石の比率が極めて高いことは、この遺跡の特殊性を示すものと言える。

**縄文時代草創期** 縄文時代草創期については、近年の調査で注目すべき調査事例がある。川向東貝津遺跡（27）では、木葉形尖頭器やその製作に関わる剥片石核類、また合わせて有舌尖頭器も含めた、多量の石器群が調査された。この調査では、後期旧石器時代末の細石器（細石刃・細石核）が出土しており、石器群の一部は後期旧石器時代にさかのぼるものの可能性がある。また、八橋地区の滝瀬遺跡（31）では、縄文時代草創期末から早期初頭に遡る可能性のある、竪穴建物跡10基以上で構成された集落跡が調査された。

**縄文時代早期** 設楽地域では、縄文時代早期の土器が各遺跡で採集されている。名倉地区の星野神田遺跡では、ネガティブ押型文土器の出土が古くから知られている。近年、川向東貝津遺跡（27）・滝瀬遺跡（31）では集石炉跡が調査されており、

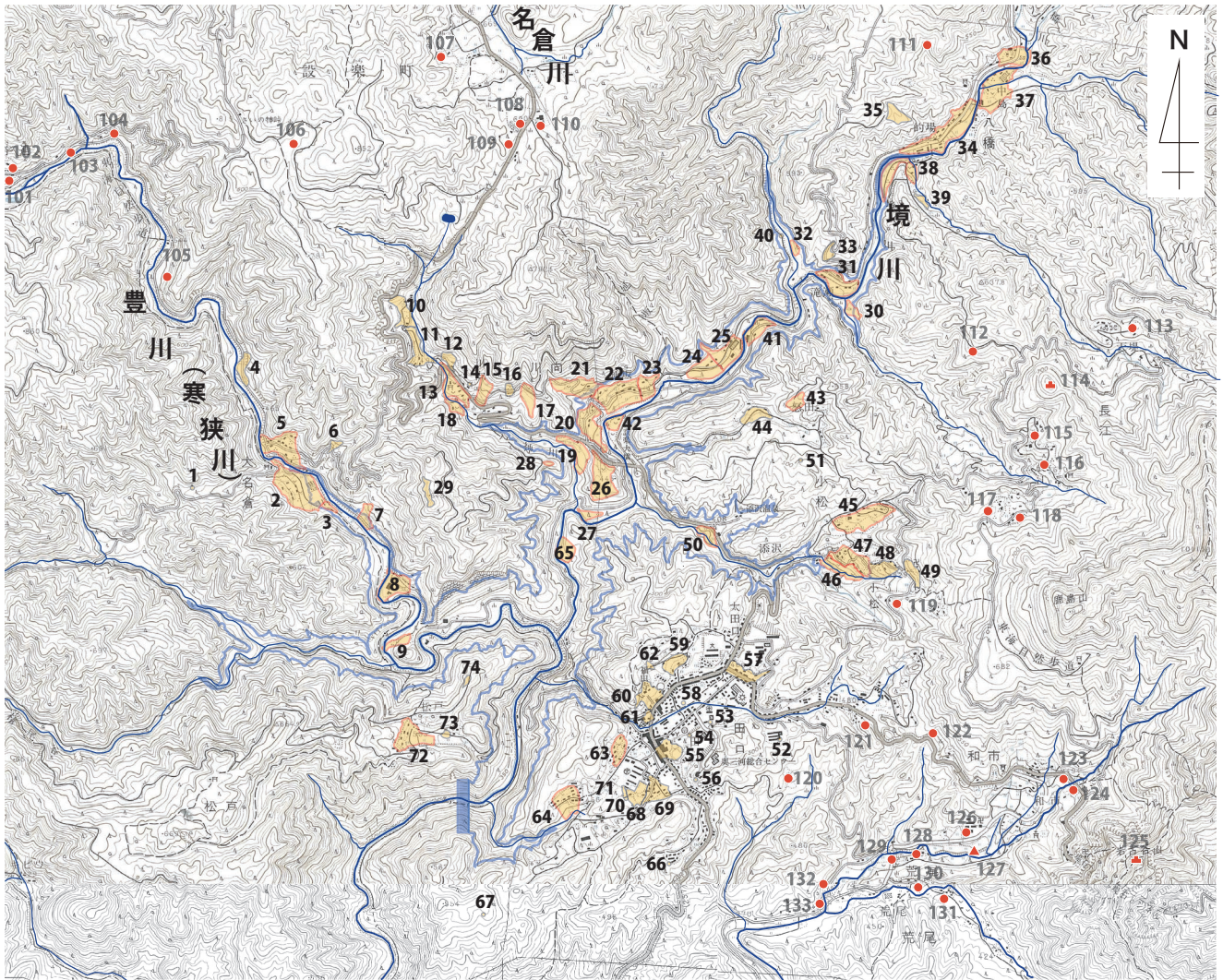
状況から縄文時代早期に属する可能性がある。特に滝瀬遺跡では境川に接する緩斜面上に、10基以上がまとまって見つかった。滝瀬遺跡や大名倉遺跡（2）では、早期前半に属するトロトロ石器も出土している。

川向地区の大栗遺跡（19）では、早期前半に多く知られる煙道付炉穴が1基調査されている。同様な被熱部分や焼土も周囲にはあり、少なくとも複数基は存在していた可能性が考えられる。

**縄文時代前期** 稲武地区の大安寺遺跡では前期前半の竪穴建物跡の調査が行なわれており、津具地区の鞍船遺跡では前期後半の竪穴建物跡が調査されている。しかし、現在、設楽ダム関連調査などでは、縄文時代前期を主体とする遺構や包含層を良好な状態で確認することはできていない。各遺跡で土器片など遺物は散在的に確認できており、今後の調査で良好な資料群が見つかるものと考えられる。

**縄文時代中期** 縄文時代中期については、前半でも北屋敷式以降の土器片は、各遺跡で散在的に確認されている。近年、川向地区の石原遺跡（24）では山田平式期頃を主体とする竪穴建物跡群の調査が行われた。

中期後半になると、小松地区の笹平遺跡（42）・滝瀬遺跡（31）でも竪穴建物跡の調査が行われている。複数の竪穴建物跡群による集落跡として広く確認された遺跡としては、川向東貝津遺跡（27）と大畑遺跡（26）がある。両遺跡は、前者が丘陵裾部の南斜面、後者が同一丘陵の頂部に展開する遺跡である。両遺跡とも、竪穴建物跡埋没途上で、配石行為などが行なわれるなどしている。川向東貝津遺跡では、蓋石のある埋甕が見つかり、一方、大畑遺跡では副炉をもつ竪穴建物跡も見つかるなど、信州下伊那地域との関連性が



設楽ダム関連 遺跡分布図  
 国土地理院刊行 2万5千分の1地形図「田口」「海老」より

- 常時満水437mの範囲
- 遺跡(埋蔵文化財包蔵地)の範囲
- 設楽ダム事業により影響を受ける遺跡

0 2km  
 (1:40,000)

図3 西地・東地遺跡および周辺遺跡の位置図

考えられる遺構も確認されている。

**縄文時代後期** 設楽地域では、大名倉地区の大名倉遺跡(2)、小松地区のマサノ沢遺跡(41)、笹平遺跡(42)、杉平遺跡(121)、さらに豊邦貝津の神谷沢遺跡など、古くから、縄文時代後期以降の遺物が多く採集されてきた。笹平遺跡では、後期初頭～中葉にかけての集落跡が見つかり、竪穴建物跡30基以上が調査された。マサノ沢遺跡では後期前葉～中葉にかけての埋葬遺構群と遺物集積が調査され、特に配石墓の存在が特筆される。

**縄文時代晩期** 縄文時代晩期の遺物は、大名倉遺跡・笹平遺跡・滝瀬遺跡などで散発的に確認される。大名倉遺跡や笹平遺跡では、耕作など後世の作用によって、包含層や遺構の残存状況が不明瞭になっている可能性が考えられる。滝瀬遺跡では、榎原文様を有する石刀が出土している。マサノ沢遺跡では、晩期後葉の良好な遺物包含層が確認されている。

**弥生時代** 弥生時代前期の条痕文土器は縄文時代晩期同様に、各遺跡で散発的にみつがっている。

表1 西地・東地遺跡および周辺遺跡一覧(番号は図2と一致)

地区(旧大字)	番号	遺跡名	読み	県道番号	所在地	後期旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥・奈良	平安	鎌倉	室町	戦国期	近世初頭	備考
大名倉	1	沢入り遺跡	さわいり	700155	大名倉字沢入り		○	?								
大名倉	2	大名倉遺跡	おおなぐら	700297	大名倉字滝ノ上・滝ノ下・下谷・南貝津		○	○								下谷遺跡
大名倉	3	日掛遺跡	ひかけ	700328	大名倉字日掛											
大名倉	4	格ノ久保遺跡	かやのくぼ	700151	大名倉字新蔵		○									
大名倉	5	西地・東地遺跡	にしじ・ひがしじ	700152	大名倉字西地・東地		○									
大名倉	6	後沢遺跡	うしろざわ	700154	大名倉字後沢		○									
大名倉	7	ハラビ平遺跡	はらびひら	700157	大名倉字ハラビ平		○									
大名倉	8	胡桃窪遺跡	くるみくぼ	700158	大名倉字胡桃窪・丸山		○									
大名倉	9	大名倉丸山遺跡	おおなぐらまるやま	700347	大名倉字丸山											?
川向	10	川向田ノ入遺跡	かわむきたのいり	700351	川向字田ノ入						○					
川向	11	三軒屋遺跡	さんげんや	700159	川向字三ヶツヤ		○									
川向	12	梨子谷下遺跡	なしやげ	700329	川向字梨子谷下						○					
川向	13	上戸神遺跡	かみとがみ	700160	川向字上戸神・下戸神		○				○	○	○			
川向	14	道合遺跡	みちあい	700161	川向字道合		○									
川向	15	川向萩ノ平沢遺跡	かわむきはぎのひらさわ	700352	川向字萩ノ平沢・小万		○				○					
川向	16	道上遺跡	みちあげ	700345	川向字萩ノ平沢・小万		○				○					
川向	17	川向力石遺跡	かわむきちからいし	700353	川向字萩ノ平沢・小万						○					
川向	18	川向山遺跡	かわむきむかいやま	700354	川向字山											
川向	19	大栗遺跡	おおくり	700163	川向字大栗		○	◇			○	○	○			
川向	20	万瀬遺跡	まんぜ	700165	川向字マンゼ		○				○	○	○			
川向	21	大空前遺跡	おおぞらまえ	700166	川向字大空前・新直		○									
川向	22	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	かみおろう・しもおろう	700167	川向字上ヲロウ・下ヲロウ・中空		○				○	○	○			
川向	23	川向近沢遺跡	かわむきかさざわ	700355	川向字近沢・馬道		○				○	○	○			
川向	24	石原遺跡	いしはら	700170	川向字石原・ヒチゴ		○									
川向	25	下延坂遺跡	しもべさか	700171	川向字下延坂・上延坂		○									
川向	26	大畑遺跡	おおはた	700164	川向字大畑・東貝津		○									
川向	27	川向東貝津遺跡	かわむきひがしがつ	700348	川向字東貝津		◇	○								
川向	28	南ヶ岳遺跡	みなみがたけ	700162	川向字南ヶ岳		?				○					弥生は水神平式
川向	29	光石山候補地	みつ(ひかり)いしやま	089-003	城館連地089-003											?
八橋	30	八橋大平遺跡	やつはしおおひら	700349	八橋字大平		○				○					
八橋	31	滝瀬遺跡	たきせ	700174	八橋字タキセ		○	◇								
八橋	32	根道外遺跡	ねみちそと	700173	八橋字根道外		○									
八橋	33	長久保遺跡	ながくぼ	700331	八橋字長久保		○									
八橋	34	中村遺跡	なかむら	700176	八橋字道上・道下・西路		○				○	○	○			
八橋	35	八橋アテ遺跡	やつはしあて	700356	八橋字アテ		○				○					
八橋	36	八橋谷合遺跡	やつはしやわ合せ	700350	八橋字谷合						○					
八橋	37	向橋遺跡	むこうばし	700178	八橋字向橋						○	○				向林遺跡
八橋	38	永沢遺跡	ながえさわ	700175	八橋字永沢		○				○	○				
八橋	39	八橋崩沢遺跡	やつはしなぎさわ	700357	八橋字崩沢		○									
八橋	40	現川林道遺跡	さかいがわりんどう	700330	八橋字コハツカ		○									黒曜石の原石のみ採取
小松	41	マサノ沢遺跡	まさのさわ	700172	小松字マサノ沢		○	○								
小松	42	菅平遺跡	ささだいら	700169	小松字菅平		○	○	○							
小松	43	丸瀬遺跡	まるせ	700184	小松字丸瀬		○									
小松	44	小松沢上ゲ遺跡	こまつざやげ	700358	小松字沢上ゲ						○	○	○			
小松	45	橋平遺跡	かきだいら	700189	小松字波根・東沢						○	○	○			
小松	46	中屋地遺跡	なかやじ	700190	小松字中屋地						○	○	○			
小松	47	下り道遺跡	くだりみち	700191	字下り道・中貝津・下中熊		○				○	○	○			
小松	48	下中熊遺跡	しもなかくま	700192	小松字下中熊・中貝津						○	○	○			
小松	49	上中熊遺跡	かみなかくま	700193	小松字上中熊						○	○	○			
田口	50	添沢遺跡	そえざわ	700188	田口字添沢						○	○	○			
田口	51	添津遺跡	そえつ	700187	田口字添津						○	?				
田口	52	一ノ橋遺跡	いちのはし	700197	田口字杉平向						○					
田口	53	向木屋遺跡	むかいぎや	700201	田口字向木屋						○					
田口	54	城下遺跡	しろした	700202	田口字小木山											?
田口	55	天白遺跡	てんぱく	700203	田口字広貝津						○	○				
田口	56	向木屋城跡	むかいぎやじょうあと	700206	田口字向木屋											?
田口	57	東遺跡	ひがし	700198	田口字谷下・白根土											○
田口	58	稲場遺跡	いなば	700333	田口字辻前						○					
田口	59	中島遺跡	なかしま	700199	田口字中島											○
田口	60	厩立遺跡	いたて	700200	田口字厩立						○	○	○			
田口	61	半兵衛屋敷(田口村古屋敷)	はんべえやしき(たくちむらふるやしき)	700301	田口字小貝津											○
田口	62	田口大久保遺跡	たぐちおおくほ	700359	田口字大久保						○					
田口	63	田口西貝津遺跡	たぐちにしかいつ	700360	田口字西貝津											○
田口	64	田口シウキ遺跡	たくちしうき	700361	田口字シウキ											○
田口	65	大崎遺跡	おおさき	700195	田口字大崎						○					?
清崎	66	根ノ後遺跡	ねのこ	700344	清崎字根ノ後						○					
清崎	67	大塚遺跡	おおみね	700226	清崎字大塚						○	?				
清崎	68	広畑遺跡	ひろはた	700204	清崎字広畑・狐洞											○
清崎	69	萩平遺跡	はぎだいら	700205	清崎字山本・水口											○
清崎	70	萩平村古屋敷	はぎだいらふるやしき	700305	清崎字狐洞											?
清崎	71	重原藩田代官所	しげはらはんたぐちだいかんしょ	700302	清崎字狐洞											近代
清崎	72	松戸遺跡	まつど	700334	松戸字家郷・向畑											○
清崎	73	松戸下畑遺跡	まつどしたばた	700362	松戸字下畑											○
清崎	74	松戸城跡	まつどじょうあと	700304	松戸字イサケトチ											?
東納庫	101	大家下遺跡	おおやした	700147	東納庫字岩ケラ											○
東納庫	102	澄川口遺跡	すみかわくち	700146	東納庫字澄川口											
東納庫	103	岩ケラ遺跡	いわくら	700148	東納庫字岩ケラ											○
東納庫	104	長根遺跡	ながね	700149	東納庫字長根											○
東納庫	105	長尾遺跡	ながお	700150	東納庫字長尾											○
東納庫	106	菅沢山遺跡	すげさわやま	700143	東納庫字菅沢山											○
川向	107	モロ田遺跡	もろだ	700137	川向字モロ田											○
川向	108	市場口遺跡	いちばくち	700138	川向字市場口											○
川向	109	西長沢遺跡	にしながさわ	700139	川向字市場口											○
川向	110	庄之字呂遺跡	しょうのころ	700140	川向字庄之字呂											○
八橋	111	八橋杉平遺跡	やつはしすぎたいら	700177	八橋字杉平											○
長江	112	御堂山遺跡	みどうやま	700181	長江字御堂山											○
長江	113	天塚遺跡	あまつづみ	700180	長江字天塚											○
長江	114	長江城跡	ながえじょう	700296	長江字松ヶ根											○
長江	115	尊手平遺跡	そんでひら	700182	長江字尊手平											○
長江	116	本江遺跡	ほんえ	700183	長江字本江											○
長江	117	寺トコ遺跡	てらとこ	700185	長江字田平											○
長江	118	田平遺跡	ただいら	700184	長江字田平											○
小松	119	下湯分沢遺跡	しもゆぶんざわ	700194	小松字下湯分沢											○
田口	120	オリジ遺跡	おりじ	700207	田口字オリジ											○
小松	121	小松杉平遺跡	こまつすぎだいら	700196	小松字杉平											○
荒尾	122	寒相遺跡</														

表2 西地・東地遺跡調査工程表

調査区		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	調査担当者
平成 26年度 (4,220 m <sup>2</sup> )	14A区									↔				鈴木正貴・川添和暁
	14B区				←	→	←	→	←	→				
	14C区						←	→						
平成 28年度 (340 m <sup>2</sup> )	16区						←	→			←	→	16区のみ図面整理	樋上 昇・川添和暁

**平成26年度本発掘調査に関わる行事**

- 9月22日(月) 津具中学校 現場体験【生徒31名と教職員】
- 9月26日(金) 平野吾郎氏 現地指導
- 10月4日(土) 地元説明会【32名】
- 10月14日(火) 田口小学校6年生と教職員 来跡
- 10月18日(土) 親子の絆事業による発掘体験【6家族14名】
- 10月29日(水) 国土交通省設楽ダム事務所職員の発掘体験【13名】
- 12月1日(月) 田口高校 現場体験【生徒13名と教職員】
- 3月8日(日) 平成26年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会  
「新設案発見伝」の開催

**平成28年度本発掘調査に関わる行事**

- 11月19日(土) 地元説明会【17名】
- 11月22日(火) 千葉 豊氏 現地指導
- 3月4日(土) 平成28年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会  
「新設案発見伝3」の開催

遺構としては、笹平遺跡やマサノ沢遺跡での土器棺墓が主体となる。川向の下延坂遺跡では、弥生時代中期の土器が採集されている。

**古墳時代** 古墳時代の活動は、不明瞭な部分が多い。名倉地区の丸根古墳や根古屋古墳などの後期古墳は、戦前から知られており、昭和7(1932)年刊行『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告10』にその重要性が指摘されている。

**古代・中世** 古代以降では、南ヶ岳遺跡(28)で古代の清郷甕の出土が以前から知られていた。滝瀬遺跡では、灰釉陶器とともに、古代の土坑・柱穴やカマドを伴う竪穴建物跡が見つかった。八橋地区では、さらに北側に向かって当該時期の資料が見つかる可能性がある。また、中世の野鍛冶など行った活動の場が、万瀬遺跡で見つかった。

**江戸時代以降** 滝瀬遺跡では、発掘調査によって、近世以降と考えられる道路状遺構が見つかった。遺跡内には伊那街道が走っており、見つかった遺構は、旧の伊那街道跡の可能性が高い。

**第4節 調査の経緯と経過**

本遺跡は、県教育委員会による『詳細遺跡分布調査報告書記』(北村・木川2007)によって、事前調査の必要な遺跡として掲載された。事業は国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けてこれを受けて、県埋蔵文化財センターが実施した。2012年・2013年・2015年に渡り、県埋蔵文化財センターにより範囲確認調査(本発掘調査A)を実施し、その結果を受けて県教育委員会によって本調査(本発掘調査B)の範囲が確定された。以上を受けて、調査は、平成26(2014)年度および平成28(2016)年度に、県埋蔵文化財センターによって本調査が実施された(表2)。発掘調査後、平成29(2017)年度に、県埋蔵文化財センター本部で、図面の整理および出土遺物の分析・記録などの室内調査を行なった。本書は、その結果をまとめて、発掘調査報告書としたもので、平成30年度末に刊行となった。

## 第2章 調査の方法および基本層序

### 第1節 調査区設定と調査方法

範囲確認調査（本発掘調査A）に基づき、本調査（本発掘調査B）の対象となったのは、遺跡全体の西側で、これまで西地遺跡と言われた区域が中心である（図4）。調査対象区内には町道が横断しており、町道をまたいだ北側と南側を平成26（2014）年度調査区、町道部分のみを平成28（2016）年度調査区とした。平成24年度調査区は地区割りおよび残土置場の確保などから、A・B・Cの3調査区に分割して作業を行った。

調査に際して、調査区内全体にわたり、グリッドを設定し、発掘作業や検出遺構の管理、出土

遺物の取り上げを行った（図5）。グリッドは、世界測地系の国土座標測定値による、10mグリッドを基本にしている。後述するように、縄文時代の遺構・遺物が多く出土した、14B区および16区では、5mグリッドによる調査を行なった。

調査は、重機による表土掘削後、人力による平面と壁精査、さらに遺構掘削・遺物取り上げ・測量や写真などの記録を行なった。

14B区・16区では、古代以降の遺構・包含層と、縄文時代の遺構・包含層とが重複して見つかった。前者の調査を検出1、後者の調査を検出2とした。

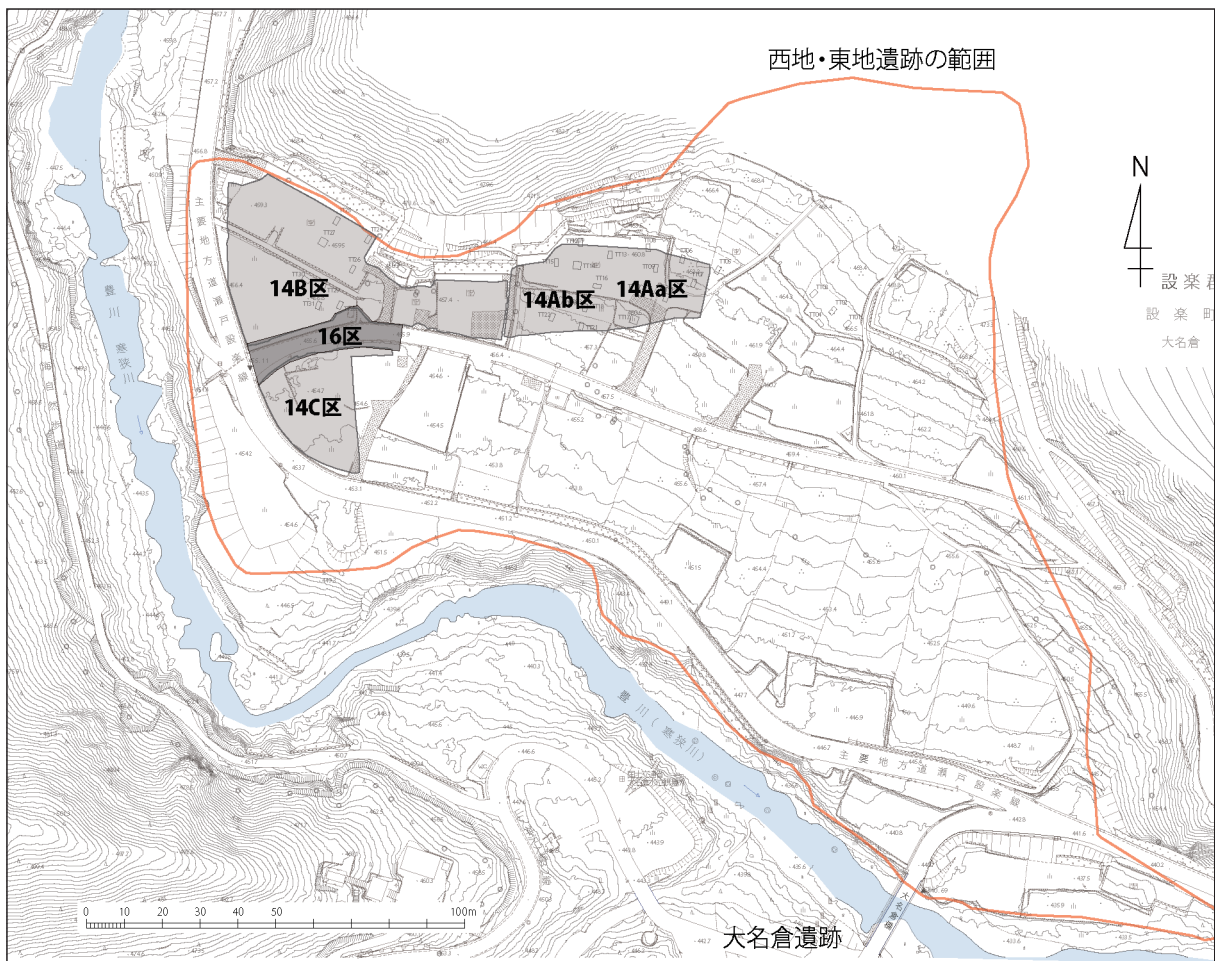


図4 西地・東地遺跡全体と調査区位置図（1:2,000）

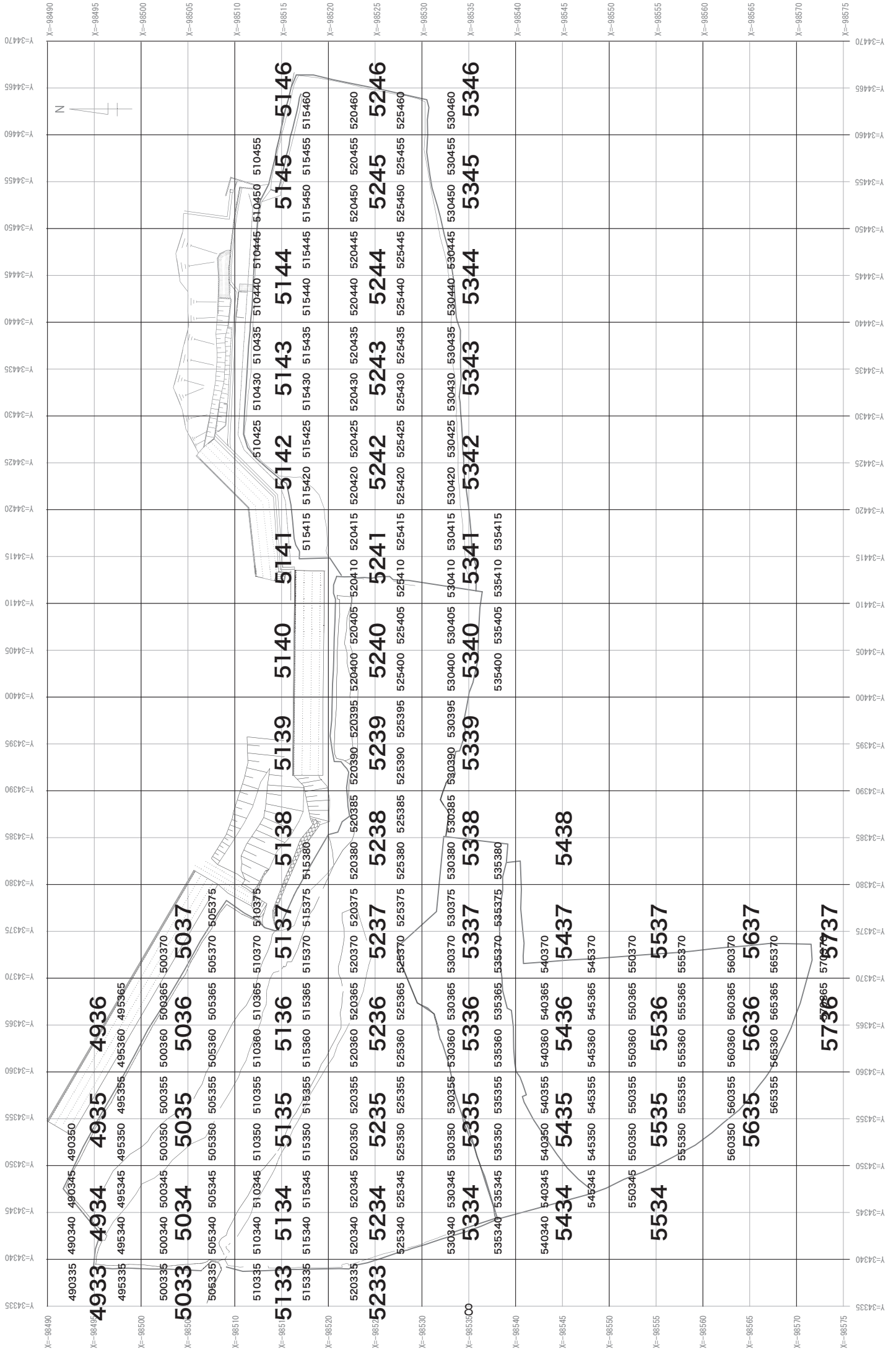


図5 調査区グリッド設定図 (1 : 600)

## 第2節 時代・時期と基本層序

### 1. 確認された時代・時期

今回の西地・東地遺跡調査において、出土遺物で確認された時代・時期は、以下の通りである。(太字は、遺構などが見つかった時期を示す。)

縄文時代	早期前半
	早期後半
	前期初頭～前期前半
	前期後半
	中期中葉
	中期後半
	後期初頭
	後期後葉～晩期
弥生時代	前期
古代	
中世	
戦国期～近世前半	
近世後半	
近代以降	

### 2. 基本層序

基本層序は、大きく5層に分けられる。

I層：表土、近世以降耕作土および平坦面のための土盛り

II層：古代～近世の遺物包含層

III層：縄文時代後期前葉を中心とする包含層

IV層：縄文時代早期の包含層

V層：地山

I層は、調査前の宅地などに伴う盛土である。盛土は、地山の土および遺物包含層を使って行われたため、14B区南端では高いレベルから多量の縄文土器・石器が出土した。

II層は、古代～近世の遺物包含層であるが、一部旧耕作土を含むものと考えられる。径1cmほどの小砂利を含む層が全体に広がって堆積しており、それを除去すると、戦国期から近世前半の遺物を含む黒色粘土質シルトの堆積が認められる。このレベルからIII層・IV層・V層との境が遺構検出面となっており、14B区では、「検出I」

(本文18頁へ続く)

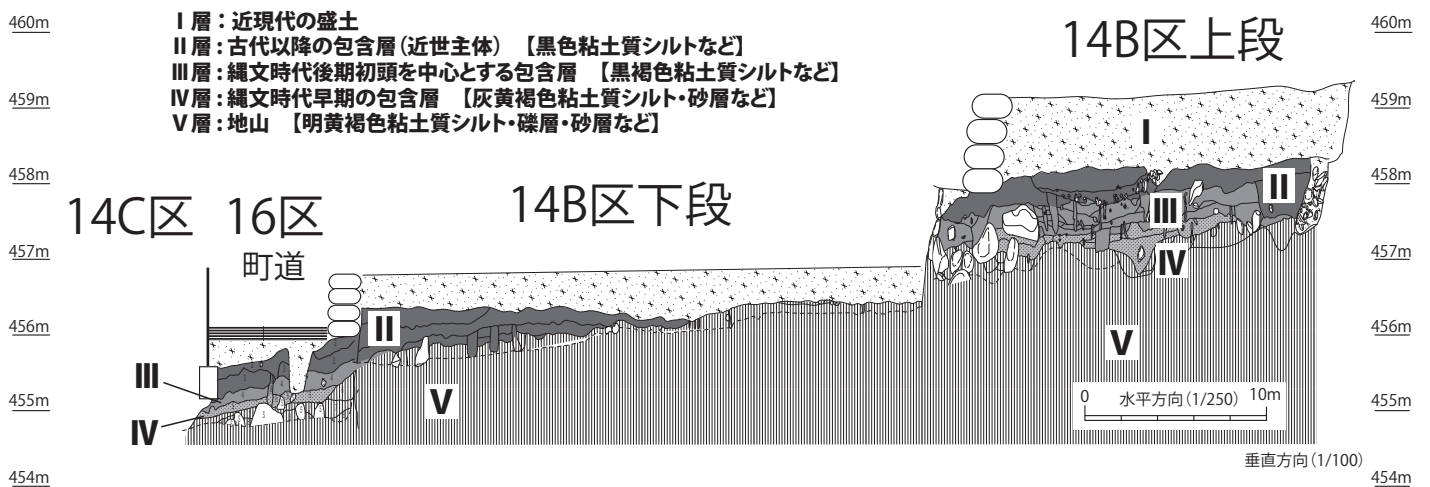
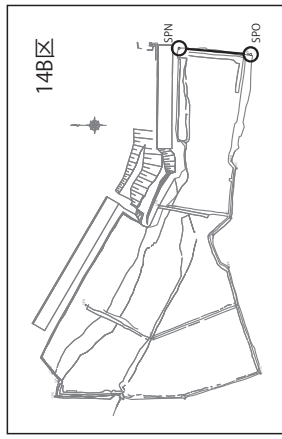
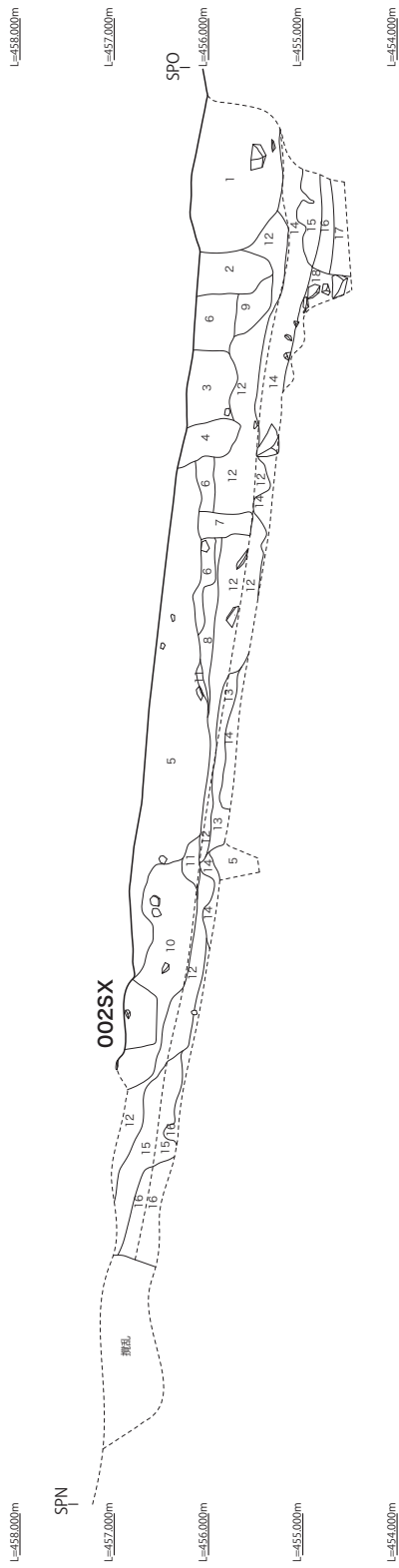


図6 西地・東地遺跡基本土層模式図

東壁土層断面図



- |                  |  |   |
|------------------|--|---|
| 1 10YR3/1 黒褐色    | 粘土質シルト 径10cmほどの礫から 細礫を多く含む。                | 粘土質シルト 径10cmほどの礫多く含む。炭化物、焼土含む。                        |
| 2 10YR3/2 黒褐色    | 粘土質シルト 径5cmほどの礫と懸粒状砂を含む。                   | 粘土質シルト 懸粒状砂、細礫多く含む。炭化物状を含む。                           |
| 3 10YR4/2 灰黄褐色   | 砂 懸粒状砂、粗粒砂、中粒砂主体。径3~10cmほどの礫を多く含む。         | 粘土質シルト 花ごう岩の細片を多く含む。細礫、懸粒状砂含む。炭化物含む。                  |
| 4 10YR4/1 褐灰色    | 粘土質シルト 細礫、砂質状砂を含む。中粒砂多く含む。                 | 粘土質シルト 花ごう岩の細片を多く含む。細礫、懸粒状砂含む。炭化物含む。                  |
| 5 10YR4/3 にぶい黄褐色 | 粘土質シルト 班土、懸粒状砂、細礫。径10cmほどの礫を多く含む。          | 粘土質シルト 懸粒状砂、粗粒砂、中粒砂を含む。細礫を含む。                         |
| 6 10YR3/1 黒褐色    | 10YR7/6明黄褐色粘土を斑状に含む。炭化物を含む。                | 粘土質シルト 花ごう岩の細片多く含む。細礫、懸粒状砂、粗粒砂を含む。溝物の包みはなし。           |
| 7 10YR4/1 褐灰色    | 砂質シルト 中粒砂多く含む。細礫を多く含む。                     | 粘土質シルト 花ごう岩の細片多く含む。粘性強い。                              |
| 8 10YR3/1 黒褐色    | 粘土質シルト 懸粒状砂多く含む。径10cmほどの礫を含む。焼土、炭化物を斑状に含む。 | 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。径5cmほどの礫を含む。懸粒状砂、粗粒砂、中粒砂をブロック状に含む。 |
| 9 10YR4/1 褐灰色    | 粘土質シルト 中粒砂多く含む。細礫および懸粒状砂を含む。               | 粘土質シルト 10YR7/6明黄褐色粘土と土砂を含む。炭化物を含む。(近代以降の井戸掘削方)        |

図7 14B区土層断面図1 (1:80)



1=458.000m

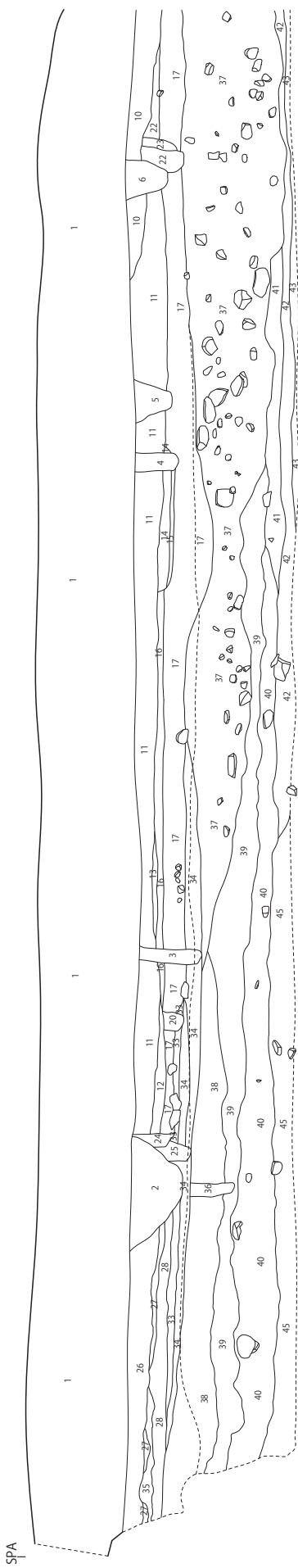
1=457.000m

1=456.000m

1=455.000m

1=454.000m

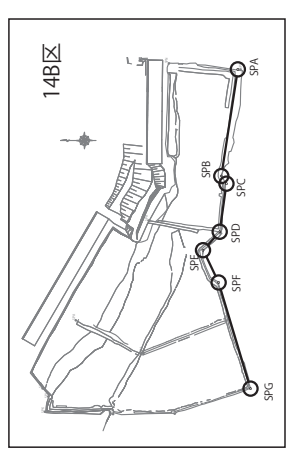
1=453.000m



- |    |          |      |        |   |
|----|----------|------|--------|---|
| 1  | 2.5Y8/4  | 淡黄色  | 砂      | 細粒主体、扇形砂多く含む、径5~10cmの礫を多く含む、              |
| 2  | 10YR3/1  | 黒褐色  | 粘土質シルト | 扇形砂、細礫を多く含む、径5cm程度の礫少量含む、粘土若干含む、          |
| 3  | 10YR4/2  | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 径3cm程度の礫、細礫、扇形砂を含む、                       |
| 4  | 10YR4/1  | 褐色   | 粘土質シルト | 径3cm程度の礫、細礫、扇形砂多く含む、径5cm程度の礫若干含む、粘土若干含む、  |
| 5  | 10YR4/1  | 褐色   | 粘土質シルト | 扇形砂、粗粒砂を含む、10YR5/2灰黄褐色 粘土質シルト 粘土質シルトに含む、  |
| 6  | 10YR4/1  | 褐色   | 粘土質シルト | 粘土、炭化物を含む、                                |
| 7  | 10YR4/2  | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 扇形砂、粗粒砂多く含む、炭化物を含む、径2~5cm程度の礫多く含む、        |
| 8  | 10YR4/1  | 褐色   | 粘土質シルト | 粗粒砂主体 10cm以上の礫を含む、炭化物を含む、                 |
| 9  | 10YR5/2  | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 粗粒砂多く含む、10cm以上の礫を含む、炭化物を含む、               |
| 10 | 10YR5/1  | 褐色   | 粘土質シルト | 扇形砂、細礫を多く含む、径5cm程度の礫を含む、                  |
| 11 | 10YR4/1  | 褐色   | 粘土質シルト | 扇形砂、細礫を多く含む、炭化物を含む、径5~10cmの礫を所々に含む、       |
| 12 | 10YR5/2  | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 細礫、扇形砂、粗粒砂、中粒砂多く含む、粘土、炭化物を若干含む、           |
| 13 | 10YR3/1  | 黒褐色  | 粘土質シルト | 扇形砂、粗粒砂、中粒砂多く含む、径3cm程度の礫をブロック状に含む所あり、     |
| 14 | 10YR3/1  | 黒褐色  | 粘土質シルト | 粗粒砂多く含む、細礫を所々に含む、中粒砂を含む、炭化物含み粘性やや強い、      |
| 15 | 7.5YR7/6 | 褐色   | 粘土質シルト | 10YR4/1褐色粘土質シルトを若干含む、層自体が粘土質炭化物若干含む、      |
| 16 | 10YR3/1  | 黒褐色  | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂多く含む、扇形砂、細礫をブロック状に含む、径5cm程度の礫少量含む、 |
| 17 | 10YR4/1  | 褐色   | 粘土質シルト | 扇形砂、粗粒砂多く含む、炭化物若干含む、                      |
| 18 | 10YR3/1  | 黒褐色  | 粘土質シルト | 扇形砂、粗粒砂主体 炭化物を含む、径5cm程度の礫多く含む、            |
| 19 | 10YR4/2  | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 扇形砂、粗粒砂、粗粒砂多く含む、細礫を含む、炭化物を含む、             |
| 20 | 10YR6/2  | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 細礫、扇形砂多く含む、径3cm程度の礫若干含む、炭化物若干含む、          |
| 21 | 10YR6/2  | 灰黄褐色 | 粘土     | 中粒砂、粗粒砂を含む、                               |
| 22 | 10YR4/2  | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 扇形砂、粗粒砂多く含む、粘土、炭化物を多く含む、                  |
| 23 | 10YR5/1  | 褐色   | 粘土質シルト | 扇形砂、細礫、径5cm程度の礫を含む、炭化物、粘土若干含む、            |
| 24 | 10YR3/2  | 黒褐色  | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂多く含む、細礫をブロック状に含む、炭化物、粘土若干含む、       |

- |    |         |          |                               |   |
|----|---------|----------|-------------------------------|---|
| 25 | 10YR5/2 | 灰黄褐色     | 粘土質シルト                        | 扇形砂多く含む、径5cm程度の礫を含む、炭化物若干含む、                |
| 26 | 10YR4/1 | 褐色       | 粘土質シルト                        | 径3cm程度の礫、細礫を多く含む、扇形砂、粗粒砂を含む、粘土、炭化物若干含む、     |
| 27 | 10YR3/1 | 黒褐色      | 粘土質シルト                        | 扇形砂、粗粒砂、中粒砂多く含む、細礫少量含む、炭化物を含む、              |
| 28 | 10YR4/1 | 褐色       | 粘土質シルト+土層                     | 径3~5cm程度の角礫主体 細礫、扇形砂を含む、                    |
| 29 | 10YR2/1 | 黒色       | 粘土+土層                         | 炭化物を含む、径10cm程度の礫を含む、粘性強い、                   |
| 30 | 10YR5/2 | 灰黄褐色     | 粘土                            | 中粒砂多く含む、炭化物若干含む、径5cm程度の礫を含む、                |
| 31 | 10YR4/1 | 褐色       | 粘土                            | 扇形砂多く含む、径5cm程度の礫を含む、                        |
| 32 | 10YR4/1 | 褐色       | 粘土                            | 扇形砂、炭化物少量含む、                                |
| 33 | 10YR3/2 | 黒褐色      | 粘土質シルト                        | 扇形砂、粗粒砂を含む、粘性やや強い、                          |
| 34 | 10YR3/1 | 黒褐色      | 粘土質シルト                        | 扇形砂、粗粒砂多く含む、中粒砂、粗粒砂多く含む、径3cm程度の礫を含む、粘性やや強い、 |
| 35 | 10YR4/1 | 褐色       | 粘土質シルト                        | 粘土、扇形砂、粗粒砂、中粒砂多く含む、細礫若干含む、粘性やや強い部分所々にある     |
| 36 | 10YR3/1 | 黒褐色      | 粘土                            | 粗粒砂若干含む、花ごう岩等の細片若干含む、                       |
| 37 | 10YR2/1 | 黒色       | 粘土質シルト+土層                     | 粗粒砂多く含む、細礫~径10cm程度の礫を少量含む、                  |
| 38 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色   | 粘土質シルト                        | 扇形砂、粗粒砂、中粒砂を含む、細礫を含む、                       |
| 39 | 10YR2/1 | 黒色       | 粘土質シルト                        | 花ごう岩の細片多く含む、細礫、扇形砂、粗粒砂を含む、遺物を含む、            |
| 40 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色   | 粘土質シルト                        | 花ごう岩の細片多く含む、粘性強い                            |
| 41 | 10YR6/3 | にぶい黄褐色 砂 | 中粒砂、粗粒砂主体 径5cm~10cm程度の礫を少量含む、 |   |
| 42 | 10YR3/2 | 黒褐色      | 粘土                            | 中粒砂、粗粒砂を含む、径5cm程度の礫を少量含む、                   |
| 43 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色   | 粘土                            | 中粒砂、粗粒砂を含む、                                 |
| 44 | 10YR5/1 | 灰黄褐色     | 粘土                            | 中粒砂、粗粒砂多く含む、径6cm程度の礫を含む、扇形砂、粗粒砂、            |
| 45 | 10YR6/6 | 明黄褐色     | 粘土質シルト                        | 中粒砂をブロック状に含む、                               |
| 46 | 10YR7/6 | 明黄褐色     | 粘土質シルト                        | 中粒砂、粗粒砂を含む、花ごう岩の細片多く含む、                     |

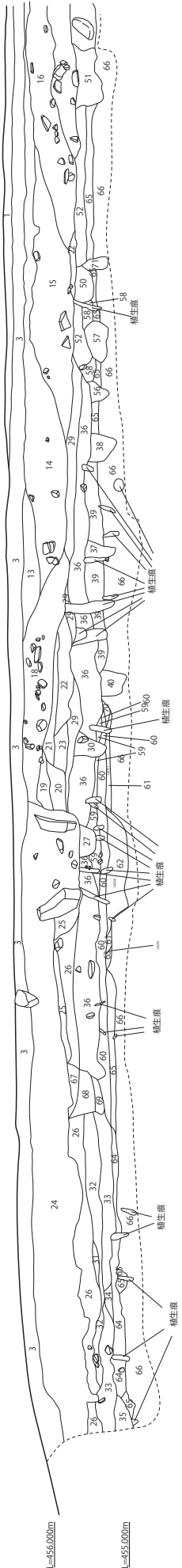
図9 14B区土層断面図3 (1:80)



SPD  
1:457,000

SPD  
1:457,000

SPF  
1:457,000



1:455,000

1:455,000

1:455,000

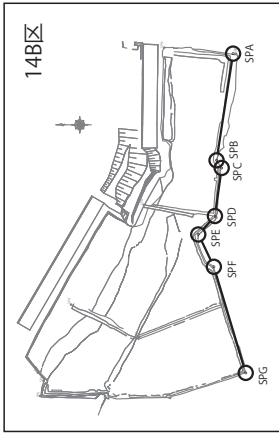
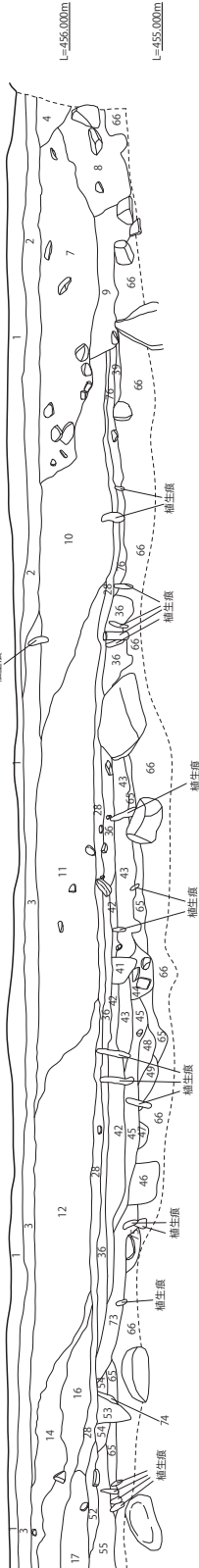
1:455,000

SPG  
1:456,000

1:456,000

1:456,000

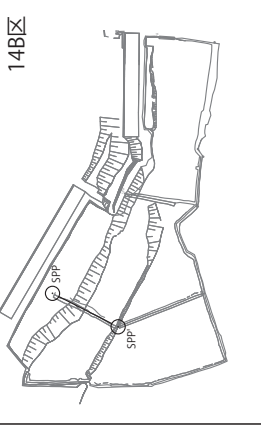
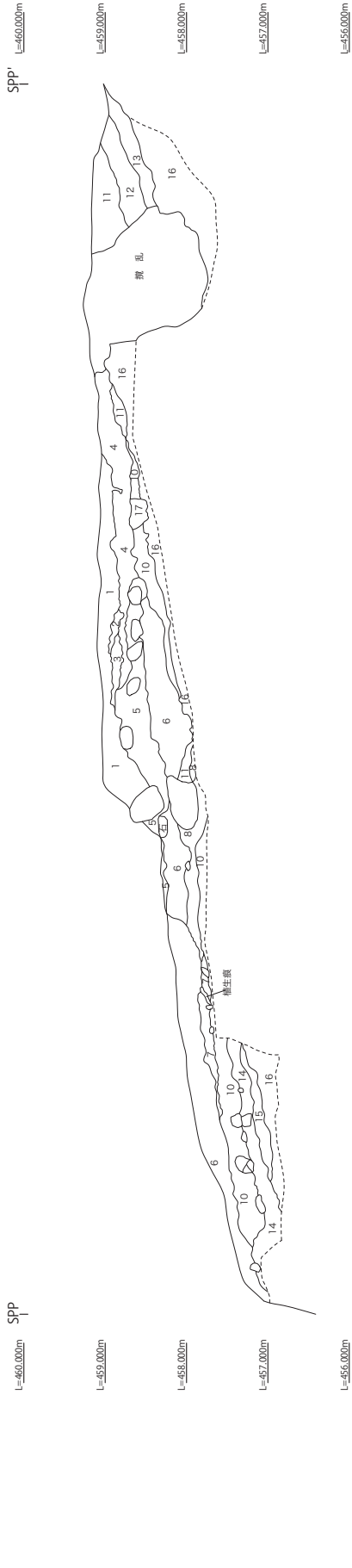
1:456,000



1	10YR4/1	暗灰色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、(表土)	51	10YR3/2	黒褐色	粘土	中粒砂、粗粒砂含む、中礫含む。
2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂、凝結砂含む、(表土)	52	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	中粒砂、粗粒砂、細～中礫含む。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂、凝結砂含む、(表土)	53	10YR2/1	黒色	粘土	粗粒砂含む。
4	10YR3/3	暗褐色	粘土	粗粒砂、凝結砂、細礫含む、10YR5/6黄褐色粘土を少量含む、(底土)	54	10YR3/2	黒褐色	粘土	粗粒砂、細～中礫含む。
5	10YR4/4	暗褐色	凝結砂	中粒砂含む。	55	10YR4/1	褐灰色	粘土	粗粒砂含む。
6	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	中粒砂、細礫含む、(底土)	56	10YR5/2	灰黄褐色	粘土	粗粒砂、凝結砂、細礫含む。
7	10YR4/6	黒褐色	粘土	粗粒砂、凝結砂、中礫含む、細～中礫多く含む、(底土)	57	10YR2/1	黒色	粘土	粗粒砂含む、10YR4/6褐色を少量含む。
8	10YR2/3	黒褐色	粘土	粗粒砂、凝結砂、細礫含む、10YR5/6黄褐色粘土を少量含む、(底土)	58	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	中粒砂、粗粒砂含む。
9	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	粗粒砂、細礫含む。	59	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	中粒砂、粗粒砂含む。
10	10YR2/1	黒色	粘土	粗粒砂、細礫含む、10YR5/6黄褐色粘土を少量含む、(底土)	60	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	細粒砂、細～中礫含む、(12655掘方)
11	10YR2/3	黒褐色	粘土	中粒砂、粗粒砂、細礫含む、10YR5/6黄褐色粘土を少量含む、(底土)	61	10YR3/2	黒褐色	粘土	細粒砂、細～中礫含む、(12655掘方)
12	10YR2/2	黒褐色	粘土	粗粒砂、細礫含む、10YR5/6黄褐色粘土を少量含む、(底土)	62	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	粗粒砂、細～中礫含む、(12655掘方)
13	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	凝結砂、細礫含む、(底土)	63	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土	粗粒砂、細礫含む、(12633K)
14	10YR5/6	黄褐色	粘土	粗粒砂、凝結砂、中礫含む、(底土)	64	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	粗粒砂、凝結砂、細礫含む。
15	10YR3/2	黒褐色	粘土	粗粒砂、凝結砂、中礫含む、(底土)	65	10YR5/2	灰黄褐色	粘土	粗粒砂、凝結砂、細礫含む。
16	10YR2/2	黒褐色	粘土	中粒砂、中～大礫含む、10YR5/6黄褐色粘土を少量含む、(底土)	66	10YR6/6	明黄褐色	粘土	凝結砂、細～巨礫含む。
17	10YR2/3	黒褐色	粘土	中粒砂、細礫含む、10YR5/6黄褐色粘土を少量含む、(底土)	67	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	凝結砂、礫多く含む。
18	10YR4/4	暗褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、中～大礫多く含む、(底土)	68	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	粗粒砂、凝結砂、細礫含む。
19	10YR4/4	暗褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、中～大礫含む、(底土)	69	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	粗粒砂、凝結砂、細礫含む。
20	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、(底土)	70	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、凝結砂含む、炭化物含む。
21	10YR4/4	暗褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、(底土)	71	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、10YR7/6明黄褐色シルトを現状に含む。
22	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、細礫少量含む、(底土)	72	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、炭化物若干含む。
23	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	細粒砂、中粒砂含む、細礫少量含む、(底土)	73	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	凝結砂、粗粒砂含む、炭化物含む。
24	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	粗粒砂、凝結砂、大～巨礫含む、(底土)	74	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む。
25	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、(底土)	75	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む、炭化物若干含む。
					76	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	中粒砂、粗粒砂含む。

図 10 14B 区土層断面図 4 (1:80)

T1土層断面図



T2土層断面図

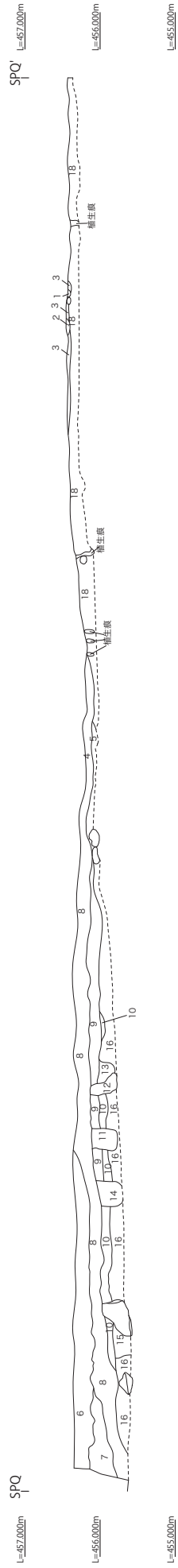


図 11 14B区土層断面図 5 (1:80)

L=459.000m

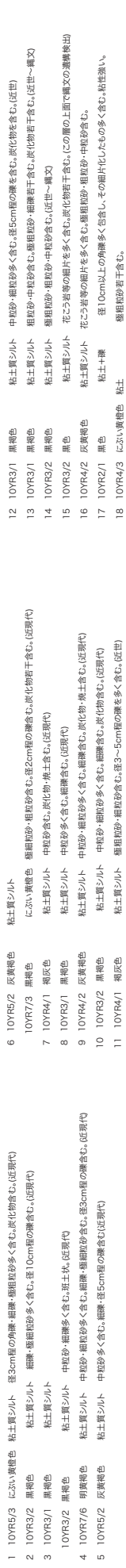
L=458.000m

L=457.000m

L=456.000m

L=455.000m

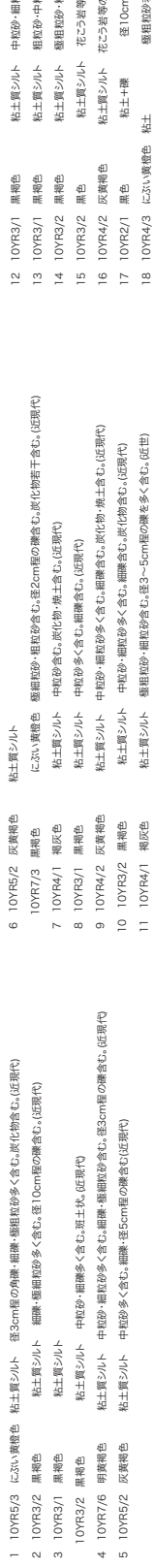
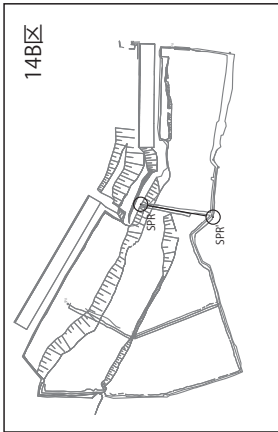
L=454.000m



L=459.000m

L=458.000m

L=457.000m



L=458.000m

L=457.000m

L=456.000m

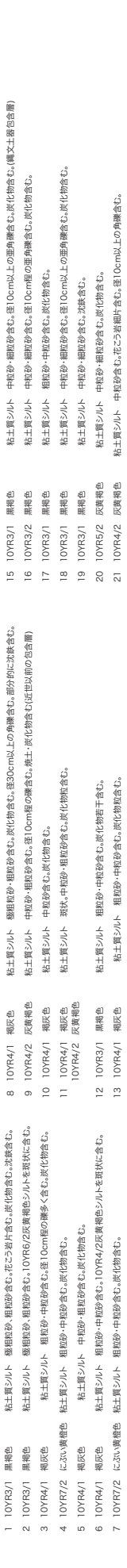
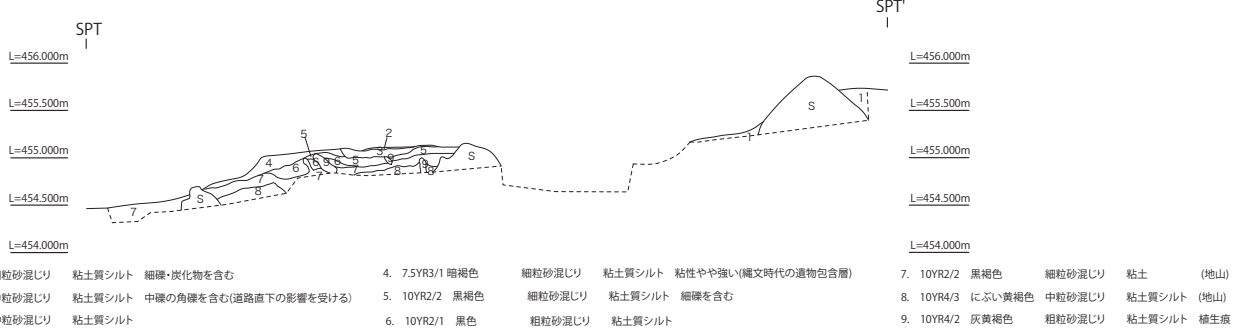
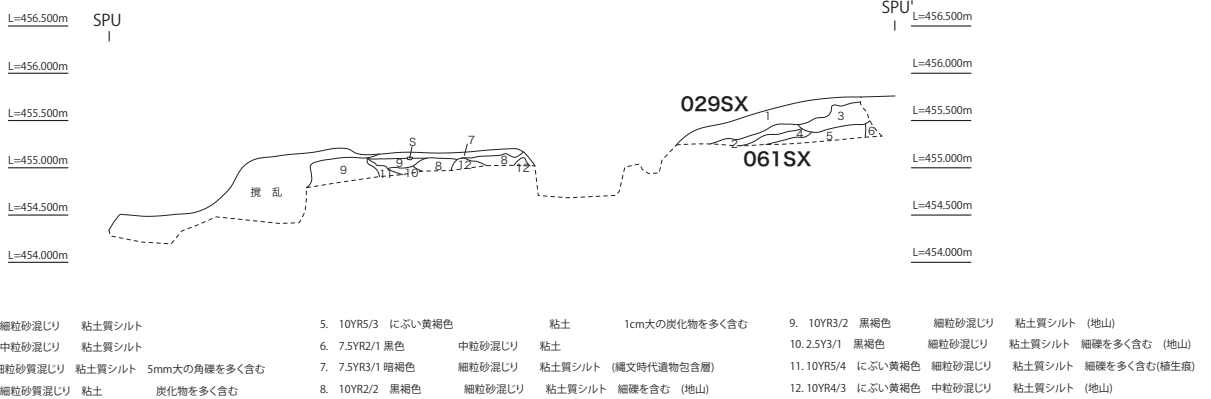


図 12 14B区土層断面図 6 (1: 80)

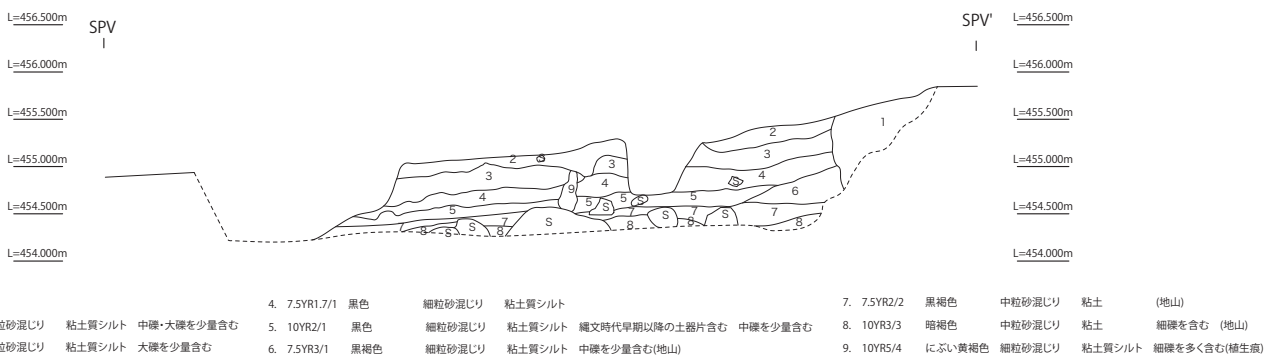
16区T1セクション図



16区T2セクション図



16区T3セクション図



16区T4セクション図

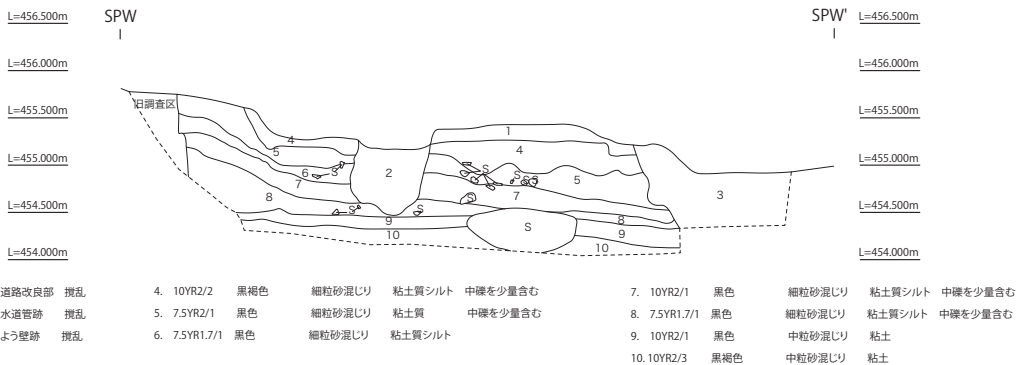
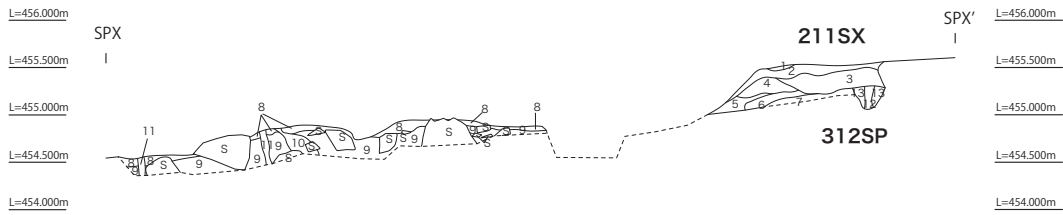


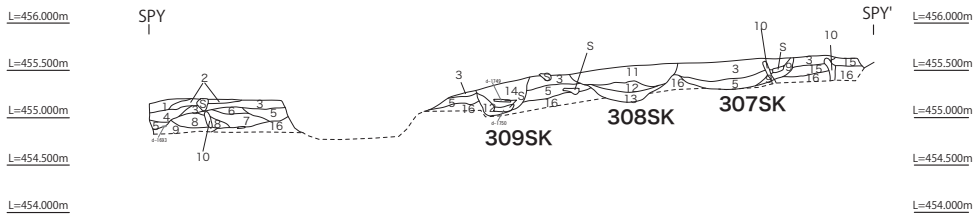
図 13 16区土層断面図 1 (1: 80)

16区T5セクション図



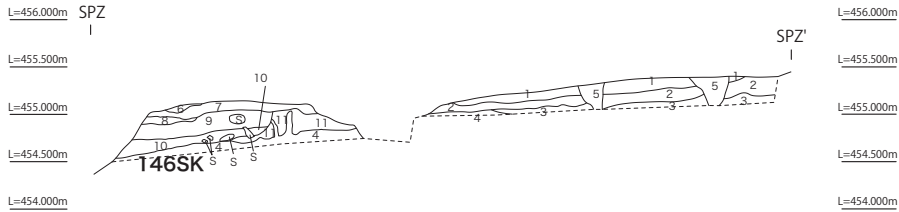
- |                |        |          |                 |        |        |                    |                 |        |        |            |
|----------------|--------|----------|-----------------|--------|--------|--------------------|-----------------|--------|--------|------------|
| 1. 10YR2/1 黒色  | 細粒砂混じり | 粘土質シルト   | 5. 10YR3/2 黒褐色  | 中粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘質強                | 9. 10YR2/2 黒褐色  | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 細礫を含む (地山) |
| 2. 10YR2/2 黒褐色 | 中粒砂混じり | 粘土質シルト   | 6. 7.5YR3/1 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土     |                    | 10. 10YR3/4 暗褐色 | 粗粒砂混じり | 粘土質シルト |            |
| 3. 10YR2/2 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト   | 7. 10YR3/4 暗褐色  | 粗粒砂混じり | 粘土質シルト | (地山)               | 11. 10YR3/3 暗褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 植生痕        |
| 4. 10YR2/1 黒色  | 中粒砂混じり | 粘土質シルト   | 8. 7.5YR3/1 暗褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘性やや強い(縄文時代の遺物包含層) | 12. 10YR3/1 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト |            |
|                |        | 中礫の角礫を含む |                 |        |        |                    | 13. 10YR3/2 黒褐色 | 中粒砂混じり | 粘土質シルト | 細礫を含む      |

16区T6セクション図



- |                |        |        |                 |        |        |        |                    |        |        |              |
|----------------|--------|--------|-----------------|--------|--------|--------|--------------------|--------|--------|--------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 6. 10YR2/2 黒褐色  | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘質強    | 11. 10YR3/4 暗褐色    | 中粒砂混じり | 粘土質シルト |              |
| 2. 10YR2/1 黒色  | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 7. 7.5YR3/1 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘質強    | 12. 10YL2/3 黒褐色    | 中粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘質強 炭化物を少量含む |
| 3. 10YR3/1 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 8. 7.5YR2/2 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 礫を少量含む | 13. 7.5YR3/3 暗褐色   | 粗粒砂混じり | 粘土     | 中礫の角礫を多く含む   |
| 4. 10YR3/2 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 9. 10YR3/4 暗褐色  | 粗粒砂混じり | 粘土質シルト | (地山)   | 14. 10YR3/1 黒褐色    | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 中礫の角、円礫を含む   |
| 5. 10YR3/3 暗褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 10. 10YR2/2 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 植生痕    | 15. 10YR3/4 暗褐色    | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘質強 (地山)     |
|                |        |        |                 |        |        |        | 16. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | 中粒砂混じり | 粘土質シルト | (地山)         |

16区T7セクション図



- |                 |        |                      |                |        |              |                  |        |        |          |
|-----------------|--------|----------------------|----------------|--------|--------------|------------------|--------|--------|----------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色  | 細粒砂混じり | 粘土質シルト (道路直下の影響を受ける) | 5. 10YR2/1 黒色  | 粗粒砂混じり | 粘土質シルト (粘質強) | 9. 10YR3/2 黒褐色   | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 中礫を少量含む  |
| 2. 10YR2/2 黒褐色  | 細粒砂混じり | 粘土質シルト               | 6. 10YR2/1 黒色  | 細粒砂混じり | 粘土質シルト       | 10. 10YR2/2 黒褐色  | 細粒砂混じり | 粘土質シルト |          |
| 3. 10YR4/3 暗褐色  | 細粒砂混じり | 粘土                   | 7. 10YR2/2 黒褐色 | 中粒砂混じり | 粘土質シルト       | 11. 7.5YR3/1 黒褐色 | 中粒砂混じり | 粘土質シルト |          |
| 4. 10YR4/2 灰黄褐色 | 粗粒砂混じり | 粘土質シルト (一部植生痕あり)     | 8. 10YR3/1 黒褐色 | 中粒砂混じり | 粘土質シルト       |                  |        |        | 中礫の角礫を含む |

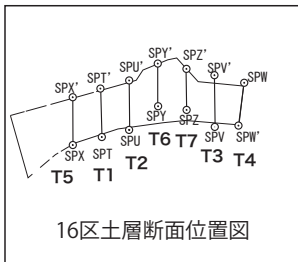


図 14 16 区土層断面図 2 (1: 80)

あるいは「14B1」と称したのである。

Ⅲ層は、縄文時代後期初頭の遺物を含む包含層で、遺構もこの層の中から掘り込まれていると考えられる。色調は黒色から黒褐色を呈する粘土質シルトで、竪穴建物跡の埋土などは、淡い灰褐色を呈するところもある。均質な粘土質シルトが広がり、しまりは強い。Ⅲ層とⅣ層あるいはⅤ層との境が遺構検出面となり、14B区では、「検出2」「14B2」と称したところである。

Ⅳ層は、縄文時代早期を中心とする遺物包含層で、一部、縄文時代前期および中期前半の遺物も包含していたと考えられる。灰黄褐色を呈する粘土質シルトで、旧表土あるいはⅤ層地山に向かつての漸移層のような様相を呈する。14B区で検出された竪穴建物跡は、いずれもこの上面で検出されたものである。第3章で述べるように、14B区1305SIの掘方として掘削したところ、縄文時代早期前半から中期前半の遺物がまとまって出土したのは、この事情による。また、16区の調査において、1263SIの検出を明確に行うことができなかったのは、14B区から16区にかけて急激にⅣ層の堆積が厚くなっていくことを認識できずにⅣ層の下位層まで一度に掘削してしまったことによる。

Ⅴ層は、地山と考えられる堆積層で、黄褐色粘土質シルトを主体とする。14B区南西側から16区西側、さらに14C区にかけては、円礫状態の巨礫を含む砂層が展開しており、旧寒狭川の河床の様相を呈する。また、14B区北端では、角礫を多く含む黒色層の広がりを確認している。黄褐色粘土質シルトよりは上層と考えられるが、Ⅳ層よりは下層にあたり、遺物を含まない。ここでは便宜的に、この層もⅤ層に含め地山として扱った。

以上が西地・東地遺跡の基本層序となる。以下、

特に留意すべき点を2点挙げておく。

(1) 縄文時代後期初頭の竪穴建物跡は、すべてⅢ層中あるいはⅣ層との境で検出されたこと。

(2) Ⅳ層は、一部、旧表土あるいはⅤ層へ漸移層の様相を呈していること。

この2点は、当地域における遺跡形成過程のあり方を示すものであり、調査を行う上での留意点ともなるものである。縄文時代の調査面としては、中期後半までと後期初頭以降は面を異にしない場合が多く、実際には一度に調査を行うことは難しい。また、Ⅳ層が確認された場合、調査工程上、無条件に掘り下げてⅤ層上で検出する傾向があると思われるが、この遺物包含層の状況を理解して行う必要がある。

なお、(1)に関連してさらに言及するならば、縄文時代後期以降は竪穴建物跡が少なくなったという、従来から言われている集落論の見直しを行う糸口になると思われる。また、(2)に関しては、縄文時代早期以前の遺物出土確認がおろそかにしないように、極めて注意を要するものである。

設楽地域の調査では、配された礫と埋納された土器が、調査の鍵となる。これらの形成されたあるいは掘り込まれた層を絶えず確認することが、上記の点を留意した調査となるのであろう。

なお、14B区東側から14A区にかけては、谷地形となっており、谷は斜面北側上方からの土石流堆積で厚く充填されていた。その上面で、近世末から近代にかけての埋葬遺構が展開している様子が確認された。

## 第3章 縄文時代の遺構・遺物

### 第1節 縄文時代の遺構

#### 1. 概要

縄文時代の遺構は、Ⅱ層直下およびⅢ層中、あるいはⅣ層・Ⅴ層の直上で確認できた。検出された遺構には竪穴建物跡5棟、袋状土坑および大型土坑が15基以上、単独の土器埋設遺構2基、その他土坑・ピット多数がある。これらの遺構は縄文時代後期初頭に属するものが最も多く、一部中期末まで遡るものもある。

14B区北西端の緩斜面に堆積する黒色粘土層中からは、縄文時代中期後半の竪穴建物跡が3棟確認された(14B区1304SI・1305SI・1306SI)。いずれも内側で一辺50cm四方を測る石囲炉跡が見つかり、1304SIおよび1305SIの炉跡内には大型土器片が敷かれていた。支柱穴および堀方も、一部ではあるが辛うじて検出できている、このことからいずれも一辺5m程度の隅丸形状のプランであったと推定される。

14B区中央から東南端では、2棟の竪穴建物跡が見つかった。1263SIは、径4m程度の円形あるいは隅丸形状を呈する。柱穴跡は壁柱を中心に見つかり、中央には土器敷炉跡がある。竪穴建物跡の堀方南西端には、土器埋設遺構(埋甕)が1基確認された。この埋甕は後期初頭の深鉢が正位に埋設されたもので、口縁部側に蓋石が、底部には小穿孔が施されていた。1201SIは、径5m程度の円形または隅丸形状を呈する。この建物跡中央から北西寄りには、0.5×1mの範囲で長方形の石組があり、中央に土器敷炉跡があるとともに、南東端には入子状で立位に据えられた深鉢が、北西端には大きな台石が据えられてい

た。台石と入子状の深鉢を含め、石組全体で炉跡としての機能を有していたと考えられる。

袋状土坑および大型土坑は、14B区西側中央付近および16区内で集中して認められた。袋状土坑は植物質食料の貯蔵穴であったことが考えられ、14B区1208SKでは、埋土中に堅果類種実由来の炭化物粒がわずかに残存していた。14B区0036SKでは、土坑内に多量の後期初頭土器片および磨製石斧を包含しており、貯蔵穴としての利用後に廃棄あるいは埋納行為が行われたようである。16区でも北側中央の高位部分を中心に径1m以上を有する大型の土坑が10基ほど確認された。この場所にはⅣ層が厚く堆積しており、Ⅳ層直上での検出となった。大型の土坑内には台石などを含む大きな礫が多量に入れられており、16区154SK・266SK・310SKでは、掘り方に沿って板石などが入れられていた。これら礫の一部には被熱痕がみとめられる。16区121SKも、埋土内に板石などが多量に入れられていた土坑であるが、炭化種実(堅果類)も確認されたことから、貯蔵穴であったと考えられる。165SKと303SKは西側の低位部分で重複して見つかった大型土坑である。165SKは上層の浅い皿状堆積を呈する土坑で、溶結凝灰岩の石核が見つかったほか、中央の凹みに向かって大きな台石や被熱礫、土器底部などが出土した。303SKは、より大きな掘り方を有する下層の土坑で、土器のほか礫が多く出土した。

その他、単独の土器埋設遺構を2基検出した(14B区1078SK・1286SK)。いずれも立位



図 15 西地・東地遺跡縄文時代遺構位置図 (1:300)

埋設で、底部は未穿孔で残存していた。14B区1078SKは胴部下半のみが辛うじて残存しているものであるが、晩期前半に属する可能性がある。一方、口縁部まで残存している1286SKは後期後葉に属する。

## 2. 各遺構の詳細

以下、各遺構についてその種別ごとに報告する。

### 2-1. 竪穴建物跡

#### 14B区1304SI

調査区北西端で検出された竪穴建物跡である。Ⅲ層あるいはⅣ層中での検出となったため、初めに認識できたのは石囲炉跡であった。そのため、竪穴建物跡自体の掘り方は傾斜高位の北側のみになってしまう、結果、南側・西側の落ち込みを見つけることはできなかった。

竪穴建物跡の平面形状は隅丸方形プランであったと想定され、一辺5m程度と推定される。遺構内中央には石囲炉跡が、周囲には等間隔でピットが配されており、これが支柱穴になると思われる。ピットの径は30～45cm程度で、最大30cmほどの深さを確認できたものもある。

中央の炉跡は石囲炉跡である。検出時、東辺と南辺しか確認できず。北辺および西辺の炉石は何かの事情で抜き取られてしまった可能性がある。一辺50cm四方になるように、やや扁な礫を立てて囲われていた。石囲炉跡内には、大型土器片が入れられていた。土器自体には激しい二次焼成や細片化現象は認められない。このことから、炉の機能停止後に大型破片が入れられたものと考えられる。炉跡を包含する形で、掘り込み土坑が見つまっている(1320SK)。長軸3m・短軸2.1m・深さ20cmを測る。平面で見ても、検出された石

囲炉跡に比べて極めて大きい。このことから、炉跡は何度も作り替えられた可能性が考えられる。

時期は、縄文時代後期初頭に属するものである。

#### 14B区1305SI

調査区北西端付近で1304SIの南側で検出された竪穴建物跡である。Ⅲ層あるいはⅣ層中での検出となったため、これも初めに認識できたのは石囲炉跡であった。竪穴建物跡自体の掘り方として東側ラインを検出したものの、石囲炉跡との位置関係は不自然なものとなっている。もしかしたら、これはさらに後出する建物跡の掘り方ラインかも知れない。なお、このラインは1306SIの掘り方ラインに対して切る関係にある。

竪穴建物跡の平面形状は隅丸方形の可能性があり、一辺5m程度とは思われるが、不確かである。石囲炉跡の周囲にはピットが展開するものの、この炉跡に対応するのは、径60cm・深さ30cmを測る1310SPを支柱穴とするものであろう。

中央の炉跡は、70×60cmの大きさに方形に組まれていた。扁平礫および板状礫を立てて組んでいる。南側の一部の炉石は確認することができなかった。炉内には大型土器片が5個体以上入れられていた。これも炉の機能停止後に入れられたものと考えられる。炉跡を包含するように、径1m程度の掘り込み土坑が存在していたと考えられるが、西側では植生痕の作用が激しく、掘り方を検出することが難しかった。

時期は、縄文時代中期最終末から後期最初頭にかけてと考えられる。

#### 14B区1306SI

調査区北西端付近で1304SIの南側で検出された竪穴建物跡である。これもⅢ層あるいはⅣ層中

〈本文25頁へ続く〉

# 1304SI

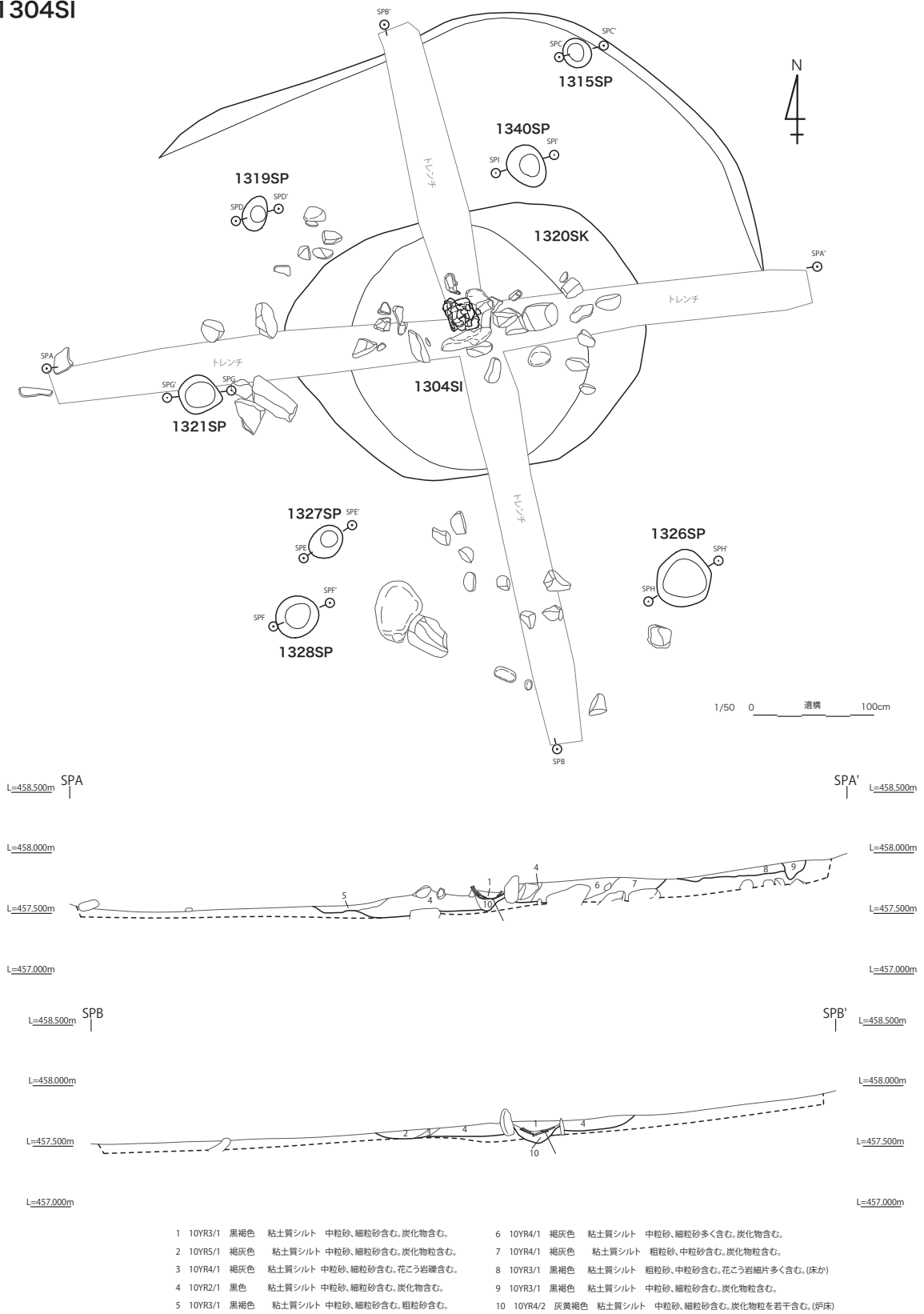
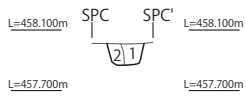


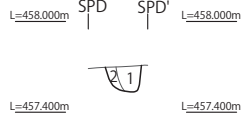
図 16 14B 区 1304SI 1 (1:50)

### 1315SP



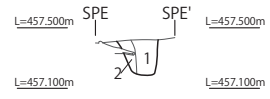
- 1 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂含む。炭化物若干含む。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 花こう岩細片多く含む。中粒砂、細粒砂含む。

### 1319SP



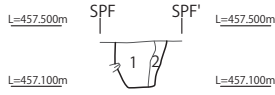
- 1 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂、細粒砂含む。炭化物若干含む。
- 2 10YR2/1 黒色 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂、細粒砂含む。

### 1327SP



- 1 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 細粒砂含む。炭化物含む。
- 2 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂含む。

### 1328SP



- 1 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 極粗粒砂、粗粒砂含む。炭化物含む。
- 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂含む。花こう岩片含む。

1/50 0 遺構 100cm

### 1321SP



L=457.000m L=457.000m

### 1326SP

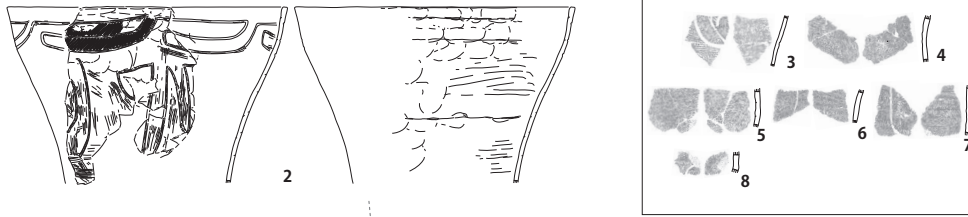


L=457.000m

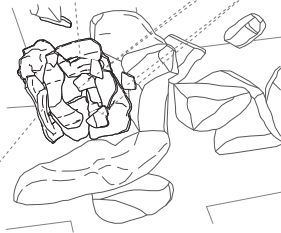
### 1340SP



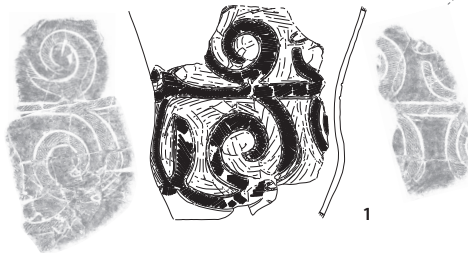
L=457.000m L=457.000m L=457.000m L=457.000m L=457.000m L=457.000m



取上げ  
1回目



2回目



1/12 0 40cm 土器

1/20 0 50cm 炉跡

図 17 14B区 1304SI 2 (ピット 1:50、炉跡 1:20)

# 1305SI

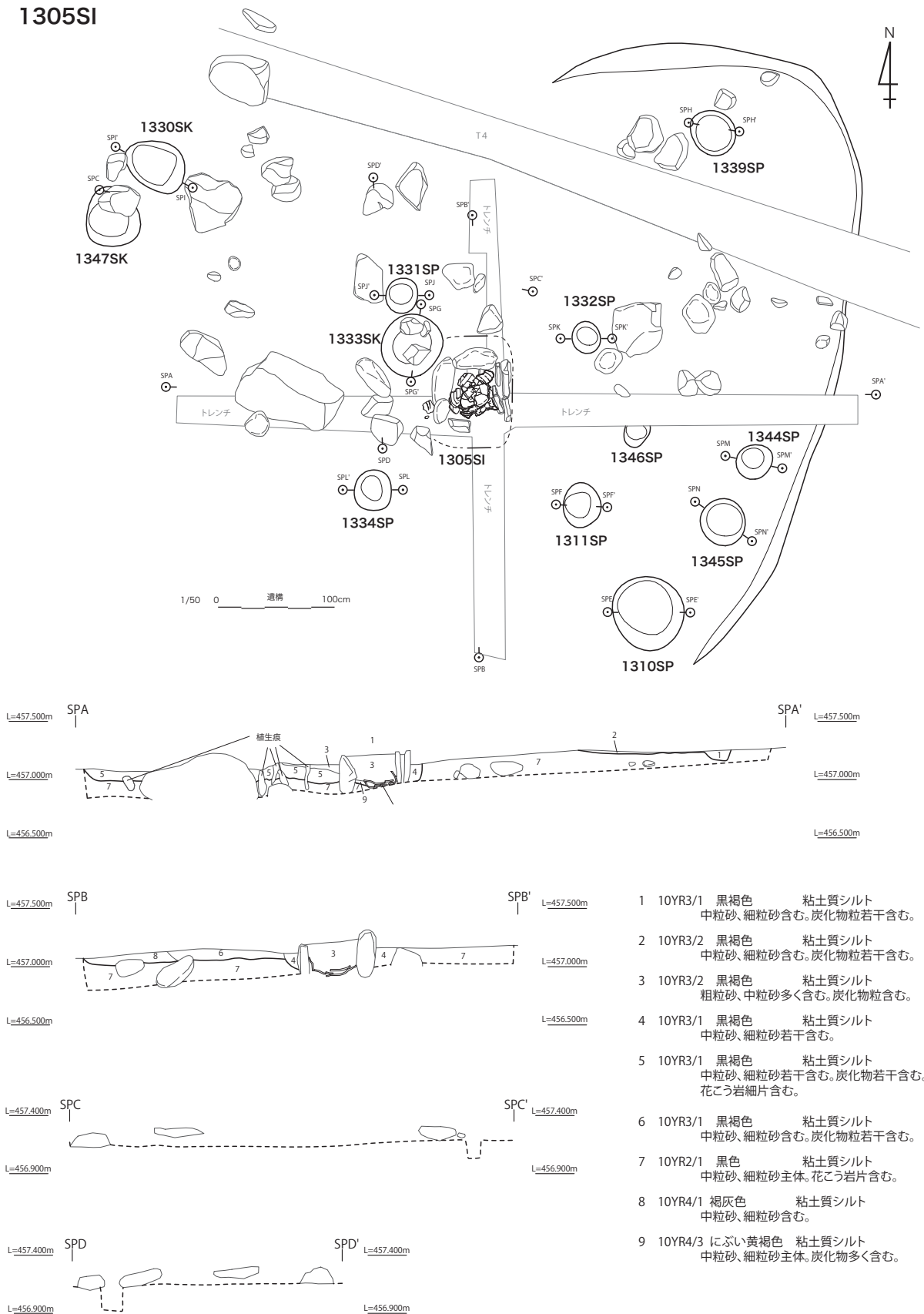


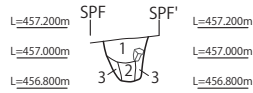
図 18 14B区 1305SI 1 (1:50)

### 1310SP



- 1 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト  
中粒砂、細粒砂含む。炭化物含む。
- 2 10YR4/1 褐灰色 砂質シルト  
中粒砂、細粒砂含む。炭化物含む。
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト  
中粒砂、細粒砂含む。炭化物含む。
- 4 10YR5/2 灰黄褐色 砂質シルト  
中粒砂、細粒砂含む。極粗粒砂若干含む。
- 5 10YR4/1 褐灰色 砂質シルト  
中粒砂、細粒砂含む。炭化物含む。

### 1311SP



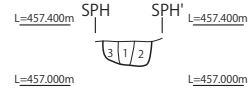
- 1 10YR4/2 黒褐色 粘土質シルト  
中粒砂、粗粒砂含む。炭化物含む。
- 2 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト  
中粒砂、細粒砂含む。径5cm程の礫含む。
- 3 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト  
中粒砂、粗粒砂含む。炭化物含む。

### 1333SK



- 1 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト  
中粒砂、細粒砂含む。
- 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト  
中粒砂、細粒砂含む。

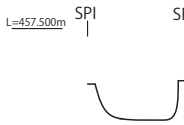
### 1339SP



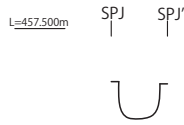
- 1 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト  
中粒砂、細粒砂含む。炭化物含む。
- 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト  
粗粒砂、中粒砂、細粒砂含む。炭化物含む。
- 3 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト  
粗粒砂含む。炭化物含む。

1/50 0 通標 100cm

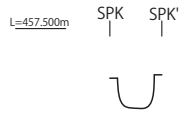
### 1330SK



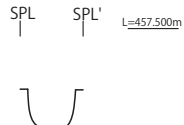
### 1331SP



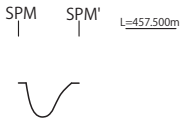
### 1332SP



### 1334SP



### 1344SP



### 1345SP

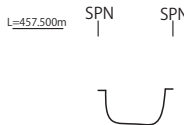


図 19 14B区 1305SI 2 (1:50)

での検出となったため、これも初めに認識できたのは石囲炉跡であった。建物跡の掘り方ラインを検出しているが、1305SIの掘り方ラインに対して切られる関係にある。

竪穴建物跡の平面形状は隅丸方形プランであったと想定され、一辺5m程度と推定される。遺構内中央には石囲炉跡があり、周囲にはピットが検出されているが、北東側でまばらに検出されたに過ぎず、明確な支柱穴を確認するには至っていない。1335SP・1341SP・1338SPなどが壁柱列になるのかもしれない。

中央の炉跡は石囲炉跡である。一辺60cm四方になるように、やや扁な礫を立てて囲われていた。この石囲炉跡内には、大型土器片は見つからない。炉跡の埋土には、炭化物粒は包含されるものの、焼土塊などを見ることはできなかった。

炉跡を包含する形で、掘り込み土坑が見つまっている(1349SK)。長軸2m・短軸1.2m・深さ20cmを測る。この土坑に対して、石囲炉跡は中央から北西側に寄っており、かつ大きい。このことから、炉跡は何度も作り替えられている可能性が考えられる。なお、この土坑の埋土内、石囲炉跡の外東側から、炭化材の塊が見つまっている。

時期は、縄文時代中期末～後期初頭に属する可能性が高い。

### 14B区 1201SI

1201SIは、14B区中央から東南端で見つかった竪穴建物跡のうちの1棟である。1201SIは、V層にほど近いIV層中で見つかっており、最初に認識できたものは、土器埋設のある炉跡であった。この場所は、後世の平坦面形成のため、南側の削平が著しく、包含層や遺構の残存は、斜面上方(北

〈本文 29 頁へ続く〉

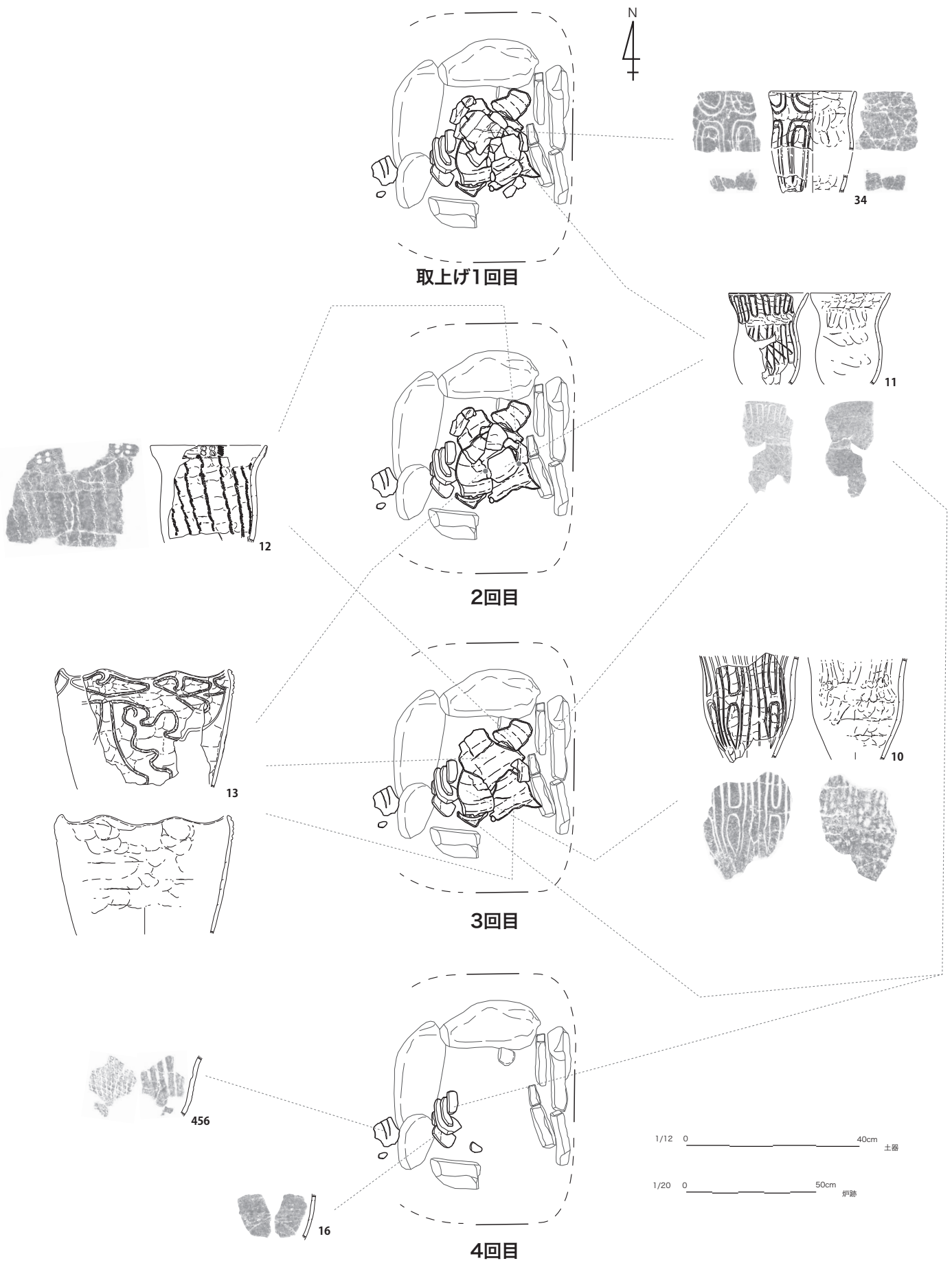
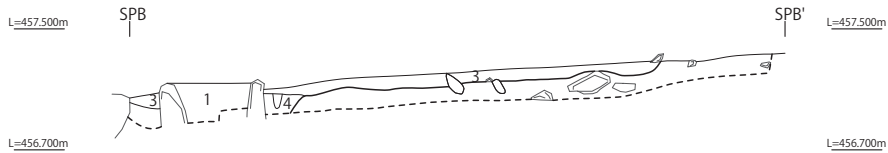
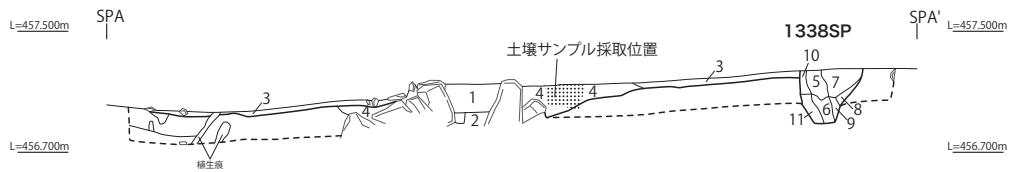
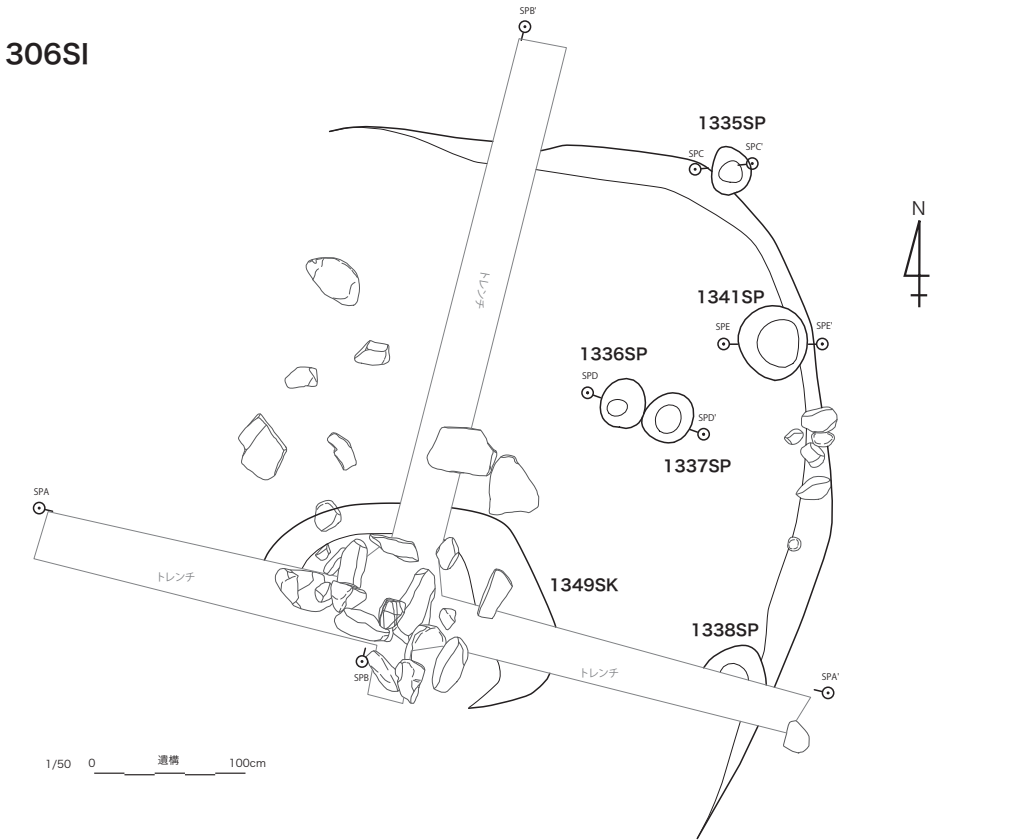


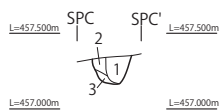
図 20 14B区 1305SI 3 (1:20)

# 1306SI



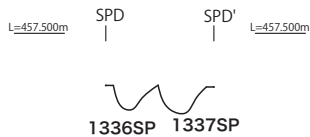
- |   |         |      |        |                       |    |         |      |        |                             |
|---|---------|------|--------|-----------------------|----|---------|------|--------|-----------------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色  | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂多く含む。炭化物含む。    | 6  | 10YR3/1 | 黒褐色  | 粘土質シルト | 極粗粒砂、粗粒砂、中粒砂含む。炭化物粒含む。      |
| 2 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂含む。上層で炭化物粒含む。  | 7  | 10YR4/1 | 褐灰色  | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物含む。            |
| 3 | 10YR3/1 | 黒褐色  | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂主体。炭化物含む。      | 8  | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 細粒砂含む。                      |
| 4 | 10YR3/1 | 黒褐色  | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂含む。炭化礫片を所々に含む。 | 9  | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 細粒砂含む。10YR7/6明黄褐色シルトを斑状に含む。 |
| 5 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂含む。炭化物粒含む。     | 10 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物若干含む。          |
|   |         |      |        |                       | 11 | 10YR4/1 | 褐灰色  | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物若干含む。          |

## 1335SP



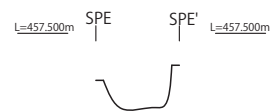
- |   |         |      |        |                     |
|---|---------|------|--------|---------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐色  | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂含む。炭化物粒多く含む。 |
| 2 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂含む。          |
| 3 | 10YR2/1 | 黒色   | 粘土     | 中粒砂、細粒砂含む。花こう岩細片含む。 |

## 1336SP・1337SP



- |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|

## 1341SP



- |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|

図 21 14B 区 1306SI ( 1 : 50 )

1201SI

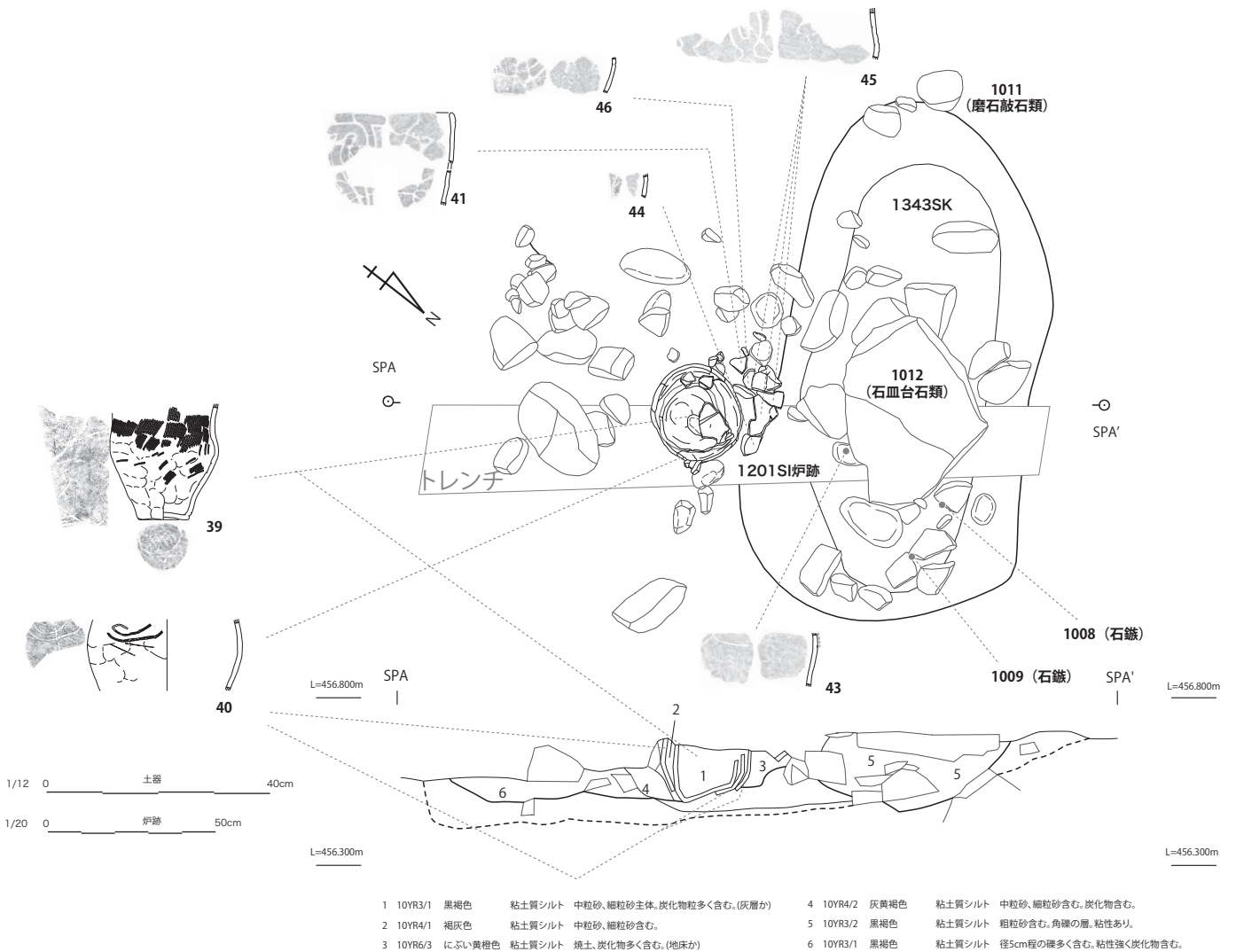
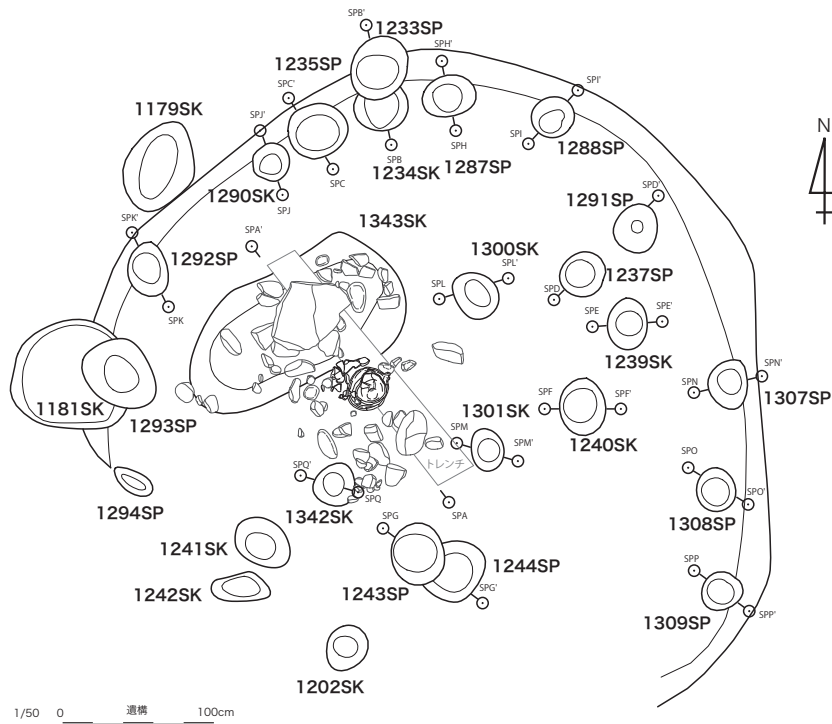


図22 14B区 1201SI 1 (全体 1:50、炉跡 1:20)

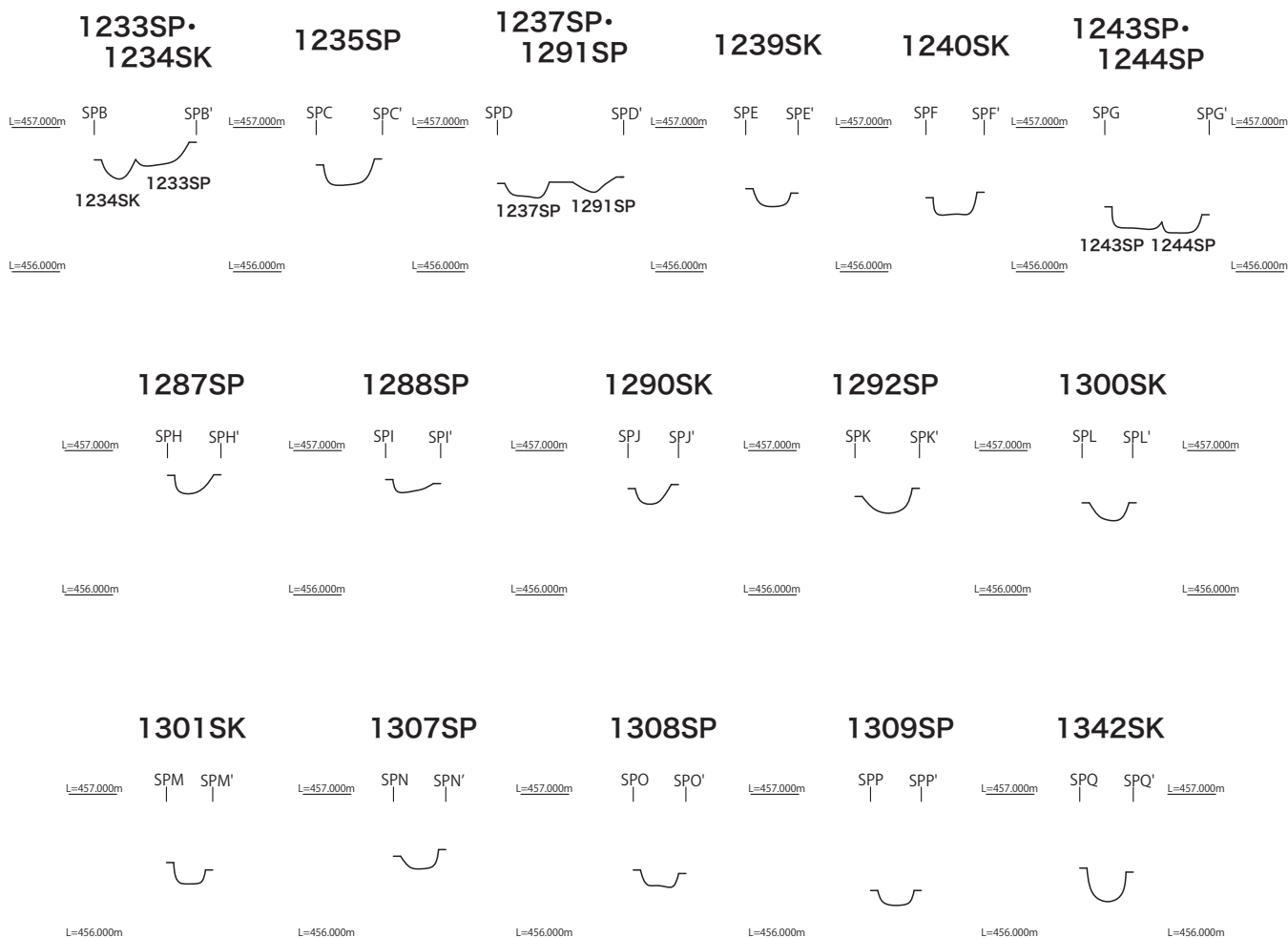


図 23 14B 区 1201SI 2 ( 1 : 50 )

1/50 0 100cm 通構

側)であった。

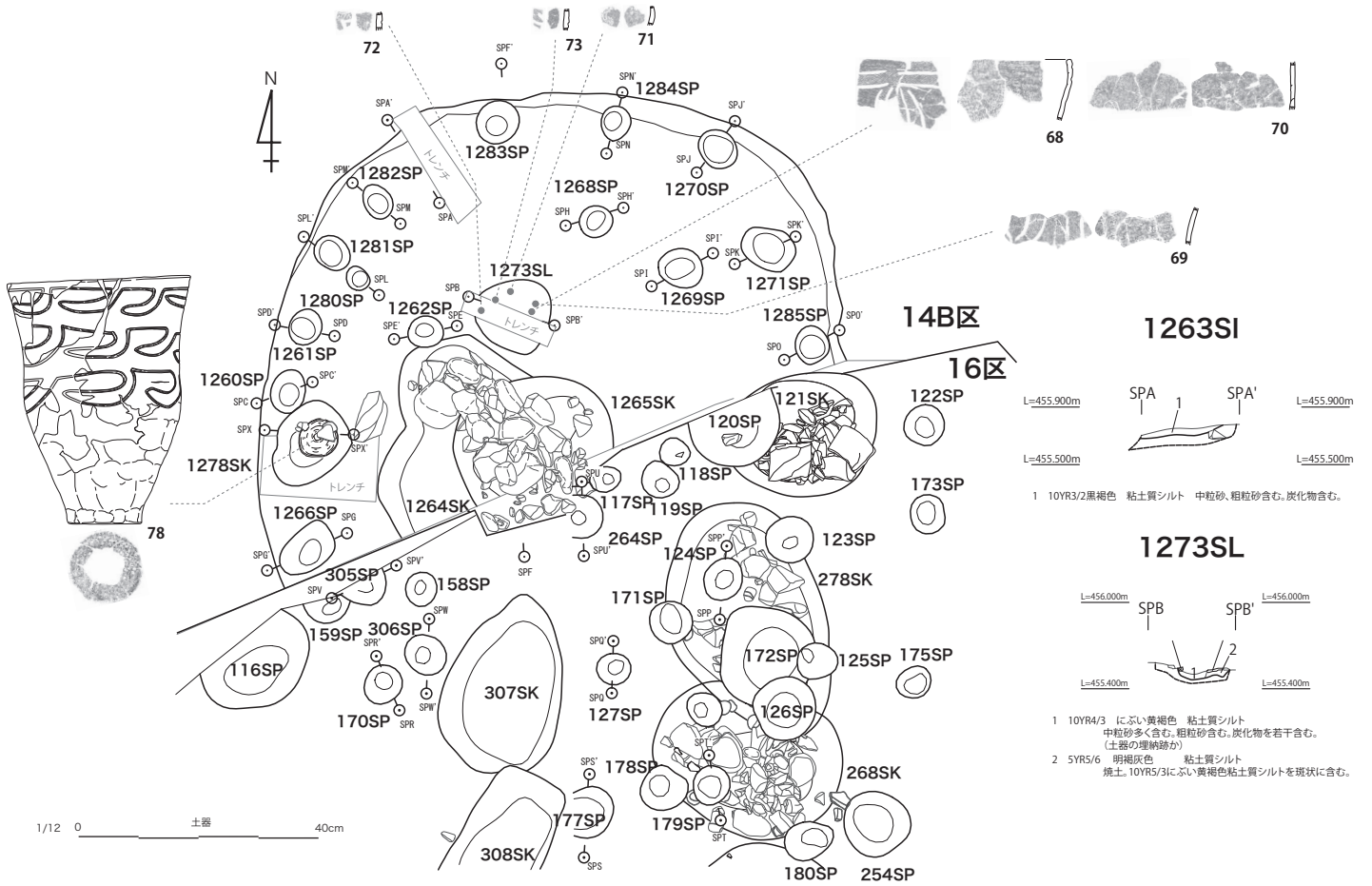
竪穴建物跡の平面プランは径 4.5m 程度の円形または隅丸方形状である。建物跡中央から西寄りには、炉跡と思われる 0.5 × 1m の範囲で長方形の石の配列があった。ピットは掘り方端に沿って小ピットが巡るもので、これが壁柱列となると思われる。竪穴内のピットも同様に小型でまばらに存在しており、支柱穴と考えられるものを検出することはできなかった。

炉跡と思われる礫の配列は、礫長径 20cm 程度を主体とした 15 ~ 30cm 程度の礫で囲い、隙間に 10cm 程度の礫が埋められている構造である。この中央では入子状で立位に据えられた深鉢が見つかった。土器は二個体で構成されている。最

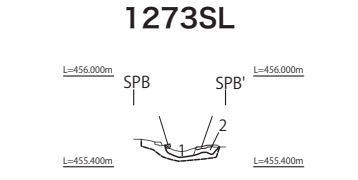
大径 28cm の深鉢胴部を輪切りして正位で埋設された上に、最大径 19cm の小型の深鉢が斜位に埋設されていた。土器埋土内には、粘性の強い黒色土が充填していた。その脇北東側には二次焼成の著しい細片化した複数個体の土器片が花弁状に配されており、土器敷炉跡の様相を呈する。南東端にはかつ北西端には大きな台石が据えられていた。台石と入子状の深鉢を含め、石組全体で炉跡としての機能を有していたと考えられる。大きな台石の下からは、1.5 × 0.8m を測る土坑 1343SK が検出された。土坑内には、長径 10 ~ 20cm の礫が充填されている。1343SK と 1201SI の炉跡との関係は不明瞭なところがあるが、1201SI の炉跡ととして最終的に礫が配され

〈本文 32 頁へ続く〉

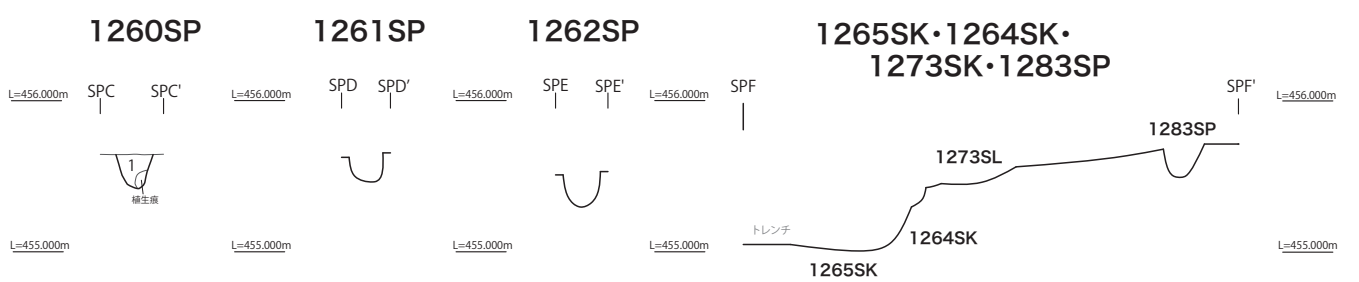
# 1263SI



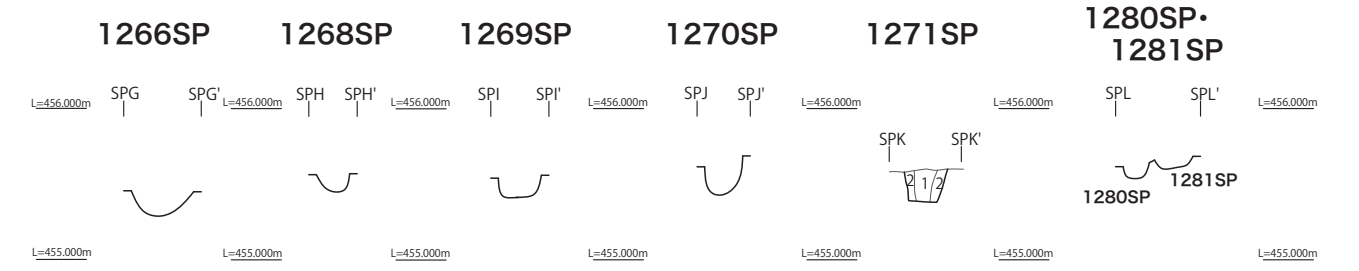
1 10YR3/2黒褐色 粘土質シルト 中粒砂、粗粒砂含む。炭化物含む。



1 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 中粒砂多く含む。粗粒砂含む。炭化物を若干含む。(土器の埋納跡か)  
2 5YR5/6 明褐色 粘土質シルト 焼土。10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。



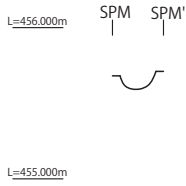
1 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 10YR4/1相灰粘土質シルトを斑状に含む。粗粒砂、中粒砂含む。



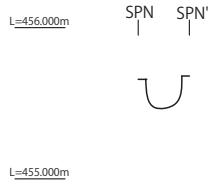
1 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。花こう岩細片を若干含む。炭化物を含む。  
2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物含む。

図 24 14B区 1263SI 1 ( 1 : 50 )

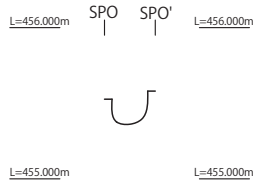
### 1282SP



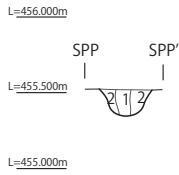
### 1284SP



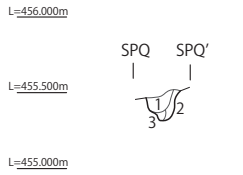
### 1285SP



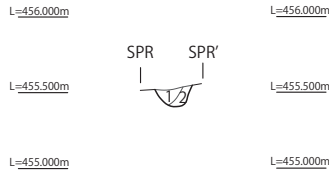
### 124SP



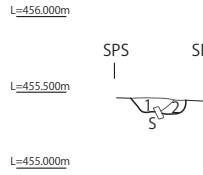
### 127SP



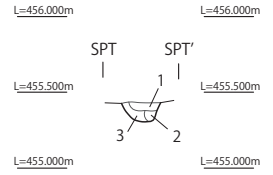
### 170SP



### 177SP



### 179SP



- 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR3/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト

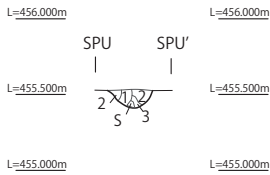
- 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR3/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR2/2 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト

- 10YR3/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR2/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト

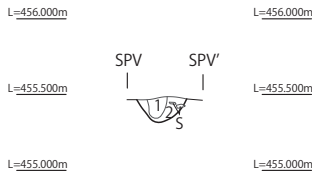
- 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR3/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト

- 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR3/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR2/2 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト

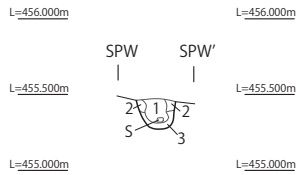
### 264SP



### 305SP



### 306SP



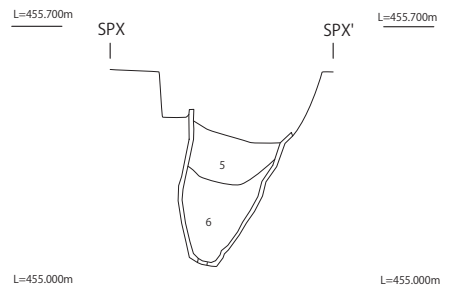
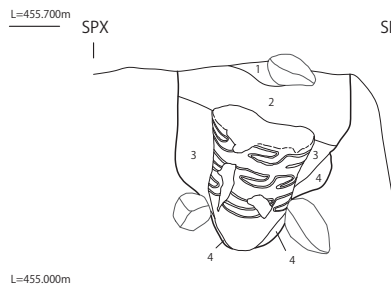
- 10YR3/1 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR3/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR3/3 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト

- 10YR3/2 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト 細線の角縁を少量含む
- 10YR4/2 灰黄褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト 粘質強

- 10YR3/2 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト 細線の角縁を少量含む
- 10YR2/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR4/2 灰黄褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト 粘質強

1/50 0 遺構 100cm

### 1278SK



- 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂含む。極粗粒砂含む。炭化物含む。
- 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。極粗粒砂、粗粒砂、炭化物含む。
- 10YR2/1 黒色 粘土質シルト 極粗粒砂、粗粒砂、中粒砂含む。花崗岩細片含む。炭化物含む。

- 10YR5/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物含む。
- 10YR5/2 灰黄褐色 粘土質シルト 中粒砂、粗粒砂多く含む。極粗粒砂含む。炭化物含む。
- 10YR3/2 黒色 粘土質シルト 中粒砂、粗粒砂多く含む。極粗粒砂含む。炭化物含む。

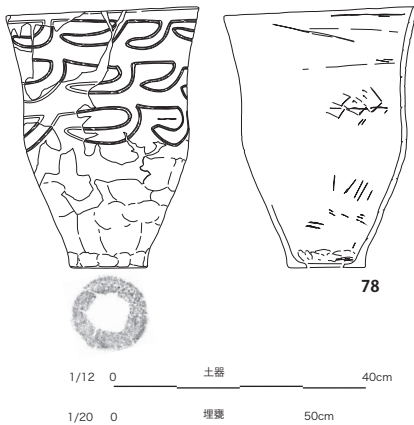


図 25 14B区 1263SI 2 (ピット 1:50、1278SK 埋壙 1:20)

る時点よりは、1343SKの形成は前と思われる。  
時期は、縄文時代後期初頭に属するものである。

#### 14B区 1263SI

1263SIは、1201SIの南側、14B区中央南端で見つかった竪穴建物跡である。1263SIは、Ⅲ層下・Ⅳ層上層で見つかった。最初に認識できたものは、焼土を多量に含む炉跡1273SLであった。この竪穴建物跡は14B区と16区にまたがって存在している。16区側では、後述するように礫などが充填された大型土坑が存在していたことと、地形の急激な傾斜のため1263SIの掘り方の存在レベル自体がⅢ層中に相当していたため、14B区と同一レベルで検出を行うことができなかった。

竪穴建物跡掘の平面プランは径4m程度の隅丸形状である。建物跡中央から西寄りには、炉跡と思われる0.6×0.5mの範囲で浅い落ち込みがあった(1273SL)。この炉跡埋土内には、散在的ではあるが細片化した土器片がまとまって出土しており、土器敷炉跡であった可能性が高い。ピットは掘り方端に沿って小ピットが巡るもので、これが壁柱列となると思われる。竪穴内のピットも同様に小型でまばらに存在しており、主柱穴と考えられるものを検出することはできなかった。このピット列のようなものは、16区でも続いていることは確認できた(16区124SP・127SP・170SP・177SP・179SP・264SP・305SP・306SPなど)。しかし、検出レベルおよび底面レベルともに50cmほど異なることから、これらは1263SIに直接関連するピットとすることはできない。

炉跡脇には、礫を多量に包含した、土坑1265SKが確認されている。これは1263SIの形成後の所産であると思われる。

1263SIの西端で見つかった土坑1278SKは、床面で検出された遺構である。埋土上部には大きな礫を検出するもので、その下には深鉢が立位状態で出土した。土器は完形で、底部下に小穿孔が施されている。また、立位状態の深鉢は垂直に出土した訳ではなく、東側(竪穴中央方向)にやや傾く形となっている。1263SIに伴う埋甕であると考えられる。

1263SIの帰属時期は、縄文時代後期初頭に属するものである。

## 2-2. 袋状土坑および大型土坑

### 14B区 0036SK

本遺構は、調査区北側中央に位置している。ここは、後世に宅地および耕地造成のための平坦面形成によって、大きく掘削された場所に当たる。そのため、検出当初から半截された状態となっていた。

しまりの強い黄褐色粘土質シルトを掘り込む形で現存で、長軸1.1×短軸0.6×深さ0.5mを測る。断面形状は、著しい袋状を呈し、貯蔵穴であったと考えられる。土坑内からは、多量の土器片および磨製石斧などの石器が出土した。遺物が集中して出土した層は土坑中央の層で、層序関係からみると最後に堆積した層である(図26での1層)。土坑両側にはそれ以前の層(2層・3層)があり、それを切る形でこの層は存在している。1層は、貯蔵されていたもの掘り出すために掘削された部分に、土器・石器などを廃棄あるいは埋納行為が行われた結果、形成されたと考えられる。また、同様の層序関係を示すものに、レベル下で確認された4層・5層がある。5層が最も先行して堆積していた層で、土坑中央で5層を切る形で4層が認められる。これらは1～3層の形成段階よ

り先行して行われた、貯蔵と掘り返しの痕跡と考えられる。

時期は、縄文時代後期初頭に属する。

#### 14B区 1208SK

本遺構は、0036SKに近接した東脇にある土坑である。当地点は、調査前の住宅設備設置のため、検出面から1mほど掘り返しされていた。この遺構は、その攪乱でできた掘り込み南東端の壁から底面にかけて検出された。

しまりの強い黄褐色粘土質シルトを掘り込み、現存で、長軸1.5×短軸1.3×深さ0.9mを測る。断面形状は、土層断面の一方のみ著しい袋状を呈するもので、これも貯蔵穴と考えられる。0036SK同様に、貯蔵の層と掘り返し後の堆積層との関係が認められる。図26の土層断面で見ると、12層・14層（最も先行する段階の貯蔵による層）→4層～11層・13層（次の段階の貯蔵による層と掘り返しののちの堆積層）→1～3層（最終段階の貯蔵による層と掘り返しののちの堆積層）と整理できるか。この以降からは土器・石器の出土は認められなかったが、各層からは炭化物を多く確認することができた。なお、1層中からは堅果類種実由来の炭化物粒がわずかに出土した。

遺物による時期比定はできないものの、遺構の位置や状況から、縄文時代後期初頭に属すると推定される。

#### 14B区 1160SK・1224SK

本遺構は、1208SKより東側へ5mほどの位置で検出された。しまりの強い黄褐色粘土質シルトを掘り込み、現存で、径1.9・深さ0.4mを測る。

当初、図26の土層断面の2層を1160SK、3～6層を1224SKとして調査を行ったが、結果、両者は同一遺構内の埋土であるとの考えに至っ

た。断面形状を見ると一方のみであるが著しい袋状を呈しており、これも貯蔵穴であった可能性が考えられる。埋土には径10cm程度の角礫が多く含まれていた。埋土には炭化物が含まれるが、特に4層には多くの炭化物が含まれていた。

本遺構も遺物による時期比定はできないものの、遺構の位置や状況から、縄文時代後期初頭に属するものと推定される。

#### 14B区 0066SK

本遺構は、14B区東側中央付近で検出された遺構であり、後世によって削平された低位の平坦面側に位置する。ここは、しまりの強い黄褐色粘土質シルトが確認できる西端に当たり、さらに西側に向かうと、粗粒砂・極粗粒砂と巨礫（円礫）が展開する河床景観区域へとつながる。

現存で、長軸1.4×短軸1.1×深さ0.1mを測る。断面形状は極めて浅い皿状を呈するが、底面は不安定である。埋土内には径10cm程度の小ぶりの垂角礫が多量に包含されていた。著しい被熱痕跡は確認されなかった。

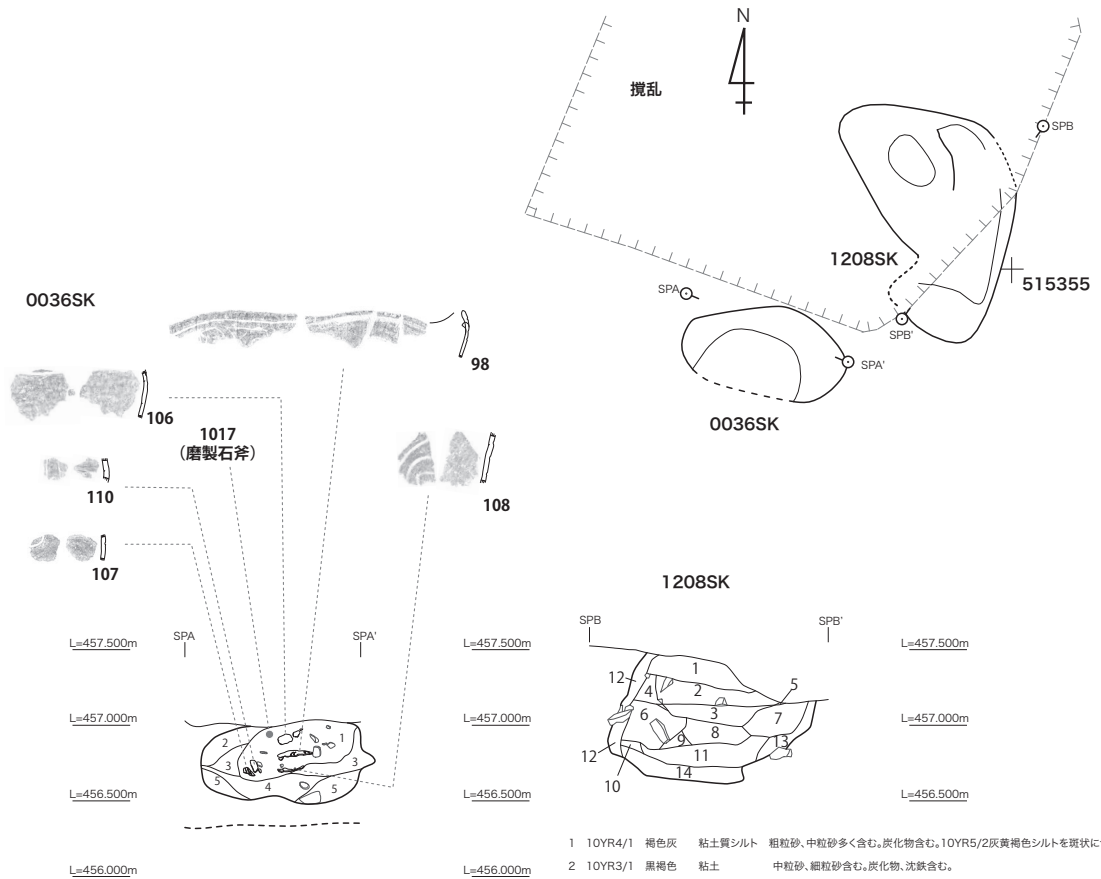
本遺構は遺物による時期比定はできず、時期不詳とせざるを得ない。但し、16区で集中して見つかった後期初頭の集石土坑群とは検出地点が異なること、礫径や礫の形状が異なること、地山付近での検出であることを勘案すると、早期などより古相の遺構である可能性が高いのではないかと推測される。

#### 14B区 1011SK

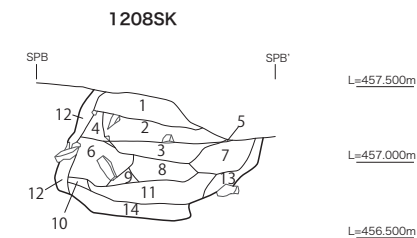
本遺構は14B区中央付近、1201SIの南側で検出された遺構である。1201SIは上部緩斜面で検出されたのに対して、1011SKは、削平によって形成された低位の平坦面で見つかった。

現存で、長軸1.5×短軸0.7×深さ0.2mを測る。平面プラン長楕円形を呈する土坑で、北西側

0036SK・1208SK

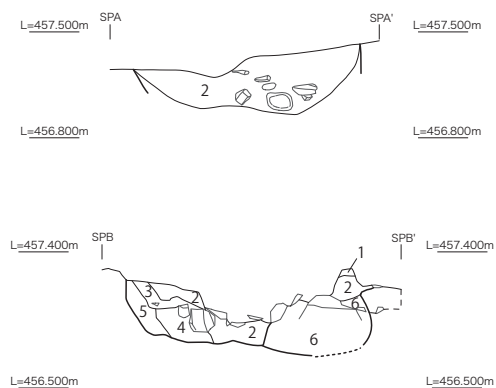
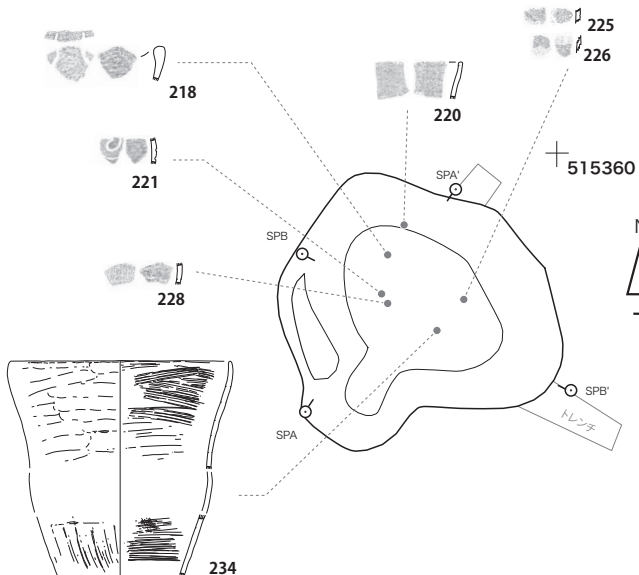


- 1 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂含む。径10cm程の礫含む。縄文土器を多量に含む。炭化物含む。
- 2 10YR7/2 灰黄褐色 砂質シルト 中粒砂、細粒砂含む。炭化物少量含む。
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 中粒砂、細粒砂主体。極粗粒砂少量含む。炭化物・焼土含む。
- 4 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト 中粒砂、細粒砂主体。径5cm程の礫含む。焼土・炭化物含む。
- 5 10YR5/2 灰黄褐色 砂質シルト 中粒砂、細粒砂主体。炭化物を多く含む。



- 1 10YR4/1 褐色灰 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂多く含む。炭化物含む。10YR5/2灰黄褐色シルトを斑状に含む。
- 2 10YR3/1 黒褐色 粘土 中粒砂、細粒砂含む。炭化物、沈鉄含む。
- 3 10YR2/1 黒色 粘土 中粒砂、細粒砂含む。炭化物、沈鉄含む。径5cm程の花こう岩若干含む。
- 4 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂含む。細礫少量含む。
- 5 10YR3/1 黒褐色 粘土 中粒砂、細粒砂含む。炭化物、沈鉄含む。
- 6 10YR3/2 黒褐色 粘土 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物含む。径10cm程の礫を含む。
- 7 10YR3/1 黒褐色 粘土 中粒砂、細粒砂含む。炭化物含む。径5cm程の片麻岩若干含む。
- 8 10YR4/1 褐色灰 粘土 中粒砂、細粒砂若干含む。炭化物、沈鉄含む。
- 9 10YR3/1 黒褐色 粘土 中粒砂、細粒砂含む。炭化物含む。
- 10 10YR4/1 褐色灰 粘土 中粒砂、細粒砂含む。極粗粒砂若干含む。炭化物含む。
- 11 10YR2/2 黒褐色 粘土 中粒砂、細粒砂含む。炭化物、沈鉄含む。
- 12 10YR5/1 褐灰色 粘土質シルト 極粗粒砂、中粒砂、細粒砂含む。径5cm程の片麻岩を多く含む。
- 13 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。炭化物、沈鉄含む。
- 14 10YR2/1 黒色 粘土 中粒砂、細粒砂多く含む。炭化物含む。

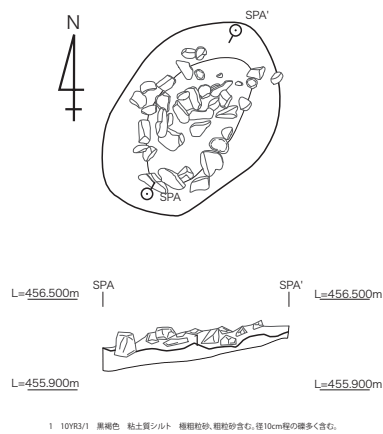
1160SK・1224SK



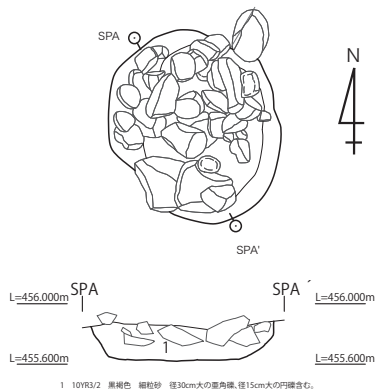
- 1 10YR5/2 灰黄褐色 粘土質シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトを斑状に含む。炭化物含む。(1223SK埋土)
- 2 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 極粗粒砂、粗粒砂含む。径20cm程の礫含む。炭化物含む。
- 3 10YR6/2 灰黄褐色 粘土質シルト 焼土、炭化物含む。粗粒砂、中粒砂含む。径5cm程の礫含む。
- 4 7.5YR5/4 にぶい褐色 粘土質シルト 焼土、炭化物多く含む。極粗粒砂、粗粒砂含む。
- 5 10YR6/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 焼土、炭化物含む。極粗粒砂、粗粒砂含む。
- 6 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 極粗粒砂、粗粒砂含む。炭化物含む。

図 26 14B 区 0036SK・1160SK・1208SK・1224SK ( 1 : 50 )

## 0066SK



## 0184SK



## 1011SK

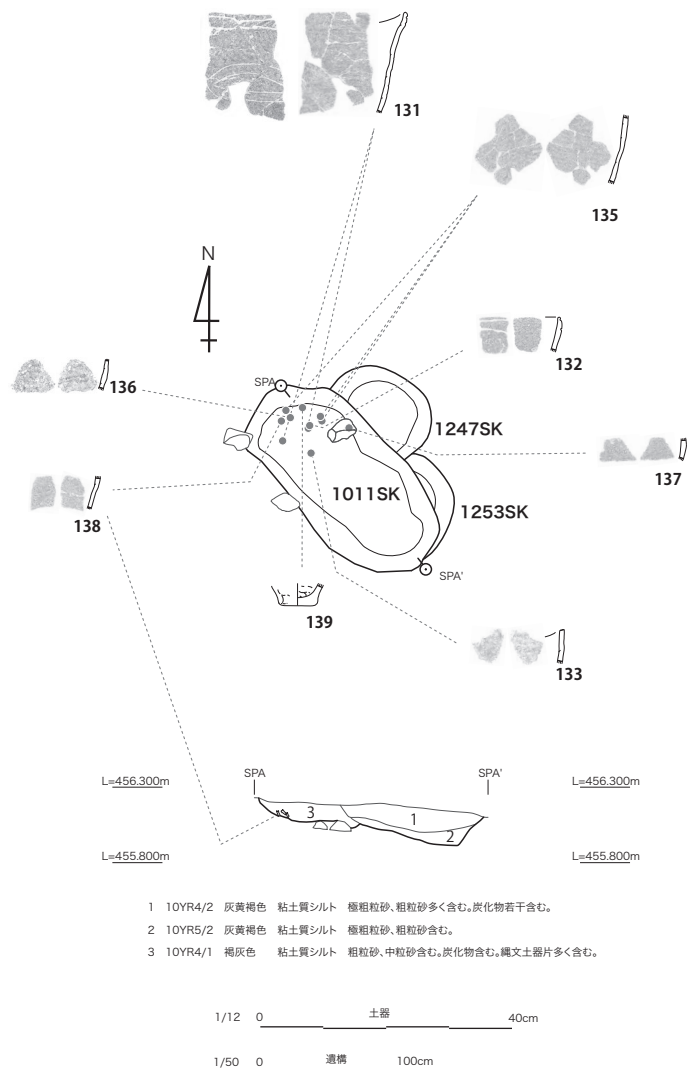


図 27 14B 区 0066SK・0184SK・1011SK ( 1 : 50 )

で土器片がまとまって出土した。

周辺には 1247SK・1253SK など重複関係のある土坑のほか、1012SK・1142SK・1250SK・1251SK など、同程度の法量や形状の類似した土坑がまとまって見つかっている。平坦面形成のために削平が著しく、詳細な性格は不詳ではあるものの、形状・法量から、土坑墓など埋葬遺構が展開する場所であったかもしれない。

### 14B 区 0184SK

14B 区調査区南端で検出された遺構である。検出時の法量は、長軸 1.3×短軸 1.1×深さ 0.25m を測る。断面形状は浅いながらも箱堀り状の形態

を呈しており、削平のために遺構底面側のみが残存したものと考えられる。埋土には、径 30cm ほどの垂角礫および径 10cm ほどの円礫と、多数の礫が含まれていた。この遺構内からは、縄文土器が多量に出土していた。

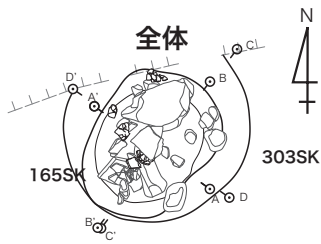
出土土器から本遺構は、縄文時代後期初頭に属する。

### 14B 区 1216SK

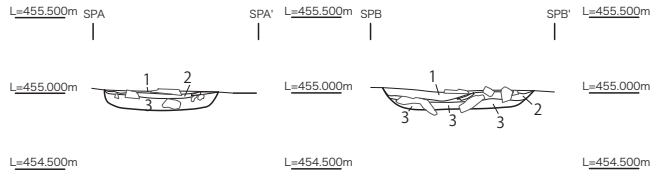
この遺構は、後述する 14B 区 1286SK を切る形で確認されている。検出時の法量は、長軸 1.1×短軸 0.7×深さ 0.2m を測る。断面形状は浅い皿状を呈するが、部分的に深く落ち込んでいると

〈本文 40 頁へ続く〉

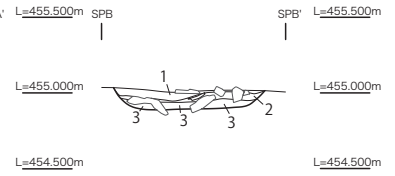
165SK



土層断面A



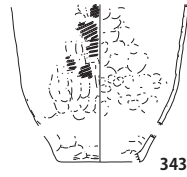
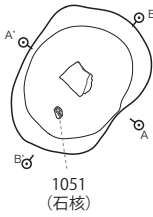
土層断面B



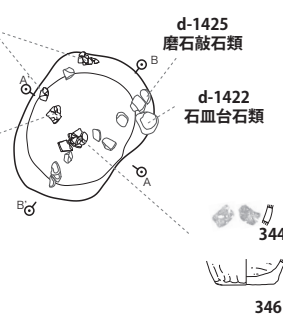
- 1. 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 2. 10YR3/2 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト 炭化物若干含む
- 3. 7.5YR3/2 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト

5回目

取上げ1回目



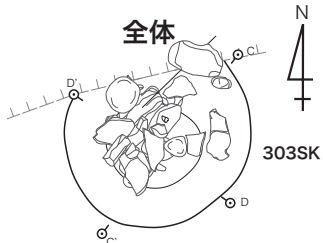
2回目



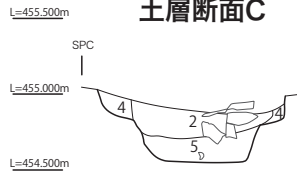
3回目



303SK



土層断面C

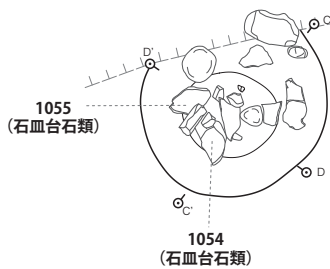


土層断面D



- 1. 10YR2/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト 粘質強
- 2. 10YR3/2 黒褐色 粗粒砂混じり 粘土質シルト 細礫を若干含む 炭化物粒含む
- 3. 10YR2/1 黒色 中粒砂混じり 粘土質シルト
- 4. 10YR2/3 極暗褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 5. 10YR3/4 暗褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト 中礫を若干含む

取上げ1回目



2回目

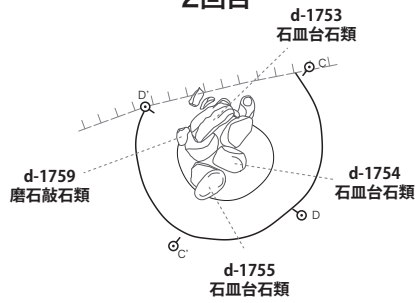
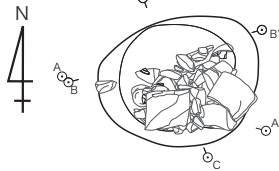


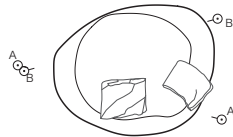
図 28 16 区 165SK・303SK ( 1 : 50 )

### 121SK

全体



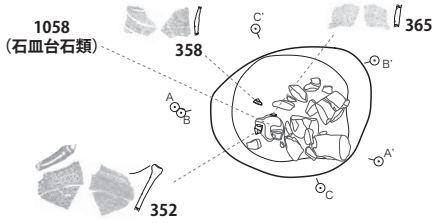
取上げ1回目



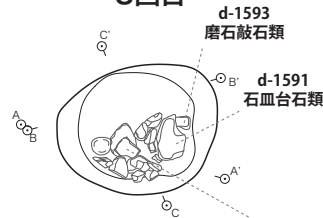
121SK\_A



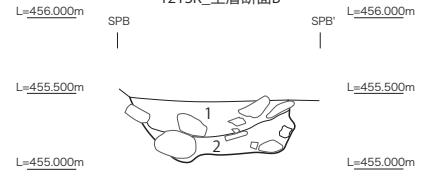
2回目



3回目

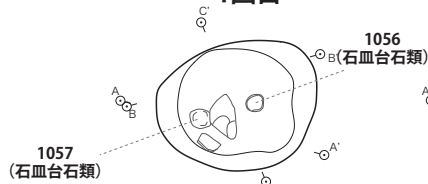


121SK\_土層断面B

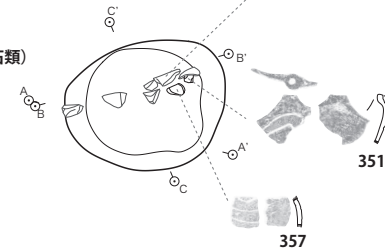


- 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト  
種実などの炭化物を含む 大礫の角礫を含む
- 10YR3/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト 大礫の角礫を含む

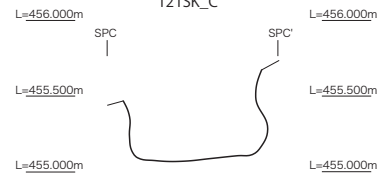
4回目



5回目

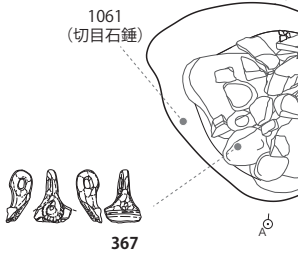


121SK\_C

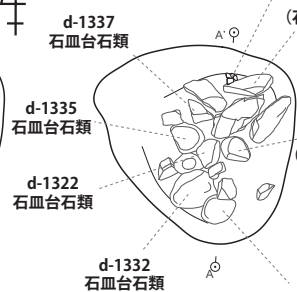


### 154SK

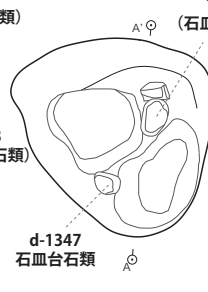
全体



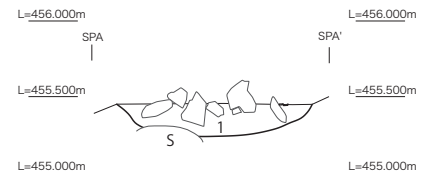
取上げ1回目



2回目



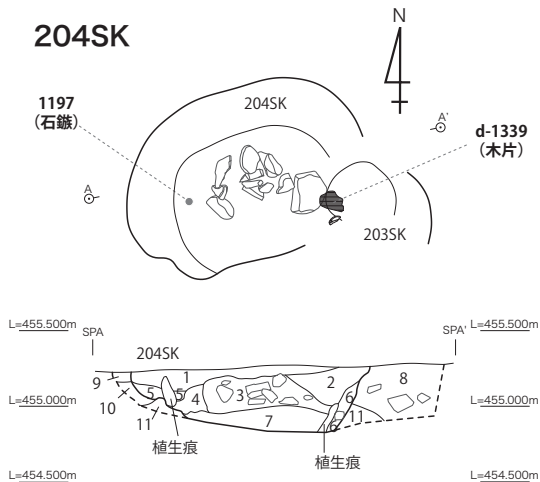
154SK土層断面



- 10YR3/1 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト

### 204SK

1197 (石鏝)



d-1339 (木片)

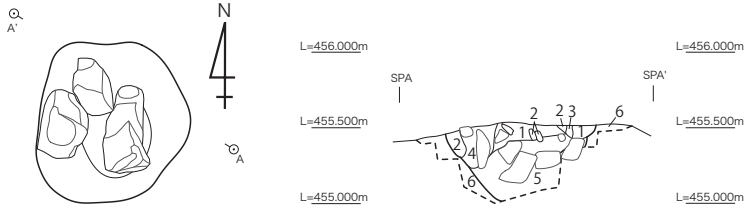
- 10YR3/1 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR2/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト 中礫を少し含む
- 10YR2/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト (粘質強) 大礫を多く含む
- 10YR3/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト (粘質強) 大礫を多く含む
- 10YR4/2 灰黄褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR3/3 暗褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR3/4 暗褐色 粗粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR4/4 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト
- 10YR6/6 明黄褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト (地山)

1/12 0 土器 40cm

1/50 0 遺構 100cm

図 29 16区 121SK・154SK・204SK ( 1 : 50 )

### 241SK

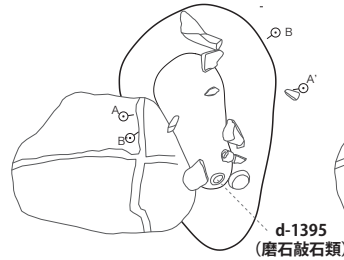


- |                 |        |        |       |
|-----------------|--------|--------|-------|
| 1. 10YR3/1 黒褐色  | 中粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘質強   |
| 2. 10YR2/3 黒褐色  | 細粒砂混じり | 粘土質シルト |       |
| 3. 10YR2/1 黒色   | 中粒砂混じり | 粘土質シルト |       |
| 4. 10YR2/1 黒色   | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘質強   |
| 5. 10YR4/2 灰黄褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 細礫を含む |
| 6. 10YR2/2 黒褐色  | 中粒砂混じり | 粘土質シルト | 細礫を含む |

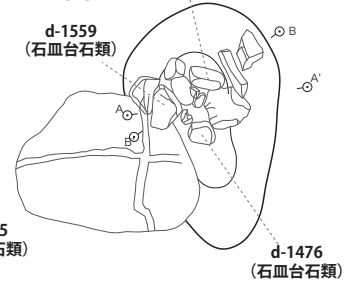
### 266SK



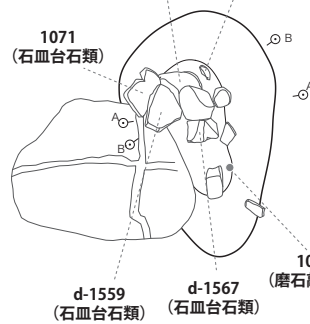
#### 取上げ1回目



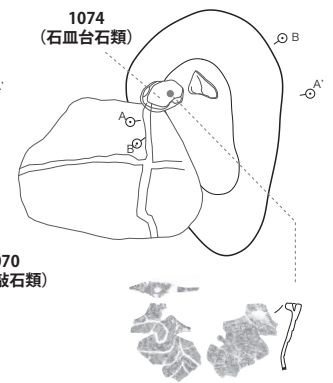
#### 2回目 (石皿台石類)



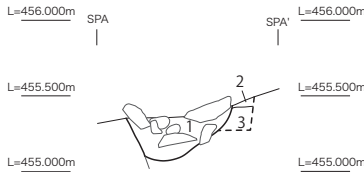
#### 3回目 (石皿台石類)



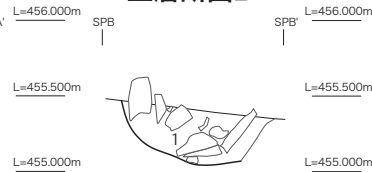
#### 4回目 (石皿台石類)



#### 土層断面A

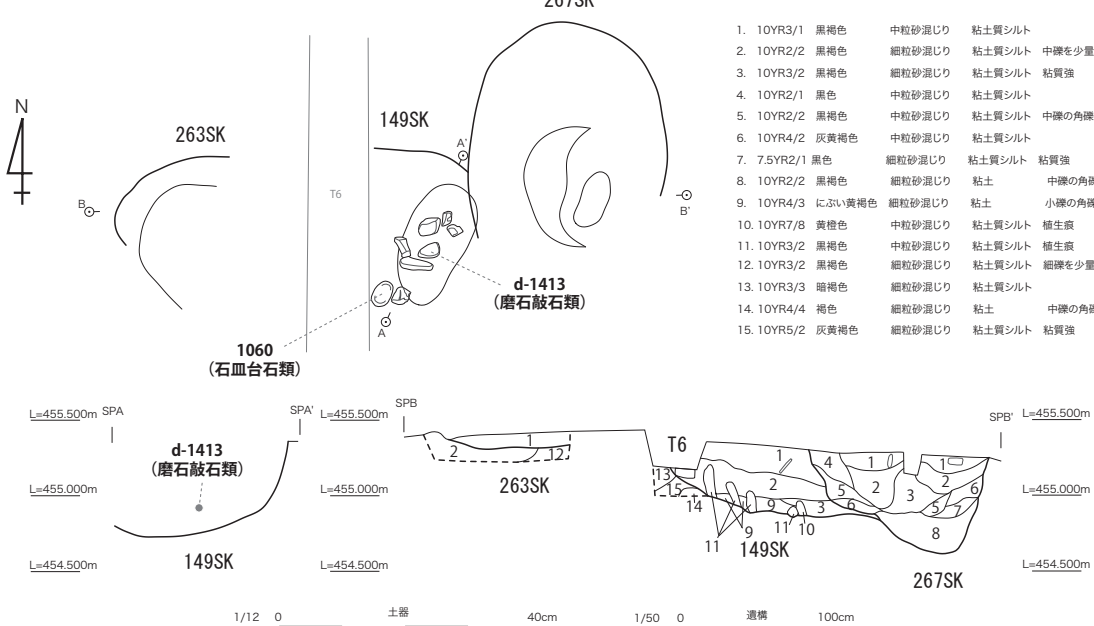


#### 土層断面B



- |                |        |        |         |
|----------------|--------|--------|---------|
| 1. 10YR3/1 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト |         |
| 2. 10YR3/3 暗褐色 | 中粒砂混じり | 粘土質シルト |         |
| 3. 10YR2/2 黒褐色 | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 中礫を少量含む |

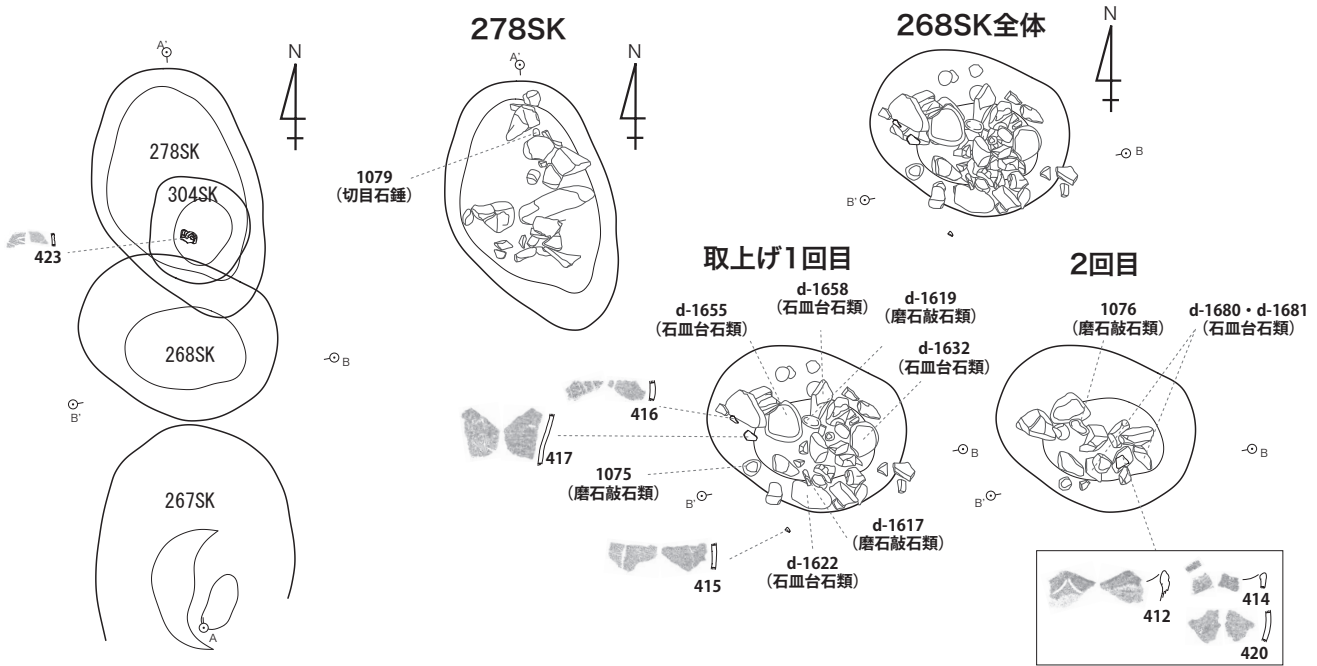
### 149SK・263SK・267SK



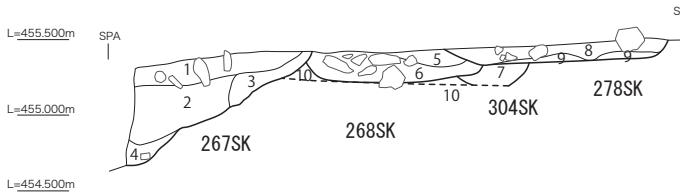
- |                   |        |        |            |
|-------------------|--------|--------|------------|
| 1. 10YR3/1 黒褐色    | 中粒砂混じり | 粘土質シルト |            |
| 2. 10YR2/2 黒褐色    | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 中礫を少量含む    |
| 3. 10YR3/2 黒褐色    | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘質強        |
| 4. 10YR2/1 黒色     | 中粒砂混じり | 粘土質シルト |            |
| 5. 10YR2/2 黒褐色    | 中粒砂混じり | 粘土質シルト | 中礫の角礫を少量含む |
| 6. 10YR4/2 灰黄褐色   | 中粒砂混じり | 粘土質シルト |            |
| 7. 7.5YR2/1 黒色    | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘質強        |
| 8. 10YR2/2 黒褐色    | 細粒砂混じり | 粘土     | 中礫の角礫を少量含む |
| 9. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | 細粒砂混じり | 粘土     | 小礫の角礫を少量含む |
| 10. 10YR7/8 黄褐色   | 中粒砂混じり | 粘土質シルト | 植生痕        |
| 11. 10YR3/2 黒褐色   | 中粒砂混じり | 粘土質シルト | 植生痕        |
| 12. 10YR3/2 黒褐色   | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 細礫を少量含む    |
| 13. 10YR3/3 暗褐色   | 細粒砂混じり | 粘土質シルト |            |
| 14. 10YR4/4 褐色    | 細粒砂混じり | 粘土     | 中礫の角礫を少量含む |
| 15. 10YR5/2 灰黄褐色  | 細粒砂混じり | 粘土質シルト | 粘質強        |

図 30 16 区 149SK・241SK・263SK・266SK・267SK ( 1 : 50 )

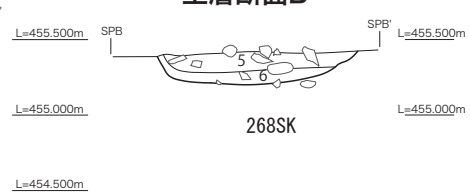
267SK・268SK・278SK・304SK



土層断面A

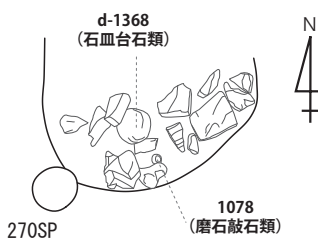


土層断面B

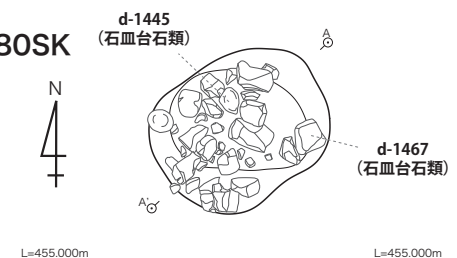


- |  |                               |                                     |
|--|-------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂混じり 粘土質シルト 炭化物が少量混じる | 4. 10YR2/1 黒色 粗粒砂混じり 粘土 細礫を含む | 7. 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト 粘質強 |
| 2. 10YR2/2 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト 粘質強       | 5. 10YR2/2 黒褐色 粗粒砂混じり 粘土質シルト  | 8. 10YR4/2 灰黄褐色 粗粒砂混じり 粘土質シルト       |
| 3. 7.5YR3/1 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト 粘質強      | 6. 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト  | 9. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒砂混じり 粘土質シルト 粘質強 |
|  |                               | 10. 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト 粘質強  |

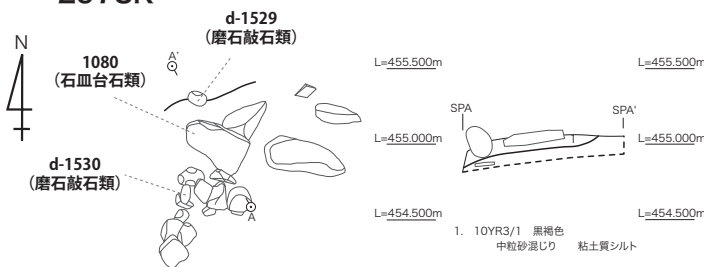
269SK



280SK



297SK

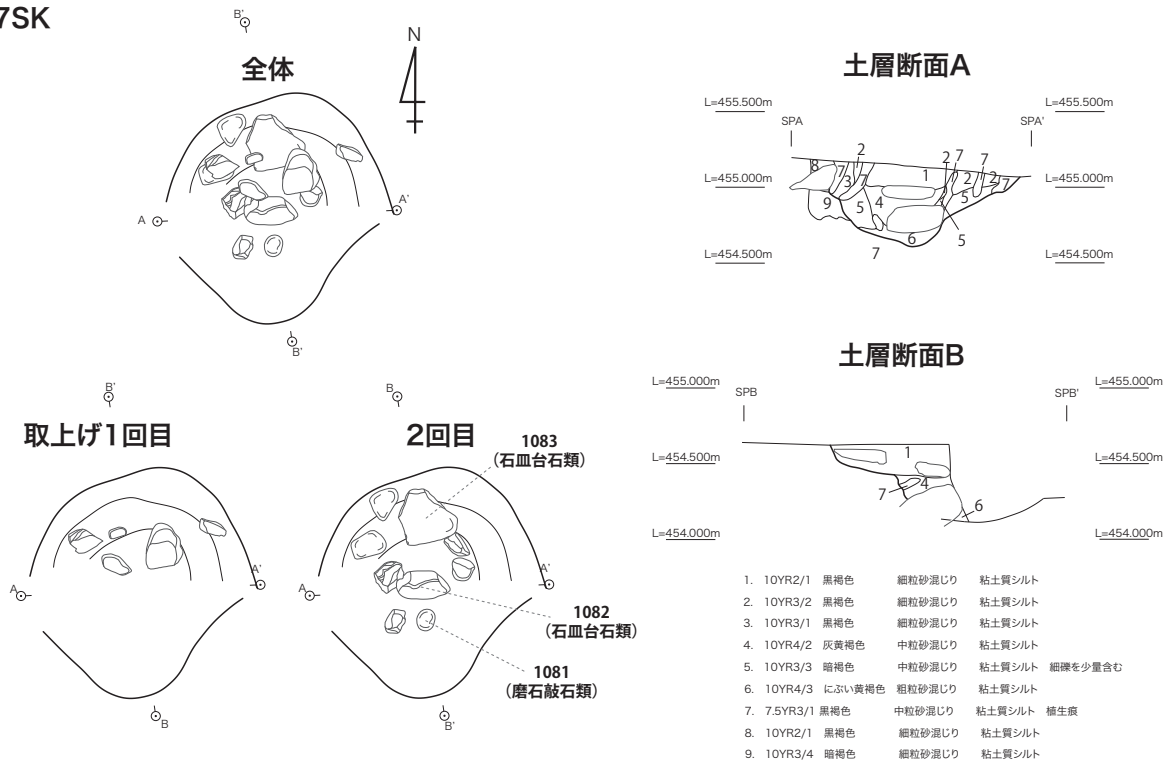


1. 10YR3/1 黒褐色 中粒砂混じり 粘土質シルト



図 31 16 区 267SK・268SK・269SK・278SK・280SK・297SK・304SK ( 1 : 50 )

## 277SK



## 310SK

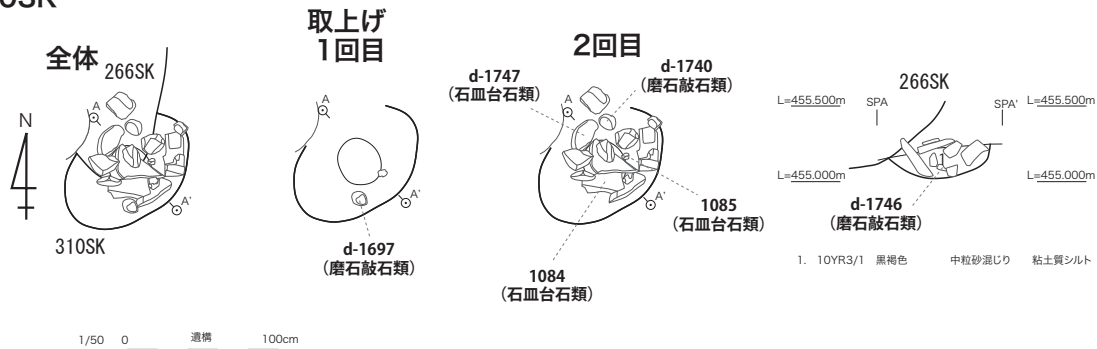


図32 16区277SK・310SK (1:50)

ころもある。

1286SKは後期後葉に属する遺構であることから、1216SKは後期後葉以降に属するものと考えられる。

### 16区 165SK・303SK

165SKと303SKは、16区西側の低位部分で重複して見つかった大型土坑で、しまりの強い黄褐色粘土質シルトに掘り込まれた形で検出された。北側は水道管敷設時の攪乱されていた。165SKは上層の浅い皿状堆積を呈する土坑であ

る。法量は、現存で長軸1.0×短軸0.8×深さ0.15mを測る。埋土内には縄文土器・石器や礫が多数包含されていた。遺構検出時には、溶結凝灰岩の石核(1051)が見つかったほか、中央の凹みに向かって大きな台石や被熱礫、土器底部(343・345・346)などが出土した。

303SKは、165SKの範囲を包含するより大きな掘り方を有する下層の土坑である。法量は、現存で長軸1.3×短軸1.2×深さ0.4mを測る。断面形状を見ると、上方0.15mほどで段が認めら

れることから、このレベルで掘り返しと堆積が行われた可能性も考えられる。埋土中からは、土器のほか礫が多く出土した。

165SK・303SKは、ともに縄文時代後期初頭に属する。

#### 16区 121SK

本遺構は、16区中央の北端、14B区 1263SIの東側掘り方付近で検出された。検出時の現況で、長軸 1.1×短軸 0.9×深さ 0.6mを測る。断面形状では、袋状を呈する部分があり、貯蔵穴であったと考えられる。埋土内には、土器片のほかに径 30cm程度の板状礫をはじめとする礫が大量に入れられていた。また、埋土内からは炭化種実（堅果類）の包含も確認されている。

時期は、縄文時代後期初頭である。

#### 16区 154SK

本遺構も、16区中央の北端で検出された。長径 1mを越える巨礫の西側で見つかったもので、この巨礫を挟んで東側には16区 266SKが存在している。検出時の現況で、径 1.3・深さ 0.3mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する土坑である。底面付近には、径 70cmほどの板状の巨礫が2個あり、その脇あるいは上面を覆うように長径 20～30cmほどの礫が、密に充填されていた。

時期は、縄文時代後期初頭である。

#### 16区 204SK

16区北側中央で確認された遺構である。長軸 1.6×短軸 1.1×深さ 0.45mを測る。平面形状は長楕円形で、断面形状は逆台形状を呈する。土坑中央には長径 20～30cmほどの礫が固まって出土した。

時期は、縄文時代後期初頭である。

#### 16区 241SK

16区北端中央で確認された遺構である。縄文

時代の遺構位置図では、土坑群集中地区からやや西側に間隔を空けて存在しているように見えるが、ここには、後述する戦国期頃の竪穴状遺構が存在している場所に当たる。従って、礫を含む大型土坑群はこの遺構の存在する付近までは固まって存在していたと考えられる。法量は、現存で、長軸 1.1×短軸 1.0×深さ 0.5mを測り、断面形状は逆台形状を呈する。土坑中央には長径 50cm程度の巨礫がまとまって見つかった。埋土中には炭化物の出土は顕著ではなかった。

時期は、縄文時代後期初頭である。

#### 16区 266SK

本遺構は、16区中央の北端で検出された。長径 1mを越える巨礫の東側に所在する土坑で、この巨礫西側には154SKが存在する。検出時の法量は、長軸 1.6×短軸 1.0×深さ 0.4mを測る。断面形状は逆台形を呈する。この土坑側面および底面には長径 30cmほどの板石が張り付くような形で配されており、その内側には、径 10～20cmほどの垂角礫がまとまって入れられていた。

時期は、縄文時代後期初頭である。

#### 16区 149SK・263SK・267SK

調査区中央で検出された落ち込みである。検出時、連続する3基の土坑と想定して調査をおこなった。全体を通して土層断面の形状を見ると、東側が深く、西側に向かって徐々に浅くなっていく。堆積状況も149SK・263SKでは、遺構底面に沿ってなだらかな傾斜堆積を呈しており、通常の土坑とは状況が異なる。これらの遺構は、一体で倒木痕である可能性が高いと思われる。

#### 16区 268SK・278SK・304SK

16区中央の北端で連続して検出された土坑群である。形成順は304SK→268SK→278SK

## 1078SK

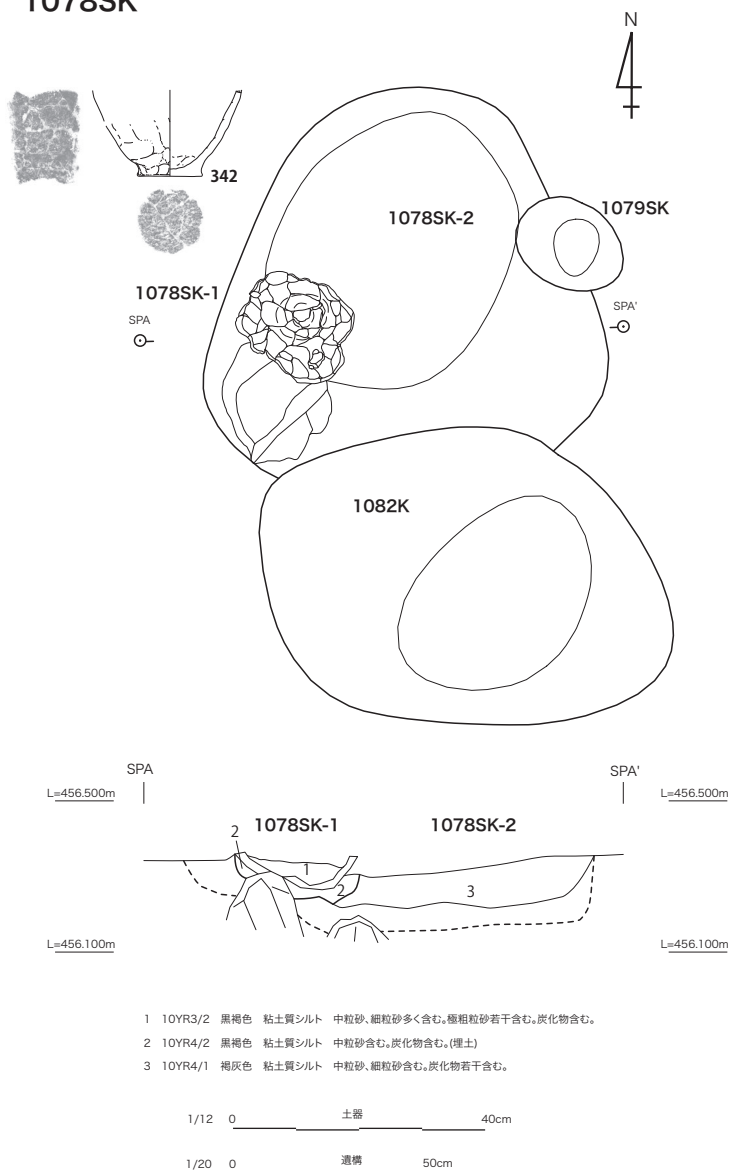


図 33 14B 区 1078SK ( 1 : 20 )

である。278SK は、平面長楕円形の土坑で、確認時点での法量は、長軸 1.7 × 短軸 1.1 × 深さ 0.1m を測る。埋土内には長径 50cm にもある棒状礫をはじめ、径 20cm 程度の礫がまとまって出土した。268SK も平面長楕円形の土坑で、確認時点での法量は、長軸 1.3 × 短軸 1.0 × 深さ 0.2m を測る。埋土内からは、径 10 ~ 30cm の亜角礫もしくは円礫が集中して出土した。また、304SK は、確認時の法量で、長軸 0.7 × 短軸 0.6 × 深さ 0.15m を測る。遺物の出土は希少で、巨

礫の出土も無かった。

これらの時期は、縄文時代後期初頭である。

## 16 区 269SK

本遺構は、16 区北東端で検出された。検出面である IV 層自体が、南東側に傾斜する谷地形に沿って傾斜しており、調査の都合上、土坑内の礫も南東側のみを確認することができた。確認時の法量で、長軸 1.4 × 短軸 1.1 を測る。深さをほとんど残存していない状況であり、集石の様相を呈している。礫は、長径 30cm 程度の板状の亜角礫をはじめ、径 10 ~ 20cm 程度の亜角礫・亜円礫である。

時期は、縄文時代と思われるが不詳である。

## 16 区 280SK

本遺構は、16 区南東端で検出された。検出は IV 層上面であり、南東側に傾斜する谷地形内にあるといえる。確認時の法量で、長軸 1.2 × 短軸 0.9 × 深さ 0.2m を測る。遺構断面は、浅い皿状を呈する。礫は、径 30 ~ 10cm

の亜角礫がまとまっていた。

時期は、縄文時代と思われるが不詳である。

## 16 区 297SX

16 区中央で見つかった遺構である。しまりの強い黄褐色粘土質シルト (V 層) の上で検出された。1.7 × 1.0m の範囲に長軸 60cm を最大とする礫がまとまって出土した。地形の傾斜に伴って形成された礫集積の可能性がある。

## 16 区 277SK

16 区南東端で見つかった遺構である。遺構南

半分は、後世の平坦面形成のために削平されており、遺構検出状況から断ち割りに近い状況となっていた。確認時の法量は、径 1.5・深さ 0.6m を測る。断面形状は、やや不定形な緩い V 字状を呈する。埋土中央には、石皿台石類と思われる板石 (1083) があり、土坑底面には磨石 (1081) が見つかっている。

時期は、縄文時代と思われるが不詳である。

### 16 区 310SK

本遺構は 16 区中央北側で見つかったもので、266SK の南端に当たる。北西側には巨礫があり、その南東脇に形成された。確認時の法量は、長軸 0.9 × 短軸 0.6 × 深さ 0.3m で、断面形状は浅い U 字状を呈する。埋土中には、礫が多数認められるが、長径 30cm ほどの扁平礫は遺構掘り方に沿って敷かれた状態で、その中に径 10 ～ 20cm ほどの亜角礫が充填されていた。

時期は、縄文時代後期初頭と思われる。

## 2-3. 土器埋設遺構

### 14B 区 1078SK-1

本遺構は、14B 区東側中央付近で検出された遺構であり、後世によって削平された低位の平坦面側に位置する。ここは、しまりの強い黄褐色粘土質シルトが確認できる西端に当たり、さらに西側に向かうと、粗粒砂・極粗粒砂と巨礫 (円礫) が展開する河床景観区域へとつながる。南西側には 066SK が位置している。1078SK は、土器埋設遺構の 1078SK-1 と、接して見つかった土坑 1078SK-2 がある。1078SK-1 の法量は、径 0.3・深さ 0.1m を測る。残存状況は良好ではないものの、土器埋設遺構の底部が残存していた。埋設された土器は底部付近が潰れた状態で検出された。立位埋設と考えられるが、底部には穿孔あるいは

欠損は認められなかった。1078SK-2 の法量は、長軸 2.7 × 短軸 2.5 × 深さ 0.2m を測る。断面形状では、ごく浅い皿状を呈する。

1078SK-1 と 1078SK-2 との関連は不明瞭である。1078SK-1 の時期は、縄文時代晩期前半と考えられる。

### 14B 区 1286SK

この遺構は、後述する 14B 区 1216SK に切られた形で確認されている。検出時の法量は、径 0.3 × 深さ 0.2m を測る。立位埋設された深鉢が胴部下半から底部にかけて残存していた。残存部分のみではあるが、底部への穿孔などは認められなかった。

時期は、縄文時代後期後葉に属する。

## 2-4. その他

### 14B 区 0111SX

本遺構自体は、中世以降の堆積層である。14B 区南西端および 16 区北西端に位置し、上述した 14B 区 1286SK の南西側で見つかった。

地形の傾斜に従って、南側に向かって堆積層が形成されていた。0111SX の主体は、中世以降の陶器片とともに縄文土器が細片化された状態で多数出土していた。その下層には良好な包含層が若干存在しており、縄文土器のみがまとまった形で出土した。その中でも、土器 258 は特に良好な状態で出土した。検出はできなかったものの、縄文時代後期初頭の土坑などが存在していた可能性が高い。

### 14B 区 1209SX

14B 区北西の高位部分で見つかった遺構である。検出はⅢ層上層あるいはⅢ層中である。法量は、現状で、長軸 6.5 × 短軸 4.5 × 深さ 0.1m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。この掘り方

# 1216SK・1286SK

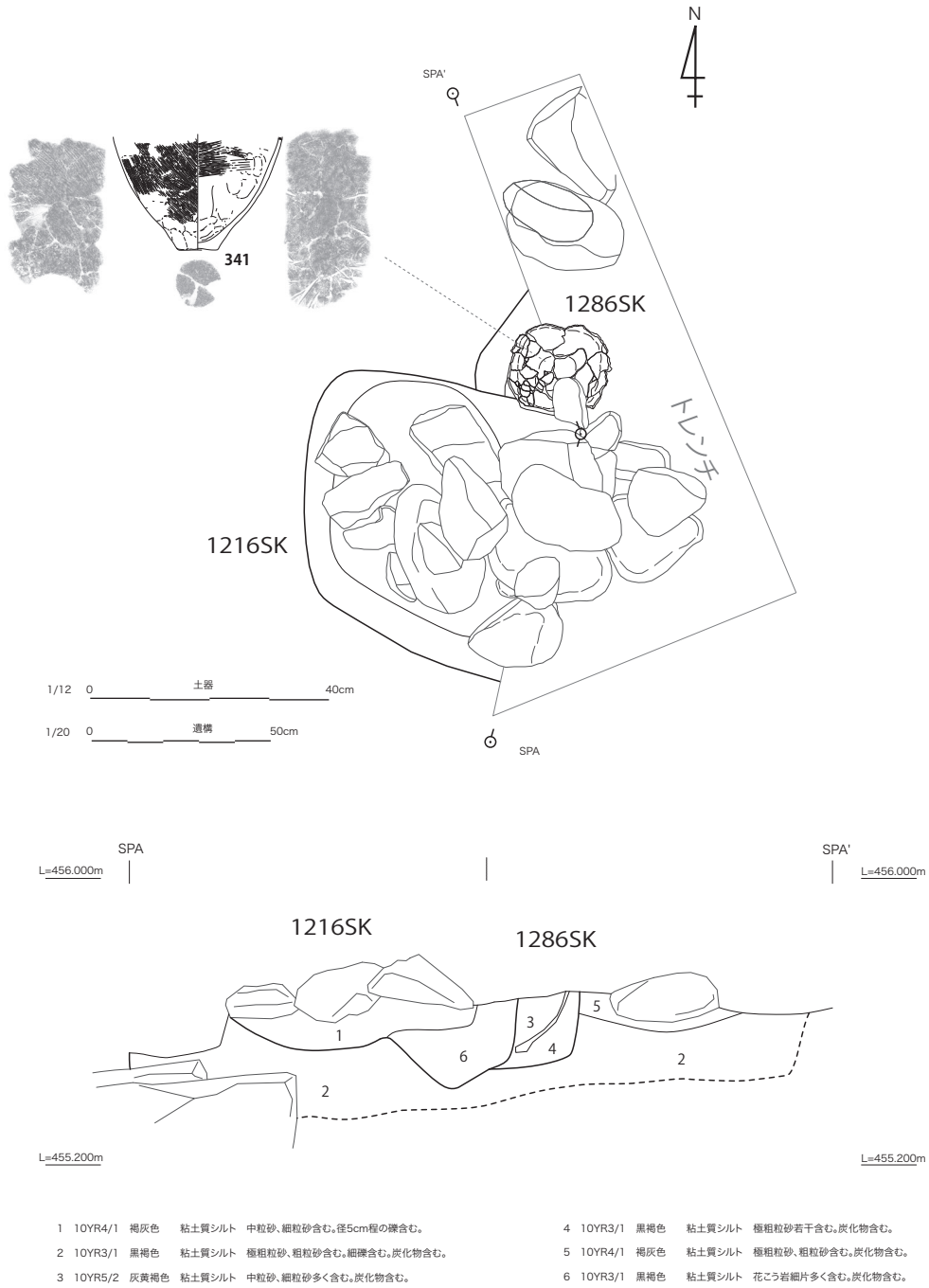
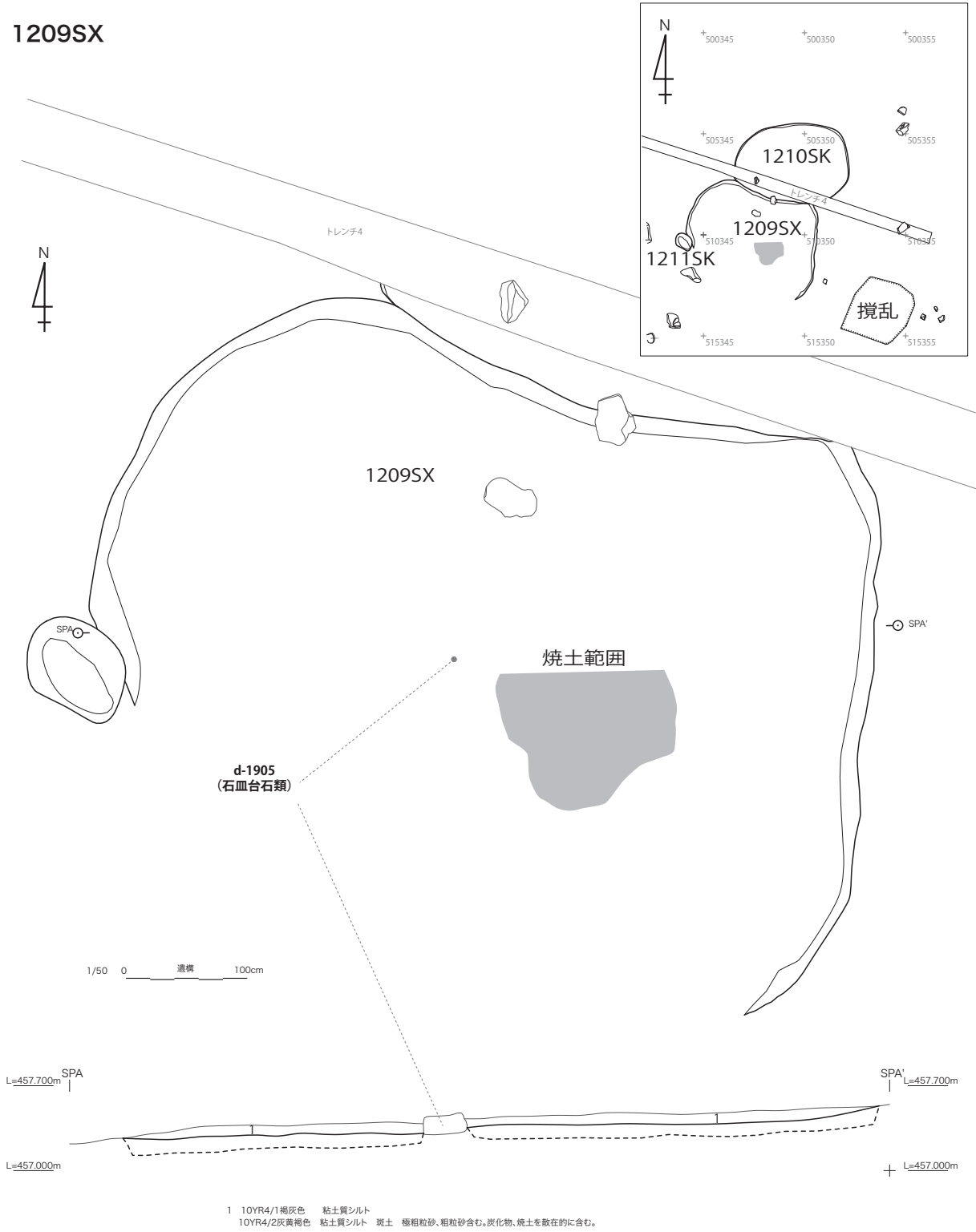


図 34 14B 区 1216SK・1286SK ( 1 : 20 )

1209SX



1 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト  
 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 斑土 極粗粒砂、粗粒砂含む。炭化物、焼土を散在的に含む。

図 35 14B 区 1209SX ( 1 : 50 )

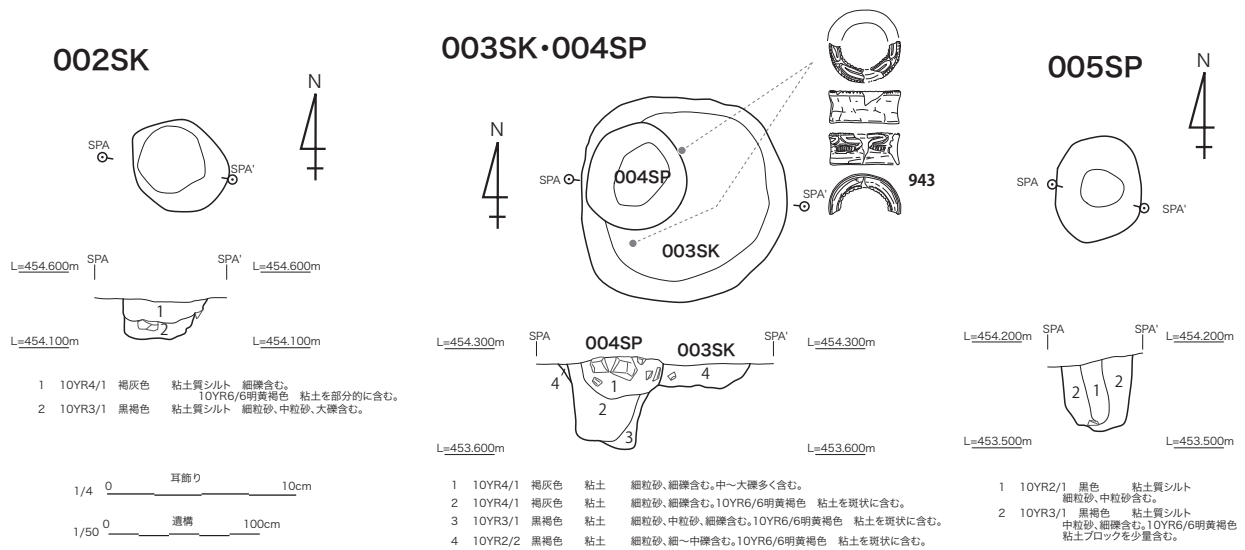


図 36 14C 区 002SK・003SK・005SP ( 1 : 50 )

内には、ピットになどの痕跡を確認することはできなかったが、底面には 1.5 × 1.0m の範囲で、焼土範囲を確認し、その脇には台石と思われる板状の被熱礫が存在していた。この場所は、まさに 14 区 1306SI の位置に当たる。1306SI の埋土形成の一部とも考えられるかもしれないが、周辺からは条痕文土器も出土していることから、弥生時代前期の遺構の可能性もある。

### 14C 区 003SK

14C 区では、旧河道にあたる凹地に形成された包含層以外に、調査区北東部で、5 基の遺構が確認された。001SK・002SK・004SK・005SP は、いずれも径 0.5m 内外の同様な平面形状を呈するもので、時期不詳である。その中でも、003SK のみは縄文時代の遺構の可能性が高いといえる。

14C 区 003SK は長軸 1.4 × 短軸 1.3 × 深さ 0.15m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土内からは縄文土器のほか、土製耳飾り (943) が出土した。時期は縄文時代後期後葉と考えられる。

## 第2節 縄文時代の遺物（土器・土製品）

**a. 概要** 縄文土器に限らず、すべて出土資料について、グリッド別・出土遺構別に、器種と時期の分類を行い、その部位・点数・重量の記録とる、統計的処理を行った。その成果は、第6章に記載したので、そちらを参考願いたい。

縄文土器は、14B・14C区・16区でまとまって出土した。この範囲が、縄文時代の遺構・包含層が濃厚に残された場所であり、後世の平坦面造成のための盛土にも、多量の縄文土器・石器などが含まれていた。

本節では、縄文時代から弥生時代前期の条痕文土器も含めて、縄文土器として報告する。今回の発掘調査で出土した縄文土器は、接合作業終了後で総点数6,850点、1cm四方以上の点数では6,295点、総重量6,8924.4gである。

これら土器群は、先学の研究などを参考にした型式学的分類によって、以下の時期別群に分けることができる。

**第1群：縄文時代 早期前半【深鉢・鉢】**

**第2群：縄文時代 早期後半【深鉢・鉢】**

**第3群：縄文時代 早期末・前期初頭～前半**

**【深鉢・鉢】**

**第4群：縄文時代 前期後半【深鉢・鉢】**

**第5群：縄文時代 中期初頭～中葉**

**【深鉢・鉢・浅鉢】**

**第6群：縄文時代 中期後半【深鉢・鉢・台付鉢】**

**第7群：縄文時代 中期末～後期初頭【深鉢・鉢】**

**第8群：縄文時代 中期～後期 無文部分**

**【深鉢・鉢・浅鉢】**

**第9群：縄文時代 後期後葉～晩期前半**

**【深鉢・鉢・浅鉢・注口土器】**

**第10群：晩期後半【深鉢・鉢】**

**第11群：弥生時代 前期以降【深鉢・鉢・甕】**

ここでは、すべての土器について詳細に記載することはできないため、報告書添付のCD内に格納されている遺物一覧表を併せて参考願いたい。

土器・土製品の掲載は、図37～85に及ぶ。胎土について、特に緻密なものには「●」を、繊維を含むものには「△」を、遺物番号横に付しておいた。また、土器断面に沿って、灰色の破線を示した場所は、該当器面に炭化物付着、あるいは炭化物付着痕の確認できた範囲である。

各群に分類された土器は以下の通りである。以下、番号のみで表記されているものは、資料の掲載番号（登録番号）を示している。

**第1群：17～20・421・424・425・452～459  
・590・892～894**

**第2群：21・22・33・162・209・251・273・  
344・396・407・427・460～476・591～594・  
724・797～800・802～809・838・880・895・  
896・936**

**第3群：31・142・166・167・250・395・446  
・477・595・596・810～813**

**第4群：208・332・480・814**

**第5群：23・27・478・479・481～495・597  
～600・801・815・816・897～899・946**

**第6群：28・38・118・144・195・205・213  
・274・278・301・372・404・418・512・534・  
535・542・556・558・559・561・566～570・  
601・604～611・644・678・698～701・706・  
715・719・723・745・817～821・902・903・  
905・907・911・913・915・917**

**第7群：1～8・10～15・16・24・25・34・35  
・37・39～56・58～63・68～70・72・73・75・**

78~94・96~109・111・112・114~117・119・  
122・123・131・132・134・135・137・138・  
140・141・145~154・156・157・159・161・  
163・164・168~171・173・174・178~192・  
196・197・199~201・204・207・210・211・  
215・217~224・227・229~231・235~243・  
246~249・252~254・256~259・263~265・  
268・280~285・287・289・291・293・294~  
296・299・300・302・309・310・313~315・  
321~325・327・333・334・347・349・351~  
354・357~362・365・367~370・373~377・  
379・380・382~384・386・387・390~392・  
398~401・403・405・406・410・412・413・  
419・422・423・429~433・436・437・439~  
444・447・448・450・497~511・514~526・  
529~533・536・537・539・543・544・456・  
547・549・563・565・573・575・582・589・  
613~628・630~632・634・636~643・645~  
650・656・657・668~677・679~697・703~  
705・708・709・712・714・717・718・720・  
722・729・732・734・736~738・742・746・  
754・760~763・767・796・822~828・830・  
835~837・839~859・861~868・872~877・  
879・882・891・900・904・906・908~910・  
912・914・937・939~942

**第8群**：9・15・26・29・30・32・36・57・64  
~66・71・74・76・77・95・110・113・120・  
121・124~130・133・136・139・143・158・  
160・172・175~177・193・194・198・206・  
212・214・216・225・226・228・232・233・  
234・244・245・255・260・262・266・267・  
270・272・275・277・279・286・288・290・  
292・297・298・303~308・311・312・316~  
318~320・326・328~331・335~338・343・

345・346・348・350・355・356・363・364・  
366・371・378・381・385・388・389・393・  
394・397・402・408・409・411・414・415~  
417・420・426・428・434・435・438・445・  
449・451・496・513・527・528・538・540・  
541・545・548・550~555・557・560・562・  
564・571・572・574・576~581・602・603・  
612・629・633・635・651~655・658~667・  
702・707・710・711・713・716・721・725~  
728・730・731・733・735・739・740・743・  
744・747・748・750~753・755~759・762・  
788~795・829・831~834・860・869~871・  
878・881・883~890・901・916・918・919~  
926・935・938

**第9群**：165・269・271・276・339~342・  
741・749・764~773・779・780・927~934

**第10群**：583・774・775・778・781・783・  
786

**第11群**：67・155・202・203・584~588・  
776・777・782・784・785

**b. 縄文土器の出土別記載** ここでは、発掘調査での出土状況(取り上げ状況)に従って、上述した型式学的分類に基づいた記載を行っていく。

紙面の都合などから、すべての土器片について詳細な説明を行うことはできない。従って、ここでは提示した資料の中でも、特に特徴的なものに絞り言及することとする。なお、縄文時代中期末~後期初頭の時期表記については、近年の研究動向に合わせて中期末、後期初頭古相、後期初頭中相、後期初頭新相と表記することとする(横浜市歴史博物館 2016)。

**14B 1304SI** (図 37) 1~9 は、石囲炉の機能終了後に埋納されたもので、埋納時の一括性が認められるものである。1 は胴部中位が屈曲す

る深鉢で、口縁部と底部は欠失している。胴部屈曲部を境に、上下2段に文様が横方向に展開する。文様は、上下揃った位置で渦巻文と紡錘文が横へ交互に配されており、下端は横に連結する構図となる。文様構成は沈線区画内のLRによる充填縄文によるものであり、沈線は断面形状V字状でやや深みがある。無文部分には丁寧なナデあるいはミガキが施されている。2はやや湾曲するものの底部から口縁部に向かってラッパ状に広がる器形である。口縁部には沈線による横長なJ字文が連続しており、J字および上部の連結する沈線までの範囲に縄文LRが施されている。胴部には紡錘文に由来する縦方向の沈線区画がある。無文部分にはナデやオサエが認められるが、表面には工具痕か極細の筋が残されている。3～9は胴部片である。無文部分はナデやミガキなど丁寧な器面調整となる。3・8では表面に沈線区画内に縄文が施されており、3は渦巻文になるか。

これらは、中津式あるいは称名寺式のなかでも、新相を示すものと考えられる。

#### 14B 1305SI と関連遺構 (図 38・39・63)

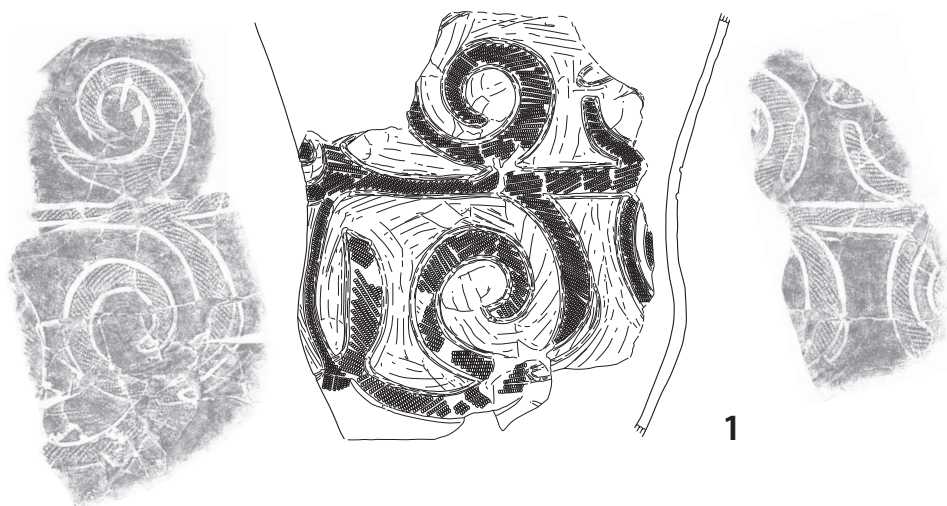
10～13・34は、石囲炉の機能終了後に埋納されたもので、埋納時の一括性が認められるものである。10・11・34はいずれも胴部上半で屈曲する器形である。10は複数条の垂下沈線と、上下に配された区画文であり、下段は水滴状に閉じている。沈線は太くて深く、器面裏にはその痕跡が腫れ上がった様に隆起が認められる。11は上下二段に方形区画状あるいはU字・逆U字状の区画が配されているものである。下段には区画と重ねるように連続した斜方向の沈線が認められる。この沈線は、10とは好対照で極めて浅く、一部痕跡程度にしか確認できない部分もある。34はU字文あるいは逆U字文が併行する

二条の沈線で施されているものである。12は胴部の屈曲程度は小さいものの口縁部に向かって広がる器形である。器壁は厚手で、胎色も褐色が強い。口縁部には浅い凹みが4箇所1単位であり、これが1セットとなって土器全体では4単位となっている。また、縄文LRによる短い帯縄文もある。口縁部と胴部の境には明瞭な段が認められ、その段から下方向に向かって結節縄文が展開している。土器内面はナデで、工具痕が横方向に認められる。13は底部から口縁部にかけて直線的に広がる器形である。8単位の波状口縁を呈する。各波頂部直下の口縁部には菱形の区画の頂端中央からごく小さいJ字文が垂下している。胴部には同様な小型のJ字部分を含みながら、横にさらに縦に弧線が描かれている。沈線はやや太く明瞭である。胎色はやや白色に近い。

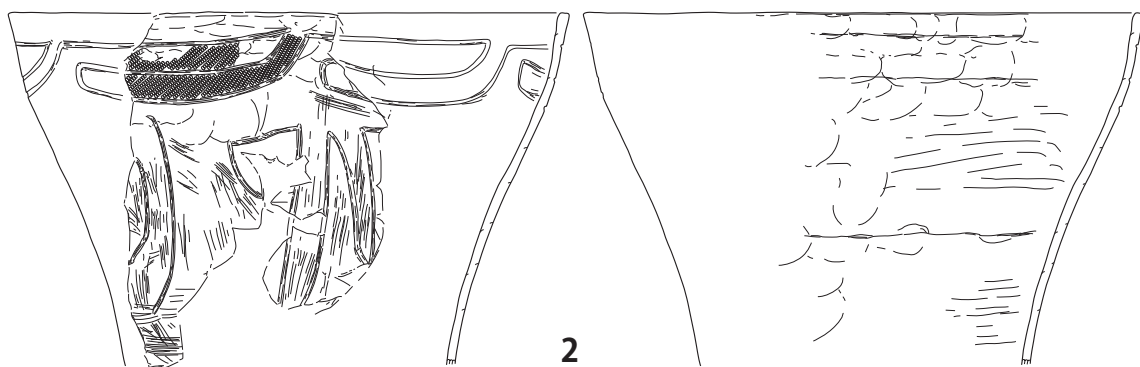
10・11・34は中期最終末の土器と考えられ、12も下伊那地域の影響の強い同時期の土器である。一方、13は後期最初頭と考えられる。出土状況による一括性から、この一群は、中期最終末から後期最初頭の様相を示す土器群といえる。

14～29は1305SIの掘り方を調査した時に出土した資料群、30～33は竪穴内の土坑内、456は石囲炉跡の掘り方となる土坑からの出土資料である。14～16・24～26・30～32は第7群あるいは第8群と中期～後期の土器群である。その一方、17～19・456は黄島式、20～22・33も胎土に繊維を含み、第1群あるいは第2群の早期の土器群である。23は中期初頭の北屋敷I式、27は中期中葉の北屋敷II式、28は中期後半の中富III式以降で、第5群あるいは第6群である。10～13・34と比べて著しく古い土器は、周囲の包含層からの混入であり、この遺構の位置している層位的関係などを端的に示している。

〈本文 53 頁へ続く〉

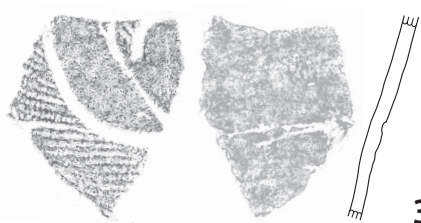


1

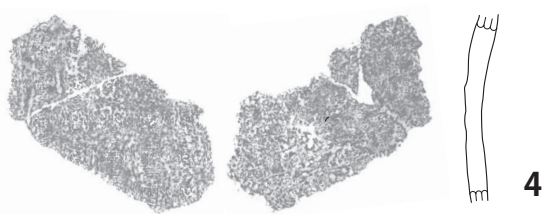


2

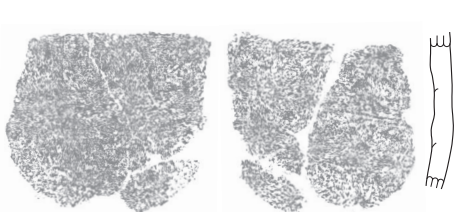
1/6 0 40cm



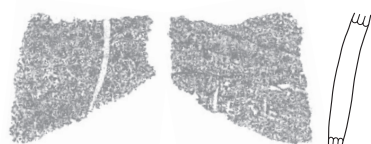
3



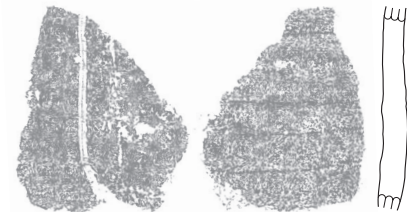
4



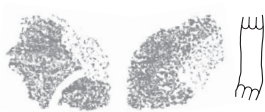
5



6



7



8

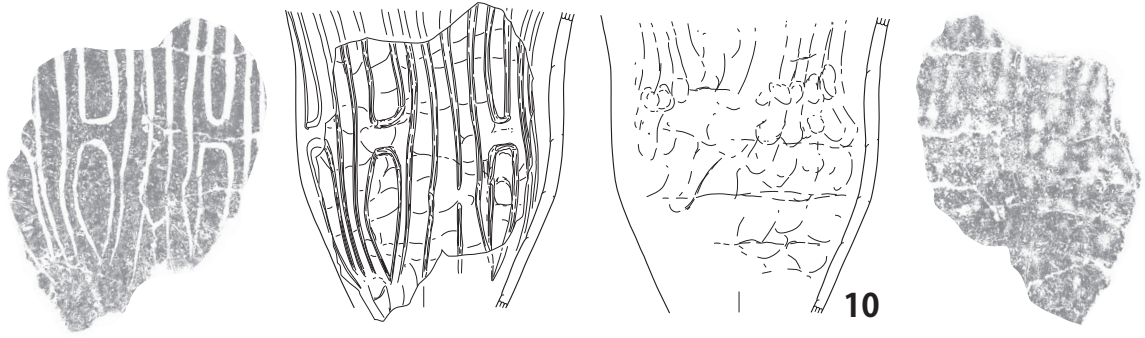


9

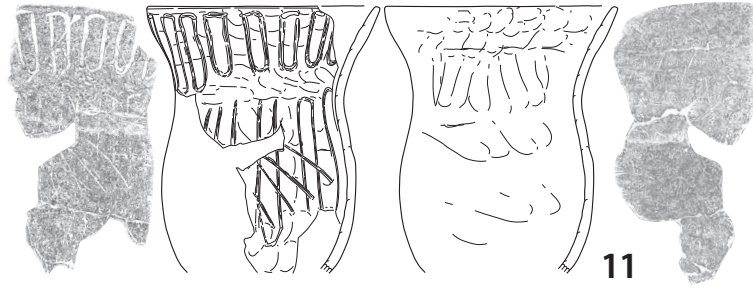
1/3 0 10cm

14B 1304SI

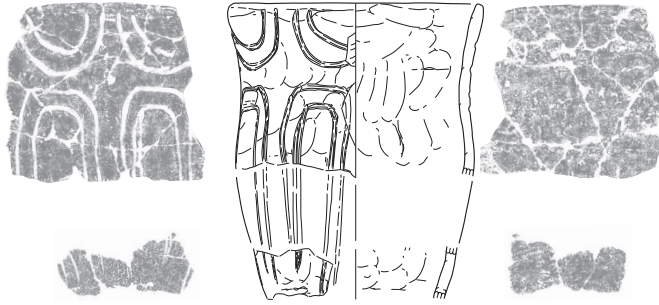
図 37 土器・土製品 1 【 14B 1304SI 】



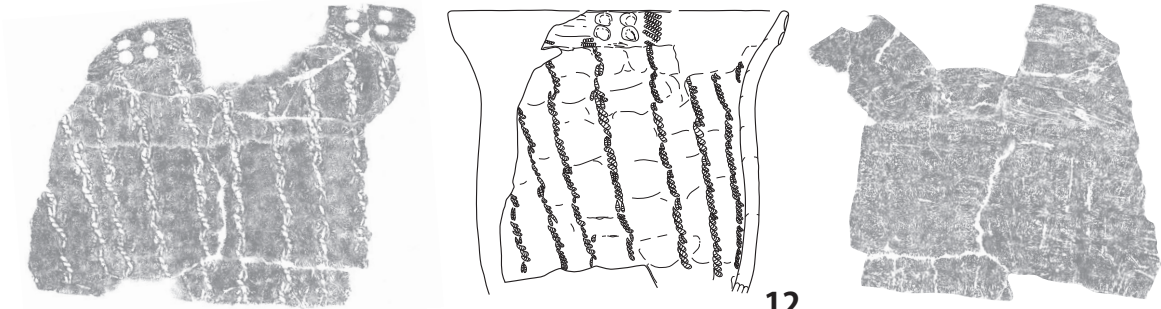
10



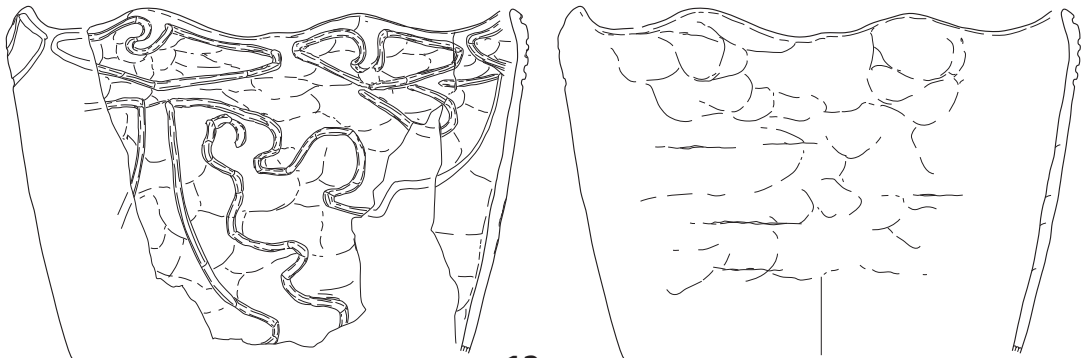
11



34



12



13

14B 1305SI

1/6 0

40cm

図 38 土器・土製品 2 【 14B 1305SI 】

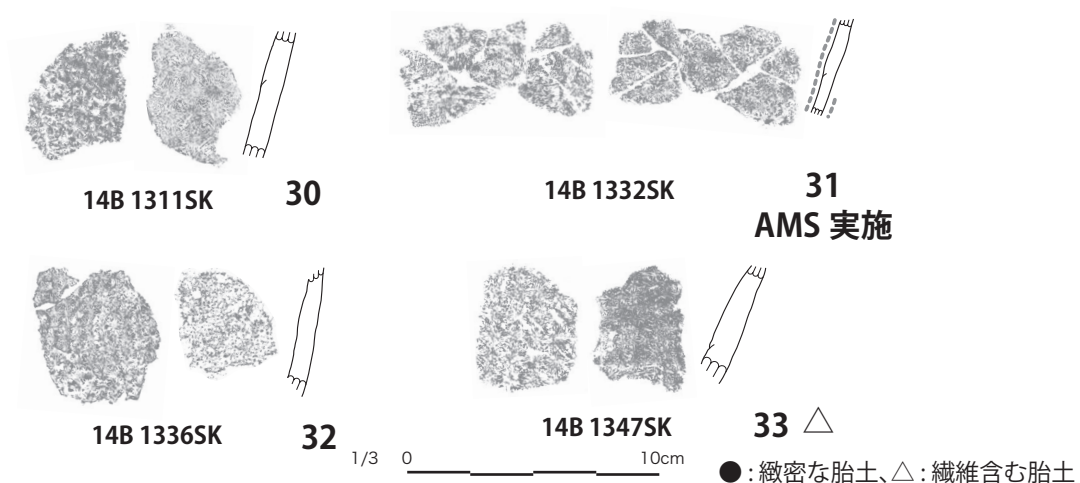
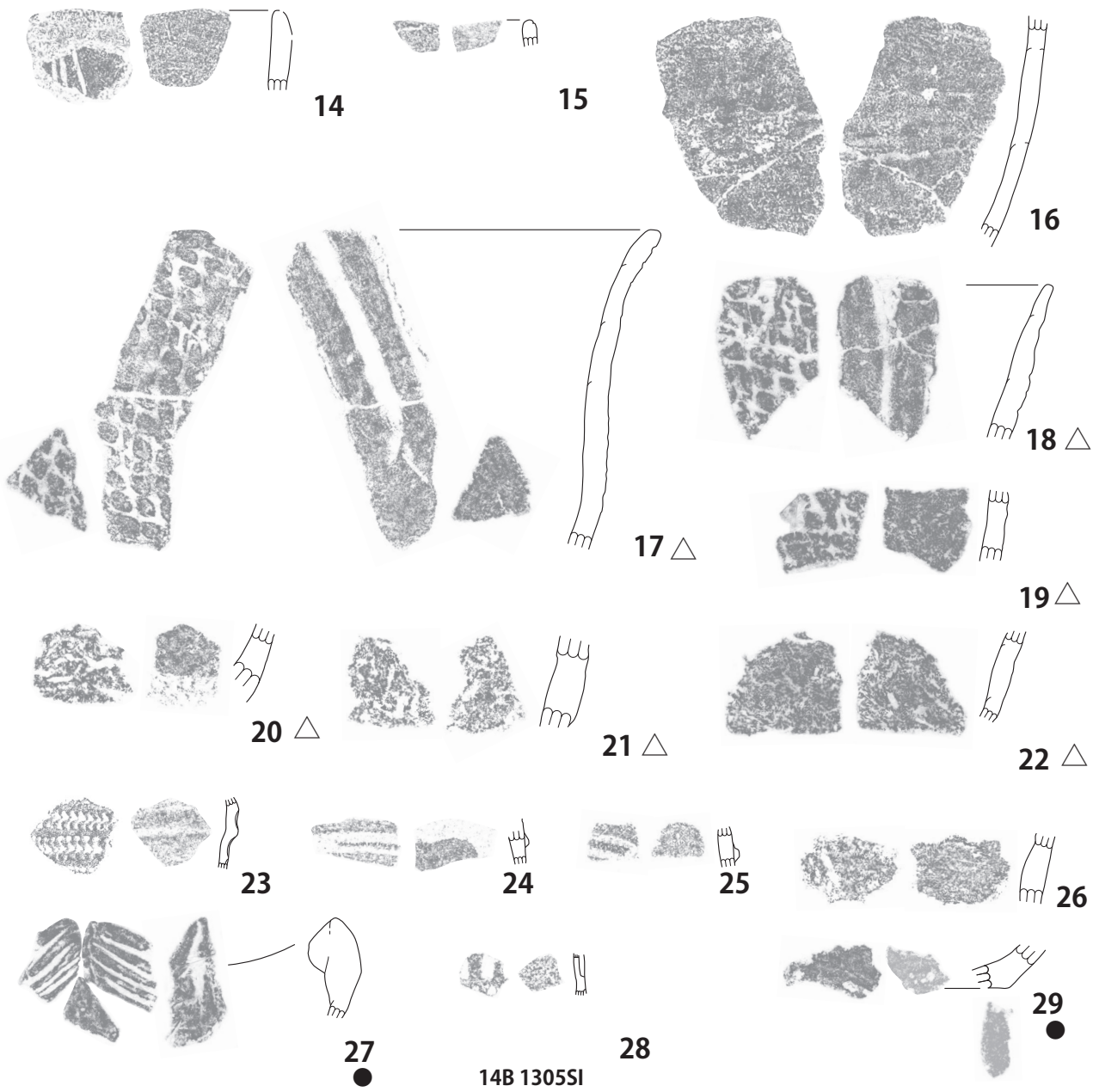


図 39 土器・土製品 3 【 14B 1305SI と関連遺構 】

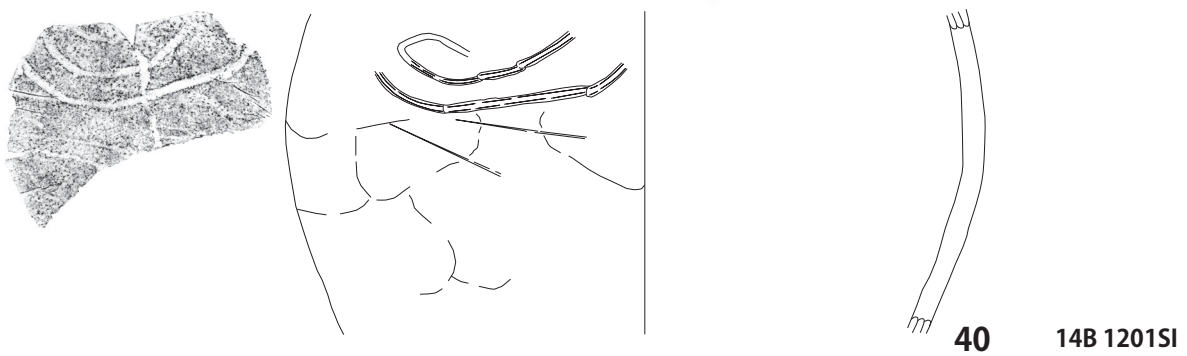
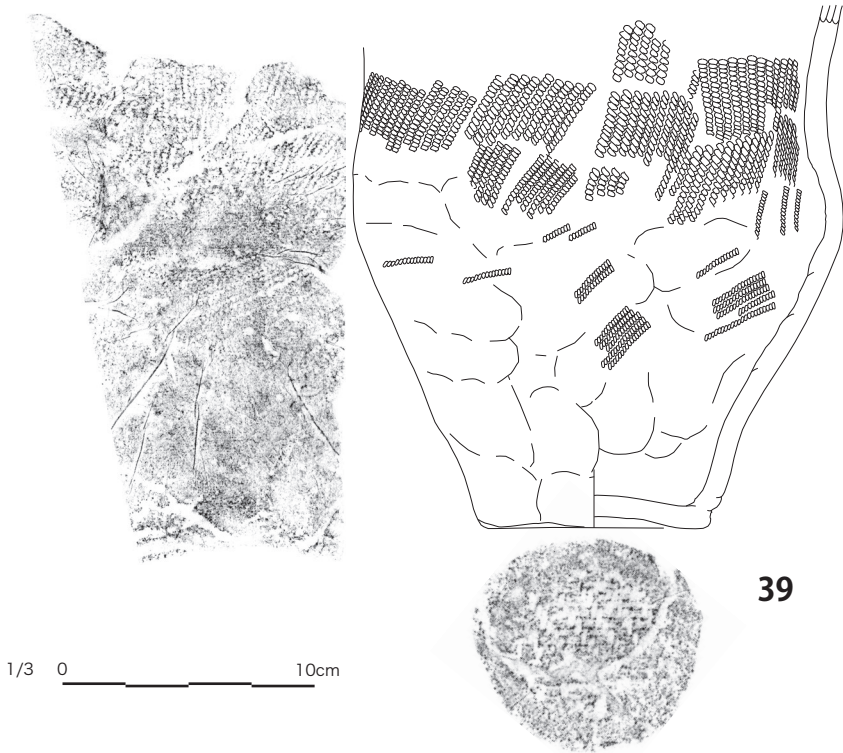
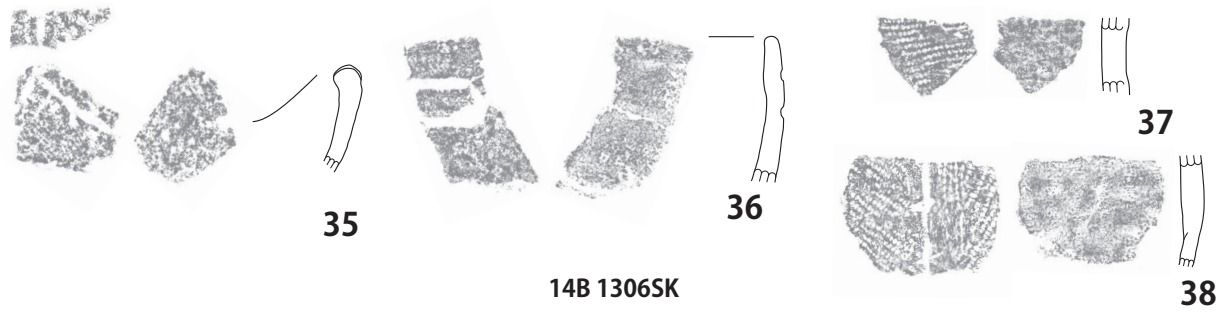


図 40 土器・土製品 4 【 14B 1201SI 】

**14B 1201SI と関連遺構 (図 40 ~ 43)**

39・40 は炉跡内の出土で、40 の中に 39 が入れ子状に埋納されていたものである。両者はほぼ

近い時期の所産といえる。39 は胴部が張る深鉢である。器面調整ナデあるいはオサエであり、胴部上半には太い原体 LR による縄文が施されている

〈本文 71 頁へ続く〉

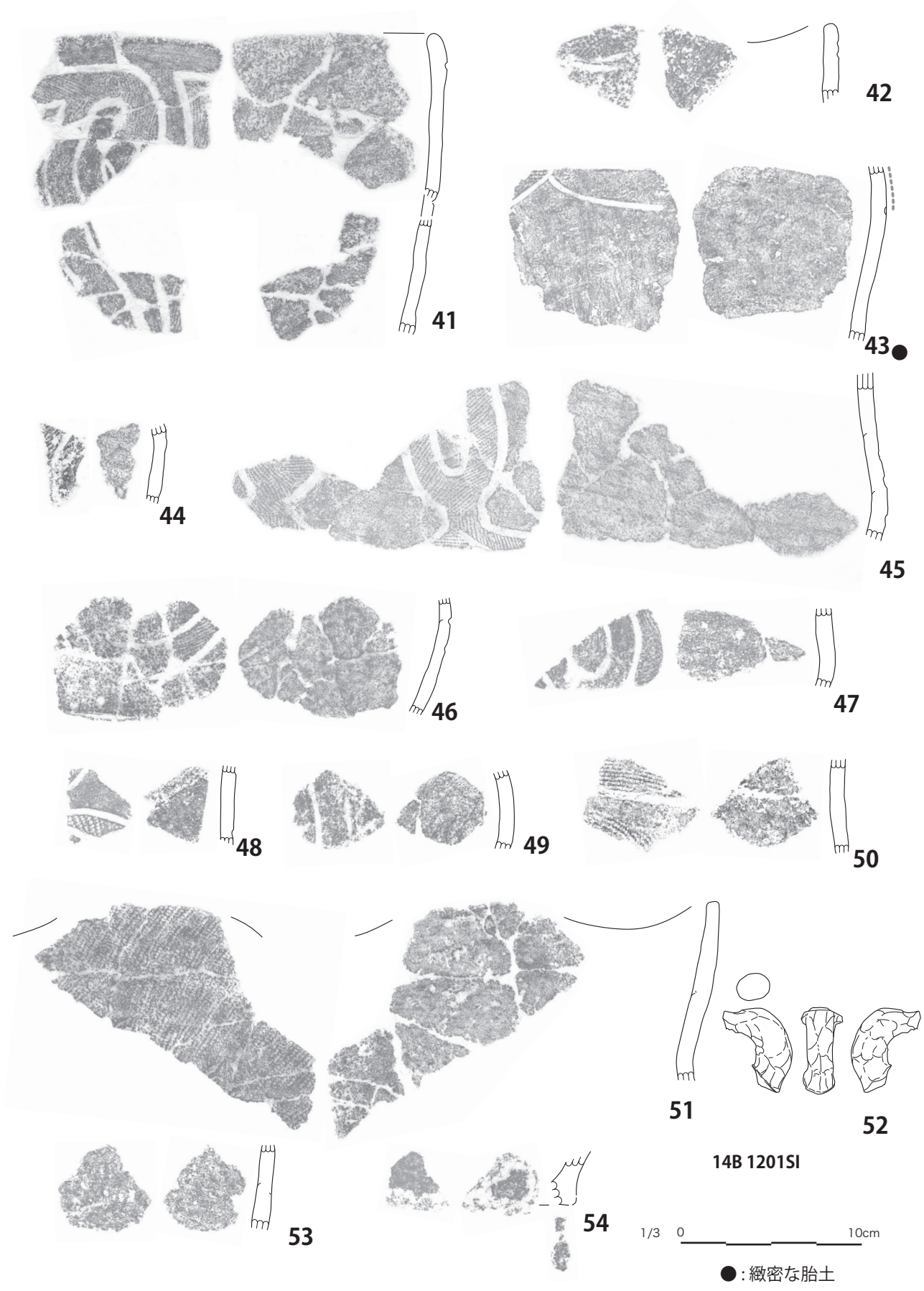


図41 土器・土製品5【14B 1201SI】

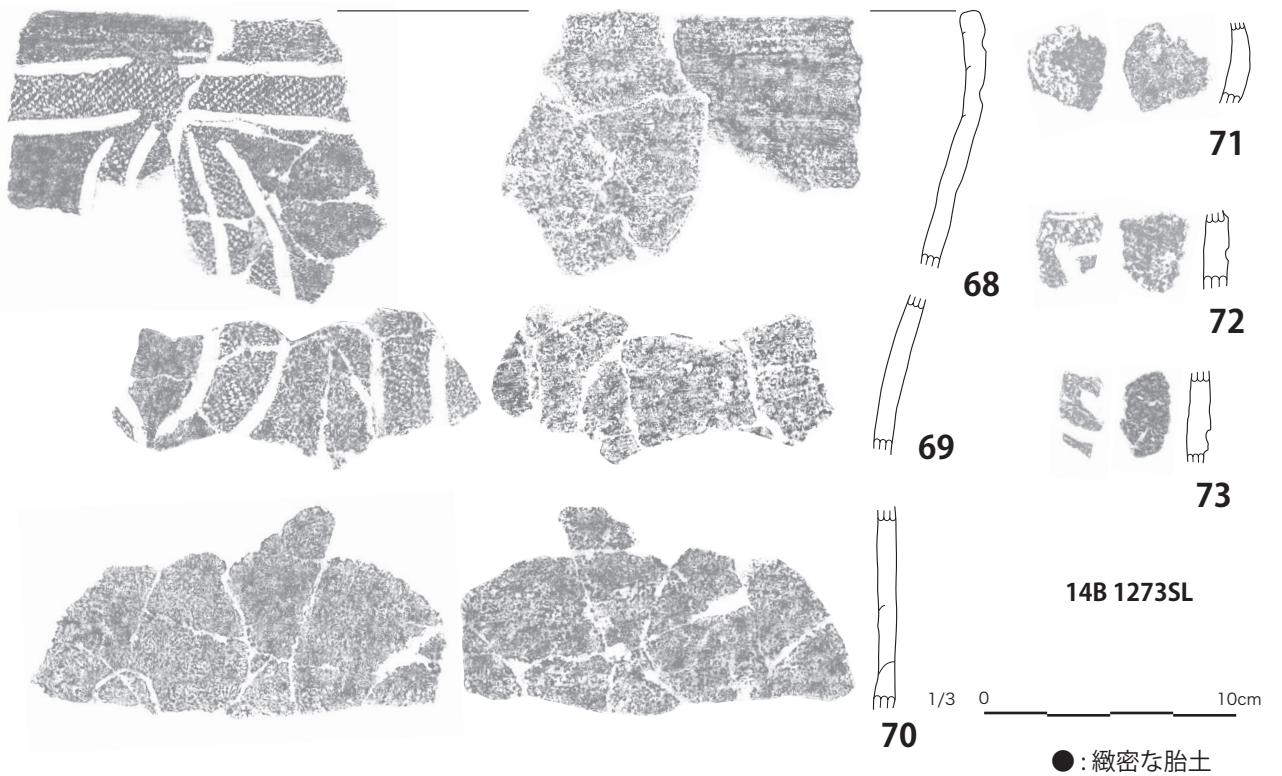
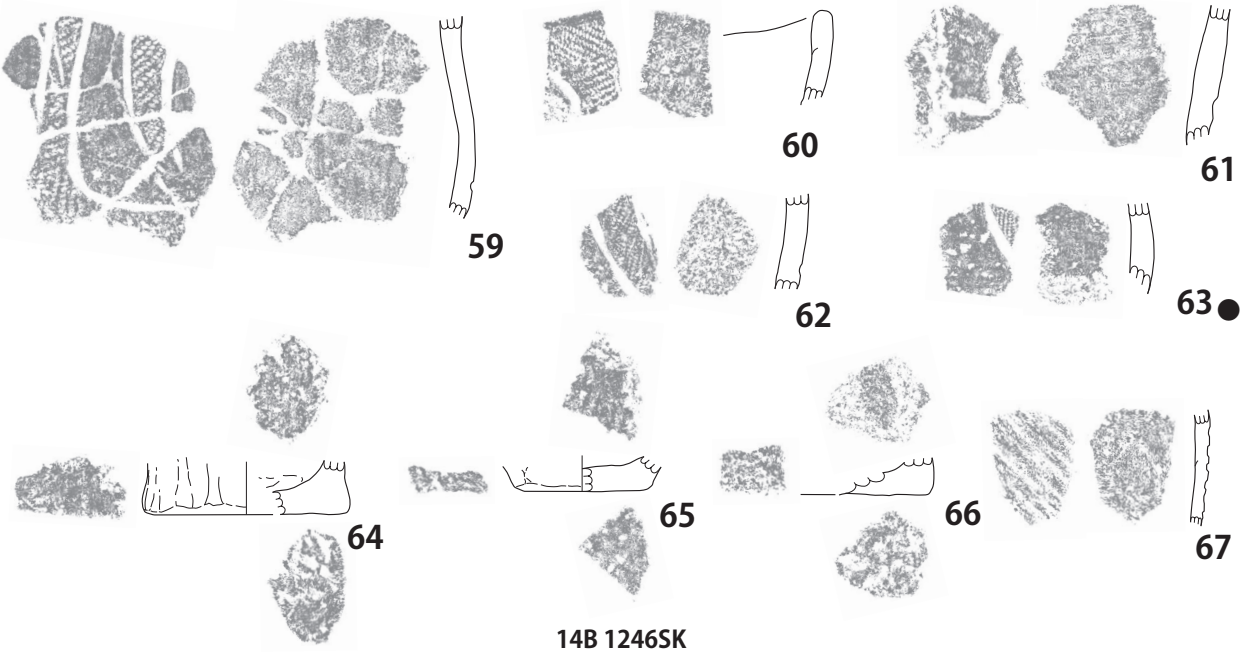
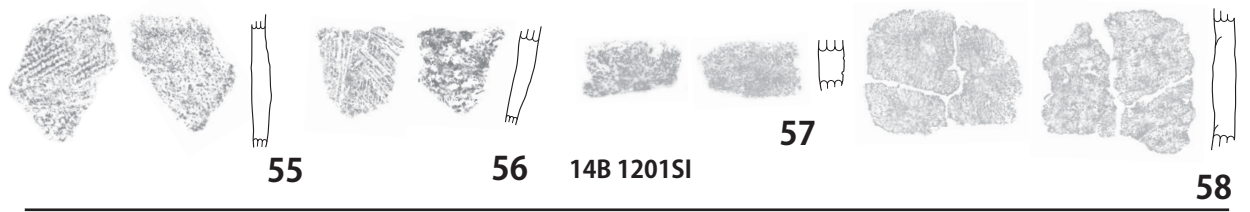
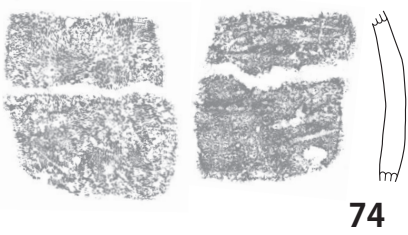


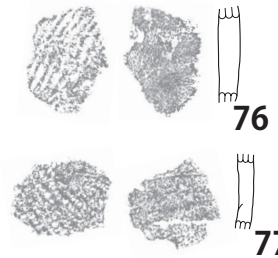
図 42 土器・土製品 6 【 14B 1201SI・1263SI の関連遺構 】



74



75

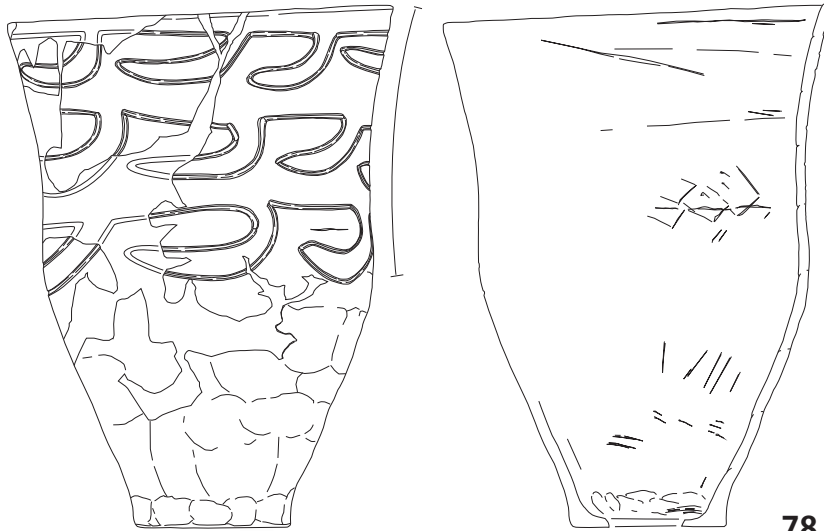
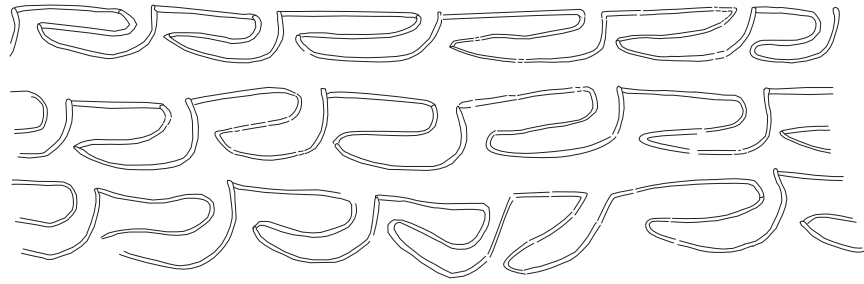


76

77

1/3 0 10cm

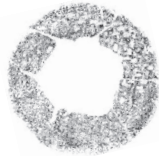
14B 1343SK



78

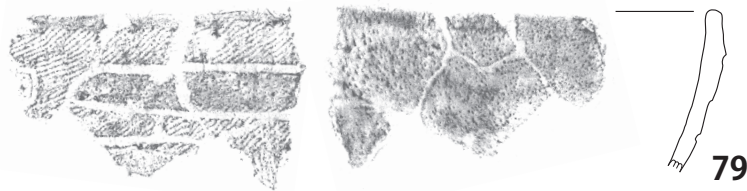
AMS 実施

14B 1278SK



1/6 0

40cm



79

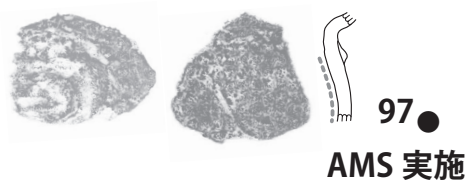
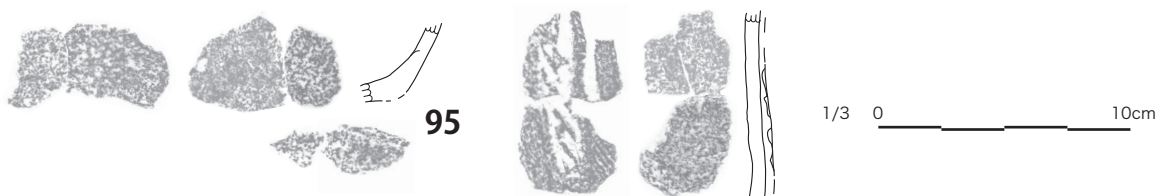
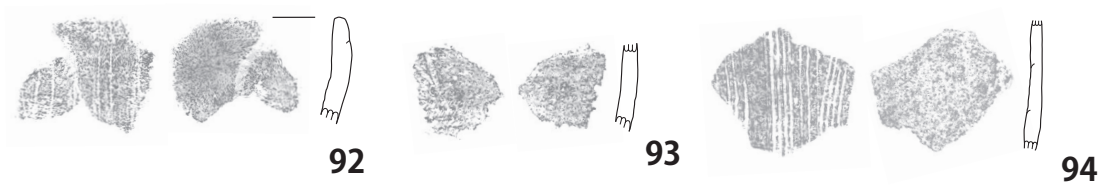
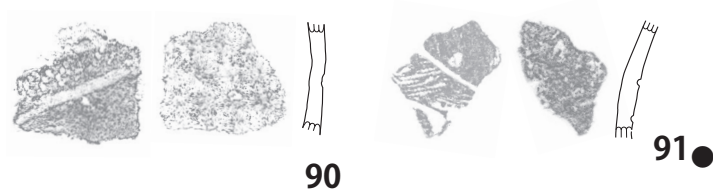
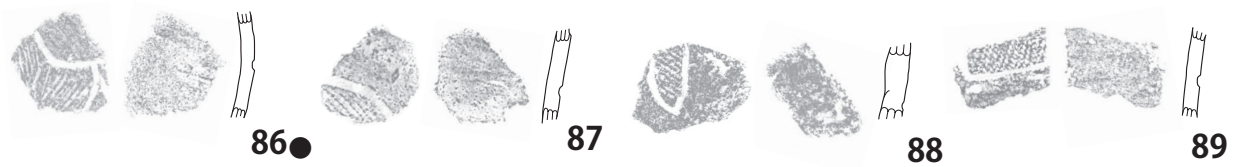
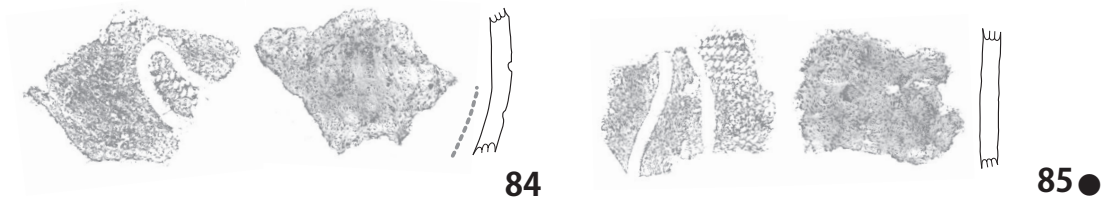
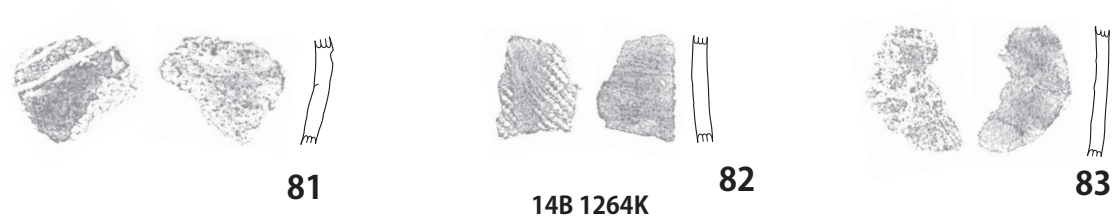


80

14B 1261SP

1/3 0 10cm

図 43 土器・土製品 7 【14B 1201SI・1263SI と関連遺構】



●: 緻密な胎土

図 44 土器・土製品 8 【 14B 1264SK・1265SK 】

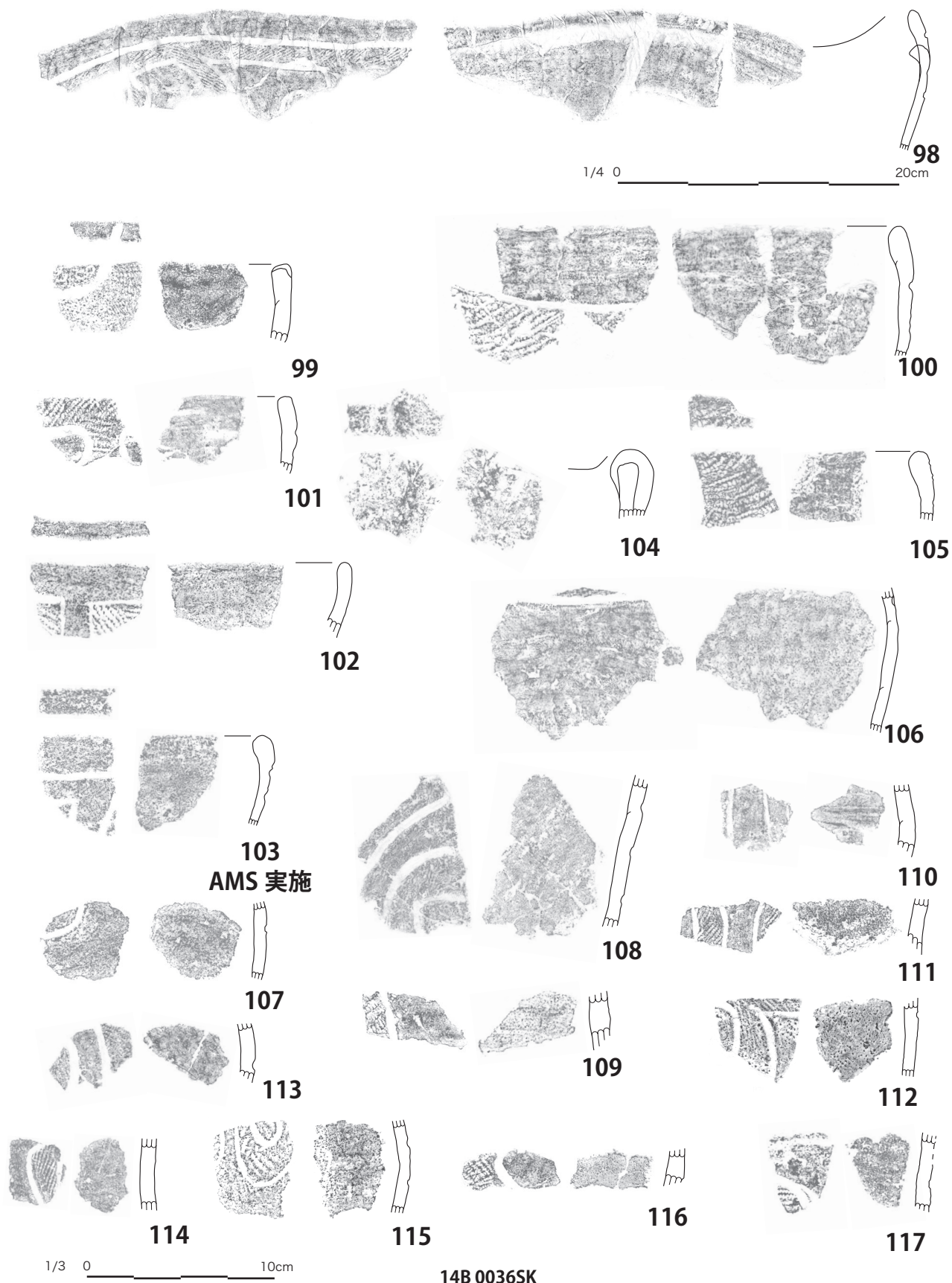
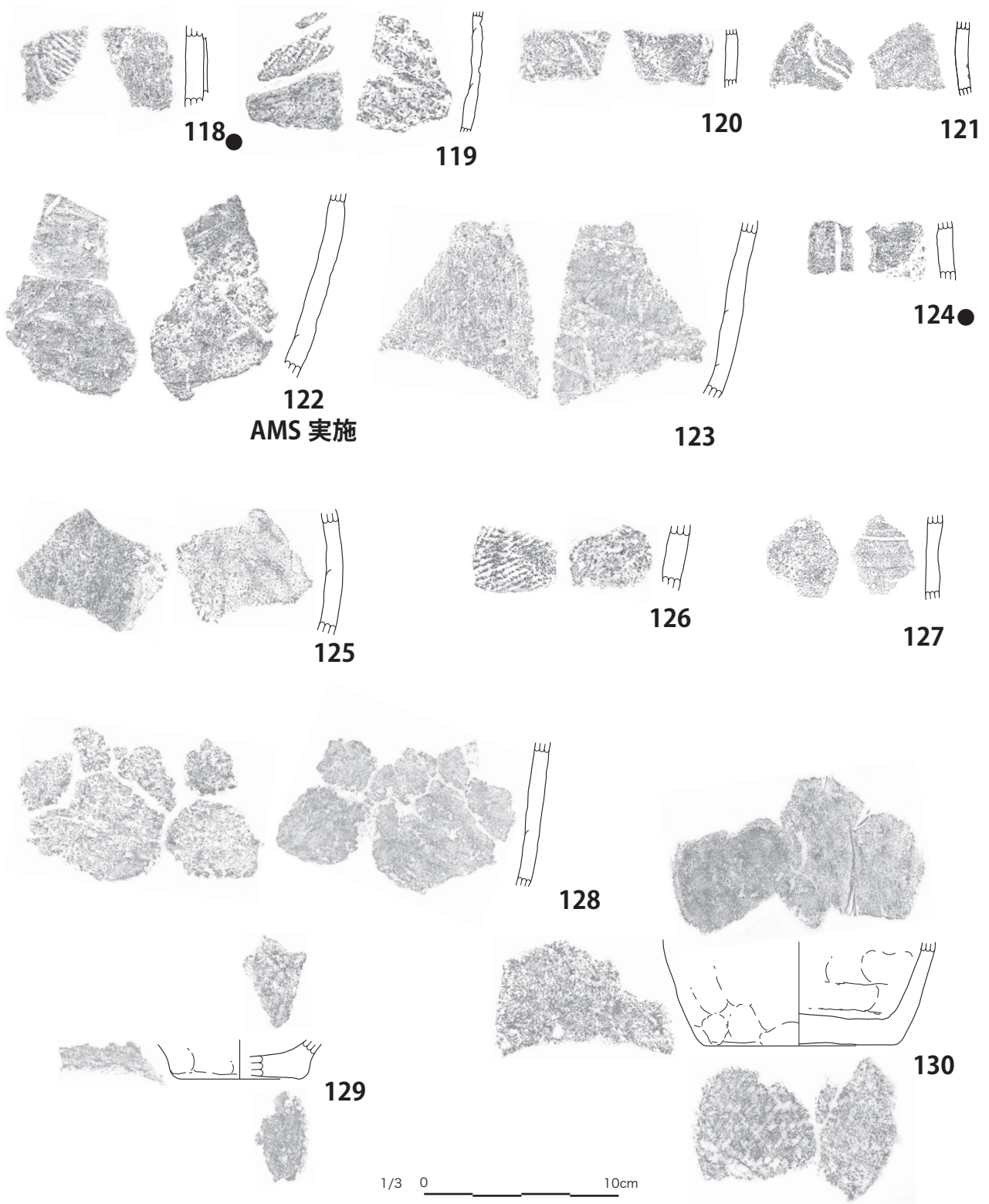


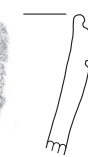
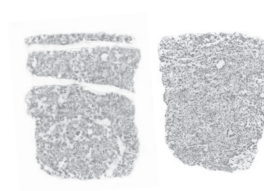
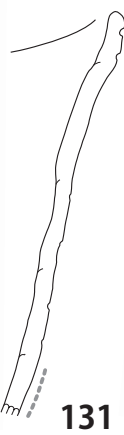
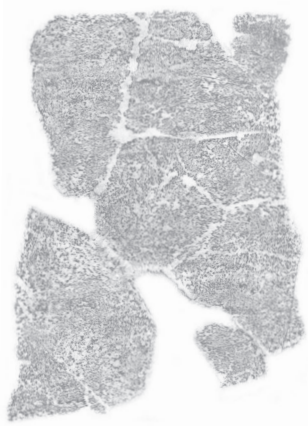
図 45 土器・土製品 9【14B 0036SK】



14B 0036SK

●: 緻密な胎土

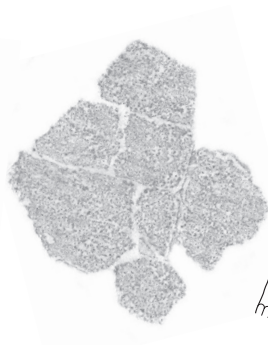
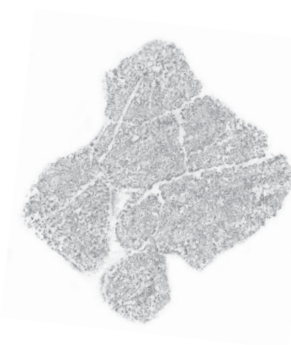
図 46 土器・土製品 10【14B 0036SK】



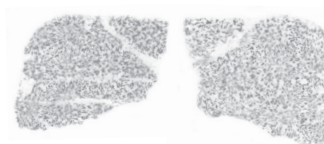
132



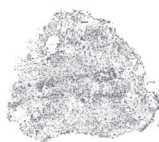
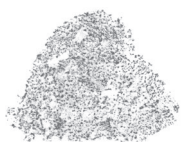
133



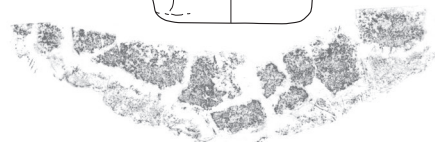
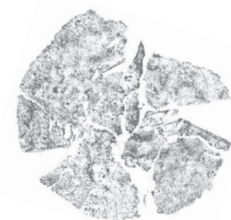
135



134



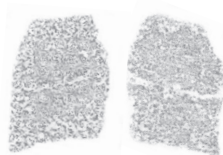
136



139

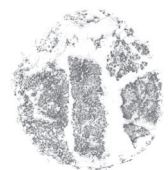


137



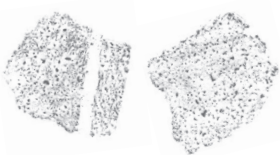
138

14B 1011SK



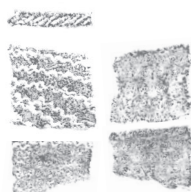
14B 1023SK

140



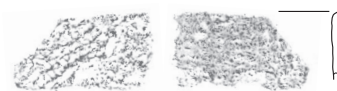
14B 1035SK

141

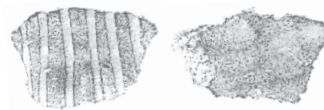


142

14B 1028SK



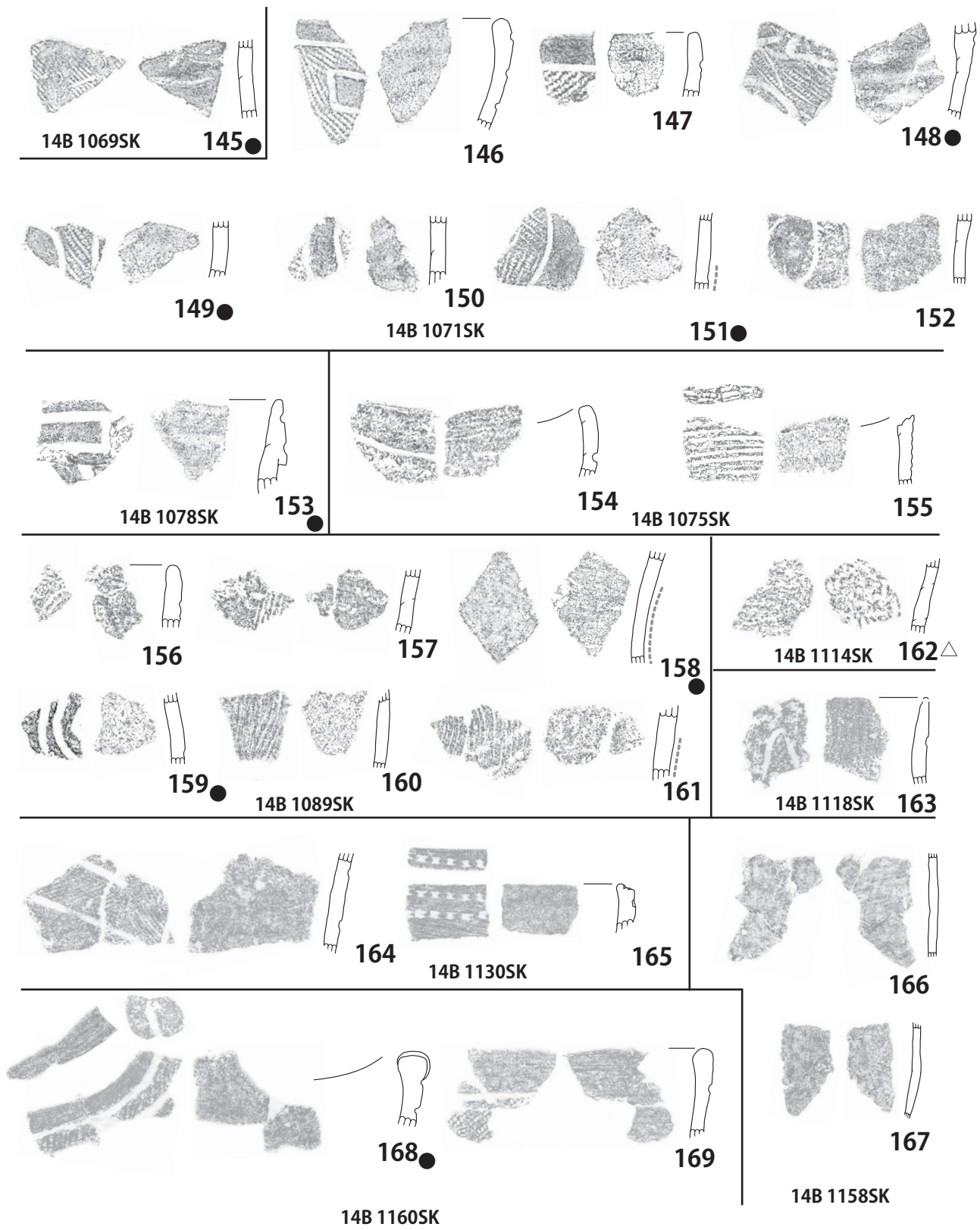
143



144

1/3 0 10cm

図 47 土器・土製品 11 【 14B 1011SK・1023SK・1028SK・1035SK 】



1/3 0 10cm

●:緻密な胎土、△:繊維含む胎土

図48 土器・土製品 12 【 14B 1069SK・1071SK・1075SK・1078SK・1089SK・1114SK・1118SK・1130SK・1158SK・1160SK 】

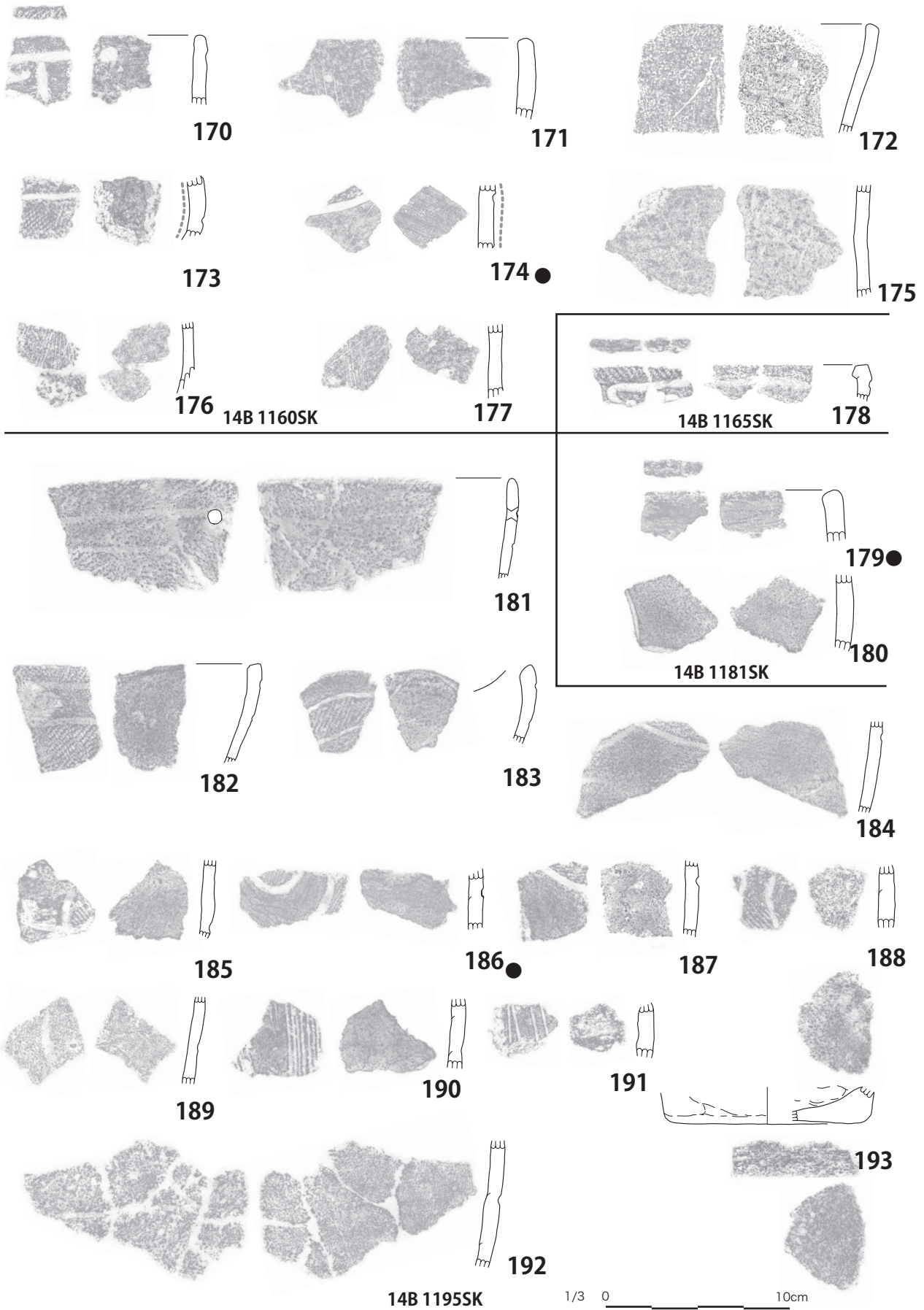


図 49 土器・土製品 13 【 14B 1160SK・1165SK・1181SK・1195SK 】

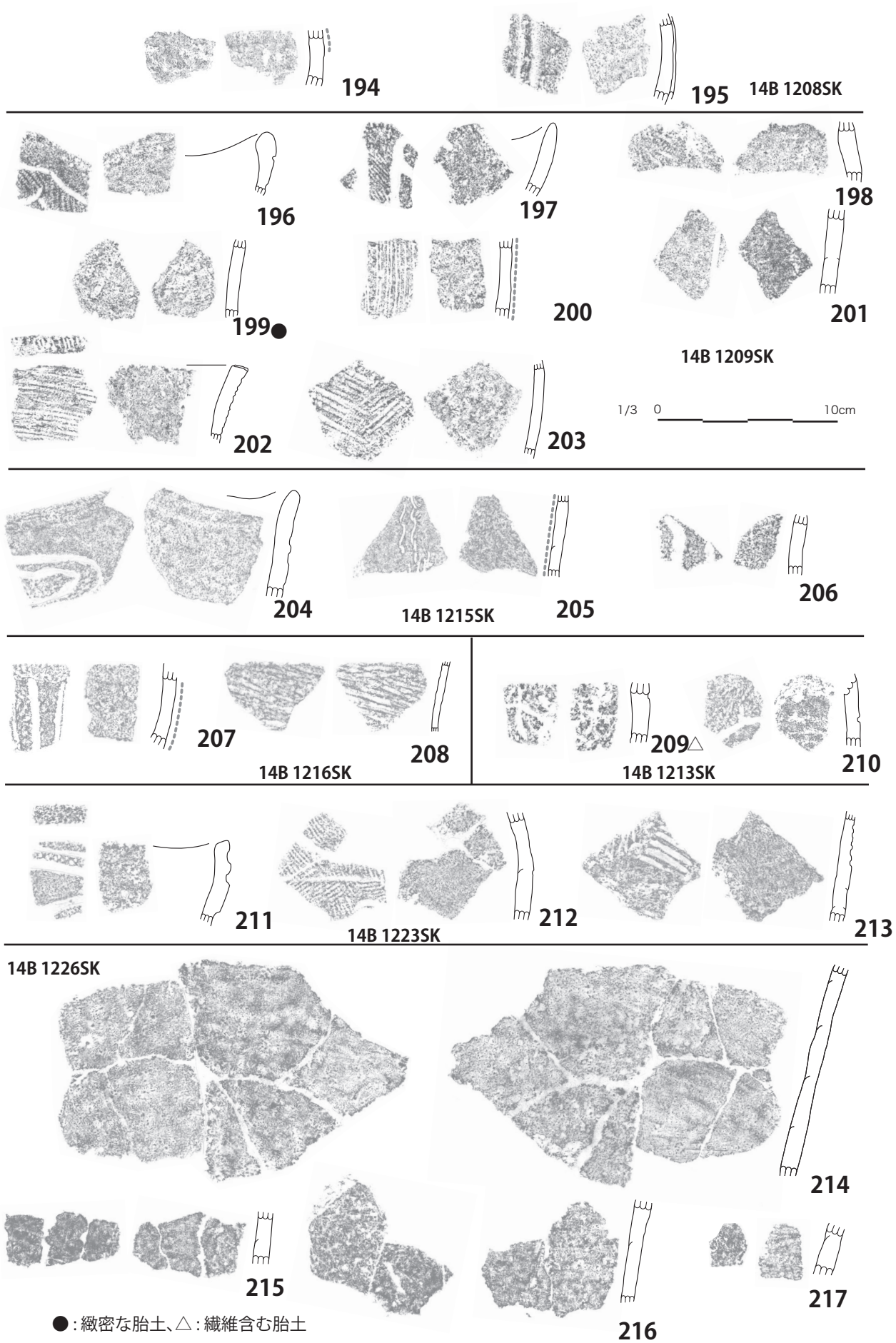
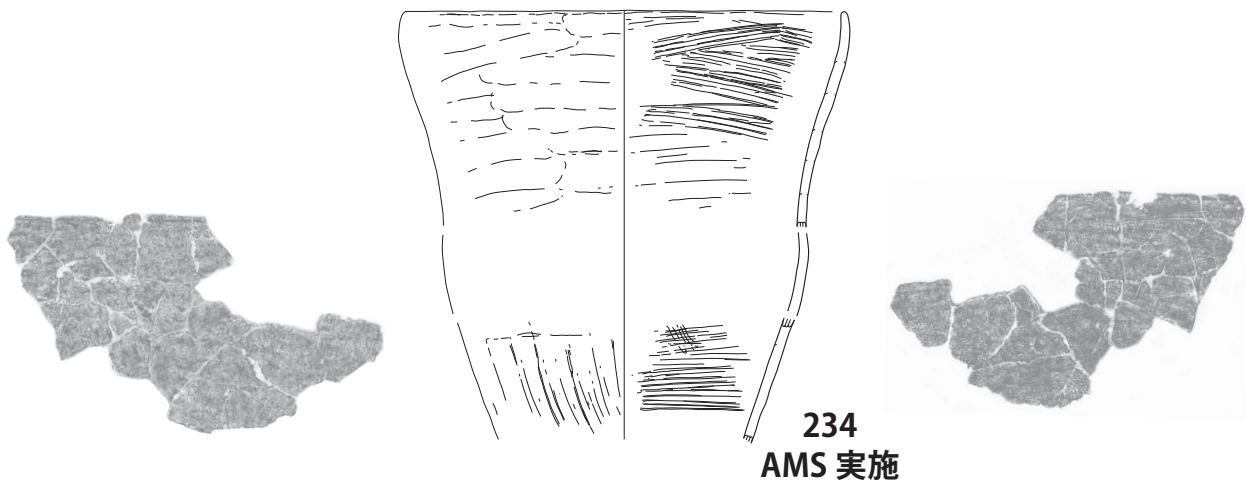
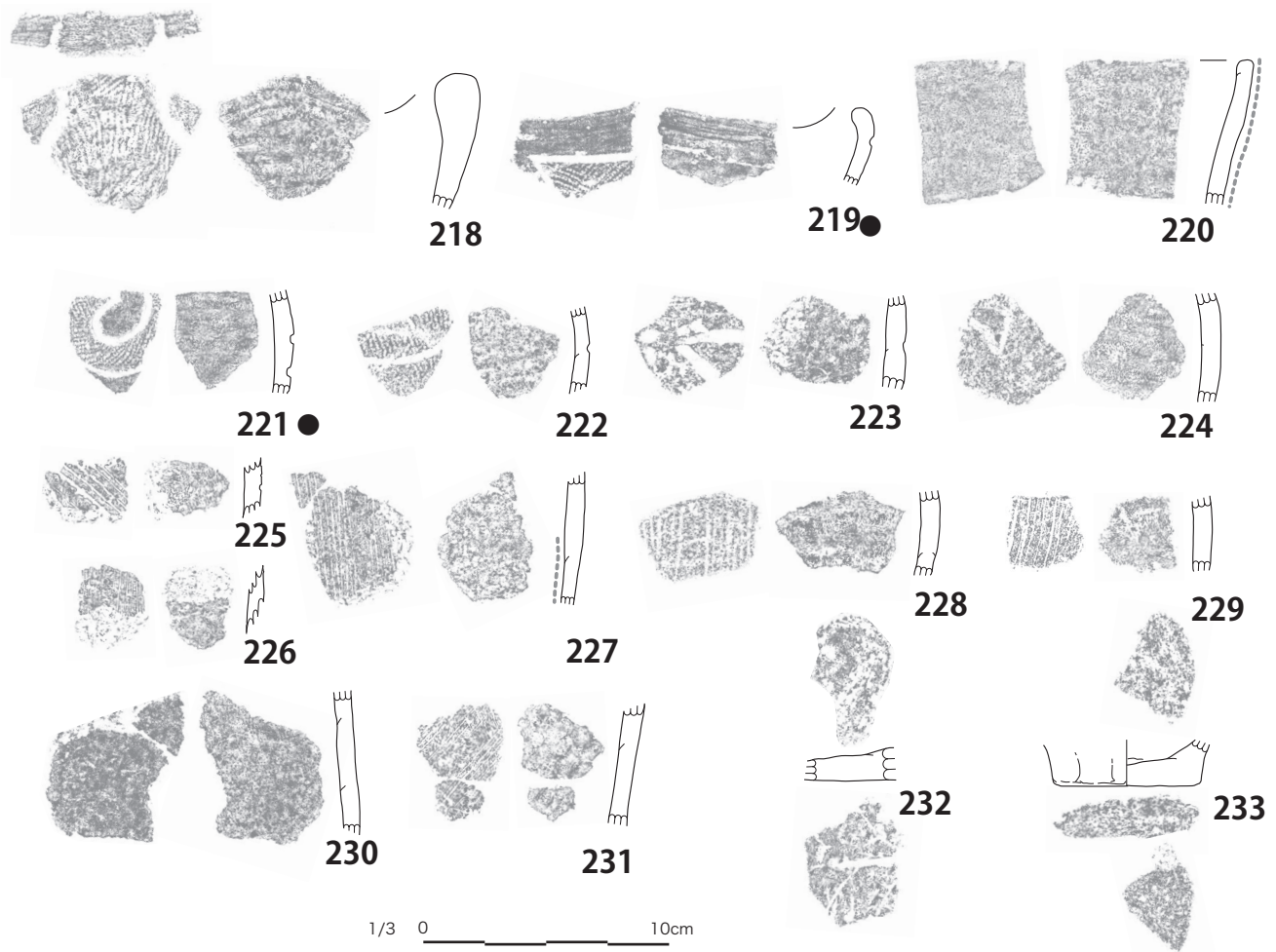


図 50 土器・土製品 14 【 14B 1208SK・1209SK・1213SK・1215SK・1216SK・1223SK・1226SK 】



14B 1224SK

●: 緻密な胎土

図 51 土器・土製品 15【14B 1224SK】

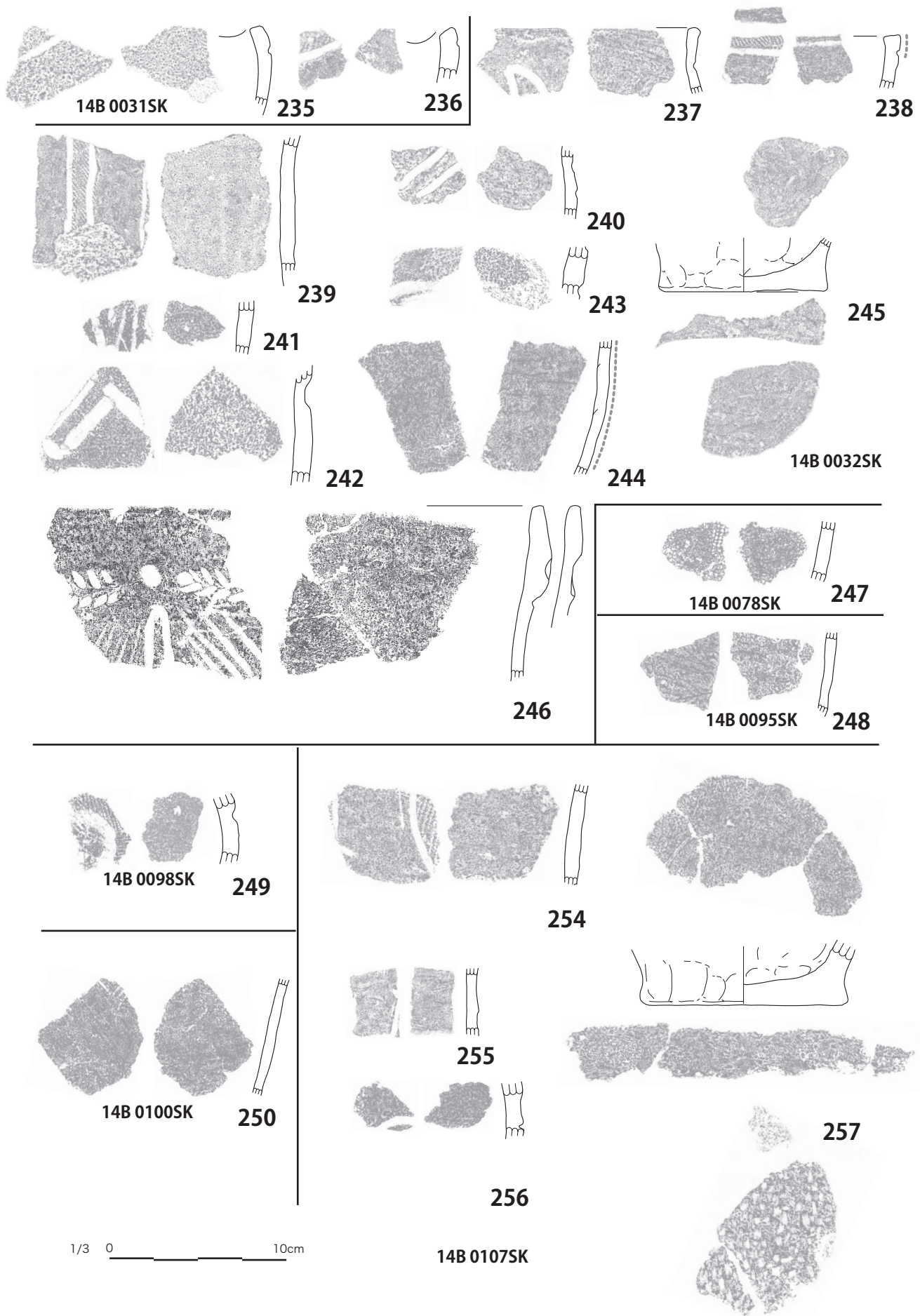
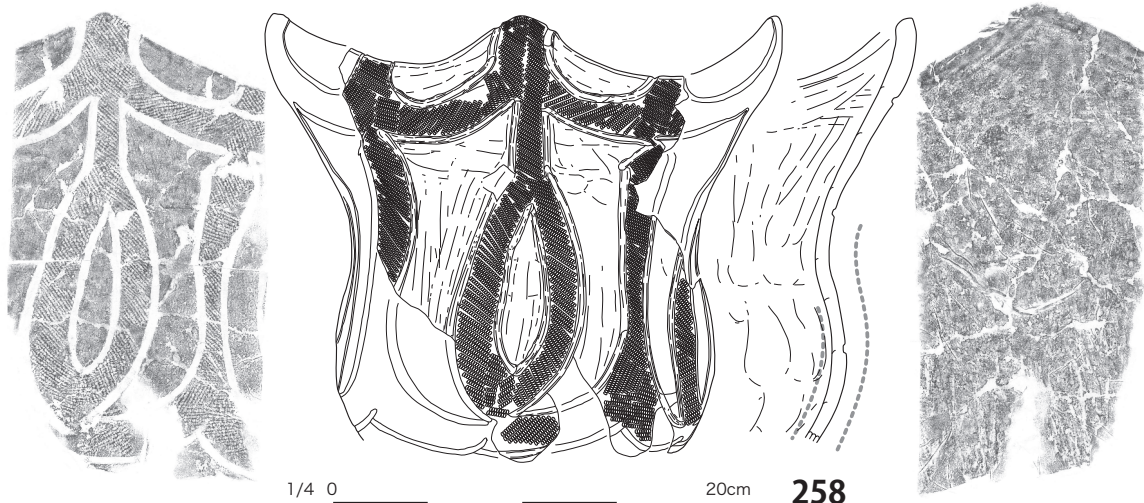
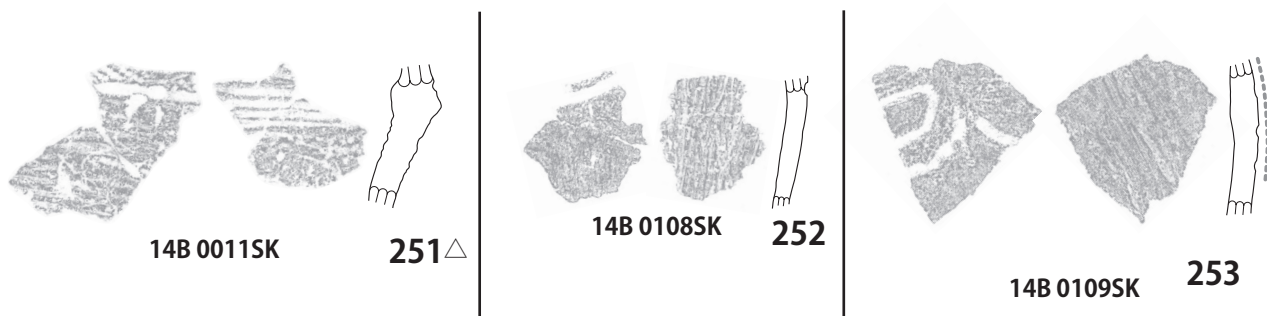
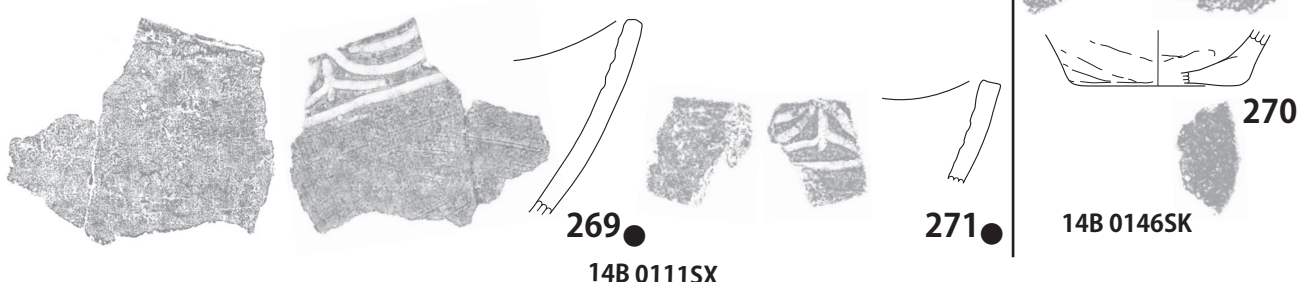
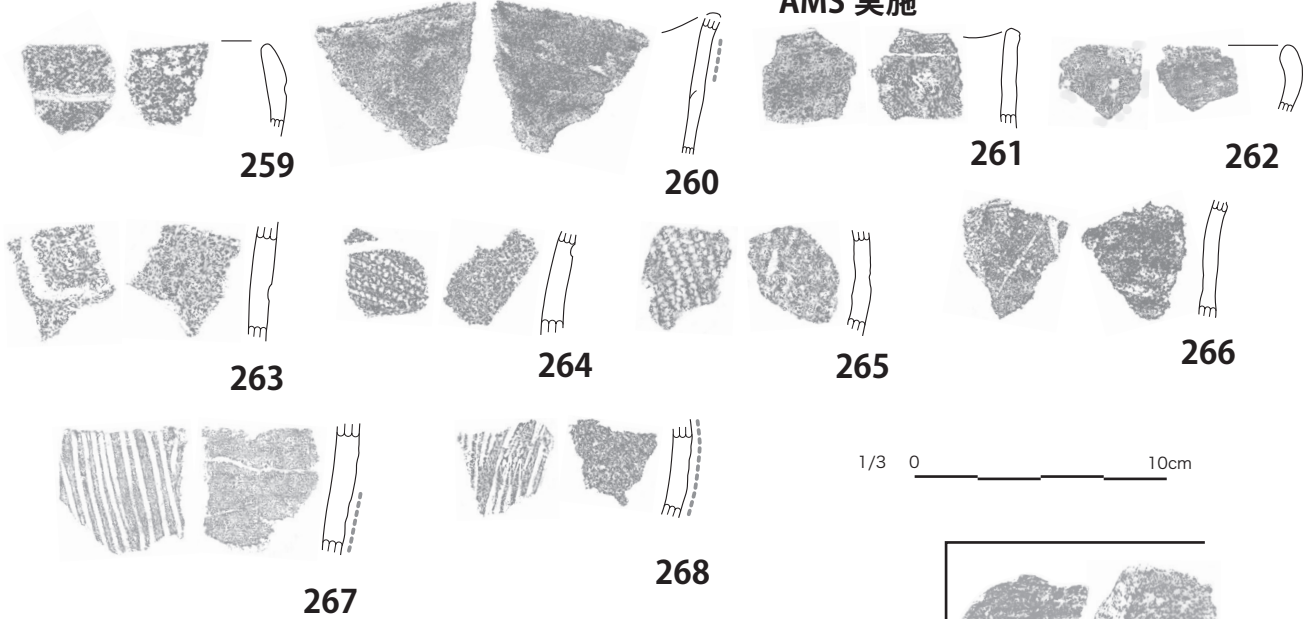


图 52 土器・土製品 16 【 14B 0031SK・0032SK・0078SK・0095SK・0098SK・0100SK・0107SK 】



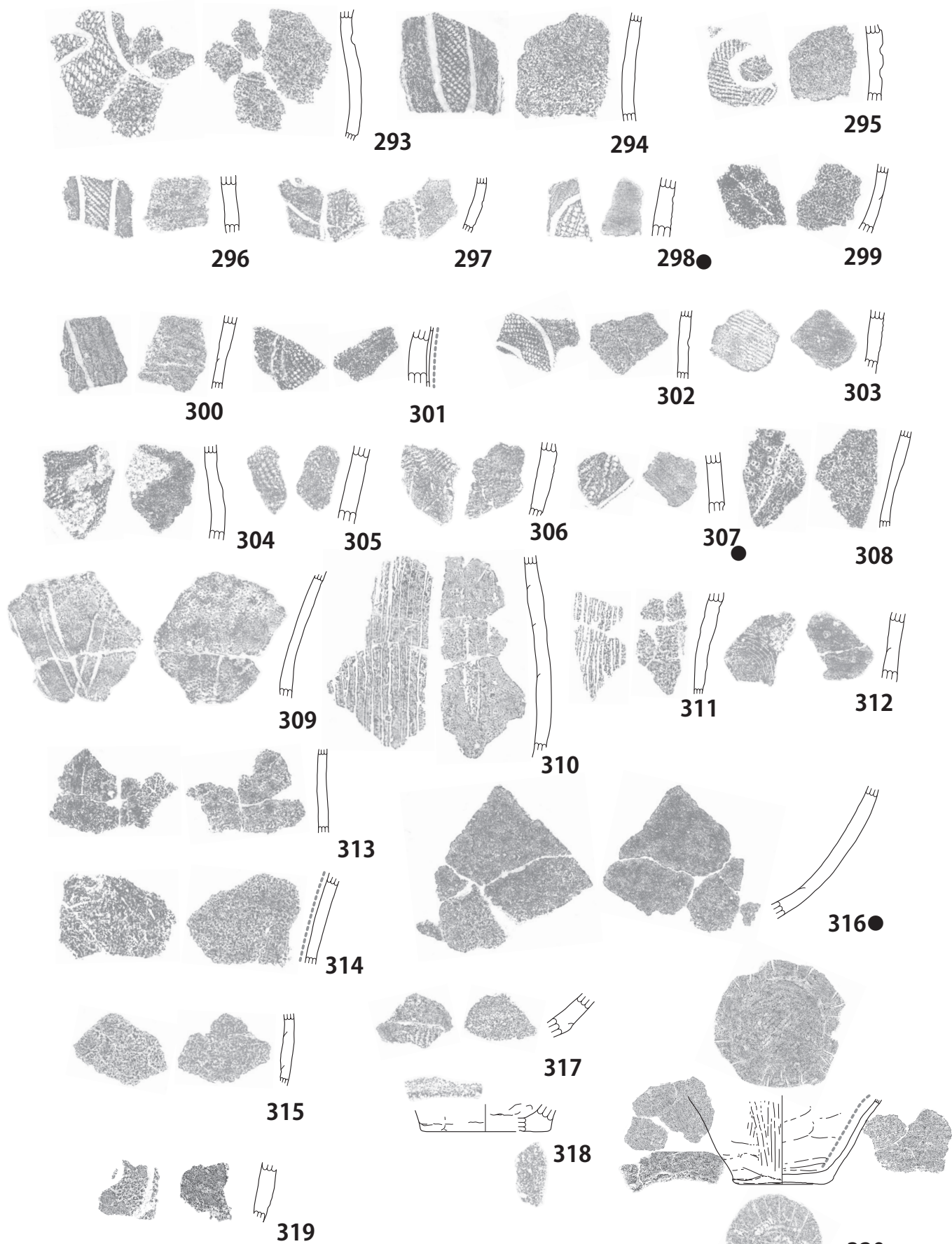
AMS 実施



●: 緻密な胎土、△: 繊維含む胎土

図 53 土器・土製品 17 【 14B 0011SK・0108SX・0109SK・0111SX・0146SK 】





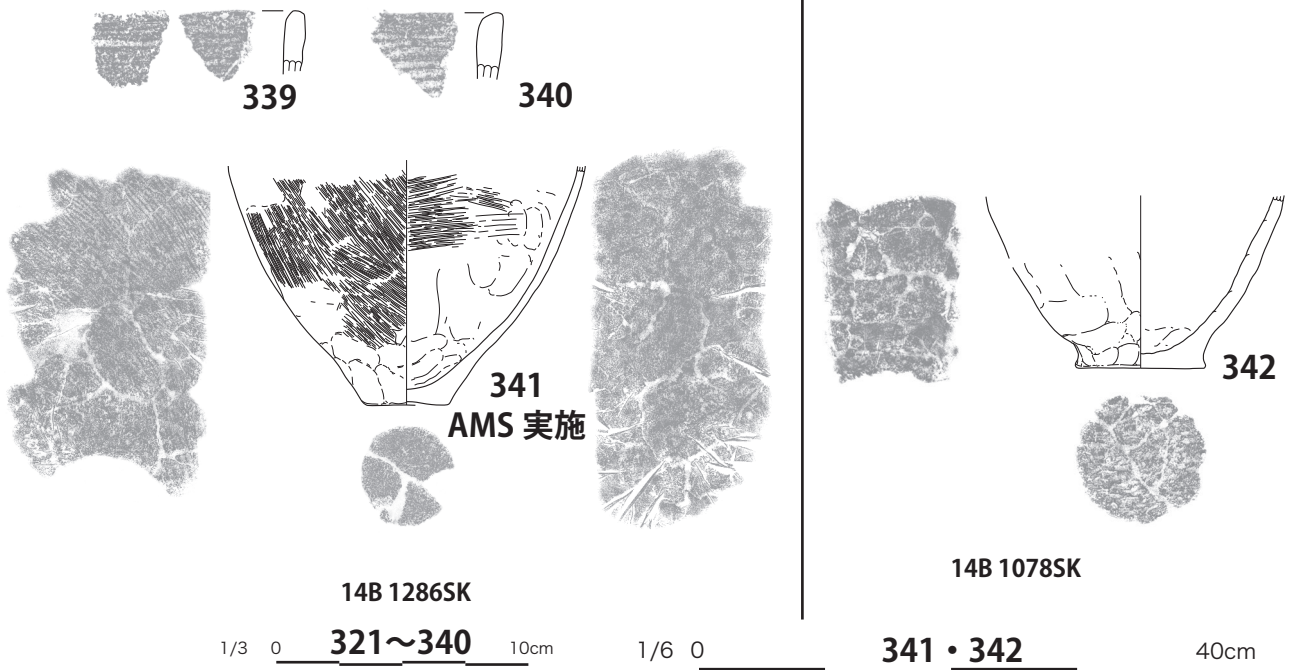
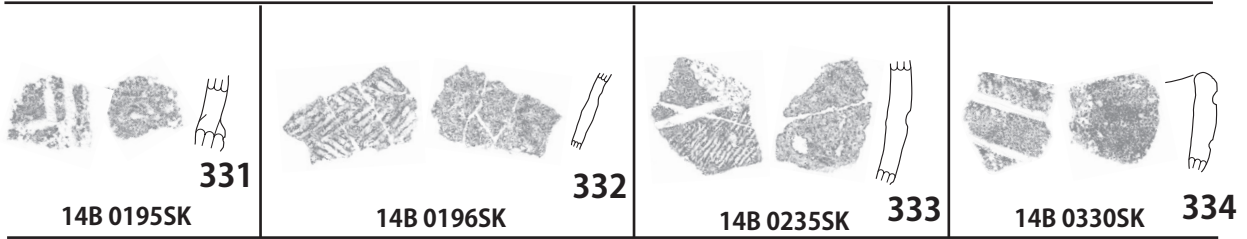
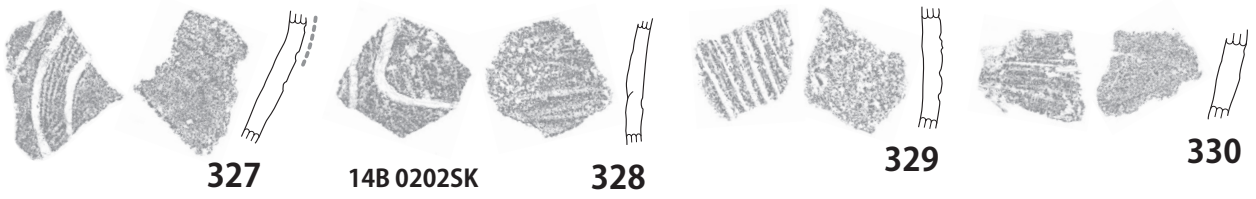
1/3 0 10cm

14B 0184SK

1/6 0 320 40cm

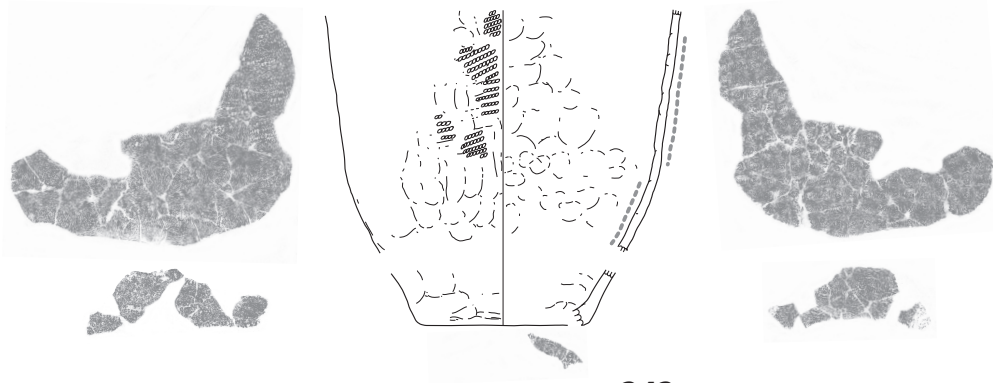
●: 緻密な胎土

図 55 土器・土製品 19【14B 0184SK】



●:緻密な胎土

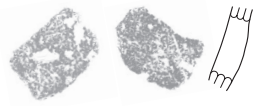
図 56 土器・土製品 20【14B 0194SK・0195SK・0196SK・0202SK・0235SK・0330SK・0270SK・1078SK・1286SK・】



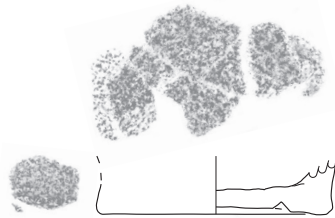
343

1/6 0

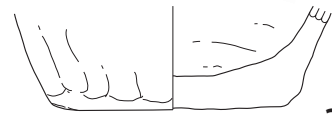
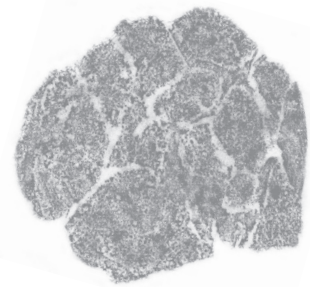
40cm



344 △

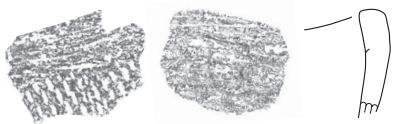


345



346

16 165SK



347

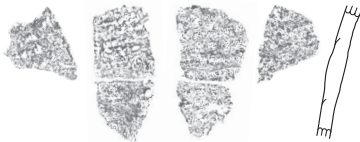


348

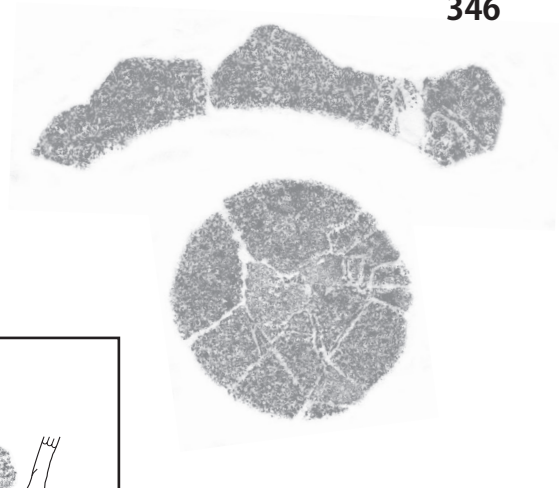
16 303SK



349



350



1/3 0

10cm

△: 纖維含む胎土

図 57 土器・土製品 21 【 16 165SK ・ 303SK 】

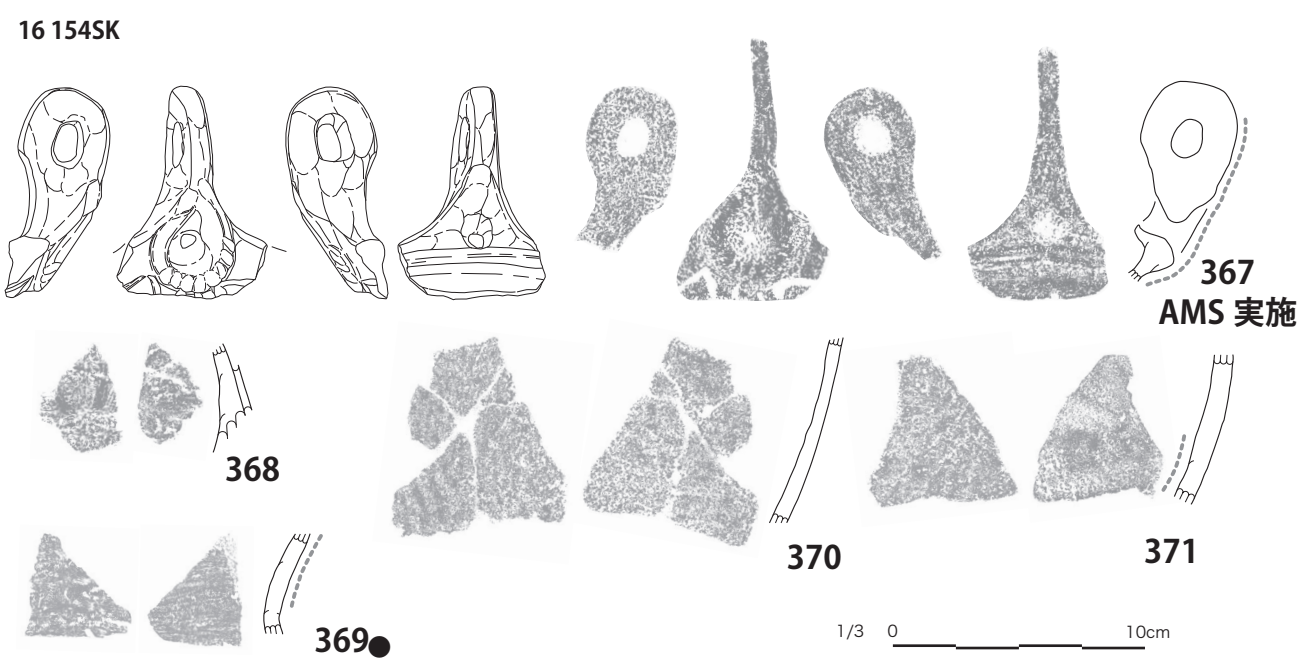
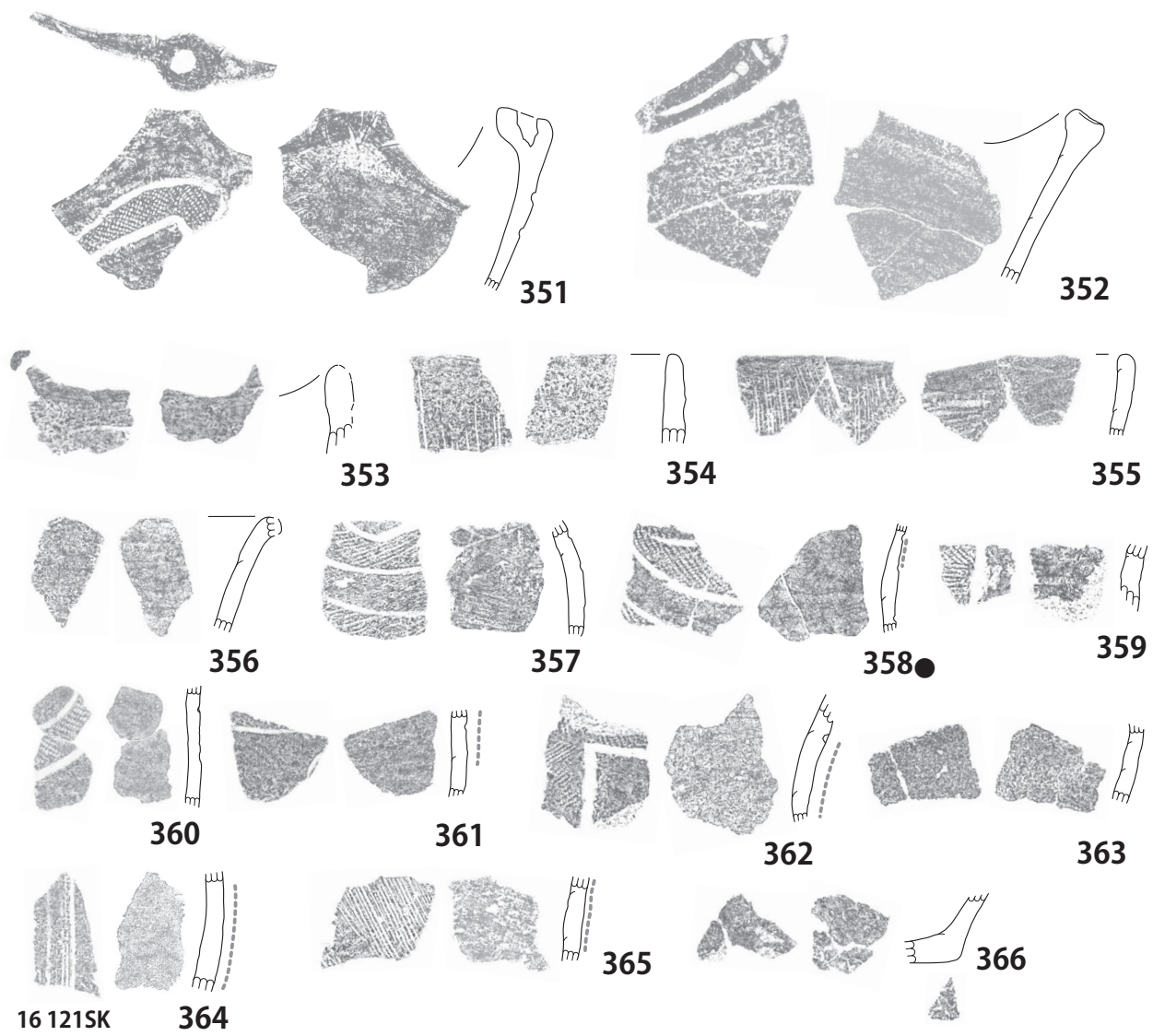


図 58 土器・土製品 22 【 16 121SK・154SK 】

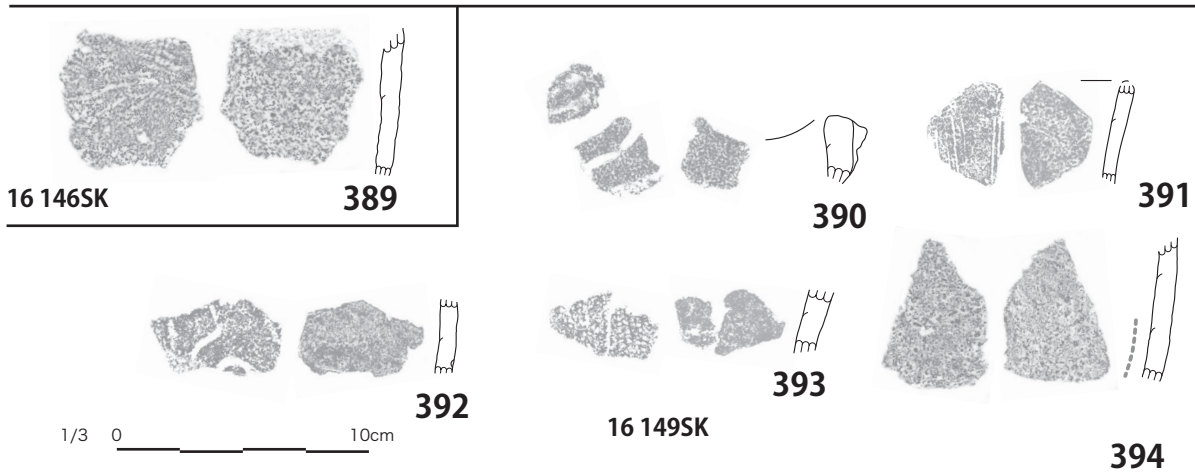
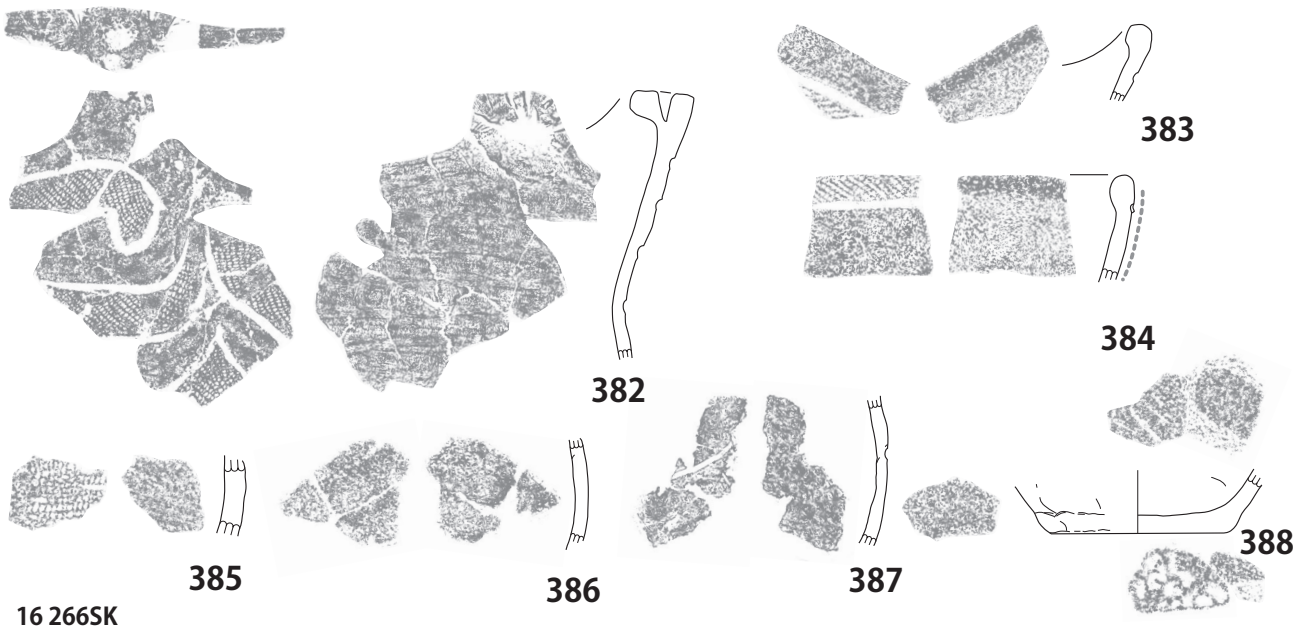
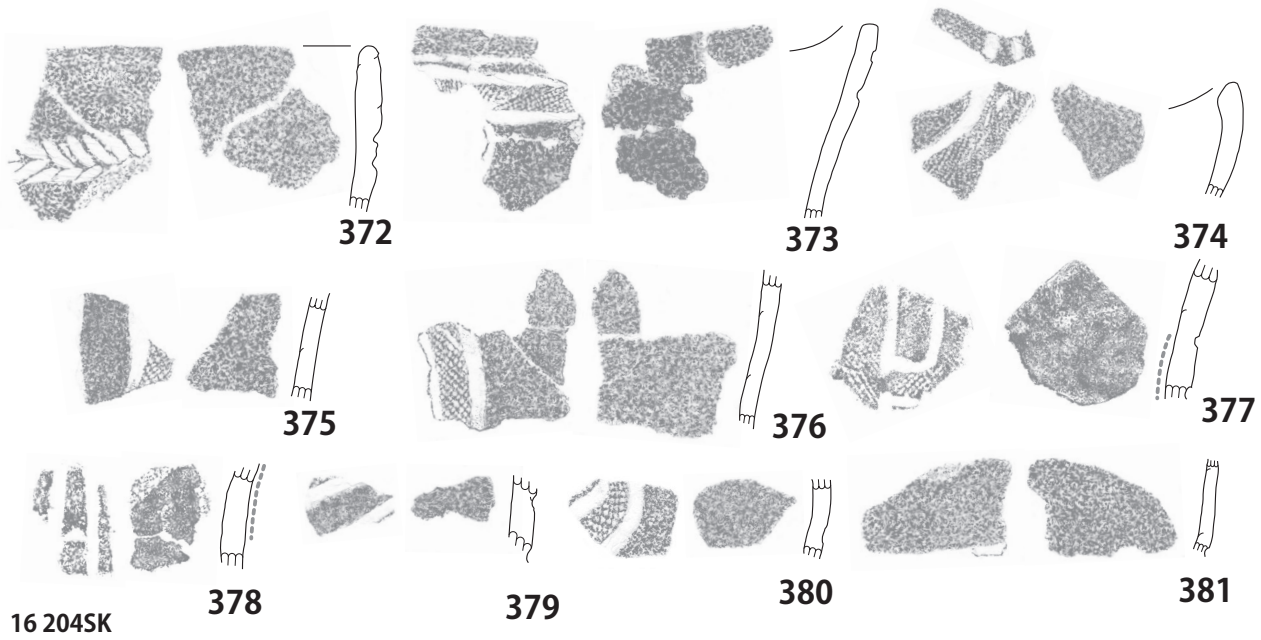


図 59 土器・土製品 23 【 16 146SK・149SK・204SK・266SK 】

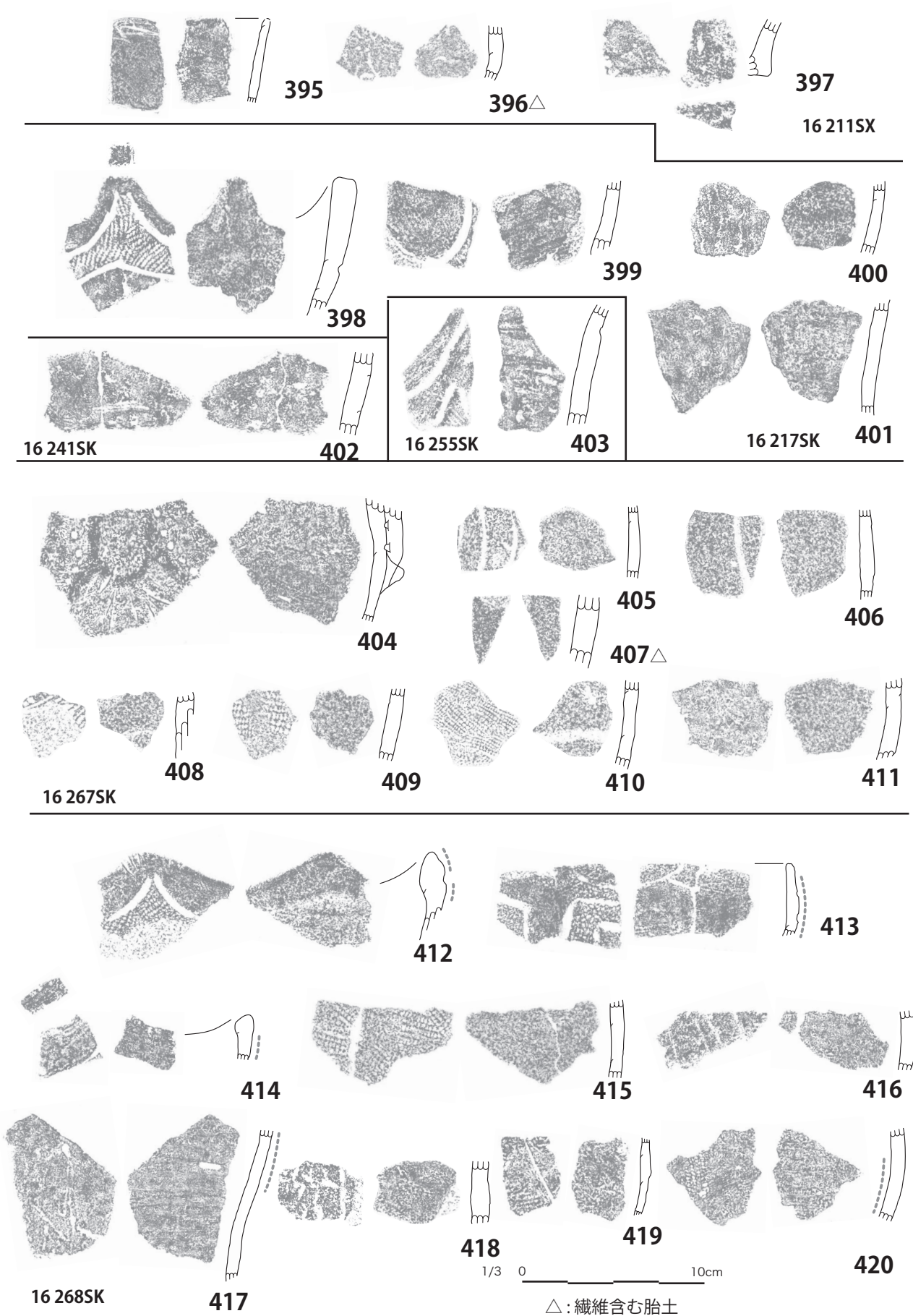


図60 土器・土製品24【16 211SX・217SK・241SK・255SK・267SK・268SK】

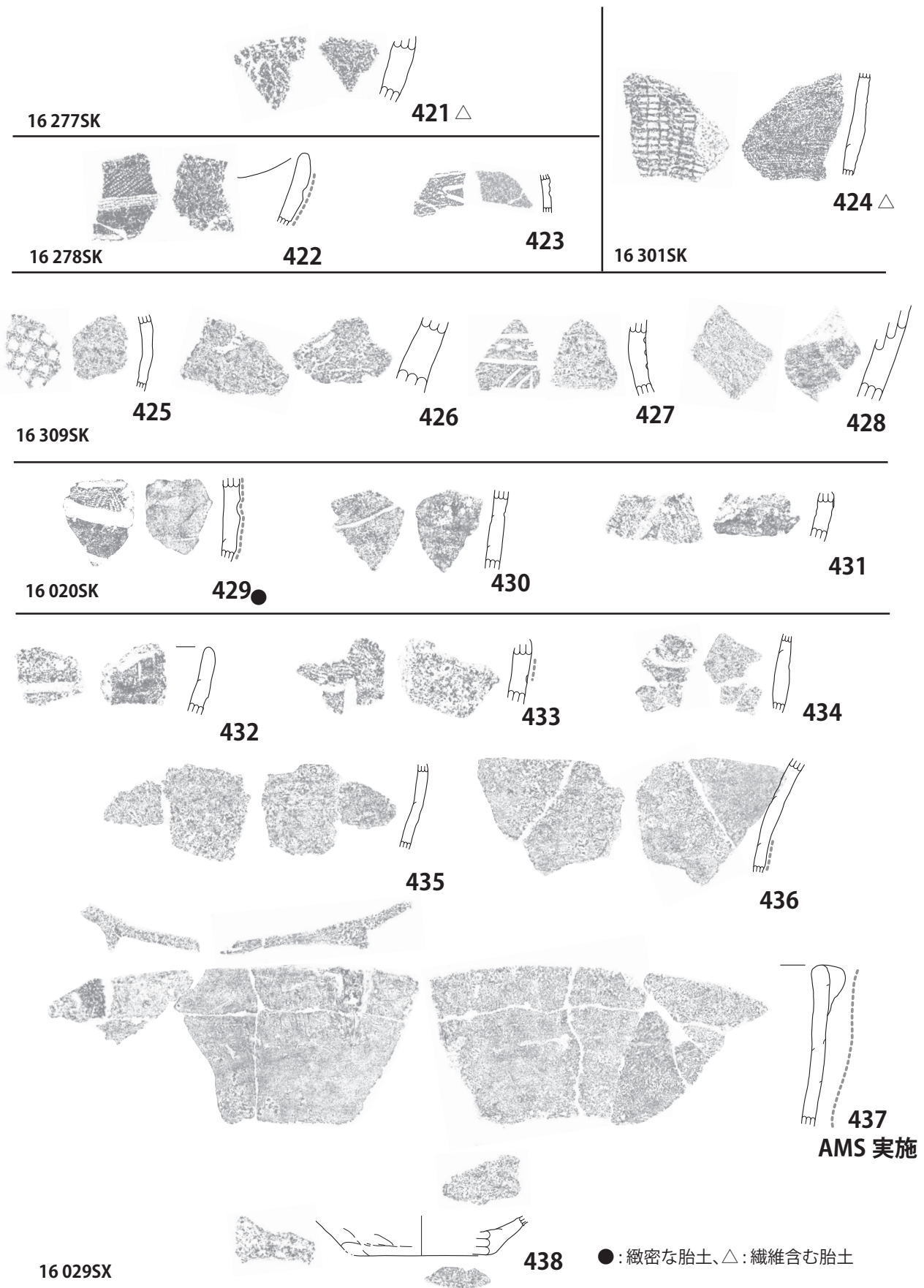


図 61 土器・土製品 25 【 16 277SK・278SK・309SK・020SK・029SK 】

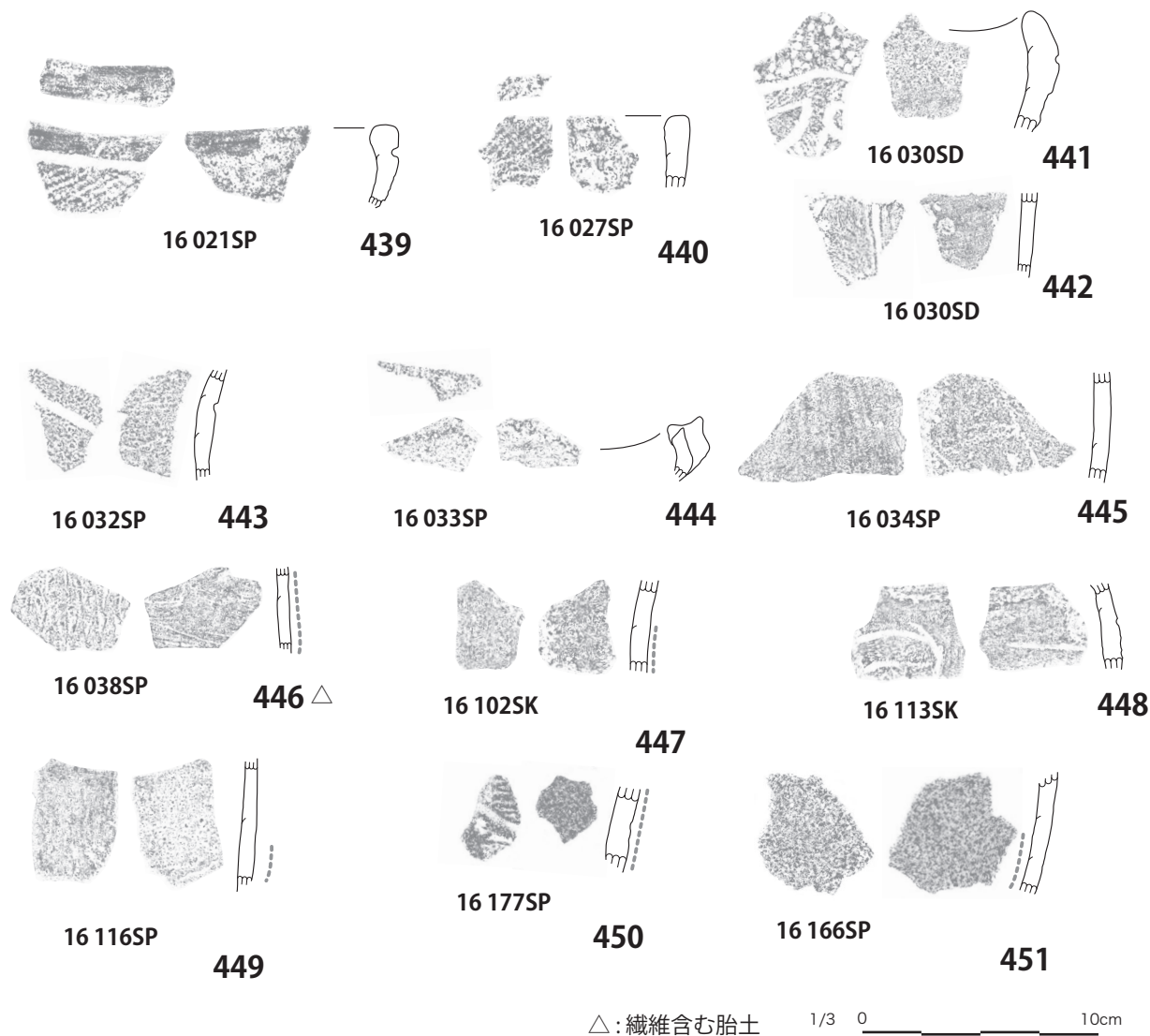
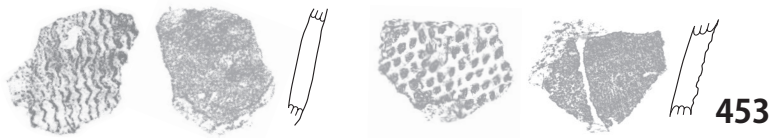


図 62 土器・土製品 26【16 各遺構内】

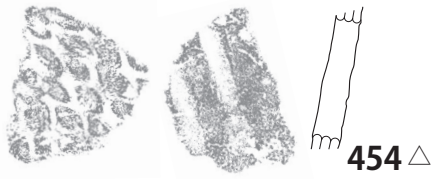
る。最大径に対して底部はしっかりと大きく、若干の凹底の形状を呈する。底面には編組製品圧痕があり、組み方は2本越え・2本潜り・1本送りのゴザ目である。40は胴部の最大径付近と考えられるものである。二次的な被熱のためか、表面の遺存状況は良好ではない。二条の沈線による横長の区画となるようで、弧状を呈すると思われる。41～54は39・40脇に敷かれていた土器敷炉跡を構成した土器片である。41は口縁部から胴部に向かって直線的に立ち上がる器形である。口縁部直下は横方向に無文帯があり、そこ

から沈線区画によって縦長のJ字文が施されている。J字の周りはやや入り組んだ文様となっており、沈線区画内に縄文RLが充填されている。42は口縁端部と沈線間に縄文LRによる充填のある口縁部片、43は胴部上半に弧状を示す沈線区画に縄文LRが充填されている。45は胴部下半で、横方向に展開する紡錘文が文様下で連結している構図となっている。文様は沈線区画内に縄文RLが充填されていることによる。46～50は、渦巻文や紡錘文など、縄文が充填された沈線区画によって文様が展開するものである。51は波状  
(本文 82 頁へ続く)

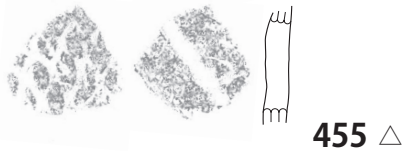


452 △

453



454 △

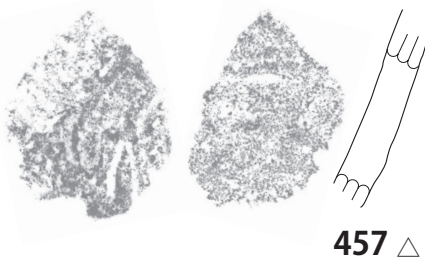


455 △

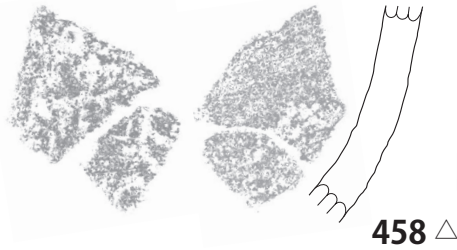


456 △

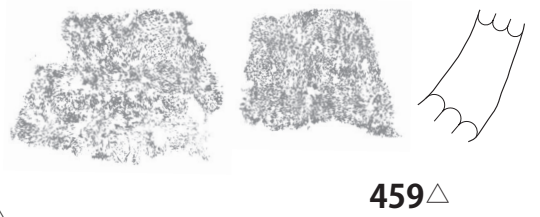
14B 1305SI 炉跡掘り方



457 △



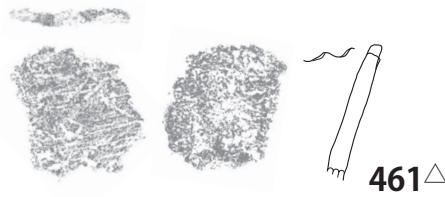
458 △



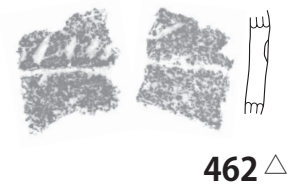
459 △



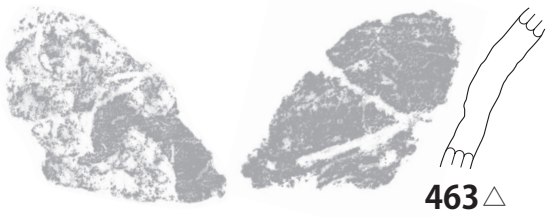
460 △



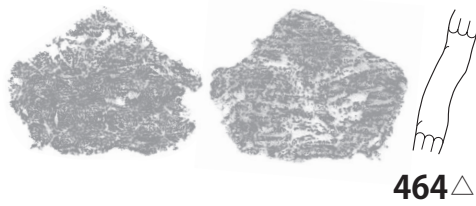
461 △



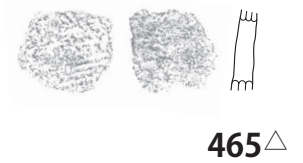
462 △



463 △



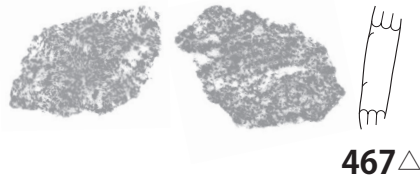
464 △



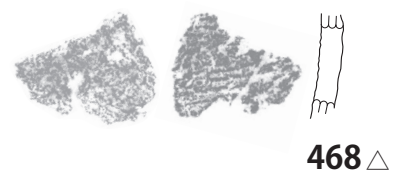
465 △



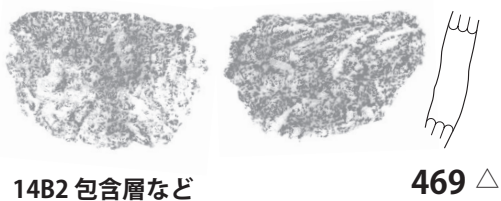
466 △



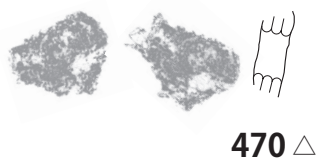
467 △



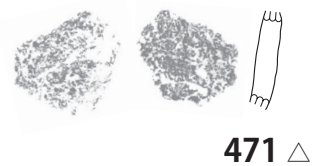
468 △



469 △



470 △



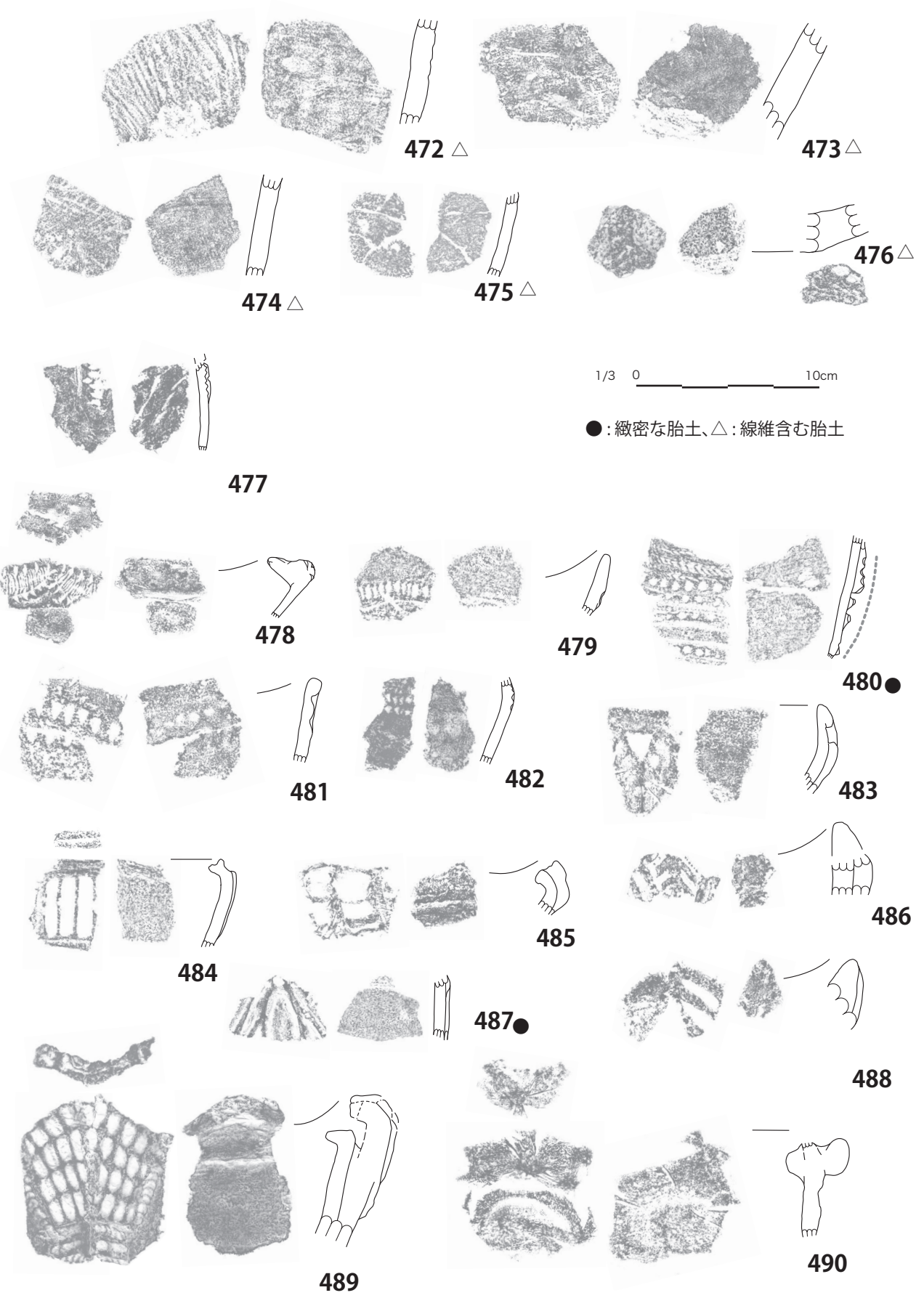
471 △

14B2 包含層など

△: 繊維含む胎土

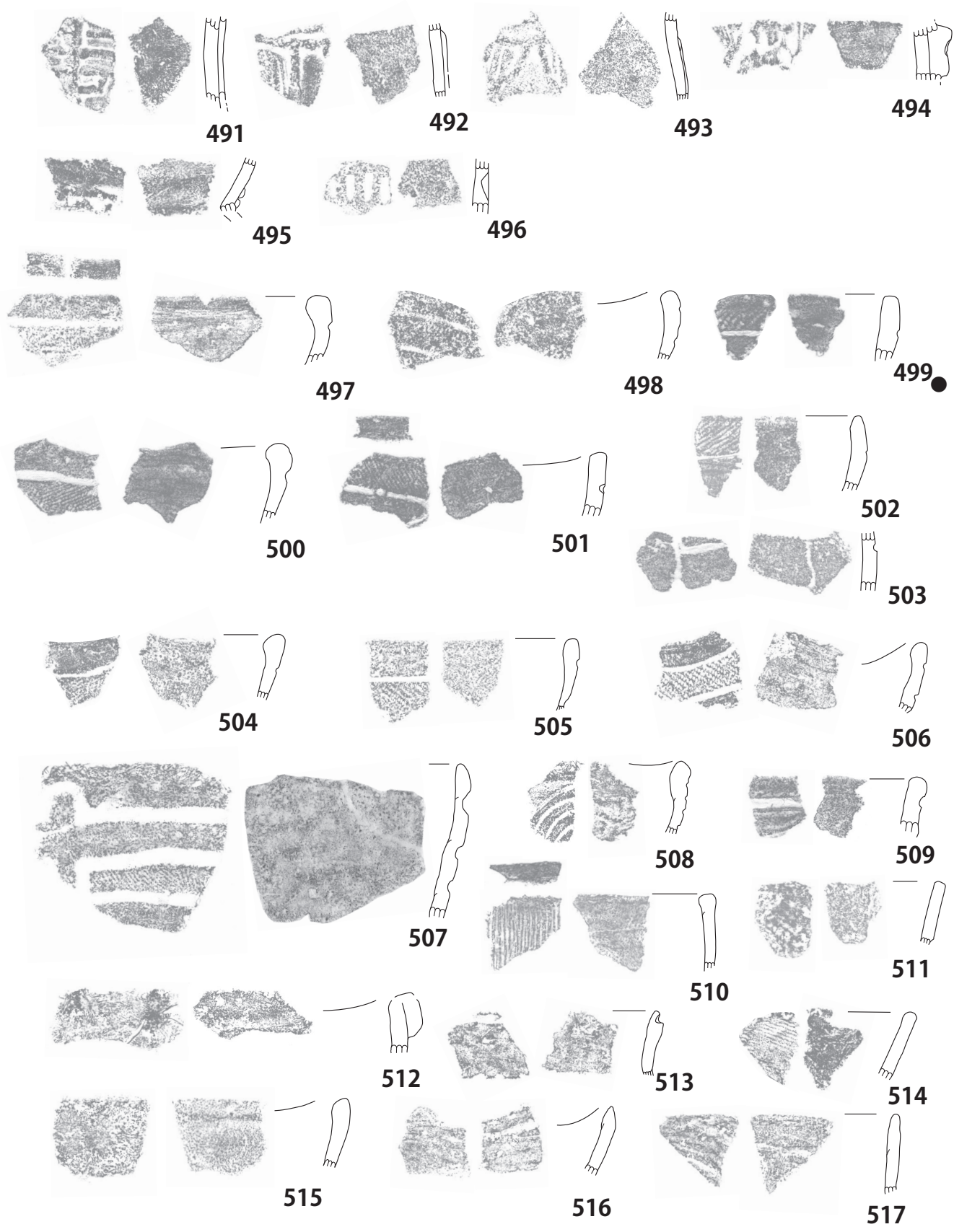
1/3 0 10cm

図 63 土器・土製品 27 【 14B 1305SI ・ 検出 2 】



14B2 包含層など

図 64 土器・土製品 28 【14B 検出 2】



14B2 包含層など

●: 緻密な胎土

図 65 土器・土製品 29 【14B 検出 2】



図 66 土器・土製品 30【14B 検出 2】

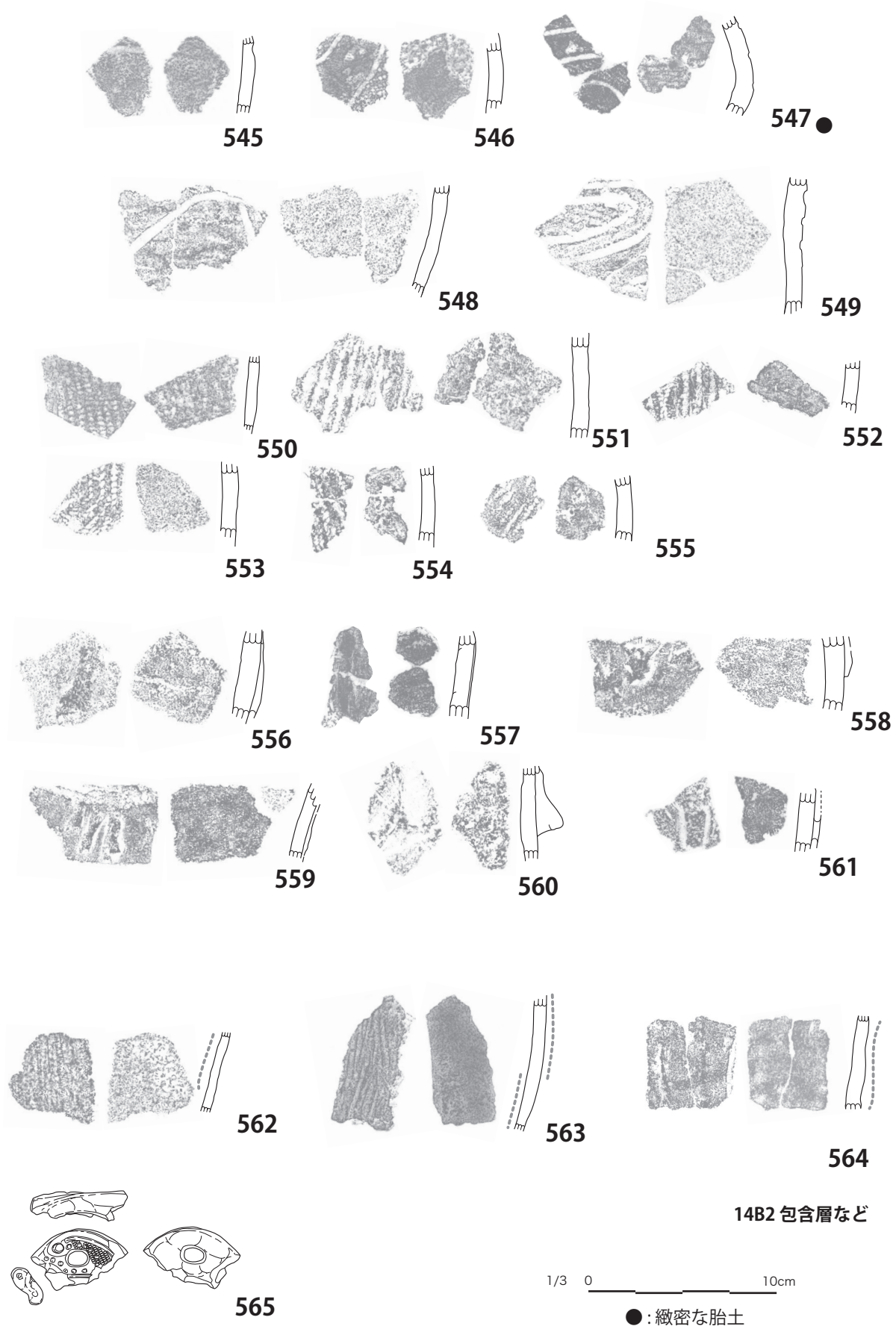


図67 土器・土製品31【14B 検出2】

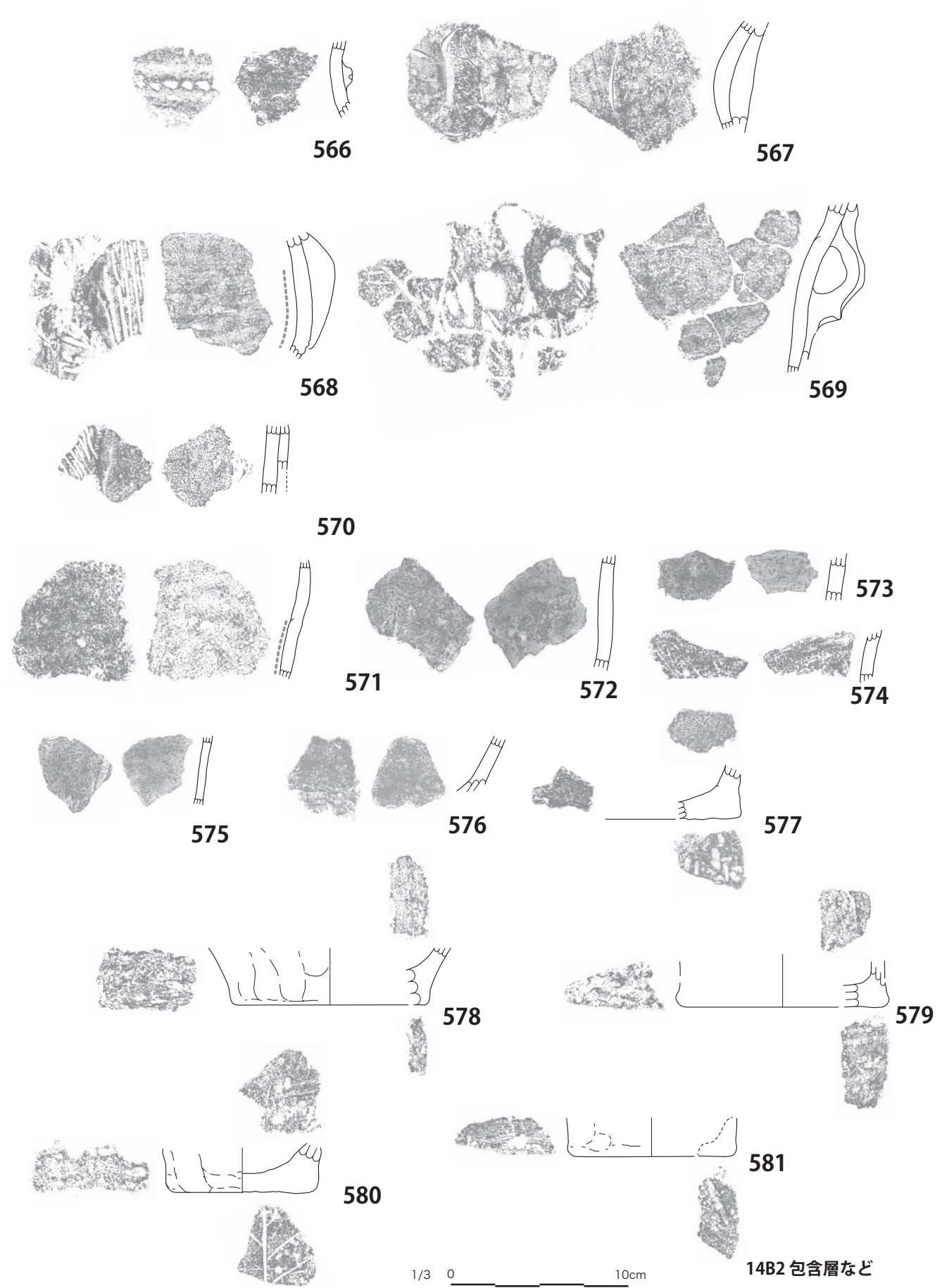


図 68 土器・土製品 32 【14B 検出 2】

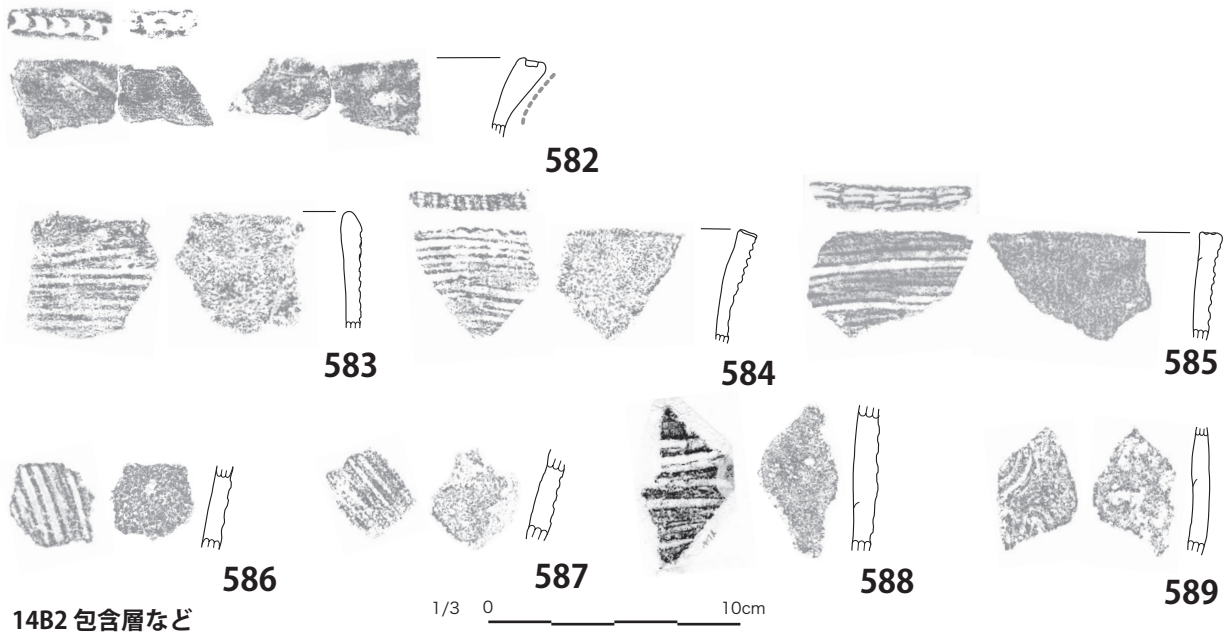


図 69 土器・土製品 33【14B 検出 2】

を呈する深鉢口縁部片で、表面全体に縄文 LR が施されている。52 は土器の耳の部分と思われる。中世以降の鍋の一部の可能性もあり、混入かもしれない。55～58 は 1201SI の埋土掘削時に出土したものである。55 は器面に縄文 LR が施されている。56 の表面には垂直方向あるいは斜方向に櫛状工具による条線が施されている。74～77 は炉形成前の土坑 1343SK 出土資料である。74 は器面両面ともにナデ、75 は弧状の沈線区画内に縄文 LR の充填、76 は縄文 LR、77 は縄文 RL が施されている。

これら土器群も、一部詳細な時期の特定し得ない第 8 群も含まれるものの、第 7 群土器の中津式・称名寺式の新相を示すものと考えられる。なお、43 のみ胎土が極めて緻密である。

**14B 1263SI と関連遺構** (図 42・43) 68～73 は 1263SI の炉跡、1273SL の焼土中からまとまって出土したものであり、土器敷炉構成していた土器片と考えられる。68・69 は同一個体、胴部中位が著しく屈曲する深鉢片である。口

縁直下は無文帯、その下には横方向に沈線区画が展開する。区画する沈線は途切れており、その部分を起点として、紡錘文が施されている。この沈線も、他の沈線と重なることはなく、間隔が認められる。区画内には、縄文 LR が充填されており、紡錘文に関しては、帯状の区画内側にも縄文が認められる。無文部分の外側はナデあるいはミガキ、裏面はナデである。裏面のナデについては、横方向に線状の痕跡が認められる。71～73 は沈線区画や充填縄文が施されるものである。78 は 1278SK 埋甕使用土器である。胴部上方でゆるく屈曲するものの、口縁に向かってラッパ状に開く器形である。口縁直下は無文帯で、その無文帯から伸びるように横長の J 字文が横方向に展開する。文様は口縁部から胴部上半のみで、この間に三段の同一文様が配置されている。底部は大きく作られており、平底、底面には編組製品圧痕が認められる。組み方は 2 本越え・2 本潜り・1 本送りのゴザ目である。79・80 は 1263SI を構成するピット 1261SP からの出土資料である。口

(本文 95 頁へ続く)

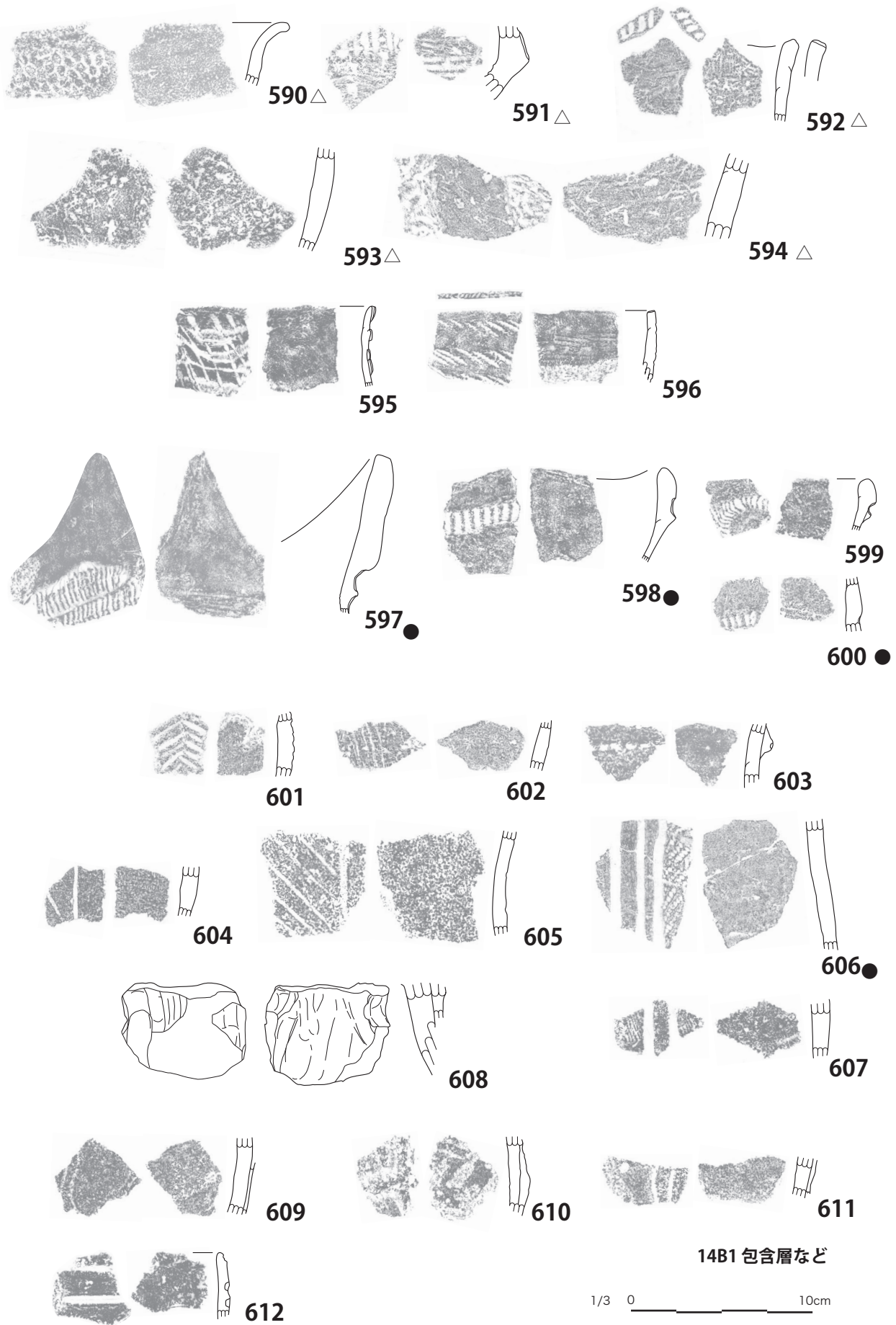
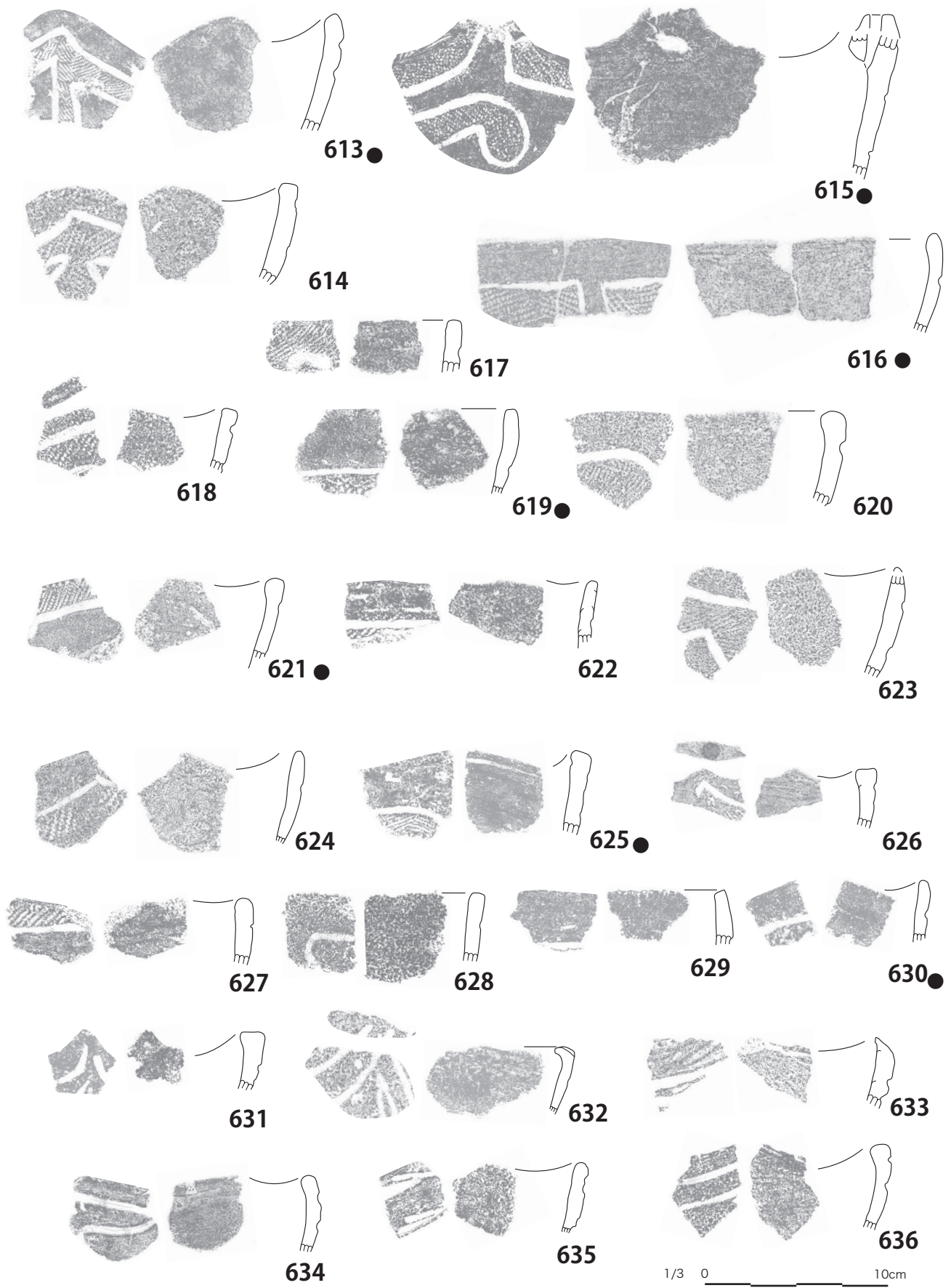
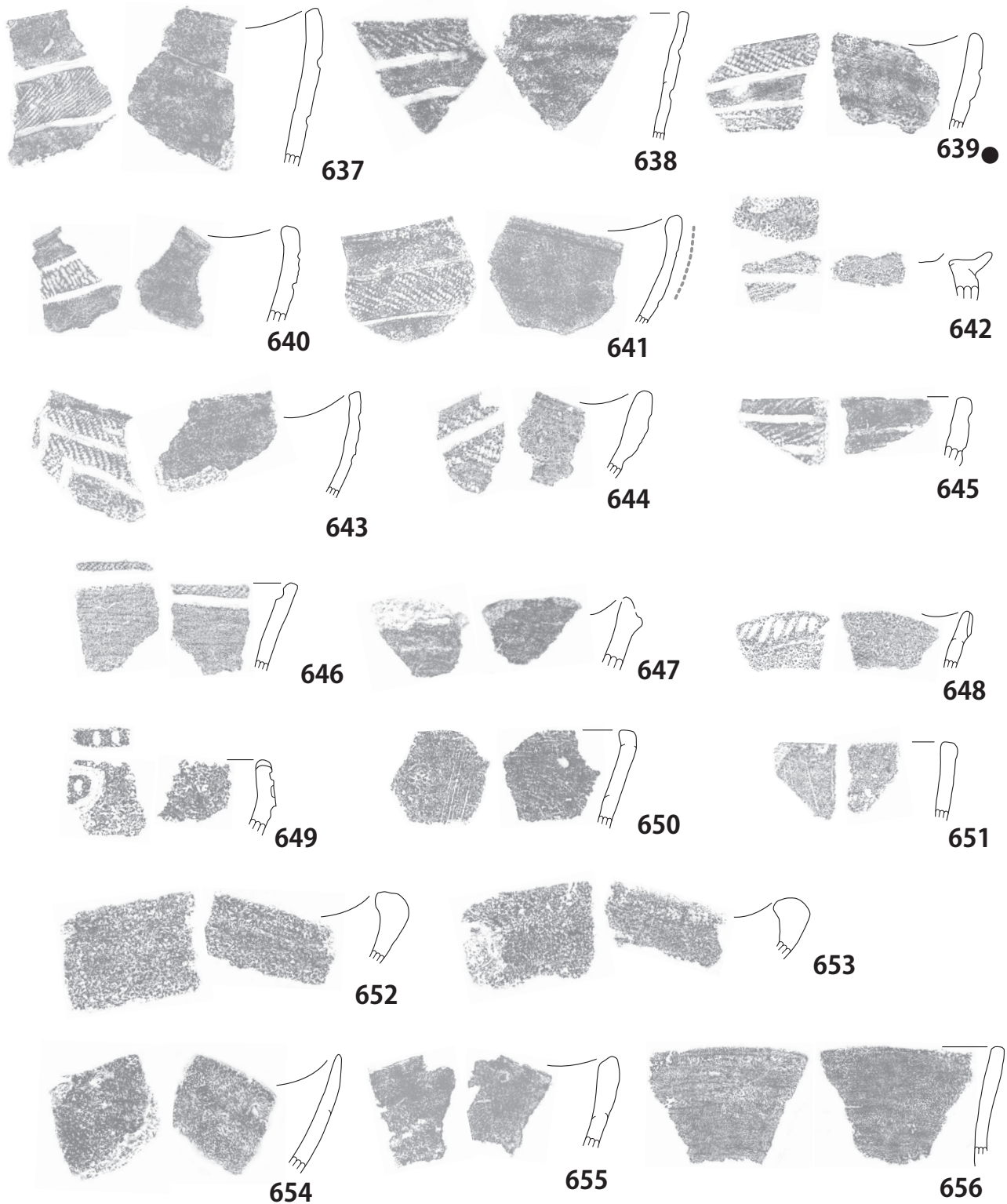


図70 土器・土製品34【14B 検出1】



14B1 包含層など

図 71 土器・土製品 35 【14B 検出 1】

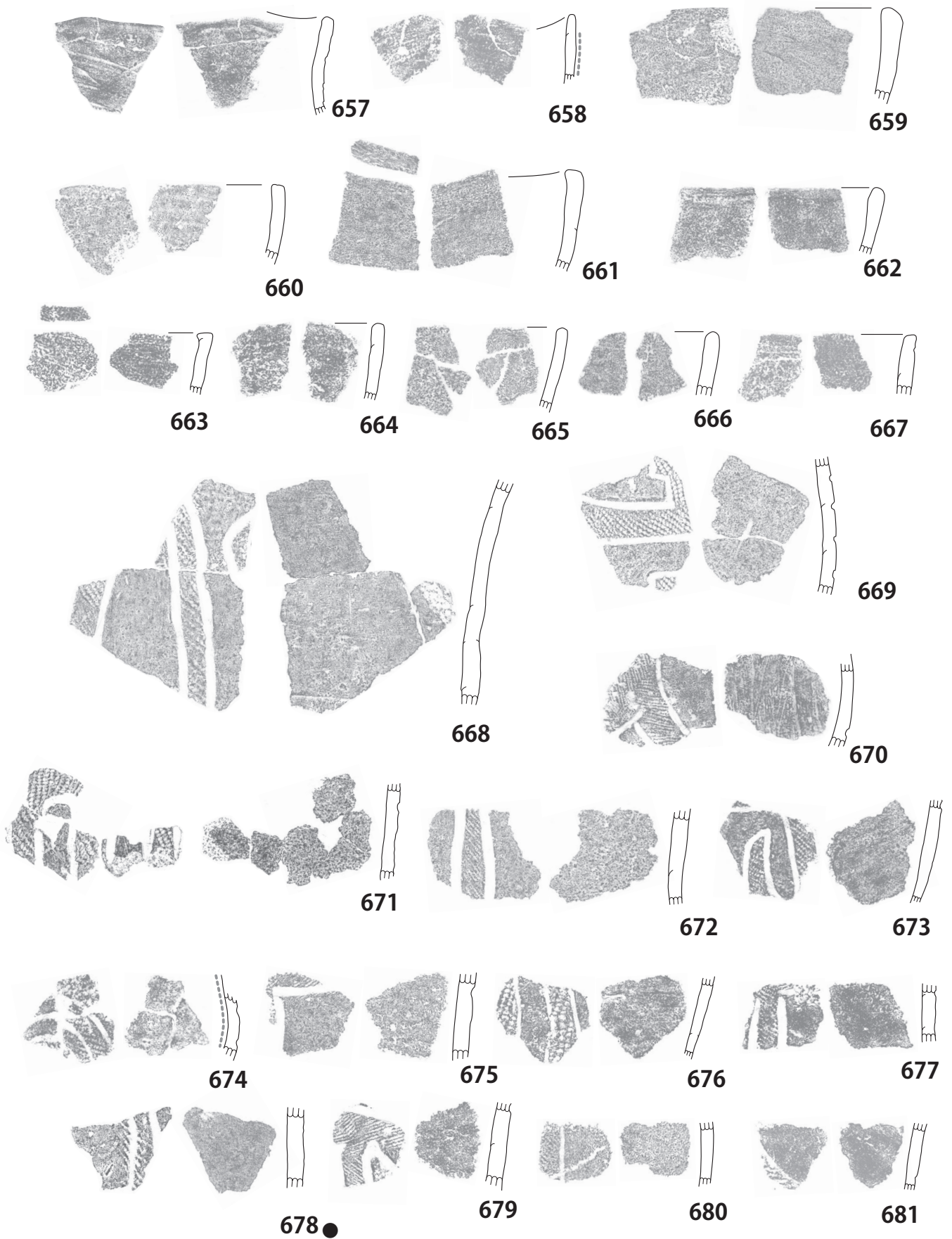


14B1 包含層など

1/3 0 10cm

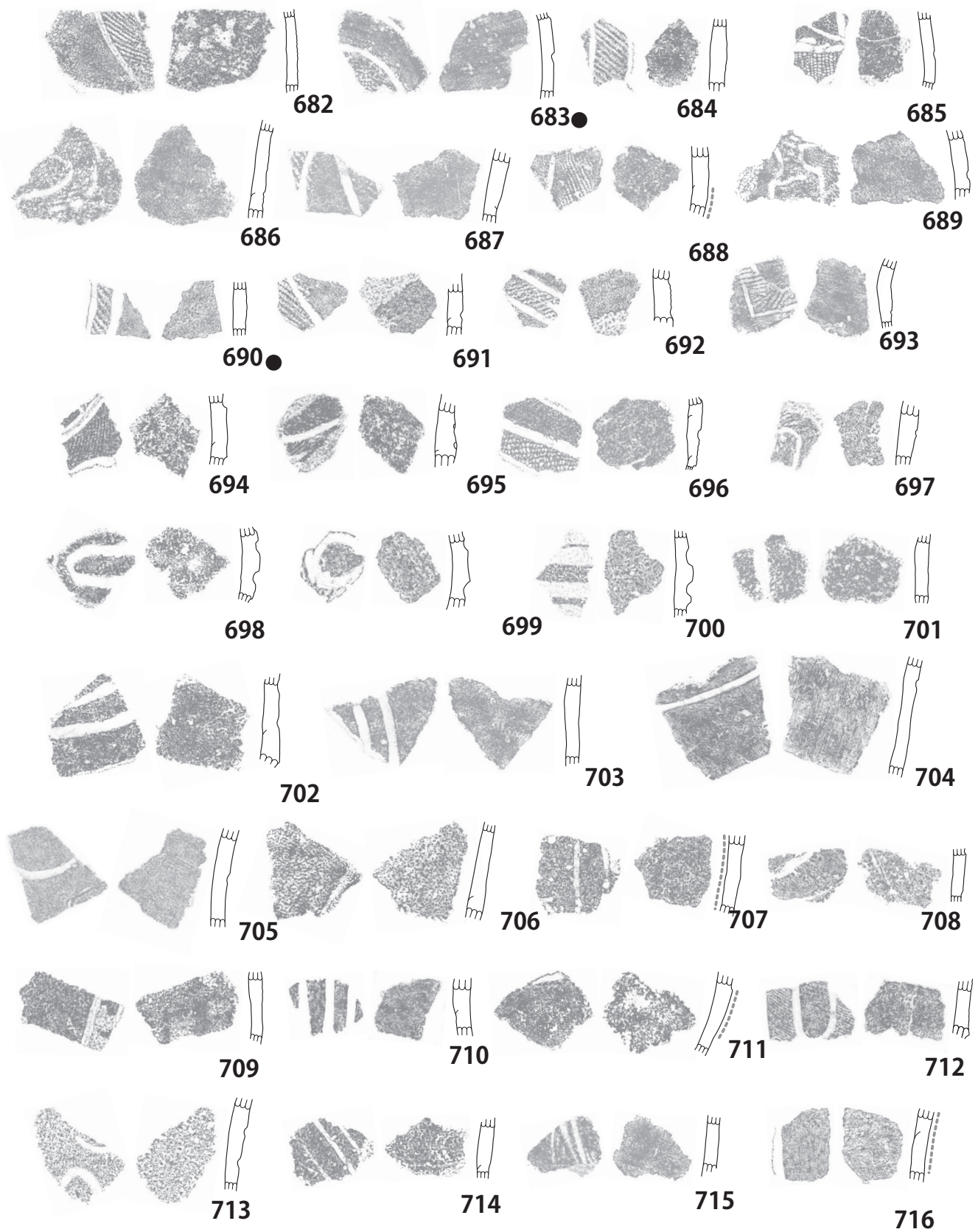
●: 緻密な胎土

図 72 土器・土製品 36 【14B 検出 1】



14B1 包含層など

図 73 土器・土製品 37 【14B 検出 1】

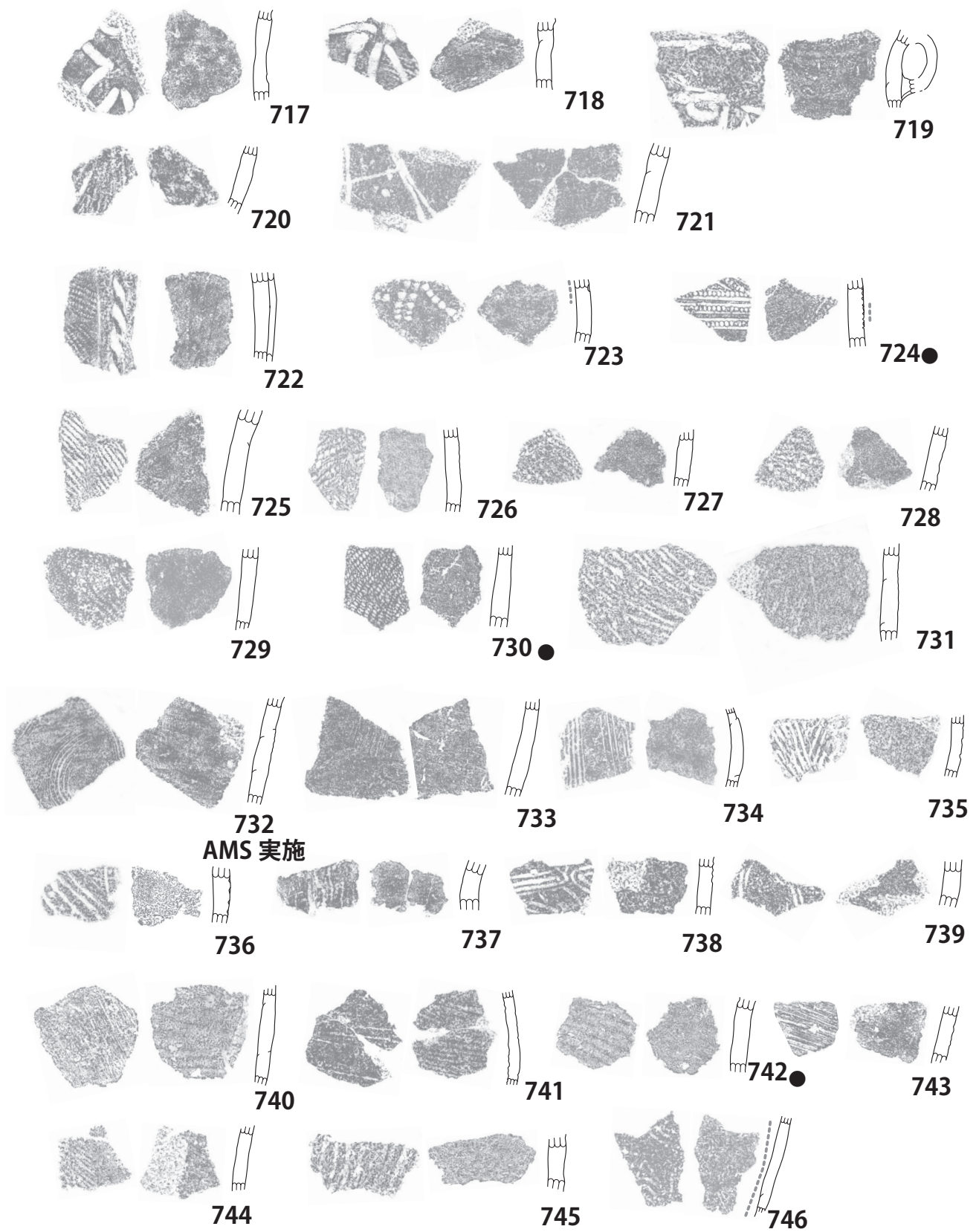


1/3 0 10cm

●: 緻密な胎土

14B1 包含層など

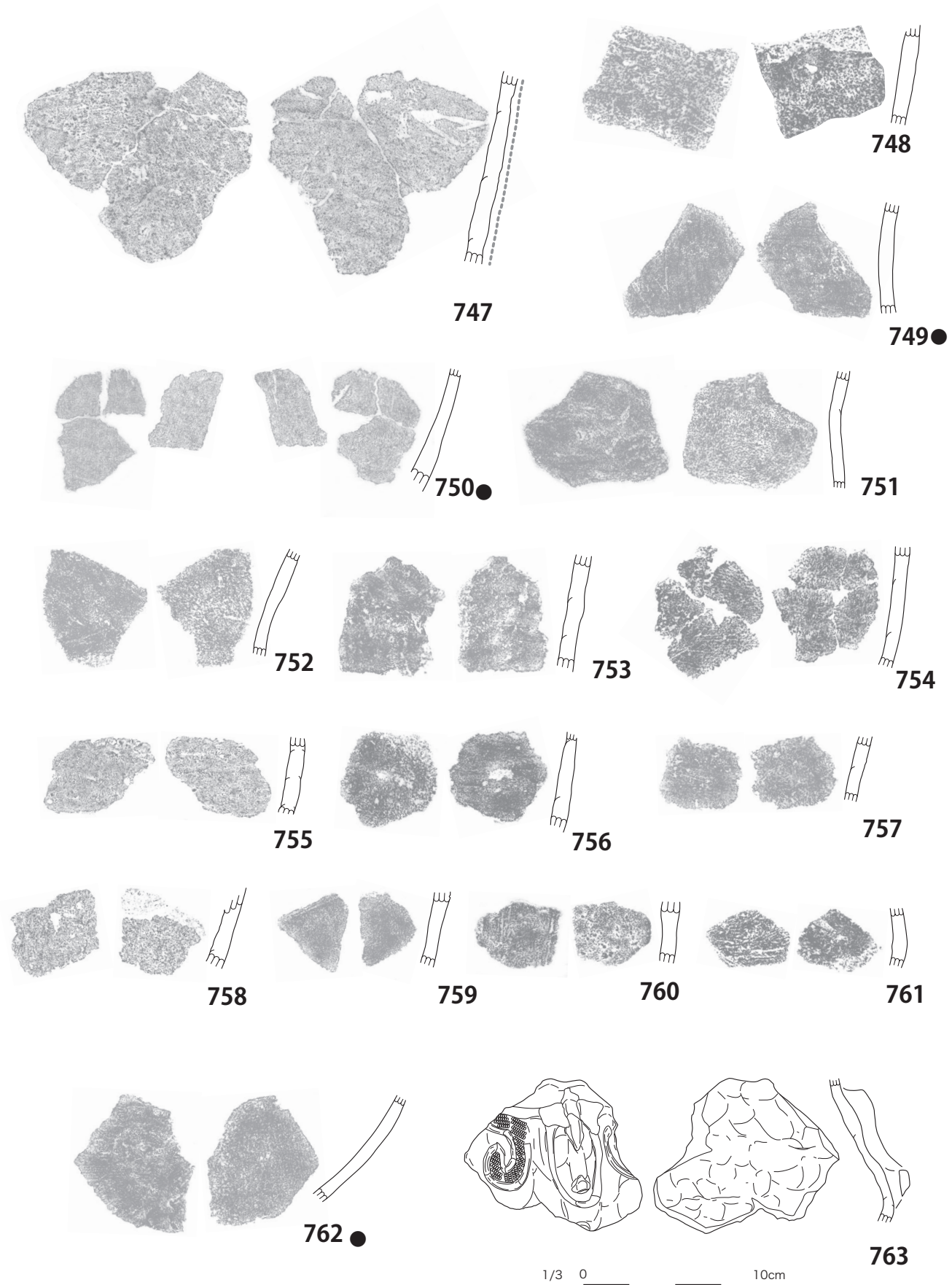
図 74 土器・土製品 38【14B 検出 1】



14B1 包含層など

●: 緻密な胎土

図 75 土器・土製品 39 【14B 検出 1】



●:緻密な胎土

14B1 包含層など

図 76 土器・土製品 40 【14B 検出 1】

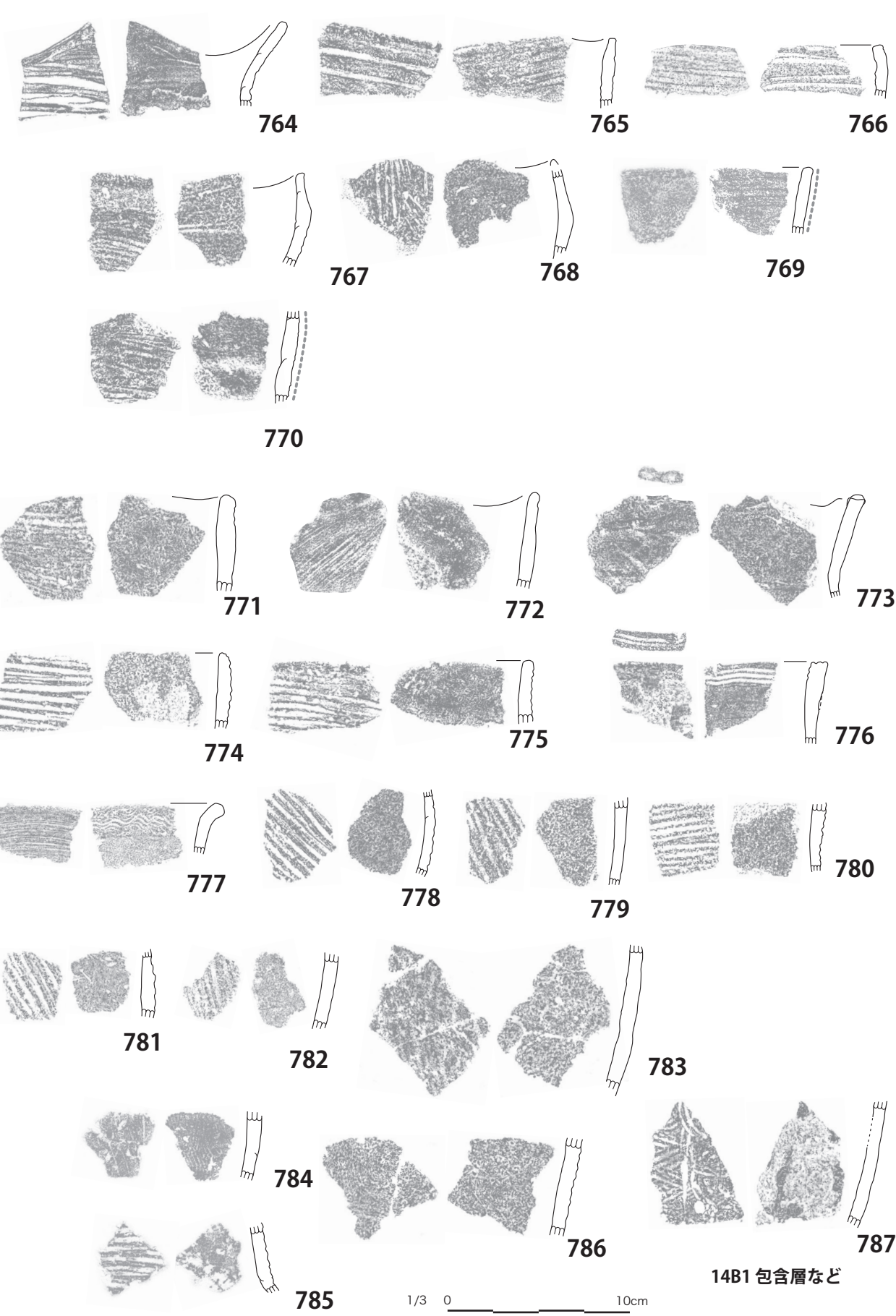
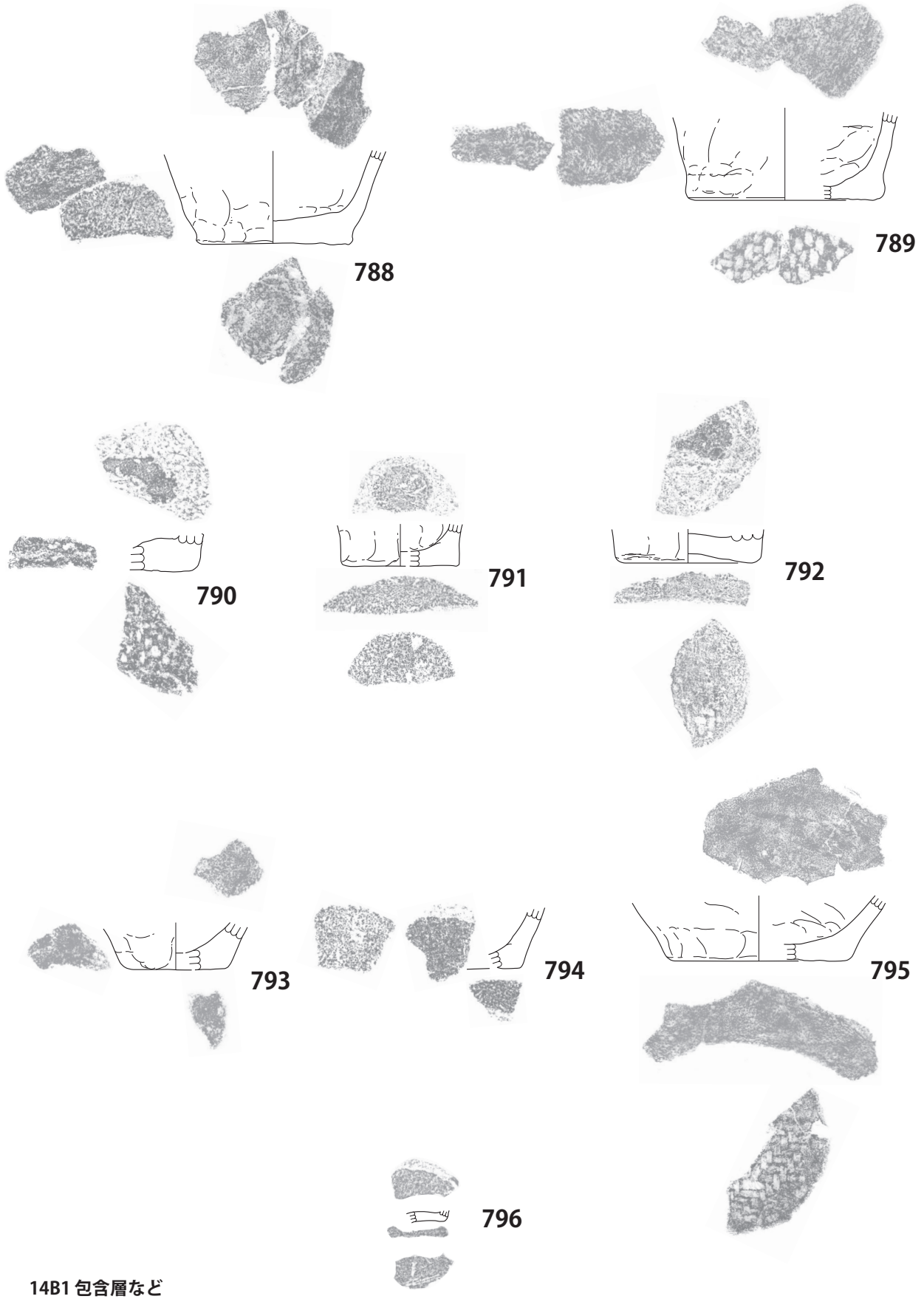


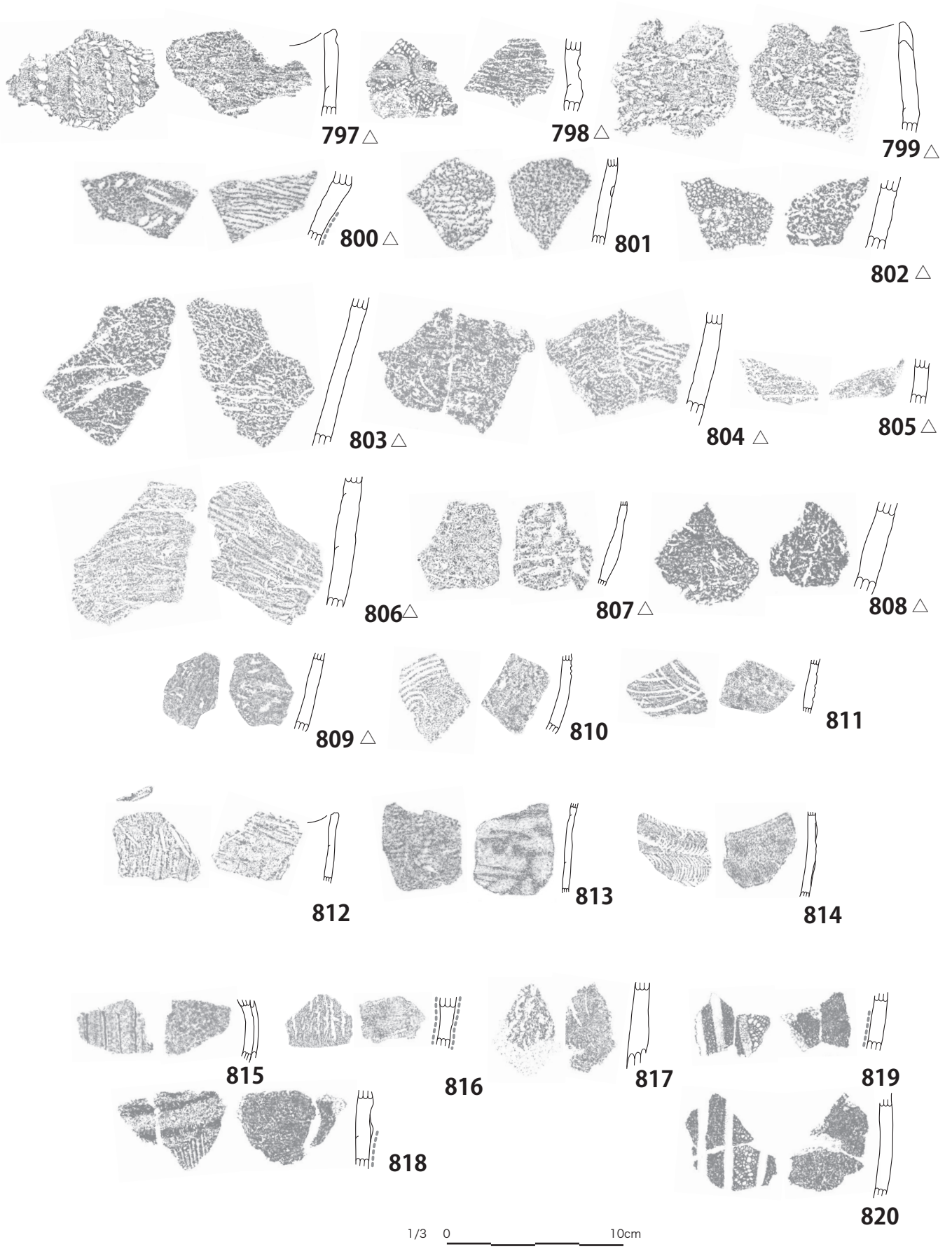
図 77 土器・土製品 41 【14B 検出 1】



14B1 包含層など

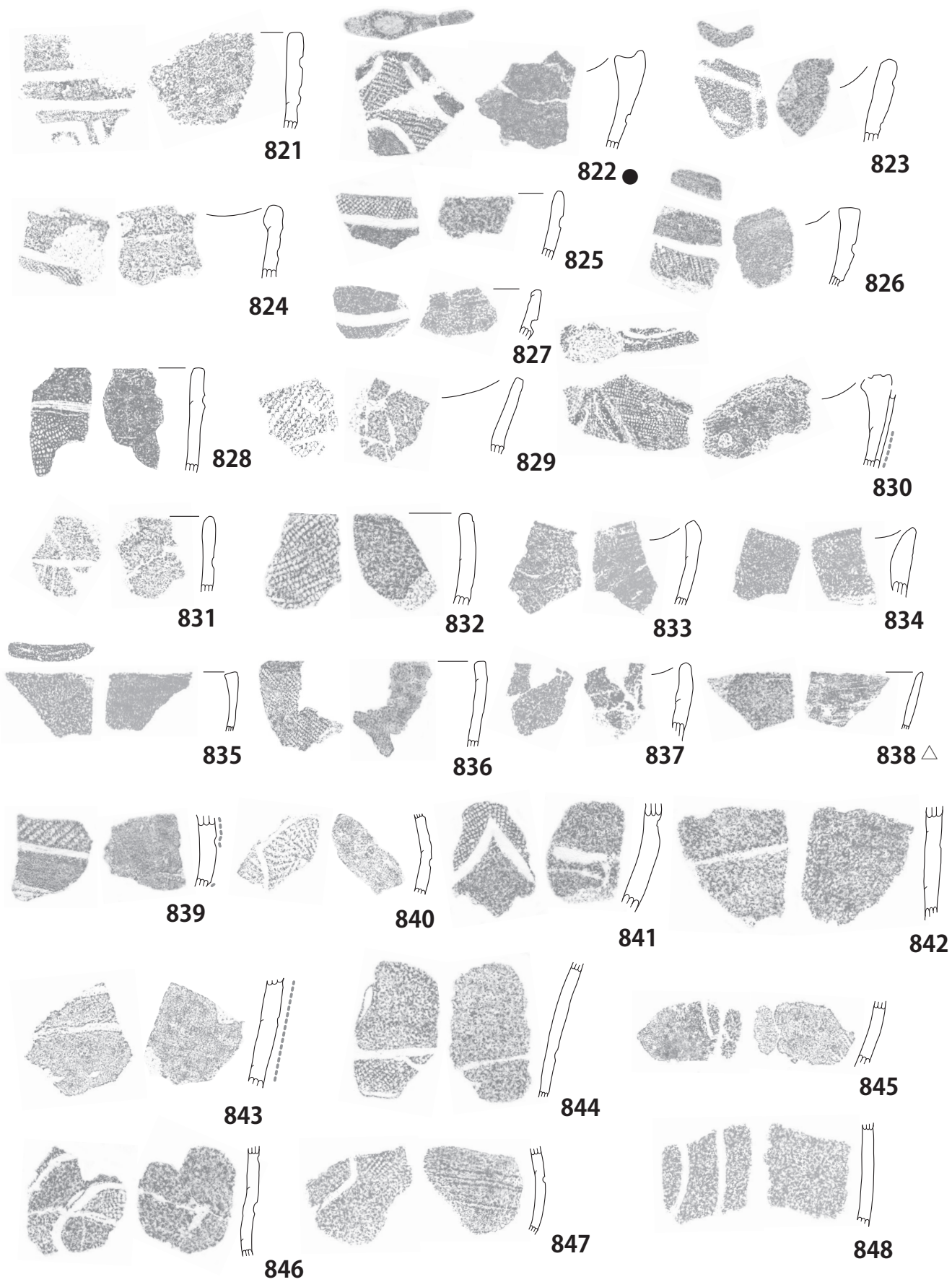
1/3 0 10cm

図 78 土器・土製品 42 【14B 検出 1】



16 包含層など

図 79 土器・土製品 43 【14B 検出 1】

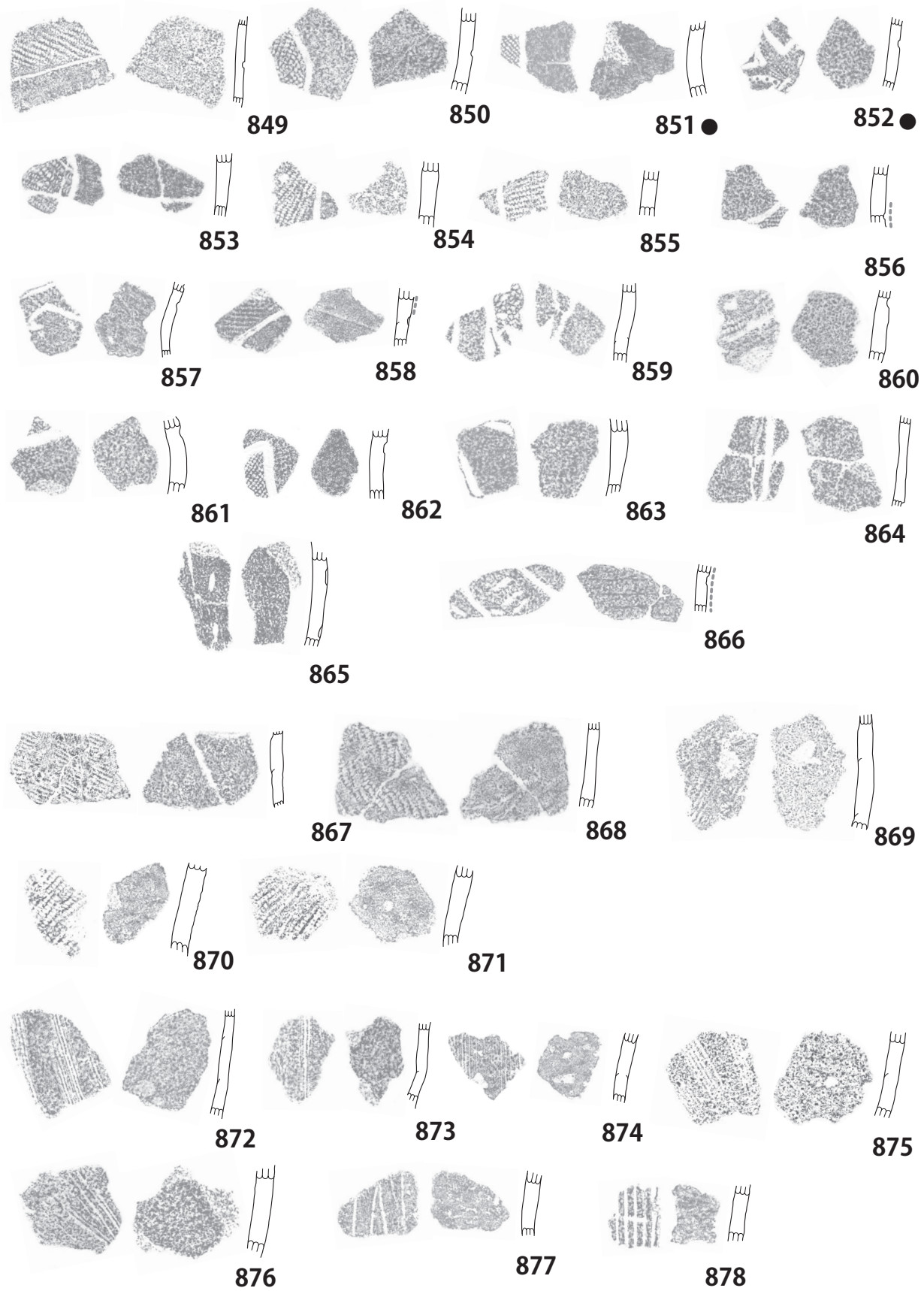


16 包含層など

△: 繊維含む胎土

1/3 0 10cm

図 80 土器・土製品 44【16 検出】



16 包含層など

図 81 土器・土製品 45 【16 検出】

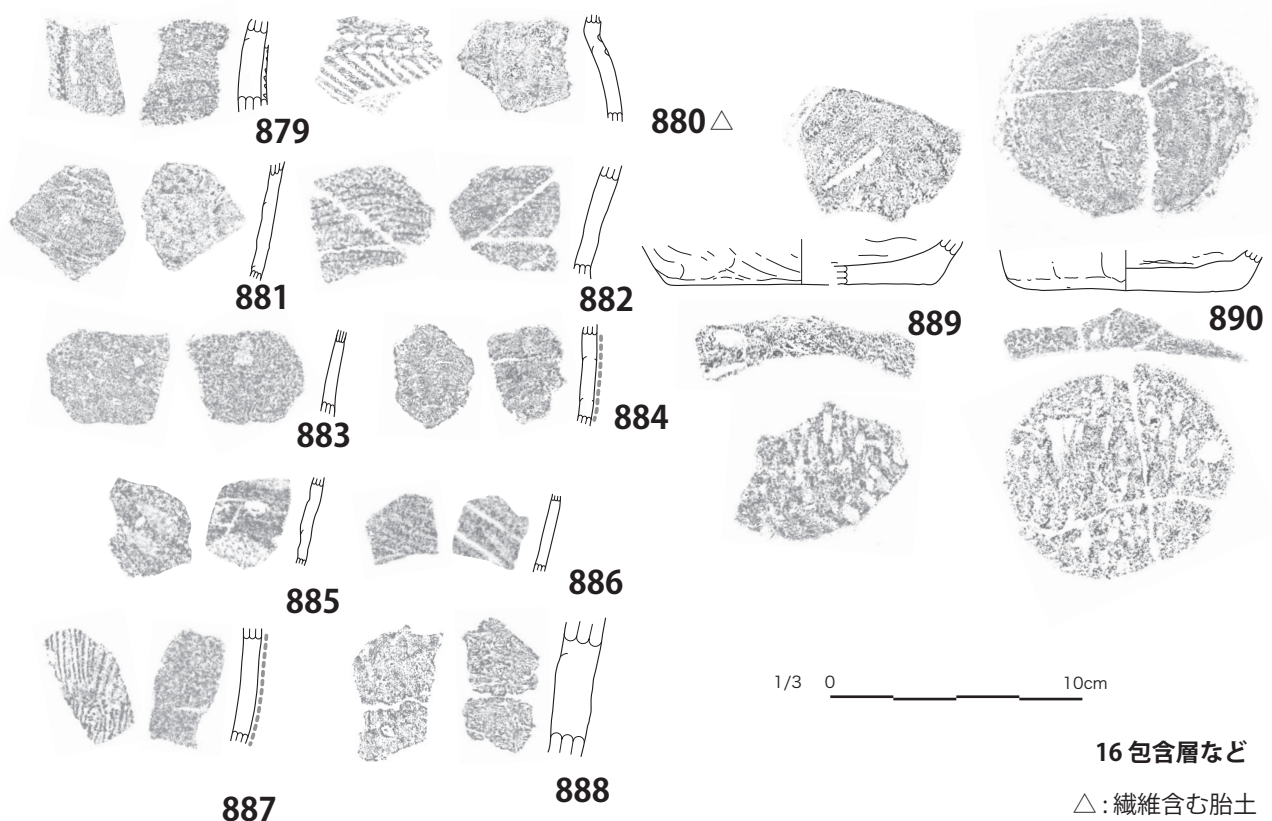


図 82 土器・土製品 46【16 検出】

縁端部からの窓枠区画状の構図に対して、沈線間に縄文 LR が充填させて文様が展開している。一部、窓枠区画からの懸垂文が施されている。80 は沈線区画内に縄文 RL が充填されている。

これら土器群も、一部詳細な時期の特定し得ない第 8 群も含まれるものの、第 7 群土器の中津式・称名寺式の新相を示すものと考えられる。

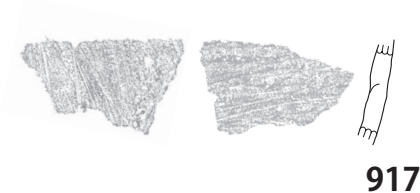
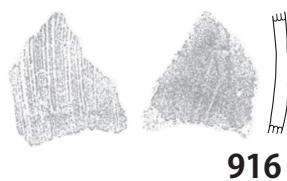
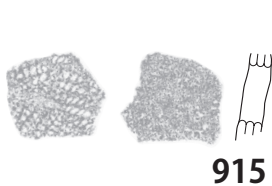
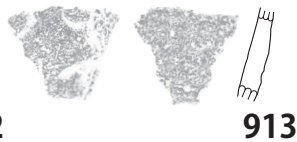
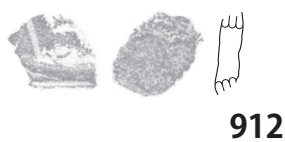
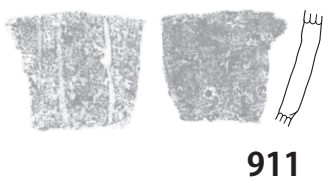
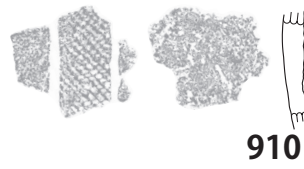
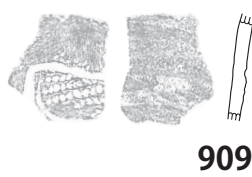
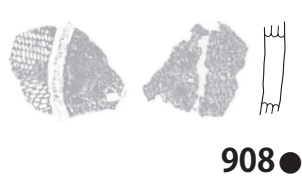
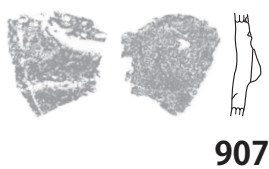
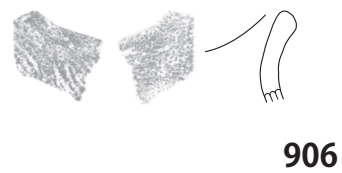
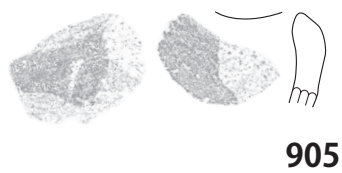
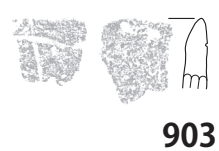
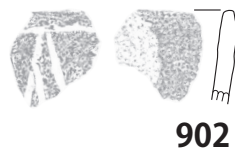
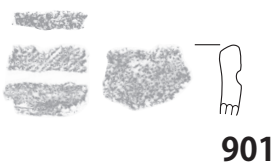
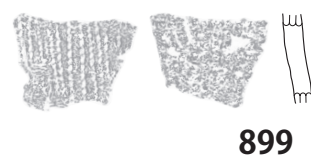
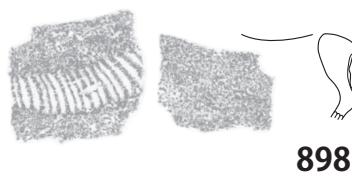
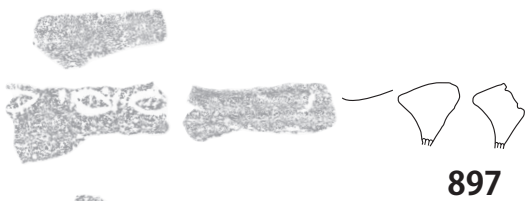
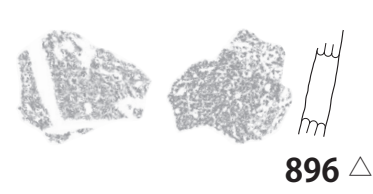
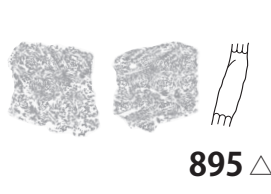
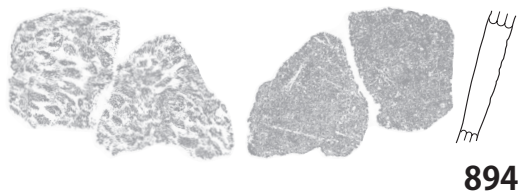
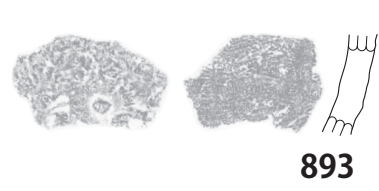
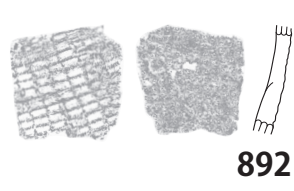
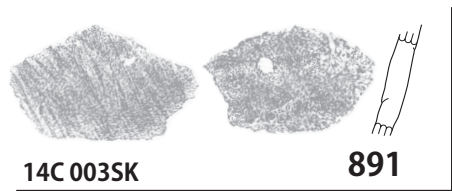
#### 14B 1264SK・1265SK (図 42・44)

1273SL 脇見つけた、礫を多量に含む土坑内から出土した資料である。59～67・81～83 が 1264SK 出土で、59～63 は沈線区画内に縄文の充填がなされているものである。59 は胴部下半で、主となる懸垂文が下方で連結している。63 は胎土が緻密なものである。64～66 は底部で、底面にはいずれも編組製品圧痕が認められる。67 は器面表に深い二枚貝条痕施されているもの

で、縄文時代晩期後半から弥生時代前期に属するものである。84～97 は 1265SK 出土資料である。84～91 は沈線区画内に縄文が充填される一群である。92～94 は縦方向を主体とした櫛状工具による条線が施されている。95 はナゲ調整の底部である。以上は、第 7 群の中津式・称名寺式に伴うもので、85・86・91 の胎土は緻密である。96 は縄文 LR を地文とし、縦方向に刻み目のある貼付隆帯が施されている。また、97 は低位の隆帯によって渦巻文が施されているもので、胴張り器形を呈するものと考えられる。これらも第 7 群の土器群と考えられる。

14B 0036SK (図 45・46) 袋状土坑である 0036SK からは、多量の遺物が出土した。これらは、機能終了時に入れられたものと考えられる。98～103・106～119 は沈線区画内に縄

(本文 98 頁へ続く)

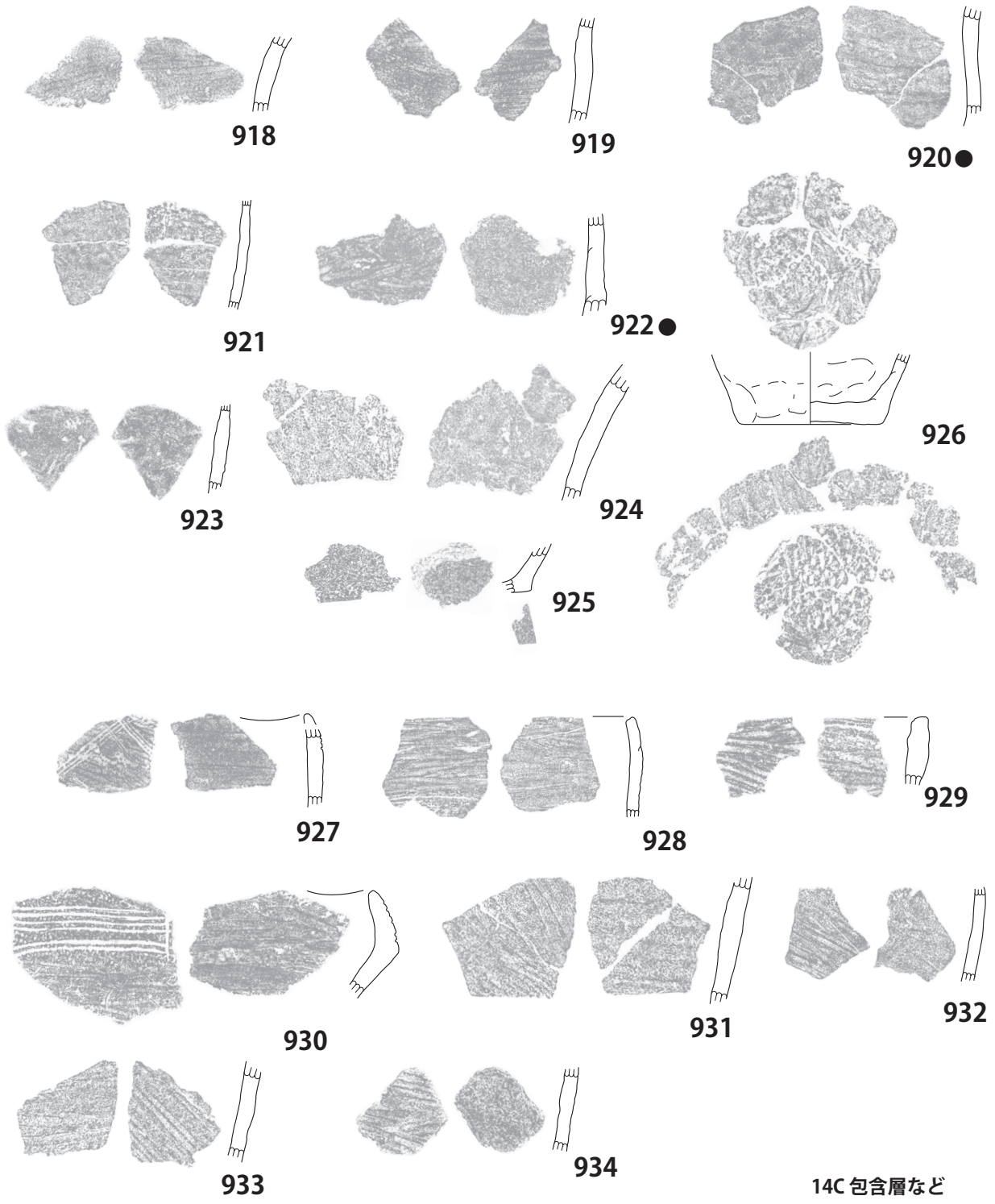


1/3 0 10cm

14C 包含層など

●: 緻密な胎土、△: 繊維含む胎土

図 83 土器・土製品 47 【14C 003SK・検出】



14A 004SK

935

14A 包含層など

936 △

1/3 0 10cm

●:緻密な胎土、△:繊維含む胎土

図 84 土器・土製品 48 【 14C 検出・14A 004SK・検出 】

文が充填されている一群である。98は浅い波状口縁、100・102・103は平縁である。口縁部直下は無文帯となっているものが多く(98・100・102・103)、一段下から縄文帯が展開している。98では小型のJ字文が横方向に連続する構図である。101・103・112もJ字文が展開するかもしれない。108は渦巻文となっているか。縄文は99・100・101・103・106・113・118・119はLR、102・111・112・114～116はRLである。104は口縁端部上面に粘土の貼り付けがなされているものである。また、105は口縁部から上端にかけて縄文LRが施されている。102は表面に斜方向に平行沈線が施されているものである。121は半截竹管状工具による弧線が認められる。122・124は沈線が施されているもので、123は縦方向に条線が施されている。126は縄文LRが施されている。129・130は底部で、平底、130の底面には編組製品圧痕が認められる。組み方は2本越え・2本潜り・1本送りのゴザ目である。また、118は胎土が緻密である。

これら土器群も、第7群土器の中津式・称名寺式の新相が中心になると考えられる。

**14B 1011SK** (図47) 131は平縁で、口縁に向かって広がる器形である。口縁部には二条の平行沈線が走り、口縁端部も含めて、粒の粗い原体の縄文LRが充填されている。胴部中位には紡錘文を横にしたような口唇状の文様が、二条の沈線によって表現されている。132は、131に類似する器形である。口縁部には二条の沈線が横走する。133は波状を呈する口縁部片で、頂部にはわずかに押圧が施されている。134は、外反気味に開く器形で、横方向に二条の細い平行沈線が認められる。135は胴部破片で、極めて細い沈線が認められるか。

これら土器群も、第7群土器の中津式・称名寺式になると考えられる。

**1028SK** (図47) 142は、緩い波状を呈する深鉢口縁部片で、器壁は薄い。口縁部表面には5条に渡って、フネガイ科などの二枚貝腹縁刺突による、貝殻腹縁文が認められる。同様の刺突列は口縁端部上面にもある。第3群土器、前期前半の上広覧式と思われる。143は口縁部表面に縄文LRが施されている。144は垂下する集合沈線が確認される。第6群土器の中期後半に属すると思われる。

**14B 1075SK** (図48) 154は沈線区画に名縄文が充填されている、第7群の後期初頭土器である。155は外面には二枚貝条痕、上面にも同一工具による押し引き列が認められるものである。第11群土器の弥生時代前期の檜王式に属すると思われる。

**14B 1078SK** (図48) 153は口縁部外側に貼り付けをして、帯状にする効果を出しているものである。口縁には併行する沈線と、重なるように円文が施される。第7群土器の中でも、北白川C式など、中期末的な様相が残るものである。

**14B区 1130SK** (図48) 164は沈線区画内に縄文LRが充填される、第7群後期初頭の土器片である。165は、口縁端部の表面と上面に半截竹管状工具による刺突列が施されているもので、器面には巻貝条痕が施されている。第9群土器の晩期前半の桜井式である。

**14B 1160SK** (図48・49) 168は波状口縁に沿って沈線区画内に縄文LRが充填されているもので、波頂部にも沈線が巡る。胎土は緻密である。169は平縁の深鉢で、口縁端部は無文帯があり、その下に沈線区画内に縄文LRの充填がある。173・174も沈線区画内に縄文が充填され

ている一群で、174の胎土は緻密である。176・177は櫛状工具による細い条線が施されているものである。

これら土器群も、第7群土器の中津式・称名寺式の新相が中心になると考えられる。

**14B 1195SK** (図49) 181～189は沈線区画内に縄文を充填させる一群である。181・182は平縁口縁部で、口縁端部から充填縄文の区画が展開するもの、183は波状口縁で、口縁直下の無文帯を挟んで縄文帯が展開するものである。184は胴部下半部分で、文様の横への連結部分と思われる。これらの縄文はLRである。185～189は渦巻文など各文様部分であり、185・188は縄文RL、それ以外は縄文LRが充填されている。190・191は縦方向の条線が認められる。

これら土器群も、第7群土器の中津式・称名寺式の新相が中心になると考えられる。

**14B 1209SK** (図50) 196～199・201は沈線区画内に縄文が充填されているもので、200は縦方向に条線が施されているものである。これらは、第7群土器の中津式・称名寺式と考えられる。一方、202・203は第11群の弥生時代前期の条痕文土器である。202は外反する器形の深鉢である。表面は横方向に二枚貝条痕、口縁端部上面にも同一工具による刻み状の刺突列が認められる。203は二枚貝工具による縦羽状の条痕が認められるものである。202は檜王式に属すると思われる。

**14B 0032SK** (図52) 237・240・242は沈線区画による文様構成となっているもので、239は区画内に縄文LRが充填されているものである。238は口縁端部と沈線間に縄文RLが充填されている。一方、246は口縁がやや肥厚する器形で、口縁段部分に浅い押圧が施されており、

これを起点として羽根状の刺突列が横走し、下方へは長細い楕円文が垂下し、さらにこの楕円文から斜方向に集合沈線が施されている。

これら土器群も、第7群土器で、237～243は中津式・称名寺式になると考えられる。一方、246は中期末の北白川C式に比定されるものであり、土器群全体としては、中期最終末から後期初頭にかけてのものといえる。

**14B 0111SX** (図53) 258は4単位の波状口縁深鉢で、胴部中程が屈曲する器形となっている。口縁部は波頂部およびその中間地点で上方に弧を描くような文様区画が展開する。胴部に向かっては、波頂部からは紡錘文にあたる水滴状の文様区画が垂下しており、中間地点からは懸垂文が、上端に抉りをもって施されている。また、紡錘文・懸垂文は、胴部下部分で横方向に連結している。文様は、沈線区画内に細かい縄文LRが充填されている。267・268のような条線の土器を含めて、258～268は第7群土器で、中津式・称名寺式になると考えられるものの、258はその中でも古相を呈するものである。269・271は同一個体の浅鉢形土器である。内外面ともにナデあるいはミガキが施され、口縁部内面には口縁端部と沈線間に、二条の上方に開く弧状沈線が展開し、その間には同じ沈線で、中央下方向に短く突出の付く、三叉状の文様が入れている。これらは第9群土器の後期末に属するものと考えられる。

**14B 0184SK** (図54・55) 278～283(口縁部片)・291・293～308(胴部片)は、沈線区画内に縄文が充填されている一群である。278は口縁部に対して方形区画状、281は渦巻文の周囲に縄文が充填されている構図となっている。縄文はLRが多い。284・289・310・311は縦方向に条線が施されているものである。287・288

・292・309は、併行する沈線のみが施されている一群である。287・309は二条の沈線によって幅細の区画が斜め方向に配されている。285は、器壁厚手の波状口縁を呈する深鉢で、波頂部下に半月状のC字形突起が付されているものである。突起に対して横方向と上部に向かって巻貝工具による刺突列が施されており、同じものが波頂部の口縁内面にも認められる。胴部にかけては縄文RLが施されている。

これら土器群も、第7群土器で、主体は中津式・称名寺式なると考えられる。285は加曾利E4式の意匠に近いものか。309は中期末にまで遡る可能性もあり、土器群全体としては、中期最終末から後期初頭にかけてのものといえる。

**14B 1286SK** (図56) 339・340は深鉢口縁部片、341は胴部下半から底部にかけてである。いずれも、器面表裏に巻貝条痕が施されているものであり、口縁部付近は横方向、胴部は斜方向に認められる。底部はほぼ平底で、特に圧痕などは認められない。

これらは第9群土器で、後期後葉から末に属するものである。

**14B 1078SK** (図56) 342は深鉢の胴部下半から底部にかけて残存している。器壁は厚手で、底部付近のオサエ調整は著しい。底部は円板を貼り付けるように作られており、底部断面は作りだしのような形状となる。底面には編組製品圧痕がある。組み方は、2本越え・2本潜り・1本送りのゴザ目である。

これらは第9群土器で、晩期前半に属するものと考えられる。

**16 165SK・303SK** (図57) 343は深鉢胴部下半から底部にかけてである。胴部下半で屈曲し、胴部中程にかけては直立気味に立ち上がる

器形である。器面表裏ともにナデ・オサエ調整が施されているが、器面表胴部上半には粗い原体で縄文RLが施されている。345・346は深鉢底部片である。344は胴部小片で、胎土に繊維を含むものである。347は緩やかな波状を呈する口縁部片で無文帯下に撚糸文が施されている。348・349は沈線区画の認められるもので、349は弧状を呈する。350は胴部外面に縄文RLが施されている。

以上、これら土器群も第7群土器に属すると考えられる。344のみ第2群の縄文時代早期後半に属するもので、土坑内に混入したものと考えられる。

**16 121SK** (図58) 351・353・357～363は、沈線区画内に縄文が充填されているものである。353・358～362は縄文LRが、それ以外は縄文LRが充填されている。351は波頂部に棒状工具による刺突が施されている。352は口縁端部上面に刺突と沈線が施されているものである。358は胎土が精緻なものである。354・355・364・365は縦あるいは斜方向の条線が施されているものである。

以上は、第7群土器で、中津式・称名寺式なると考えられ、351はその中でも古相を呈するものと思われる。

**16 154SK** (図58) 367は深鉢把手である。口縁に対して直行する方向では、環状の装飾が付されている。その下には、口縁端部の位置にJ字状に貼付隆帯があり、波頂部から沈線による文様の展開が認められる。内面は、口縁端部に沿って、隆帯が一条横走する。368はナデ・ミガキの器面上に縦方向の貼付隆帯の認められるもの、369～371はナデ・ミガキ調整のみが認められる深鉢片である。

以上は、第7群土器で、特に367は称名寺式にみられる深鉢把手に類似するものと思われる。

**16 204SK** (図59) 372は平縁口縁部のやや下に、矢羽根状の刺突列が横方向に展開する。373は三本の併行沈線に縄文LRが充填されているものである。374～380は沈線区画内に縄文が充填されているものである。374は口縁波頂部に、表面からの沈線につながる刺突と別に刺突が施されている。377は沈線区画がクランク状に接続する部分である。373～378は縄文LR、380は縄文RLである。

以上は、第7群土器であるが、372は中期末の北白川C式に比定されるもの、それ以外は中津式・称名寺式に比定されるものと思われる。

**16 266SK** (図59) 382は波状口縁の深鉢、口縁部から胴部上半で、波頂部には刺突が確認される。波頂部の下には横方向に延びるようなJ字文の区画が展開する。区画は左側から右側のものへの順に描かれたようで、区画内には縄文RLが充填されている。区画の接続部付近では沈線区画は閉じていない。内面にはナデ・ミガキが認められる。

266SK出土資料は、第7群土器、中津式・称名寺式に比定されるものと思われる。

**16 217SK** (図60) 398は波状口縁深鉢の口縁部である。沈線区画内に、縄文LRが充填される文様帯は、波頂部に向かって上方に延びている。但し、上方に延びた側は沈線区画が途切れている。399も沈線と縄文LRと無文部分が認められるもので、文様構成はJ字文になると思われる。

217SK出土資料は、第7群土器、中津式・称名寺式に比定されるものと思われる。

**16 267SK** (図60) 404は波状口縁深鉢の口縁部直下の破片である。口縁端部よりやや下方

に口縁に沿う形で高位の貼付隆帯があり、波頂部直下では、U字形あるいは長楕円になるように、弧線で連結されている。隆帯の脇には、棒状工具による刺突列が認められる。405は沈線区内に縄文LRが充填されているものであり、406は沈線のみ、408～410では縄文LRのみが認められるものである。

267SK出土資料の主体は、第7群土器に属する。特に、404は意匠としては加曾利E4式により近いものと思われる。なお、407は、早期後半の繊維土器で、混入したものである。

**16 268SK** (図60) 412・413は沈線区画内に縄文が充填されている一群である。412は波頂部に向けて突き出るように弧線が配されており、413は方形に区画された構図となっている。415・420は縄文LRが施されている。416は併行する斜沈線、417は表面に浅い沈線のような痕跡があるものの、調整痕の可能性もある。418は垂下する沈線の脇に結節縄文が垂下するものである。419は細い沈線区画に縄文LRが施されているものである。

これらも第7群土器、418は下伊那地域の影響を受けた中期末の土器と思われる。その他は、中津式・称名寺式に比定されるものと思われる。

**16 029SX** (図61) この落ち込みは、14B 0111SXから続く落ち込みである。432～434は沈線区画内に縄文が施されているものである。437は直立気味の深鉢口縁部片で、口縁端部には縦方向に短い貼付が施されている。器面調整は表裏ともにナデである。

これらは、第7群土器が主体である一方、437は第9群土器の後期最終末の土器と思われることから、この落ち込み内には269・271同様に、後期末～晩期にかけての良好な遺構あるいは包含

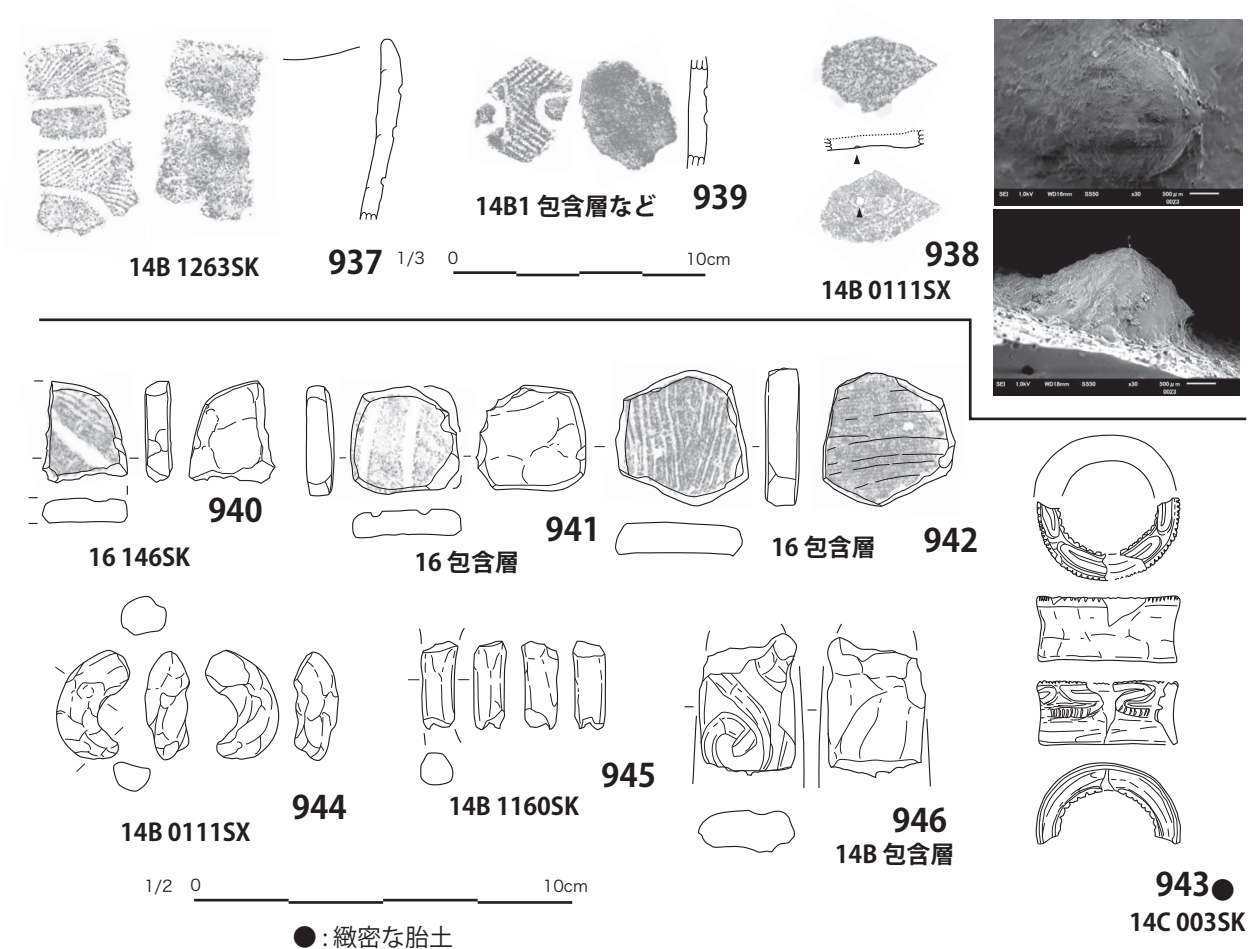


図 85 土器・土製品 49 【 14B 263SK・検出 1・土製品 】

層が存在していた可能性がある。

**14B 検出 2** (図 63～69)・**14B 検出 1** (図 70～79)・**16 検出** (図 80～82)

紙面の関係から、すべてに詳細な報告はできない。第 7 群土器の中津式・称名寺式段階の資料から、特筆されるもののみを提示しておく。

507 は沈線が太くかつ深く、内面にまでその痕跡が凸状に若干認められるものである。胎土は白色気味であり、第 7 群土器でも中津式の古相に属するものであろう。565 は深鉢に付く耳の一部と思われる。763 は双耳壺の胴部と思われる。

938 は土器底部外面に、植物種実のような圧痕が認められるものである。種などの同定は難しい。種実圧痕については、肉眼観察段階の候補としても、この 1 点しか確認できなかった。

**c. 土製品** (図 85)

940～942 は加工円盤の可能性のあるものである。943 は滑車形耳飾りで、環状を呈するものである。内面には蛇行するように貼付隆帯かぜあり、刻目が施されているところもある。胎土は極めて緻密なものである。944 は勾玉形の土製品である。類例では垂飾として穿孔されているものが多いものの、この資料では穿孔は確認されない。945・946 は不明の土製品としたが、土器の装飾部の一部かもしれない。

943・944 は第 9 群土器に伴うもので、それ以外は第 7 群土器に伴うものである。

### 第3節 縄文時代の遺物（石器・石製品）

#### 1. 概要

今回の調査では、縄文土器のほか、縄文時代に属する石器・石製品も多量に出土した。出土は、縄文時代の遺構・包含層が良好に残存していた、14B区・14C区・16区に集中する。遺物の出土層は、縄文時代の包含層・遺構内のみならず、中世以降の包含層・遺構埋土、および近代以降の盛土中からもまとめて出土した。特に盛土中出土資料は、もともと緩斜面の高位に存在していた包含層中のものが、斜面低位側にそのまま動かされたものと考えられ、後世の土地改変を考慮しても、各調査区内での移動に留まる状況であったと考えられる。

出土総点数は、表3に提示する。石器点数上のみでいうと、以下のことが窺えられる。

a. 石鏃・石匙・スクレイパーで代表される小型剥片石器類は、各器種ともまとまっている。

b. 打製石斧・刃器・礫器で代表される大型剥片石器類も器種に関係なくまとまっている。

c. 磨製石斧の点数は多くない。

d. 石錘各種の点数は少ない。

e. 磨石敲石類および石皿台石類の出土点数は、極めて著しく多い。

f. 大型石棒に対応する柱状加工礫の出土がまとまっている（本報告での器種名としては、単に「大型石棒」とする）。

これらの石器群は、縄文時代後期初頭が中心ではあるものの、縄文時代早期前半～弥生時代前期（条痕文期）までの累積の結果である。

また、遺構単位で見ると特筆されることには、16区の土坑内からの磨石敲石類と石皿台石類がまとめて出土している点である。第3章第

1節内で報告したように、165SK・303SK・266SK・310SKなどでは、石皿台石などが並べられるように配された状態でまとめて出土している。

以下、出土資料について、器種別に報告をしていく。なお、石材名について、本報告では、安山岩について、A・B・C・D・E・Fの6種に細分されている。これを含めた石材分類の根拠については、第5章7節堀木報告を参考にされたい。

#### 2. 石器各器種について

a. **尖頭器** (1087) 1点のみの出土である。長さ12.4・幅3.5・厚さ1.3cmを測る。平面形態は細長の水滴状、側面観は若干反り返る状態となっている。縦長に剥片作出のあと、周囲から身部中心に向かって連続した剥離調整が認められる。16区のIV層から出土しており、形態的にも早期に属するものと考えられる。石材は溶結凝灰岩。

b. **石鏃** (1005・1007～1009・1013・1014・1028・1030・1036・1040・1041・1044・1047・1066・1088～1100・1102～1114・1311)

50点出土して、41点を図化した。基部形態では、無茎が43点、有茎が3点、不詳が4点である。法量は、長さ1cmに満たないもの(1090)もあるが、1.4cmから2cm弱のものが主体である。1088・1091・1097は基部が深く、長脚気味なものである。1092・1095は鋸歯縁を呈する。無茎鏃の使用石材は黒曜石29点、チャート4点、溶結凝灰岩4点、下呂石3点、石英1点である。

有茎鏃1044は、身部が五角形を呈し、基部は

表3 西地・東地遺跡出土 縄文時代石器・石製品出土点数表

調査区	遺構名	尖頭器	石鏃	石錐	石匙	スクレイパー	使用痕のある剥片	楔形石器	二次加工のある剥片	その他剥片	微細剥片	石核	原石	打製石斧	刃器	礮器・大型剥片石核	大型剥片石器	大型剥片	磨製石斧(定角式)	磨製石斧(非定角式)	打欠+切目石錐	切目石錐	有溝石錐	磨石・砥石類	石皿・台石類	砥石(手持砥石)	敲打のある礫	磨れた礫	大型石棒	球状耳飾り				
14B2	1304SI						1			3	○																2							
14B2	1305SI					2				21	○							3							3	1		4						
14B2	1306SI		1							5	○						1							2				3						
14B2	1201SI		3							9	○			1										3	1			28						
14B2	1263SI									1																		1						
14B2	0036SK		2						1	7	○	1								1														
14B2	1023SK			1										1																				
14B2	1028SK									19	○						1												4					
14B2	1035SK					1																												
14B2	1071SK					1				4																			2					
14B2	1075SK													1																				
14B2	1160SK									10	○	2													4			5	1					
14B2	1180SK					1				1																		2						
14B2	1195SK									2		1																						
14B2	1208SK		1							6	○	1																						
14B2	1209SK		1			1				13		1	1				2							1	2			5						
14B2	1213SK											1																	14		1			
14B2	1216SK		1			1				5	○														1	3		9						
14B2	1224SK		2	1						14	○				1													7						
14B2	1226SK									5	○													2			1	1						
14B2	1231SK		1							2																		3						
14B2	1251SK						1																											
14B2	1265SK						1			7	○	1	1																2					
14B2	1277SK		1							1	○	1																						
14B2	1333SK																									1		1				1		
16	165SK					1				3	○	1													2	1		6						
16	303SK					1	1			1															2	8		7						
16	121SK						1																		1	6		7						
16	149SK											2																						
16	154SK									2																4	1		2					
16	204SK		1							11	○																		3					
16	263SK					1				4	○																							
16	266SK					1			1	4		2													2	8		9						
16	267SK					1	1			1	5							1							5	1		2						
16	268SK			1					1		○	1													6	6		10						
16	269SK																								1	1		2						
16	277SK																								1	3		1						
16	278SK									2	○											1												
16	297SK									2															2	1		3						
16	309SK									3					1										2	1		2						
16	310SK																1	1							4	3		4						
14B	検出など		13	9	7	11	14	1	18	721	○	54		28	15	16	20	40	2	1			1	1	283	55		745	15	1				
14C	検出など		3	3		3	1			119		3		4	6	5		8							7			15						
16	検出など	1	20	11		6	14		4	283	○	10		2	9	5	3	19							95	8		147	2				1	
14A	検出など									2																								
計		1	50	26	7	32	35	1	26	1297	○	82	1	39	32	26	28	73	2	3	2	1	1	433	120	1	1067	18	4		1			

ごくわずかに凸状になる。1104・1105も有茎部分がごくわずかに凸になるものである。このような基部の形状は弥生時代前期に認められるものであり、当遺跡で出土している条痕文土器に対応するものであろう。また、長さ2cmを越える無茎鏃1112・1113や法量の大きくなりそうな1110も晩期中葉以降に属する可能性がある。石材は1110はチャート、1112が下呂石、1113がサヌカイト、1044・1104は黒曜石、1105は溶結凝灰岩である。1113の身部や基部にはピッチと思われる付着痕が認められる。

**c. 石錐** (1042・1101・1115～1131) 26

点出土して、19点を図化した。形態としては、石鏃のような三角形を呈するものや、頭部(摘部)が大きくなっているものが多いなか、棒状のものは1点のみ(1042)であった。使用石材は、黒曜石が21点、溶結凝灰岩が2点、凝灰岩が2点、安山岩Aが1点である。

**d. 石匙** (1132～1138) 7点出土し、すべてを図化した。1132は密な剥離調整が両面に施されているもので、摘部が中央に付けられているものである。他のものに比べても精緻な作りとなっており、異質である。他は、刃部の剥離調整など、表面に集中して行われているものが多い。摘部は

端部に斜め方向に作り出されているものであり、

使用石材は、凝灰岩・溶結凝灰岩が主体である。1138は安山岩A、1132はサヌカイトである。

**e. スクレイパー** (1002・1003・1021・1022・1026・1031・1037・1050・1053・1067～1069・1139～1151) 32点出土し、25点を図化した。刃部に二次加工が施されているものである。平面形状では、三角形状(1142・1148)長楕円あるいは長方形(1141・1146・1149・1151)、多角形状(1037・1150)、貝殻状(1021・1022・1139・1140・1144)の形態を呈するものが見られる。裏面に主剥離面を残すものでみると、横長剥片由来のものが多いようである。その一方で、1141は90度の打面転移で作出された縦長剥片である。使用石材は、安山岩Aが2点、安山岩Bが9点、安山岩Cが3点、安山岩Dが3点、安山岩Eが1点、溶結凝灰岩が6点、凝灰岩が3点、チャートもしくは溶結凝灰岩が3点、黒曜石が2点、である。

**f. 使用痕のある剥片** (1001・1045・1046・1052・1152・1153・1155～1158・1161・1162) 35点確認して、12点を図化した。加工のない刃部相当の鋭い縁に使用痕と思われる不連続な剥離の認められるものである。使用による剥離か否かは、実際には判断の難しいものも含まれている。石材は、黒曜石が28点、溶結凝灰岩が5点、泥質凝灰岩が1点、安山岩Dが1点、である。

**g. 二次加工のある剥片** (1015・1154) 26点確認して、2点を図化した。多くは、石鏃製作上の剥片である。1105は石鏃目的として作出された黒曜石剥片の縁辺に、連続した剥離調整の施されたものである。1154はやや厚手の剥片の縁辺に剥離調整が認められる。1154の石材は下呂石角礫と思われる。

**h. 剥片・微細剥片・石核** (1010・1016・1024・1027・1029・1048・1051・1159・1160・1164・1166・1167～1181)

石鏃などに対応する小型剥片石器の剥片石核類である。最大辺長1cm未満のものを微細剥片とした。剥片・石核は合わせて1300点以上出土している。特に、黒曜石・凝灰岩・溶結凝灰岩の石核の存在は、注目されるものである。1167は黒曜石石核の中でも最も大きいものである。立方体状を呈するもので、打面転移をしながら、縦長あるいは貝殻状の剥片が作出された様子を見ることができ、1169も大きな黒曜石石核で、同一方向からの剥片作出となっている。1175も三角柱状の形状を呈するもので、対向する面については、同一方向からの縦長気味の剥片作出が行われた様子が窺えられる。1051は溶結凝灰岩石核で、周囲からの剥片作出が認められる。端部に微細剥離が集中している部分があることから、台上での両極打撃のような行為が行われた可能性もある。

1167は14B区竪穴建物跡1306SIの東脇にあたる場所の包含層から出土している(図15)。また、1051は大型土坑16区165SKから出土している(巻頭図版4・図28)。大型の石核の出土位置は、活動当時においては、特別な場であった可能性もあるか。

**i. 打製石斧** (1018・1020・1023・1083～1204) 大型の剥片石器の中で、斧形を呈するものである。39点出土して、25点を図化した。長さは1020の13.5cmが最も大きく、1190の5.4cmが最も小さいものの、長さ8～9cmを測るものが最も多い。平面形態が細長方形の短冊形のものも多く、長台形の撥形や、分銅形とまではいかないもののやや挟りの入った形状のもの(1188)もある。製品には石材礫面が残されてい

る部分があり、柄側上端部である場合や（1183・1187・1194）、表面全体に残されている場合（1186・1192・1197など）がある。刃部と考えられる端部側には、使用によるツブレや、磨滅（図中ではトーンで明示）の認められるものが多い。

使用石材は、安山岩 A が 1 点、安山岩 B が 12 点、安山岩 C が 3 点、安山岩 D が 5 点、安山岩 E が 7 点、安山岩 F が 2 点、凝灰岩が 1 点、閃緑岩が 2 点、緑色片岩が 6 点である。

**j. 刃器**（1086・1205～1223） 32 点確認され、20 点を図化した。大型の利器で、刃部側に調整が施されていないものが主体であるが、刃部調整の施されているものもある。

使用石材は、安山岩 A が 5 点、安山岩 B が 8 点、安山岩 C が 3 点、安山岩 D が 6 点、安山岩 E が 8 点、安山岩 F が 1 点、片麻岩が 1 点である。

**k. 礫器もしくは大型剥片石核**（1182・1246～1263） 26 点確認して、19 点を図化した。厚みのある形状になっているものを集めており、この中には厳密な意味で石核石器ではないものも含まれている。1248・1255・1256 など、一端に不連続な剥離あるいはツブレが存在しており、これが礫器の刃部側に当たるものと思われる。

使用石材は、安山岩 A が 5 点、安山岩 B が 8 点、安山岩 C が 1 点、安山岩 D が 3 点、安山岩 E が 6 点、片麻岩が 2 点、凝灰岩が 1 点、である。

**l. 大型剥片石器**（1019・1032・1033・1226～1229・1232・1234・1236・1237・1239・1241・1243・1245） 28 点確認して、15 点図化した。大型の剥片石器で、上記以外のものを集めた。打製石斧・刃器の一部であったり、1239 などは製作途上品の可能性もある。

使用石材は、安山岩 A が 4 点、安山岩 B が 8 点、安山岩 C が 4 点、安山岩 D が 5 点、安山岩 E が

2 点、凝灰岩が 2 点、緑色片岩が 2 点、砂質凝灰岩が 1 点、である。

**m. 大型剥片**（1224・1225・1230・1231・1233・1235・1238・1240・1242・1244） 73 点確認して、10 点を図化した。打製石斧・刃器など大型剥片石器類に対応する大きめの剥片（各種安山岩や凝灰岩などの剥片）を集めたものであるが、一部、スクレイパーに対応するような剥片も含まれる。石材としては安山岩 A が 12 点、安山岩 B が 30 点、安山岩 C が 5 点、安山岩 D が 12 点、安山岩 E が 6 点、凝灰岩が 5 点、溶結凝灰岩が 3 点である。

**n. 磨製石斧**（1017・1264～1267） 5 点出土し、すべてを図化した。このうち、側面に面をもつ定角式は 1017・1264・1265 で、1266・1267 は明確な広い面を有さないもの（ここでは非定角式とする）である。しかし、後者の断面形状は長楕円形状で、弱い面の形成があるようにもみえ、いわゆる乳棒状のものとは異なる。1017 は緑色片岩製の小型の磨製石斧である。1265 も小型といえるか。1264・1266 は全形が窺えられるものである。いずれも刃部側には使用による微細剥離が認められる。1267 は身部のみの残存で、上下端には著し衝撃による剥離もしくは割れが認められる。敲石などに転用されたものかも知れない。1264 は変塩基性岩、1265 は塩基性凝灰岩、1266 は緑色片岩、1267 は緑色岩が使われている。

**o. 石錘類**（1061・1079・1268・1269）

4 点出土し、すべて図化した。1061・1079 は打欠+切目石錘としたものである。長軸両端が潰れたように凹ませてあり、その中央には切れ込み状の短い溝が認められる。打欠石錘の製作方法として、一方ずつ剥離を行うものもあれば、両極に

よる剥離調整を行うものもある。本事例は後者によるものと思われ、その後付いた溝状のものは、実際にはヒモ掛けの使用痕である可能性がある。使用石材は、1061が砂質凝灰岩、1079が片麻岩である。1268は扁平な円礫の両端に切目が施されているものである。これも片麻岩製である。1269は長軸方向に溝が一周する有溝石錘である。全体に軽く研磨調整が施されてから短い間隔での施溝が連続してなされている。側面観で見ると、表裏対称ではないことが分かる。使用石材は閃緑岩である。

**p. 磨石敲石類** (1006・1011・1025・1070・1075～1078・1081・1270～1290) 433点出土して、30点のみを図化した。長楕円形状・楕円形状・隅丸多角形状のものなど、いろいろな形状のものがある。使用痕としては、敲打による剥離・ツブレ・深い凹み、そして磨痕などの複数の痕跡が、同一資料に存在している場合が多い。磨痕が著しい場合は、広い面積におよんで平坦面が形成されたりする。後述する石皿台石類に対応して、上石として、敲いたり磨ったりの動作を行っていたものと考えられる。使用痕の残存状況で見ると、敲打痕のみが35点（うち凹み明瞭なものが6点）、磨痕のみが115点、敲打痕と磨痕の両者が認められるものは283点（うち凹み明瞭なものが12点）であった。

石材は、花こう岩217点、片麻岩が164点、閃緑岩が29点、凝灰岩が4点、砂質凝灰岩が4点、ハンレイ岩が4点、砂岩が3点、玄武岩が2点、安山岩Dが2点、緑色片岩が1点、珪質岩が1点、長石が1点、溶結凝灰岩が1点である。

**q. 石皿台石類** (1004・1012・1034・1038・1039・1054～1060・1062～1065・1071～1074・1080・1082～1085・1291・1292・

1296～1298) 120点出土して、30点のみを図化した。節理などによって板状になった石材など多く利用されている。1012・1083・1084などのように、周囲を敲打して形状を整えてられたものもある。使用痕としては、磨痕、敲打による剥離やツブレ・大きな凹み、があり、表裏の両平面に認められるものもある。

石材としては、花こう岩78点、片麻岩30点、閃緑岩6点、砂質凝灰岩4点、ハンレイ岩2点、である。

**r. 砥石** (1043) 1点のみ報告する。扁平もので、一辺が鋭く尖る。全面には研磨による線状痕の広がるもので、図面上端側にはツブレ痕がある。手持ち砥石とも思われるが、形状から中世以降のもの可能性もある。石材は閃緑岩である。

**s. 敲打のある礫・磨れた礫** 当時のヒトのによって持ち込まれた礫の中で、道具としては明確に認識できないものの、敲かれたりした痕跡の認められるものである。一部は、磨石敲石類であるかもしれない。また、被熱による割れのものや、もともと炉石であったものが細片化したものも含まれている可能性はある。西地・東地遺跡では、遺構内および包含層中から1000点以上出土した。石材は花こう岩が457点、片麻岩が280点と多数を占める。

**t. 大型石棒** (1035・1049・1293・1294) 4点出土し、すべて図化した。上述したように、ここで報告するものは、石棒としての形状が明確に整っているものではなく、それに対応する棒状加工品である。いずれも、幅10cm程度の柱状礫であり、平面および側面には礫面がほぼ残されている。縁辺などの一部に剥離あるいは敲打調整が行われており、また表面の一部には研磨あるいは磨滅した部分もある。両端は、敲打によって切

〈本文152頁へ続く〉

表 4

石材名 (総重量 g)	器種 項目	尖頭器	石鏝	石錐	石匙	スクレイパー	使用痕のある剥片	楔形石器	二次加工のある剥片	その他剥片	微細剥片	石核	原石
黒曜石 (1006.3g)	点数		33	21		2	25		14	337	295	61	1
	重量 (g)		13.1	39.6		2.7	45.7		13.0	252.2	29.4	558.4	49.3
	重量 / 点数		0.40	1.89		1.35	1.83		0.93	0.75		9.15	49.30
サヌカイト (2.4g)	点数		2										
	重量 (g)		2.4										
	重量 / 点数		1.20										
下呂石 (27.7g)	点数		3						1	7	56		
	重量 (g)		2.2						2.8	14.8	7.9		
	重量 / 点数		0.73						2.80	2.11			
チャート (32.8g)	点数		5						1	9	46		
	重量 (g)		3.5						2.0	22.4	4.9		
	重量 / 点数		0.70						2.00	2.49			
石英 (水晶) (314.4g)	点数		1							2	8		
	重量 (g)		0.7							4.8	0.9		
	重量 / 点数		0.70							2.40			
泥質凝灰岩 (8.6g)	点数						1						
	重量 (g)						8.6						
	重量 / 点数						8.60						
砂質凝灰岩 (4691.7g)	点数												
	重量 (g)												
	重量 / 点数												
溶結凝灰岩 (1339.9g)	点数		6	2	4	9	5	1	2	137	139	12	
	重量 (g)		3.3	2.4	30.7	179.0	33.0	1.0	8.4	674.2	18.7	295.6	
	重量 / 点数		0.55	1.20	7.67	19.89	6.60	1.00	4.20	4.92		24.63	
凝灰岩 (17307.6g)	点数	1		2	1	3							
	重量 (g)	55.0		13.6	9.9	52.0							
	重量 / 点数	55.00		6.80	9.90	17.33							
安山岩 A (4718.5g)	点数			1	1	2				191	1		
	重量 (g)			44.0	12.0	22.8				2237.4	0.1		
	重量 / 点数			44.00	12.00	11.40				11.71			
安山岩 B (8056.1g)	点数					9			3	228			
	重量 (g)					228.0			31.1	3338.0			
	重量 / 点数					25.33			10.37	14.64			
安山岩 C (1915.0g)	点数					3			2	68			
	重量 (g)					110.7			123.2	927.7			
	重量 / 点数					36.90			61.60	13.64			
安山岩 D (4687.8g)	点数					3	1			74			
	重量 (g)					166.9	14.5			1113.2			
	重量 / 点数					55.63	14.50			15.04			
安山岩 E (4096.6g)	点数					1			1	90			
	重量 (g)					65.7			15.5	1082.7			
	重量 / 点数					65.70			15.50	12.03			
安山岩 F (243.3g)	点数									28	1		
	重量 (g)									155.2	0.5		
	重量 / 点数									5.54	0.50		
塩基性岩 (0.9g)	点数									1	1		
	重量 (g)									0.8	0.1		
	重量 / 点数									0.80	0.10		
塩基性凝灰岩 (33.7g)	点数									1			
	重量 (g)									2.3			
	重量 / 点数									2.30			
玄武岩 (1058.8g)	点数								1	3			
	重量 (g)								7.6	73.8			
	重量 / 点数								7.60	24.60			
閃緑岩 (104907.0g)	点数									1			
	重量 (g)									7.7			
	重量 / 点数									7.70			
緑色片岩 (668.5g)	点数									2			
	重量 (g)									11.0			
	重量 / 点数									5.50			
緑色岩 (179.9g)	点数												
	重量 (g)												
	重量 / 点数												
変塩基性岩 (253.8g)	点数												
	重量 (g)												
	重量 / 点数												
砂岩 (2074.2g)	点数												
	重量 (g)												
	重量 / 点数												
ハンレイ岩 (25648.8g)	点数												
	重量 (g)												
	重量 / 点数												
片麻岩 (248892.7g)	点数												
	重量 (g)												
	重量 / 点数												
花こう岩 (1117818.6g)	点数												
	重量 (g)												
	重量 / 点数												



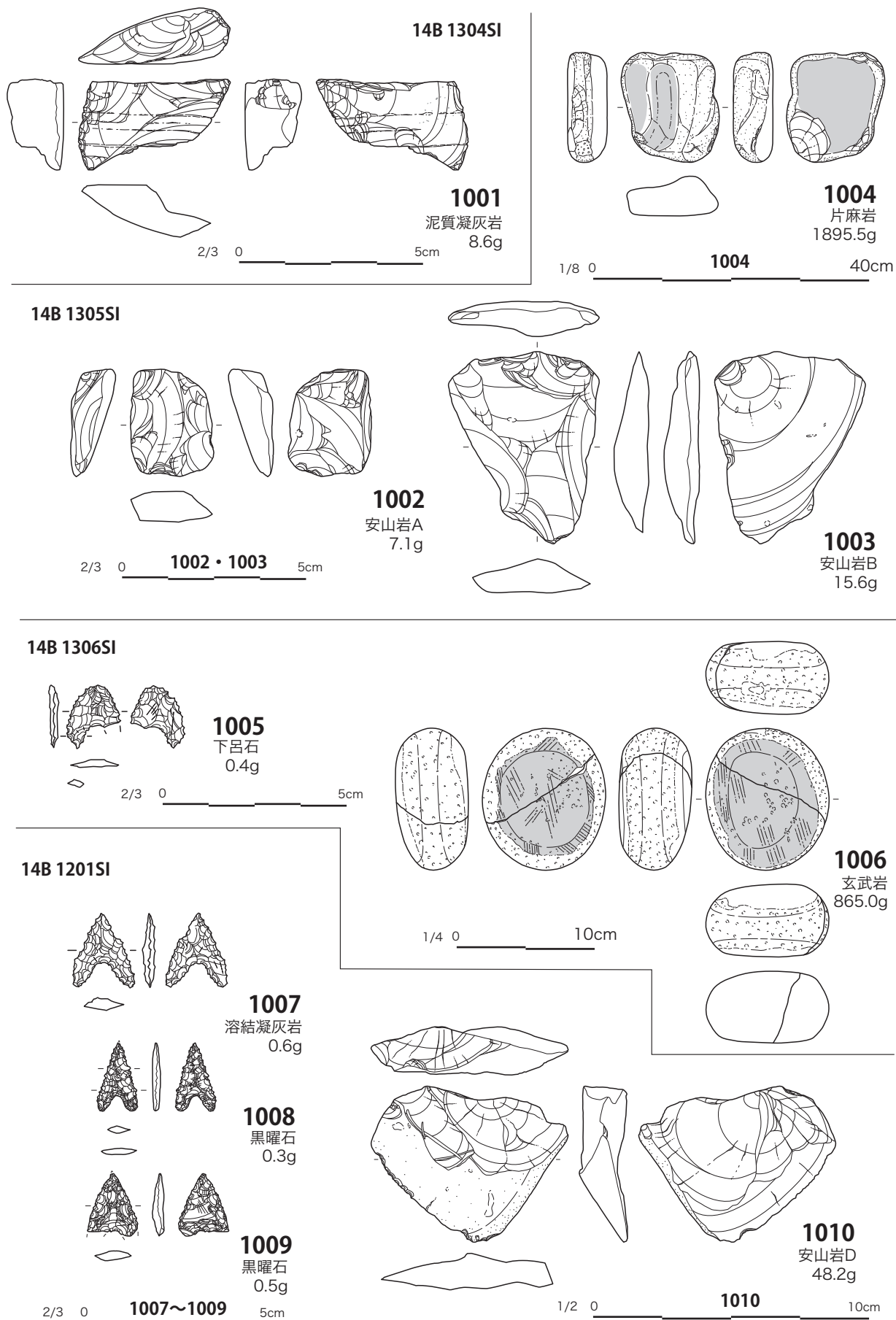
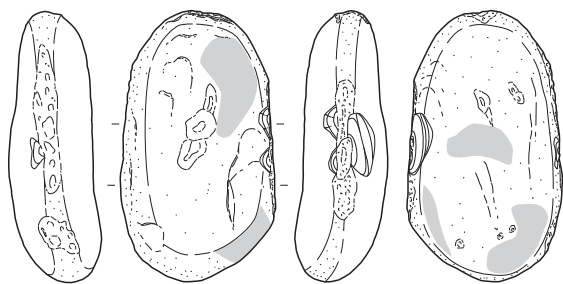
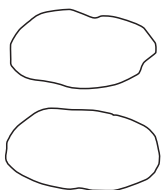


図 86 石器・石製品 1 【 14B 区 1304SI・1305SI・1306SI・1201SI 】

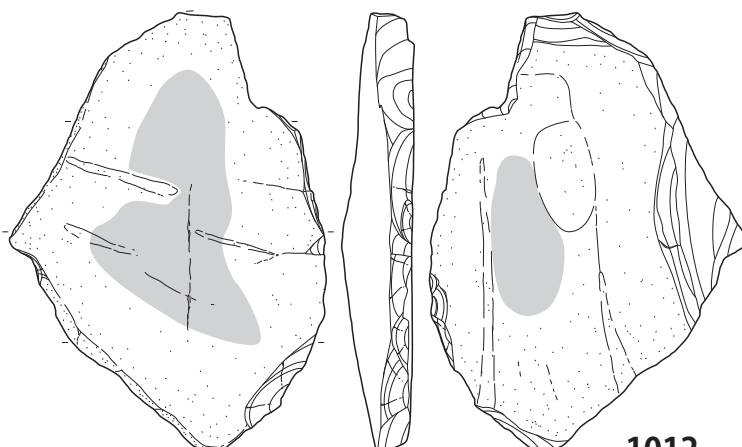
14B 1201SI



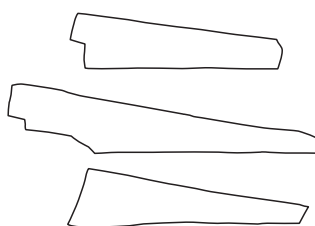
**1011**  
片麻岩  
817.9g



1/4 0 20cm

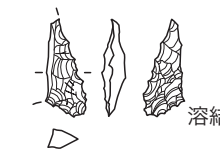


**1012**  
片麻岩  
22000g

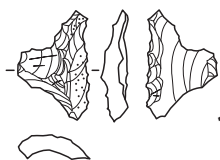


1/10 0 40cm

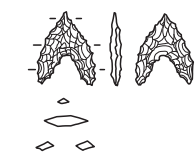
14B 0036SK



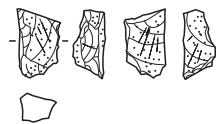
**1013**  
溶結凝灰岩  
0.4g



**1014**  
黒曜石  
0.2g

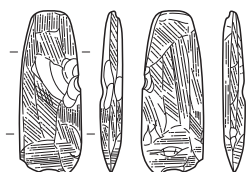


**1015**  
黒曜石  
0.8g



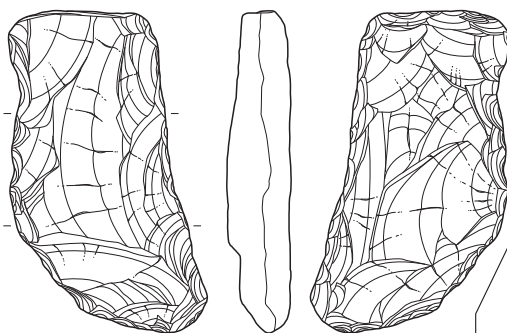
**1016**  
黒曜石  
0.8g

2/3 0 1013~1016 5cm

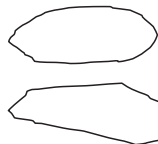


**1017**  
緑色片岩  
7.6g

1/2 0 1017 5cm

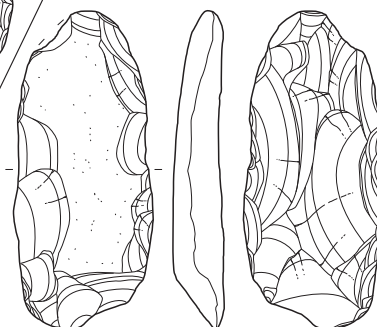


**1018**  
安山岩D  
82.0g



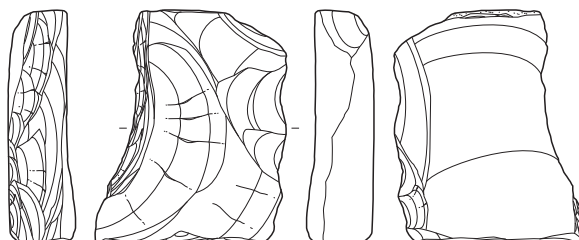
1/2 0 5cm

14B 1028SK



**1020**  
安山岩D  
52.2g

1/2 0 10cm



**1019**  
安山岩D  
68.9g

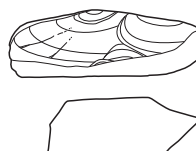
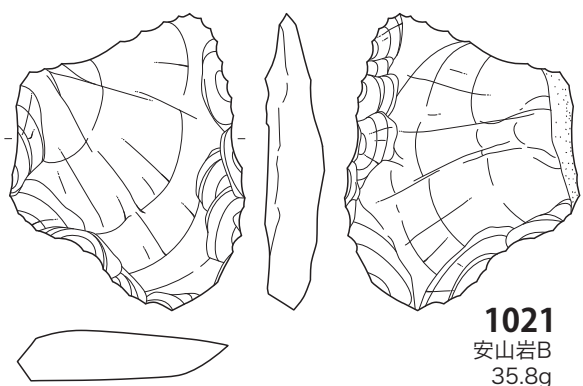


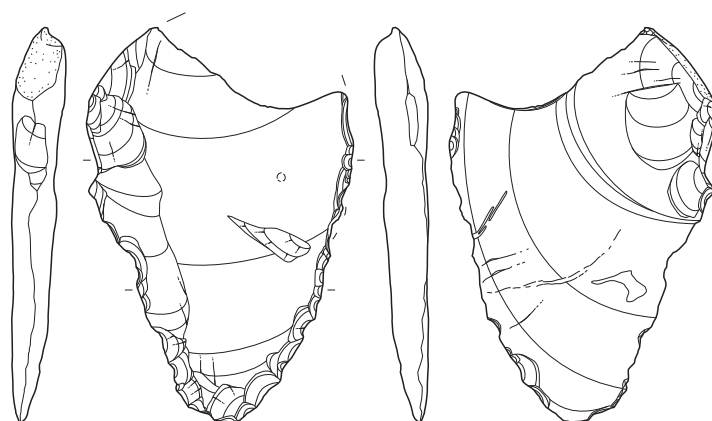
図 87 石器・石製品 2 【 14B 区 1201SI・0036SK・1023SK・1028SK 】



**1021**  
安山岩B  
35.8g

2/3 0 5cm

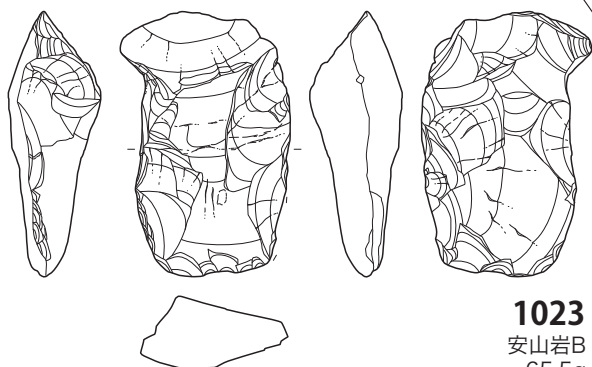
14B 1035SK



**1022**  
溶結凝灰岩  
24.3g

2/3 0 5cm

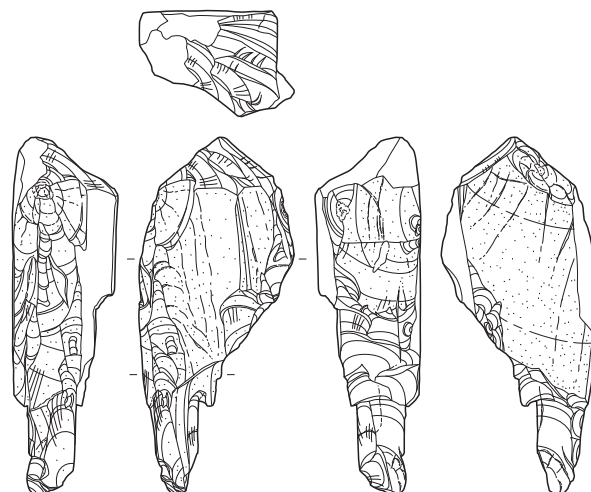
14B 1071SK



**1023**  
安山岩B  
65.5g

1/2 0 10cm

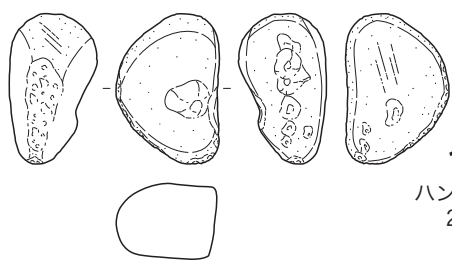
14B 1075SK



**1024**  
黒曜石  
34.9g

2/3 0 5cm

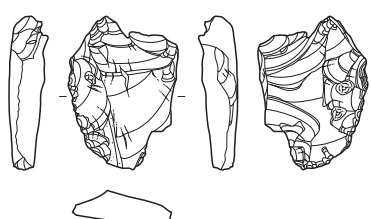
14B 1160SK



**1025**  
ハンレイ岩  
268.8g

1/4 0 20cm

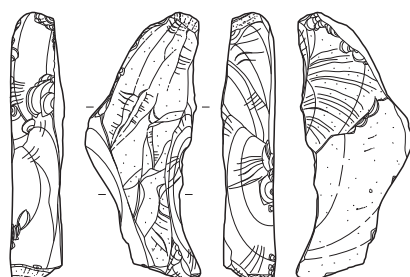
14B 1160SK



**1026**  
チャートor溶結凝灰岩  
4.4g

2/3 0 5cm

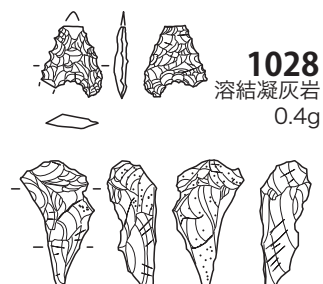
14B 1180SK



**1027**  
黒曜石  
14.2g

5cm

14B 1195SK



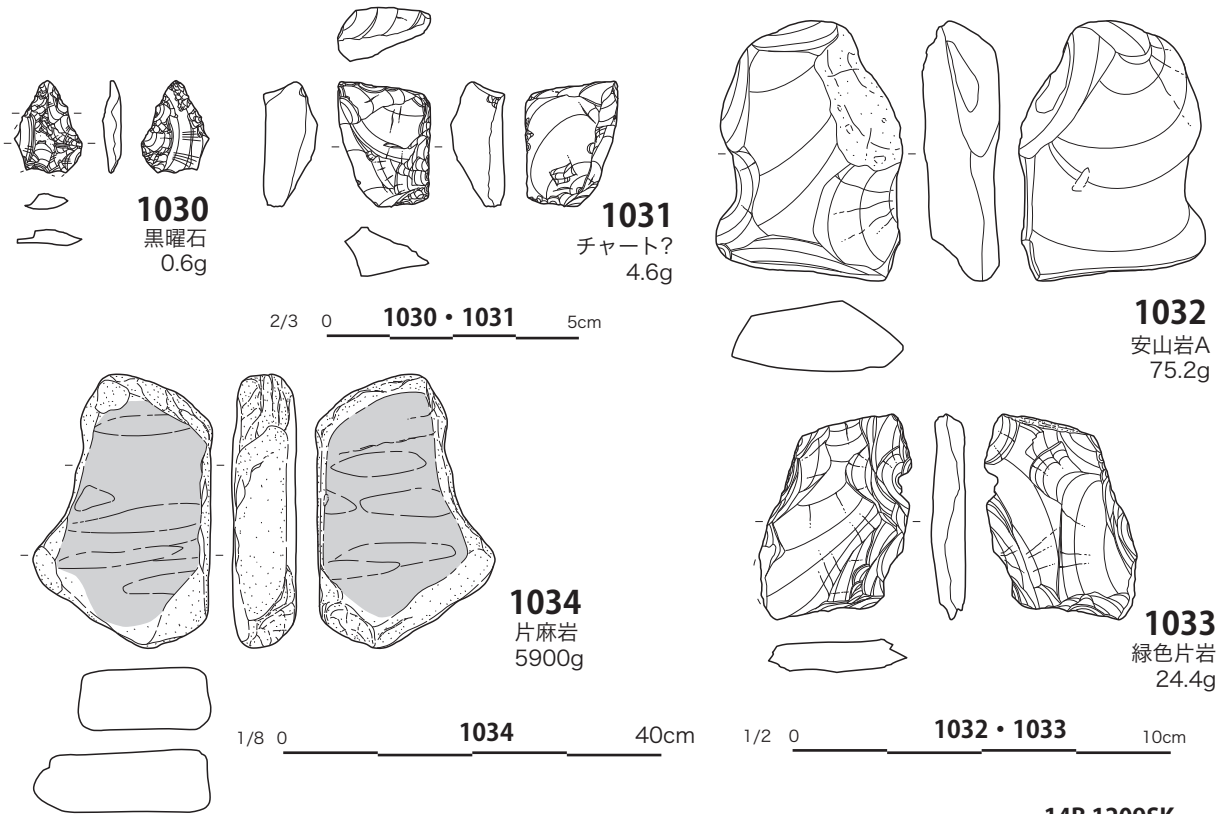
**1028**  
溶結凝灰岩  
0.4g

5cm

**1029**  
黒曜石  
2.3g

14B 1208SK

図 88 石器・石製品 3 【 14B 区 1035SK・1071SK・1075SSK・1160SK・1180SK・1195SK・1208SK 】



14B 1209SK

14B 1213SK

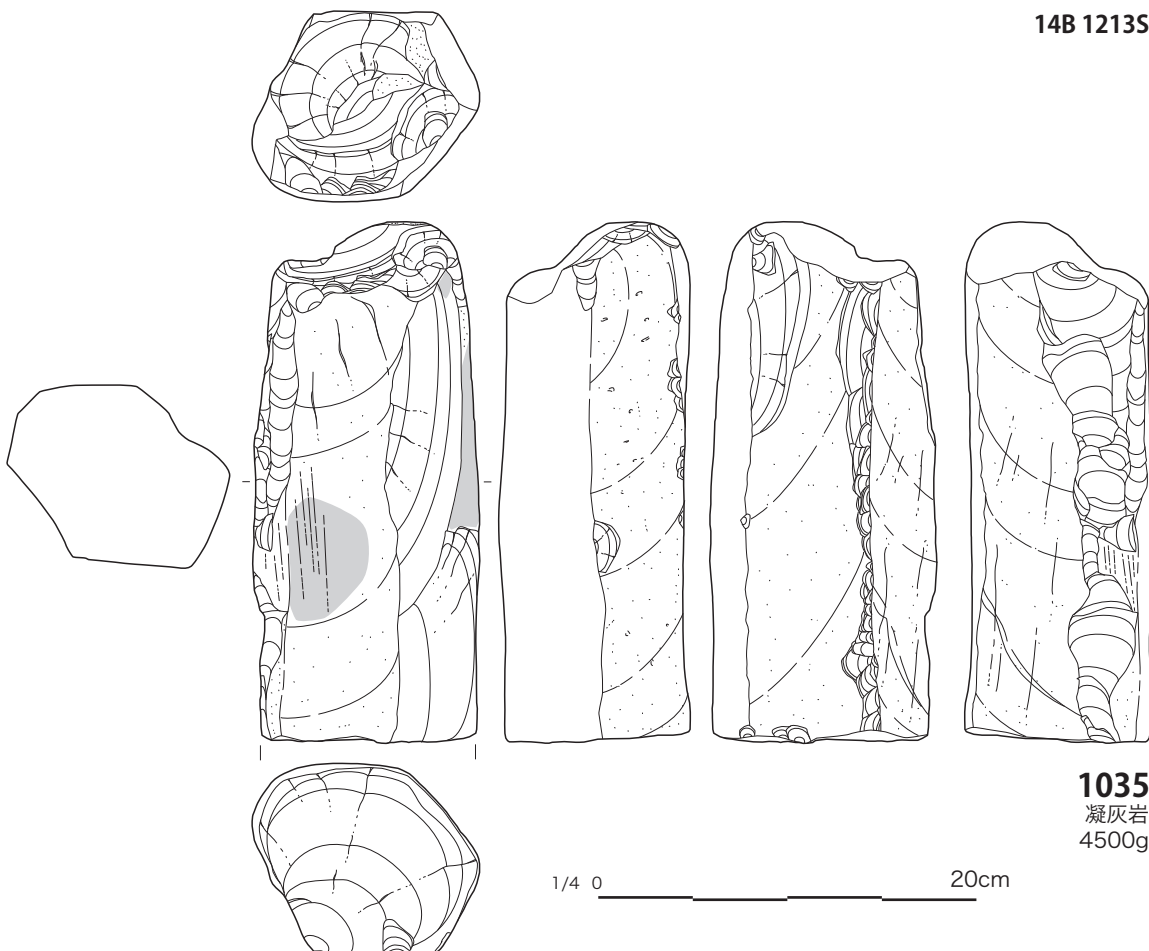


図 89 石器・石製品 4 【 14B 区 1209SK・1213SK 】

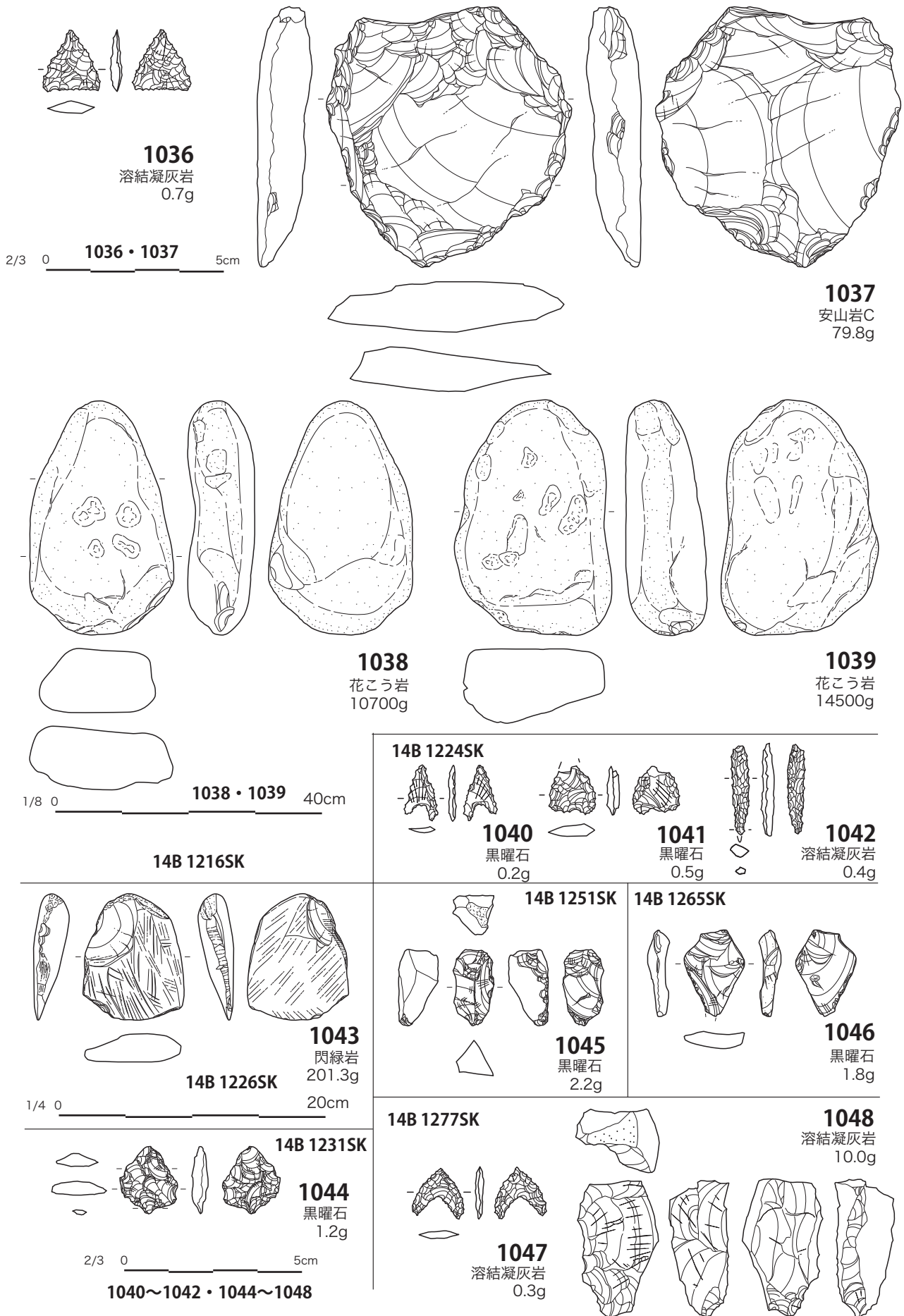
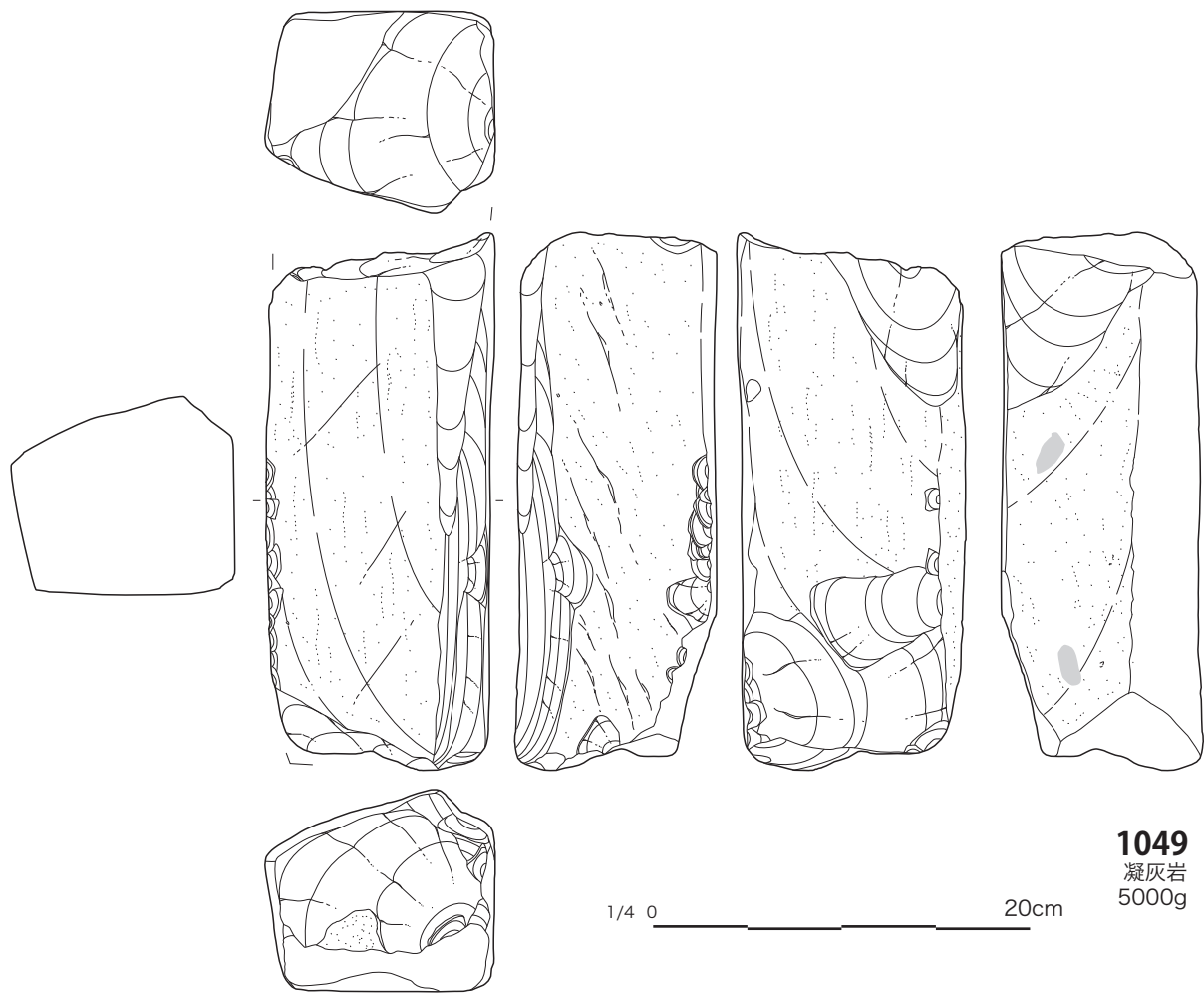
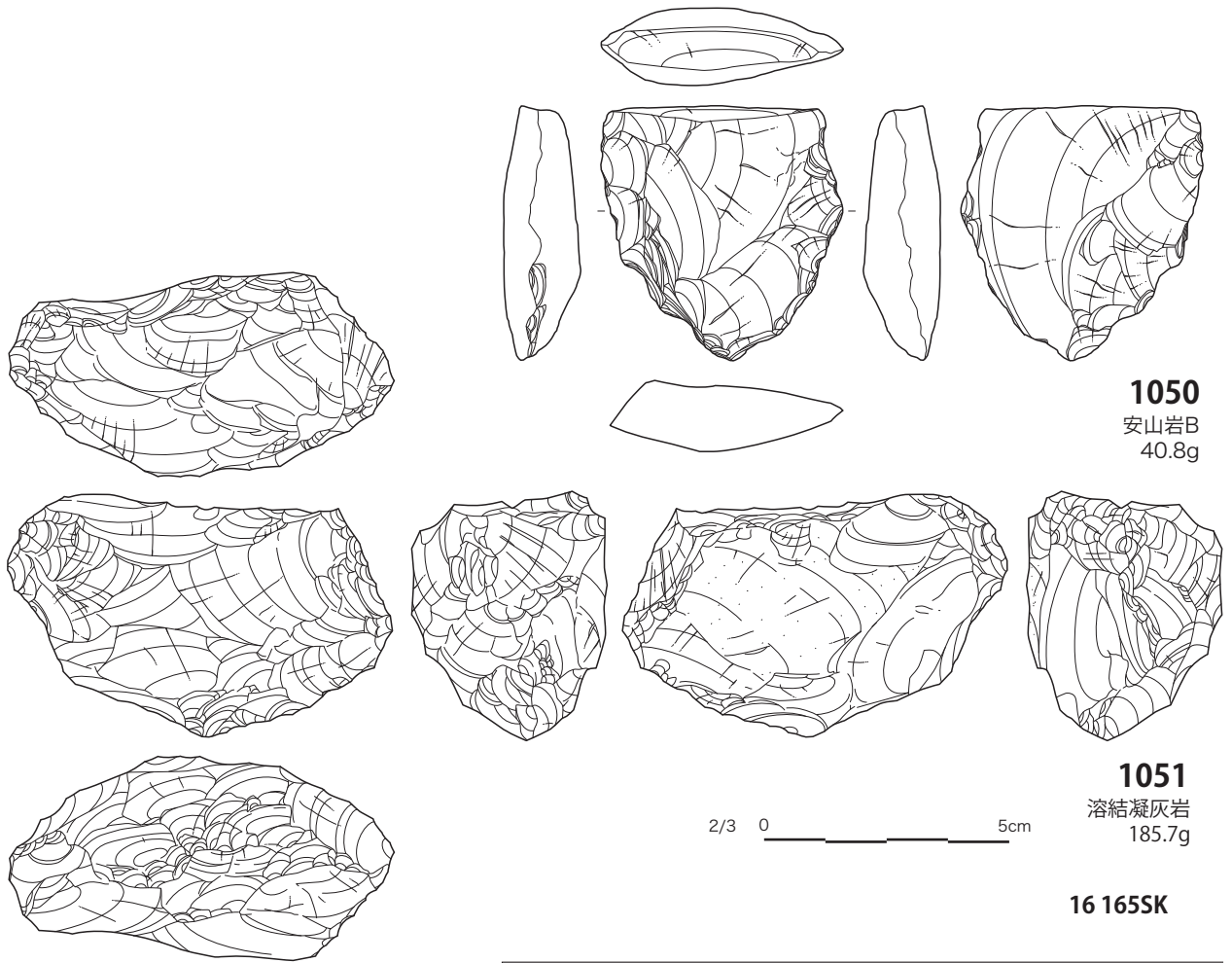


図 90 石器・石製品 5 【14B区 1216SK・1224SK・1226SK・1231SK・1251SK・1265SK・1277SK】



14B 1333SK

图91 石器·石製品6【14B区1333SK】



**16 303SK**

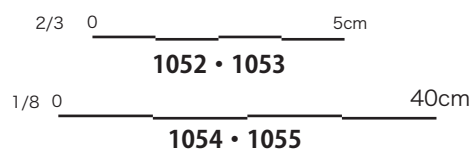
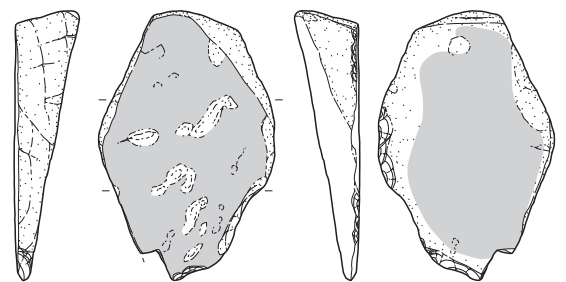
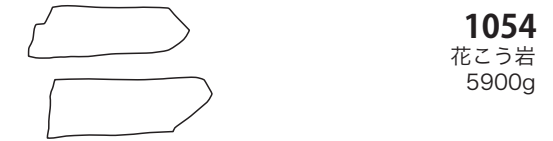
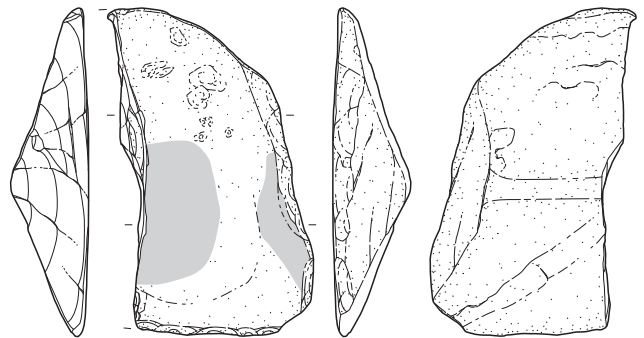
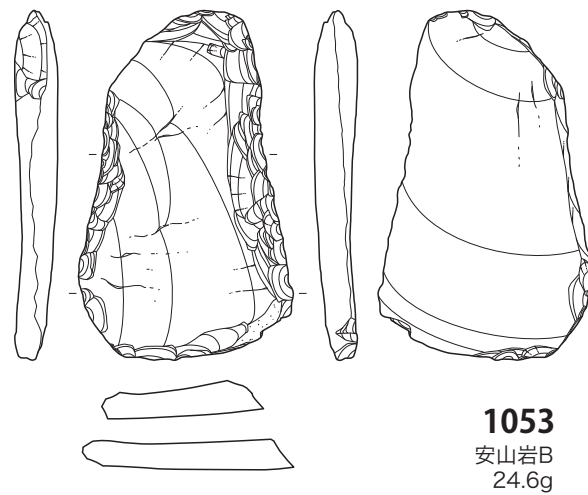
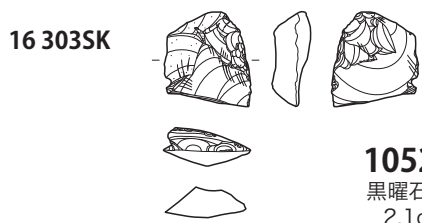
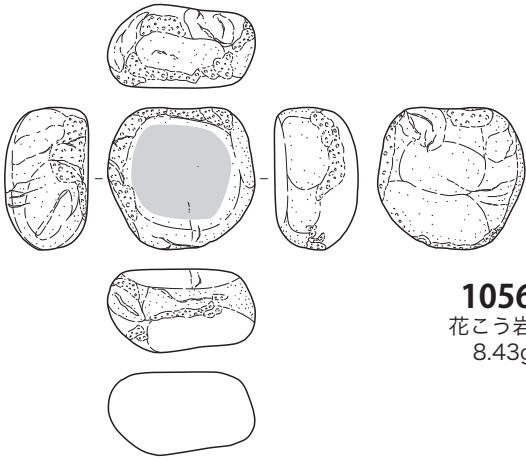
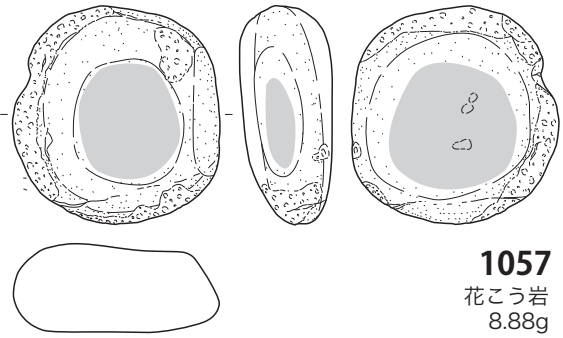


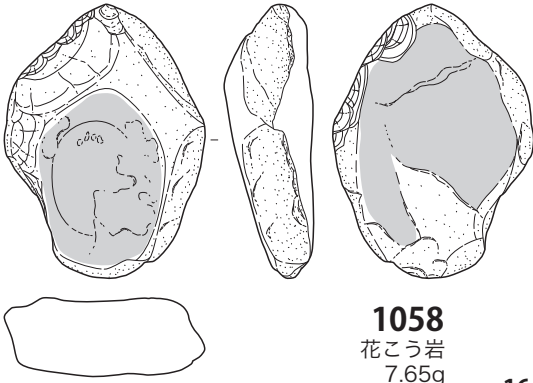
図 92 石器・石製品 7 【 16 区 165SK・303SK 】



**1056**  
花こう岩  
8.43g

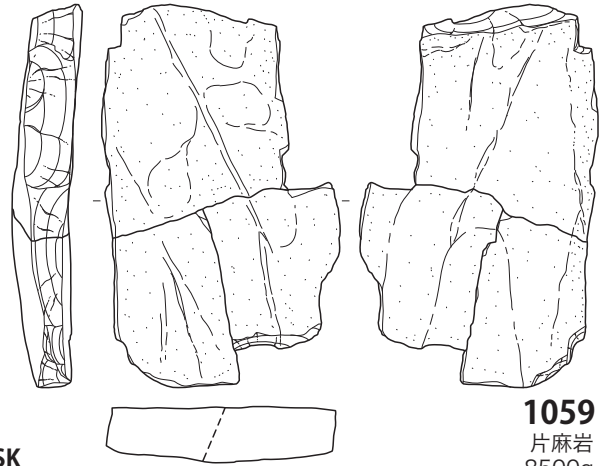


**1057**  
花こう岩  
8.88g

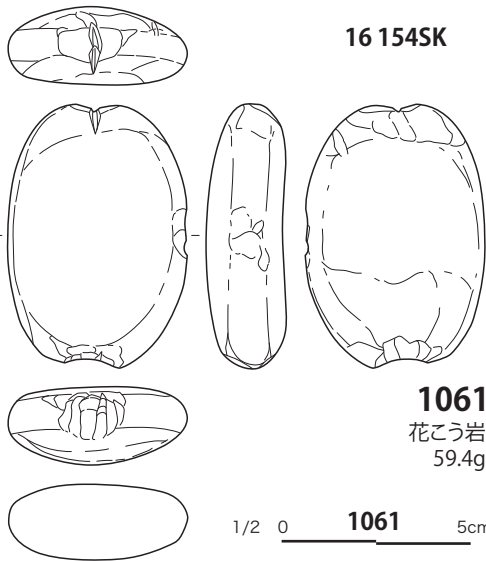


**1058**  
花こう岩  
7.65g

16 121SK

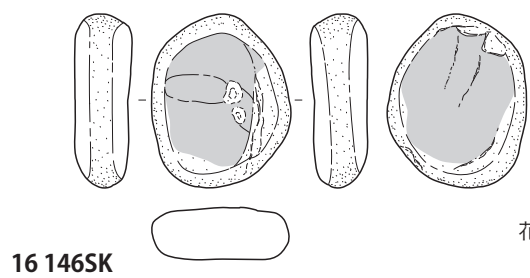
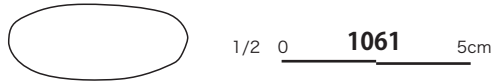


**1059**  
片麻岩  
8500g



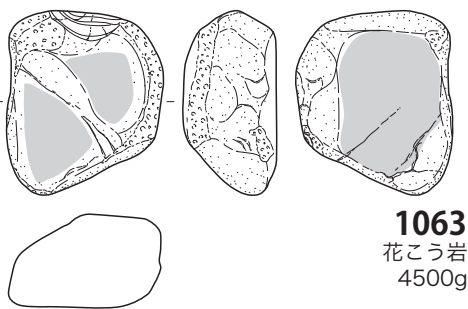
16 154SK

**1061**  
花こう岩  
59.4g

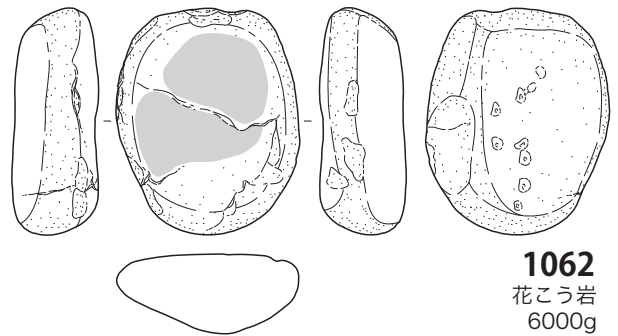


16 146SK

**1060**  
花こう岩  
2496g

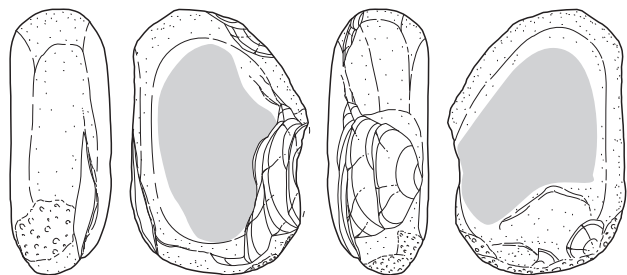


**1063**  
花こう岩  
4500g



**1062**  
花こう岩  
6000g

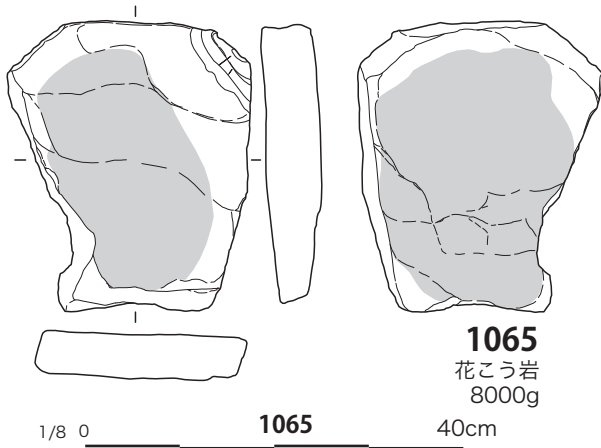
1/8 0 **1056~1060 · 1062~1064** 40cm



**1064** 花こう岩  
8500g

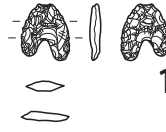
図 93 石器・石製品 8 【 16 121SK · 146SK · 154SK 】

16 154SK



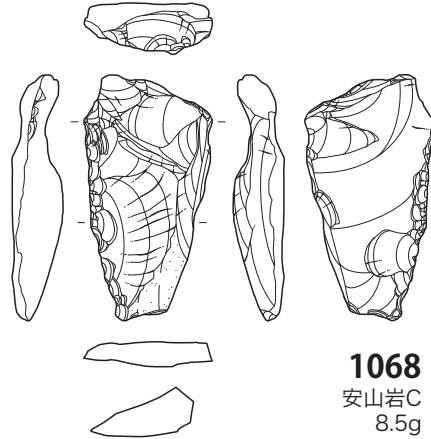
**1065**  
花こう岩  
8000g

16 204SK



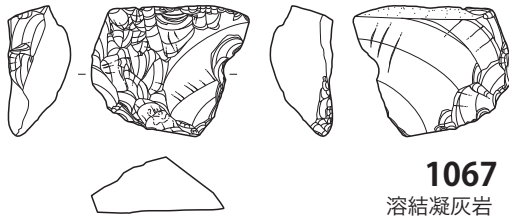
**1066**  
黒曜石  
0.2g

16 267SK



**1068**  
安山岩C  
8.5g

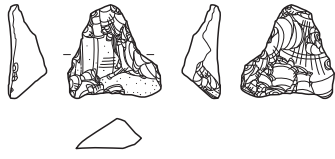
16 263SK



**1067**  
溶結凝灰岩  
8.3g

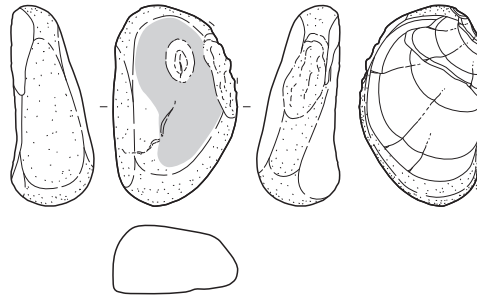
図 94 石器・石製品 9 【 16 区 154SK ・ 204SK ・ 263SK ・ 267SK 】

16 266SK



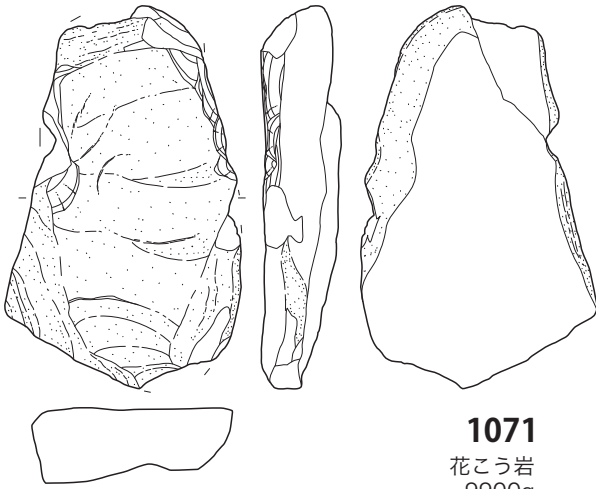
**1069**  
黒曜石  
1.7g

2/3 0 **1069** 5cm

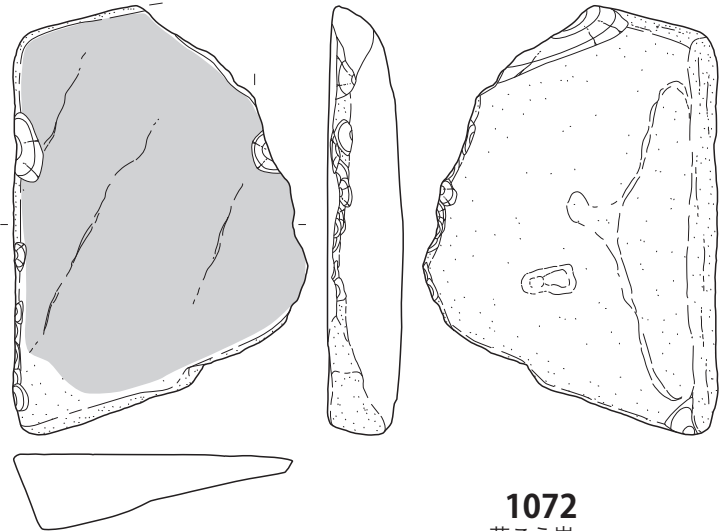


**1070**  
片麻岩  
383.9g

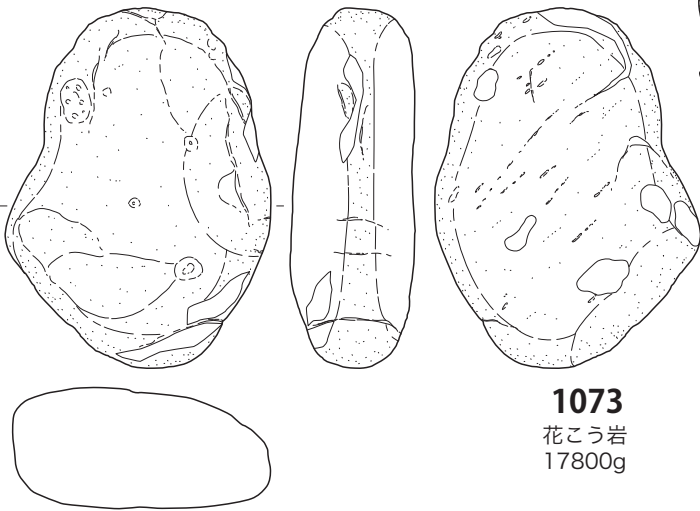
1/4 0 **1070** 20cm



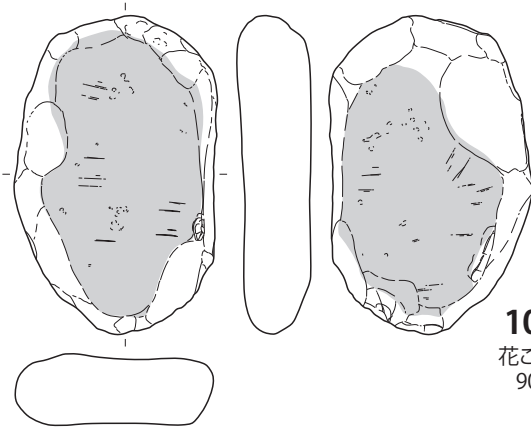
**1071**  
花こう岩  
9900g



**1072**  
花こう岩  
12800g



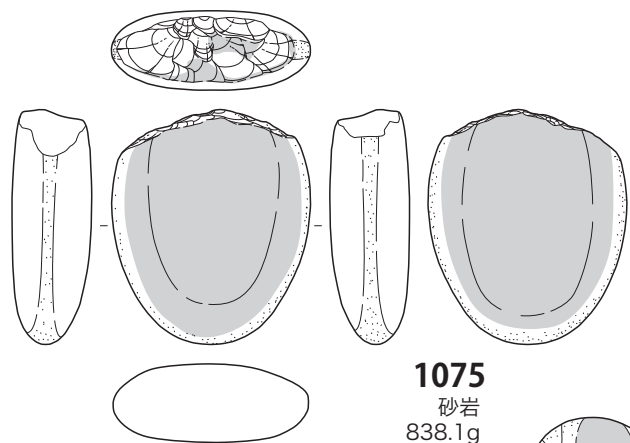
**1073**  
花こう岩  
17800g



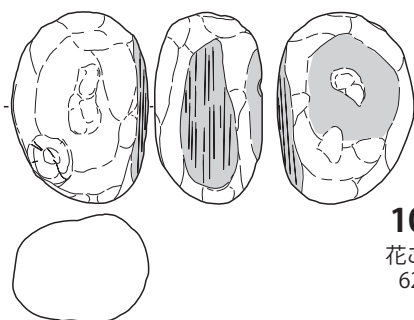
**1074**  
花こう岩  
9000g

1/8 0 **1071~1074** 40cm

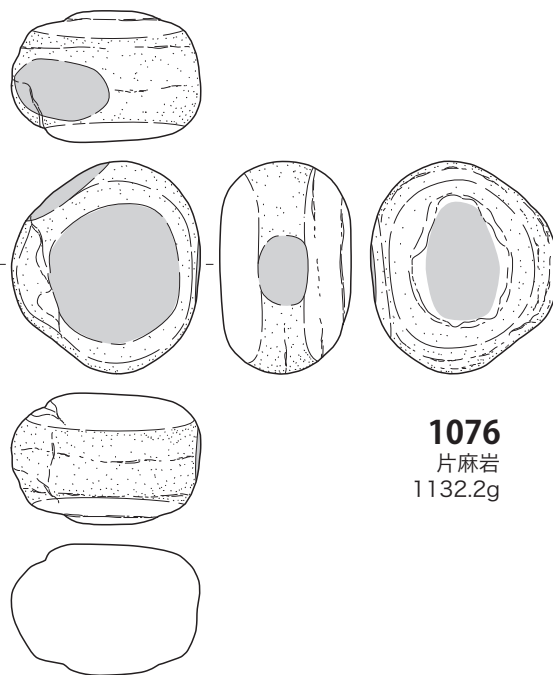
図 95 石器・石製品 10【16区 266SK】



**1075**  
砂岩  
838.1g

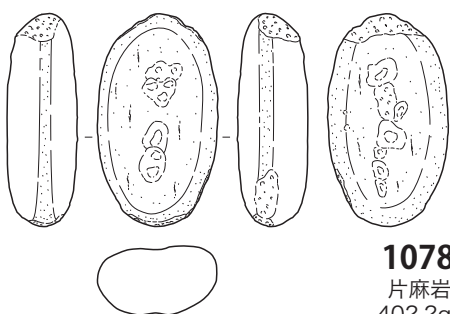


**1077**  
花こう岩  
625.9g



**1076**  
片麻岩  
1132.2g

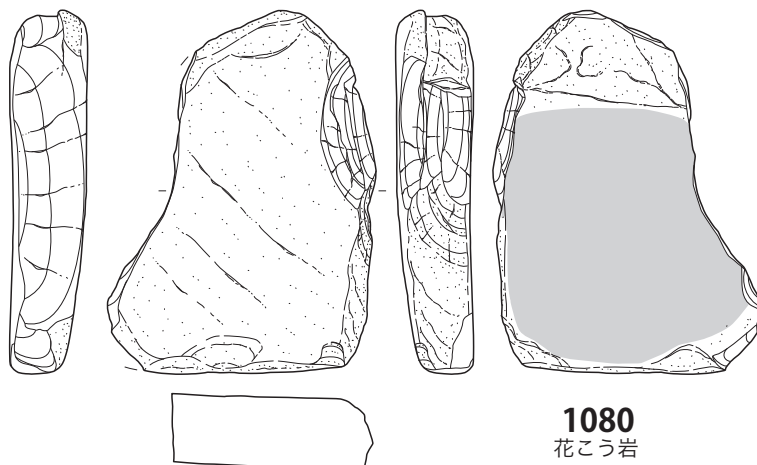
16 269SK



**1078**  
片麻岩  
402.2g

1/4 0 20cm

16 297SK

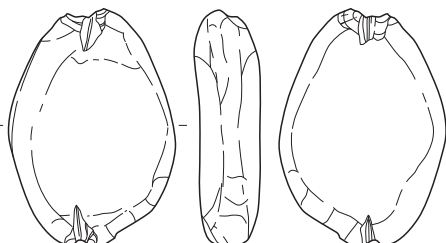


**1080**  
花こう岩  
13200g

1/8 0 40cm



16 278SK

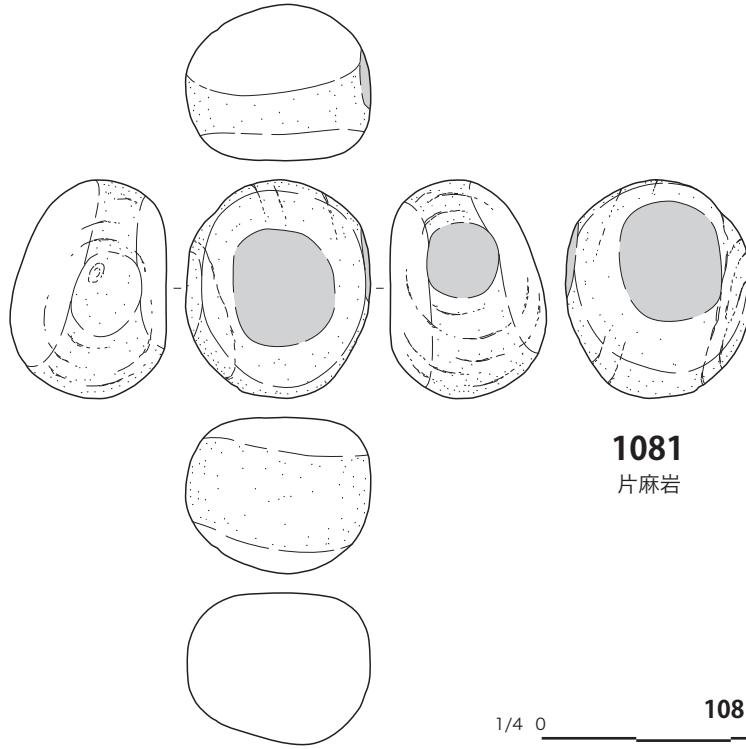


**1079**  
片麻岩  
74.1g

1/2 0 5cm

図 96 石器・石製品 11 【 16 区 268SK・269SK・278SK・297SK 】

16 277SK



1/4 0 1081 20cm

1/8 0 1082・1083 40cm

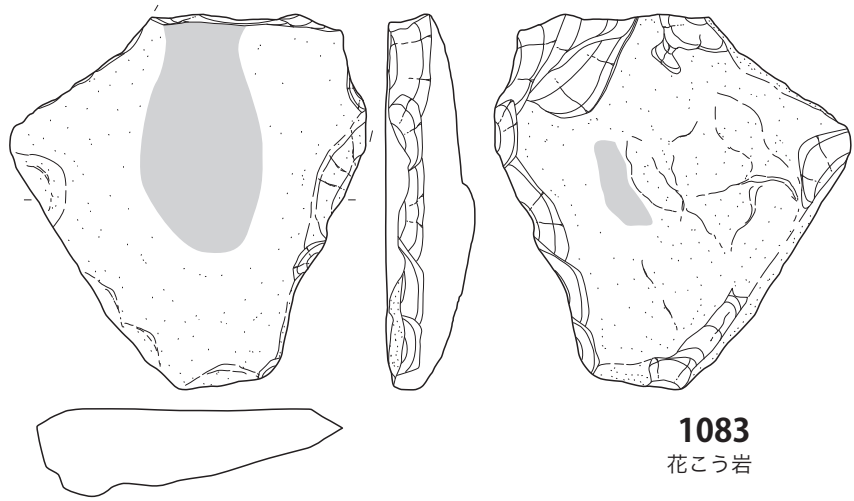
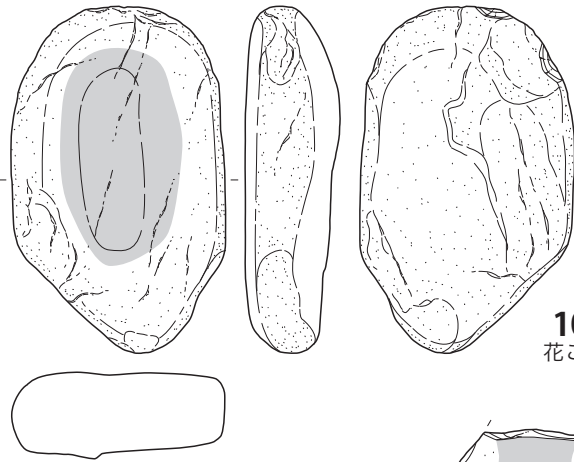
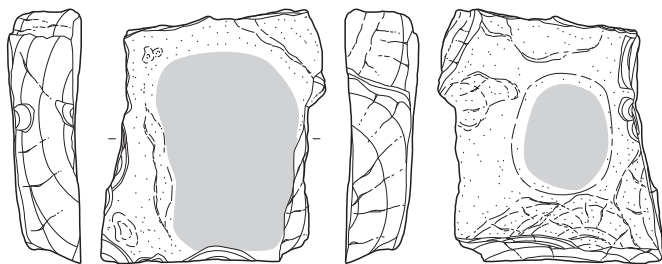
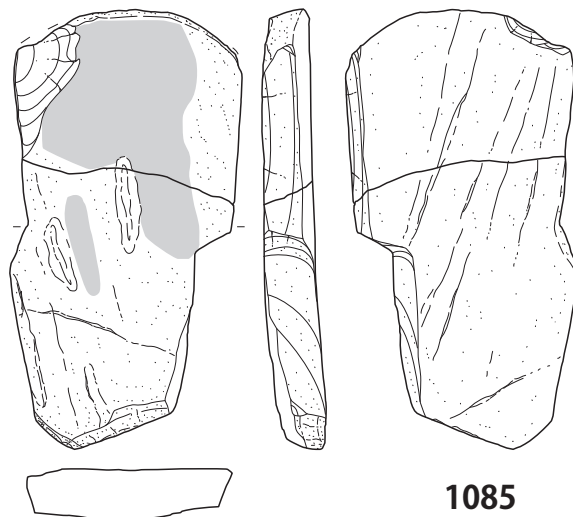


図97 石器・石製品12【16区 277SK】

16 310SK



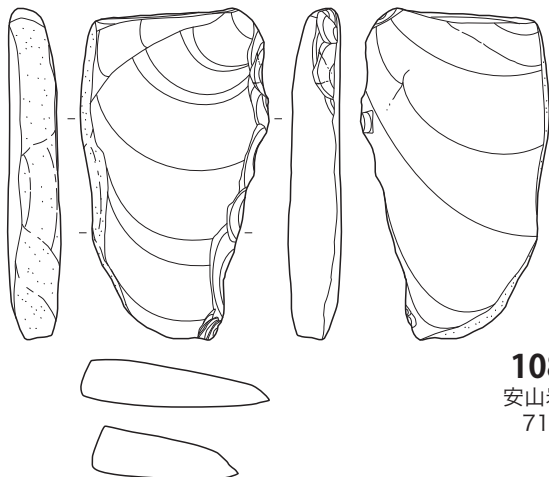
1084  
片麻岩  
7600g



1085  
片麻岩  
9000g

1/8 0 40cm

16 309SK



1086  
安山岩A  
71.1g

1/2 0 10cm

图 98 石器·石製品 13 【 16 区 309SK · 310SK 】

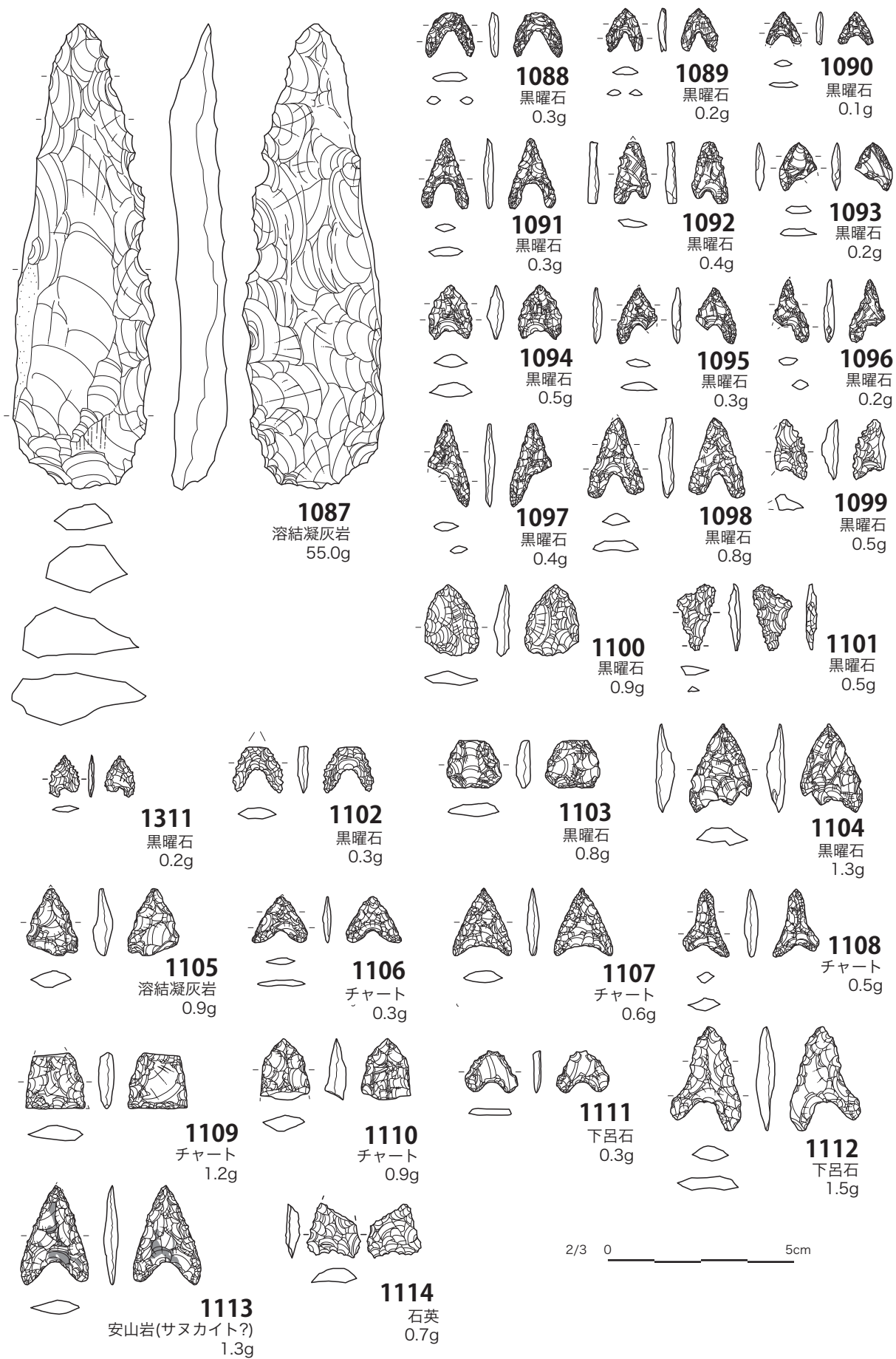


図99 石器・石製品14【14B区・14C区・16区 検出】

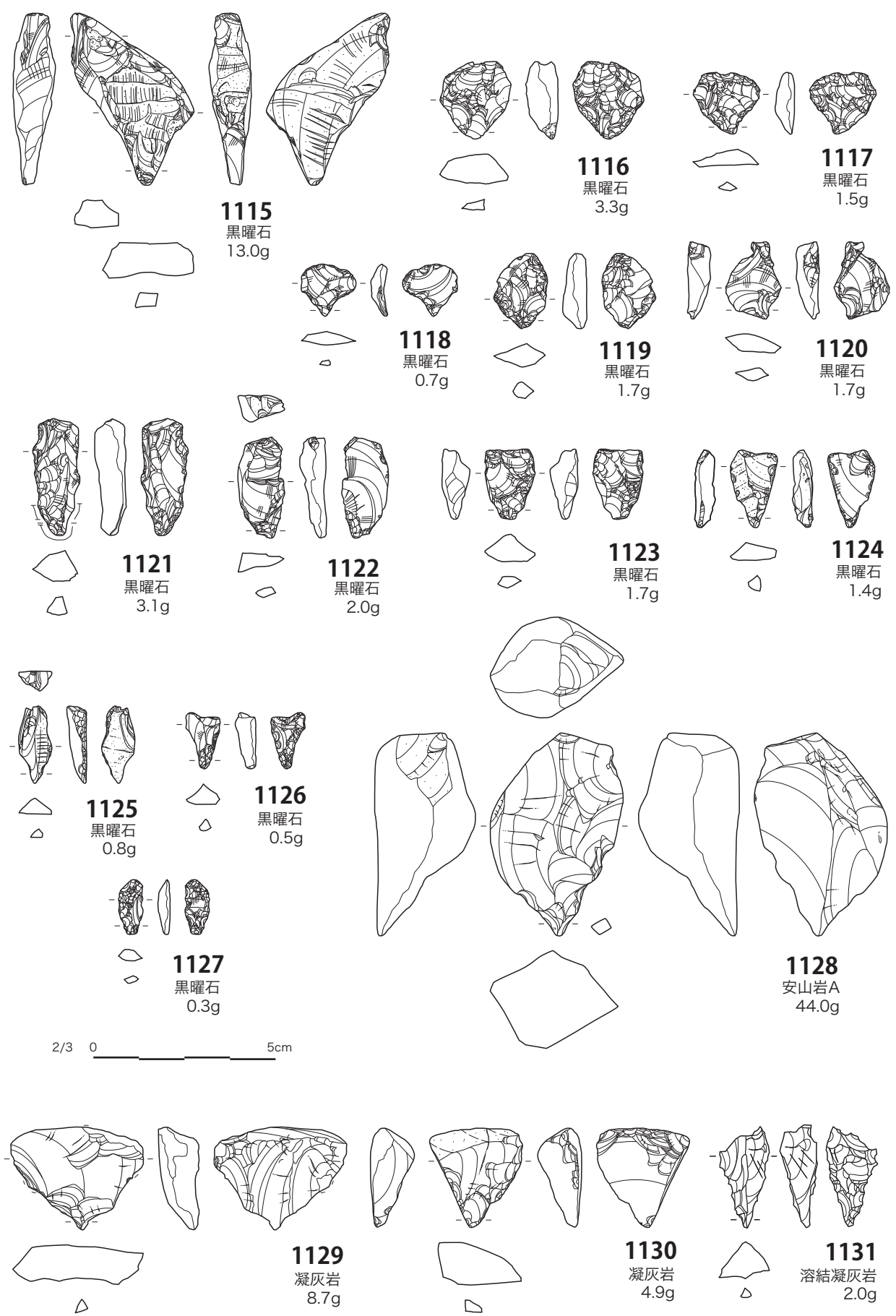


図 100 石器・石製品 15【14B区・14C区・16区 検出】

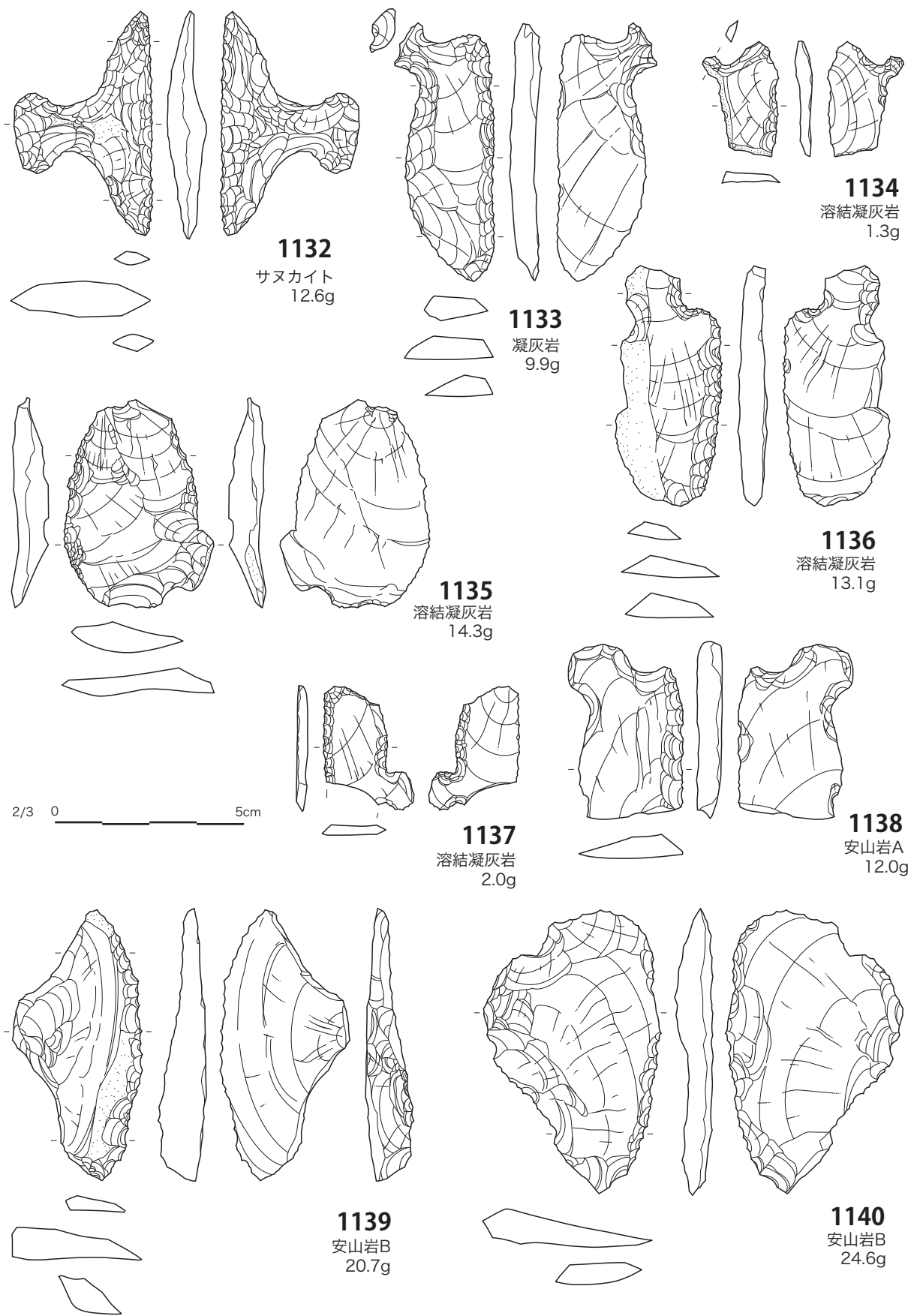


図 101 石器・石製品 16【14B区・14C区・16区 検出】

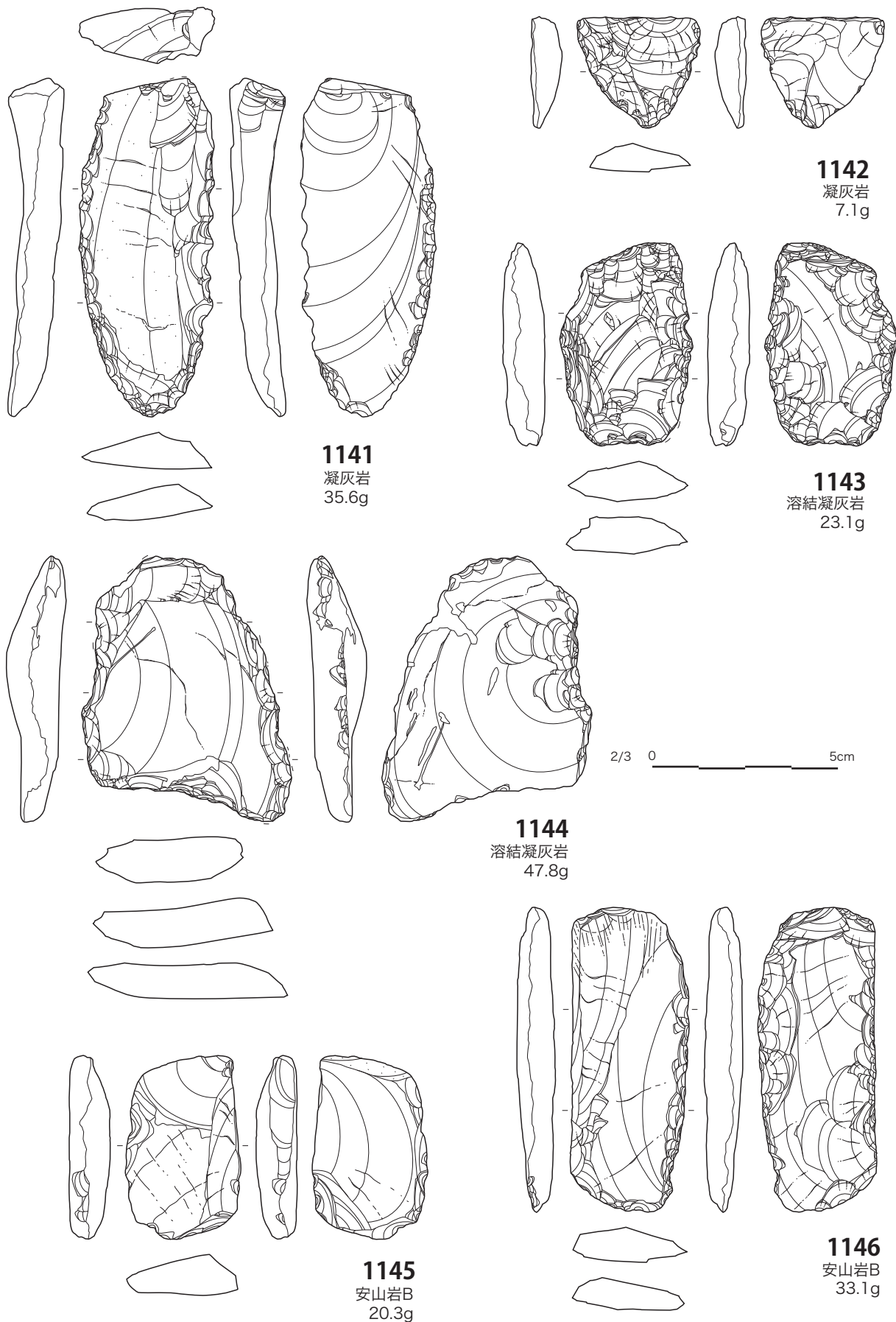


图 102 石器·石製品 17【14B区・14C区・16区 検出】

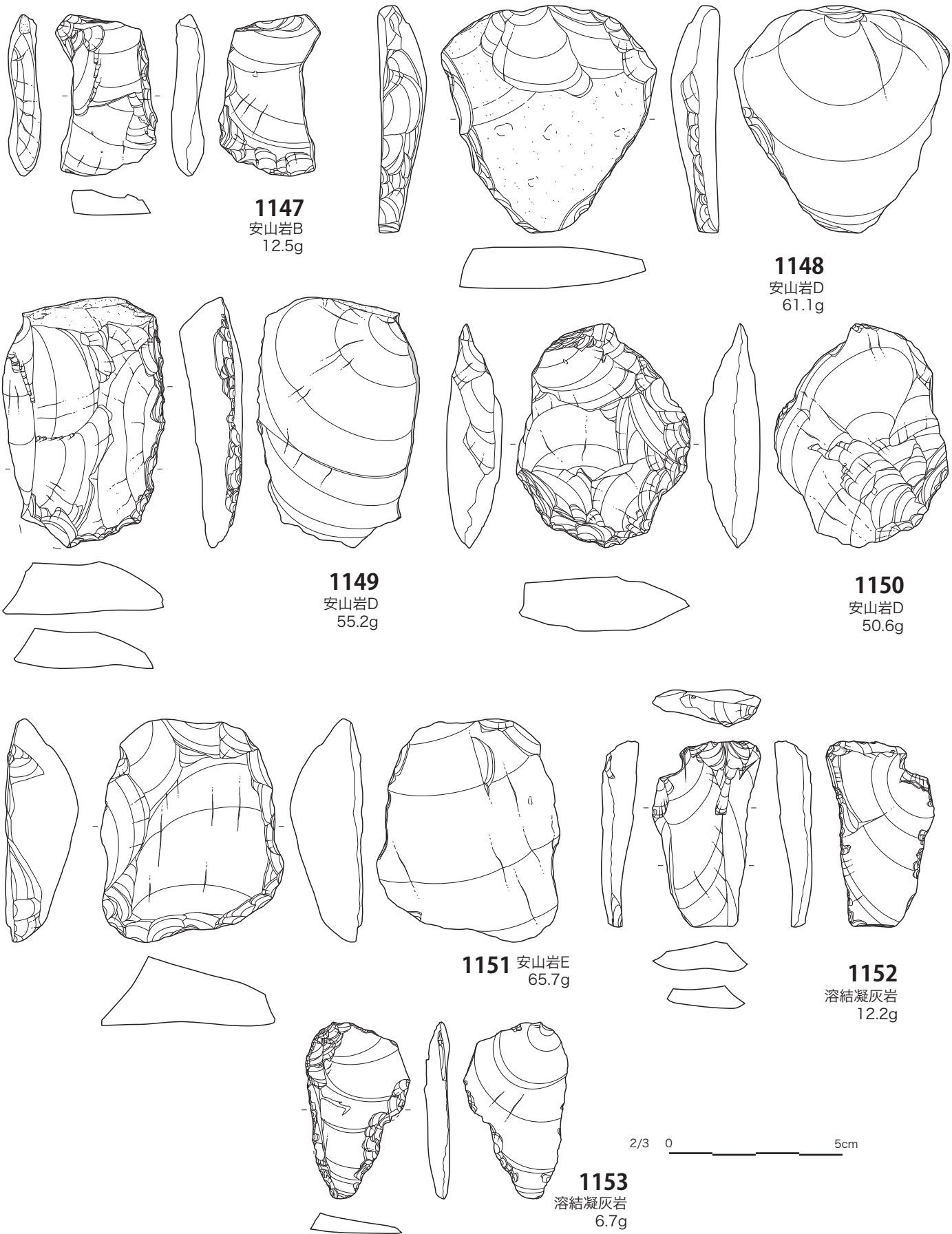


図 103 石器・石製品 18【14B区・14C区・16区 検出】

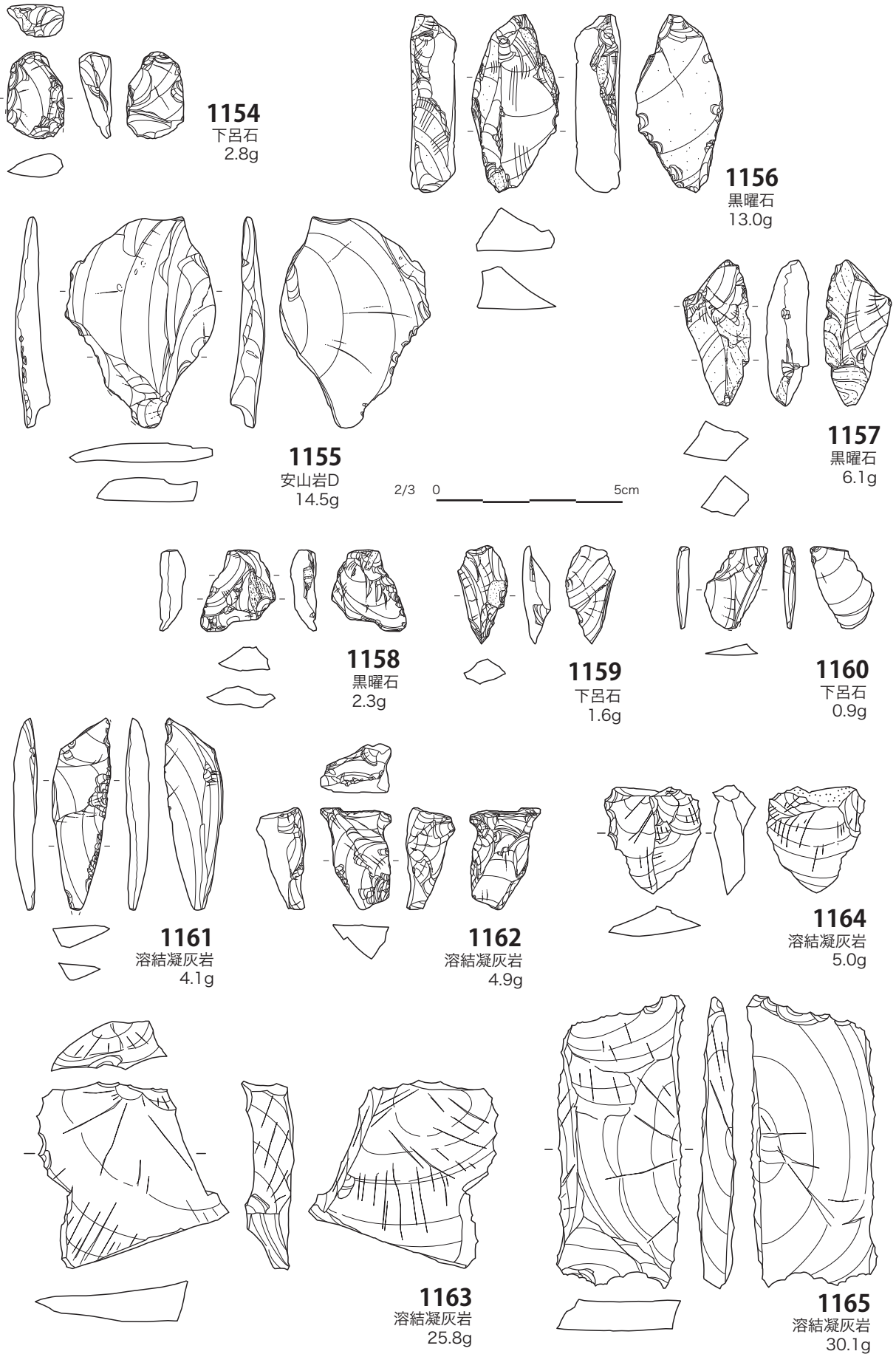
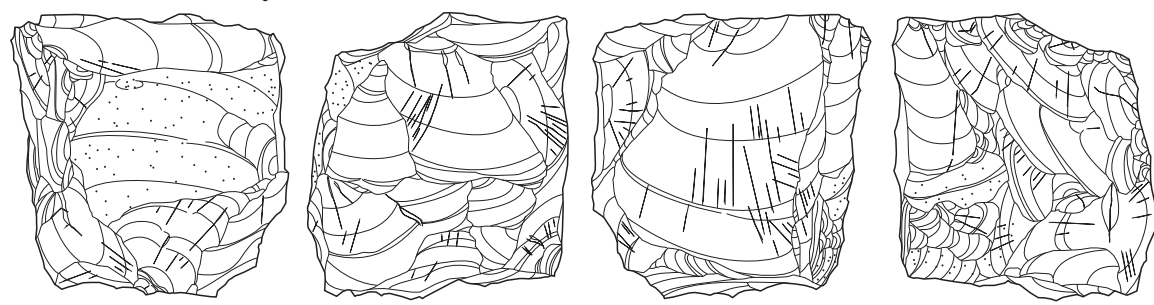


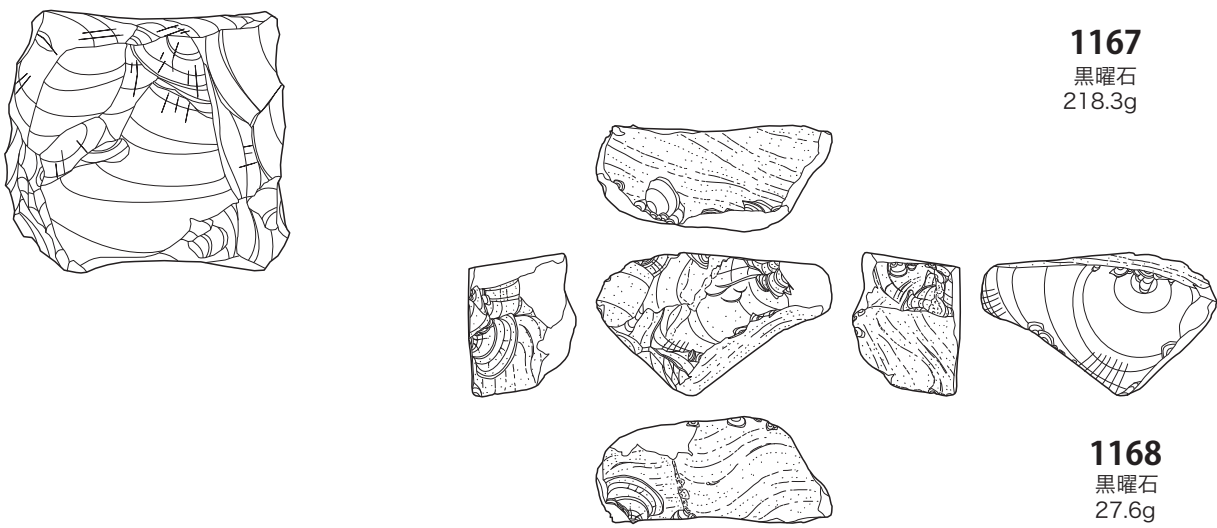
図 104 石器・石製品 19【14B・14C区・16区 検出】



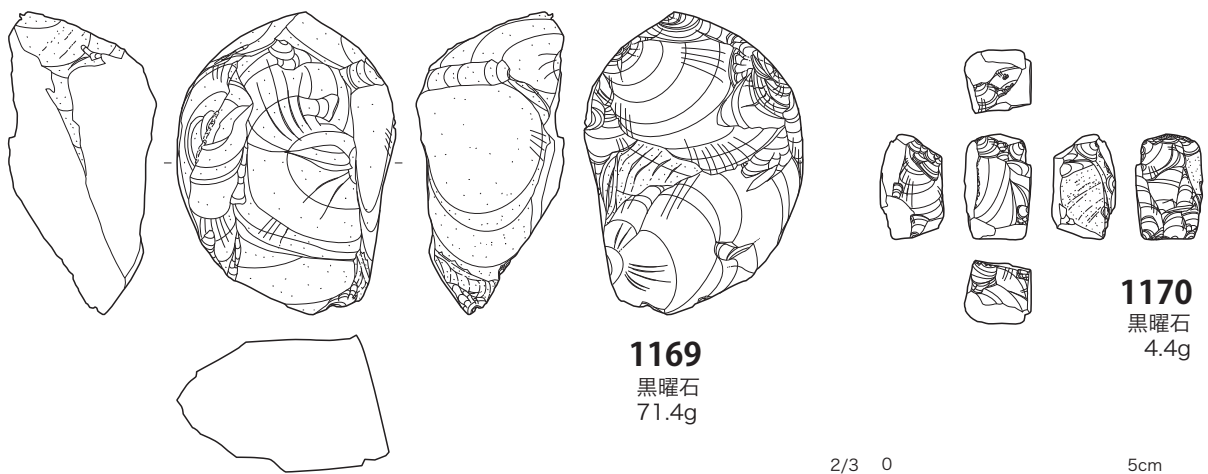
**1166**  
黒曜石  
2.4g



**1167**  
黒曜石  
218.3g



**1168**  
黒曜石  
27.6g



**1169**  
黒曜石  
71.4g

**1170**  
黒曜石  
4.4g

2/3 0 \_\_\_\_\_ 5cm

図 105 石器・石製品 20 【 14B 区・14C 区・16 区 検出 】

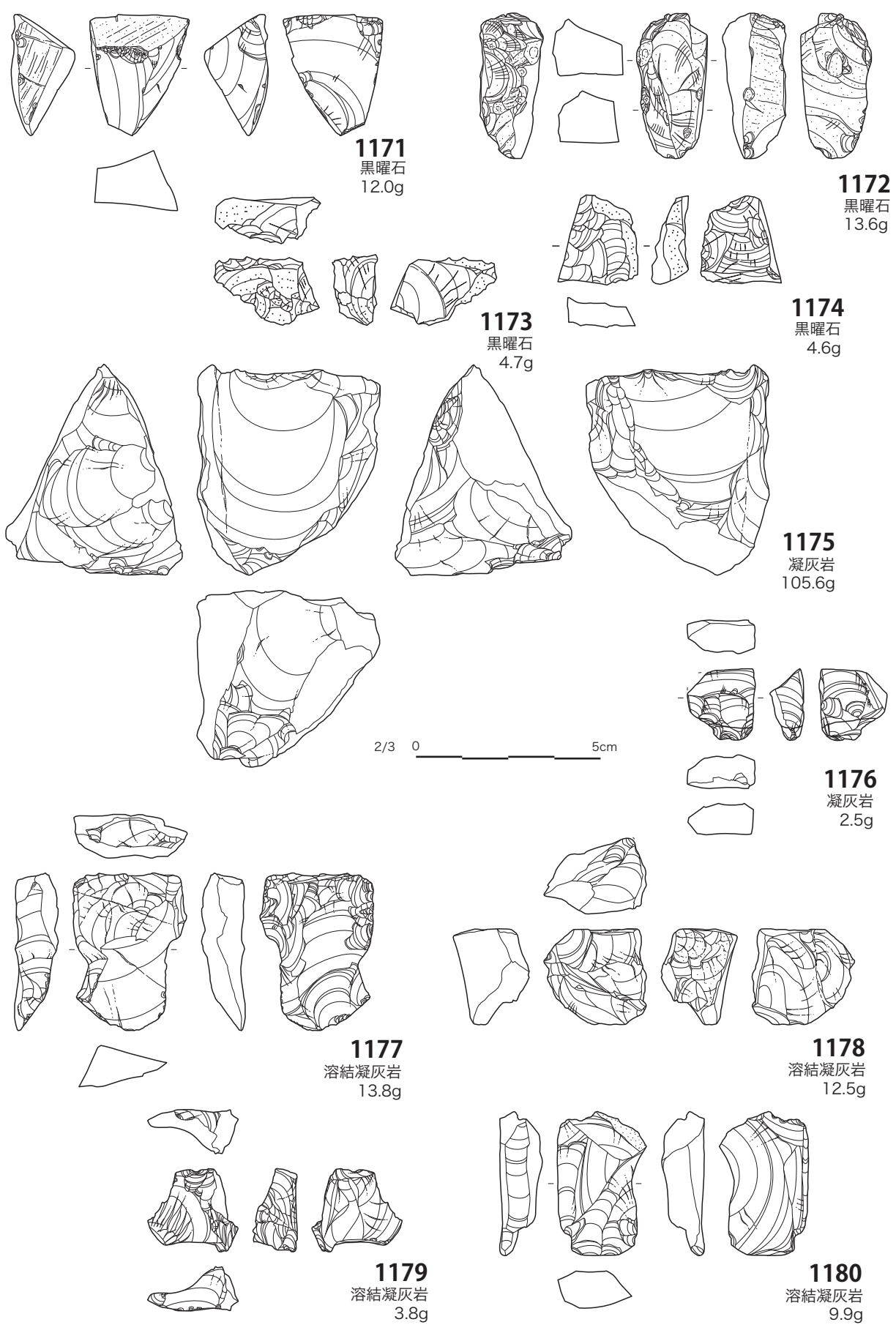
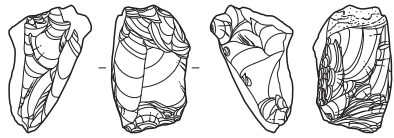
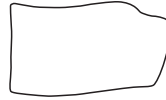
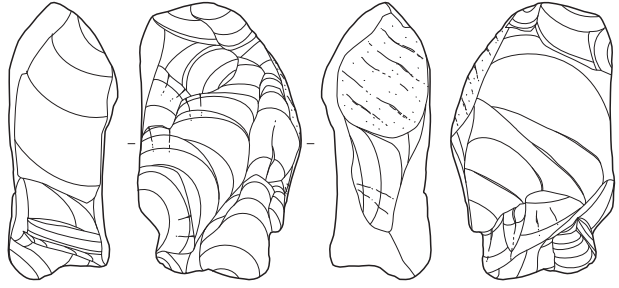


图 106 石器·石製品 21 【14B区・14C区・16区 検出】

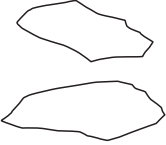
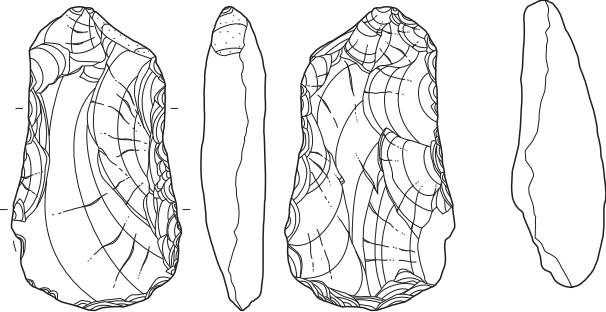


**1181**  
溶結凝灰岩or チャート  
6.6g

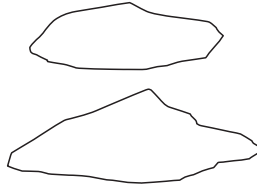
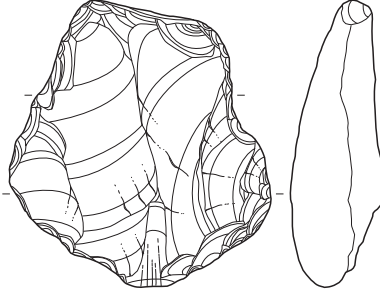


**1182**  
安山岩B  
45.8g

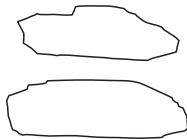
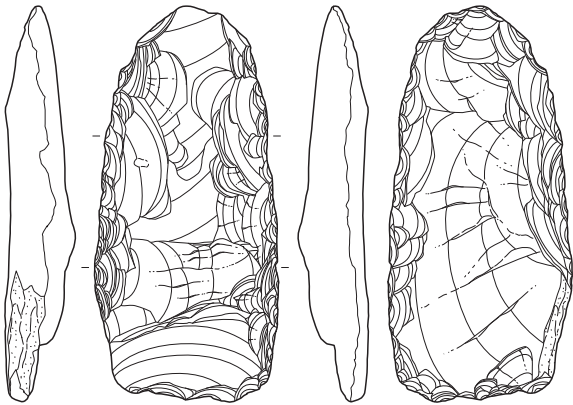
2/3 0 **1181・1182** 5cm



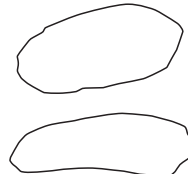
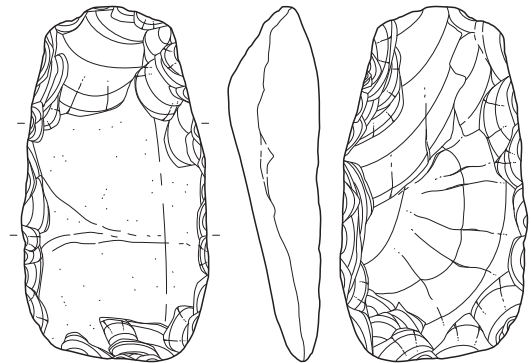
**1183**  
安山岩B  
63.8g



**1184**  
安山岩B  
108.9g



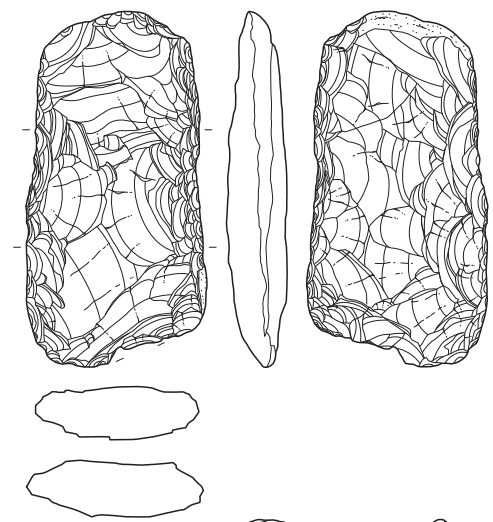
**1185**  
安山岩B  
108.2g



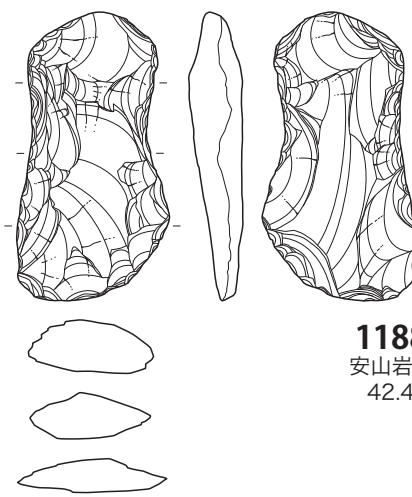
**1186**  
安山岩B  
117.3g

1/2 0 **1183~1186** 10cm

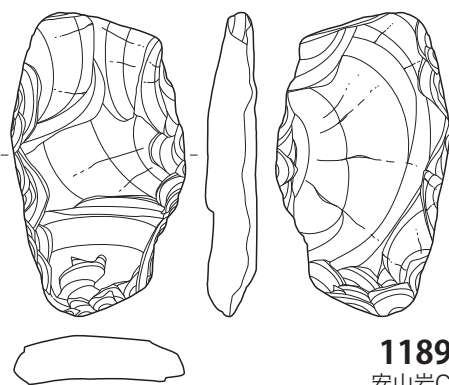
図 107 石器・石製品 22 【 14B 区・14C 区・16 区 検出 】



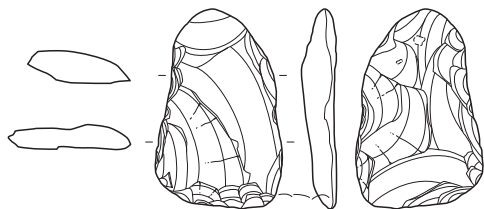
**1187**  
安山岩B  
75.7g



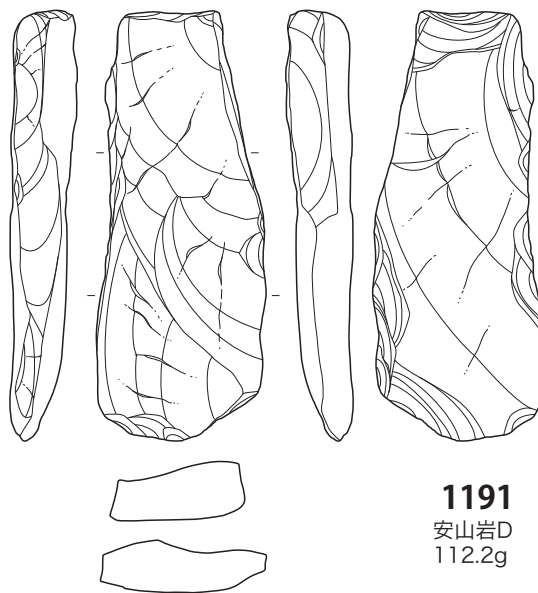
**1188**  
安山岩B  
42.4g



**1189**  
安山岩C  
58.4g

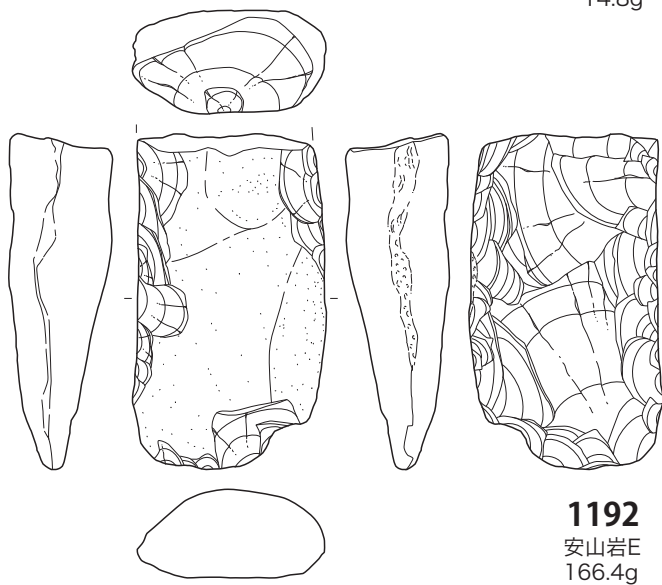


**1190**  
安山岩C  
14.8g

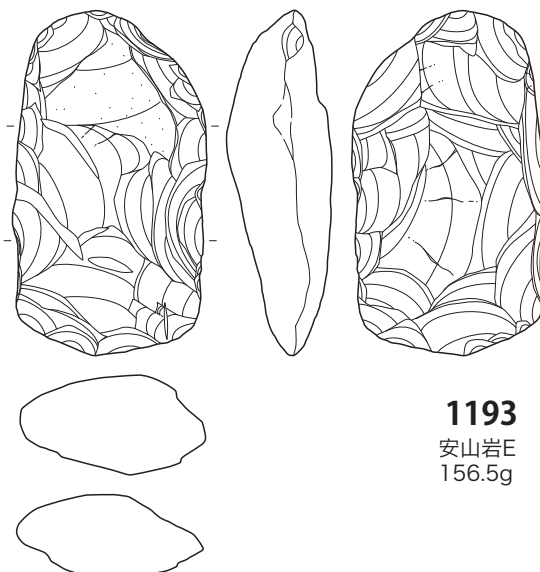


**1191**  
安山岩D  
112.2g

1/2 0 10cm

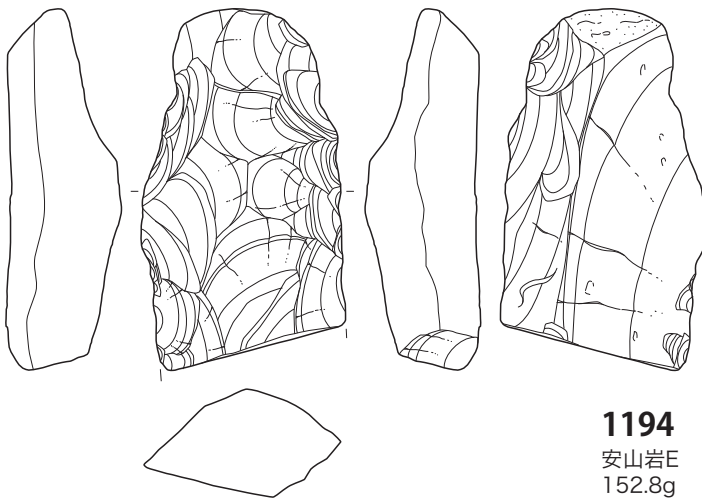


**1192**  
安山岩E  
166.4g

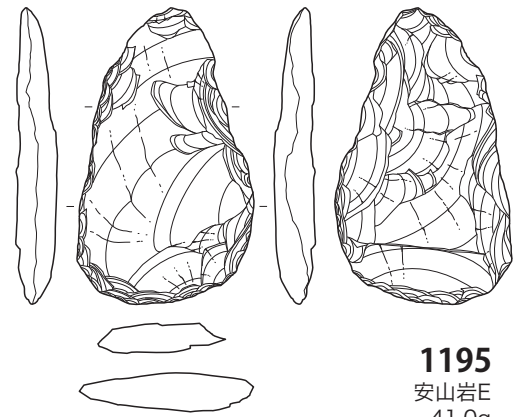


**1193**  
安山岩E  
156.5g

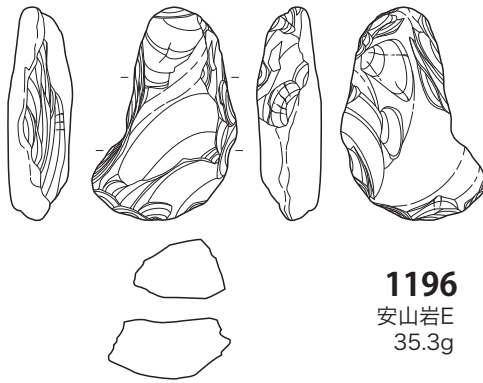
图 108 石器·石製品 23 【14B区·14C区·16区 検出】



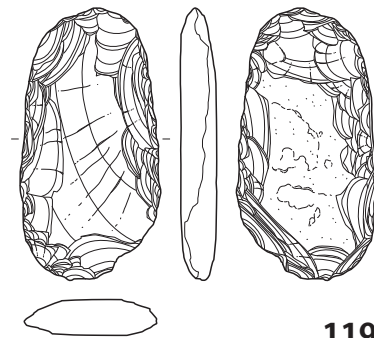
**1194**  
安山岩E  
152.8g



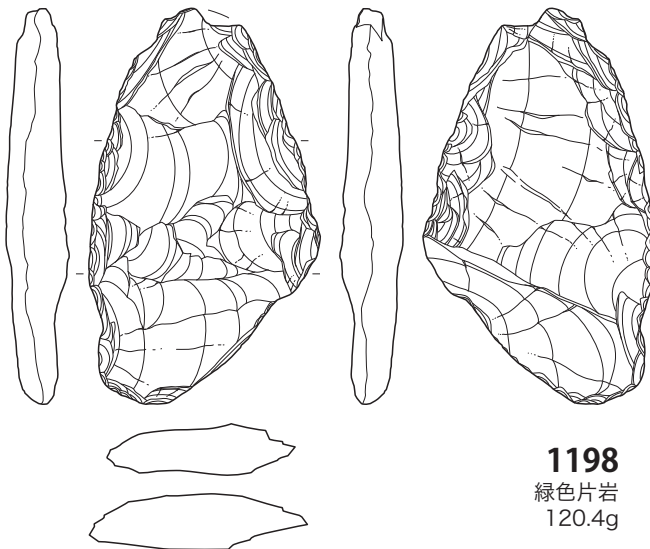
**1195**  
安山岩E  
41.0g



**1196**  
安山岩E  
35.3g



**1197**  
安山岩F  
35.6g



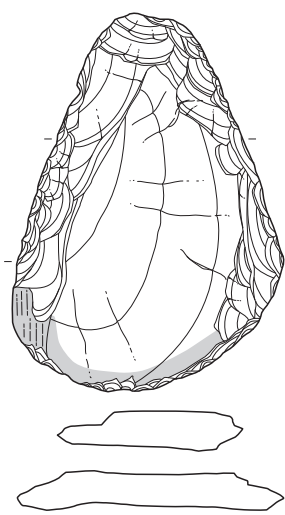
**1198**  
緑色片岩  
120.4g



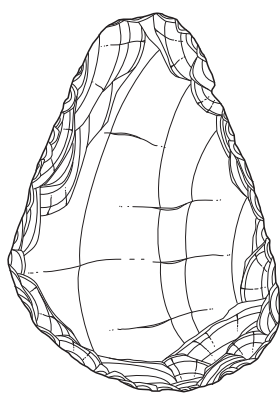
**1199**  
緑色片岩  
70.1g

1/2 0 10cm

図109 石器・石製品24【14B区・14C区・16区 検出】



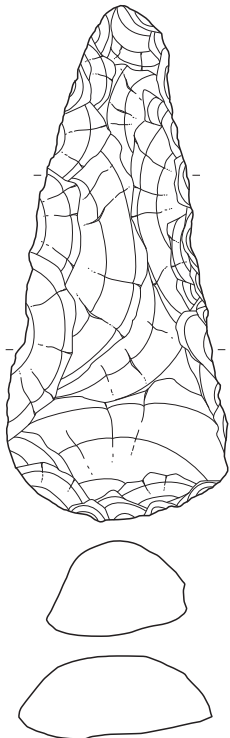
**1200**  
緑色片岩  
109.6g



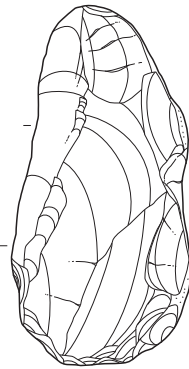
**1201**  
緑色片岩  
71.2g



**1202**  
閃緑岩  
225.8g



**1203**  
閃緑岩  
147.6g



**1204**  
凝灰岩  
81.6g



1/2 0 10cm

図 110 石器・石製品 25 【14B区・14C区・16区 検出】

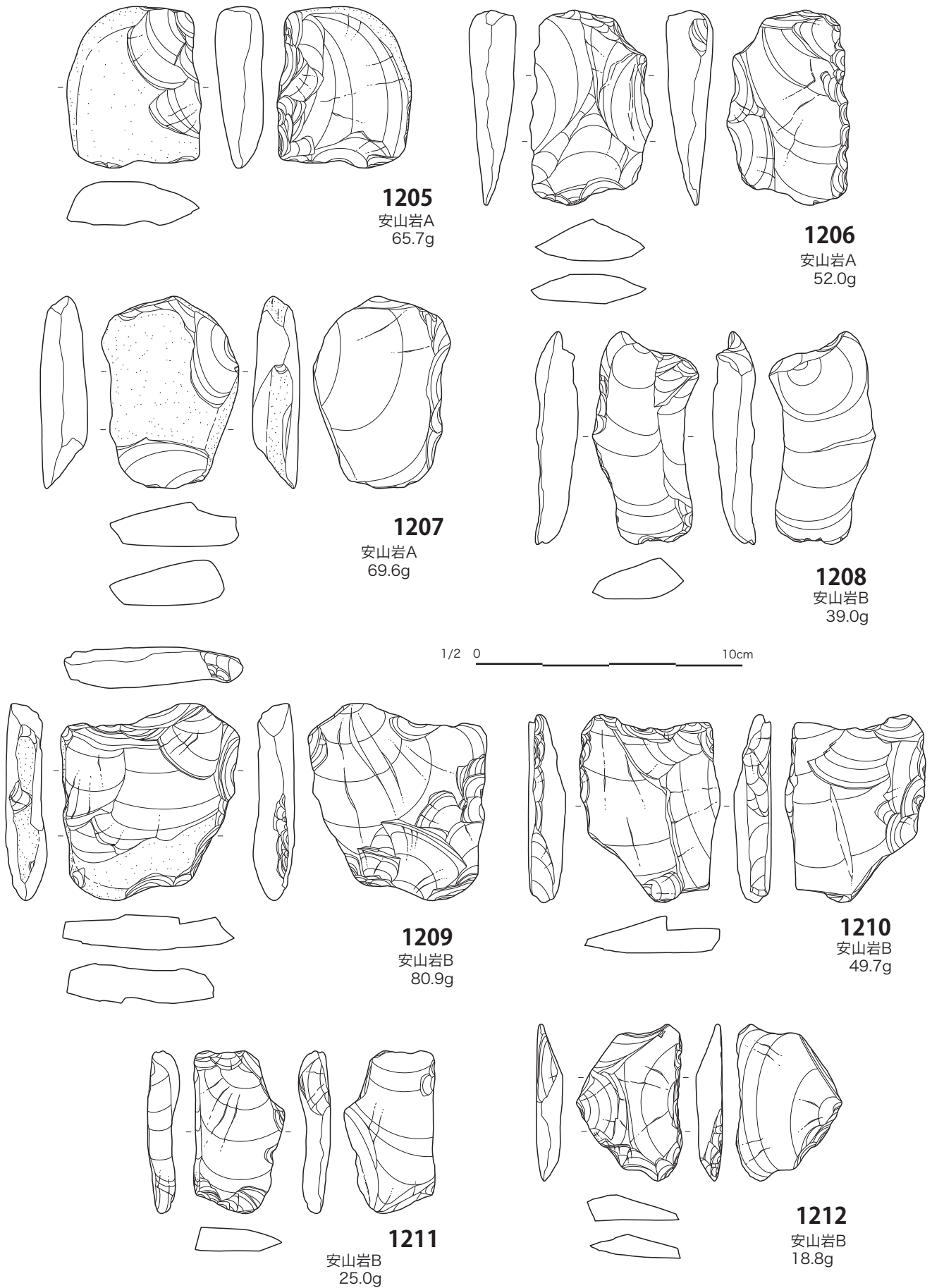


图 111 石器·石製品 26 【14B区・14C区・16区 検出】

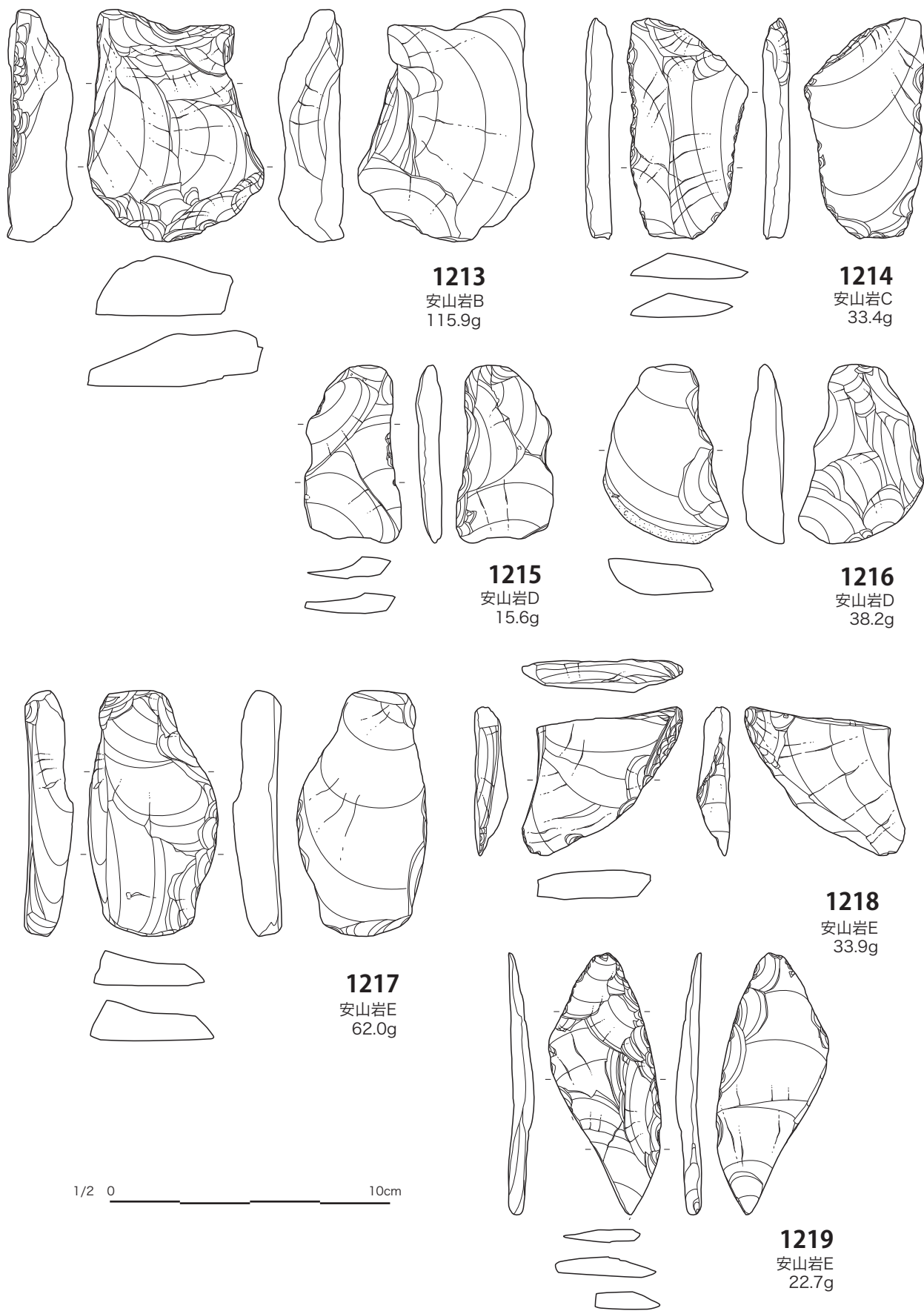


图 112 石器·石製品 27【14B区・14C区・16区 検出】

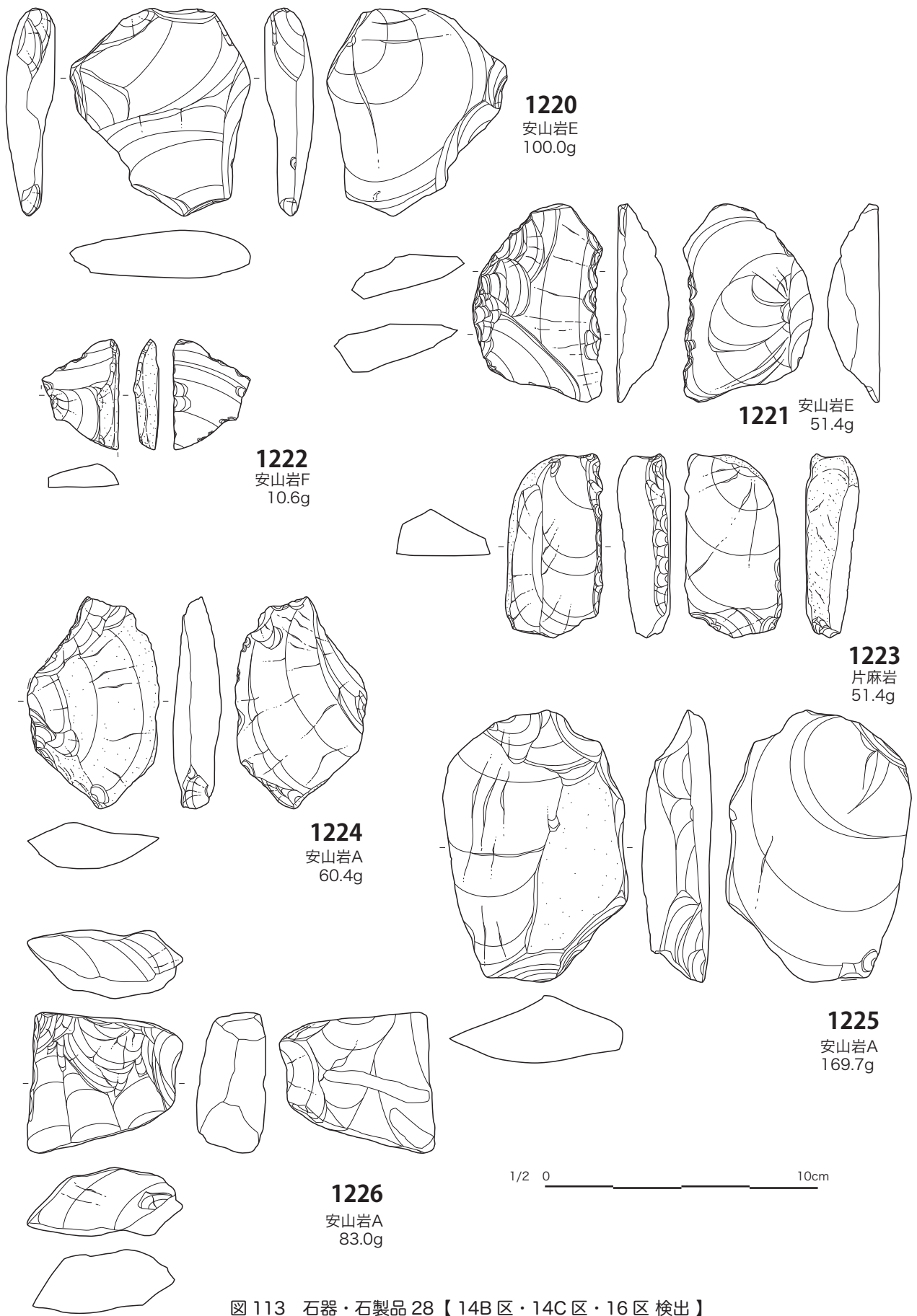
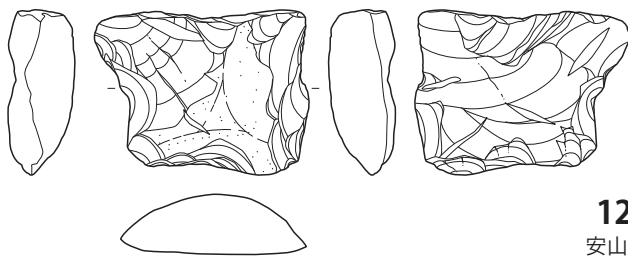
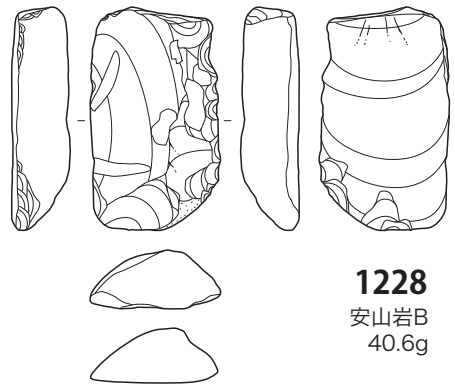


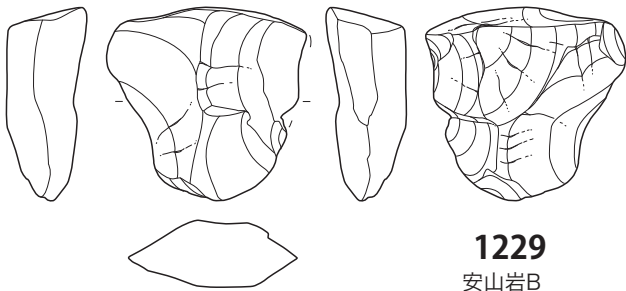
图 113 石器·石製品 28 【14B区・14C区・16区 検出】



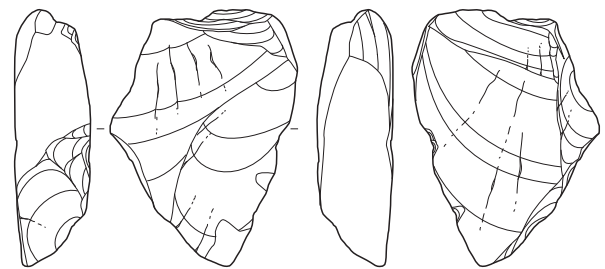
**1227**  
安山岩B  
49.3g



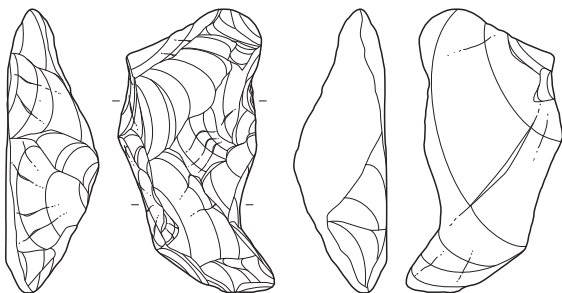
**1228**  
安山岩B  
40.6g



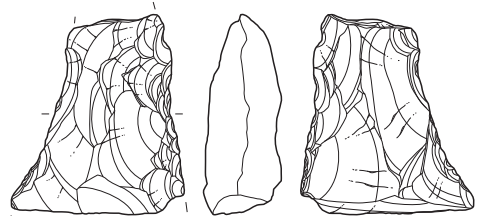
**1229**  
安山岩B  
48.5g



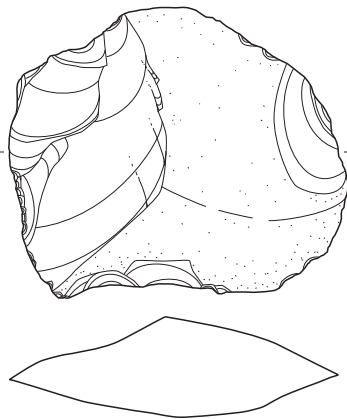
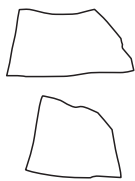
**1230**  
安山岩B  
61.0g



**1231**  
安山岩B  
61.9g



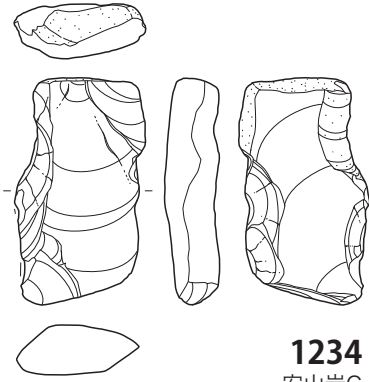
**1232**  
安山岩B  
41.9g



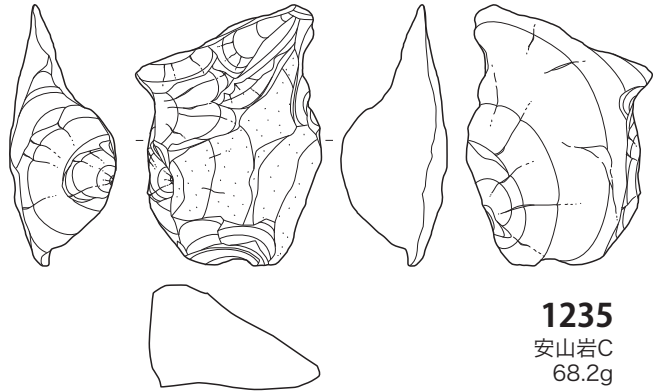
**1233**  
安山岩B  
164.5g

1/2 0 10cm

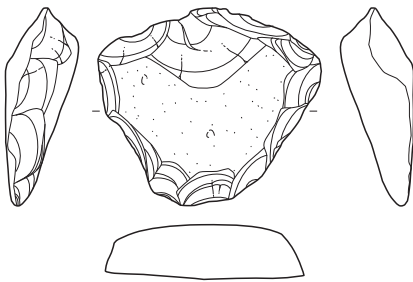
图 114 石器·石製品 29【14B区・14C区・16区 検出】



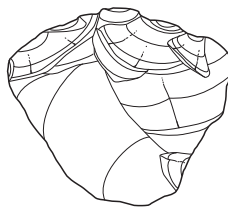
**1234**  
安山岩C  
36.0g



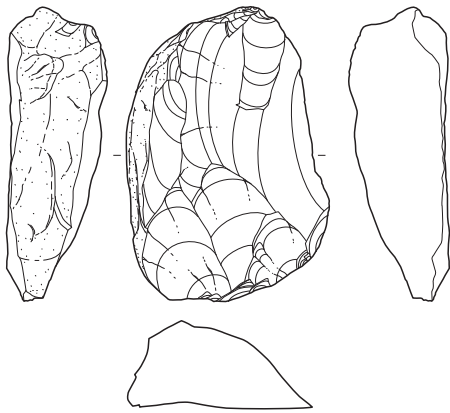
**1235**  
安山岩C  
68.2g



**1236**  
安山岩C  
48.1g



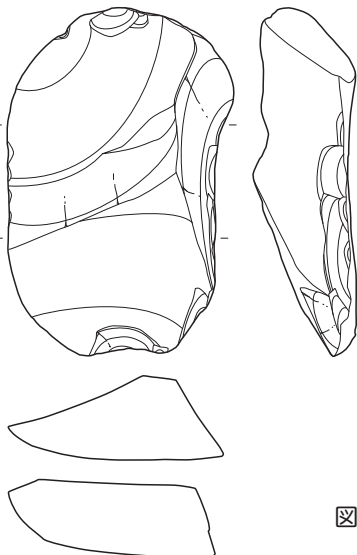
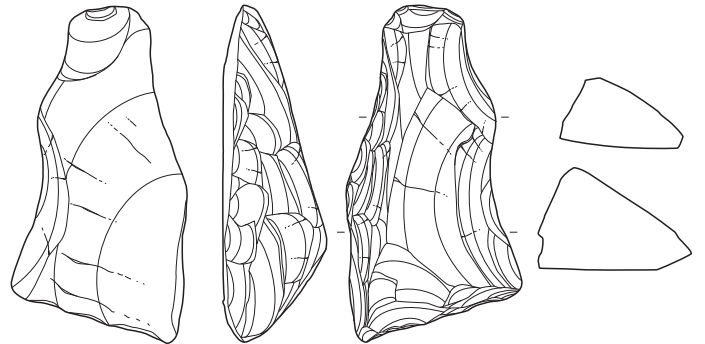
**1237**  
安山岩C  
42.5g



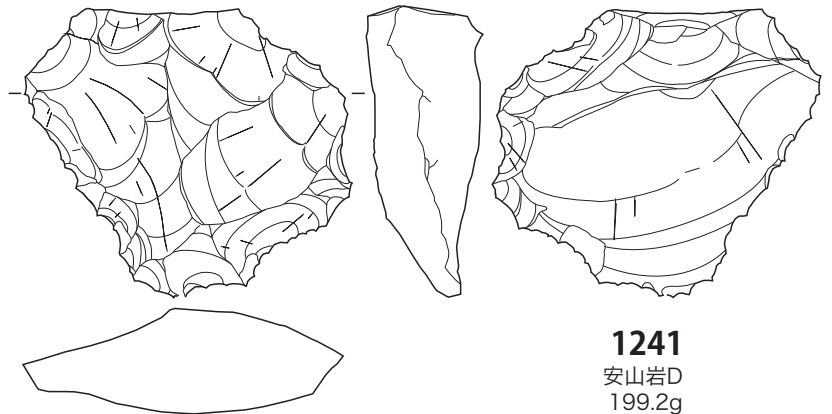
**1238**  
安山岩D  
123.6g



**1239**  
安山岩D  
99.8g



**1240**  
安山岩E  
154.5g



**1241**  
安山岩D  
199.2g

1/2 0 10cm

图 115 石器·石製品 30 【14B区・14C区・16区 検出】

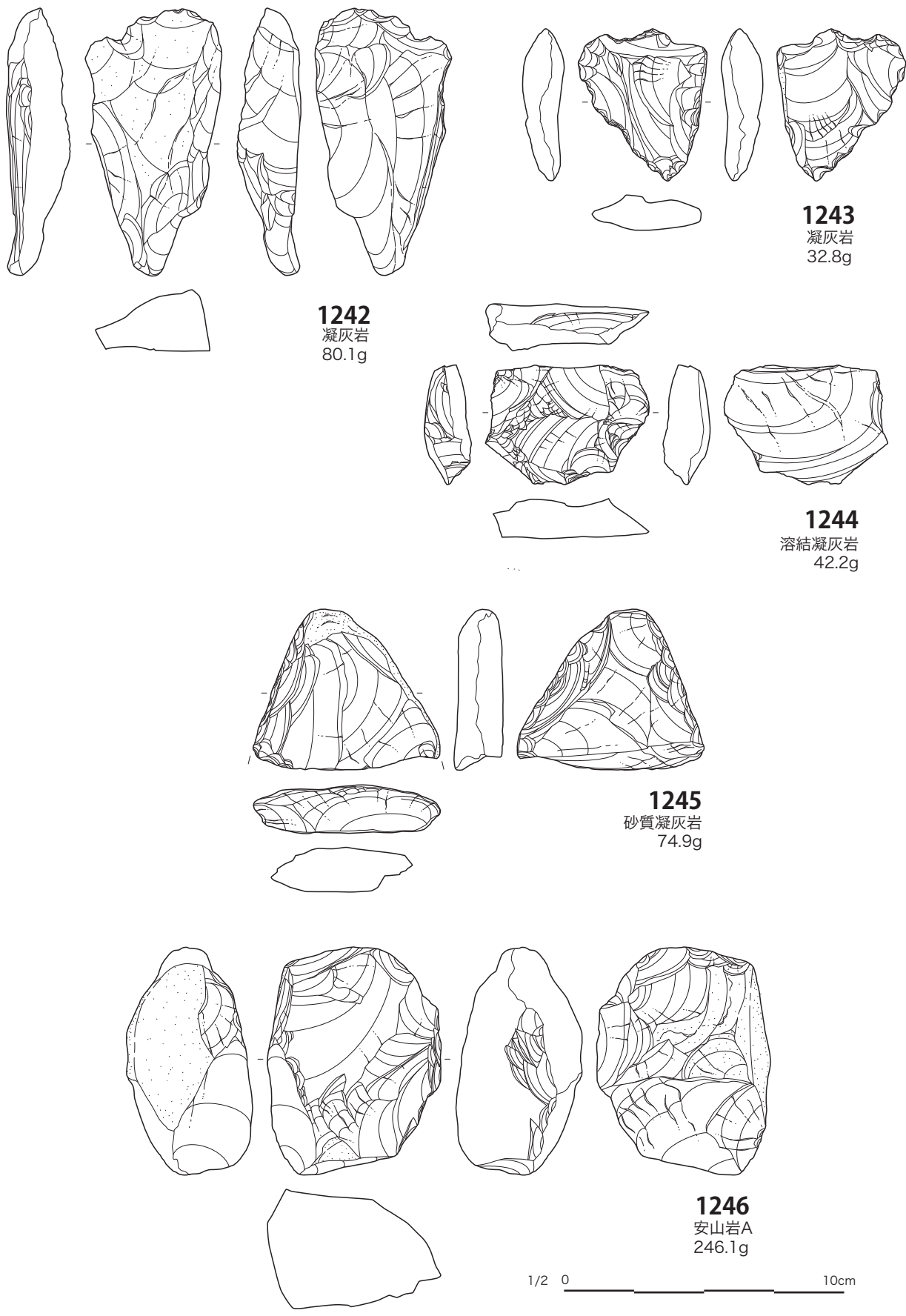
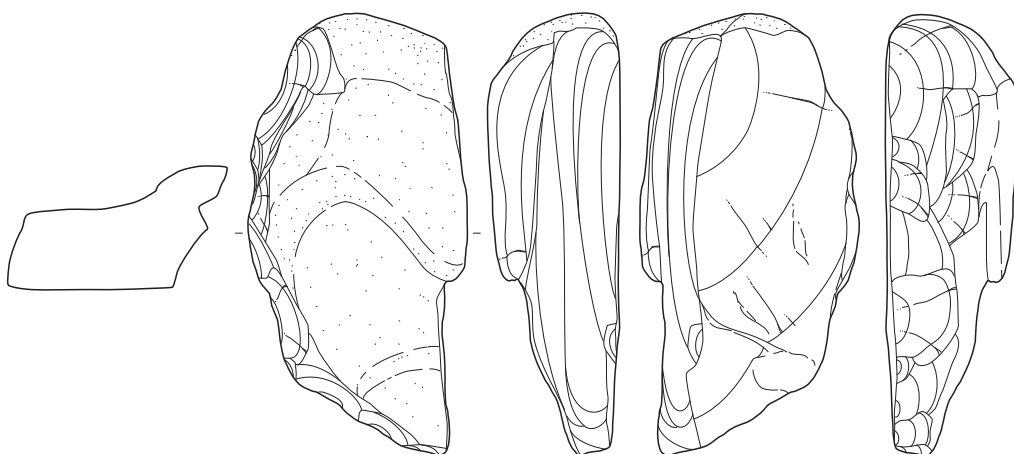


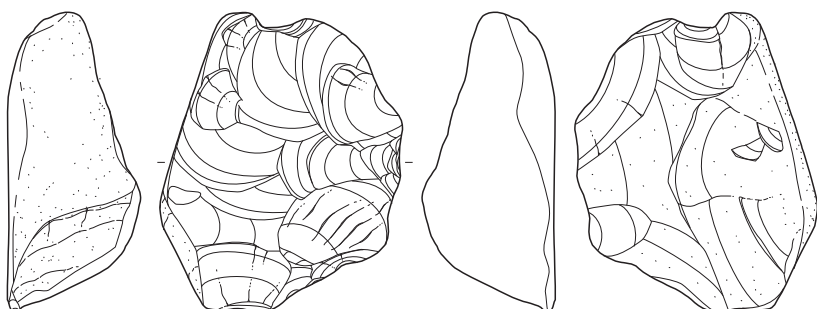
図 116 石器・石製品 31 【14B区・14C区・16区 検出】



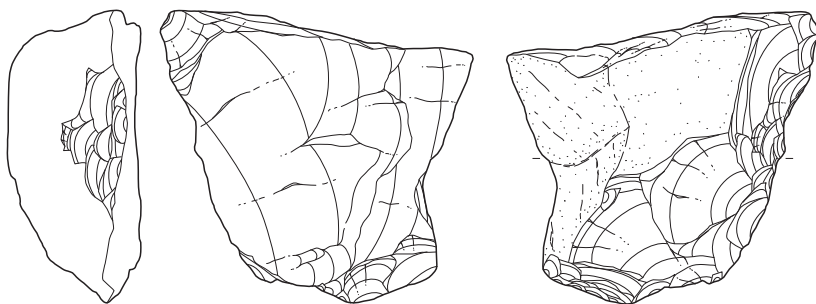
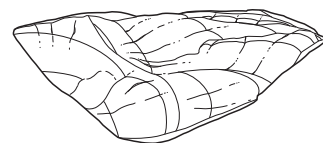
**1247**  
安山岩A  
86.2g



**1248**  
安山岩A  
253.3g



**1249**  
安山岩A  
175.2g

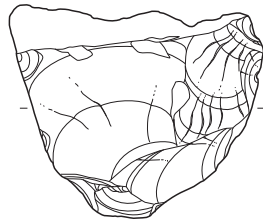
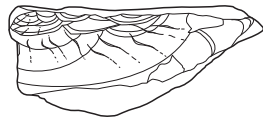
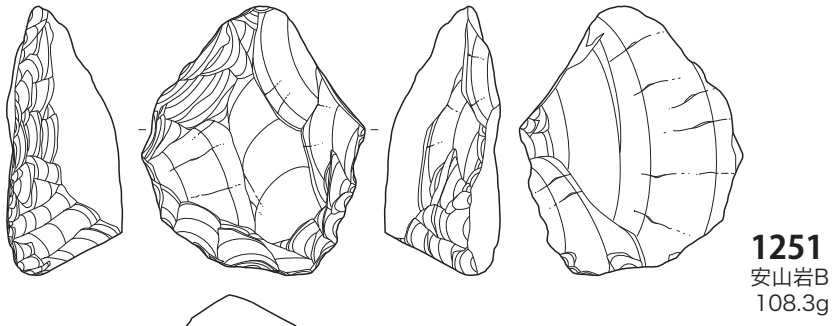


**1250**  
安山岩B  
204.4g

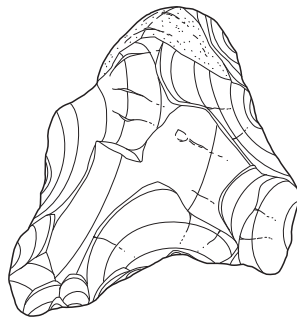
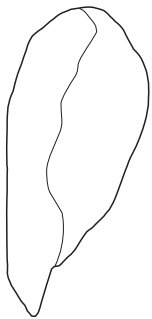
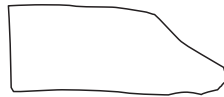


1/2 0 10cm

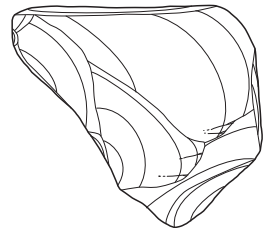
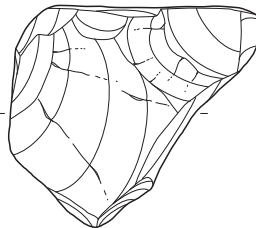
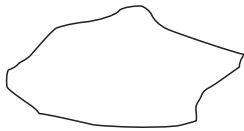
图 117 石器・石製品 32 【14B区・14C区・16区 検出】



**1252**  
安山岩B  
107.3g



**1253**  
安山岩B  
164.3g

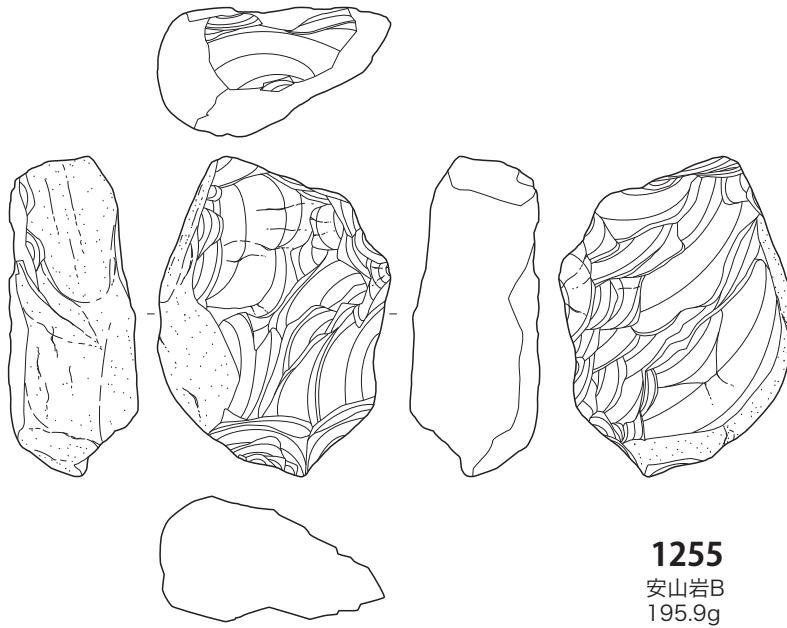


**1254**  
安山岩B  
78.0g

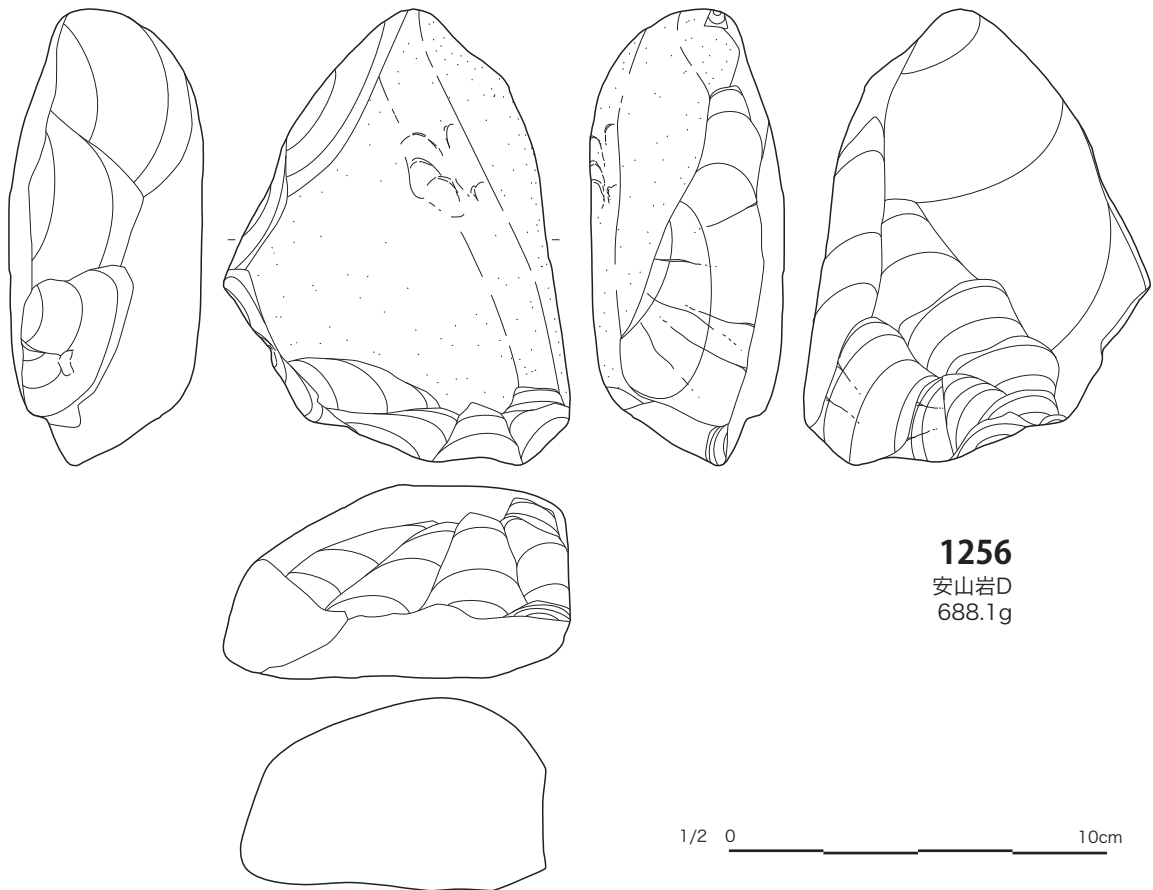


1/2 0  10cm

图 118 石器·石製品 33【14B区・14C区・16区 検出】



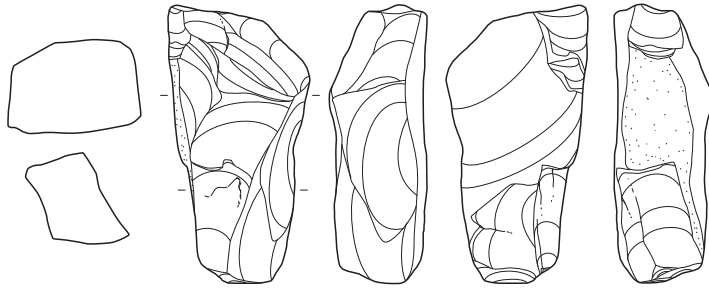
**1255**  
安山岩B  
195.9g



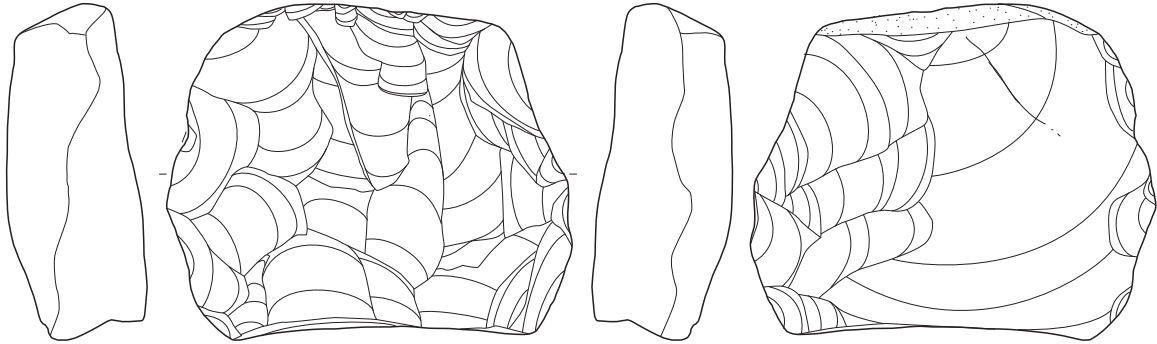
**1256**  
安山岩D  
688.1g

1/2 0 \_\_\_\_\_ 10cm

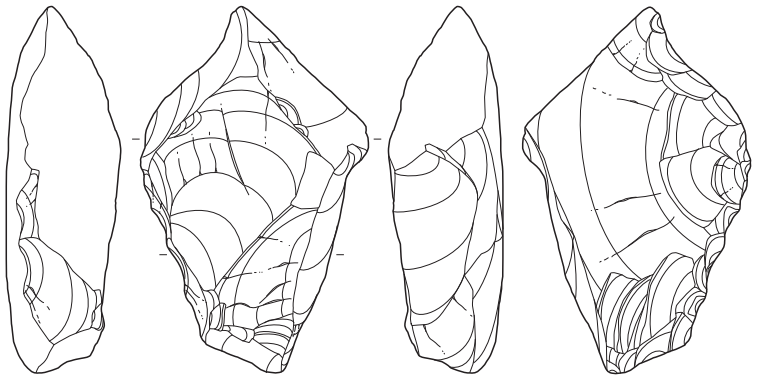
图 119 石器·石製品 34 【14B区·14C区·16区 検出】



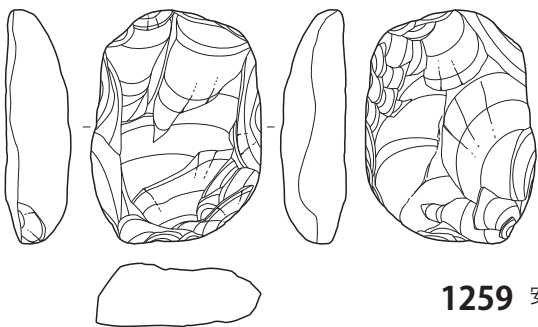
**1257**  
安山岩D  
75.0g



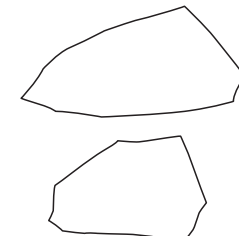
**1258**  
安山岩E  
472.5g



**1260**  
安山岩E  
167.4g

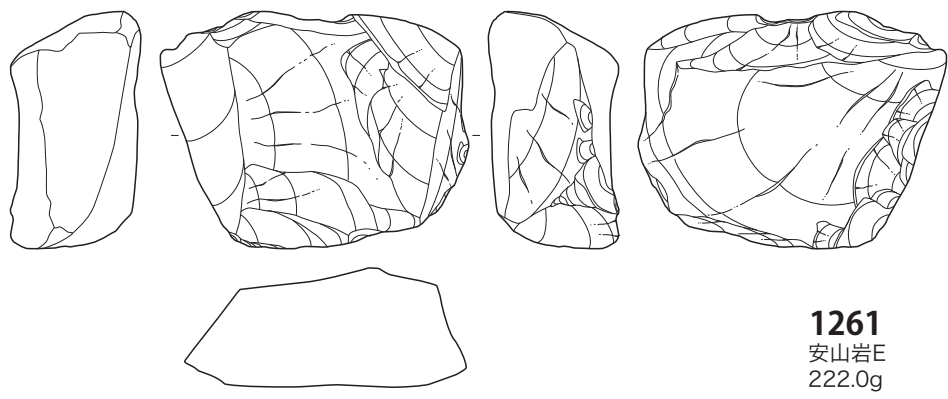


**1259** 安山岩D  
61.5g

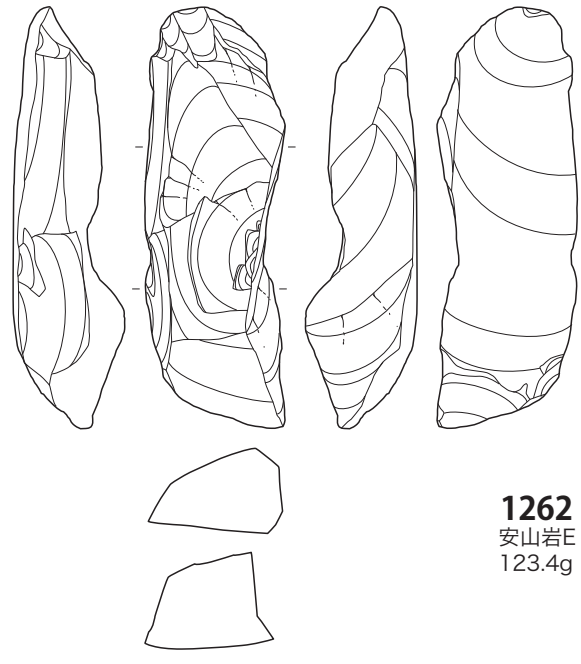


1/2 0 10cm

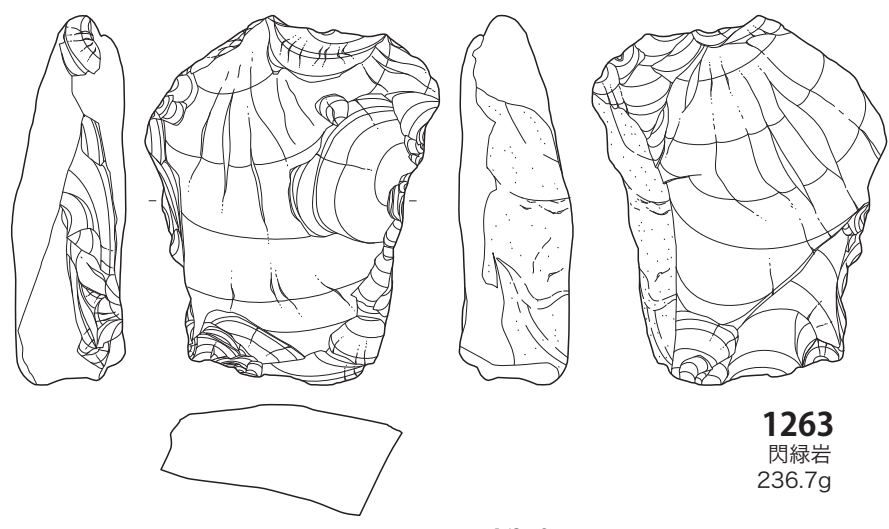
图 120 石器·石製品 35 【14B区・14C区・16区 検出】



**1261**  
安山岩E  
222.0g



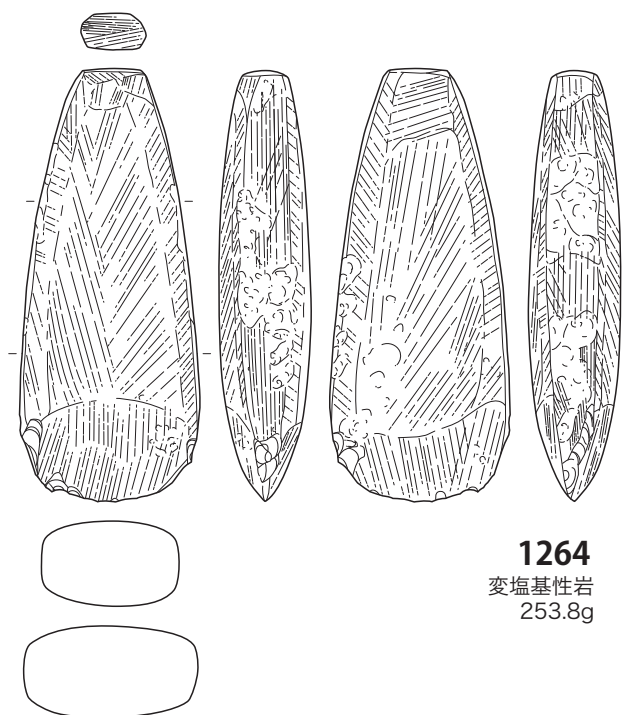
**1262**  
安山岩E  
123.4g



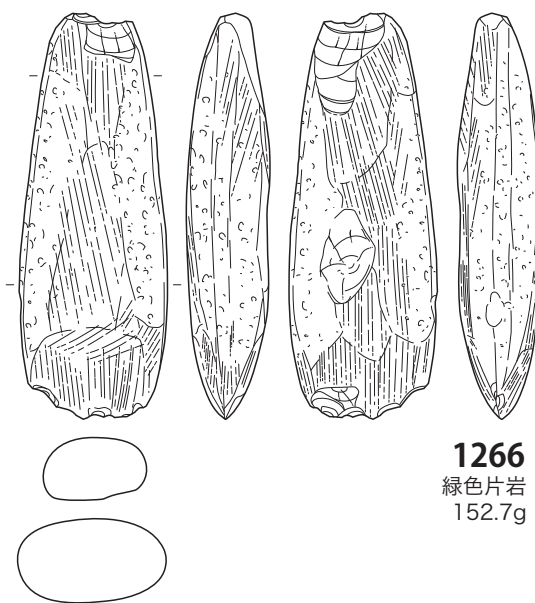
**1263**  
閃緑岩  
236.7g

1/2 0 10cm

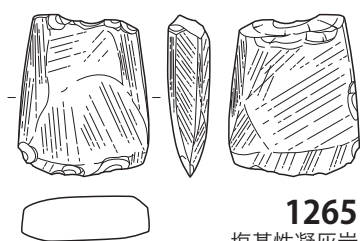
図 121 石器・石製品 36 【14B区・14C区・16区 検出】



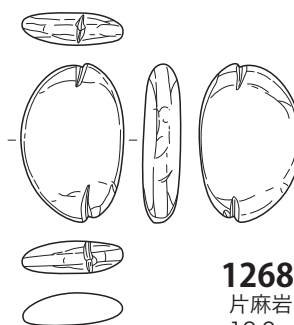
**1264**  
変塩基性岩  
253.8g



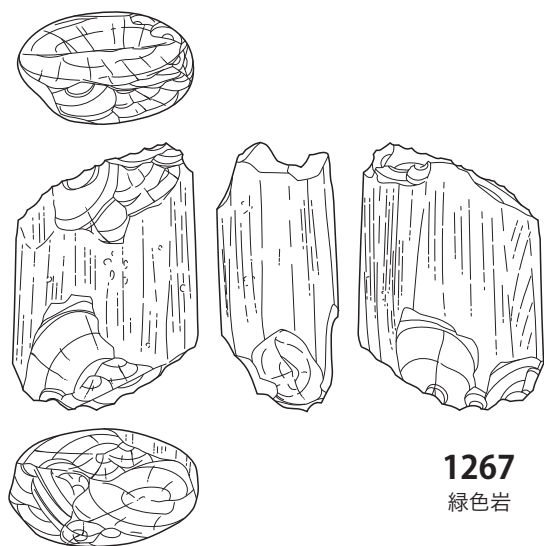
**1266**  
緑色片岩  
152.7g



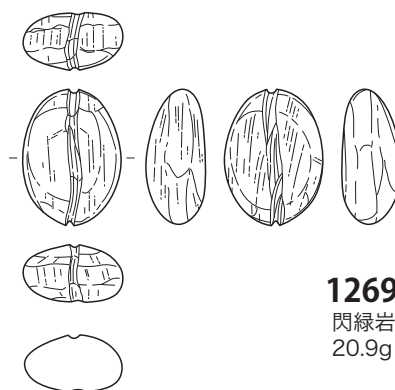
**1265**  
塩基性凝灰岩  
31.4g



**1268**  
片麻岩  
19.0g



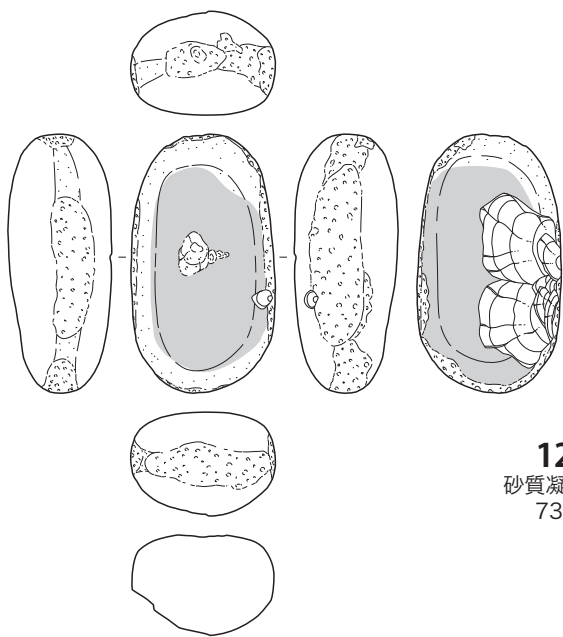
**1267**  
緑色岩



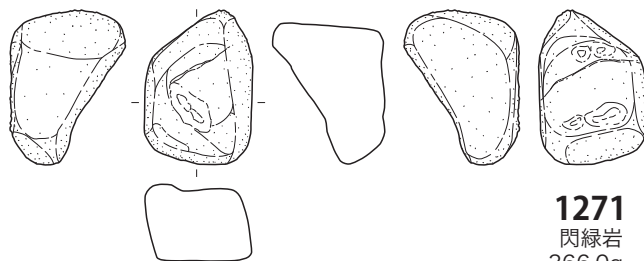
**1269**  
閃緑岩  
20.9g

1/2 0 10cm

図 122 石器・石製品 37【14B区・14C区・16区 検出】



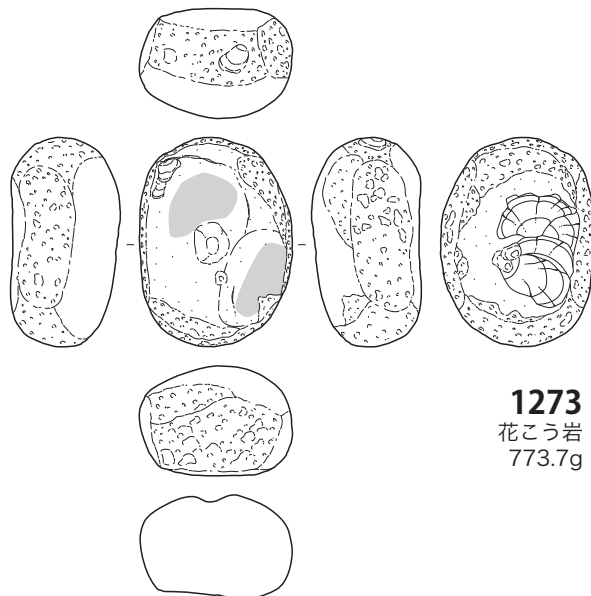
**1270**  
砂質凝灰岩  
732.8g



**1271**  
閃緑岩  
366.0g



**1272**  
花こう岩  
612.6g



**1273**  
花こう岩  
773.7g



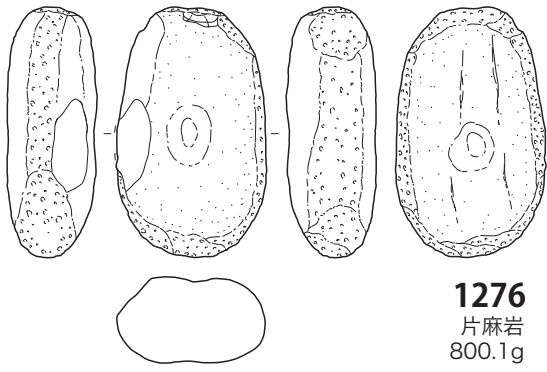
**1274**  
花こう岩  
195.5g



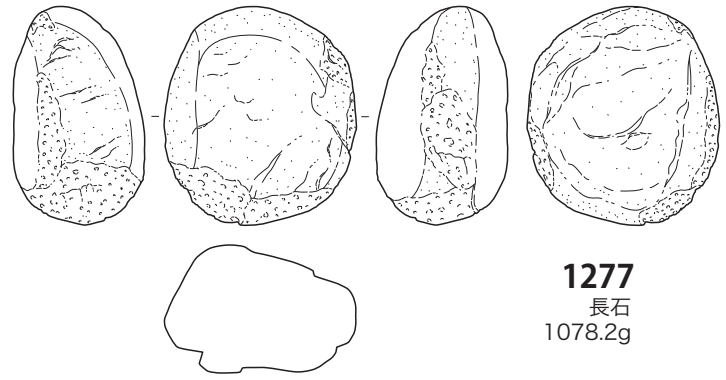
**1275**  
片麻岩  
570.2g

1/4 0 20cm

図 123 石器・石製品 38 【14B区・14C区・16区 検出】



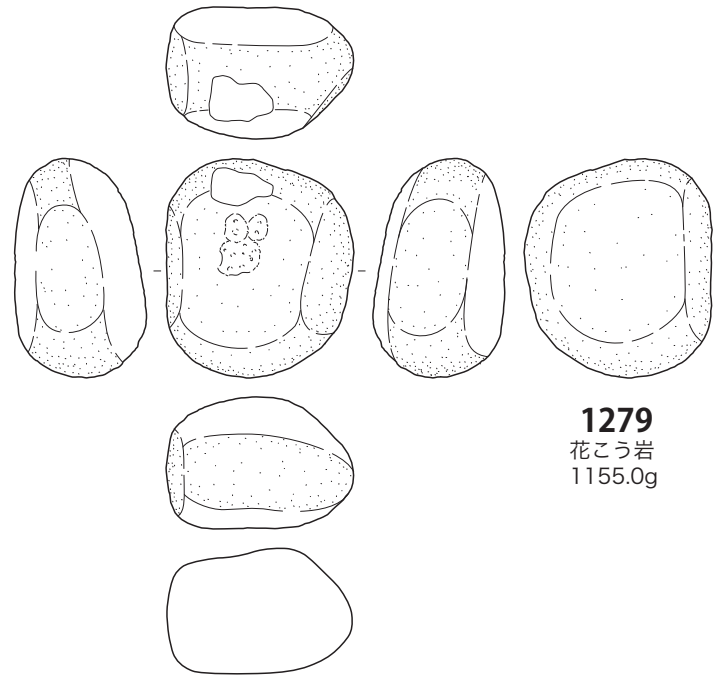
**1276**  
片麻岩  
800.1g



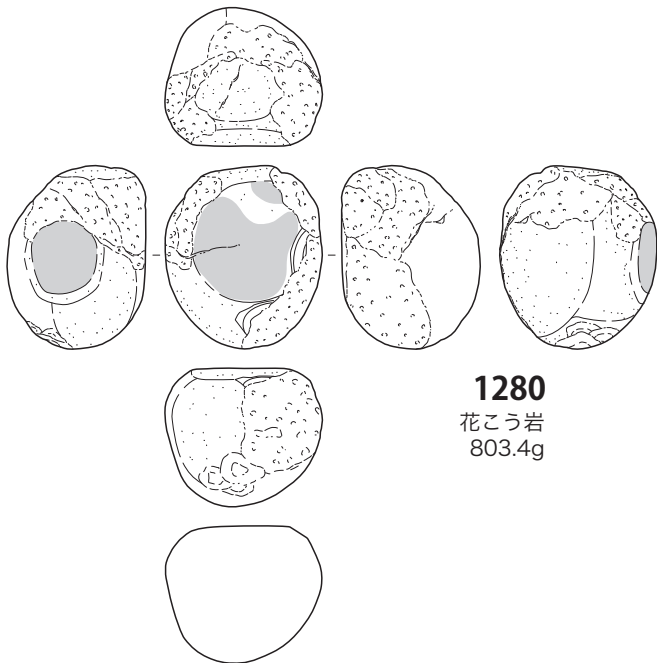
**1277**  
長石  
1078.2g



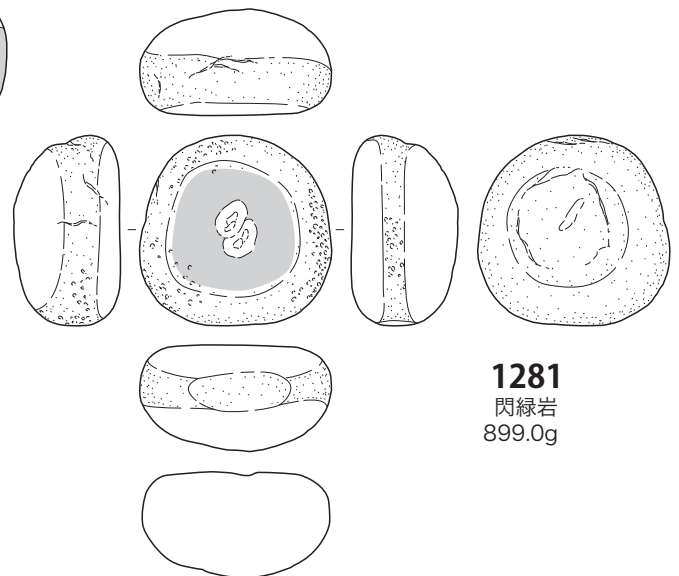
**1278**  
片麻岩  
647.6g



**1279**  
花こう岩  
1155.0g



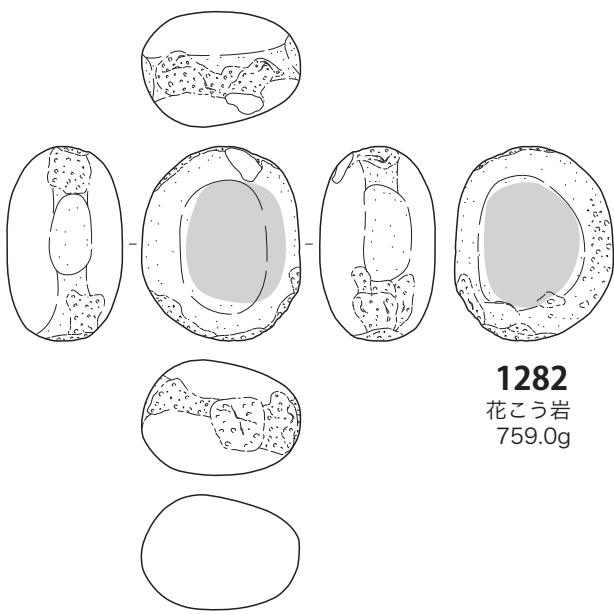
**1280**  
花こう岩  
803.4g



**1281**  
閃緑岩  
899.0g

1/4 0 20cm

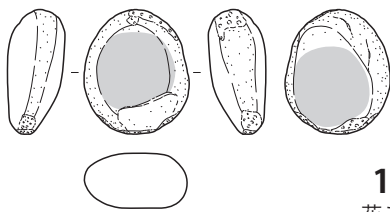
図 124 石器・石製品 39 【14B区・14C区・16区 検出】



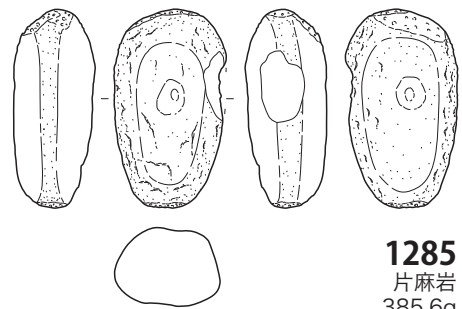
**1282**  
花こう岩  
759.0g



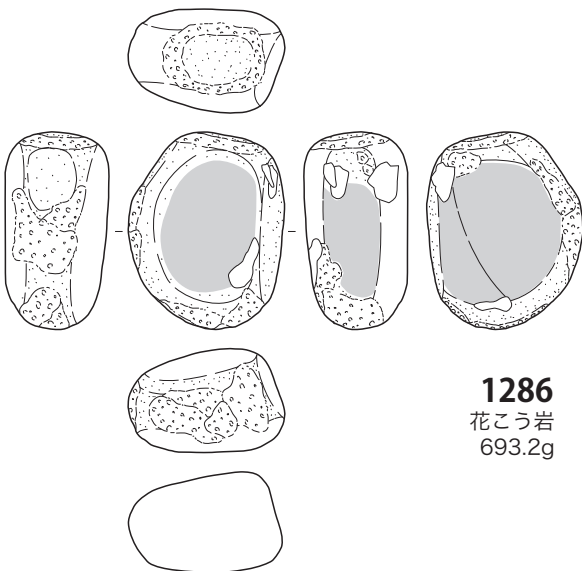
**1283**  
花こう岩  
839.5g



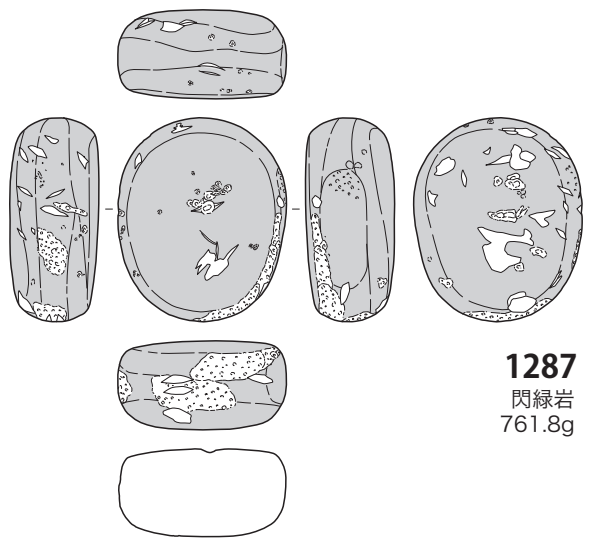
**1284**  
花こう岩  
142.6g



**1285**  
片麻岩  
385.6g



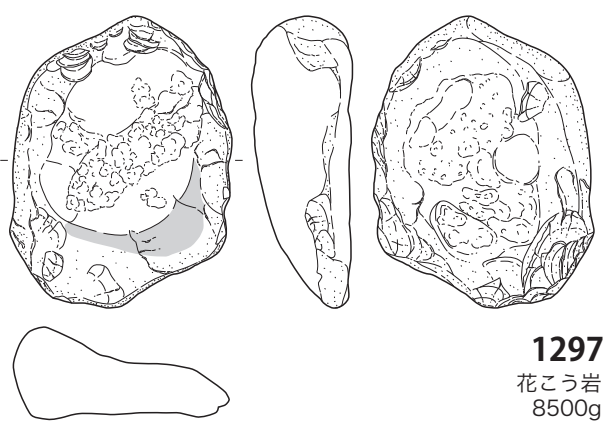
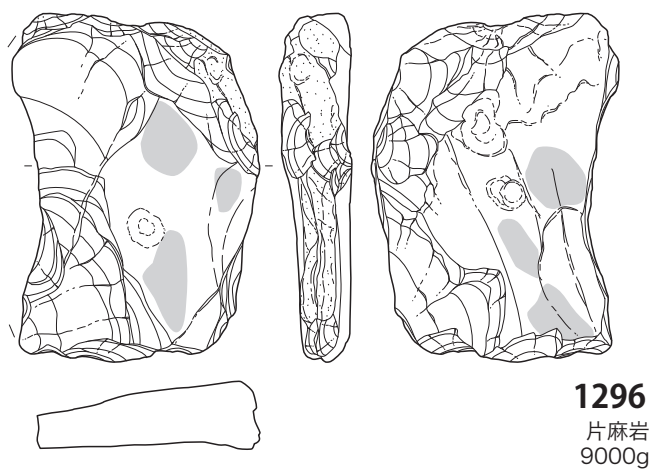
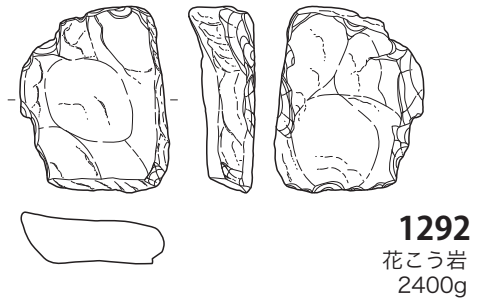
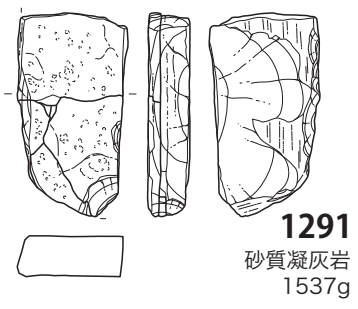
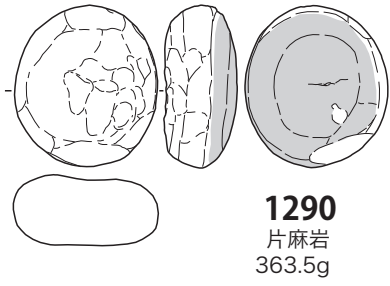
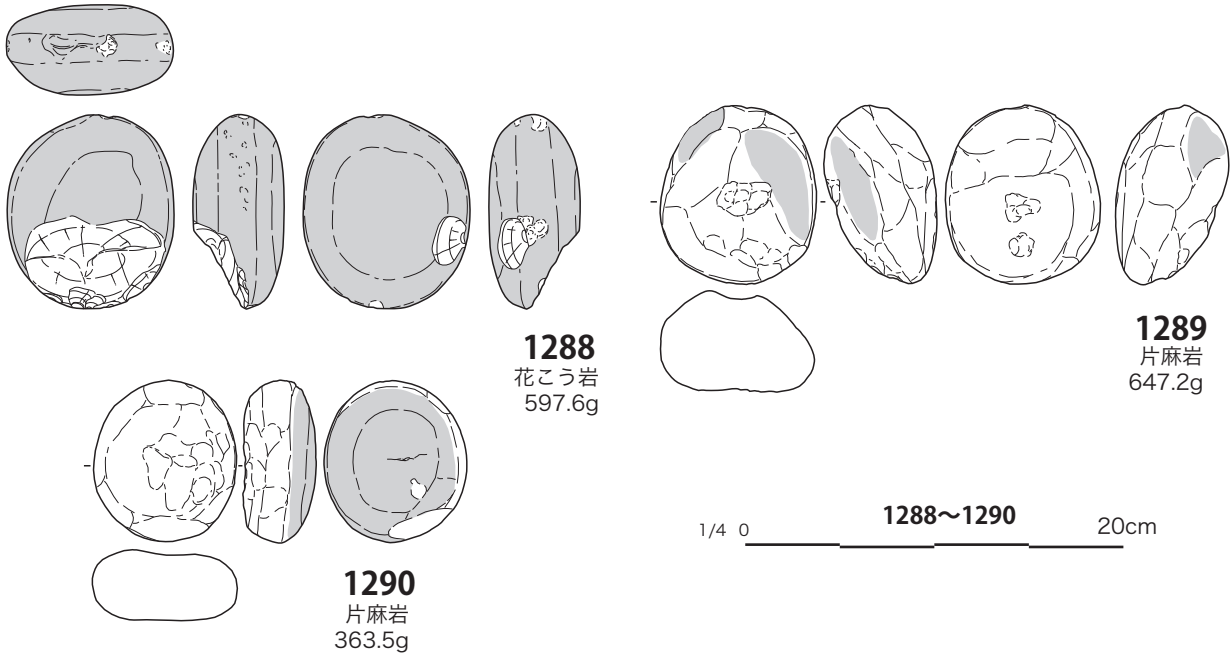
**1286**  
花こう岩  
693.2g



**1287**  
閃緑岩  
761.8g

1/4 0 20cm

図 125 石器・石製品 40 【14B区・14C区・16区 検出】



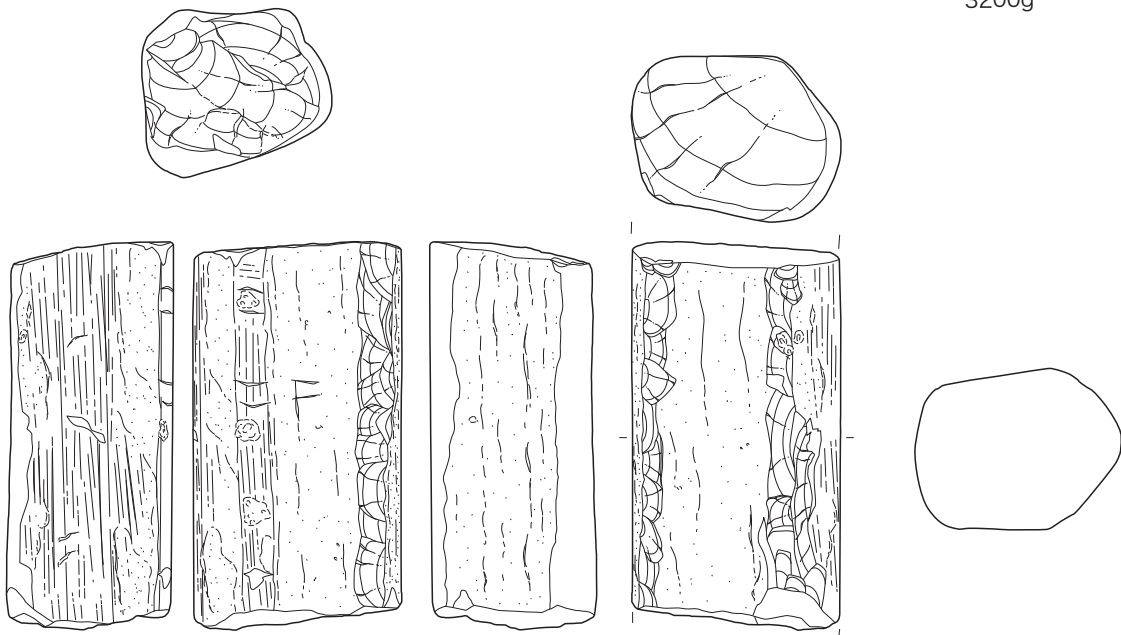
1/8 0 **1291・1292・1296・1297** 40cm

**14B 184SK**

図 126 石器・石製品 41 【 14B 区・14C 区・16 区 検出、14B 区 184SK 】

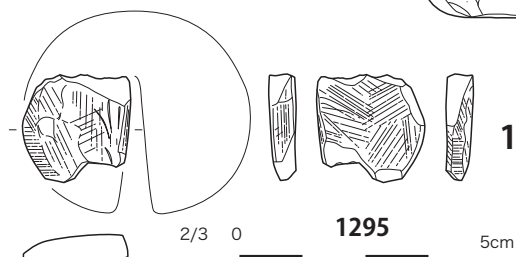


**1293**  
凝灰岩  
3200g



1/4 0 **1293 · 1294** 20cm

**1294**  
凝灰岩  
3095g



**1295**  
滑石  
3.8g

2/3 0 **1295** 5cm

图 127 石器·石製品 42 【14B区·14C区·16区 検出】

断されており、唯一、端部まで礫面の残存する1293では、やや膨れた形状となっている。これらの石材はいずれも凝灰岩である。

**u. 玦状耳飾り** (1295) 石製装身具類の唯一の出土資料である。深い切れ込み部分の破片と思われる。縄文時代前期の土器に対応するものと考えられる。滑石製である。

### 3. 使用石材について

使用石材については、上記の器種別の報告で述べたところであるが、ここでは石材を起点とした報告をしていきたい。

表4には、石材別に総重量・器種点数・器種別重量の総計・1点あたりの平均重量を示した。

小型剥片石器を主体とする石材のなかで、重量の大きいものは、黒曜石(1006.3g)と溶結凝灰岩(1339.9g)である。これらはいずれも製品のみならず、剥片石核類の点数・総重量も多く、石材が搬入されての石器製作が行われた様子が窺われる。両者の石材に対する使用器種の相違点としては、黒曜石は石鏃への使用頻度が高いことに対して、溶結凝灰岩は石匙・スクレイパーへの使用頻度が高いという傾向が認められる点が挙げられる。サヌカイト・下呂石・石英(水晶)は、石鏃に若干使用されている程度で、今回の調査では、当地での石器製作に対応する石核の出土は認められなかった。

安山岩A～Fについて見てみよう。総重量では安山岩B(8056.1g)が最も大きく、以下、安山岩A(4718.5g)、安山岩D(4687.8g)、安山岩E(4096.6g)、安山岩C(1915.0g)、安山岩F(243.3g)と続く。器種との対応では、安山岩Aでは石錐・石匙への利用も若干あるものの、主体は、スクレイパー・打製石斧・刃器・礫器など、

大型剥片石器への利用が高い。

安山岩Aと類似の傾向を示す石材に、凝灰岩がある。但し、凝灰岩に関しては、やや多孔質で質の異なるものが、大型石棒とした柱状加工礫として、4点(計15794.7g)も遺跡に持ち込まれていた。

緑色片岩・緑色岩・変塩基性岩は、中央構造線外帯由来の石材である。緑色片岩は打製石斧に対応する。この遺跡で出土する緑色片岩製の打製石斧は撥形が多い。緑色岩・変塩基性岩は磨製石斧に対応し、製品として存在するのみである。

閃緑岩は打製石斧など大型剥片石器への利用や有溝石錘への使用も若干ある一方で、磨石敲石類・石皿台石類への利用頻度が高く、敲打のある礫としても遺跡に多く存在していた。

磨石敲石類・石皿台石類および敲打のある礫として遺跡内で最も多く確認できた石材は、花こう岩である。地山や寒狭川の河床礫にも多く存在しているこの石材は、上記器種および状態として当地のヒトの活動に多用されたと考えられ、その総重量は1tを超える。磨石敲石類・石皿台石類への利用の高い石材には、片麻岩もある。但し、片麻岩に関しては、石錘類への利用もある一方で、敲打のある礫としての利用痕跡を確認することはできなかった。また、磨石敲石類には砂岩製のものもごく若干出土している。当地周辺では採集できない石材であり、ヒトによって道具の形で搬入されたものと考えられる。

## 第4章 古代以降の遺構と遺物

### 第1節 古代以降の遺構

#### 1. 概要

古代以降の包含層および遺構は、14B区・16区を中心に見つかった。第2章で述べた基本層序で示すと、古代～近世の遺物包含層はⅡ層（黒色粘土質シルト層）で、Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層との境が遺構検出面となった。

14B区の古代以降の遺構には、炉跡5基、竪穴状遺構2基以上、掘立柱建物などに関連するピット跡多数がある。炉跡や竪穴状遺構内および周辺では、鉄滓が出土するほか、被熱により著しく赤色化した台石（金床石か）も出土した。当地で野鍛冶などが行われた可能性も考えられる。その他、石積みの一部も確認した。

16区では調査区北側の、縄文時代の大型土坑群分布域の西側で、遺構・遺物が多く見つかった。遺構は、竪穴状遺構・土坑・ピットが確認された。16区061SXは1辺5mほどの不定形な落ち込みとして検出されたが、調査によって重複関係をもった2基の竪穴状遺構であったことが明らかとなった。掘り方の端内外にピット列が認められた。中央には炉跡などの痕跡は確認されなかったものの、焼土粒や炭化物を含む埋土内から鉄滓が出土した。調査区北西端でも、長径1mほどの浅い土坑（16区253SK）内から鉄滓が出土した。

以上、鉄滓の出土する竪穴状遺構・炉跡などの遺構群は、戦国期から近世初頭が中心になると思われる。

近世後半以降になると、埋葬遺構が展開する。14B区中央では、土坑墓が4基検出された（14B区0341SZ・0342SZ・0343SZ・0344SK）。14A区

では旧の谷地形を斜面上方からの厚い土石流堆積で平坦地化した後、近世末以降の遺構がごく若干数確認され、同様の埋葬遺構も2基確認された（14A区0001SZ・00002SZ）。14B区東端では、埋葬遺構と考えられる小型の桶の埋納遺構が見つかった（14B区0001SX・0002SX）。

#### 2. 各遺構について

##### 2-1. 炉跡とその関連遺構

##### 14B区 0081SL・0115SL・0393SL

これらは、14B区下段中央付近の、5m四方の範囲にまとまって見つかった遺構群である。焼土を多く含むこれら遺構はいずれもⅡ層掘削中に確認できたものである。しかし、Ⅱ層中ではこれら焼土を埋土とする遺構掘り方を確認することができず、周囲をⅢ層上面まで掘削し、凸状の形状を残してからの土層断面調査となった。

0081SLは、径0.7・深さ0.1mを測る。確認・調査時では、断面形状はごく浅い皿状となる。堆積層は均質な焼土と炭化物層が認められた。0115SLは、長径2.0・短径1.4・深さ0.2mを測る。こちらも浅い皿状を呈するものであるが、0081SLに対して法量倍以上のものとなっている。底面は均一な状態ではなく、その中でも2ヶ所でさらに浅い凹みとなっているところがある。複数回（あるいは複数基）が重複している可能性がある。0393SLは、長径1.5・短径0.8・深さ0.1mを測る。粘土のブロック堆積が累重する状況が確認された。平面形状はやや不定形な様相となっていることから、0081SLを基準とした場合、これ

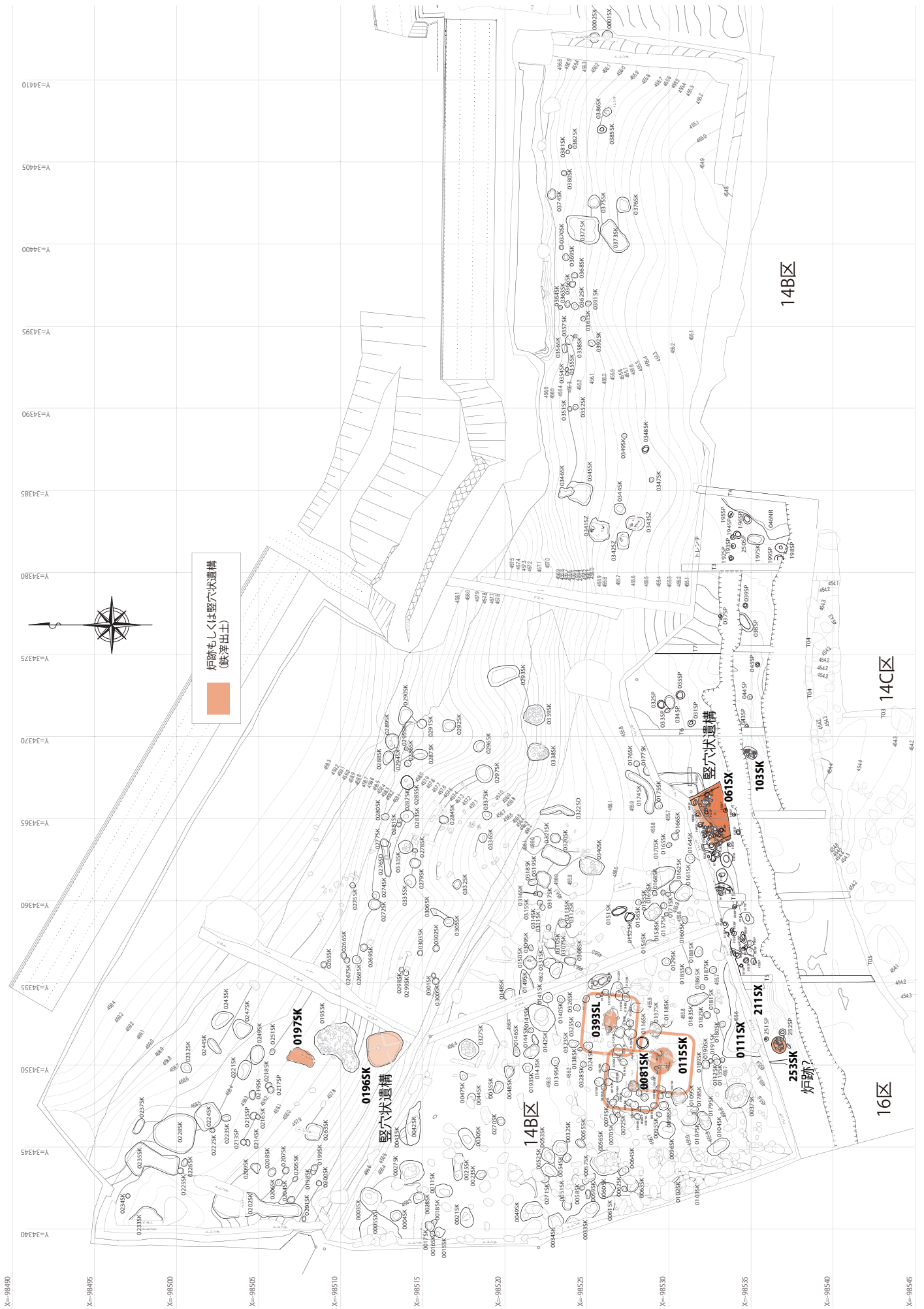
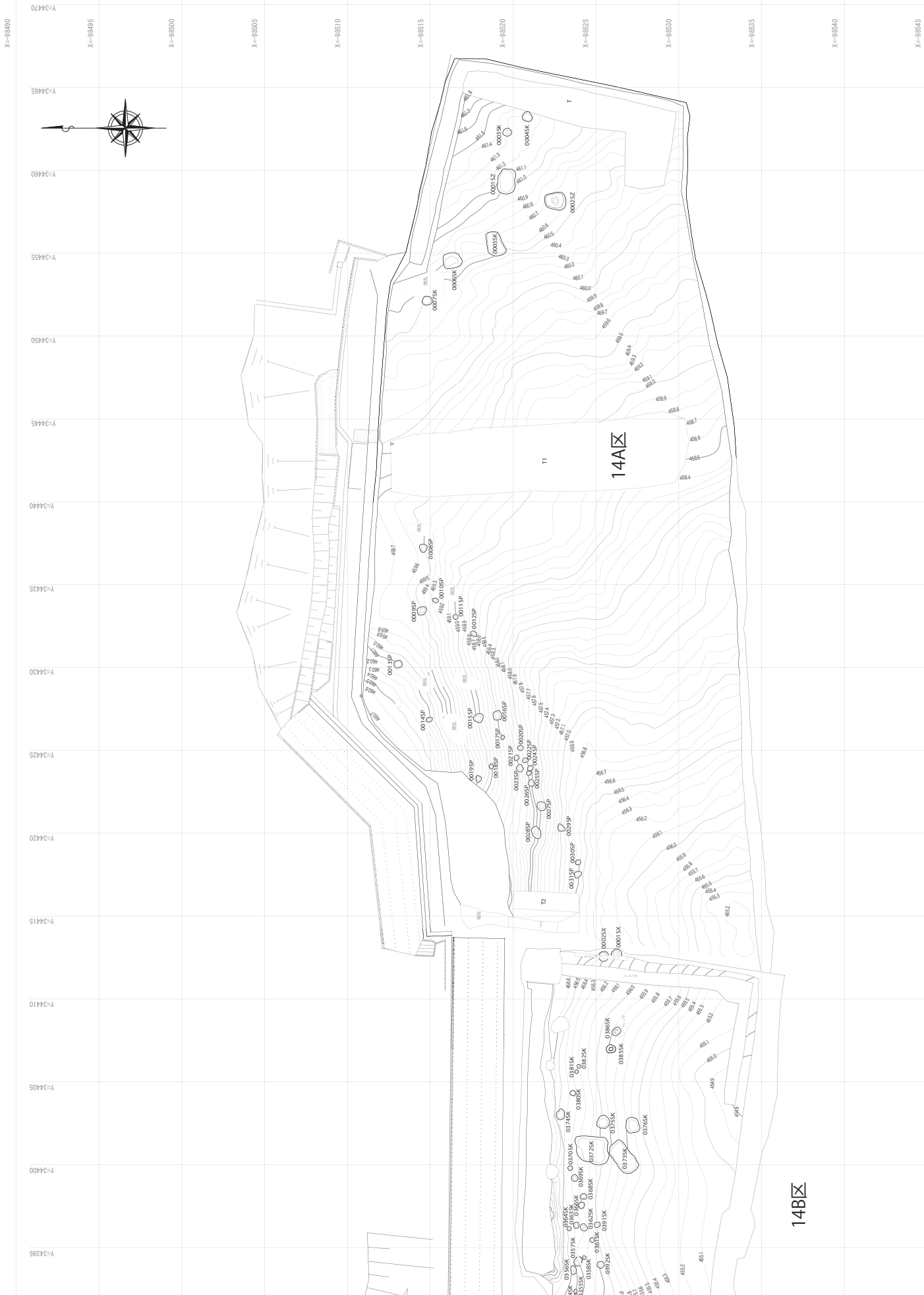


図 128 西地・東地遺跡古代以降遺構位置図



左西側・右東側 (1:300)

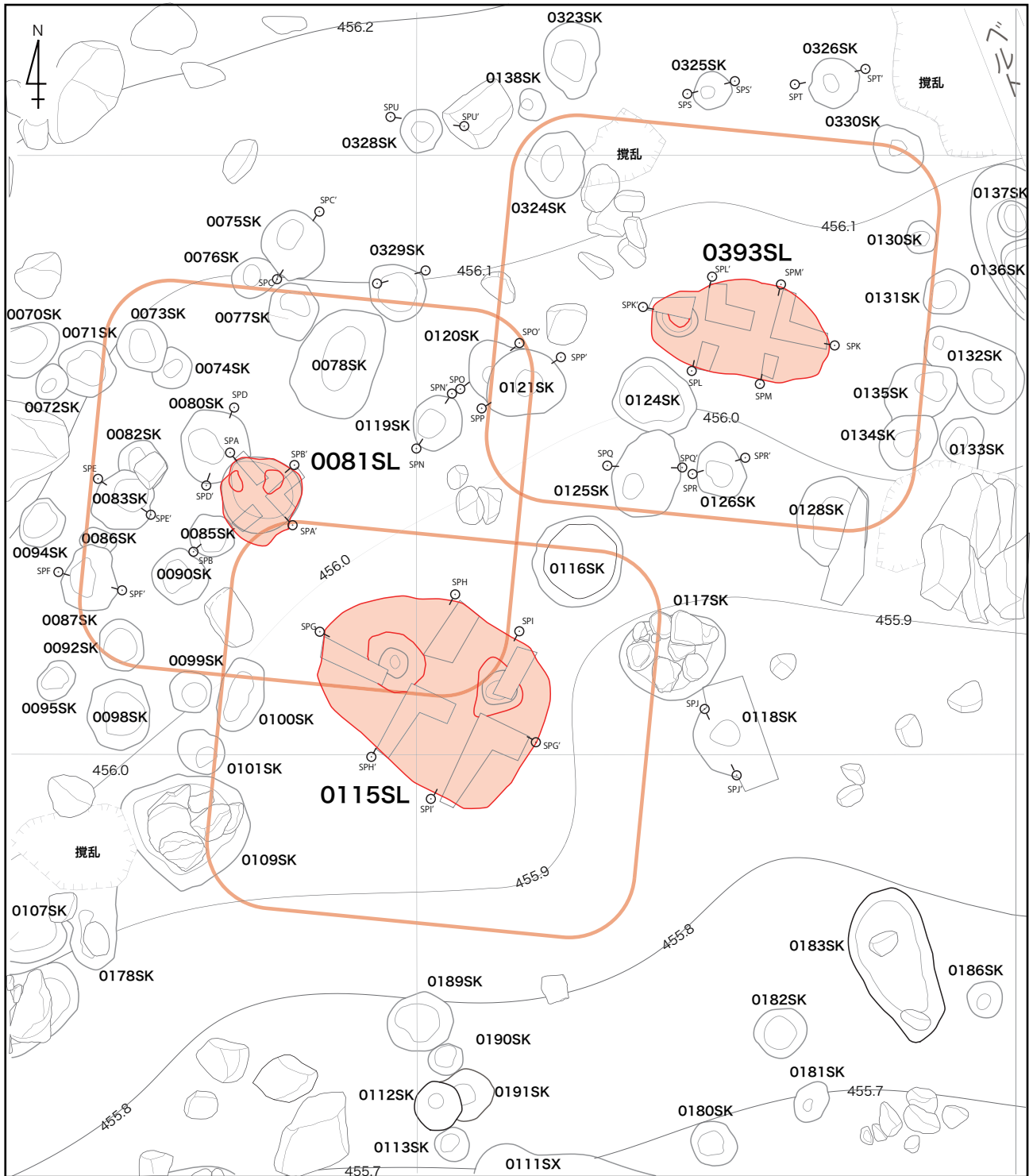


図 129 14B 区 0081SL・0115SL・0393SL と周辺遺構位置図 ( 1 : 50 )

1/50 0 遺構 100cm

も複数回 (あるいは複数基) が重複した結果かもしれない。

これら炉跡の周囲には、ピットが方形状に巡る形で見つかっている。後述する 16 区 029SX・061SX の事例が、これらが竪穴状遺構の掘り方

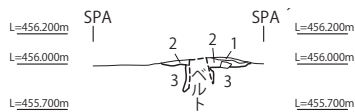
内外に設けられた柱穴列であったと考えられる。

#### 14B 区 0196SK

14B 区上段で見つかった遺構である。長径 2.2・短径 2.0・深さ 0.1m を測る。平面形状はやや不定形であるが、隅丸方形状と思われる。埋土中に

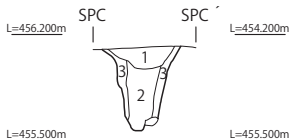
(本文 160 頁へ続く)

### 0081SL



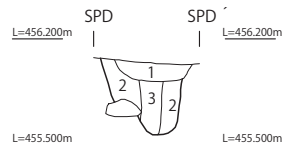
- 1 5YR6/6 橙色 粘土質シルト  
中粒砂、細粒砂多く含む。極粗粒砂含む。均質な焼土。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト  
極粗粒砂、粗粒砂含む。炭化物含む。
- 3 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト  
中粒砂、細粒砂含む。炭化物、焼土をわずかに含む。

### 0075SP



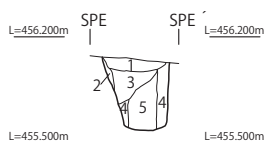
- 1 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト  
極粗粒砂、中粒砂、細礫含む。
- 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト  
粗粒砂、中粒砂含む。炭化物多く含む。(柱痕)
- 3 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト  
10YR7/6明黄褐色粘土質シルトをブロック状に多く含む。炭化物含む。

### 0080SP



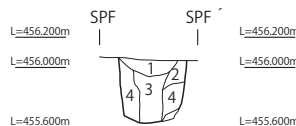
- 1 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト  
焼土、炭化物を含む。  
粗粒砂、中粒砂を含む。
- 2 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト  
焼土、炭化物を多量に含む  
(粒が大きい)。粗粒砂、中粒砂含む。
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト  
焼土、炭化物多く含む。(柱痕)

### 0083SP



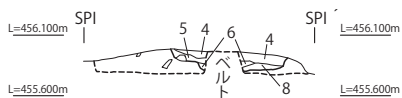
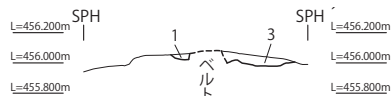
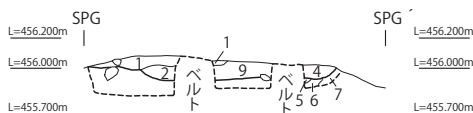
- 1 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 中粒砂、粗粒砂含む。炭化物、焼土含む。
- 2 10YR7/6 明黄褐色 粘土  
粗粒砂、中粒砂含む。10YR4/1褐灰色粘土質シルトとの斑土。
- 3 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト  
中粒砂、細粒砂多く含む。焼土塊、炭化物多く含む。
- 4 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト  
10YR7/6 明黄褐色粘土を斑状に含む。炭化物含む。粗粒砂、中粒砂含む。
- 5 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト  
10YR7/6 明黄褐色粘土を粒状に含む。炭化物含む。中粒砂、細粒砂含む。(柱痕)

### 0087SP



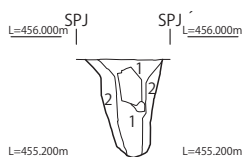
- 1 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂含む。炭化物、焼土含む。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物含む。
- 3 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 細礫、極粗粒砂含む。炭化物含む。(柱痕)
- 4 10YR2/1 黒色 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物若干含む。  
10YR7/6明黄褐色粘土をブロック状に含む。

### 0115SL



- 1 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 極粗粒砂、粗粒砂含む。焼土、炭化物多く含む。
- 2 5YR6/6 橙色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。極細粒砂若干含む。均質な焼土。
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。1と同層の可能性あり。
- 4 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。焼土を斑状に含む。炭化物若干含む。
- 5 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。細礫を少量含む。  
焼土を斑状に含む。4と同一か
- 6 10YR7/4 にぶい橙色 粘土質シルト 極粗粒砂、粗粒砂、中粒砂含む。焼土の包含。  
10YR4/1褐灰粘土質シルトを斑状に含む。
- 7 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 極粗粒砂多く含む。焼土を若干含む。
- 8 5YR6/6 橙色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂含む。炭化物含む。均質な焼土
- 9 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。細礫若干含む。焼土・炭化物若干含む。

### 0118SP

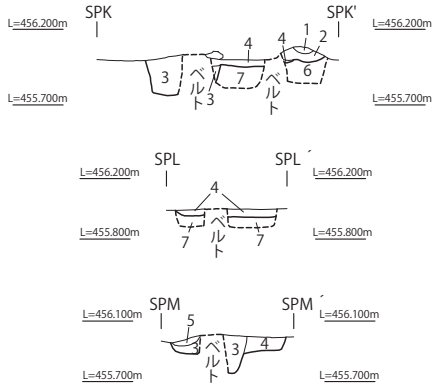


- 1 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂多く含む。炭化物含む。10YR7/6明黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。
- 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 10YR7/6明黄褐色粘土質シルトを若干含む。炭化物含む。粗粒砂含む。

1/50 0 遺構 100cm

図 130 14B区 0081SL・0115SLと関連遺構 土層断面 (1:50)

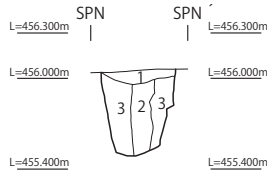
# 0393SL



- |   |             |        |                               |
|---|-------------|--------|-------------------------------|
| 1 | 5YR6/6 橙色   | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂含む。均質な焼土。              |
| 2 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物若干含む。            |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 焼土、炭化物を斑状に多く含む。粗粒砂、中粒砂含む。     |
| 4 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂、細礫を含む。焼土若干含む。         |
| 5 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂多く含む。焼土、炭化物若干含む。       |
| 6 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 極粗粒砂、粗粒砂、中粒砂多く含む。焼土をブロック状に含む。 |
| 7 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 極粗粒砂、粗粒砂多く含む。                 |

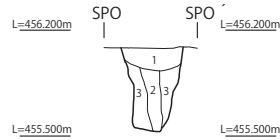
1/50 0 遺構 100cm

## 0119SP



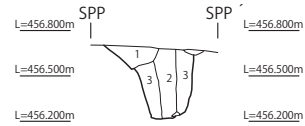
- |   |              |        |                            |
|---|--------------|--------|----------------------------|
| 1 | 10YR2/2 黒褐色  | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂含む。細礫多く含む。焼土、炭化物含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂含む。炭化物、焼土塊含む。(柱痕)   |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色  | 粘土質シルト | 中粒砂、細粒砂含む。焼土、炭化物多く含む。      |

## 0120SP



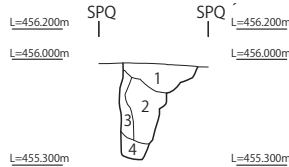
- |   |             |        |   |
|---|-------------|--------|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物含む。10YR7/4明黄褐色シルトを斑状に含む。           |
| 2 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 10YR7/4明黄褐色シルト色を斑状に少量含む。炭化物、焼土含む。               |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 10YR7/4明黄褐色シルト色をブロック状に多く含む。粗粒砂、中粒砂、含む。炭化物、焼土含む。 |

## 0121SP



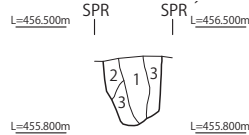
- |   |              |        |   |
|---|--------------|--------|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色  | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物含む。10YR7/6明黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。          |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂多く含む。炭化物含む。10YR7/6明黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む。(柱痕) |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色  | 粘土質シルト | 10YR7/6明黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む。粗粒砂、中粒砂含む。炭化物少量含む。     |

## 0125SP



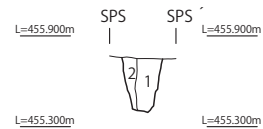
- |   |              |        |   |
|---|--------------|--------|---|
| 1 | 10YR5/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 極粗粒砂、粗粒砂多く含む。10YR7/6明黄褐色シルトを含む。             |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色  | 粘土質シルト | 極粗粒砂多く含む。10YR7/6明黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。炭化物、焼土塊含む。 |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色  | 粘土質シルト | 極粗粒砂多く含む。炭化物粒含む。10YR7/6明黄褐色シルトをブロック状に含む。    |
| 4 | 10YR2/2 黒褐色  | 粘土質シルト | 極粗粒砂少量含む。10YR7/6明黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。           |

## 0126SP



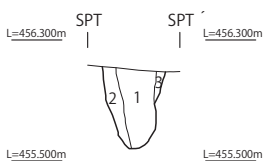
- |   |              |        |   |
|---|--------------|--------|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂を多く含む。10YR7/6明黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。(柱痕) |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 極粗粒砂、粗粒砂を多く含む。10YR7/6明黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。    |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色  | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂を多く含む。                             |

## 0325SP



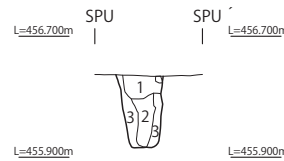
- |   |             |        |  |
|---|-------------|--------|--|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 極粗粒砂、粗粒砂含む。炭化物含む。10YR7/6明黄褐色シルトを斑状に含む。 |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂含む。炭化物含む。10YR7/6明黄褐色シルトを斑状に含む。  |

## 0326SP



- |   |             |        |  |
|---|-------------|--------|--|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 極粗粒砂、粗粒砂含む。炭化物含む。10YR7/6明黄褐色シルトを斑状に含む。 |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂含む。10YR7/6明黄褐色シルトを斑状に含む。炭化物含む。  |

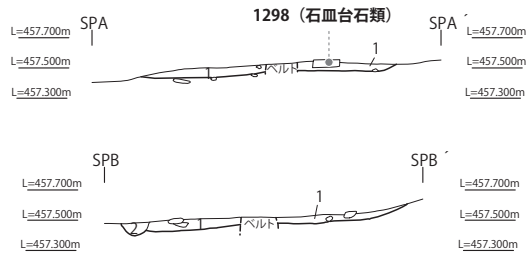
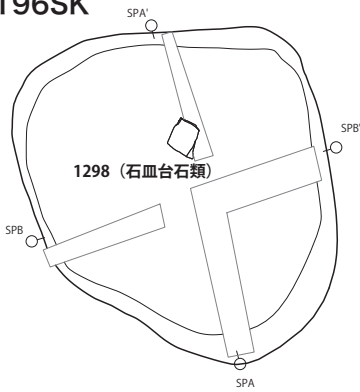
## 0328SP



- |   |             |        |                                |
|---|-------------|--------|--------------------------------|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂多く含む。中礫を少量含む。炭化物、焼土を含む。 |
| 2 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 10YR7/6明黄褐色シルトを斑状に含む。炭化物を含む。   |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 粗粒砂、中粒砂含む。10YR7/6明黄褐色シルトを少量含む。 |

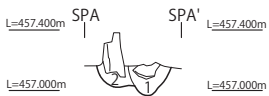
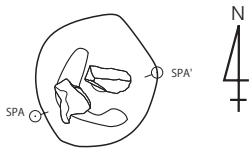
図 131 14B 区 0393SL と関連遺構 土層断面 (1:50)

### 0196SK



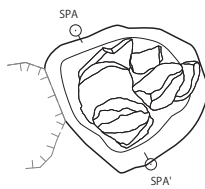
- 1 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 焼土、炭化物を斑状に多く含む。中粒砂多く含む。極粗粒砂、細隙含む。
- 2 10YR5/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂含む。焼土、炭化物を若干含む。

### 0333SL



- 1 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂含む。
- 2 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂含む。

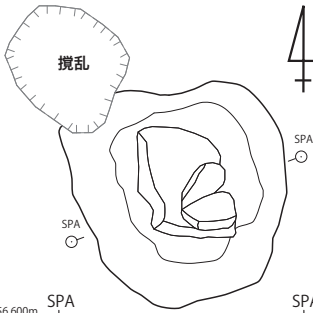
### 0109SK



### 0117SK



### 0027SX



- 1 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 細隙多く含む。炭化物含む。しまり弱い。
- 2 10YR5/1 褐灰色 粘土質シルト 中粒砂、粗粒砂多く含む。

1/50 0 遺構 100cm

### 0195SK

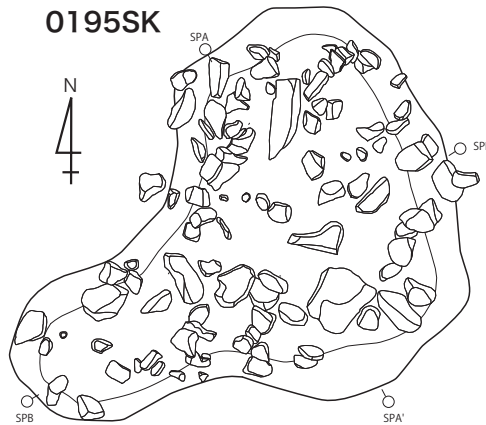
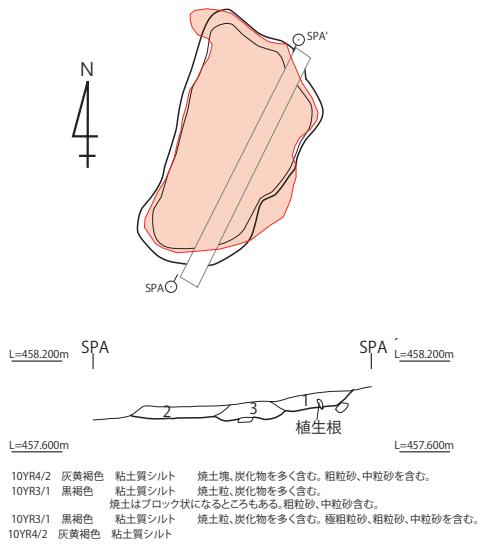
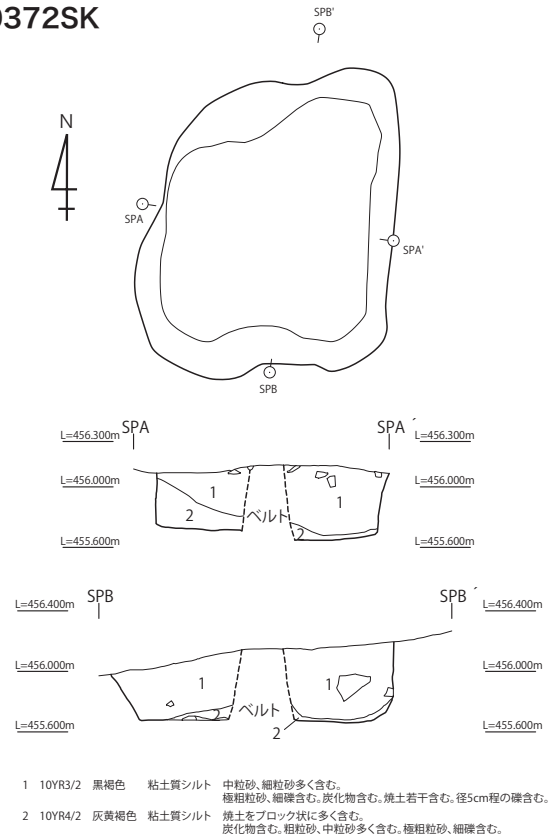


図 132 14B 区 0196SK・0333SL・0109SK・0117SK・0027SX・0195SK ( 1 : 50 )

### 0197SK



### 0372SK



### 0011SX

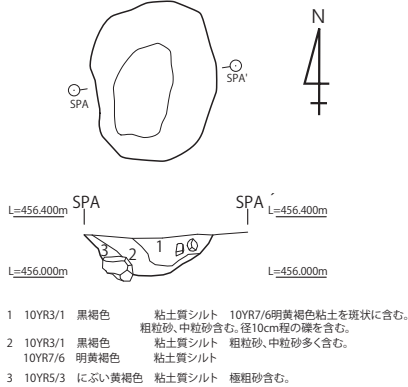


図 133 14B 区 0197SK・0372SK・0011SX ( 1 : 50 )

は焼土・炭化物が散在していたものの、掘り方底面でピットなどは確認できなかった。この遺構の底面中央には、被熱により赤色化した石皿台石類 (1298) が出土した。

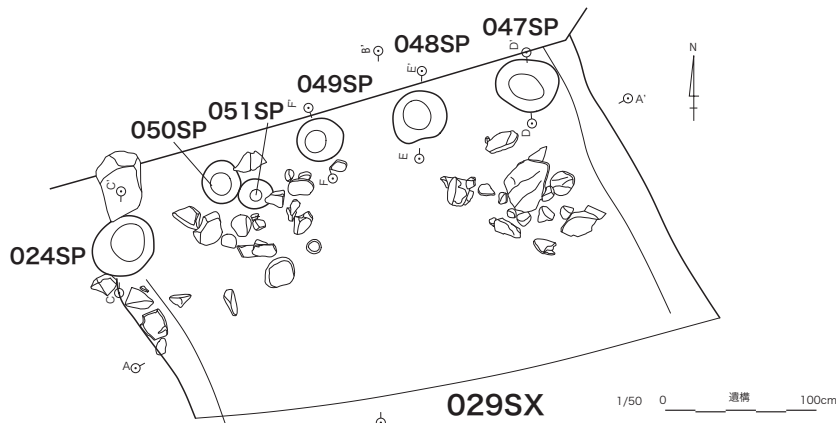
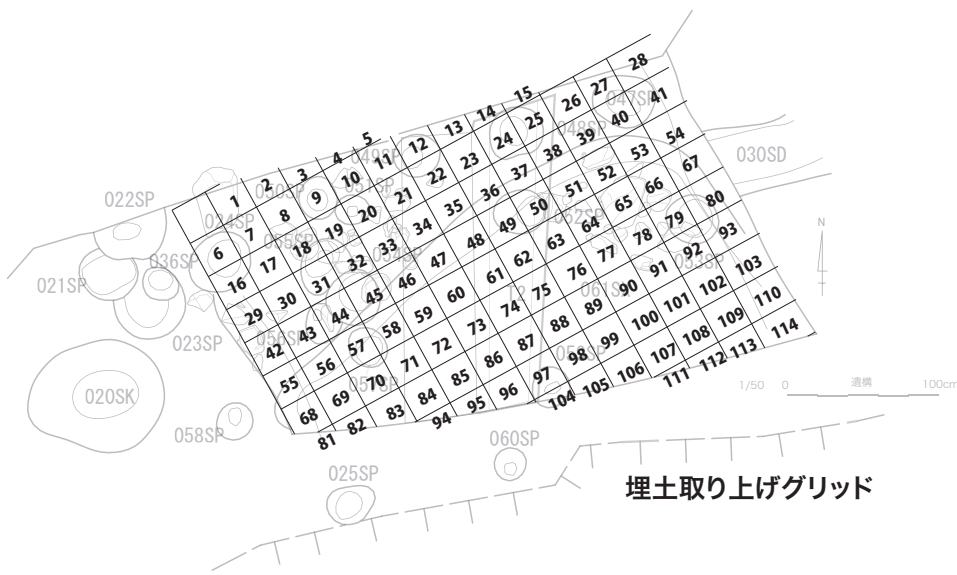
#### 14B 区 0197SK

14B 区上段の北西側、0196SK の 5m ほど北側に位置する。長軸 1.8・短軸 1.0・深さ 0.1m を測る。平面形状は不定形ながら、底面は安定しており、斜面側のみ掘り方が残存していた。埋土中には炭化物・焼土が多く残存していた。竪穴状遺構の残存なのかもしれない。

#### 16 区 029SX・061SX

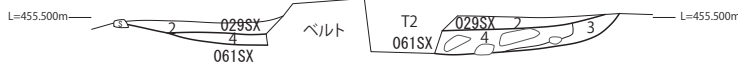
16 区中央北壁付近で見つかった遺構である。両遺構は、061SX が先行し、重複して 029SX が確認された。061SX は掘り方三辺が確認されたものである。一辺 3m ほどの隅丸形状を呈しており、掘り方内外でピット列を確認した。遺構底面からは鉄滓 (碗形滓) がみついている (巻頭図版 4)。この埋土としては 0.2m ほどの堆積を確認しているが、その上面を床面にして 029SX が築かれた。同一の軸線上で、北西側に 0.5m ズレて存在しているようである。029SX の掘り方北西端を検出できなかったものの、調査区際あたりに存在していたものと想定される。これらの遺

(本文 164 頁へ続く)



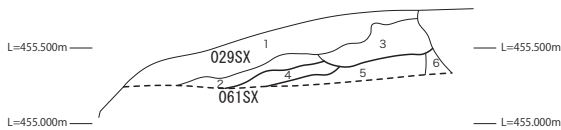
L=456.000m — A' — L=456.000m

### 029SX・061SX

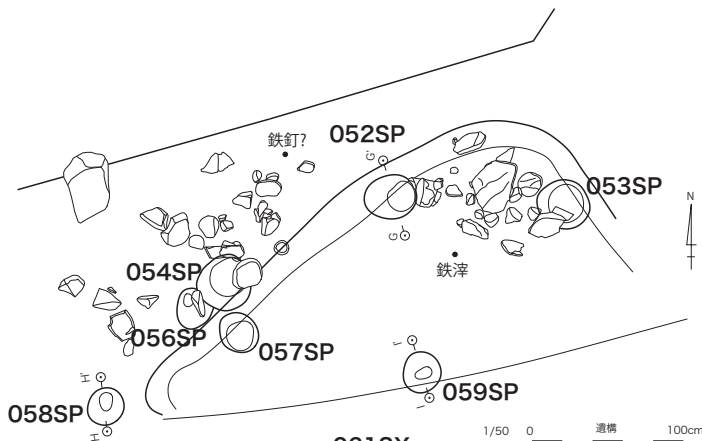


- |   |  |  |                                       |   |                     |
|---|--|--|---------------------------------------|---|---------------------|
| <p>L=455.000m —</p> <p>L=455.000m —</p> | <ol style="list-style-type: none"> <li>2. 10YR2/3 黒褐色</li> <li>3. 7.5YR3/1 黒褐色</li> <li>4. 10YR2/1 黒色</li> </ol> | <p>中粒砂混じり 粘土質シルト</p> <p>細粒砂質混じり 粘土質シルト</p> <p>細粒砂質混じり 粘土</p> | <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> <p>粘土</p> | <p>5mm大の角礫を多く含む炭化物を多く含む</p> <p>炭化物を多く含む</p> | <p>L=455.000m —</p> |
|---|--|--|---------------------------------------|---|---------------------|

L=456.000m — B' — L=456.000m

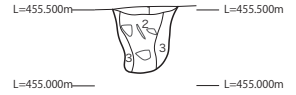


- |   |   |   |   |  |                     |
|---|---|---|---|--|---------------------|
| <p>L=455.500m —</p> <p>L=455.000m —</p> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 10YR2/2 黒褐色</li> <li>2. 10YR2/3 黒褐色</li> <li>3. 7.5YR3/1 黒褐色</li> <li>4. 10YR2/1 黒色</li> <li>5. 10YR5/3 にぶい黄褐色</li> <li>6. 7.5YR2/1 黒色</li> </ol> | <p>細粒砂混じり</p> <p>中粒砂混じり</p> <p>細粒砂質混じり</p> <p>細粒砂質混じり</p> <p>10YR5/3 にぶい黄褐色</p> <p>中粒砂混じり</p> | <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> <p>粘土</p> <p>粘土</p> | <p>5mm大の角礫を多く含む炭化物を多く含む</p> <p>1cm大の炭化物を多く含む</p> | <p>L=455.000m —</p> |
|---|---|---|---|--|---------------------|



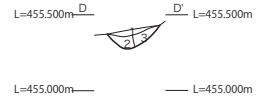
L=456.000m — C' — L=456.000m

### 024SP



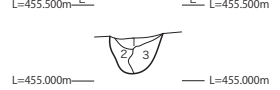
- |   |  |  |   |
|---|--|--|---|
| <p>L=455.500m —</p> <p>L=455.000m —</p> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 10YR2/3 黒褐色</li> <li>2. 10YR2/2 黒褐色</li> <li>3. 10YR2/3 黒褐色</li> </ol> | <p>中粒砂混じり</p> <p>細粒砂・角礫混じり</p> <p>細粒砂混じり</p> | <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> |
|---|--|--|---|

### 047SP



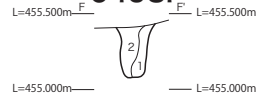
- |   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| <p>L=455.500m —</p> <p>L=455.000m —</p> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 10YR3/2 黒褐色</li> <li>2. 10YR3/3 暗褐色</li> <li>3. 10YR5/3 にぶい黄褐色</li> </ol> | <p>細粒砂混じり</p> <p>中粒砂混じり</p> <p>粗粒砂混じり</p> | <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> |
|---|---|---|---|
- 2cm大の角礫をわずかに含む

### 048SP



- |   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| <p>L=455.500m —</p> <p>L=455.000m —</p> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 10YR3/2 黒褐色</li> <li>2. 10YR3/1 黒褐色</li> <li>3. 10YR5/3 にぶい黄褐色</li> </ol> | <p>細粒砂混じり</p> <p>細粒砂混じり</p> <p>粗粒砂混じり</p> | <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> |
|---|---|---|---|

### 049SP



- |   |  |                             |                             |
|---|--|-----------------------------|-----------------------------|
| <p>L=455.500m —</p> <p>L=455.000m —</p> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 10YR3/2 黒褐色</li> <li>2. 10YR3/1 黒褐色</li> </ol> | <p>細粒砂混じり</p> <p>細粒砂混じり</p> | <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> |
|---|--|-----------------------------|-----------------------------|

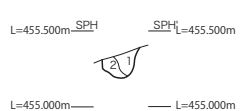
### 052SP



L=454.500m — — L=454.500m

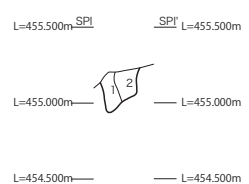
- |   |  |                             |                             |
|---|--|-----------------------------|-----------------------------|
| <p>L=455.500m —</p> <p>L=455.000m —</p> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 10YR3/2 黒褐色</li> <li>2. 10YR3/1 黒褐色</li> </ol> | <p>細粒砂混じり</p> <p>細粒砂混じり</p> | <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> |
|---|--|-----------------------------|-----------------------------|

### 058SP



- |   |  |                             |                             |
|---|--|-----------------------------|-----------------------------|
| <p>L=455.500m —</p> <p>L=455.000m —</p> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 10YR3/2 黒褐色</li> <li>2. 10YR3/1 黒褐色</li> </ol> | <p>細粒砂混じり</p> <p>細粒砂混じり</p> | <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> |
|---|--|-----------------------------|-----------------------------|

### 059SP



- |   |  |                             |                             |
|---|--|-----------------------------|-----------------------------|
| <p>L=455.500m —</p> <p>L=455.000m —</p> <p>L=454.500m —</p> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 10YR3/2 黒褐色</li> <li>2. 10YR3/1 黒褐色</li> </ol> | <p>細粒砂混じり</p> <p>細粒砂混じり</p> | <p>粘土質シルト</p> <p>粘土質シルト</p> |
|---|--|-----------------------------|-----------------------------|
- 10YR7/6明黄褐色細粒砂混じり粘土質シルトブロックが混じる

図 134 16区 029SX・061SX と 関連遺構【1:50】

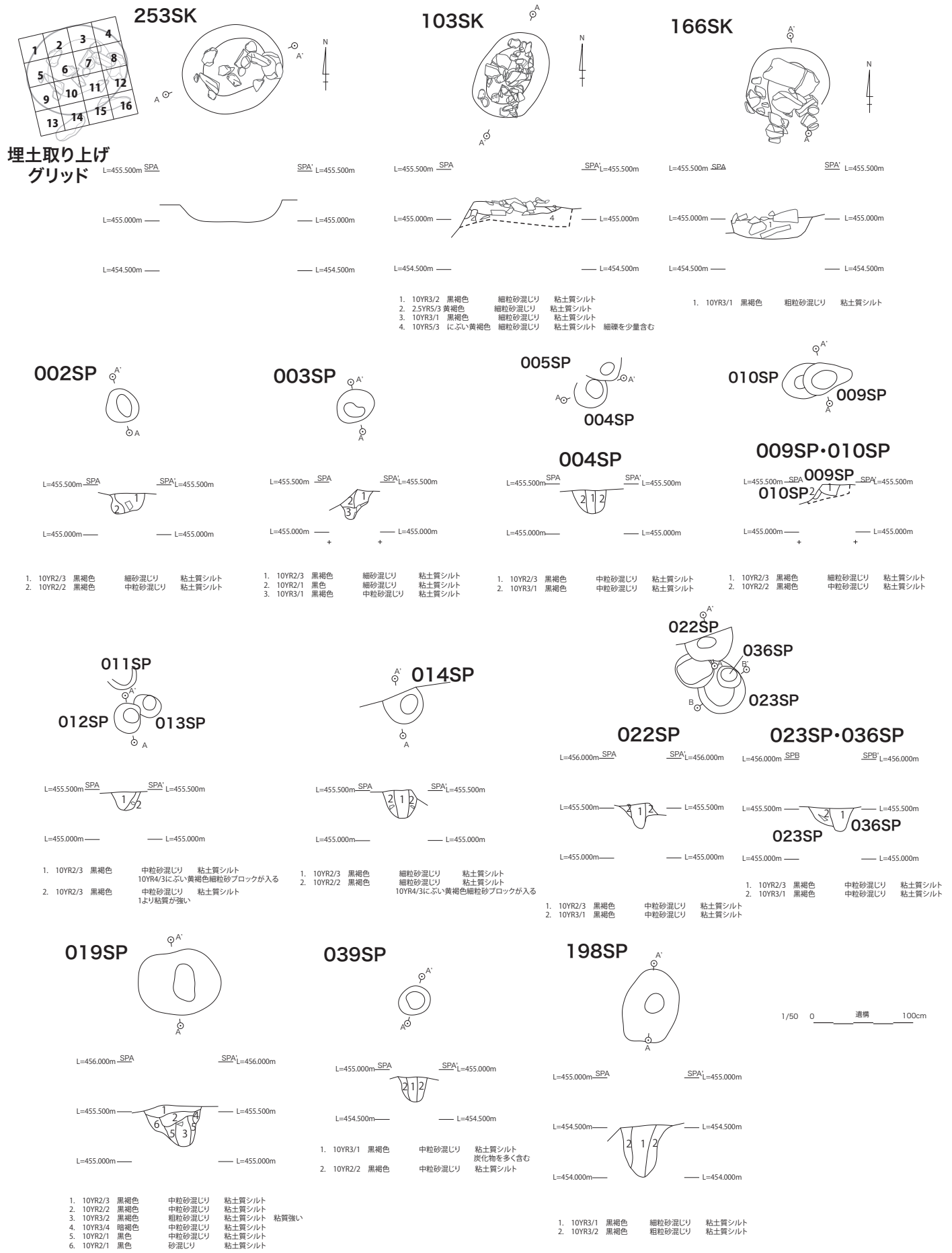
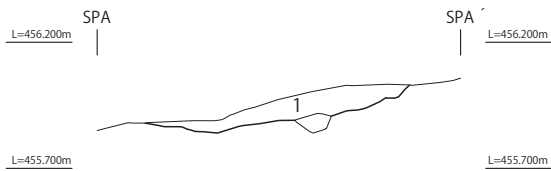
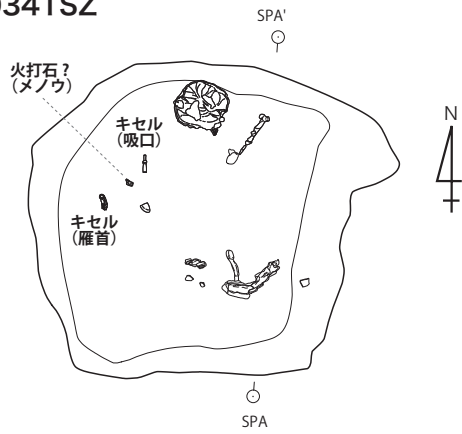


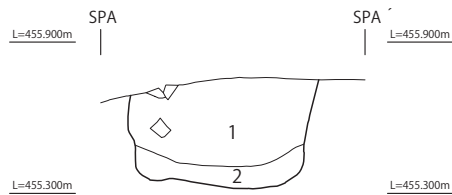
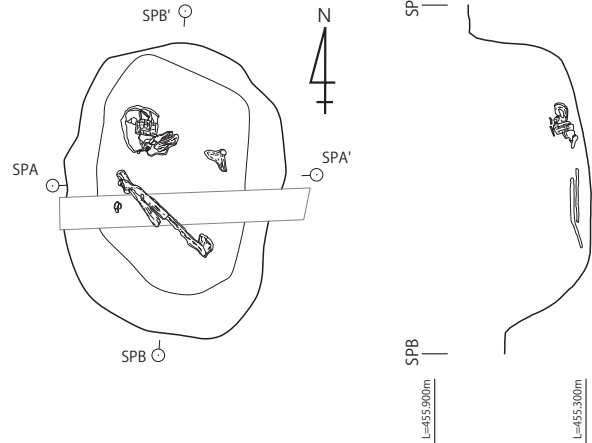
図 135 16区 253SK・103SK・166SKと各ピット

### 0341SZ



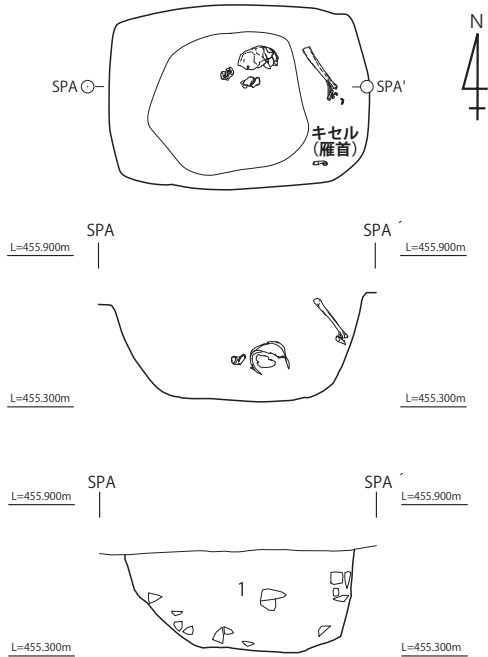
1 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 細礫、極細粒砂含む、中粒砂多く含む。径5cm程の礫含む。炭化物若干含む。

### 0343SZ



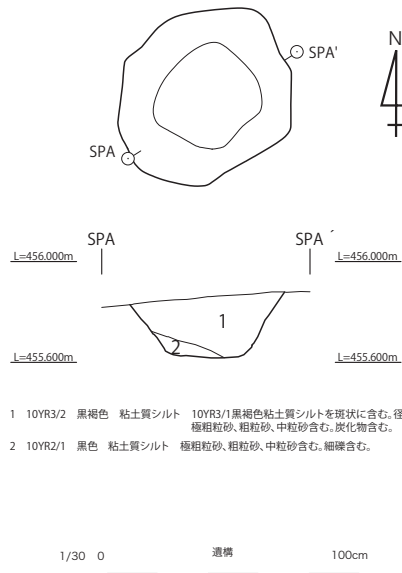
1 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。細礫径10cm程の礫含む。炭化物若干含む。  
 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 中粒砂、細粒砂多く含む。極細粒砂若干含む。炭化物若干含む。

### 0342SZ平断面図



1 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粗粒砂、中粒砂多く含む。炭化物含む。径5cm程の礫含む。

### 0344SK平断面図



1 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 10YR3/1 黒褐色粘土質シルトを斑状に含む。径5cm程の礫を多く含む。極粗粒砂、粗粒砂、中粒砂含む。炭化物含む。  
 2 10YR2/1 黒色 粘土質シルト 極粗粒砂、粗粒砂、中粒砂含む。細礫含む。

図 136 14B 区 0341SZ・0342SZ・0343SZ・0344SK 【1:30】

## 0001SX・0002SX平面断面図

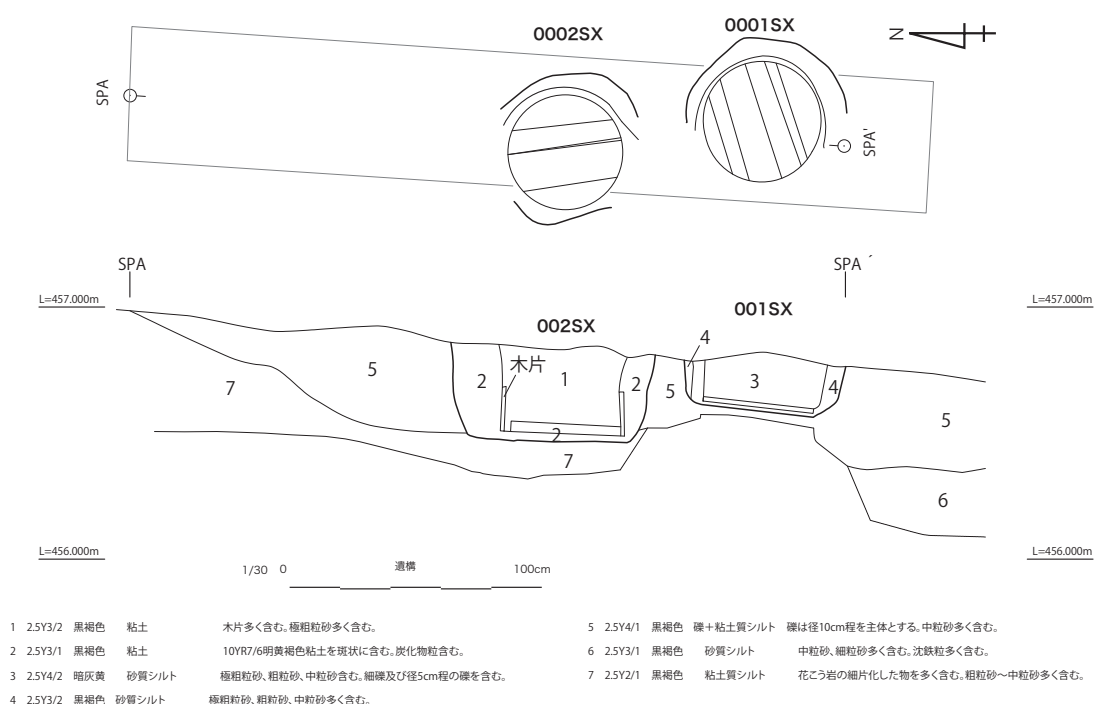


図 137 14B区 0001SX・0002SX【1:30】

構内に設定されたトレンチ2からは、天目茶碗が出土した（2050、巻頭図版4）。

### 16区 253SK

調査区北西端の、浅い落ち込み16区211SX内で見つかった遺構である。長軸1.0・短軸0.9・深さ0.2mを測る。埋土内からは炭化物や焼土粒が見ついている。14B区0111SXと16区211SXとは同一の落ち込みである。戦国期以降の遺物を含むこの落ち込みは、平面的に見ると竪穴状遺構のようにも見えるが、底面は北側から南側に向かって傾斜しており、不安定であった。

## 2-2. 埋葬遺構

### 14B区 0341SZ・0342SZ・0343SZ・0344SK

0341SZ・0342SZ・0343SZは平面プラン方形の遺構で、残存状況のよくなかった0341SZを除いて安定した掘り方を有するものである。

人骨の残存状況は良好ではなく、いずれも頭蓋骨や四肢骨の一部が残存していたに過ぎない。0341SZ・0342SZからは、キセルも出土した。

14B区0344SKも遺構の位置や断面形状から、埋葬遺構であったと考えられる。14A区0001SZと0002SZは浅い掘り方しか検出できなかったが、埋土から骨片と寛永通宝が出土した。

### 14B区 0001SX・0002SX

調査区東端で見つかった遺構で、埋設された桶である。底面からは一銭などの銅銭が出土した。近代以降の乳幼児の埋葬遺構かもしれない。

## 第2節 古代以降の遺物

### 1. 陶磁器・土器類

古代以降の遺物には石製品・金属製品やガラス製品など多様なものが存在しており、このうち陶磁器・土器類は全部で2894点が出土した。須恵器や灰釉陶器など古代に属する遺物が少量あるものの、大多数は瀬戸・美濃窯産陶器などの中世や近世に属するものである。美濃窯産陶器(259点)や瀬戸窯産磁器(452点)を含めた瀬戸・美濃窯産陶磁器(1564点)は全陶磁器・土器類の約54%を占める。以下、土師器(831点)、常滑窯産陶器(162点)、関西系磁器(52点)、渥美窯産陶器(37点)、肥前窯産陶磁器(29点)、中国産陶磁器(18点)の順となる。土師器は鍋(689点)が約83%を占めるが、そのうち形状の判明するものでは南伊勢系鍋(伊勢型鍋)が最も多く、半球形内耳鍋、くの字形内耳鍋と続く。ただし、伊勢型鍋に共伴すると思われる山茶碗類はそれほど多くは出土していない。藤澤良祐氏が同定した瀬戸・美濃窯産陶器413点については、時期は古瀬戸から近代まで広く分布しており、四耳壺など特定器種では古瀬戸前期まで遡るものもある。以下、主要なものについて遺構別に資料紹介する。

**炉跡周辺出土遺物** 鍛冶炉と思われる焼土14B区0115SXからは灰釉陶器(2001)が、14B区0330SKから登窯第3小期に属する天目茶碗(2002)が出土している。

**14B区0283SK出土遺物** 登窯第1小期に属する黄瀬戸中皿(2019)は美濃窯の中でも瑞浪窯で生産された製品である。瑞浪窯の製品が奥三河にも一定量流通していたことを示す資料である。

**14B区0296SK出土遺物** 美濃窯産陶器には登窯第5小期の尾呂茶碗(2023)と登窯第2

小期の天目茶碗(2024)があるが、産地不明陶器の壺(2021)と土師器ロクロ調整皿(2022)は中世前期に属する古いものと思われる。本遺跡出土の土師器皿は13世紀以降は非ロクロ調整皿が多数を占めていると考えられる。

**16区029SK出土遺物** 瀬戸・美濃窯産陶器窯と土師器鍋類が出土し、前者には大窯第1段階の天目茶碗(2050)と古瀬戸後Ⅲ期の灰釉卸皿(2046)と古瀬戸後期の祖母懐茶壺(2043)などがある。一方、土師器鍋には内側に折り返した口縁部が幅広に薄くなる南伊勢系鍋(2045・2047～2049)と、口縁部の内傾がやや強くなる内湾型羽釜(2044)があり、全体として15世紀末に位置付けられる比較的良好な一括資料といえる。

**14B区出土遺物** 2057は灰釉陶器長頸瓶で10世紀代に位置付けられる。2061・2063・2064は渥美窯産陶器12世紀代の資料である。2058と2067は瀬戸窯産陶器灰釉四耳壺で、前者は古瀬戸前I b期、後者は古瀬戸前Ⅲ期に属しており、13世紀代には墓域が展開した可能性も考慮される。2124は志戸呂窯産陶器鉄釉丸碗で17世紀に位置付けられる。志戸呂窯産と思われる製品には、図示していないがこの他に天目茶碗が1点存在し、わずかではあるが、奥三河にも志戸呂窯製品が流通していたことが判明する。

### 2. 石器類

当遺跡では、縄文時代の資料に混じって、古代以降の石器が含まれていた。ここでは、古代以降として確実視できるもののみを提示した。

1298は14B区196SK中央で見つかった石皿

(本文175頁へ続く)

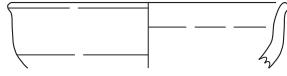
焼土（鍛冶炉）周辺

14B 0115SX



2001  
灰釉陶器碗

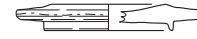
14B 0330SK



2002  
瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗

大型土坑

14B 0027SK



2003  
瀬戸窯産陶器灰釉蓋

14B 0109SK



2004  
土師器南伊勢系鍋

その他の土坑

14B 0372SK

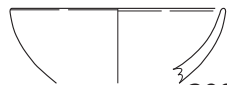


2005  
土師器くの字形内耳鍋

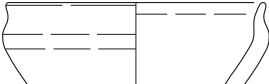


2006  
瀬戸・美濃窯産陶器灰釉即目付大皿

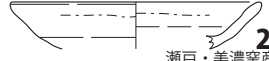
14B 0031SK



14B 0162SK



14B 0172SK

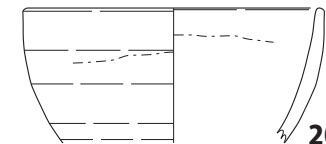


14B 0284SK

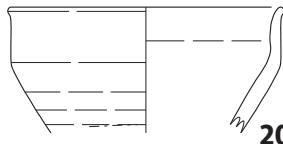


2020  
土師器半球形内耳鍋

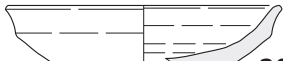
14B 0296SK



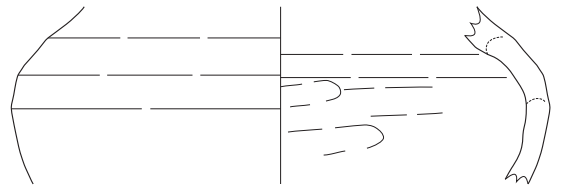
2023  
美濃窯産陶器尾呂茶碗



2024  
美濃窯産陶器天目茶碗

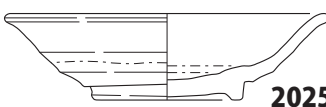


2022  
土師器口口調整皿



2021  
産地不明陶器壺

14B 0337SK



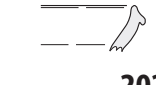
2025  
美濃窯産陶器輪壳皿

14B 0352SK

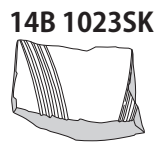


2027  
瀬戸・美濃窯産陶器播鉢

14B 1011SK

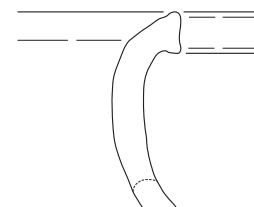


2029  
土師器くの字形内耳鍋



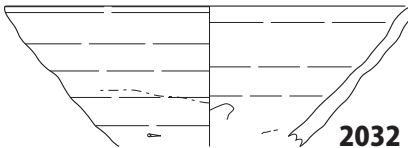
2030  
瀬戸・美濃窯産陶器播鉢

14B 0338SK



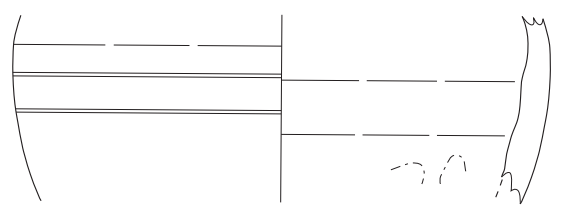
2026  
常滑窯産陶器甕

14B 1029SK



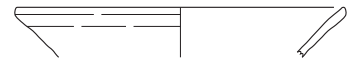
2032  
瀬戸窯産陶器灰釉平碗

14B 0375SK



2028  
瀬戸窯産陶器灰釉四耳壺

14B 1028SK



2031  
東濃型山茶碗

0 1/3 10cm

図 138 陶磁器・土器類 1

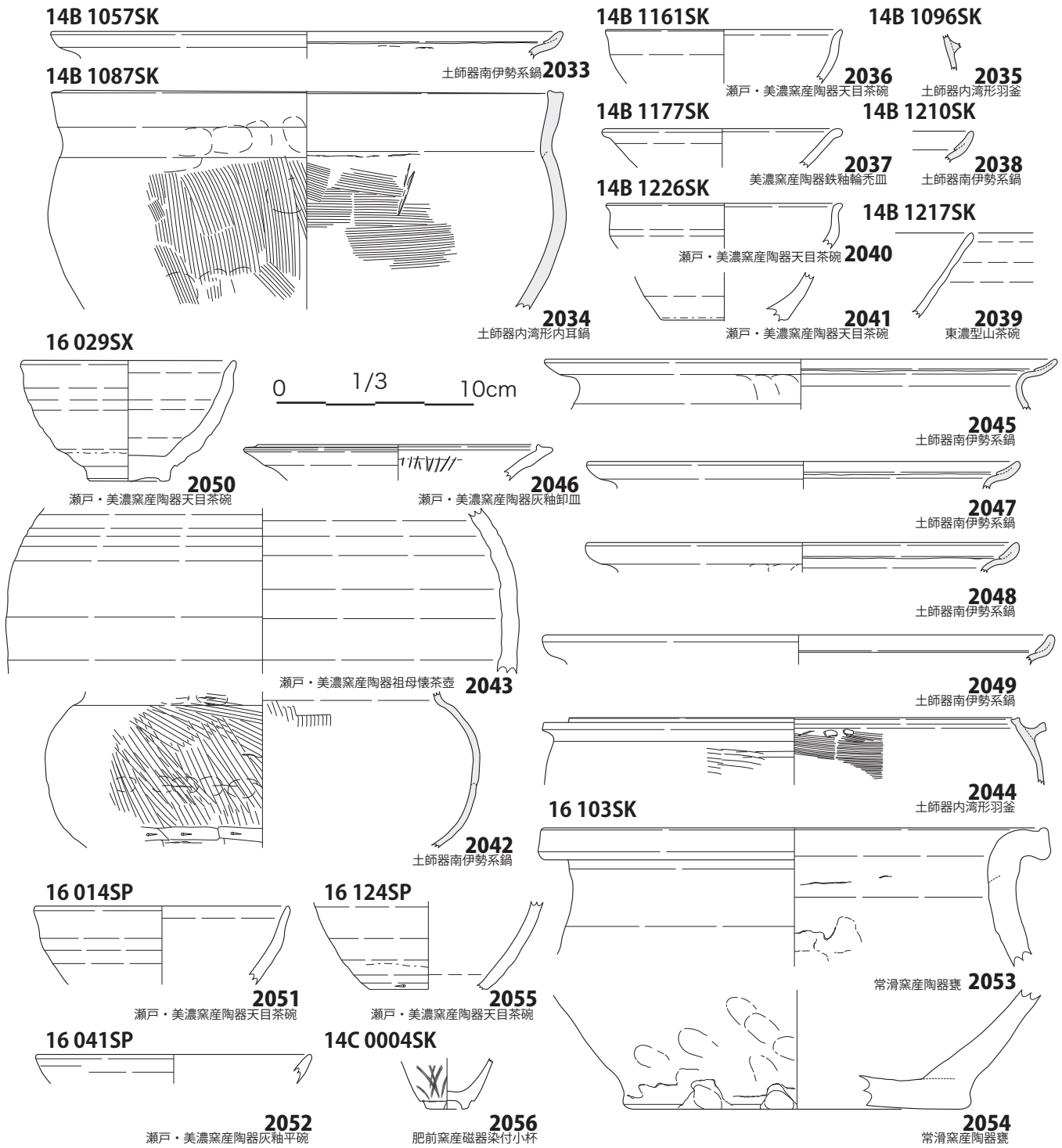


図 139 陶磁器・土器類 2

14B 包含層など

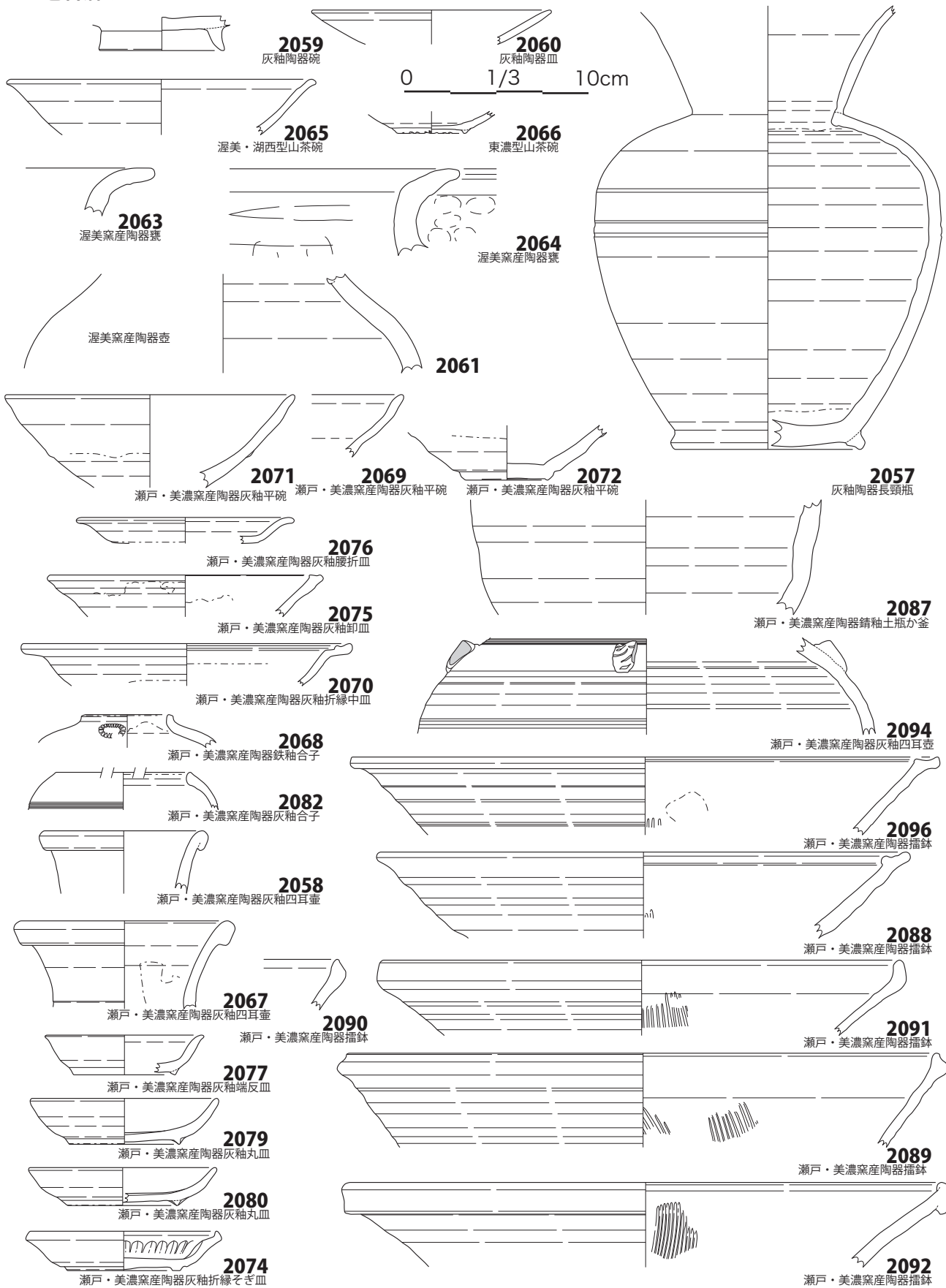


図 140 陶磁器・土器類 3

14B 包含層など

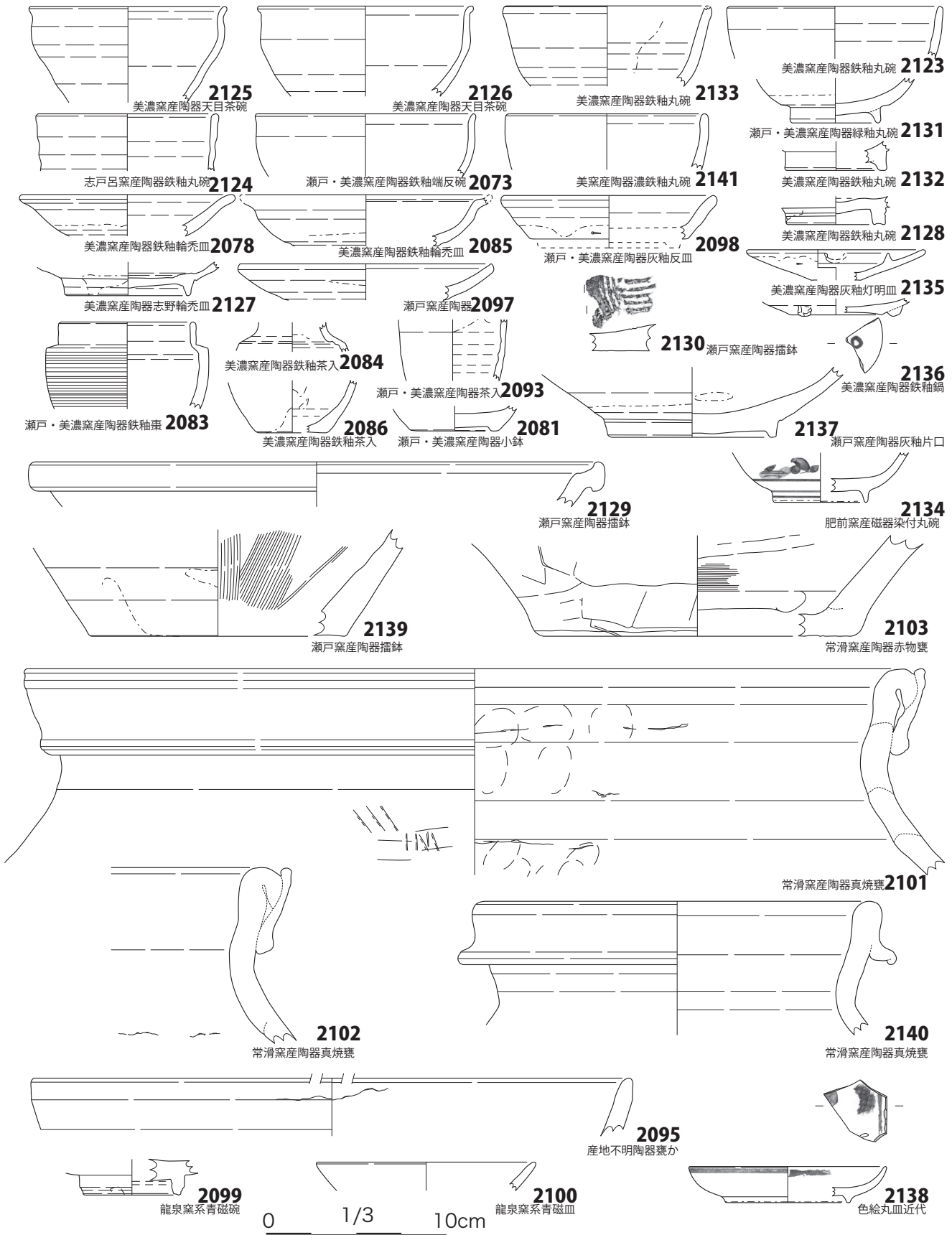


図 141 陶磁器・土器類 4

14B 包含層など

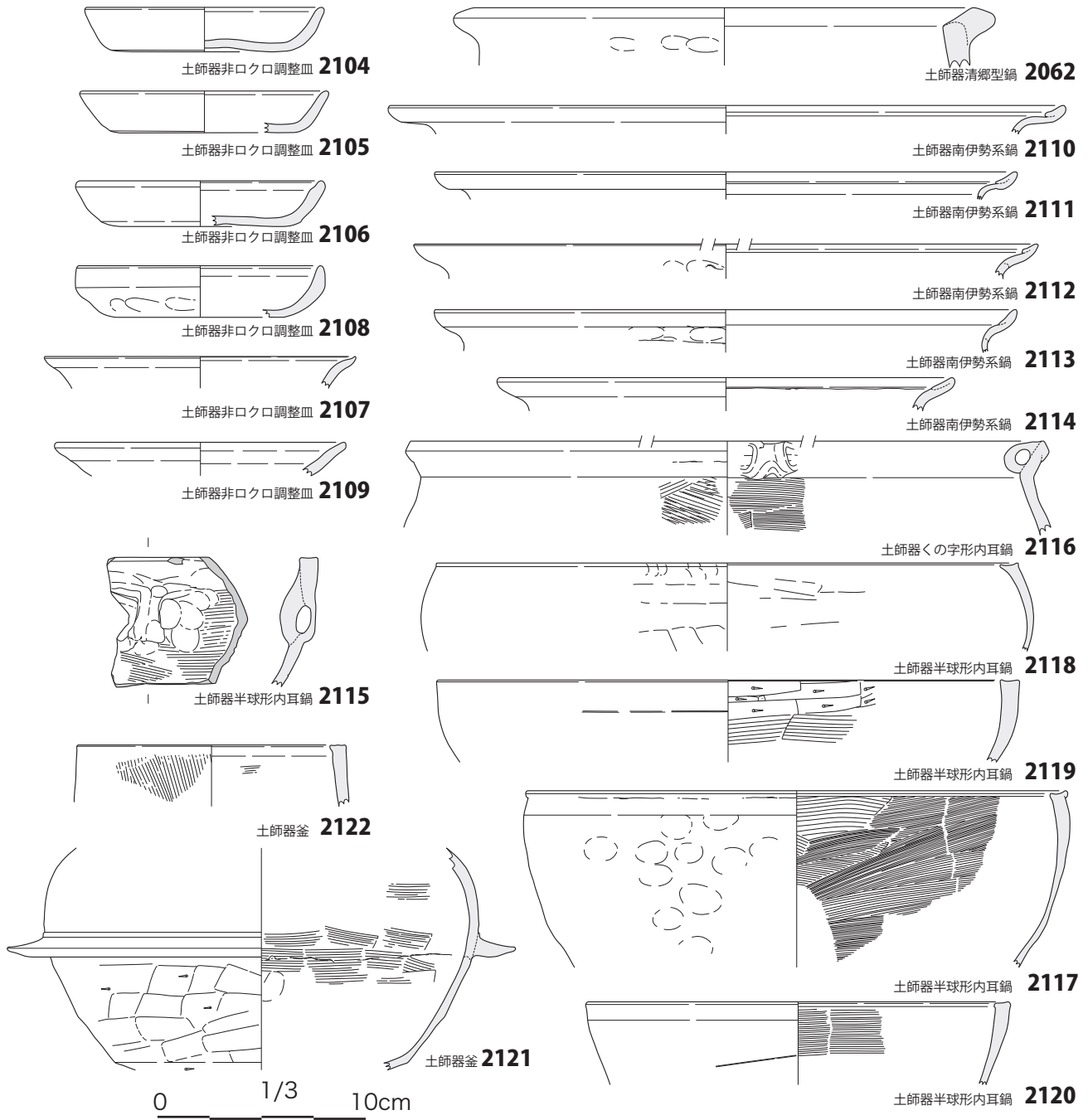
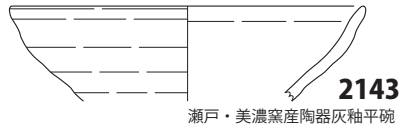
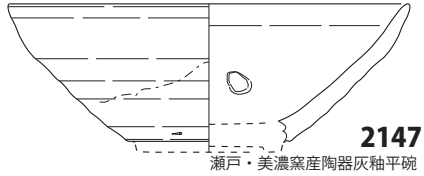


図 142 陶磁器・土器類 5

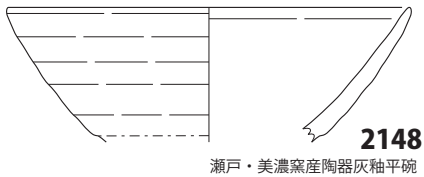
16 包含層など



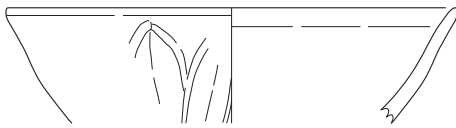
2143 瀬戸・美濃窯産陶器灰釉平碗



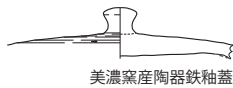
2147 瀬戸・美濃窯産陶器灰釉平碗



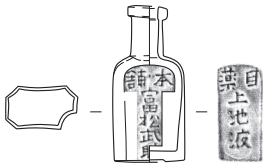
2148 瀬戸・美濃窯産陶器灰釉平碗



2152 龍泉窯系青磁蓮弁紋碗



2154 美濃窯産陶器鉄釉蓋



2155 ガラス瓶

16 包含層など



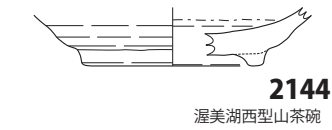
2159 瀬戸窯産陶器腰鍔湯呑



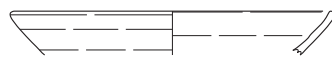
2158 瀬戸・美濃窯産陶器志野丸皿



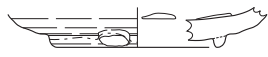
2157 中国白磁玉縁碗



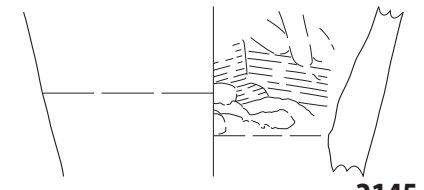
2144 渥美湖西型山茶碗



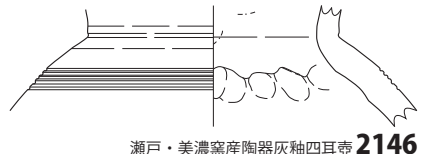
2151 東濃型山茶碗



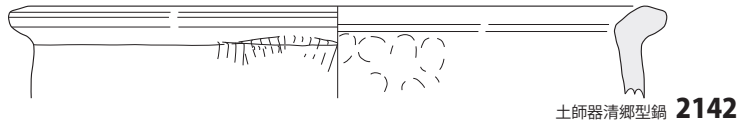
2149 瀬戸窯産陶器灰釉中皿



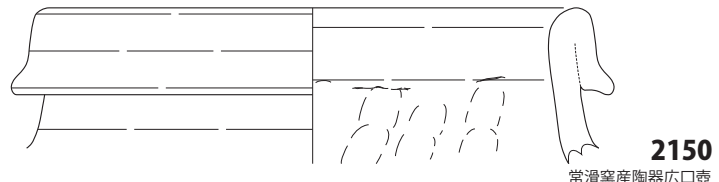
2145 瀬戸窯産陶器鉄釉瓶子



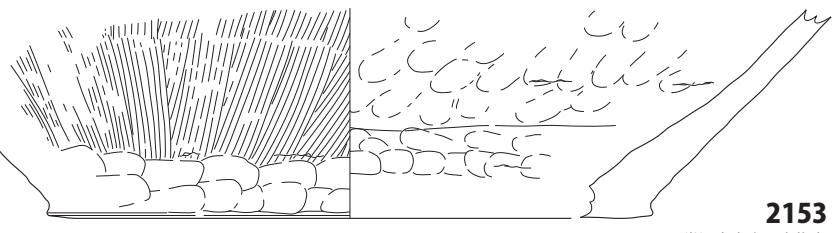
2146 瀬戸・美濃窯産陶器灰釉四耳壺



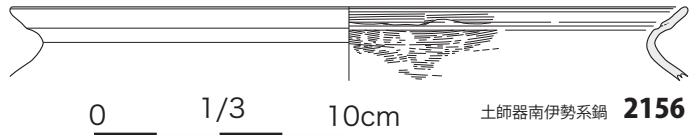
2142 土師器清郷型鍋



2150 常滑窯産陶器広口壺



2153 常滑窯産陶器赤物塞



2156 土師器南伊勢系鍋



図 143 陶磁器・土器類 6

表5 陶磁器・土器類の種別出土量一覧

須恵器		4	
灰釉陶器	碗	6	14
	皿	3	
	その他	5	
猿投陶器		1	
山茶碗類	尾張型	4	17
	渥美湖西型	3	
	東濃型	10	
渥美陶器	甕	6	37
	壺	1	
	甕か壺	30	
常滑陶器	壺	7	162
	甕	19	
	その他	135	
中国磁器	青磁	15	18
	白磁	2	
	青花	1	
瀬戸美濃陶器	碗	391	853
	皿	109	
	播鉢	123	
	その他	230	
美濃陶器	碗	117	259
	皿	24	
	その他	118	
志戸呂陶器		1	
唐津陶器		1	
肥前磁器	碗	18	28
	皿	3	
	その他	7	
関西系磁器	碗	46	52
	皿	1	
	その他	5	
瀬戸磁器	碗	344	452
	皿	25	
	その他	83	
藤岡磁器		2	
犬山焼		1	
剛珍焼		1	
産地不明磁器	碗	49	96
	皿	3	
	その他	44	
産地不明陶器	碗	16	58
	皿	3	
	その他	39	
土師器	皿	101	831
	鍋	689	
	その他	41	
瓦器		7	
合計		2894	

表6 土師器の出土量一覧

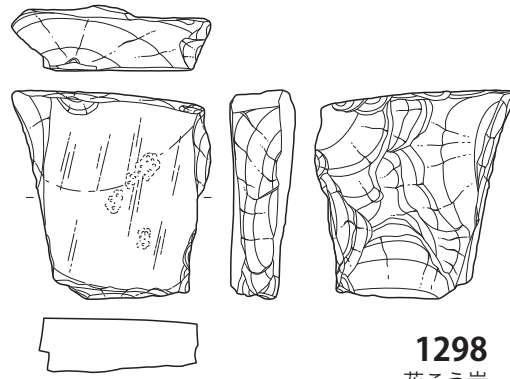
器種	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	近代	総計
皿類 (不明)				5							3	8
非ロクロ調整皿						3	12					87
				61								
			11									
ロクロ調整皿				6								6
			7	36				5		1		541
鍋類 (不明)	7			50		51						
	384											
清郷型鍋	2											2
伊勢型鍋			5	27	1	1						68
			21		2							
			11									
内弯型羽釜				1	3							6
			2									
くの字形内耳鍋					1	10						20
					9							
半球形内耳鍋					3	14	8					29
					4							
内弯型内耳鍋						1						1
焙烙									2			2
羽付鍋						1	1					2
						12	1					
釜						2	1					18
						2						
火鉢							2					2
蓋									1			1
小鉢				1								1
土鈴							1					1
土人形?									1			1
コンロ											2	2
コンロ蓋											2	2
不明				9			3				13	31
				6								
												831

表7 瀬戸・美濃窯産陶器の出土量一覧(1)

器種	古瀬戸										大窯				連房式登窯										不明	合計	総計	器類						
	前Ib期	前III期	中I期	中II期	中III期	中IV期	後I期	後II期	後III期	後IV期		第1段階	第2段階	第3段階		第4段階		第1小期	第2小期	第3小期	第4小期	第5小期	第6小期	第7小期					第8小期	第9小期	第10小期	第11小期		
										古段階	新段階			前半	後半	前半	後半																	
灰釉平碗							5	5	6	3																						25		
天目茶碗							1	1			2	2	1		1	1			3	2	4											69		
							20							3				13																
段付天目茶碗																			2													2		
灰釉丸碗																			1							1						6		
鉄釉丸碗																			1	3					1							13		
																			6				1											
志野丸碗																			2													2		
緑釉丸碗																			1													1		
染付丸碗																													1			1		
染付端反碗																														2		2		
鉄釉端反碗																			1													12		
																			1															
灰釉腰折碗																						1										1		
錆釉碗																								1								1		
黄瀬戸碗																			1													1	191	
灰釉碗																										1						3		
尾呂茶碗																							1									6		
																								1										
腰錆茶碗																													1			8		
																												2	1					
柳茶碗																																1		
広東茶碗																																4		
																														3				
箱形湯呑																																12		
染付碗																																12		
灰釉碗																																1		
鉄釉碗																			1	1												7		
																			3				1											
志野小碗																			1													1		
灰釉縁釉小皿								3	1	2	1																					7		
灰釉御皿							1		2	3																						6		
灰釉腰折皿										1																						3		
灰釉端反皿														3																		3		
灰釉丸皿															2		2															6		
															1																			
志野丸皿																			3	1	6											13		
																			1															
鉄釉丸皿																																2		
染付丸皿																																3		
灰釉折縁そぎ皿																			1													3		
鉄釉折縁小皿																			1													1		
灰釉反皿																									1							1		
志野輪禿皿																									1	2						3		
鉄釉輪禿皿																										2						5		
灰釉灯明皿																																1		
染付皿																																1		
灰釉皿									2					2																		4		

表7 瀬戸・美濃窯産陶器の出土量一覧(2)

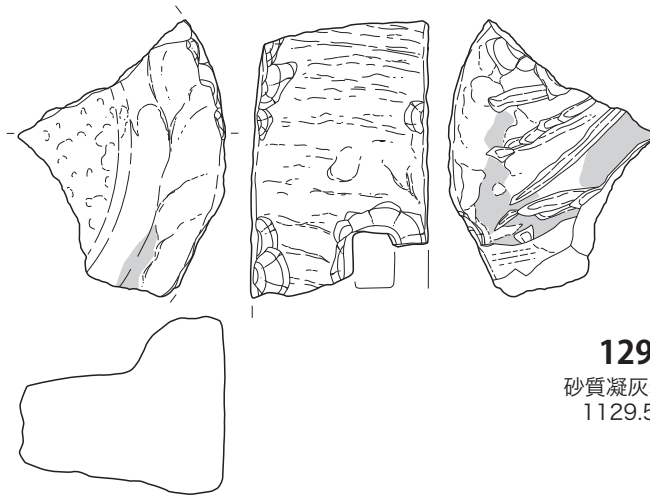
器種	古瀬戸								大窯				連房式登窯										合計	総計	器類									
	前Ib期	前III期	中I期	中II期	中III期	中IV期	後I期	後II期	後III期	後IV期		第1段階	第2段階	第3段階		第4段階		第1小期	第2小期	第3小期	第4小期	第5小期				第6小期	第7小期	第8小期	第9小期	第10小期	第11小期	不明		
										古段階	新段階			前半	後半	前半	後半																	
灰釉折縁深皿							1	1																									2	鉢・盤類
灰釉折縁中皿							1																										1	
灰釉中皿							2	1																									3	
灰釉卸目付大皿									1	1																						2		
灰釉盤類									1																								9	
黄瀬戸中皿				2				4											1													1		
黄瀬戸鉢																			1													2		
鉄釉片口鉢																			2													3		
灰釉片口																				1												1		
灰釉ねり鉢																									1		1					2		
小鉢																				1												1		
鉄釉火鉢																										1						1		
馬の目皿																											1					1		
盤類																																1		
播鉢									2	3	5			1	1	1			2	2	1	1			2		1		3		59			
									11																1	1								
									4				8					3			4													
									1												2													
灰釉四耳壺	1	1		1				1																								10		
鉄釉四耳壺								3																								2		
灰釉壺類								2																								3		
鉄釉壺								3																								4		
祖母懷茶壺								1																								5		
鉄釉瓶子			1																													1		
鉄釉德利																																3		
鉄釉花瓶																					1											1		
鉄釉壺か甕																												2				2		
灰釉壺か瓶								3																								3		
茶入																																3		
鉄釉小壺																																1		
錆釉なつめ																					1											2		
灰釉水滴																																1		
鉄釉合子				1																												1		
灰釉合子			1																													1		
灰釉小壺か小瓶									1																							1		
灰釉筒形香炉																																1		
灰釉蓋																																1		
鉄釉蓋																																2		
蓋物の身																																1		
鉄釉鍋																																6		
土瓶か釜										1																						1		
土瓶																																5		
行平鍋																																1		
行平蓋																																1		
釜道具													1																			1		
不明																																7		
総計									3		1																					413		



**1298**  
花こう岩  
4000g

1/8 0 **1296~1298** 40cm

14B 196SK



14B 297SK

**1299**  
砂質凝灰岩  
1129.5g

1/4 0 **1299** 20cm

図 144 古代以降 石器 1

台石類である。被熱による赤色化が著しい。出土した状態の上面側には磨痕や敲打痕があり、反対面には敲打などによって形が整えられている。周囲では鉄滓など鍛冶関連資料が出土していることから、1298 も金床石であった可能性が考えられる。石材は花こう岩である。

1299 は石臼の上臼である。挽木を挿入する孔が確認できる。砂質凝灰岩製。

1230 ~ 1310 は砥石である。小型のものは手持ち砥石に、大型のものは置砥石に当たると思われるが、小型のものでも置砥石はあるか。1305

には盲孔が2カ所並んで認められる。火切孔であろうか。

石材は、凝灰岩・砂質凝灰岩・頁岩の使用が卓越している。そのなかでも、地元で採取可能な閃緑岩の使用も若干認められる。14B 区 1226SK 内から出土した 1043 も古代以降に属する可能性がある。



图 145 古代以降 石器 2

# 第5章 自然科学分析

## 第1節 花粉分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

北設楽郡設楽町に所在する西地・東地遺跡は、寒狭川左岸の山麓緩傾斜地および河岸段丘面上に立地しており、江戸時代や縄文時代の遺構・遺物が検出されている。この遺跡において、縄文時代の古植生を検討するために、土壌試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、縄文時代の古植生について検討した。

### 2. 試料と方法

分析試料は、14B区の住居跡や土坑などから採取された計27点である(表8)。時期は、主に縄文時代中期後半～後期初頭である。これらの試料を用いて、次の手順で花粉分析を行った。

試料(湿重量約3～4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは、樹木花粉200を得るまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。数枚のプレパラートを観察しても樹木花粉200を得るのが困難な試料(No.166)については樹木花粉100を得るまで検鏡を行い、それでも樹木花粉を得るのが困難な試料(No.162、

表8 分析試料一覧

試料No.	グリッド	14B区遺構名	時期	土相	備考
171		0365K	縄文時代後期初頭	黒褐色(2.5Y3/1)砂礫混じりシルト	dot.1868
182		1224SK	縄文時代後期初頭	黒褐色(10YR2/2)シルト	dot.1961
172			縄文時代後期初頭	黒色(7.5YR1.7/1)シルト	dot.1899
173	5135		縄文時代後期初頭	黒色(5Y2/1)シルト	dot.1900
174		1208SK	縄文時代後期初頭	黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト	dot.1901
175			縄文時代後期初頭	オリーブ黒色(5Y2/2)粘土質シルト	dot.1902
176			縄文時代後期初頭	黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト	dot.1903
177			縄文時代後期初頭	黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト	dot.1904
160			縄文時代中期末～後期以降	黒色(10YR1.7/1)シルト	西壁サンプル1
161			縄文時代中期末～後期以降	黒色(2.5Y2/1)シルト	西壁サンプル2
162			縄文時代中期末～後期以降	黒色(2.5Y2/1)シルト	西壁サンプル3
163			縄文時代中期末～後期以降	黒褐色(2.5Y3/1)シルト	西壁サンプル4
164			縄文時代中期末～後期以降	オリーブ黒色(5Y3/2)シルト	西壁サンプル5
165			縄文時代中期後半以降	灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルト	西壁サンプル6
166			縄文時代中期末～後期以降	黒色(10YR1.7/1)礫混じりシルト	西壁サンプル7
167			縄文時代中期末～後期以降	黒褐色(2.5Y3/1)シルト	西壁サンプル8
168			縄文時代中期末～後期以降	黒色(10YR2/1)砂礫混じりシルト	西壁サンプル9
169			縄文時代中期後半以降	黒褐色(2.5Y3/2)砂礫混じりシルト	西壁サンプル10
178	5035		縄文時代中期後半～末以降	黒色(10YR1.7/1)シルト	東上部 dot.1957
179			縄文時代中期後半～末以降	黒色(10YR1.7/1)シルト	dot.1958
180		トレンチ	縄文時代中期後半～末以降	黒色(10YR1.7/1)シルト	西上部 dot.1959
181	5034		縄文時代中期後半～末以降	黒色(2.5Y2/1)シルト	西上部 dot.1960
183			縄文時代後期初頭	黒色(10YR1.7/1)シルト	炉東側 dot.2120
185	4934	1304Si	縄文時代後期初頭	黒褐色(2.5Y3/1)シルト	dot.2122
184			縄文時代後期初頭	黒色(10YR1.7/1)シルト	炉東側 dot.2121
186	5134	1306Si	縄文時代後期初頭	黒色(2.5Y2/1)シルト	dot.2145 1/2
187			縄文時代後期初頭	黒色(2.5Y2/1)シルト	dot.2145 2/2

164、165、167～169、171、183、185)については、作製したプレパラート全面を検鏡するにとどめた。また、保存状態の良い花粉化石を選んで単体標本(PLC.1881～1893)を作製し、写真を図147に載せた。

### 3. 結果

27試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉31、草本花粉12、形態分類のシダ植物胞子2の、総計45である。これらの花粉・胞子の一覧表を表9に、花粉分布図を図146に示す。花粉分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科とバラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本

花粉に一括して入れてある。

No.162 と No.164、No.165、No.167 ～ 169、No.171、No.183、No.185 については、十分な量の花粉化石が得られなかった。それ以外の比較的多くの花粉化石が得られた試料では、産出した花粉は大部分が樹木花粉であり、中でもシノキ属 - マテバシ属の産出が目立つ。シノキ属 - マテバシ属は 17 ～ 87% の産出率を示すが、No.163 と No.166 では産出率が低い。No.163 と No.166 では、代わりにコナラ属コナラ亜属の産出が多く、No.163 では 64%、No.166 では 31% の産出率を示す。コナラ属コナラ亜属は、他の試料では 1% ～ 20% の産出率を示すが、1306SI の試料 (No.184、No.186、No.187) では産出率が若干低い傾向にある。その他の樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属やクリ属、トチノキ属、トネリコ属などの産出が全体的に目立ち、いずれも数% ～ 数十% の産出率を示す。

草本花粉は全体的に産出が少なく、産出花粉胞子総数に対する割合も低い。

#### 4. 考察

今回の分析試料は、草本花粉の産出が少なかった。分析試料採取地点の周辺は、竪穴建物跡や炉跡などが検出されており、人間活動の痕跡が色濃く残る場所である。こうした生活空間では、雑草類などが繁茂していたとは考え難く、草本植生の乏しい場所であったと推測されるため、分析試料から産出する花粉化石群集には、ごく近辺に生育していた草本類由来の花粉はそれほど含まれておらず、遺跡周辺に分布している樹木から飛来した樹木花粉が多く含まれていると考えられる。また、堆積場が生活空間であれば、花粉が空気に晒される機会が多くなると予測され、花粉は酸化的

環境においては分解、消失してしまうために、いくつかの分析試料においては十分な量の花粉化石が得られなかったと思われる。以下では、得られた花粉化石群集から縄文時代中期後半～縄文時代後期初頭の古植生について検討する。

ほとんどの試料において、シノキ属 - マテバシ属が優勢であるため、縄文時代中期後半～縄文時代後期初頭には遺跡周辺の山地などにシノキ属 - マテバシ属を主体とした照葉樹林が広がっていたと思われる。その照葉樹林にはコナラ属アカガシ亜属も混じっていたであろう。また、照葉樹林の途切れた場所や遺跡が立地する段丘面上などの開けた明るい場所には、コナラ属コナラ亜属やクリ属などの陽樹が分布していたと考えられる。さらに、寒挾川流域などの河畔にはトチノキ属が、河岸周辺や低地などの湿地的環境にはトネリコ属が分布していたと思われる。No.176 や No.163、No.180、No.184 で産出したミツガシワ属は、こうした湿地的環境に生育していたと思われる。

こうした中、コナラ属コナラ亜属については産出率の変動が大きく、No.163 と No.166 では著しい産出率を示す。他の試料ではコナラ属コナラ亜属の多産は確認できないため、一時的な現象と考えられ、縄文時代中期末～後期以降の一時期には、人為的かあるいは自然発生的な要因で遺跡周辺においてコナラ属コナラ亜属が分布を広げた可能性がある。さらには、縄文時代中期後半～末の 1306SI (No.184、No.186、No.187) では、他の試料に比べるとコナラ属コナラ亜属の産出率がやや低い。縄文時代中期後半～末にはコナラ属コナラ亜属の分布が縮小していたか、あるいは遺構の相違による堆積環境の相違が花粉組成に影響している可能性などが考えられる。

表9 産出した花粉孢子一覽表

学名	和名	試料 No.																										
		171	182	172	173	174	175	176	177	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	178	179	180	181	183	184	185	186	187
樹木																												
<i>Podocarpus</i>	マキ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Abies</i>	モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Tsuga</i>	ツガ属	-	3	1	-	-	-	-	-	1	6	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属楕椎管束亜属	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	-	2	2	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	2	2	1	1	-	-	1	-	-	3	-	-	1	-	-	4	1	-	2	-	-	-	-	-	2	4	
Taxaceae - Cephalotaxaceae - Cupressaceae		-ヒノキ科																										
<i>Pterocarya</i> - <i>Juglans</i>	サウグルミ属-クルミ属	-	1	1	-	1	-	2	1	-	-	7	-	1	4	1	-	-	2	1	3	1	-	3	-	-	-	-
<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	-	-	-	1	-	1	4	2	5	3	-	1	-	1	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	1	2
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	4	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	-	17	41	35	15	8	16	37	28	32	3	128	3	1	41	5	1	-	37	26	31	40	2	16	11	8	3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1	11	7	3	13	3	5	7	21	15	-	8	-	20	-	2	-	15	9	7	14	-	5	7	4	4	
<i>Castanea</i>	クリ属	-	12	17	18	28	32	25	33	10	30	1	8	2	-	7	10	20	4	29	46	12	20	-	18	4	20	14
<i>Castanopsis</i> - <i>Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	3	142	111	118	133	145	124	104	106	86	-	33	2	-	43	-	-	-	103	101	117	133	1	159	10	156	176
<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	-	1	-	-	-	-	1	-	3	1	1	-	-	-	3	-	1	1	3	1	3	1	-	1	1	1	-
<i>Celtis</i> - <i>Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Phellodendron</i>	キハダ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ilex</i>	モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Celastraceae		ニシキギ科																										
<i>Acer</i>	カエデ属	-	2	-	1	1	-	1	1	2	-	6	1	-	3	-	1	-	2	-	2	1	-	-	-	-	-	-
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	-	10	6	26	7	2	10	12	13	-	-	1	-	3	-	1	1	6	15	11	3	-	7	2	6	3	
<i>Vitis</i>	ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Araliaceae		ウコギ科																										
Ericaceae		ツツジ科																										
<i>Styrax</i>	エゴノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	2	14	4	8	7	18	8	18	6	-	6	-	4	-	1	1	5	3	10	-	-	-	-	-	-	-
<i>Trachelospermum</i>	テイカカズラ属	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Callicarpa</i>	ムラサキシキブ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本																												
Gramineae		イネ科																										
Moraceae		クワ科																										
Chenopodiaceae - Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科																										
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Brassicaceae		アブラナ科																										
Rosaceae		バラ科																										
Leguminosae		マメ科																										
Apiaceae		セリ科																										
<i>Menyanthes</i>	ミツガシワ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	-	2	5	-	-	-	1	-	3	2	-	5	-	-	3	7	1	19	5	1	2	1	5	3	1	3	
Tubuliflorae		クキ亜科																										
Liguliflorae		タンポポ科																										
シダ植物																												
monolet type spore		単条溝孢子																										
trilete type spore		三条溝孢子																										
Arboreal pollen																												
Nonarboreal pollen		樹木花粉																										
Spores		草本花粉																										
Total Pollen & Spores		花粉・孢子総数																										
unknown																												
不明																												

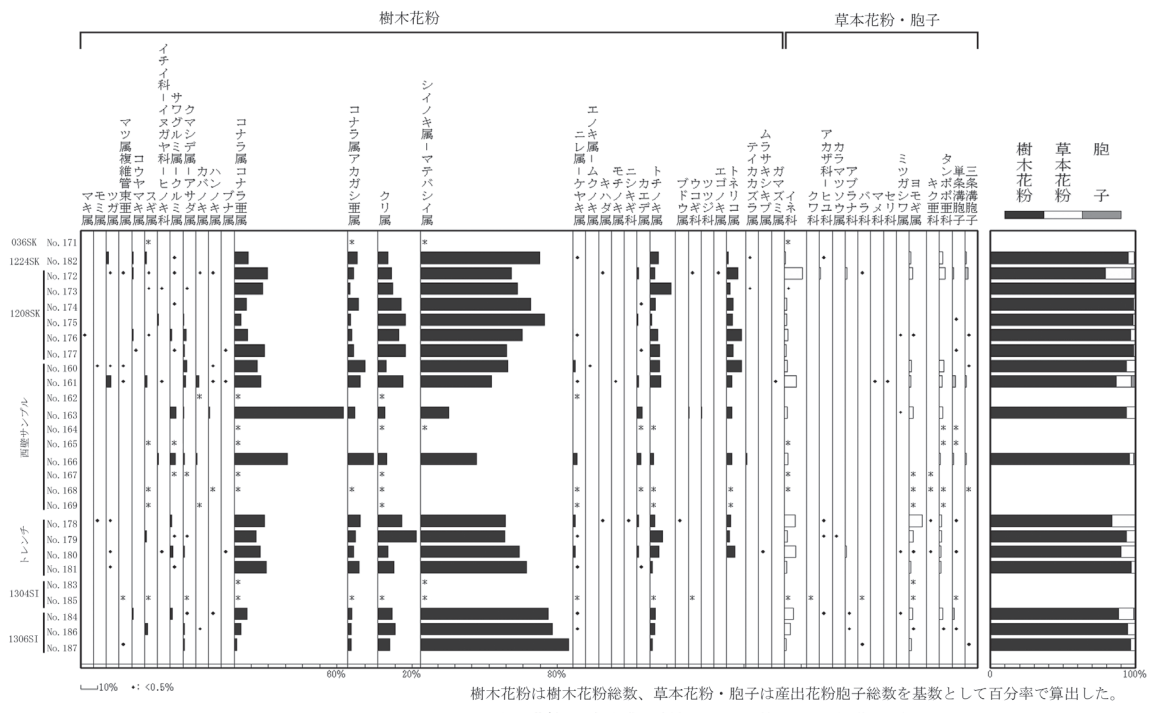
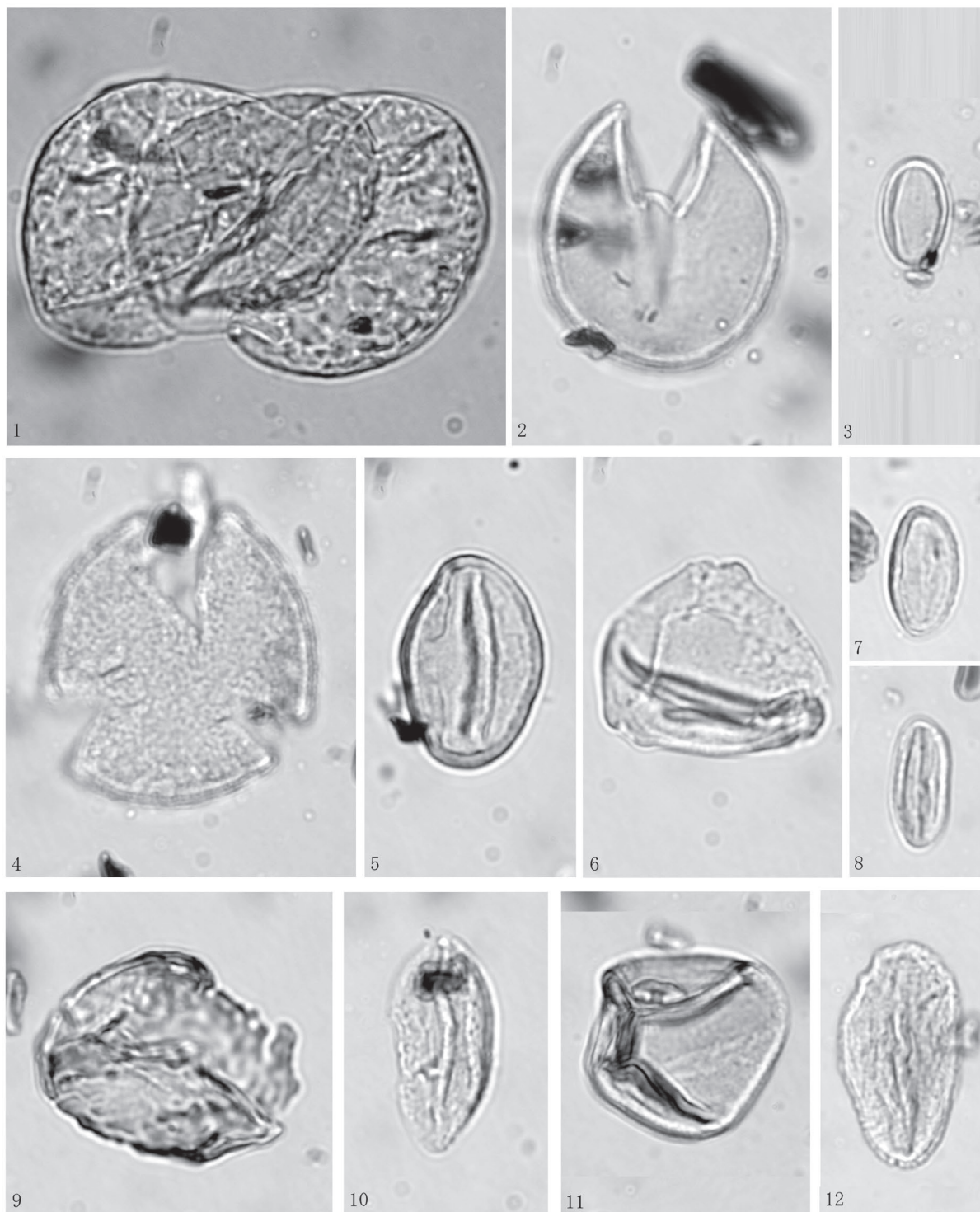


図 146 西地・東地遺跡における花粉分布図



- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| 1. マキ属 (PLC.1881)            | 2. スギ属 (PLC.1882)            |
| 3. クリ属 (PLC.1883)            | 4. コナラ属コナラ亜属 (PLC.1884)      |
| 5. コナラ属アカガシ亜属 (PLC.1885)     | 6. クマシデ属 - アサダ属 (PLC.1886)   |
| 7. シイノキ属 - マテバシイ属 (PLC.1887) | 8. シイノキ属 - マテバシイ属 (PLC.1888) |
| 9. ニレ属 - ケヤキ属 (PLC.1889)     | 10. トチノキ属 (PLC.1890)         |
| 11. イネ科 ((PLC.1891)          | 12. ミツガシワ属 PLC.1892)         |

0.02mm

図 147 西地・東地遺跡 (No.176) から産出した花粉化石

## 第2節 出土炭化材の樹種同定

小林克也(パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

愛知県設楽町の西地・東地遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(第5節 放射性炭素年代測定を参照のこと)。

### 2. 試料と方法

試料は、不明遺構である029SXから3点、土坑である204SKと303SKから各1点の、計5点で、いずれも16区である。時期については、放射性炭素年代の結果、029SXの試料No.1～3は鎌倉時代～平安時代、204SKの試料No.5と303SKの試料No.7は縄文時代後期初頭の暦年代を示した。確認できる試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は、試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)にて検鏡および写真撮影を行なった。

### 3. 結果

同定の結果、針葉樹のカヤ1分類群と、広葉樹のコナラ属コナラ節(以下、コナラ節)1分類群の、計2分類群がみられた。コナラ節が3点、カヤが1点で、他に試料が微細で針葉樹までしか同定が行えなかった試料が1点みられた。同

定結果を表9に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 図148 1a-1c(No.5)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1～5細胞高である。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1分野に2～4個みられる。また、仮道管の内壁には2本1対のらせん肥厚がみられる。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で、水湿によく耐える。

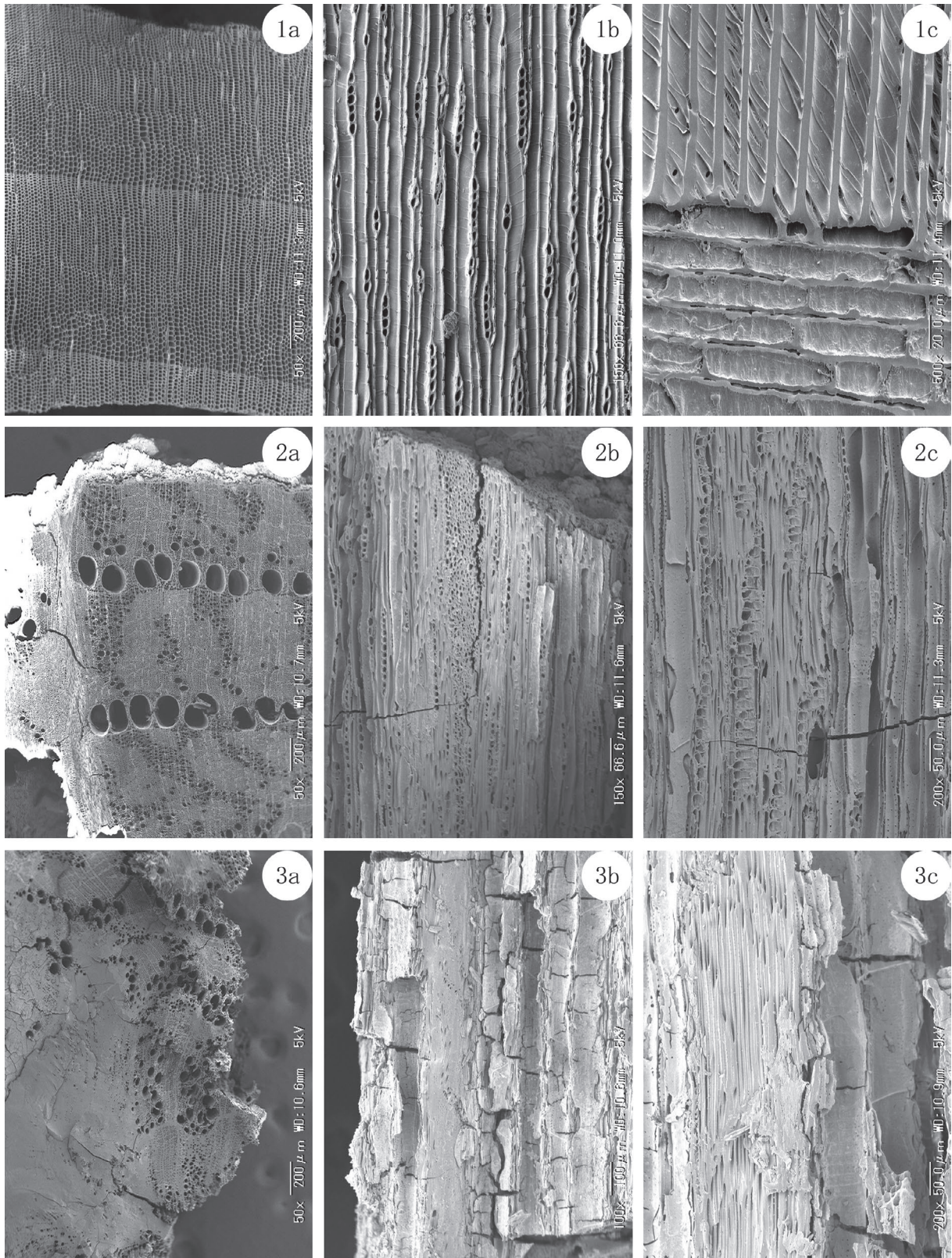
(2) 針葉樹 Coniferous-wood

仮道管と放射組織で構成される針葉樹であるが、微細な試料で、横断面しか確認ができなかった。そのため、針葉樹までの同定に留めた。

(3) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図148 2a-2c(No.1)、3a-3c(No.2)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靱で、切削加工はやや難しい。



1a-1c. カヤ (No.5)、2a-2c. コナラ属コナラ節 (No.1)、3a-3c. コナラ属コナラ節 (No.2)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

図 148 西地・東地遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

#### 4. 考察

204SK から出土した炭化材はカヤ、303SK から出土した炭化材は針葉樹であった。いずれも時期は縄文時代後期初頭である。用途については、不明である。カヤは西地・東地遺跡周辺にも生育可能な樹種であり、遺跡周辺に生育していたカヤを伐採利用していたと考えられる。

鎌倉時代～室町時代頃の 029SX から出土した炭化材は、いずれもコナラ節であった。用途については不明であるが、西地・東地遺跡では中世頃に野鍛冶が行われており、製鉄に関連する炭化材である可能性も考えられる。コナラ節は燃料材としてみると、長時間燃焼し続けるという材質をもち、薪炭材として多く利用されている樹種である(伊東ほか 2011)。遺跡周辺に生育していたコナ

表 10 西地・東地遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	グリッド	遺構	遺物 No.	種類	樹種	残存半徑 (cm)	残存年輪数	年代測定番号
1	530365	029SX	d-0069	炭化材	コナラ属 コナラ節	1.1	8	PLD-36165
2	530365	029SX	d-0072	炭化材	コナラ属 コナラ節	0.5	9	PLD-36166
3	530365	029SX	d-0093	炭化材	コナラ属 コナラ節	-	-	PLD-36167
5	530365	204SK	d-1339	炭化材	カヤ	2.2	21	PLD-36169
7	535355	303SK	d-1675	炭化材	針葉樹	-	-	PLD-36171

ラ節を伐採利用していたと考えられる。

#### 引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 (2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社.  
伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学―出土木製品用材データベース―, 449p, 海青社.

### 第 3 節 植物遺体

バンドリ スダルシャン・佐々木由香 (パレオ・ラボ)

#### 3-1. 14B 区植物遺体

##### 1. はじめに

西地・東地遺跡は、愛知県北設楽郡設楽町に所在し、寒狭川左岸の山から伸びる傾斜地および河岸段丘上に立地する、縄文時代と中世～近世の集落遺跡である。ここでは、縄文時代後期初頭と中世～近世前半の遺構から出土した大型植物遺体の同定結果を報告し、食用などとして利用された植物、遺跡周辺における栽培状況や植生について検討する。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている (第 5 節 放射性炭素年代測定を参照のこと)。

##### 2. 試料と方法

試料は、堆積物 9 試料である。試料が採取さ

れた遺構は、14B 区の炉跡 0081SK と 0115SK、0393SK、袋状土坑 1208SK、土坑 1216SK と 1277SK、竪穴建物跡 1305SI と 1306SI、炉跡 1306SL である。遺構の時期は、1208SK、1216SK、1277SK、1305SI、1306SI、1306SL が縄文時代後期初頭、0081SK、0115SK、0393SK が中世～近世前半と推定されている。

土壌の採取から水洗までの作業は、パレオ・ラボで行った。水洗方法は、最小 1.0mm 目の篩を用いて水洗選別し、植物遺体を回収した。水洗前の堆積物の重量 (g) は、表を参照されたい。大型植物遺体の同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。

表 11 西地・東地遺跡から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

分類群	調査区	14B1			14B2					
	グリッド	5234	5235		-	5335	-	5034	5134	5134
	遺構名	0081SK	0115SK	0393SK	1208SK	1216SK	1277SK	1305SI	1306SI	1306SL
	時期	中世～近世前半			縄文時代後期初頭					
	重量 (kg)	9.42	18.31	12.16	15.86	3.21	14.59	3.83	8.47	4.14
キイチゴ属	炭化核							(2)		
ケヤキ	果実	22					1	1		
サンショウ	種子					1				
ミズキ	炭化核							1		
ヒエ	炭化種子			1						
アワ	炭化有ふ果			1						
	炭化種子			4						
エノコログサ属	有ふ果						1(1)			
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子			1						
エノキグサ属	種子		1	1						
同定不能	炭化種実			(1)				(1)		
スギナ近似種	無性芽				2					2
虫えい	炭化		1							
子嚢菌	炭化子嚢			2				1	1	
不明	昆虫遺体								(+)	

計数が困難な分類群については、記号 (+) で示した。試料は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、木本植物ではキイチゴ属炭化核とケヤキ果実、サンショウ種子、ミズキ核の 4 分類群、草本植物ではヒエ炭化種子（穎果）とアワ炭化有ふ果・炭化種子（穎果）、エノコログサ属有ふ果、ササゲ属アズキ亜属炭化種子、エノキグサ属種子の 5 分類群、シダ植物ではスギナ近似種無性芽 1 分類群の、計 10 分類群が得られた（表 10）。科以上の細分に必要な識別点が残存していない一群を、同定不能炭化種実とした。種実以外には、炭化した虫えいと子嚢菌、不明の昆虫遺体が見られたが、同定の対象外とした。

以下、産出した大型植物遺体について遺構別に記載する（同定不能炭化種実を除く）。

0081SK：少量のケヤキが得られた。

0115SK：エノキグサ属がわずかに得られた。

0393SK：ヒエとアワ、ササゲ属アズキ亜属、エノキグサ属がわずかに得られた。

1208SK：スギナ近似種がわずかに得られた。

1216SK：サンショウがわずかに得られた。

1277SK：ケヤキとエノコログサ属がわずかに得られた。

1305SI：キイチゴ属とケヤキ、ミズキがわずかに得られた。

1306SI：同定可能な種実 は得られなかった。

1208SL：スギナ近似種がわずかに得られた。

次に、得られた分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG III リストの順とした。

(1) キイチゴ属 *Rubus* spp. 炭化核 バラ科

完形ならば、上面観は幅広の両凸レンズ形、側面観は先端が湾曲した腎形。表面には不定形な多角形状の稜による網目状隆線がある。残存長 1.3mm、残存幅 0.9mm。

(2) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino 果実 ニレ科

暗褐色で、上下につぶれた半球形の果実。着点から脈状の隆線が伸びる。長さ 3.2mm、幅 3.2mm、厚さ 2.7mm。

(3) サンショウ *Zanthoxylum piperitum* (L.) DC. 種子 ミカン科

黒色で、上面観は卵形、側面観は倒卵形。基部側面に稜線があり、内側には短く斜め下を向く臍がある。網目状隆線は低く、細かい。種皮は厚く、硬い。長さ 3.5mm、幅 2.8mm、厚さ 2.7mm。

(4) ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. ex Prain 炭化核 ミズキ科

楕円形～ゆがんだ球形。基部に裂けたような大きな着点がある。種皮は厚くやや軟らかい。縦

にやや流れるような深い溝と隆起が走る。長さ 3.7mm、幅 4.3mm、厚さ 3.8mm。

(5) ヒ エ *Echinochloa esculenta* (A.Braun) H.Scholz 炭化種子 (穎果) イネ科

側面観は卵形、断面は片凸レンズ形で、厚みは薄く、やや扁平である。胚は幅が広く、長さが全長の 2/3 程度と長い。種子は、長さ 1.5mm、幅 1.2mm。

(6) アワ *Setaria italica* P.Beauv. 炭化有ふ果・炭化種子 (穎果) イネ科

有ふ果は紡錘形。内穎と外穎に独立した微細な乳頭状突起がある。長さ 1.4mm、幅 1.2mm。種子 (穎果) の上面観は楕円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、長さは全長の 2/3 程度。種子は、長さ 1.4mm、幅 1.4mm。

(7) エノコログサ属 *Setaria* spp. 有ふ果 イネ科

淡い黄色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形で、先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。長さ 2.6mm、幅 1.9mm。

(8) ササゲ属 アズキ亜属 *Vigna* subgenus *Ceratotropis* sp. 炭化種子 マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍は残存していない。小畑 (2008) に示された現生種と大きさを比較すると、栽培種と野生種の両方の可能性がある大きさである。長さ 5.2mm、幅 3.7mm、厚さ 3.6mm。

(9) エノキグサ属 *Acalypha* spp. 種子 トウダイグサ科

黒色で、上面観は円形、側面観は倒卵形。表面には細かい網目状隆線があり、ざらつく。種皮は断面が柵状で、薄く硬い。長さ 1.7mm、幅

1.2mm。

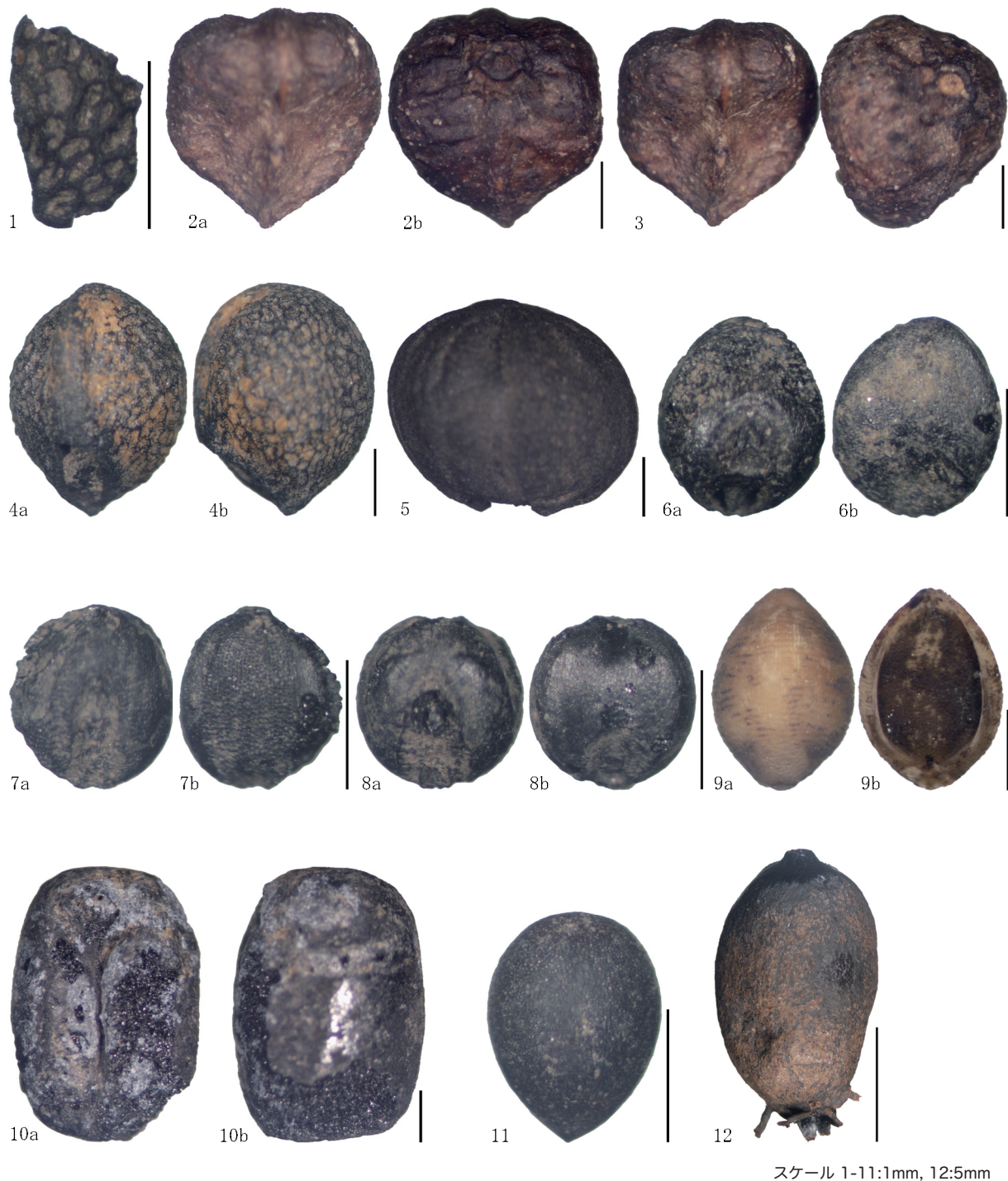
(10) スギナ近似種 c.f. *Equisetum arvense* L. 無性芽 トクサ科

養分を蓄え、肥大した地下茎。上面観は円形、側面観は楕円形。頂部がやや突出し、下部は地下茎につながる。表面に微細な網目模様がある。長さ 12.8mm、幅 7.3mm。

#### 4. 考察

西地・東地遺跡の 14B2 区の遺構の推定時期は、縄文時代後期初頭である。ただし、竪穴建物跡 1305SI から得られたミズキ核 (PLD-36173) は、縄文時代前期前半に相当する暦年代を示した。14B2 区の遺構からは、食用として利用可能な野生植物のキイチゴ属とサンショウ、ミズキが得られた。土坑 1277SK と竪穴建物跡 1305SI からは、落葉高木のケヤキが得られた。土坑 1216SK から出土したサンショウは、油や薬用などに利用された可能性もある。ミズキは、香辛料としての利用方法が想定されている (辻ほか, 2006)。エノコログサ属は、大きさと形状から判断して、野生種の可能性が高い。土坑 1208SK と炉跡 1306SL から出土したシダ植物のスギナ近似種の無性芽は地下茎に形成される部位のため、新しい時期からの混入の可能性はある。

一方、14B1 区の遺構の推定時期は、中世～近世前半である。炉跡 3 基から回収された炭化種実を検討したところ、炉跡 0393SK から畑作物のヒエとアワが得られた。炉跡 0393SK から出土したササゲ属アズキ亜属には栽培種と野生種が含まれるが、種実の形態と大きさからはどちらかの判断はできない。放射性炭素年代測定の結果、ササゲ属アズキ亜属炭化種子 (PLD-36174) は室町時代の暦年代を示した。



1. キイチゴ属炭化核 (1305SI)、2. ケヤキ果実 (0081SK)、3. ケヤキ果実 (0081SK、PLD-36172)、4. サンショウ種子 (1216SK)、5. ミズキ炭化核 (1305SI、PLD-36173)、6. ヒエ炭化種子 (0393SK)、7. アワ炭化有ふ果 (0393SK)、8. アワ炭化種子 (0393SK)、9. エノコログサ属有ふ果 (1277SK)、10. ササゲ属アズキ亜属炭化種子 (0393SK、PLD-36174)、11. エノキグサ属種子 (0393SK)、12. スギナ近似種無性芽 (1306SL)

図 149 西地・東地遺跡 14B 区から出土した大型植物遺体

那須ほか (2015) では、現生のヤブツルアズキとアズキの種子を乾燥・炭化・未成熟の状態  
で計測して簡易楕円体体積を比較した結果、簡  
易楕円体体積が 30mm<sup>3</sup> 以下は野生型、60～  
70mm<sup>3</sup> 以上は栽培型、栽培種と野生種のサイ  
ズが重なる中間の大きさのものは栽培種と野  
生種の間型とみなしている。今回得られた西  
地・東地遺跡のアズキ亜属炭化種子の簡易楕  
円体体積は 36.24mm<sup>3</sup> で、栽培種と野生種  
の両方の可能性がある。炉跡 0081SK から出  
土したケヤキ (PLD-36172) は、放射性炭素年  
代測定の結果から現生の種実と推定される。  
炉跡 0115SK と炉跡 0393SK から出土した  
エノキグサ属は草地に生育する草本植物で、  
偶発的に炭化して遺構に入り込んだ可能性  
がある。

### 3-2. 16 区炭化種実

#### 1. はじめに

ここでは、16 区の縄文時代後期初頭の貯  
蔵穴と鎌倉時代～室町時代の性格不明遺構  
から出土した大型植物遺体の同定を行い、  
当時の利用植物について検討した。なお、  
同一試料を用いて放射性炭素年代測定も  
行われている (第 5 節 放射性炭素年代測  
定を参照のこと)。

#### 2. 試料と方法

分析試料は、16 区の発掘調査中に肉眼  
で確認され、採取された種実 2 試料である。  
考古学的な所見によると、121SK は縄文  
時代後期初頭の貯蔵穴である。放射性炭  
素年代測定の結果、121SK から出土した  
種実 (No.d-1748:PLD-36168) は、2σ  
暦年代範囲で 2297-2191 cal BC (80.8%)  
および 2181-2142 cal BC (14.6%) で、  
縄文時代後期初頭～前葉に相当する暦年  
代を示した。

表 12 16 区から出土した炭化種実

分類群	取上げ番号	d-1748	d-1187
	グリッド	525370	535370
遺構名	121SK	211SX	
時期	縄文時代後期初頭	鎌倉時代～室町時代	
イチイガシ	炭化子葉	1	
イネ	炭化種子塊		≒ 339 <sup>*</sup> 2.47g

\*イネ炭化種子 10 点の重量 0.073g から換算した完形個体数

211SX から出土した種実 (No.d-1187:PLD-  
36170) は、2σ 暦年代範囲で 319-1351 cal  
AD (34.5%) および 1391-1425 cal AD (60.9%)  
で、鎌倉時代～室町時代の暦年代を示した  
(放射性炭素年代測定の結果を参照)。

種実の同定・計数は、肉眼および実体顕  
微鏡下で行った。試料は、愛知県埋蔵文  
化財センターに保管されている。

#### 3. 結果

同定の結果、試料は木本植物のイチイガ  
シ炭化子葉と、草本植物のイネ炭化種子  
塊であった (表 12)。以下に、産出した  
炭化種実について試料別に記載する。

121SK: イチイガシ炭化子葉が 1 点得  
られた。

211SX: イネ炭化種子塊が 1 点 (種子  
2.47g、塊から落ちた破片を含む) で、  
重量から求めた完形個体換算数は、339  
点であった。

次に、炭化種実の記載を示し、図版に  
写真を掲載して同定の根拠とする。なお、  
分類群の学名は米倉・梶田 (2003-) に  
準拠した。

(1) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 炭  
化子葉 ブナ科

楕円体～長楕円体、側面観は俵形。先  
端の突出はあまりない。縦方向に明瞭な  
溝が 1 本確認できた。高さ 13.9mm、幅  
8.5mm。

(2) イネ *Oryza sativa* L. 炭化種子 (穎  
果) イネ科

上面観が両凸レンズ形、側面観は楕  
円形。一

表 13 イネ炭化種子の大きさ 端に胚があった凹

	長さ	幅
211SX	5.0	2.6
	4.7	3.0
	4.1	2.6
	4.7	2.8
	4.4	2.5
	4.4	2.5
	4.3	2.7
	4.6	3.0
	4.4	2.6
	3.9	2.6
最小	3.9	2.5
最大	5.0	3.0
平均	4.5	2.7
標準偏差	0.3	0.2

(単位: mm)

みがあり、両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ4.4mm、幅2.5mm (図 150-3)。計測可能な種子10点の大きさは、長さ3.9～5.0 (平均4.5 ± 0.3) mm、幅2.5～3.0 (平均2.7 ± 0.2) mm (表 13)。塊の大きさは、長軸22.5mm、短軸24.4mm、残存厚14.9mm。

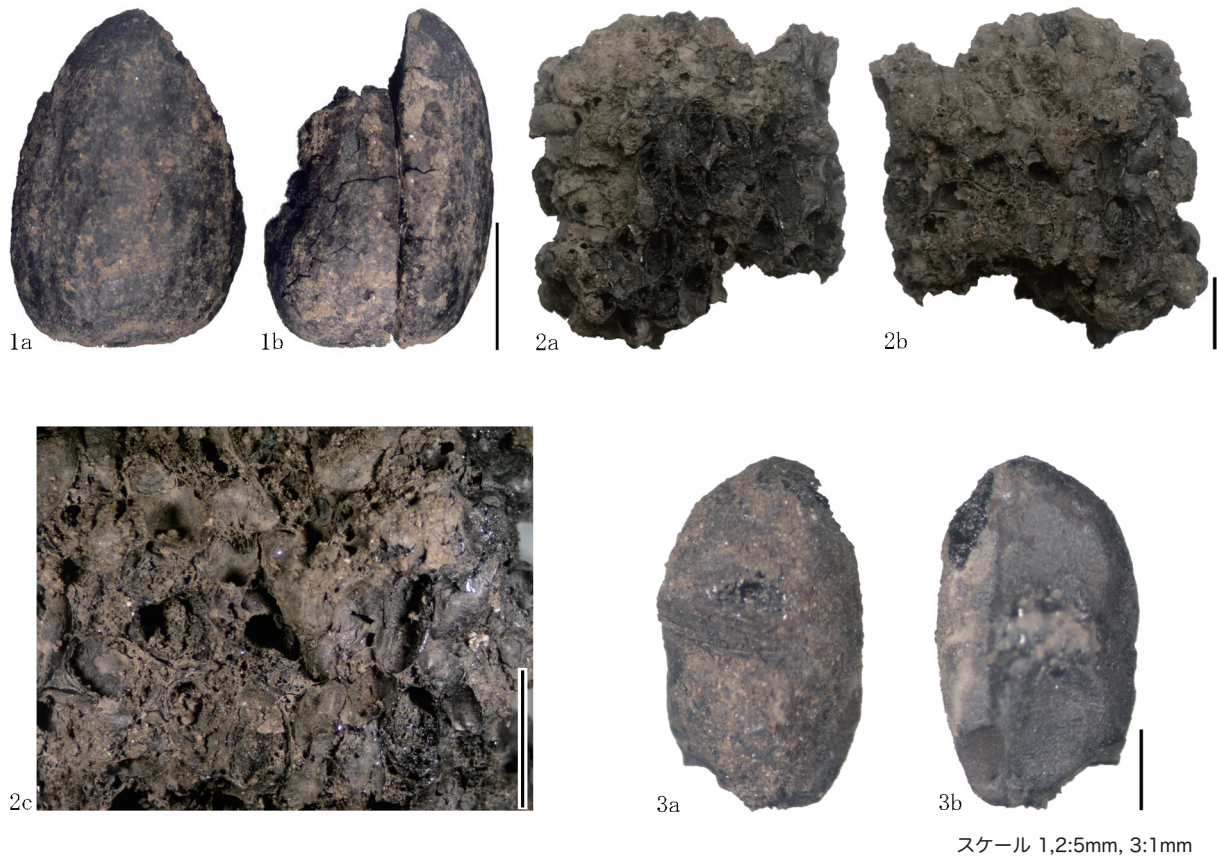
#### 4. 考察

縄文時代後期初頭の貯蔵穴 121SK から出土

した炭化種実1点を同定した結果、野生植物で落葉高木のイチイガシであった。イチイガシは生食可能で、縄文時代の常緑広葉樹林帯では最もよく利用されているドングリ類である (小畑, 2011)。

鎌倉時代～室町時代の211SXから出土したのは、栽培植物のイネ炭化種子塊であった。塊内には籾はなく、炭化種子 (いわゆるコメ) のみで構成されており、籾摺り後の状態であったと考えられる。

今回検討したのは肉眼で確認され、取り上げられた炭化種実で、遺存状態も良好であった。今後、土壌中に含まれる微細な種実もあわせて検討すれば、当時の食生活や周辺の植生について、より具体的に明らかにできると考えられる。



1. イチイガシ炭化子葉 (121SK, No.d-1748, PLD-36168)、2. イネ炭化種子塊 (211SX, No.d-1187)、3. イネ炭化種子 (211SX, No.d-1187, PLD-36170)

図 150 西地・東地遺跡 16 区から出土した炭化種実

## 引用文献

那須浩郎・会田 進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・興石 甫 (2015) 炭化種実資料からみた長野県諏訪地方における縄文時代中期のマメの利用. 資源環境と人類, 5: 37-52, 明治大学黒耀石研究センター.

小畑弘己 (2008) マメ科種子同定法. 小畑弘己編「極東先史古代の穀物 3」: 225-252, 熊本大学.

小畑弘己 (2011) 東北アジア古民族植物学と縄

文農耕. 309p, 同成社.

辻 圭子・辻 誠一郎・南木睦彦 (2006) 青森県三内丸山遺跡の縄文時代前期から中期の種実遺体群と植物利用. 植生史研究, 特別第2号, 101-120, 日本植生史学会.

米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

## 第4節 人骨と土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比分析

山形秀樹・中村賢太郎 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

西地・東地遺跡より発掘された人骨を対象として食性を推定するために、土器付着炭化物を対象として煮炊き内容物を推定するために、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、コラーゲンへの外来炭素起源汚染のチェック用に炭素含有量と窒素含有量を測定して試料の C/N 比 (原子数比) を求めた。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている (第5節 放射性炭素年代測定を参照)。

### 2. 試料および方法

試料は、人骨6点、土器付着炭化物6点の計12点であり、試料番号として放射性炭素年代測定の測定番号を用いている。

測定を実施するにあたり、超音波洗浄とアセトン洗浄を施して表面に付着した汚れを除去した後、人骨についてはコラーゲンを抽出し、土器付着炭化物については酸・アルカリ・酸洗浄を行っ

た後、それを用いて測定を行った。

炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA (ガス化前処理装置) である Flash EA1112 (Thermo Fisher Scientific 社製) を用いた。スタンダードは、アセトニトリル (キシダ化学製) を使用した。

炭素同位体比 ( $\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$ ) の測定には、質量分析計 DELTA V (Thermo Fisher Scientific 社製) を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比では IAEA Sucrose (ANU)、窒素安定同位体比では IAEA N1 を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させた。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムで  $\text{CO}_2$  と  $\text{N}_2$  を分離し、TCDでそれぞれ検出・定量を行った。この時の炉および分離カラムの温

度は、燃焼炉温度 1000°C、還元炉温度 680°C、分離カラム温度 45°C である。得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいて C/N 比（原子数比）を算出した。分離した CO<sub>2</sub> および N<sub>2</sub> はそのまま He キャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

### 3. 結果

表 14 に、試料情報と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N 比を示す。

一般的に骨のコラーゲンの C/N 比は 2.9 ~ 3.6 の間に収まる (DeNiro, 1985)。人骨から抽出したコラーゲンの C/N 比は、6 点ともこの範囲を越える高い値であり、コラーゲンの劣化や外部炭素による汚染の疑いがある。したがって、人骨 6 点については考察の対象から除外する。

土器附着炭化物について、図 151 に炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、図 152 に炭素安定同位体比と C/N 比の関係を示した。

### 4. 考察

土器外面に附着した炭化物 3 点 (PLD-36204・36205・36207) は、図 151 と図 152 において C3 植物およびその周辺にプロットされ、主に C3 植物に由来すると推定される。外面に附着した状況と合わせて考えると、土器使用時に燃料とされた木材の煤が附着したと考えられる。

土器内面に附着した炭化物 3 点 (PLD-36202・36203・36210) は、図 151 と図 152 において、C3 植物あるいは草食動物の範囲にプロットされ、主に C3 植物あるいは草食動物に由来すると推定される。内面に附着した状況と合わせて考えると、土器を用いて C3 植物あるいは草食動物が調理さ

表 14 結果一覧表

試料番号	遺跡情報	試料情報	$\delta^{13}\text{C}_{\text{POB}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$ (‰)	炭素含有量 (‰)	窒素含有量 (‰)	C/N 原子数比
PLD-36196	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 0341SZ	ヒト頭蓋骨 (後頭骨)	-19.5	10.2	31.8	9.40	3.95
PLD-36197	調査区: 4KNJ14B 遺構: 0341SZ	ヒト脛骨? (左右不明)	-19.6	12.8	20.1	3.64	6.44
PLD-36198	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 0342SZ	ヒト頭蓋骨	-20.3	10.9	12.8	2.19	6.82
PLD-36199	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 0343SZ	ヒト脛骨 (左右不明)	-19.3	11.8	33.6	8.27	4.74
PLD-36200	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 0342SZ	ヒト大腿骨? (左右不明)	-18.8	12.2	22.8	5.21	5.10
PLD-36201	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 0343SZ	ヒト頭蓋骨	-19.5	12.5	13.3	2.70	5.74
PLD-36202	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 1265SK 登録番号: E-0097	土器附着炭化物 (胴部内面)	-24.3	4.18	8.80	0.983	10.4
PLD-36203	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 1332SK 登録番号: E-0031	土器附着炭化物 (胴部内面)	-27.1	3.14	37.9	2.87	15.4
PLD-36204	調査区: 4KNJ16 遺構: 0295X 取上 d-0101 登録番号: E-0437	土器附着炭化物 (口縁部外面)	-24.8	8.75	46.0	2.26	23.7
PLD-36205	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 1224SK 整理番号: 1697	土器附着炭化物 (胴部外面)	-25.5	9.78	50.2	3.13	18.7
PLD-36207	調査区: 4KNJ16 遺構: 1545K 取上 d-1271 登録番号: E-0367	土器附着炭化物 (口縁部外面、把手)	-25.8	8.05	17.9	1.17	17.8
PLD-36210	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 0365K 取上 d-1803 登録番号: E-0103	土器附着炭化物 (口縁部内面)	-26.4	3.20	32.4	3.50	10.8

れたと考えられる。

### 引用・参考文献

- DeNiro, M. J. (1985) Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to paleodietary reconstruction. *Nature* 317: 806-9.
- 赤澤 威・南川雅男 (1989) 炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元, 田中 琢・佐原 眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしただか」: 132-143, クバプロ.
- Ambrose, S. H. (1993) Isotopic analysis of paleodiet: methodological and interpretive considerations. In: Sandford MK, editor. *Investigations of ancient human tissue: chemical analysis in anthropology*. Langhorne: Gordon and Breach. 59-130.
- 米田穰 (2014) 炭素・窒素安定同位体比分析.

小竹貝塚発掘調査報告—北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 X— (第三分冊人骨分析編), 16-23, 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所.

吉田邦夫・宮崎ゆみ子 (2007) 煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究. 平成 16-18 年度科学研究

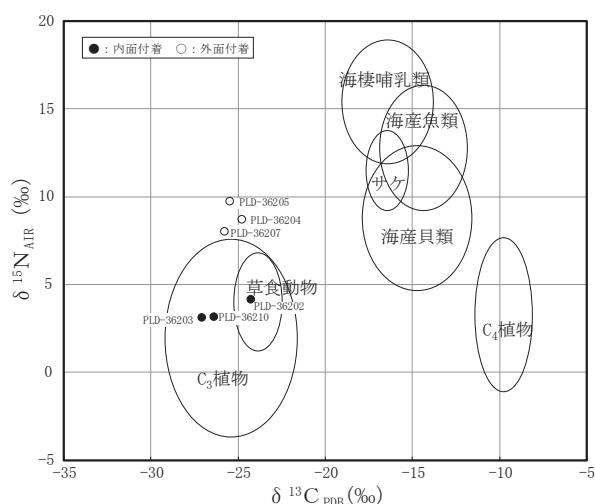


図 151 土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比 (吉田・西田 (2009) に基づいて作製)

補助金基礎研究 B (課題番号 16300290) 研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」, 85-95.

吉田邦夫・西田泰民 (2009) 考古科学が探る火炎土器. 新潟県立歴史博物館編「火焰土器の国新潟」: 87-99, 新潟日報事業社.

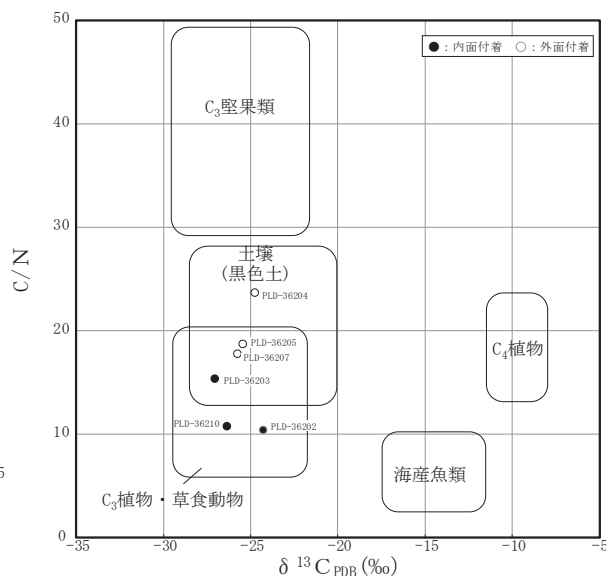


図 152 土器付着炭化物の炭素安定同位体比と C/N 比の関係 (吉田・西田 (2009) に基づいて作製)

## 第 5 節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・小林克也・中村賢太郎

### 1. はじめに

愛知県北設楽郡設楽町に位置する西地・東地遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と方法

#### a. 土器付着炭化物

試料は、14B1 区のグリッド 5335 から出土した深鉢 (登録番号 732) の胴部外面付着炭化物

(PLD-29196)、深鉢 (登録番号 258) の胴部外面付着炭化物 (PLD-29197)、14B1 区の 184SK から出土した深鉢 (登録番号 320) の胴下部内面付着炭化物 (PLD-29198)、14B2 区の 036SK から出土した深鉢 (登録番号 122) の胴部内面付着炭化物 (PLD-29199)、14B2 区の 1216SK から出土した深鉢 (登録番号 341) の胴部内面付着炭化物 (PLD-29200)、14B2 区の 1224SK から出土した深鉢 (登録番号 234) の胴部外面付着炭

化物 (PLD-29201)、グリッド 5436 の 1278SK から出土した深鉢 (登録番号 78) の胴上部外面付着炭化物 (PLD-29202)、14B2 区の 1265SK から出土した土器 (登録番号 97) の胴部内面付着炭化物 (PLD-36202)、14B2 区の 1332SK から出土した土器 (登録番号 31) の胴部内面付着炭化物 (PLD-36203)、16 区の 029SX から出土した土器 (登録番号 437) の口縁部外面付着炭化物 (PLD-36204)、14B2 区の 1224SK から出土した土器 (登録番号 234) の胴部外面付着炭化物 (PLD-36205)、同じく 1224SK から出土した土器 (登録番号 234) の胴部外面付着炭化物 (PLD-36206)、16 区の 154SK から出土した土器 (登録番号 367) の口縁部外面の把手に付着した炭化物 (PLD-36207)、14B2 区の 036SK から出土した土器 (登録番号 103) の口縁部外面付着炭化物 (PLD-36210) の計 14 点である。なお、登録番号 341 (PLD-29200) は縄文時代後期後葉、それ以外の土器は縄文時代後期初頭と考えられている。また、PLD-36202～36205・36207・36210 の 6 点については、別項にて炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素窒素比の測定を行っている。

### b. 炭化材・炭化種実

試料は、不明遺構である 16 区 029SX から出土した炭化材 3 点 (試料 No.1 : PLD-36165、試料 No.2 : PLD-36166、試料 No.3 : PLD-36167)、土坑である 121SK から出土した炭化種実 1 点 (試料 No.4 : PLD-36168)、204SK から出土した炭化材 1 点 (試料 No.5 : PLD-36169)、211SX から出土した炭化種実 1 点 (試料 No.6 : PLD-36170)、303SK から出土した炭化材 1 点 (試料 No.7 : PLD-36171) の、計 7 点である。炭化材である試料 No.1、2 では最終

形成年輪が残っていたが、試料 No.3、5、7 は最終形成年輪が残っていなかった。

### c. 生の種実

試料は、14B1 区の土坑である 0081SK から出土した生の種実 (ケヤキ果実) 1 点 (試料 No.9 : PLD-36172)、土坑である 0393SK から出土した炭化種実 (ササゲ属アズキ亜属種子) 1 点 (試料 No.154 : PLD-36174)、14B2 区から出土した住居跡である 1305SI から出土した炭化種実 (ミズキ核) 1 点 (試料 No.122 : PLD-36173) の、計 3 点である。

### d. 人骨

試料は、14B 区で調査された、近世土坑墓 341SZ・342SZ・343SZ から出土した人骨 3 体から 2 点ずつ採取された計 6 点の骨片 (PLD-36196～36201) である。同試料を用いて、別項において、炭素・窒素安定同位体比分析も実施した。

測定試料の情報、調製データは表 15 のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後  $^{14}\text{C}$  年代、暦年代を算出した。

## 3. 結果

表 16 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代について、図 153・154 に暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正

曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730 \pm 40$ 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13、1950年以降の試料についてはPost-bomb atmospheric NH<sub>2</sub>)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

#### 4. 考察

以下、 $2\sigma$ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。なお、縄文時代の土器編年と暦年代との対応関係については、石田(2008)、小林(2008)、工藤(2012)、増子(2008)、山下(2008)を参照した。

#### a. 土器付着炭化物

登録番号78の付着炭化物(PLD-29202)は2570-2515 cal BC(34.2%)、2501-2440 cal BC(54.0%)、2420-2404 cal BC(2.8%)、2379-2349 cal BC(4.5%)で、紀元前2570～2340年頃の暦年代を示した。一方、登録番号234の付着炭化物(PLD-29201)は2479-2338 cal BC(93.5%)および2322-2309 cal BC(1.9%)、登録番号320の付着炭化物(PLD-29198)は2476-2336 cal BC(92.9%)および2323-2307 cal BC(2.5%)、登録番号122の付着炭化物(PLD-29199)は2476-2336 cal BC(92.6%)および2323-2307 cal BC(2.8%)、登録番号258の付着炭化物(PLD-29197)は2476-2337 cal BC(92.8%)および2323-2308 cal BC(2.6%)、登録番号732の付着炭化物(PLD-29196)は2471-2336 cal BC(91.4%)および2323-2307 cal BC(4.0%)で、紀元前2480～2300年頃の暦年代を示した。これらの暦年代は縄文時代後期前葉に相当する。調査所見によれば、これらの土器は縄文時代後期初頭と考えられており、測定結果と調和的である。

登録番号341の付着炭化物(PLD-29200)は1220-1056 cal BC(95.4%)で、紀元前1220～1050年頃の暦年代を示した。これは縄文時代晩期前半に相当する。発掘調査所見によれば、この土器は縄文時代後期後半と考えられており、付着炭化物の方が土器の時期よりも新しい暦年代を示した。測定した土器付着炭化物に土壌が混入しており、測定結果が新しく出た可能性がある。

14B2区の1265SKから出土した土器(登録番号97)の胴部内面付着炭化物(PLD-36202)は、2566-2526 cal BC(13.9%)、2497-2396 cal BC(67.6%)、2385-2346 cal BC(13.9%)

であった。16区の029SXから出土した土器（登録番号437）の口縁部外面付着炭化物（PLD-36204）は、2488-2338 cal BC (94.4%) および 2318-2310 cal BC ( 1.0%) であった。14B2区の1224SKから出土した土器（登録番号234）の胴部外面付着炭化物（PLD-36205）は、2476-2337 cal BC (93.4%) および 2322-2309 cal BC ( 2.0%) であった。同じく1224SKから出土した土器（登録番号234）の胴部外面付着炭化物（PLD-36206）は、2460-2273 cal BC (80.7%) および 2256-2208 cal BC (14.7%) であった。16区の154SKから出土した土器（登録番号367）の口縁部外面の把手に付着した炭化物（PLD-36207）は、2467-2333 cal BC (86.7%) および 2325-2300 cal BC ( 8.7%) であった。14B2区の036SKから出土した土器（登録番号103）の口縁部外面付着炭化物（PLD-36210）は、2464-2286 cal BC (95.4%) であった。これらは、紀元前2570～2200年頃の暦年代を示した。これらの暦年代は縄文時代中期末～後期前葉に相当する。なお、PLD-36202・36204・36205・36207・36210の付着炭化物は、安定同位体分析により主に陸産物に由来すると推定されている。

14B2区の1332SKから出土した土器（登録番号31）の胴部内面付着炭化物（PLD-36203）は、5220-5051 cal BC (95.4%) で、縄文時代早期末に相当する暦年代であった。なお、PLD-36203の付着炭化物は、安定同位体分析により主に陸産物に由来すると推定されている。

#### **b. 炭化材・炭化種実**

16区121SKから出土した試料No.4（PLD-36168）と204SKから出土した試料No.5（PLD-36169）、303SKから出土した試料No.7（PLD-

36171）は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $3860 \pm 25 \sim 3845 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BPの範囲に収まり、 $2\sigma$ 暦年代範囲は2461～2142 cal BCの範囲に収まった。これは、縄文時代後期初頭に相当する。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、炭化材試料のうち、試料No.5、7は最終形成年輪が残っていなかったため、古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。また、試料No.4は炭化種実であり、測定結果は結実年代を示す。

029SXから出土した試料No.3（PLD-36167）は、 $2\sigma$ 暦年代範囲が1259-1292 cal AD (95.4%)、029SXから出土した試料No.1（PLD-36165）は、 $2\sigma$ 暦年代範囲が1260-1295 cal AD (95.4%) で、13世紀中頃～末の暦年代を示した。これらは、鎌倉時代に相当する。

試料No.1の炭化材は最終形成年輪が残っており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示すが、試料No.3の炭化材は最終形成年輪が残っていなかったため、古木効果の影響を受けている可能性がある。

029SXから出土した試料No.2（PLD-36166）は、 $2\sigma$ 暦年代範囲が1306-1364 cal AD (63.4%) および 1385-1415 cal AD (32.0%)、211SXから出土した試料No.6（PLD-36170）は、 $2\sigma$ 暦年代範囲が1319-1351 cal AD (34.5%) および 1391-1425 cal AD (60.9%) で、14世紀初頭～15世紀前半の暦年代を示した。これらは、鎌倉時代～室町時代に相当する。

試料No.3の炭化材は最終形成年輪が残ってお

り、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。また試料 No.6 は炭化種実であり、測定結果は結実年代を示す。

### c. 生の種実

14B2 区の 1305SI から出土した試料 No.122 (PLD-36173) は、 $^{14}\text{C}$  年代で  $5765 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲で 4690-4544 cal BC (95.4%) となった。これは、縄文時代前期前半に相当する。

同じく 14B1 区の 0393SK から出土した試料 No.154 (PLD-36174) は、 $2\sigma$  暦年代範囲で 1433-1478 cal AD (95.4%) となった。これは、室町時代に相当する。

14B1 区の 0081SK から出土した試料 No.9 (PLD-36172) は、 $2\sigma$  暦年代範囲で 1955-1956 cal AD (95.4%) となった。これは、昭和時代に相当する。

なお、これらの試料はいずれも種実であり、測定結果は結実年代を示す。

### d. 人骨

別項で分析した C/N 比は骨のコラーゲンとして高すぎる値を示し、コラーゲンの劣化や外来炭素による汚染が疑われる。したがって、得られたコラーゲンの  $^{14}\text{C}$  年代は、本来の値を示していない可能性があり、参考値に留めるべきである。なお、人骨の較正年代は、17～20 世紀の他、13 世紀や現代も見られたが、こうした年代のばらつきは外来炭素による汚染の度合いを反映していると考えられる。

### 参考文献

石田由紀子 (2008) 中津式・福田 K II 式土器。  
小林達雄編「総覧縄文土器」: 634-641, アム・プロモーション。  
小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代。小杉 康・

谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学 2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社。

工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—, 373p, 神泉社。

増子康真 (2008) 晩期半截竹管文土器。小林達雄編「総覧縄文土器」: 774-781, アム・プロモーション。

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代編集委員会編「日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代」: 3-20, 日本第四紀学会。

山下勝年 (2008) 東海条痕文系土器。小林達雄編「総覧縄文土器」: 146-153, アム・プロモーション。

山下勝年 (2008) 清水ノ上 II 式・上ノ坊式土器。小林達雄編「総覧縄文土器」: 274-281, アム・プロモーション。

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

Hua, Q., Barbetti, M. Rakowski, A.Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950–2010. *Radiocarbon*, 55(4), 1-14.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der

表 15 測定試料および処理

測定番号	取り上げ情報	遺物登録番号	試料データ	前処理
PLD-29196	調査区: 14B1 グリッド: 5335 遺物 No.dot.597	732	器種: 深鉢 採取部位: 胴部外面 種類: 付着炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-29197	調査区: 14B1 グリッド: 5335 遺物 No.dot.756	258	器種: 深鉢 採取部位: 胴部外面 種類: 付着炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-29198	調査区: 14B1 グリッド: 5335 遺構: 1845K 遺物 No.dot.1164	320	器種: 深鉢 採取部位: 胴下部内面 種類: 付着炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-29199	調査区: 14B2 グリッド: 5135 遺構: 0365K 遺物 No.dot.1869	122	器種: 深鉢 採取部位: 胴部内面 種類: 付着炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-29200	調査区: 14B2 グリッド: 5335 遺構: 12865K 遺物 No.dot.1926	341	器種: 深鉢 採取部位: 胴部内面 種類: 付着炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-29201	調査区: 14B2 グリッド: 5135 遺構: 12245K 遺物 No.dot.1996	234	器種: 深鉢 採取部位: 胴部外面 種類: 付着炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-29202	調査区: 14B2 グリッド: 5436 遺構: 12785K 遺物 No.dot.2001	78	器種: 深鉢 採取部位: 胴上部外面 種類: 付着炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36165	試料 No.1 グリッド: 530365 遺構: 0295X 遺物 No.4-0069		種類: 炭化材 採取部位: コナラ属コナラ節 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36166	試料 No.2 グリッド: 530365 遺構: 0295X 遺物 No.4-0072		種類: 炭化材 採取部位: コナラ属コナラ節 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36167	試料 No.3 グリッド: 530365 遺構: 0295X 遺物 No.4-0093		種類: 炭化材 採取部位: コナラ属コナラ節 試料の性状: 最終形成年輪 以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36168	試料 No.4 グリッド: 525370 遺構: 1215K 遺物 No.4-1748		種類: 炭化種実 (イチイガシ炭化子葉)	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36169	試料 No.5 グリッド: 530365 遺構: 2045K 遺物 No.4-1339		種類: 炭化材 (カヤ) 試料の性状: 最終形成年輪 以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36170	試料 No.6 グリッド: 535350 遺構: 2115X 遺物 No.4-1187		種類: 炭化種実 (イネ炭化種子塊) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36171	試料 No.7 グリッド: 535355 遺構: 3035K 遺物 No.4-1675		種類: 炭化材 (針葉樹) 試料の性状: 最終形成年輪 以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36172	試料 No.9 調査区: 14B1 グリッド: 523 遺構: 00815K		種類: 生の種実 (ケヤキ果実) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

測定番号	取り上げ情報	遺物登録番号	試料データ	前処理
PLD-36173	試料 No.122 調査区: 14B2 グリッド: 5034 遺構: 13055I		種類: 炭化種実 (ミズキ核) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36174	試料 No.154 調査区: 14B1 グリッド: 5235 遺構: 03935K		種類: 炭化種実 (ササゲ属アズキ亜属種子) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36196	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03415Z コンテナ No.: 59 Dot: 1104		種類: ヒト、 頭蓋骨 (後頭骨) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・コラーゲン抽出
PLD-36197	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03415Z Dot: 1104		種類: ヒト、 肋骨?、左右不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・コラーゲン抽出
PLD-36198	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03425Z		種類: ヒト、 頭蓋骨 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・コラーゲン抽出
PLD-36199	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03435Z		種類: ヒト、 肋骨、左右不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・コラーゲン抽出
PLD-36200	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03425Z コンテナ No.: 57 Dot: 1384		種類: ヒト、 大腿骨?、左右不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・コラーゲン抽出
PLD-36201	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03435Z		種類: ヒト、 頭蓋骨 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・コラーゲン抽出
PLD-36202	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 12655K 遺物番号: 1805	97	種類: 土器付着炭化物 (胴部内面) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36203	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 13325K 遺物番号: 1891	31	種類: 土器付着炭化物 (胴部内面) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36204	調査区: 4KNJ16 遺構: 0295X 遺物番号: 2432 d-0101	437	種類: 土器付着炭化物 (口縁部外面) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36205	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 12245K 遺物番号: 1697	234	種類: 土器付着炭化物 (胴部外面) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36206	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 12245K 遺物番号: 1693 Dot:1990	234	種類: 土器付着炭化物 (胴部外面) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36207	調査区: 4KNJ16 遺構: 1545K 遺物番号: 1271	367	種類: 土器付着炭化物 (口縁部外面、把手) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-36210	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 0365K 遺物番号: 1345 Dot:1803	103	種類: 土器付着炭化物 (口縁部内面) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)

表 16 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	取り上げ情報	遺物登録番号	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
						1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-29196	調査区: 14B1 グリッド: 5335 遺物 No.dot.597	732	-25.92 $\pm$ 0.21	3910 $\pm$ 24	3910 $\pm$ 25	2467-2431 cal BC (25.9%) 2424-2402 cal BC (17.1%) 2381-2348 cal BC (25.2%)	2471-2336 cal BC (91.4%) 2323-2307 cal BC (4.0%)
PLD-29197	調査区: 14B1 グリッド: 5335 遺物 No.dot.756	258	-26.11 $\pm$ 0.19	3919 $\pm$ 24	3920 $\pm$ 25	2470-2434 cal BC (28.7%) 2421-2403 cal BC (15.0%) 2380-2349 cal BC (24.5%)	2476-2337 cal BC (92.8%) 2323-2308 cal BC (2.6%)
PLD-29198	調査区: 14B1 グリッド: 5335 遺構: 1845K 遺物 No.dot.1164	320	-23.72 $\pm$ 0.20	3921 $\pm$ 24	3920 $\pm$ 25	2470-2435 cal BC (29.2%) 2421-2403 cal BC (14.8%) 2380-2349 cal BC (24.2%)	2476-2336 cal BC (92.9%) 2323-2307 cal BC (2.5%)
PLD-29199	調査区: 14B2 グリッド: 5135 遺構: 0365K 遺物 No.dot.1869	122	-25.62 $\pm$ 0.20	3921 $\pm$ 25	3920 $\pm$ 25	2471-2433 cal BC (29.2%) 2422-2403 cal BC (15.1%) 2380-2349 cal BC (23.9%)	2476-2336 cal BC (92.6%) 2323-2307 cal BC (2.8%)
PLD-29200	調査区: 14B2 グリッド: 5335 遺構: 12865K 遺物 No.dot.1926	341	-24.21 $\pm$ 0.19	2944 $\pm$ 23	2945 $\pm$ 25	1207-1120 cal BC (68.2%)	1220-1056 cal BC (95.4%)
PLD-29201	調査区: 14B2 グリッド: 5135 遺構: 12245K 遺物 No.dot.1996	234	-27.08 $\pm$ 0.20	3924 $\pm$ 24	3925 $\pm$ 25	2471-2436 cal BC (30.7%) 2420-2404 cal BC (13.9%) 2379-2350 cal BC (23.6%)	2479-2338 cal BC (93.5%) 2322-2309 cal BC (1.9%)

表 16 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	取り上げ情報	遺物登録番号	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
						1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-29202	グリッド: 5436 遺構: 1278SK 遺物 No.dot.2001	78	-26.78 $\pm$ 0.25	3961 $\pm$ 25	3960 $\pm$ 25	2559-2536 cal BC (22.4%) 2491-2463 cal BC (45.8%)	2570-2515 cal BC (34.2%) 2501-2440 cal BC (54.0%) 2420-2404 cal BC (2.8%) 2379-2349 cal BC (4.5%)
PLD-36165	試料 No.1 グリッド: 530365 遺構: 0295X 遺物 No.d-0069		-25.23 $\pm$ 0.23	722 $\pm$ 22	720 $\pm$ 20	1270-1285 cal AD (68.2%)	1260-1295 cal AD (95.4%)
PLD-36166	試料 No.2 グリッド: 530365 遺構: 0295X 遺物 No.d-0072		-26.55 $\pm$ 0.26	578 $\pm$ 22	580 $\pm$ 20	1320-1350 cal AD (45.9%) 1392-1407 cal AD (22.3%)	1306-1364 cal AD (63.4%) 1385-1415 cal AD (32.0%)
PLD-36167	試料 No.3 グリッド: 530365 遺構: 0295X 遺物 No.d-0093		-26.49 $\pm$ 0.23	727 $\pm$ 22	725 $\pm$ 20	1267-1284 cal AD (68.2%)	1259-1292 cal AD (95.4%)
PLD-36168	試料 No.4 グリッド: 525370 遺構: 1215K 遺物 No.d-1748		-24.63 $\pm$ 0.15	3798 $\pm$ 23	3800 $\pm$ 25	2285-2247 cal BC (36.7%) 2235-2200 cal BC (31.5%)	2297-2191 cal BC (80.8%) 2181-2142 cal BC (14.6%)
PLD-36169	試料 No.5 グリッド: 530365 遺構: 2045K 遺物 No.d-1339		-25.69 $\pm$ 0.13	3862 $\pm$ 23	3860 $\pm$ 25	2451-2420 cal BC (12.4%) 2405-2378 cal BC (14.4%) 2350-2289 cal BC (41.4%)	2461-2279 cal BC (89.3%) 2251-2230 cal BC (4.8%) 2219-2212 cal BC (1.2%)
PLD-36170	試料 No.6 グリッド: 535350 遺構: 2115X 遺物 No.d-1187		-25.23 $\pm$ 0.15	552 $\pm$ 19	550 $\pm$ 20	1329-1340 cal AD (18.4%) 1397-1416 cal AD (49.8%)	1319-1351 cal AD (34.5%) 1391-1425 cal AD (60.9%)
PLD-36171	試料 No.7 グリッド: 535355 遺構: 3035K 遺物 No.d-1675		-28.45 $\pm$ 0.13	3843 $\pm$ 23	3845 $\pm$ 25	2345-2277 cal BC (46.1%) 2253-2228 cal BC (15.6%) 2223-2210 cal BC (6.5%)	2456-2418 cal BC (6.8%) 2407-2376 cal BC (8.6%) 2351-2204 cal BC (80.0%)
PLD-36172	試料 No.9 調査区: 14B1 グリッド: 5023 遺構: 00815K		-28.27 $\pm$ 0.16	-159 $\pm$ 18 F14:1.0201 $\pm$ 0.0023	-160 $\pm$ 20	Post-bomb NH2 2013: 1955-1956 cal AD (68.2%)	Post-bomb NH2 2013: 1955-1956 cal AD (95.4%)
PLD-36173	試料 No.122 調査区: 14B2 グリッド: 5034 遺構: 1305SI		-27.11 $\pm$ 0.17	5764 $\pm$ 25	5765 $\pm$ 25	4680-4636 cal BC (31.8%) 4619-4580 cal BC (29.4%) 4571-4560 cal BC (7.0%)	4690-4544 cal BC (95.4%)
PLD-36174	試料 No.154 調査区: 14B1 グリッド: 5235 遺構: 03935K		-26.03 $\pm$ 0.15	427 $\pm$ 19	425 $\pm$ 20	1440-1459 cal AD (68.2%)	1433-1478 cal AD (95.4%)
PLD-36196	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03415Z コンテナ No.: 59 Dot.: 1104		-23.14 $\pm$ 0.13	118 $\pm$ 21	120 $\pm$ 20	Post-bomb NH2 2013: 1689-1707 cal AD (10.9%) 1719-1729 cal AD (6.7%) 1810-1821 cal AD (6.7%) 1822-1826 cal AD (2.3%) 1833-1885 cal AD (34.6%) 1914-1926 cal AD (7.1%)	Post-bomb NH2 2013: 1682-1737 cal AD (27.6%) 1757-1761 cal AD (0.7%) 1804-1895 cal AD (52.7%) 1903-1937 cal AD (13.8%) 1952-1955 cal AD (0.6%)
PLD-36197	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03415Z		-27.86 $\pm$ 0.21	221 $\pm$ 23	220 $\pm$ 25	Post-bomb NH2 2013: 1651-1668 cal AD (32.4%) 1782-1798 cal AD (33.4%) 1948-1950 cal AD (2.5%) 1952-1954 cal AD (0.5%)	Post-bomb NH2 2013: 1644-1680 cal AD (41.8%) 1739-1743 cal AD (0.6%) 1763-1801 cal AD (42.1%) 1938-1952 cal AD (10.3%) 1952-1954 cal AD (0.5%)
PLD-36198	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03425Z		-22.38 $\pm$ 0.15	755 $\pm$ 21	755 $\pm$ 20	1258-1278 cal AD (68.2%)	1224-1235 cal AD (6.1%) 1241-1284 cal AD (89.3%)
PLD-36199	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03435Z		-22.08 $\pm$ 0.11	46 $\pm$ 21	45 $\pm$ 20	Post-bomb NH2 2013: 1712-1716 cal AD (4.6%) 1830-1830 cal AD (0.2%) 1891-1909 cal AD (60.6%) 1954-1955 cal AD (2.8%)	Post-bomb NH2 2013: 1698-1722 cal AD (13.3%) 1816-1834 cal AD (8.9%) 1878-1916 cal AD (70.3%) 1954-1955 cal AD (2.9%)
PLD-36200	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03425Z コンテナ No.: 57 Dot.: 1384		-21.05 $\pm$ 0.12	156 $\pm$ 20	155 $\pm$ 20	Post-bomb NH2 2013: 1675-1688 cal AD (9.3%) 1730-1769 cal AD (31.8%) 1770-1778 cal AD (5.4%) 1799-1809 cal AD (8.0%) 1926-1941 cal AD (12.3%) 1951-1953 cal AD (0.9%) 1953-1954 cal AD (0.5%)	Post-bomb NH2 2013: 1667-1696 cal AD (15.7%) 1726-1782 cal AD (41.2%) 1797-1814 cal AD (10.5%) 1836-1845 cal AD (1.9%) 1850-1869 cal AD (4.1%) 1871-1877 cal AD (0.9%) 1917-1954 cal AD (21.0%)
PLD-36201	調査区: 4KNJ14B1 遺構: 03435Z		-22.01 $\pm$ 0.13	-42 $\pm$ 20 F14:1.0053 $\pm$ 0.0025	-40 $\pm$ 20	Post-bomb NH2 2013: 1955-1955 cal AD (68.2%)	Post-bomb NH2 2013: 1955-1955 cal AD (95.4%)
PLD-36202	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 12655K 遺物番号: 1805	97	-26.54 $\pm$ 0.12	3948 $\pm$ 24	3950 $\pm$ 25	2550-2537 cal BC (6.7%) 2491-2453 cal BC (46.0%) 2419-2407 cal BC (5.5%) 2376-2351 cal BC (9.9%)	2566-2526 cal BC (13.9%) 2497-2396 cal BC (67.6%) 2385-2346 cal BC (13.9%)
PLD-36203	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 13325K 遺物番号: 1891	31	-28.86 $\pm$ 0.11	6187 $\pm$ 27	6185 $\pm$ 25	5211-5205 cal BC (4.2%) 5168-5076 cal BC (64.0%)	5220-5051 cal BC (95.4%)
PLD-36204	調査区: 4KNJ16 遺構: 0295X 遺物番号: 2432 d-0101	437	-26.86 $\pm$ 0.17	3929 $\pm$ 24	3930 $\pm$ 25	2474-2437 cal BC (32.9%) 2420-2404 cal BC (13.0%) 2379-2349 cal BC (22.2%)	2488-2338 cal BC (94.4%) 2318-2310 cal BC (1.0%)
PLD-36205	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 12245K 遺物番号: 1697	234	-28.09 $\pm$ 0.11	3922 $\pm$ 24	3920 $\pm$ 25	2471-2435 cal BC (29.7%) 2421-2403 cal BC (14.8%) 2379-2349 cal BC (23.7%)	2476-2337 cal BC (93.4%) 2322-2309 cal BC (2.0%)
PLD-36206	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 12245K 遺物番号: 1693 Dot1990	234	-33.54 $\pm$ 0.16	3856 $\pm$ 30	3855 $\pm$ 30	2451-2420 cal BC (11.4%) 2405-2378 cal BC (12.3%) 2350-2283 cal BC (38.6%) 2248-2233 cal BC (5.9%)	2460-2273 cal BC (80.7%) 2256-2208 cal BC (14.7%)
PLD-36207	調査区: 4KNJ16 遺構: 1545K 遺物番号: 1271	367	-27.30 $\pm$ 0.19	3897 $\pm$ 24	3895 $\pm$ 25	2461-2398 cal BC (42.3%) 2385-2347 cal BC (25.9%)	2467-2333 cal BC (86.7%) 2325-2300 cal BC (8.7%)
PLD-36210	調査区: 4KNJ14B2 遺構: 0365K 遺物番号: 1345 Dot1803	103	-28.32 $\pm$ 0.16	3872 $\pm$ 24	3870 $\pm$ 25	2452-2420 cal BC (17.5%) 2406-2378 cal BC (16.9%) 2350-2296 cal BC (33.8%)	2464-2286 cal BC (95.4%)

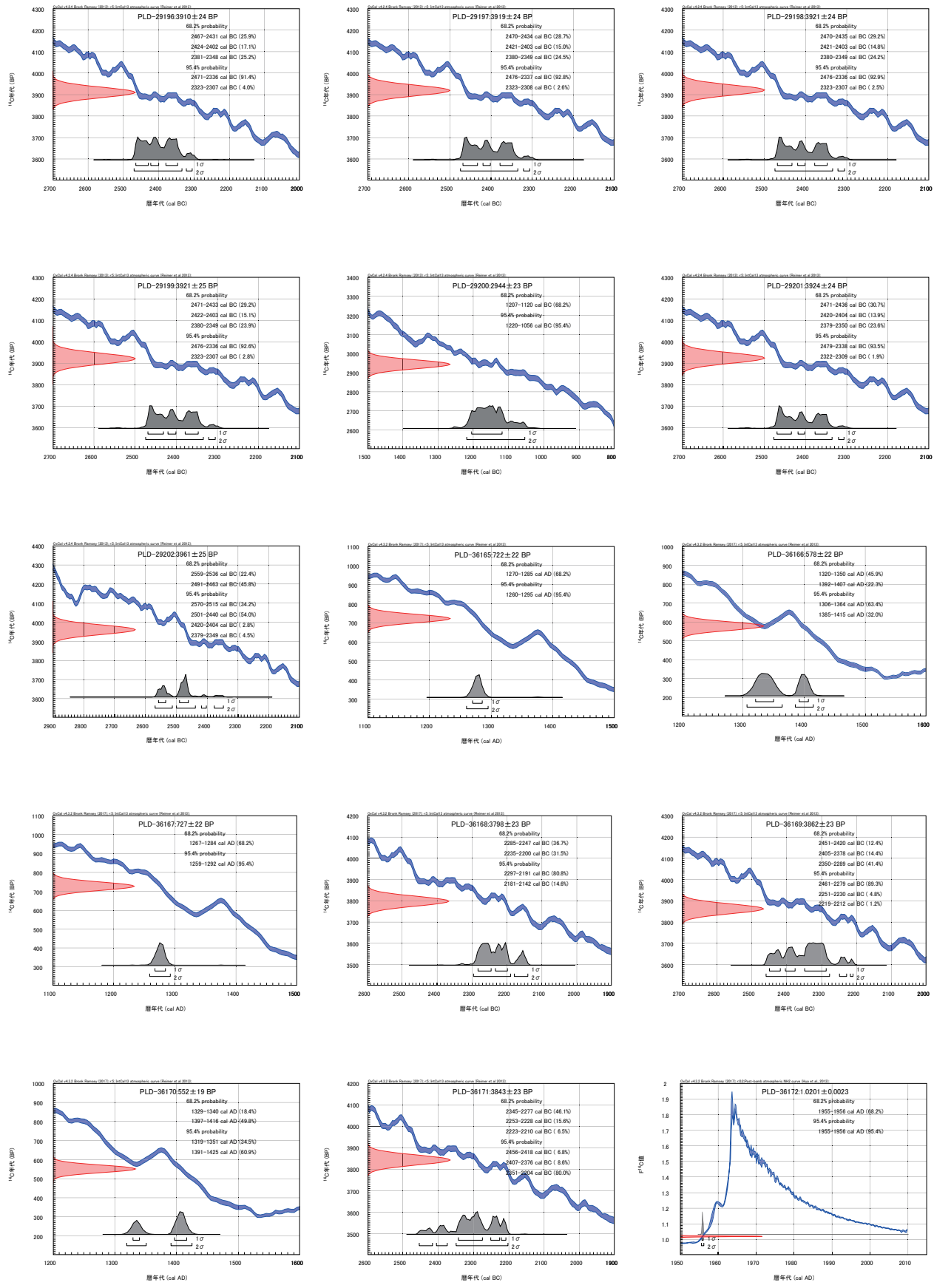


図 153 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果 1

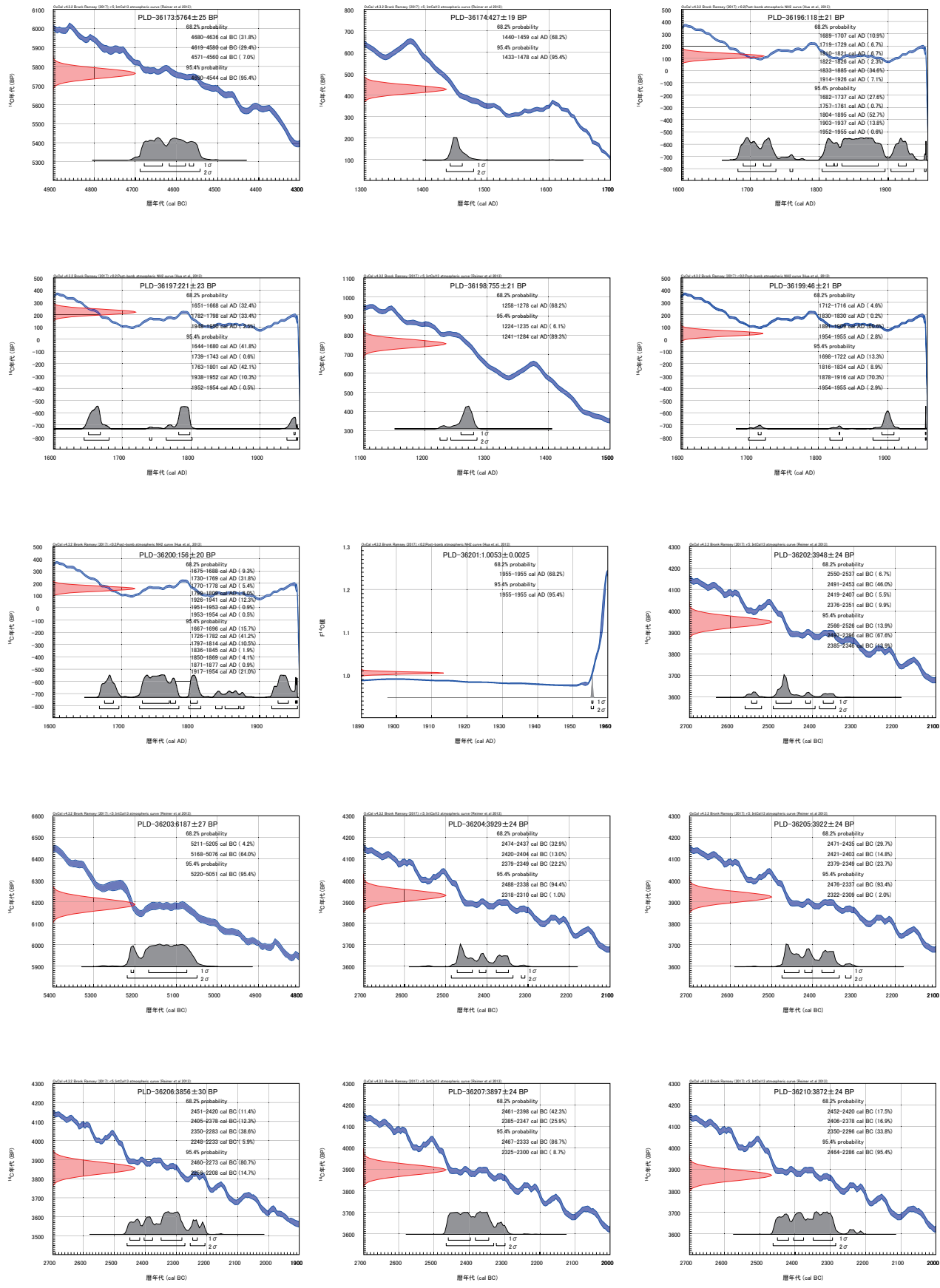


図 154 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 2

## 第6節 蛍光X線分析による黒曜石の産地推定

井上 巖 (株) 第四紀 地質研究所)

### 1. 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置(日本電子製J S X-3200)で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法(F P法)による自動定量計算システムが採用されており、6 C~9 2 Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源(最大30 k V、4 m A)の採用で微量試料~最大290 mmφ×80 mm Hまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では1 6 試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクF P法でおこなった。F P法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルクF P法(スタンダードレス方式)、分析雰囲気=真空、X線管ターゲット素材=R h、加速電圧=30 k V、管電流=自動制御、分析時間=200秒(有効分析時間)である。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は黒曜石の含水量=0と仮定し、酸化物の重量%を100%にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量%は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量%では小数点以下3~4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

主要元素と微量元素の酸化物濃度(重量%)で

SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-TiO<sub>2</sub>, K<sub>2</sub>O-CaOの各相関図、Rb-Srは積分強度の相関図の4組の組み合わせで図を作成した。

### 2. 黒曜石原産地と標準図の関連

黒曜石は日本列島黒曜石位置図に示すように1~40の原石地がある。これらより採取した原石を基としてSiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図(標準図), Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-TiO<sub>2</sub>図(標準図), K<sub>2</sub>O-CaO図(標準図)、Rb-Sr図(標準図)を作成し、これの標準黒曜石原石の分析領域を特定し分類した。これらの標準図の領域から凡例を除き、各図の凡例抜図を作成し、この凡例抜図に残っている領域に西地・東地遺跡の黒曜石遺物の分析値を記載し、領域との関連性で原産地を特定した(図155)。

黒曜石の原産地分布の特徴は海洋底プレートの日本列島への沈み込みによる火山の形成と密接に関連している。東北日本の原産地黒曜石は東日本火山帯の領域の先端部分に沿って分布しており、その形状は日本列島に沈み込むプレートの形状と調和的である。九州における黒曜石の原産地分布の特徴は西日本火山帯に沿っても分布するものと、その西側の長崎県と佐賀県に分布するものがある。フォッサマグナ(糸魚川-静岡線以西)~九州東岸に当たる近畿・中国・四国地方には黒曜石の原産地はなく、隠岐の島にのみ原産地がある。

### 3. 分析結果

表17の化学分析表には分析結果に基づいて原産地も記載し、遺物が被熱している場合の強被熱と弱比熱に分類した被熱分類も記載してある。

西地・東地遺跡の出土遺物は遺物表面は薄い皮膜が形成されているものが多く、本来であればガラス光沢を呈するが西地・東地遺跡の遺物はほとんどが薄い皮膜によって光沢が失われている。黒曜石の風化についての分析（6000年前の遺跡より出土した出土遺物について風化したと考えられる表面と同じ遺物を割った新鮮な部分とを分析し、その風化の影響を検討し、ほとんど風化による影響で原産地が異なるという結果は得られなかった。）では風化による表面の分析結果は新鮮な原産地の黒曜石原石と原産地を異にすることはわかっていないことはわかっている。

西地・東地遺跡の遺物表面の薄い皮膜は被熱によるもので、被熱を受けていない原石は  $K_2O$  の値が 0-7% の領域にあるが強被熱の場合には  $K_2O$  の値が 7-12% の領域にあり、弱比熱の場合には 5.5-6.5% の領域にある。 $K_2O$  の値が大きくなったことで  $Fe_2O_3$  の値が小さくなり、マイナス側にシフトする。図 155Rb-Sr 図の中の領域は被熱による影響は小さく、原産地の領域に分析値は反映され、原産地特定の指標となる。

長野県内に分布する黒曜石は、和田峠周辺の西餅屋、東餅屋、小深沢・鷹山地区をあわせた和田峠系-1、男女倉5~7地区と星ヶ塔地区をあわせた和田峠系-2、北八ヶ岳の麦草峠周辺と冷山地区をあわせた蓼科系の3地域に分かれる。

分析結果では和田峠系-1と和田峠系-2が検出されている。

1) 西地・東地遺跡の出土遺物はそのほとんどが和田峠系-2の星ヶ塔タイプである。和田峠系-1は西餅屋タイプである。213個の分析のうち14個が和田峠系-1、199個が和田峠系-2である。N-91の遺物は  $Fe_2O_3$  の値が高く、被

熱の影響を受けているようで和田峠系-2?とした。

2) 西地・東地遺跡の出土遺物はその多くが被熱しており、特に、 $K_2O$  の値が 7-12% の領域にあるものは強被熱遺物、 $K_2O$  の値が 5.-6.5% の領域のものは弱比熱とした。分析値 100% の中で  $K_2O$  の値が被熱によって大きくなったことにより、100% の中で増えた分は他の酸化物に影響し、 $SiO_2$  では特に影響が強く、そのためマイナス側すなわち図中では左側にシフトする。同様のことは  $Fe_2O_3$  についてもいえ、マイナス側すなわち図中では左側にシフトする。この結果、各図中では原産地の領域にずれが出ているのである。Rb と Sr は微量で被熱の影響が小さく、第 4 図 Rb-Sr 図での和田峠系-1 と和田峠系-2 の領域が原産地の指標となり、西地・東地遺跡の出土遺物の原産地対比を行った。

#### 引用文献

- 井上 巖 (2000) 東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光 X 線分析 (XRF) 北越考古学、第 11 号、23-38/
- 井上 巖 (2001) テフラ中の火山ガラスの同定に関する一提言、軽石学雑誌、第 7 号 23-51.
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 関東・中部・東海編
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 東北・北陸編
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 北海道編
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石写真集

表 17 黒曜石試料 化学分析表 (1)

試料名	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Rb <sub>2</sub> O	SrO	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>	Total	Rb(l)	Sr(l)	原産地	被熱状況	整理番号	登録番号	石種
N-1	3.9457	0.0000	13.8181	74.9500	0.5646	5.4550	0.5726	0.1084	0.0747	0.4836	0.0127	0.0040	0.0029	0.0077	100.0000	1331	408	和田峠系-2	顕比熱	16	1122	石曜
N-2	3.4543	0.0000	13.9661	74.8293	0.7314	5.3833	0.7719	0.1232	0.0755	0.6117	0.0168	0.0055	0.0057	0.0053	100.0000	1324	427	和田峠系-2	顕比熱	22		石曜
N-3	3.6938	0.0000	13.8713	74.9099	0.5463	6.2241	0.7346	0.1140	0.0794	0.6020	0.0128	0.0052	0.0046	0.0120	100.0000	1230	493	和田峠系-2	顕比熱	245		石曜
N-4	4.1619	0.0000	13.6267	74.7698	0.5685	5.4645	0.6230	0.1079	0.0808	0.5616	0.0172	0.0066	0.0020	0.0095	100.0000	1424	530	和田峠系-2	顕比熱	250		石曜
N-5	3.5150	0.1413	13.8584	74.1315	0.6190	6.3334	0.6494	0.0989	0.0729	0.5495	0.0153	0.0040	0.0031	0.0084	100.0001	1416	360	和田峠系-2	顕比熱	274		切片
N-6	3.2227	0.0000	14.4023	74.8840	0.6079	5.5833	0.5093	0.1021	0.0788	0.5204	0.0130	0.0030	0.0028	0.0104	100.0000	1303	295	和田峠系-2	顕比熱	307		切片
N-7	3.4801	0.0000	14.2054	74.4545	0.6188	5.7819	0.6500	0.1148	0.0803	0.5863	0.0136	0.0003	0.0024	0.0115	99.9999	1312	30	和田峠系-2	顕比熱	316		切片
N-8	3.7833	0.0000	14.1946	74.4765	0.6276	5.9431	0.6763	0.1103	0.0854	0.5599	0.0145	0.0035	0.0024	0.0121	100.0000	1369	327	和田峠系-2	顕比熱	388		切片
N-9	3.2031	0.0000	14.2702	74.9249	0.2017	6.0010	0.6399	0.0792	0.0943	0.5416	0.0286	0.0000	0.0040	0.0115	100.0000	2660	0	和田峠系-1	顕比熱	409		石曜
N-10	3.0558	0.0000	13.1708	76.5205	0.6429	5.3578	0.6029	0.0712	0.0828	0.5050	0.0128	0.0039	0.0041	0.0094	100.0000	1117	329	和田峠系-2	顕比熱	418		切片
N-11	2.5603	0.0000	13.8713	76.1198	0.5697	5.3904	0.6118	0.1181	0.0827	0.6319	0.0206	0.0023	0.0052	0.0160	100.0001	1568	172	和田峠系-2	顕比熱	431		二次加工のある切片
N-12	3.8066	0.0000	14.0695	74.4501	0.6459	5.5879	0.6430	0.1139	0.0727	0.5810	0.0134	0.0054	0.0004	0.0102	100.0000	1341	524	和田峠系-2	顕比熱	436		切片
N-13	2.8587	0.0000	13.2707	76.6227	0.6880	5.2416	0.5950	0.0943	0.0825	0.5179	0.0112	0.0039	0.0021	0.0114	100.0000	968	331	和田峠系-2	顕比熱	439		二次加工のある切片
N-14	3.7833	0.0000	13.7873	74.6136	0.6270	5.7607	0.6449	0.0988	0.0847	0.5689	0.0112	0.0048	0.0031	0.0118	100.0001	1056	443	和田峠系-2	顕比熱	481		切片
N-15	2.7259	0.0000	13.9234	74.4095	0.6697	6.8194	0.6198	0.1068	0.0950	0.5962	0.0149	0.0052	0.0036	0.0104	99.9998	1288	443	和田峠系-2	顕比熱	508		切片
N-16	2.2310	0.0000	14.2204	76.3339	0.6558	5.1322	0.5687	0.1239	0.0903	0.6092	0.0110	0.0072	0.0068	0.0096	100.0000	875	565	和田峠系-2	顕比熱	514		切片
N-17	1.7227	0.0000	13.7104	74.1432	0.6133	8.7946	0.6074	0.0904	0.0943	0.5802	0.0210	0.0041	0.0083	0.0108	100.0001	1077	359	和田峠系-2	顕比熱	518		切片
N-18	3.7332	0.0000	13.9927	74.9016	0.6670	5.8616	0.6074	0.1250	0.0815	0.5924	0.0180	0.0024	0.0054	0.0118	100.0000	1479	190	和田峠系-2	顕比熱	519		二次加工のある切片
N-19	3.4286	0.0000	13.3438	75.3978	0.6751	5.6613	0.7204	0.1170	0.0707	0.5545	0.0138	0.0046	0.0023	0.0102	100.0001	1287	425	和田峠系-2	顕比熱	524	1098	石曜
N-20	3.5279	0.0000	13.8964	74.8824	0.7359	5.5913	0.5824	0.1258	0.0754	0.5502	0.0124	0.0059	0.0030	0.0110	100.0000	1204	567	和田峠系-2	顕比熱	586		切片
N-21	3.0350	0.0000	17.7841	68.5024	0.7192	10.4648	1.0857	0.1779	0.1002	0.8114	0.0311	0.0082	0.0000	0.0100	100.0000	2637	613	和田峠系-1	顕比熱	587		切片
N-22	3.1020	0.0000	14.9096	74.0826	0.6923	5.3781	0.7137	0.1584	0.1033	0.8179	0.0193	0.0067	0.0019	0.0143	100.0000	1545	521	和田峠系-2	顕比熱	603		二次加工のある切片
N-23	3.3293	0.0000	13.3346	75.0035	0.6815	6.1433	0.6566	0.1261	0.0813	0.6063	0.0162	0.0062	0.0030	0.0121	100.0000	1463	547	和田峠系-2	顕比熱	675		切片
N-24	3.8631	0.0000	13.6514	74.7739	0.7135	5.5484	0.6216	0.1071	0.0851	0.6011	0.0183	0.0049	0.0000	0.0115	99.9999	1678	442	和田峠系-2	顕比熱	692		切片
N-25	3.1049	0.0000	13.7939	74.7340	0.6649	5.6878	0.9308	0.1246	0.1229	0.7999	0.0302	0.0045	0.0067	0.0191	100.0002	2379	350	和田峠系-1	顕比熱	741		石曜
N-26	3.0103	0.0000	13.0662	76.4667	0.7065	5.4712	0.5754	0.1105	0.0804	0.4865	0.0105	0.0043	0.0026	0.0088	99.9999	1064	426	和田峠系-2	顕比熱	746	1168	石曜
N-27	2.0857	0.0000	13.6293	73.6521	0.6770	8.3860	0.6771	0.1227	0.0872	0.6439	0.0165	0.0077	0.0040	0.0108	100.0000	1347	619	和田峠系-2	顕比熱	747		切片
N-28	4.1132	0.1719	13.5364	74.7405	0.7071	5.3899	0.6342	0.0923	0.0777	0.5078	0.0122	0.0050	0.0029	0.0089	100.0000	1257	500	和田峠系-2	顕比熱	803		切片
N-29	3.4843	0.0000	13.6577	75.2798	0.7506	5.4287	0.6525	0.1119	0.0881	0.6022	0.0189	0.0046	0.0035	0.0091	99.9999	1595	383	和田峠系-2	顕比熱	832	1092	切片
N-30	2.8589	0.0000	13.8220	75.6026	0.7229	5.5421	0.6282	0.1101	0.0852	0.5475	0.0152	0.0032	0.0018	0.0103	100.0000	1488	307	和田峠系-2	顕比熱	837		切片
N-31	3.2434	0.0000	13.3108	75.6162	0.6999	5.5366	0.6648	0.1299	0.0898	0.6007	0.0151	0.0079	0.0057	0.0092	100.0000	1338	679	和田峠系-2	顕比熱	839		石曜
N-32	3.7740	0.0000	13.5381	74.3372	0.7083	6.0367	0.7476	0.1291	0.0953	0.5992	0.0157	0.0046	0.0040	0.0100	99.9998	1495	341	和田峠系-2	顕比熱	844		切片
N-33	3.8231	0.0000	13.5713	75.5080	0.6210	5.4165	0.6020	0.0987	0.0742	0.4938	0.0140	0.0057	0.0023	0.0114	100.0000	1369	541	和田峠系-2	顕比熱	905	1166	石曜
N-34	2.9749	0.0000	13.6499	75.7024	0.7150	5.4699	0.6742	0.1348	0.0889	0.5525	0.0143	0.0056	0.0076	0.0100	100.0000	1357	518	和田峠系-2	顕比熱	938	1171	石曜
N-35	3.3081	0.0000	14.1747	71.6711	0.6961	10.4937	0.6859	0.1380	0.0997	0.6864	0.0187	0.0024	0.0075	0.0176	99.9999	1466	183	和田峠系-2	顕比熱	939		切片
N-36	3.1952	0.0000	13.5737	75.6582	0.7363	5.3534	0.6347	0.1001	0.0892	0.5779	0.0148	0.0078	0.0058	0.0129	100.0000	1231	613	和田峠系-2	顕比熱	941		切片
N-37	3.1150	0.0000	12.6919	76.5514	0.7433	5.4315	0.5932	0.1263	0.0888	0.6140	0.0181	0.0101	0.0036	0.0128	100.0000	1258	689	和田峠系-2	顕比熱	961	1120	石曜
N-38	3.1455	0.0000	13.0148	74.4992	0.7298	7.2102	0.6082	0.1188	0.0904	0.5522	0.0141	0.0042	0.0027	0.0099	100.0000	1307	378	和田峠系-2	顕比熱	962		切片
N-39	4.8691	0.0000	13.4582	72.9765	0.7375	6.3692	0.7260	0.1193	0.0890	0.6149	0.0180	0.0049	0.0026	0.0109	100.0001	1600	424	和田峠系-2	顕比熱	963		石曜
N-40	3.5304	0.0000	13.7728	73.8572	0.7015	6.4215	0.8016	0.1212	0.0999	0.6473	0.0222	0.0056	0.0046	0.0142	100.0000	1797	447	和田峠系-2	顕比熱	964		石曜
N-41	3.5048	0.0000	13.1592	75.6559	0.7849	5.4603	0.6493	0.1042	0.0863	0.5614	0.0162	0.0049	0.0020	0.0105	99.9999	1442	427	和田峠系-2	顕比熱	965		切片
N-42	3.4221	0.0000	13.4945	74.7690	0.6859	5.9942	0.7255	0.1215	0.0980	0.6488	0.0183	0.0074	0.0053	0.0097	100.0002	1554	617	和田峠系-2	顕比熱	1000		石曜
N-43	2.8375	0.0000	13.4767	76.1973	0.7300	5.3935	0.6146	0.0972	0.0832	0.5410	0.0142	0.0055	0.0020	0.0072	99.9999	1324	498	和田峠系-2	顕比熱	1001		切片
N-44	1.2737	0.0000	15.8309	71.5459	0.7526	8.5779	0.9826	0.1397	0.1243	0.7293	0.0223	0.0025	0.0067	0.0116	100.0000	1739	187	和田峠系-2	顕比熱	1005		切片
N-45	3.3646	0.0000	15.1389	73.5780	0.6770	5.6147	0.6772	0.1376	0.0915	0.6855	0.0161	0.0052	0.0030	0.0108	100.0001	1473	470	和田峠系-2	顕比熱	1014		石曜
N-46	3.2226	0.0000	16.0416	72.9169	0.7746	5.3540	0.7146	0.1602	0.0749	0.7036	0.0154	0.0026	0.0083	0.0108	100.0001	1527	247	和田峠系-2	顕比熱	1015		切片
N-47	3.4097	0.1443	12.9469	75.5170	0.9200	5.4016	0.8264	0.1539	0.0845	0.5681	0.0118	0.0033	0.0035	0.0090	100.0000	699	194	和田峠系-2	顕比熱	1019		切片
N-48	3.8990	0.0000	13.9507	74.2729	0.7008	5.5108	0.7430	0.0862	0.1062	0.6808	0.0288	0.0037	0.0042	0.0128	99.9999	2635	329	和田峠系-1	顕比熱	1020		石曜
N-49	3.8061	0.0000	13.0203	75.7042	0.7588	5.3834	0.5800	0.1283	0.0801	0.5057	0.0146	0.0019	0.0043	0.0123	100.0000	1419	180	和田峠系-2	顕比熱	1021	1158	使用済のある切片
N-50	2.8978	0.0000	13.2510	76.7510	0.7314	5.0357	0.5800	0.1111	0.0857	0.5550	0.0125	0.0038	0.0066	0.0128	100.0000	1011	296	和田峠系-2	顕比熱	1024		石曜
N-51	3.3349	0.0000	13.4528	74.8460	0.7331	6.0809	0.6996	0.1407	0.0950	0.5816	0.0137	0.0013	0.0037	0.0168	100.0001	1228	414	和田峠系-2				

表 17 黒曜石試料 化学分析表 (2)

試料名	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Rb <sub>2</sub> O	SrO	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>	Total	Rb(l)	Sr(l)	原産地	被熱状況	整理番号	登録番号	器種	
N-108	2.8849	0.0000	16.4396	72.8277	0.2379	5.8510	7.8066	0.1096	0.0163	0.7117	0.0319	0.0000	0.0063	0.0124	99.9099	2796	0	和田峠系-1	弱比熱			石鐘	
N-109	3.0645	0.0000	18.3014	70.2579	0.5768	5.8428	6.834	0.3019	0.0954	0.8457	0.0148	0.0028	0.0038	0.0089	100.0001	1373	250	和田峠系-2	弱比熱		1024	石鐘	
N-110	3.1458	0.0000	14.6116	73.3147	0.6142	6.3552	0.8176	0.1781	0.1151	0.8021	0.0220	0.0036	0.0056	0.0144	100.0000	1730	280	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-111	3.3422	0.0000	15.2537	73.6406	0.6147	5.6472	6.0688	0.1338	0.0779	0.6511	0.0132	0.0024	0.0051	0.0094	100.0001	1184	210	和田峠系-2	弱比熱			切片	
N-112	3.4195	0.0000	14.7621	74.4299	0.5804	5.4831	0.5515	0.1282	0.0756	0.5446	0.0117	0.0021	0.0035	0.0080	100.0002	1185	205	和田峠系-2	弱比熱		1027	石鐘	
N-113	3.8088	0.0000	13.8088	74.2346	0.6142	5.6733	0.8991	0.1033	0.1171	0.6942	0.0307	0.0014	0.0035	0.0147	100.0000	2754	119	和田峠系-1	弱比熱		1008	石鐘	
N-114	4.0497	0.0000	13.8147	74.3286	0.5789	5.6456	0.7014	0.0987	0.1116	0.6179	0.0311	0.0011	0.0067	0.0139	99.9999	2663	94	和田峠系-1	弱比熱		1009	石鐘	
N-115	2.5649	0.0000	13.7073	75.9968	0.5721	5.6123	6.0999	0.1307	0.0815	0.6770	0.0186	0.0055	0.0074	0.0160	100.0000	1337	390	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-116	2.0312	0.0000	13.5083	74.7492	0.6287	5.7977	6.5403	0.1250	0.0918	0.5788	0.0149	0.0064	0.0037	0.0101	100.0001	1321	551	和田峠系-2	強被熱			1030	石鐘
N-117	3.5475	0.0000	14.4091	74.0741	0.5941	5.9241	6.6601	0.1162	0.0831	0.5773	0.0121	0.0029	0.0031	0.0104	100.0001	1128	262	和田峠系-2	弱比熱			切片	
N-118	3.3220	0.0000	13.4669	75.5355	0.6256	5.6227	7.005	0.0940	0.0781	0.5597	0.0111	0.0023	0.0019	0.0098	100.0001	1007	202	和田峠系-2	弱比熱			切片	
N-119	3.7658	0.0000	14.2675	73.7506	0.5064	6.0402	0.7262	0.1360	0.0877	0.6838	0.0141	0.0039	0.0039	0.0140	100.0001	1199	322	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-120	3.3426	0.0000	14.0747	75.3181	0.2488	5.4633	0.6511	0.0971	0.1105	0.6447	0.0317	0.0000	0.0061	0.0114	100.0001	2822	0	和田峠系-1	弱比熱		1044	石鐘	
N-121	3.8292	0.0000	13.5818	74.6077	0.6260	5.8800	0.6251	0.1158	0.0878	0.6663	0.0160	0.0063	0.0082	0.0099	100.0001	1368	525	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-122	2.8961	0.0000	13.5874	75.4352	0.6371	5.7175	6.2654	0.1175	0.0854	0.5840	0.0147	0.0021	0.0001	0.0076	100.0001	1388	194	和田峠系-2	弱比熱		1045	使用痕のある切片	
N-123	3.5824	0.0000	14.8382	73.0193	0.5903	6.1913	0.7052	0.1662	0.1158	0.7521	0.0185	0.0039	0.0039	0.0127	99.9998	1589	332	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-124	3.5574	0.0000	13.5833	75.8694	0.6316	4.8106	0.4782	0.1468	0.1040	0.7620	0.0262	0.0041	0.0107	0.0179	100.0000	1433	218	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-125	4.1755	0.0000	14.0416	73.9167	0.5603	5.8188	6.3599	0.1509	0.0831	0.5859	0.0162	0.0026	0.0022	0.0102	99.9999	1485	238	和田峠系-2	弱比熱		1046	使用痕のある切片	
N-126	3.6254	0.0000	13.9582	74.8660	0.6293	5.4879	6.4443	0.1280	0.0789	0.5492	0.0129	0.0039	0.0030	0.0131	100.0001	1201	352	和田峠系-2	弱比熱			切片	
N-127	3.2831	0.0000	13.4424	76.3801	0.2462	5.3354	5.4944	0.0640	0.1062	0.5334	0.0266	0.0000	0.0046	0.0086	100.0000	2453	0	和田峠系-1	弱比熱			切片	
N-128	3.3381	0.0000	13.6510	75.7055	0.6733	5.3893	0.5435	0.1014	0.0710	0.5031	0.0098	0.0009	0.0035	0.0096	100.0000	966	89	和田峠系-2	弱比熱		1169	石鐘	
N-129	2.6878	0.0000	12.8667	77.2414	0.6735	5.0753	0.5701	0.1140	0.0954	0.6465	0.0178	0.0093	0.0042	0.0160	100.0000	1061	543	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-130	3.6495	0.0000	13.4986	74.4809	0.6586	6.1711	6.8858	0.1179	0.0919	0.6107	0.0140	0.0068	0.0040	0.0102	100.0000	1256	599	和田峠系-2	弱比熱			切片	
N-131	4.2301	0.0000	13.2980	74.5296	0.6171	5.8195	6.6999	0.1272	0.0818	0.5878	0.0189	0.0085	0.0033	0.0083	100.0000	1698	743	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-132	3.3531	0.0000	14.0220	74.9133	0.5822	5.5860	7.155	0.1089	0.0833	0.6001	0.0163	0.0068	0.0044	0.0081	100.0000	1454	597	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-133	3.1495	0.0000	13.4738	75.3445	0.7581	5.6629	0.7915	0.1158	0.0827	0.5888	0.0160	0.0071	0.0007	0.0088	100.0002	1422	617	和田峠系-2	弱比熱		1167	石鐘	
N-134	3.7508	0.0000	15.7841	72.4371	0.7043	5.6318	0.7867	0.1516	0.0802	0.6430	0.0137	0.0046	0.0031	0.0089	99.9999	1275	418	和田峠系-2	弱比熱		1096	石鐘	
N-135	3.1976	0.0000	13.4078	74.3497	0.6276	6.0668	0.7672	0.1291	0.0960	0.6975	0.0207	0.0068	0.0087	0.0144	99.9999	1511	484	和田峠系-2	弱比熱			二次加工のある切片	
N-136	4.4532	0.0000	14.2100	74.7652	0.6665	5.5135	5.917	0.0895	0.0764	0.5272	0.0140	0.0019	0.0072	0.0138	100.0001	1329	173	和田峠系-2	弱比熱			切片	
N-137	3.0440	0.0000	13.1244	76.1408	0.6575	5.6847	6.477	0.1448	0.0894	0.5662	0.0168	0.0056	0.0054	0.0128	100.0001	1354	438	和田峠系-2	弱比熱		1117	石鐘	
N-138	3.6000	0.0000	14.4725	73.7351	0.6651	5.9325	6.6813	0.1361	0.0841	0.6148	0.0164	0.0068	0.0027	0.0086	100.0000	1522	617	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-139	3.2868	0.0000	14.1770	74.8030	0.6542	5.5948	6.3935	0.1374	0.0834	0.5905	0.0154	0.0046	0.0036	0.0098	100.0000	1475	429	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-140	2.7414	0.0000	13.9616	75.3261	0.6408	5.7752	6.6691	0.1641	0.0818	0.6116	0.0120	0.0034	0.0032	0.0097	100.0000	1068	297	和田峠系-2	弱比熱		1095	石鐘	
N-141	3.2627	0.0000	13.6327	74.8417	0.7166	6.0473	6.587	0.1189	0.0796	0.6078	0.0162	0.0073	0.0043	0.0061	99.9999	1423	632	和田峠系-2	弱比熱			使用痕のある切片	
N-142	2.2692	0.0000	13.3396	75.9172	0.6391	6.0304	6.9066	0.1862	0.1044	0.7276	0.0240	0.0009	0.0053	0.0204	99.9999	1643	60	和田峠系-2	弱比熱		1104	石鐘	
N-143	2.9458	0.0000	13.1022	75.9590	0.7078	5.8666	6.6315	0.1155	0.0904	0.5547	0.0138	0.0037	0.0030	0.0059	99.9999	1293	342	和田峠系-2	弱比熱			切片	
N-144	3.1317	0.0000	13.3754	75.8635	0.7611	5.5032	5.954	0.1202	0.0838	0.5372	0.0135	0.0016	0.0048	0.0087	100.0001	1291	149	和田峠系-2	弱比熱			切片	
N-145	3.1303	0.0000	13.9605	74.2137	0.7323	6.4195	6.0299	0.1450	0.1008	0.6762	0.0185	0.0067	0.0030	0.0107	100.0001	1264	448	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-146	0.5301	0.0000	12.3925	75.8766	0.6877	9.1785	5.915	0.0846	0.0794	0.5393	0.0224	0.0047	0.0023	0.0103	99.9999	1596	327	和田峠系-2	弱比熱			使用痕のある切片	
N-147	0.5021	0.0000	15.1804	75.0420	0.7249	6.5406	0.9513	0.1666	0.1033	0.7387	0.0321	0.0062	0.0103	0.0106	100.0001	2722	515	和田峠系-1	強被熱			切片	
N-148	2.9556	0.0000	14.2416	74.0295	0.6999	6.2617	6.6841	0.1382	0.0974	0.8326	0.0263	0.0119	0.0055	0.0158	100.0001	1986	878	和田峠系-2	弱比熱			切片	
N-149	3.4287	0.0000	13.7351	74.5383	0.6701	6.0489	0.7474	0.1370	0.0792	0.5682	0.0134	0.0053	0.0029	0.0054	99.9999	1185	459	和田峠系-2	弱比熱		1090	石鐘	
N-150	3.6757	0.0000	13.4987	74.5170	0.6266	6.1336	6.7996	0.1362	0.0876	0.5950	0.0158	0.0053	0.0037	0.0150	100.0002	1502	495	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-151	3.6085	0.0000	14.3559	73.5505	0.6996	5.9226	6.8130	0.1702	0.0916	0.7402	0.0207	0.0099	0.0053	0.0117	99.9997	1634	769	和田峠系-2	弱比熱			二次加工のある切片	
N-152	3.3983	0.0000	13.162	75.2970	0.6416	5.8129	6.8008	0.1217	0.0895	0.6023	0.0150	0.0049	0.0041	0.0157	100.0000	1307	413	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-153	3.6524	0.0000	14.6377	73.4715	0.7032	5.6647	6.7369	0.1555	0.0951	0.8417	0.0169	0.0066	0.0037	0.0142	100.0001	1375	531	和田峠系-2	弱比熱			石鐘	
N-154	3.2469	0.0000	13.4335	75.9690	0.6983	5.3643	5.404</																

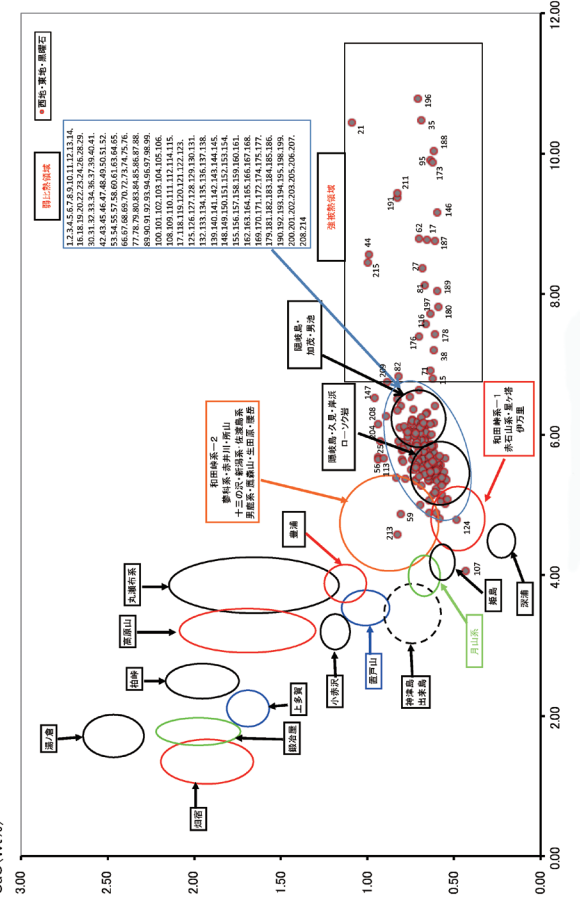
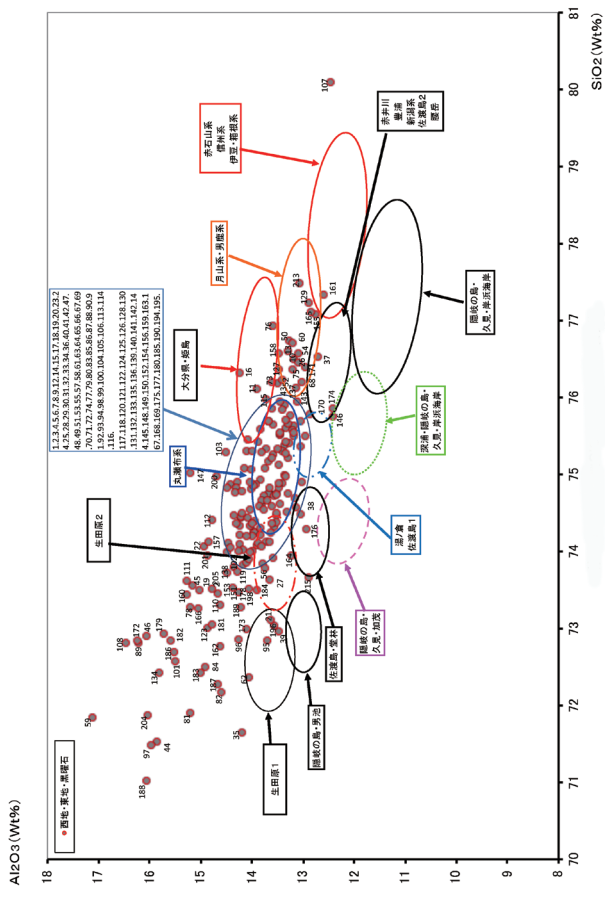
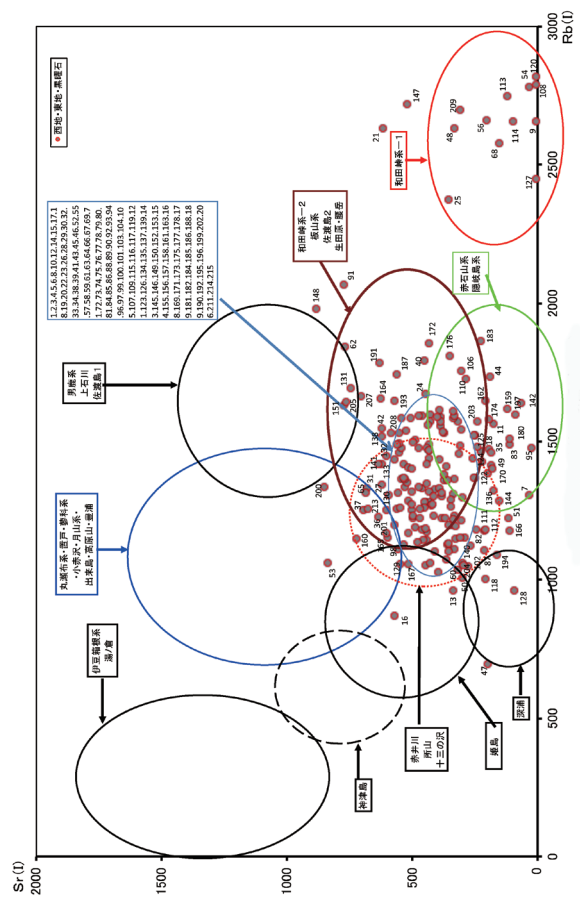
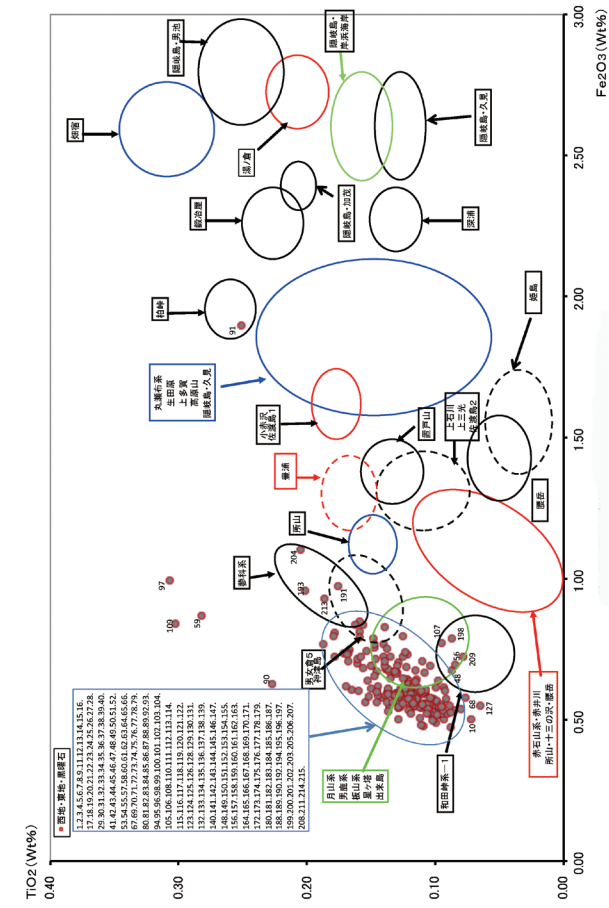


図 155 各元素標準図と西地・東地遺跡分析試料の範囲 (左上:  $SiO_2-Al_2O_3$  図, 右上:  $Fe_2O_3-TiO_2$  図, 左下:  $K_2O-CaO$  図, 右下:  $Rb-Sr$  図)

### 1. はじめに

遺跡から出土する石器および石材について、肉眼観察による岩石名の決定をおこなった。元より地質学における岩石名は、地質構造とともに考慮されるものであるため、地質構造から切り離された岩石については、正確さを欠く場合がある。また考古遺物に関しては、非破壊でかつ、風化面の観察が多いため、より正確さを欠くことになる。今回は、風化面の観察で得られる情報に基づいて岩石名を決定した。

### 2. 主な岩石分類

#### a. 等粒状の組織を持つもの

**花崗岩**：等粒状組織をもつ。主要造岩鉱物は、石英、長石、黒雲母。細粒のものには白雲母が含まれることがある。なお、ペグマタイト、黒雲母岩（花崗岩体に含まれる暗色包有物か？）、優白質な細粒花崗岩、細粒な両雲母花崗岩、花崗閃緑岩、中粒の閃緑岩なども「花崗岩（花こう岩）」とした。片状構造が明確なものは片麻岩とした。

**片麻岩**：片状構造がみられる珪質な岩石。ほとんど石英からなる珪質なものや、黒雲母などが多く集積した黒色のものが存在する。いずれも片状構造が認められる。また花崗岩部分と片麻岩部分からなる岩石については、含有量の多いほうの岩石名をつけた。

**アプライト**：等粒状組織を持ち、石英と長石からのみなる岩石。片状構造がみられないこと、大きい長石が含まれることから、片麻岩や花崗岩と区分をしたが、花崗岩の一部であると考え。

#### b. 緻密な組織を持つもの

**メノウ**：石英や長石とは明らかに異なるやや透明感のある乳白色の岩石。オパールかもしれない。白色部分と乳白色部分でしま状をなす部分があり、メノウとした。玉髄とオパール、メノウ、チャートはいずれも酸化ケイ素を主成分とした岩石である。地学事典によれば、玉髄は「石英の微小結晶が網目状に集まり、超顕微鏡的小孔をもつ珪酸の緻密集合体」、オパールは「非晶質またはそれに近い含水珪酸鉱物。硬度6、比重2。」、メノウは「玉髄の一種。色や透明度の異なるバンドを示す玉髄をいう」、チャートは「緻密な潜晶質の岩石で、潜晶質石英と玉髄質石英からなる。」とされる（1996）。つまりオパールであれば、石英の結晶がないということである。

**石英**：不定形な結晶面を持つ半透明から透明な鉱物。

**長石**：劈開面（鏡面のような結晶面）を持つ、半透明な鉱物。

**溶結凝灰岩**：主に白色を呈し、異質岩片や鉱物片を含むことがある。凝灰岩よりもガラス質なものを溶結凝灰岩とした。

**凝灰岩**：灰白色を呈し、異質岩片や鉱物片を含むことがある。溶結凝灰岩とは、全体の固結の状態で区分した。

**黒曜石**：独特の脂肪状光沢を呈するガラス質の岩石。斑晶はない。稀に黒色の煙状のしま模様が確認できるものがある。

**頁岩**：黒色な泥質岩。明確な剥離構造が認められたため、頁岩とした。

**泥岩**：縞状の組織が見られたが、剥離構造をな

さないため、泥岩とした。

### c. 安山岩類について

ルーペを用いた観察において、風化した面においても、破断面においても、結晶もしくは結晶が抜け落ちたと思われる孔が存在する岩石。肉眼観察でも明確な斑状組織を持つものと、そうでないものが存在した。

**安山岩**：肉眼観察において明確な斑状組織を「安山岩」とした。主な斑晶は長石。

### d. 緻密な組織を持つ安山岩類について

ルーペを用いた観察で微斑晶な組織もしくは微晶質な組織を持つものである。風化面の様子等で便宜上7種に分類を行なった。

**安山岩 A**：黄灰色の風化層がかなり厚く形成されている。無斑晶。流理などの方向性は確認できない。破断面は黒。

**安山岩 B**：新鮮面の石基は灰色。層状に赤灰色部分が入る。流理構造がみられる場合がある。まれに長石の斑晶がある。石基の色調が確認できない場合でも、脈状もしくは層状の赤灰色部分が観察できるものを安山岩 B とした。

**安山岩 C**：石基が赤灰色の安山岩。まれに長石の斑晶あり。安山岩 B のような流理構造は見られない。風化層は薄い。安山岩 B の赤灰色部分の可能性はある。

**安山岩 D**：石基が暗灰色の安山岩。微細な等粒状組織をもつ。風化層は白くならず、暗灰色のまま。等粒状組織の鉱物粒がバラバラなる様な風化層。目立つ斑晶はない。

**安山岩 E**：石基が暗灰色の安山岩。稀に長石の斑晶。風化層は滑らかな粉状で青灰色。

**安山岩 F**：石基が暗灰色で安山岩 E よりも緻密

な安山岩。風化層はほとんどない。溶結凝灰岩の可能性はあるが、分類作業中の便宜として安山岩 F とした。

**玄武岩**：無斑晶。暗灰色。風化層はほとんどない。安山岩 F より石基があらう。安山岩 D とは風化層の厚さで区分したが、混同している可能性がある。

## 3. まとめ

今回の西地・東地遺跡は、変成岩と花崗岩の接する地域に立地していることから、遺跡内で確認される大きな岩石については、花崗岩と片麻岩がほとんどであった。また小型の石器に使用されている緻密な組織を持つ岩石類は、設楽町付近に広く分布する「設楽火山岩類」にともなう安山岩～玄武岩質の貫入岩類および玄武岩であると推測される。

今回、小型の遺物については、緻密な組織を持つ安山岩について、その風化面の特徴から7つの種類を設定したが、結果として分類が曖昧になった部分もある。これは、岩石が均一なものでないこと、風化の程度が多様であること、観察できる特徴のポイントが把握しきれていなかったことに起因する。今後は、自然石と判定された風化面を持つ礫から切片を作成し、顕微鏡下での鉱物組織の観察を行い、より正確な岩石名を決定できる様、比較サンプルの増加をはかってゆきたい。

【編集者註】安山岩 A～F については、写真図版 29 を参照のこと。

文献

地学団体研究会編 1996 「新版地学事典」平凡社

## 第6章 総括

以上、西地・東地遺跡における発掘および整理調査を通じて、遺跡の評価および課題について、ごく簡単に言及しておく。

当遺跡は、縄文時代早期前半以降、繰り返しヒトが活動した、安定した集落のあった場所といえる。調査で面的に確認できたのが、縄文時代後期初頭を中心とした時期である。5棟の竪穴建物跡と貯蔵穴などの大型土坑群とのセット関係は、当時の縄文時代景観を語る好資料といえる。見つかった5棟の竪穴建物跡は同時期に形成されたわけではなく、時期差が認められる。一時期の建物の棟数は1・2棟程度と少なかったものと思われる。

これら後期初頭の遺構群は、Ⅲ層上面より上で形成されていた。遺構がどの面から形成されているかの検討をせずに調査を行う場合、この層は、恐らく、単に包含層として掘り下げられてしまうのではないかと思われる。縄文時代研究においては、地山に近いレベルで竪穴建物跡の検出が多い中期に比べて、後期以降になると建物跡の調査事例が少なくなる。このことから、これまで縄文文化の停滞のようなことが言われてきている。報告者は、包含層と言われている層には遺構も包含しているという立場から、調査の際に注意が必要であると述べてきた（川添 2011）。これは縄文時代後期以降の自然環境、あるいは集落におけるヒトの活動様相によって生じる遺跡形成過程に起因するものである。この遺跡形成過程は、発掘調査時に検討することが最も重要ではあるが、遺物から検討する際に有効なものに、遺物出土傾向図がある。図 156・157 に各遺物の種類別に提示しておいた。10m グッドのマス目ごとに、点数（最上段）、総重量（中段 [ ] 内に記載）、総重量 / 点

数値（最下段）を記した。1資料に対して重量が大きいと、埋納など遺物の保存状態は良好であることを示し、逆に1資料に対して重量が小さい場合は、二次的あるいは後世による作用を受けたものと考えられるのである。

特に、今回の調査では以下のことが注目される。

1. 土器・石器石材において当時の特色を表出しながらも、信州地域との関係性が色濃く窺えられるものがあること。縄文土器では下伊那地域との関係で結節縄文のある土器の存在であり、中信との関係では黒曜石の大量流入などが挙げられる。特に、黒曜石石核 1167 は、愛知県下で出土した黒曜石塊の中でも、最大級のものといえる。

2. 石器組成としては、磨石・敲石類、および石皿台石類の点数が卓越して多い反面、石錘類の出土が希少であること。磨石・敲石類・石皿台石類は硬果類など植物質食糧の加工に傾斜した作業が想定される。縄文時代後期初頭に当地で行われた生業活動を考える上で、重要な視点となる。

3. 貯蔵穴の中から多量の土器・石器が出土すること。貯蔵穴は硬果類など植物質食糧の保存を目的として形成される遺構である。その中に多量の遺物が存在するのは、当時の何かのイベント（あるいはサイクル）で、行われた意図的な行為であった可能性が考えられる。この現象の社会的意味については、今後の課題である。

4. そもそも後期初頭を中心とする集落跡が見つかること自体、少なく貴重であること。今回の設楽地域での調査によって、これまで空白地域であった考古学的情報が、一気に充実するようになることが見込まれる。今後も、活用を根拠とした調査成果の整理・公開が行われることになろう。

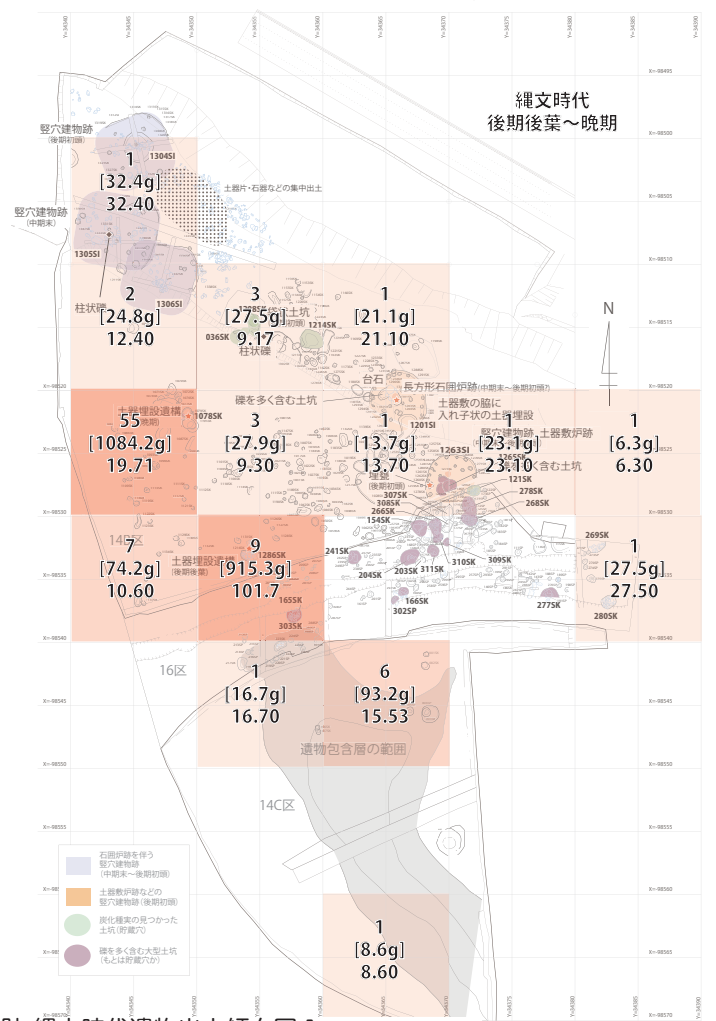
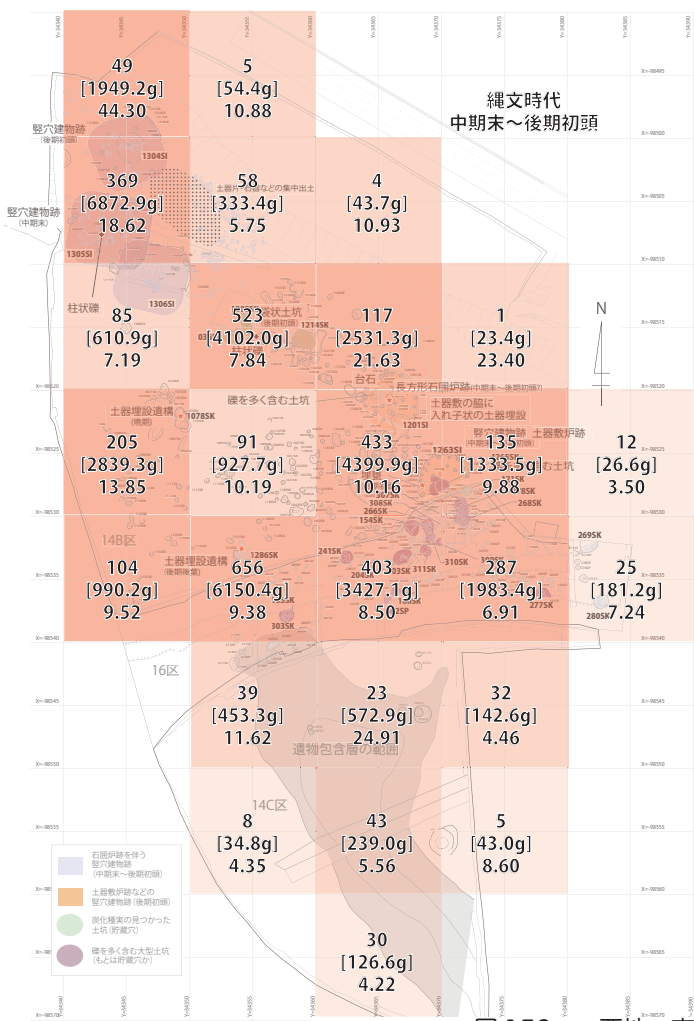
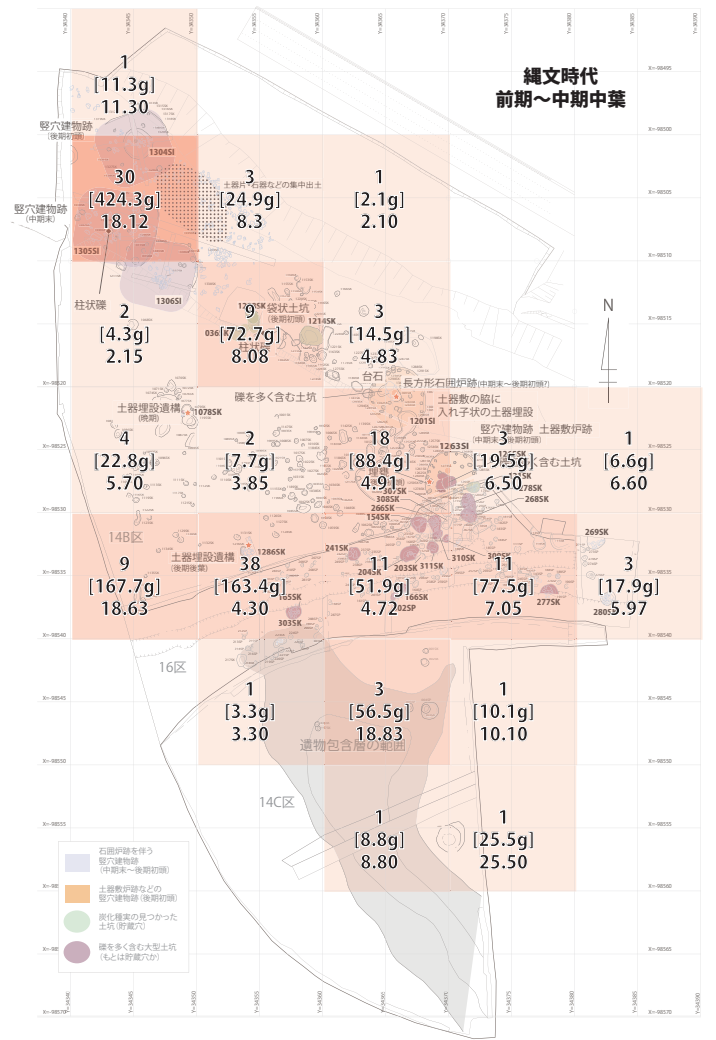
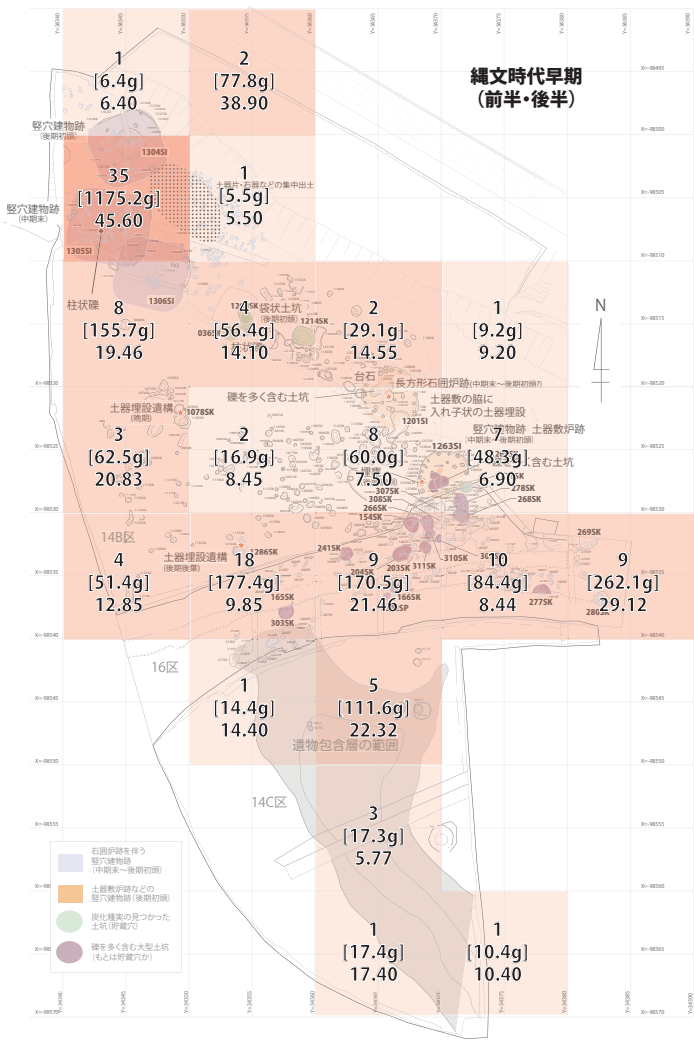


図 156 西地・東地遺跡 縄文時代遺物出土傾向図 1

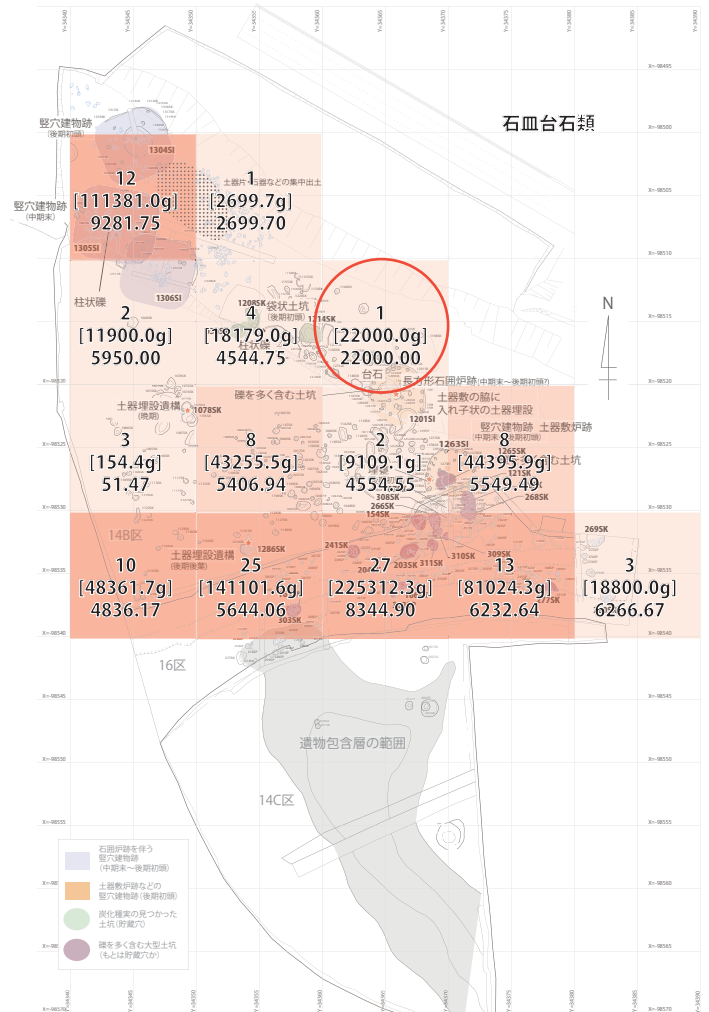
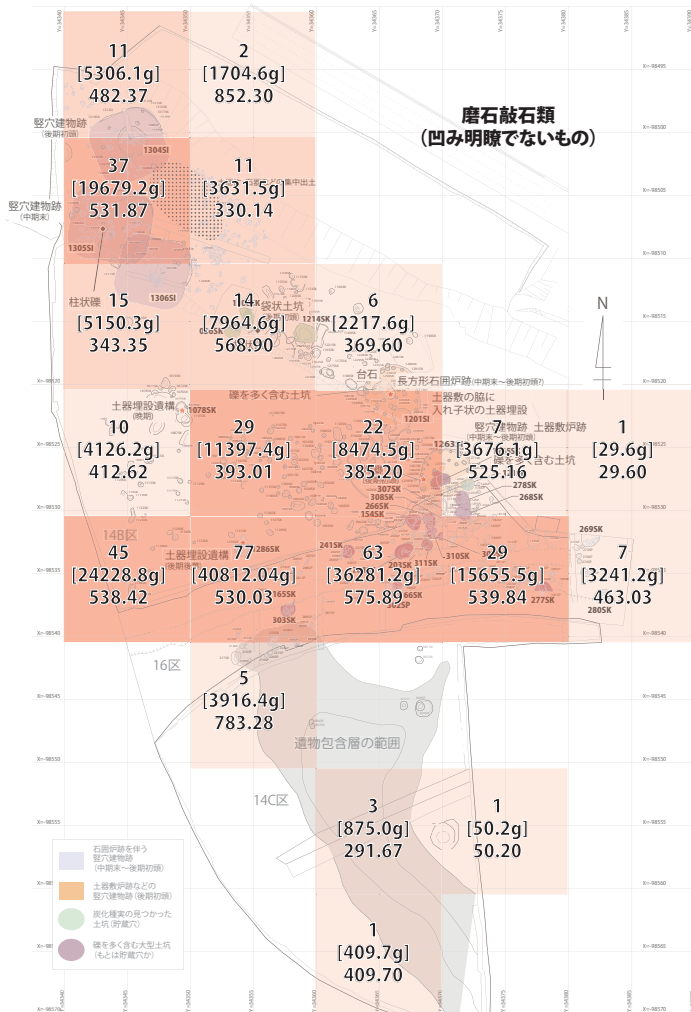
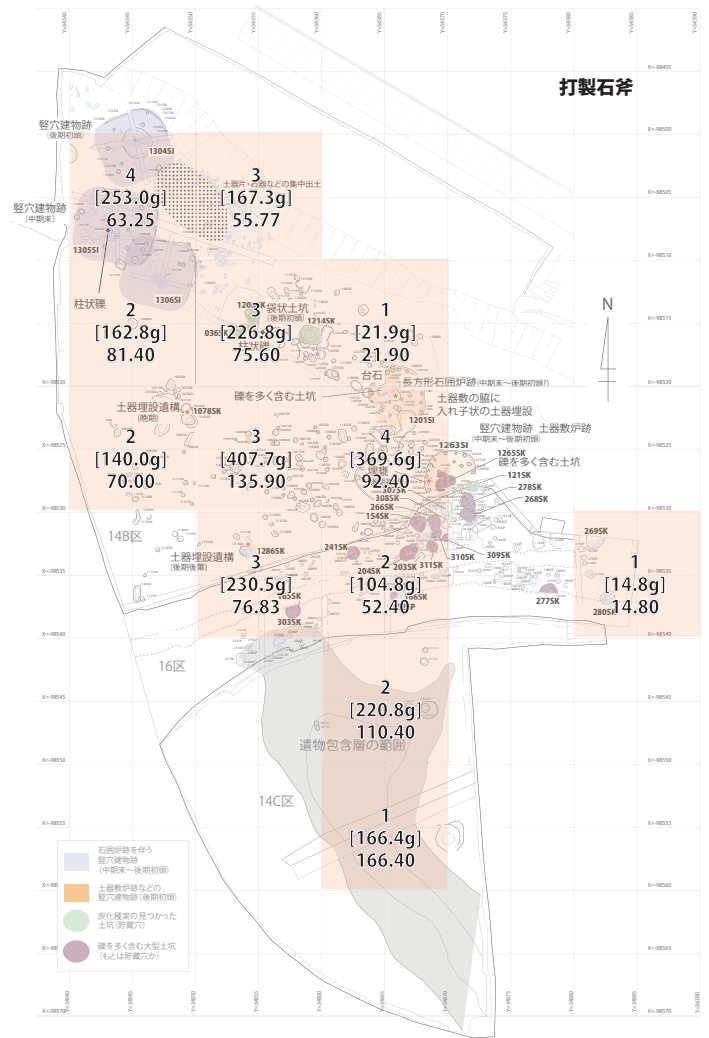
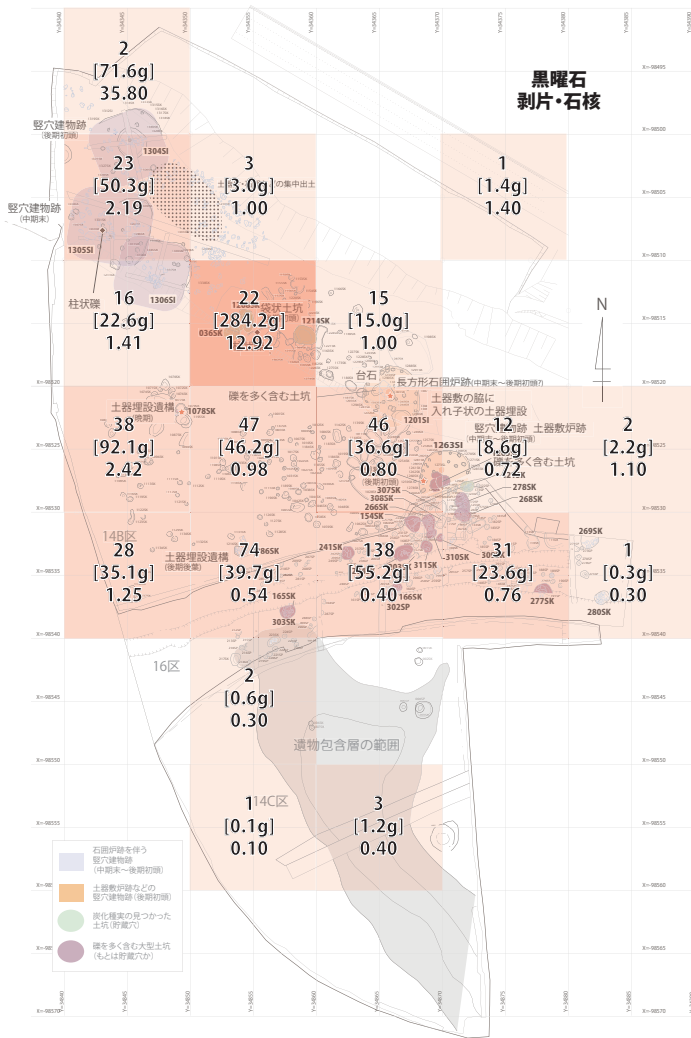


図 157 西地・東地遺跡 縄文時代遺物出土傾向図 2

## 参考文献

- 石田由紀子 2008「中津式・福田KⅡ式土器」『総覧 縄文土器』634～641頁 株式会社 アム・プロモーション
- 石井 寛 1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』9. 横浜市ふるとさと歴史財団
- 石井 寛 2015「稲ヶ原遺跡出土土器が提議する諸問題」『横浜市歴史博物館紀要』19 1～36頁  
横浜市歴史博物館
- 小栗鉄次郎 1932『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告10』愛知県
- 長田友也 2011『水汲遺跡 第2・3・5・6次調査』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第49集
- 川添和暁 2011『先史社会考古学—骨角器・石器と遺跡形成からみた縄文時代晩期—』六一書房
- 川添和暁 2016「縄文時代後晩期における剥片石器石材について—尾張・三河地域の剥片・石核類から—」『研究紀要』17. 11～30頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 北村和宏・木川正夫 2007『設楽ダム関連遺跡総合事前調査 詳細遺跡分布調査報告書』愛知県教育委員会
- 紅村 弘・増子康眞・山口 克・和田英雄 1979『東海先史文化の初段階（資料編Ⅱ）』名古屋
- 紅村 弘・増子康眞・山口 克 1981『東海先史文化の初段階（本文編）補足改訂版』名古屋
- 小濱 学編 1997『新徳寺遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告123-3 三重県埋蔵文化財センター
- 佐藤寛介 2004「倉敷市中津貝塚出土の縄文土器」『研究紀要』23・24 1～30頁 岡山県立博物館
- 鈴木富美夫・岡田松三郎ほか 1968『北設楽郡史 原始—中世』北設楽郡史編集委員会
- 田嶋正憲 2010「岡山県における戦前戦後標識遺跡採集縄文土器の研究（1）—中津貝塚出土の中津式土器—」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』2. 1～18頁
- 千葉 豊編 2010『西日本の縄文土器 後期』真陽社
- 永井邦仁・川添和暁 2018「大名倉遺跡の研究」『研究紀要』19. 9～30頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 早野浩二編 2003『権現山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書110
- 堀木真美子 2016「設楽地域の石材（1）」『新設楽発見伝』2 15頁 平成27年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会配布資料 愛知県埋蔵文化調査センター
- 横浜市歴史博物館 2016『称名寺貝塚と称名寺式土器』企画展「称名寺貝塚」関連シンポジウム
- 増子康眞 2018「東海西部縄文中期末土器型式」『縄文時代』29 111～131頁 縄文時代文化研究会
- 山下勝年編 1983『林ノ峰貝塚Ⅰ』南知多町文化財調査報告書5 南知多町教育委員会



遺跡遠景 (南より)



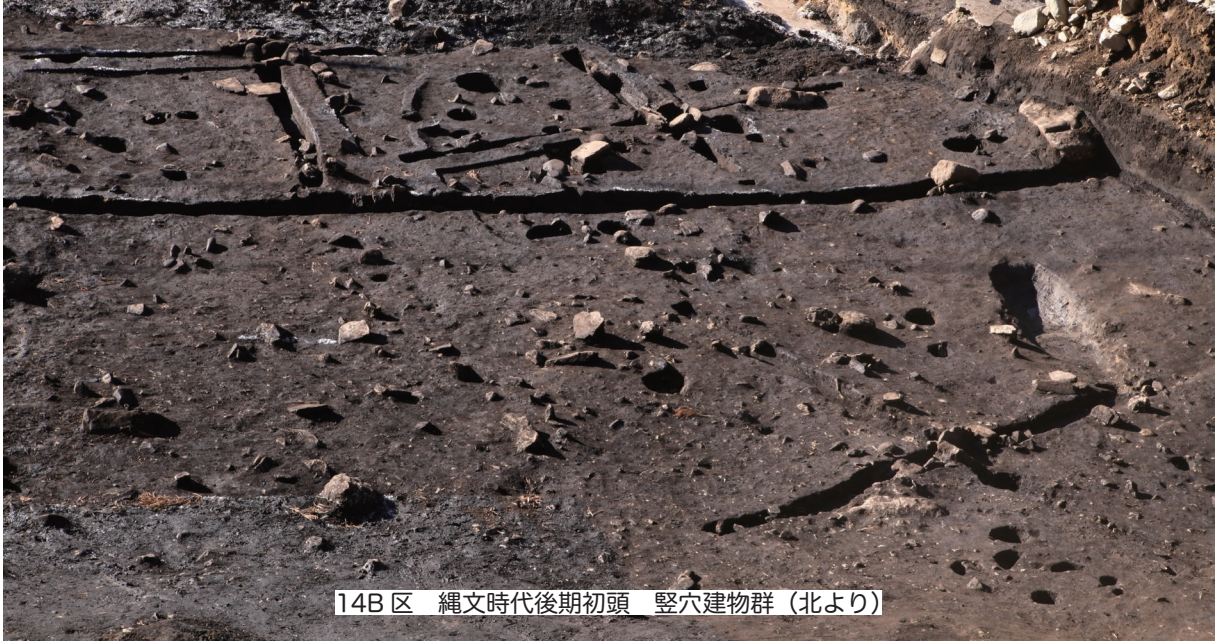
調査前状況 (南より)



調査区全景 (西より)



14B区 上段 調査区西壁 土層断面



左：14B区 1304SI (西より)  
右：同石囲炉跡 (南より)



左：14B区 1305SI (東より)  
右：同石囲炉跡 (南より)



左：14B区 1306SI (東より)  
右：同石囲炉跡 (東より)



左：14B区 1201SI (西より)  
右：同炉内埋納土器 (東より)



左：14B区 1263SI (南より)  
右上：同炉跡 1273SL 検出状況 (北より)  
右下：1273SL 土層断面 (南より)



14B区 1254SK・1265SK 礫検出 (南より)



14B区 1223SK 遺物出土状況 (北より)



14B区 1209SX 完掘 (西より)



16区 277SK 遺物出土状況 2 (南より)



16区 165SK 完掘および 303SK 検出 (南東より)



16区 303SK 土層断面 (北東より)



16区 303SK 底面遺物出土状況 (北東より)



16区 303SK 完掘 (北東より)



16区 121SK内 土器出土状況



16区 121SK内 炭化種実出土状況



16区 154SK 遺物出土状況 1



16区 266SK 遺物出土状況





16区 266SK 遺物出土状況 (西より)



16区 310SK 検出状況 (南西より)



16区 縄文時代後期土坑群完掘状況(北より)



16区 縄文時代遺構全景 (東より)



16区 T3 西壁土層断面 (東より)



14C区 全景 (上が北)



14B区 古代以降 調査区全体（上が北）



14B区 古代以降 調査区全体（北東より）



14B区 0115SL 検出状況 (南西より)



14B区 0337SK  
出土遺物 (2025)



14B区 0141SK  
出土遺物 (2012)



14B区 0196SK (東より)



14B区 0339SK (南東より)



14B区 0184SK (南より)



14B区 0109SK (東より)



14B区 0117SK (南より)



16区 103SK 検出状況 (北西より)



16区 166SK 遺物出土状況 (南東より)



14B区 0341SZ (東より)



14B区 0343SZ (南より)



14B区 0342SZ (東より)



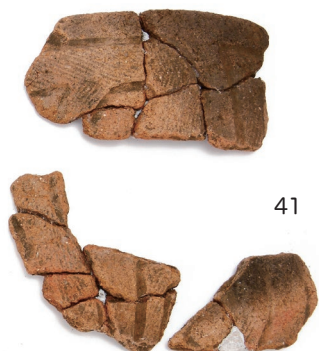
14B区 0341SZ・0342SZ・0343SZ・0344SK (東より)



14A区 0001SZ・0002SZ (南より)



14A区 西側全景 (東より)



41



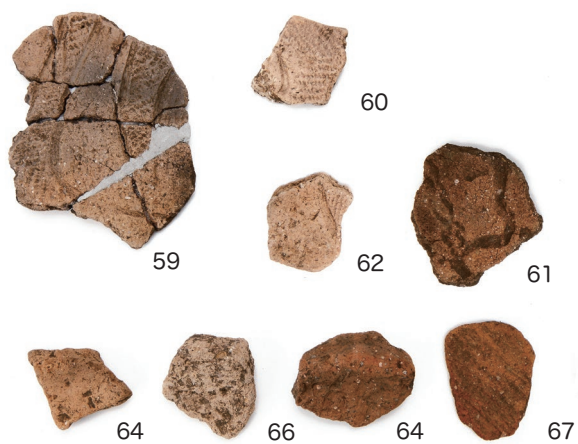
43



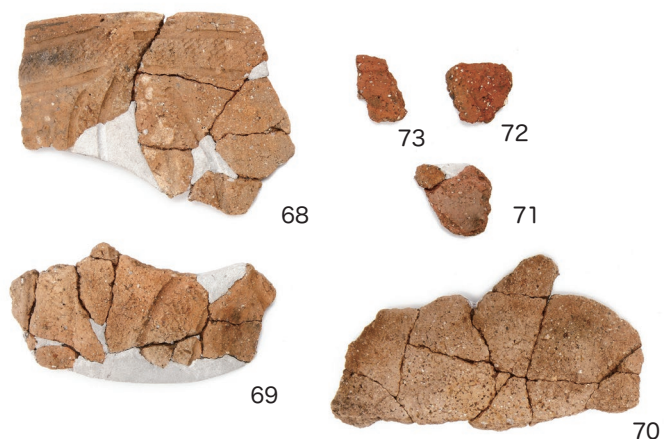
45

14B区 1201SI





14B 区 1246SK



14B 区 1273SL



14B 区 1261SK



14B 区 0036SK



14B 区 1011SK



14B 区 1195SK



234



14B 区 1224SK



14B 区 0032SK



14B 区 0032SK



321



325



324



323



322



326

14B 区 0032SK



348



347

16 区 303SK



343  
胸部



343  
底部



346



345

16 区 165SK



351



352



359



353



362



360



357



355



354



365



358



361



356



366



364

16 区 121SK



367



370



372



374



371



369



368



376



379



375

16区 154SK



404



405



411



408



409



410



406



407

16区 267SK



380



373



378



381



377

16区 204SK



382



384



383



386



388



398



399



400



401

16区 266SK

16区 217K



437



436



433



432



435



434

16区 029SX



14B区 0111SX(北より)



258



269



271

14B区 0111SX



342



341



14B区 1078SK (西より)



456



17



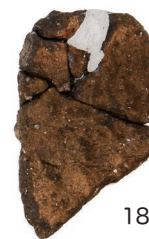
21



19



20



18



22



23

14B区 1305SI 断ち割りなど



892



425



590



454



455



452



453



458



459



457



797



798



799



803



804



462



880



595



596



142



814



897



898



597



598



599



600



486



478



485



491



483



480



482



477



479



484



490



481



487



495



492



493



489



569



561



566



567



512



558



496



556



568



570



559



507



507裏



565



615



763



724



745



746



930



931



165



582



583



585



943



944



945



940



941



1005



1007



1015



1016



1014



1013



1036



1042



1009



1008



1028



1030



1041



1040



1044



1047



1066



1069



1068



1067



1027



1024



1029



1045



1046



1048



1021



1022



1037



1051



1026



1311



1032



1033



1001



1002



1003



1018



1019



1020



1017



1196



1023



1010



1050



1053



1061



1079



1006



1038



1039



1025



1011



1058



1056



1057



1054



1059



1034



1055



1004



1049



1035



1012











安山岩 A (1206)



安山岩 B (1213)



安山岩 C (1263)



安山岩 D (1241)



安山岩 E (1217)



安山岩 F (1197)

安山岩各種







2019



2022



2023



2024



2026



2027



2028



2029



2030



2031



2032



2033



2025



2035



2036



2037



2038



2039



2040

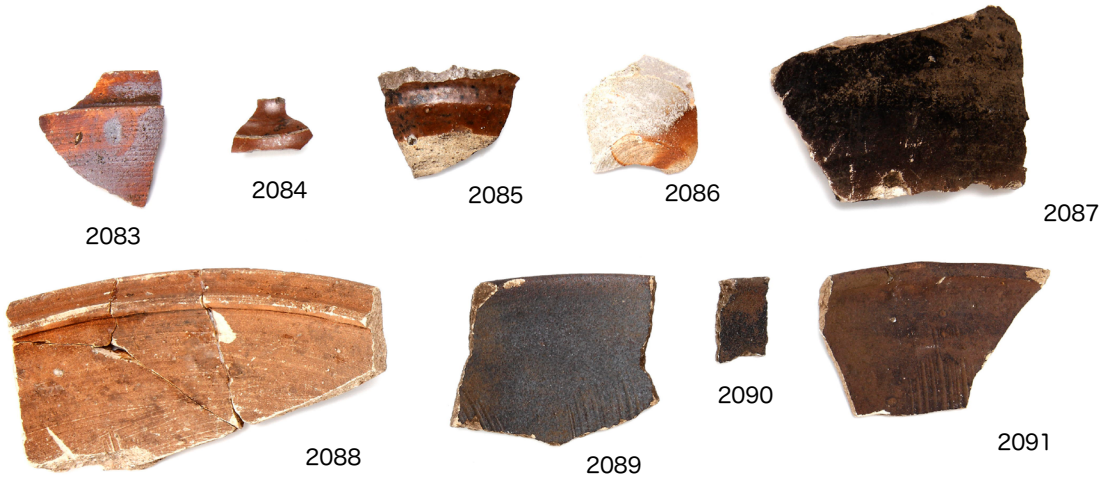


2041



2057







2101



2140



2103



2105



2107



2108



2109



2110



2111



2112



2113



2114



2104



2106



2050



2121



2042



2043



2044



2045



2046



2047



2048



2049



2051



2052



2055



2053



2054



2122



2123



2124



2125



2126



2127



2130



2135



2131



1298



1299



1296



1297



1309



1310



1306



1300



1307



1307



1302



1301



1305



1301



1304

報告書抄録

ふりがな	にしじ・ひがしじ							
書名	西地・東地遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第211集							
編著者名	川添和暁、鈴木正貴、堀木真美子、森 将志、小林克也、バンダリ スタルシャン、佐々木由香、山形秀樹、中村賢太郎、伊藤 茂、安昭炫、佐藤正教、廣田正史、小林紘一、Zaur Lomtadze、Ineza Jorjoliani (株式会社 パレオ・ラボ)、井上 巖 (株式会社 第四紀地質研究所)							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2019年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
にしじ・ひがしじいせき 西地・東地遺跡	あいちけんきたしたらぎくん 愛知県北設楽郡 したらちょうおおなぐら 設楽町大名倉	23561	700152	35度 11分 14秒	137度 54分 36秒	2014.05.19~ 2016.12.8	4,560	設楽ダム 工事関連 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西地・東地遺跡	集落	縄文時代	竪穴建物跡、炉跡、埋甕、貯蔵穴など土坑、土器埋設遺構	縄文土器、土製品 石器、石製品		後期初頭を主体とする集落跡		
		古代		須恵器・灰釉陶器				
		中世・戦国期 ～近世	竪穴状遺構、炉跡、土坑、埋葬遺構	瀬戸・美濃産陶器、石器、鉄滓、人骨、キセル、銅銭		野鍛冶関連遺構		
文書番号	発掘届出(26埋セ第5号 2014.4.8、 28埋セ第35-1号・第35-2号 2016.7.1) 通知(26教生第237号 2014.4.8、 28教生第1161号 2016.7.14) 終了届・保管証・発見届(26埋セ第108号 2015.1.23、 28埋セ第78号 2016.12.14) 鑑定結果通知(26教生第3226号 2015.3.31、 28教生第2906号 2016.12.22)							
要約	寒狭川東岸の緩斜面上に立地している本遺跡では、縄文時代、古代、そして中世・戦国期から近世にかけての遺構・遺物が調査された。そのなかでも、竪穴建物跡と土坑群で構成される、縄文時代後期初頭主体の集落跡が全面調査されたことは、特に注目される。一括廃棄された遺物群の存在もさることながら、出土土器の遺構・包含層の形成状況と出土遺物との対比を行えたことは、今後の縄文時代集落研究に寄与するデータとなろう。中世・戦国期から近世にかけては、野鍛冶関連の遺構群が見つかっており、山間部での活動の様子が窺えられる好資料となった。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第211集

## 西地・東地遺跡

2019年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社